大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発　掘　調　査　報　告　書

（2017）

第2分冊

2019.3

大　阪　市　教　育　委　員　会

(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

例言

1．本報告書は平成 29 年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2．第１部の調査は大阪市教育委員会の指導のもと（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所が各原因者より委託をうけて実施したものである。上記のうち、天王寺区、浪速区、西淀川区、淀川区、東淀川区、東成区、旭区、城東区、阿倍野区、住吉区、平野区を収録する。
　第２部の調査は大阪市教育委員会が実施したものである。
3．第１部の執筆は（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所所長　南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
　第２部の執筆は大阪市教育委員会文化財保護課長　植木久の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4．本報告書の編集は大阪市教育委員会事務局文化財保護課において行った。

目　　次

第１部

天王寺区
堂ヶ芝廃寺発掘調査（DS17-1）報告書……1
難波京朱雀大路跡発掘調査（NS17-1）報告書……9
難波京朱雀大路跡発掘調査（NS17-2）報告書……15
大坂城跡発掘調査（OS17-4）報告書……23
大坂城跡発掘調査（OS17-5）報告書……31
細工谷遺跡発掘調査（SD17-1）報告書……37
摂津国分寺跡発掘調査（SK17-1）報告書……43
宰相山遺跡発掘調査（SS17-1）報告書……51
四天王寺旧境内遺跡発掘調査（ST17-1）報告書……61
上本町遺跡発掘調査（UH17-1）報告書……69
上本町遺跡発掘調査（UH17-2）報告書……77
上本町遺跡発掘調査（UH17-4）報告書……85
上本町遺跡発掘調査（UH17-5）報告書……91
上本町遺跡発掘調査（UH17-7）報告書……99

浪 速 区
難波貝層遺跡発掘調査(NB17-1)報告書……107
浪速元町遺跡発掘調査(NB17-2)報告書……115
敷津遺跡発掘調査(SX17-1)報告書……125

西淀川区
竹島遺跡発掘調査(TK17-1)報告書……133

淀 川 区
宮原３丁目所在遺跡発掘調査(MH17-1)報告書……141
西中島７丁目所在遺跡発掘調査(WN17-1)報告書……153

東淀川区
相川遺跡発掘調査(AI16-1)報告書……159
西淡路６丁目所在遺跡発掘調査（WX17-1）報告書……165
崇禅寺遺跡発掘調査(SZ17-1)報告書……171

東 成 区
東中本遺跡発掘調査(CM17-1)報告書……179

旭　　区
森小路遺跡発掘調査(MS17-1)報告書……187

城 東 区
蒲生遺跡Ｂ地点発掘調査（GM16-8）報告書……199
新喜多遺跡発掘調査(SQ17-1)報告書……207

阿倍野区
王子町２丁目所在遺跡発掘調査(OZ17-1)報告書……213
聖天山古墳発掘調査(SY17-1)報告書……223

住 吉 区
苅田４丁目所在発掘調査(KL17-1)報告書……233
南住吉遺跡発掘調査(MN17-1)報告書……239
住吉行宮跡発掘調査(SN17-1)報告書……245

平 野 区
平野野堂遺跡発掘調査(HN16-2)報告書……257
長原遺跡発掘調査(NG17-1)報告書……269
瓜破北遺跡発掘調査 (UR17-1) 報告書……277

第２部
北　　区
本庄東遺跡発掘調査(SHH17-1)報告書……285
天満本願寺跡発掘調査(STN17-1)報告書……287

中 央 区
大坂城跡発掘調査(SOS17-1)報告書……289
大坂城跡発掘調査(SOS17-2)報告書……291
島之内２丁目所在遺跡発掘調査(SSI17-1)報告書……293
上本町遺跡発掘調査(SUH17-2)報告書……295
上本町遺跡発掘調査 (SUH 17-3) 報告書……297

天王寺区
難波京朱雀大路跡発掘調査(SNS17-1)報告書……299
伶人町遺跡発掘調査(SRJ17-1)報告書……301
宰相山遺跡発掘調査(SSS17-2)報告書……303
上本町遺跡発掘調査(SUH17-1)報告書……313
上本町遺跡発掘調査(SUH17-4)報告書……315

東淀川区
柴島城跡伝承地発掘調査(SKJ17-3)報告書……317

旭区
森小路遺跡発掘調査(SMS17-1)報告書……319

阿倍野区
阿倍寺跡・阿倍野筋北遺跡発掘調査 (SAB17-1) 報告書……321
阿倍野筋南遺跡発掘調査(SAS17-1)報告書……323
桃ヶ池遺跡発掘調査(SMG17-1)報告書……325

住之江区
西住之江遺跡Ｂ地点発掘調査(SWE17-1)報告書……327

住吉区
南住吉遺跡発掘調査(SMN17-1)報告書……345
帝塚山古墳群発掘調査(STZ17-1)報告書……347

東住吉区
南田辺遺跡発掘調査(SMQ17-1)報告書……349
南田辺遺跡発掘調査(SMQ17-2)報告書……351
住道寺跡発掘調査(SSJ17-1)報告書……353
北田辺４丁目所在遺跡発掘調査(STQ17-1)報告書……355

平 野 区
平野環濠都市遺跡(SHN17-1)報告書……357
平野環濠都市遺跡(SHN17-2)報告書……359
平野環濠都市遺跡(SHN17-3)報告書……361
鞍作廃寺(SKT17-1)報告書……363
長原遺跡(SNG17-2)報告書……365
瓜破遺跡(SUR17-1)報告書……379
瓜破遺跡(SUR17-2)報告書……389

第 1 部

天王寺区堂ヶ芝二丁目210他における建設工事に伴う
堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区堂ヶ芝２丁目210他
調 査 面 積　　約100㎡
調 査 期 間　　平成29年11月27日～12月６日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、平田洋司

1）調査に至る経緯と経過

古代の寺院である堂ヶ芝廃寺は今回の調査地から北東約200m、玉造筋の東に位置する豊川稲荷・観音寺の付近が寺院の中心部と推測されている。DS87－３[大阪文化財研究所2015]・88－１[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990]・04－１次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]では明確な遺構は確認されていないものの、７世紀後半～８世紀の瓦が多く出土している。また、細工谷遺跡で「百済尼寺」の墨書土器が出土したことから、堂ヶ芝廃寺を細工谷遺跡の百済尼寺と対となる百済寺に比定する説もある。一方、玉造筋より西側では、遺物の出土量が激減する。地形的にも四天王寺東門付近から細工谷交差点方向へと北東方向に流下する真法院谷への急激な傾斜地となっており、寺院に係わる施設を想定することは困難である。また、古代の幹線道路と想定されている難波京朱雀大路跡は調査地の約170m西に位置している。

今回の調査地は大阪市教育委員会による試掘調査の結果、近世以前の遺物・遺構面が確認されたため、調査を実施することとなった。なお、試掘調査では地表下2.0mでも地山層が確認できなかったことから、今回の調査地が真法院谷内もしくは谷の斜面に位置していることが推定された。平成29年11月27日より調査を開始し、大阪市教育委員会の指示により敷地中央に10m四方の調査区を設定した。調査区の北西ラインは調査地北西を通る道路とほぼ平行となっている。重機による掘削は、後述の第２層上面までとし、以下は人力により掘削を行った。重機掘削を開始するとすぐに旧建物の基礎が調査区の中央付近から見つかった。撤去不能であったため、残したまま調査を行うこととした。また、基礎より北西に当る個所では深くまで近代以降の攪乱であることが判明したため、地表下1.0m以上の掘削は行わなかった。このため、調査を行えたのは基礎を避けた調査区北東部と南東部となっている。

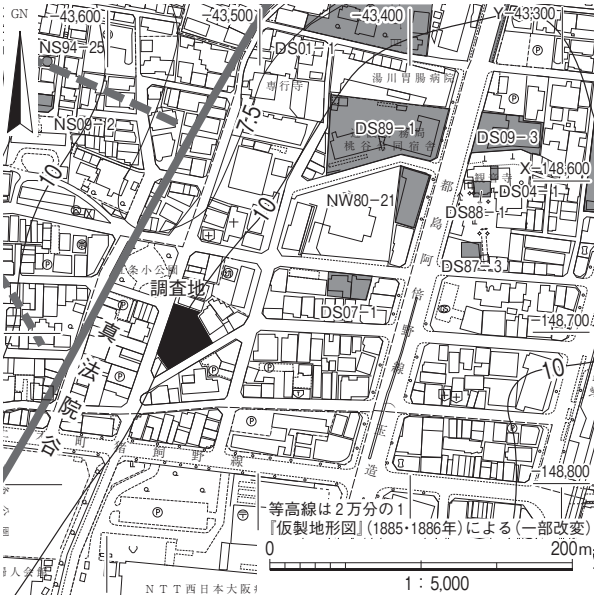


図１　調査地位置図

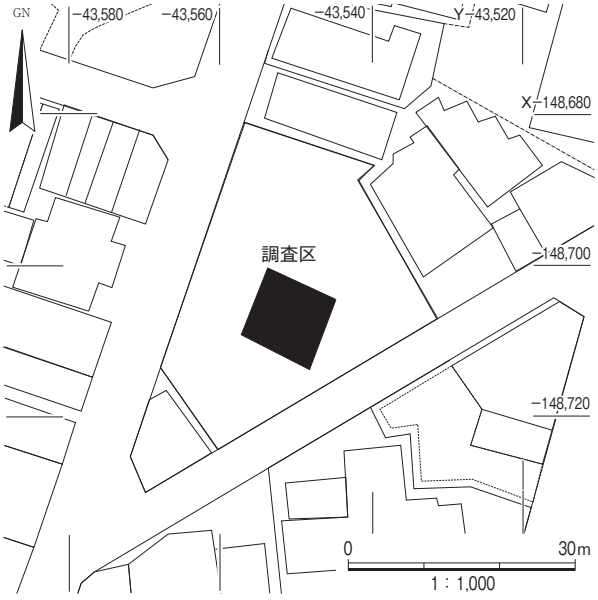


図２　調査区位置図

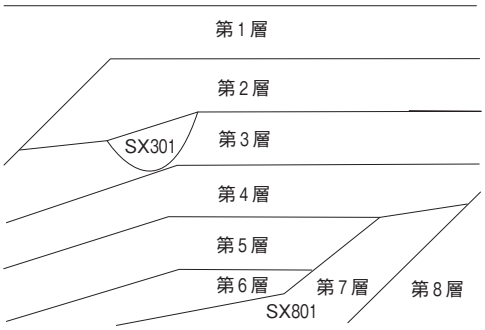


図3　地層と遺構の関係図

途中適宜に遺構検出・掘削作業、図面作成・写真撮影などの記録作業を行いながら調査を進めた。掘削を進めたところ当初の予測通り、北西に低くなる傾斜が確認できた。掘削深度が深くなり、危険であることから、後述の第5層上面まで調査を行ったのちは、下位層が比較的高く検出されるであろう調査区東南部のみを対象にし、調査を行った。平成29年12月6日、現地における作業を終了した。

なお、本文で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4、図版1)

調査地の位置する敷地は概ね南東から北西へと急激に下がっており、もっとも高い部分で調査地東端のTP+8.1m、もっとも低い部分で調査地北西端のTP+6.7mと1.4mもの差がある。調査地の南東に位置する道路が北東に向かうほど標高が増すのに対して、北西に位置する道路は北東に向かうほど標高を減じており、北東に向かうほど標高差が大きくなっている。今回の調査地では、調査区南東壁

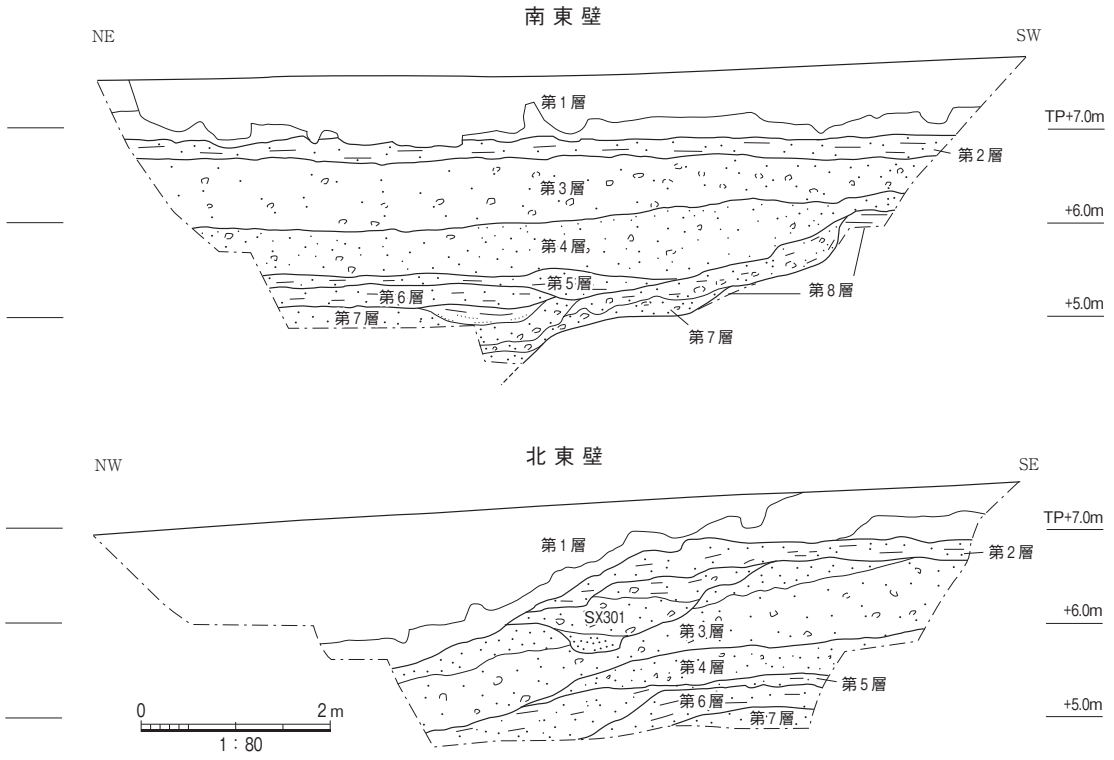


図4　地層断面図

を基準とすると、現地表下3.3mまでの地層を８層に区分した。各層とも基本的に南東部が高く北西に低くなる谷の斜面に堆積した状況を観察することができた。

第１層：現代の整地層および攪乱で、層厚は東南部で60～80㎝、西北部で160㎝以上である。調査地西北部では、基礎地業によりさらに深くまで達する。

第２層：灰色(5Y4/1)シルト質粗粒砂からなる近代～現代の作土層である。層厚は20㎝である。遺物は出土しなかった。

第３層：上部が灰色(10Y5/1)粗粒砂、下部がシルト偽礫を含む灰色(10Y5/1)中粒～粗粒砂からなる整地層で層厚は40～100㎝である。西北部で厚く堆積する。少量の土師器片が出土した。近世の整地層である。上面で北西に一段低くなる落込みSX301を検出した。

第４層：シルト偽礫を含むオリーブ灰色(2.5GY5/1)中粒～粗粒砂からなる整地層である。層厚は40～80㎝で、上面はやや固く締まる。出土遺物は少量で土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・瓦片など中世の遺物が主体であるが、上下層の年代観から近世の整地層である。

第５層:灰色(10Y5/1)シルト質中粒～粗粒砂からなる。本来は整地層であるが、作土化されている。層厚は10～40㎝である。土師器・須恵器・瓦器・瓦片などが出土し、近世に位置づけられる。

第６層：灰色(10Y4.5/1)シルト質粗粒砂～粗粒砂からなる。斜面の堆積層である第７層が作土化されたものである。層厚は20～30㎝である。遺物は出土しなかったが中世と推定される。

第７層：シルト偽礫を含むオリーブ灰色(10Y4.5/2)粗粒砂質シルト～粗粒砂などからなる。第８層の斜面に沿って堆積し、南東の高所から崩落した自然の堆積層と考えられる。谷SX801の埋土最下部となる。層厚は厚い部分で60㎝以上である。土師器・須恵器・瓦片が少量出土した。中世と推定される。

第８層：オリーブ灰色(10Y6/2)粘土からなる地山層である。層厚は170㎝までを確認した。

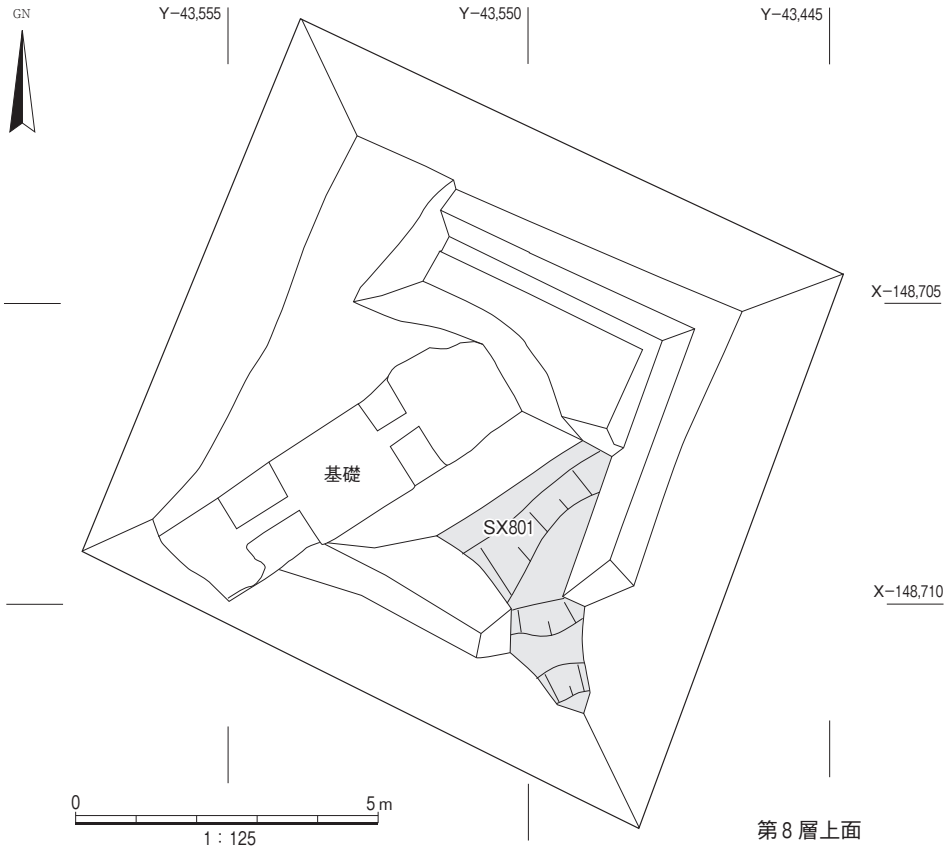
ⅱ)遺構と遺物(図５～７、図版１・２)

遺構検出は第３層上面以下、各層ごとに行った。調査地は南東で高く、北西に低くなる谷の斜面に位置しており、傾斜が次第に埋没していく過程を確認することができた。以下、その概要を記す。

第８層上面では谷としてSX801を検出した。東南部の一部で調査できた(図５上トーン部分)のみであるが、調査区東南隅がもっとも高く、TP+6.2m、西北隅がもっとも低く、TP+4.4mであった。4.0mの間で1.8mの標高差がある。位置的に北東方向へ流下する真法院谷の南東岸から谷深部への斜面に当ると考えられる。また、谷の方向は調査地南東にある道路の方向とほぼ平行する。

この谷は第７層によって徐々に埋没する。第６層の段階には作土層が確認できたことから、斜面に平坦面を造成し、耕作地として利用したと考えられる。第６・７層からの出土遺物はごく少量であるが、岩相からは中世に遡る可能性が高い。

第５層の段階も同様に耕作地として利用されるが、前段階よりさらに平坦地が広くなっている。第５層からは土師器皿１が出土した。細片ではあるが14世紀頃のものであろう。ただし、他の出土遺物からは本層は近世に位置づけられる。続いて第４層・第３層の厚い整地が施され、谷の斜面が埋め立てられていく。第４層上面がいくぶん固く締まること、酸化していることから、第３層との間には少


GN
Y−43,555
Y−43,550
Y−43,445
X−148,705
X−148,710
基礎
SX801
0
5m
1：125
第8層上面

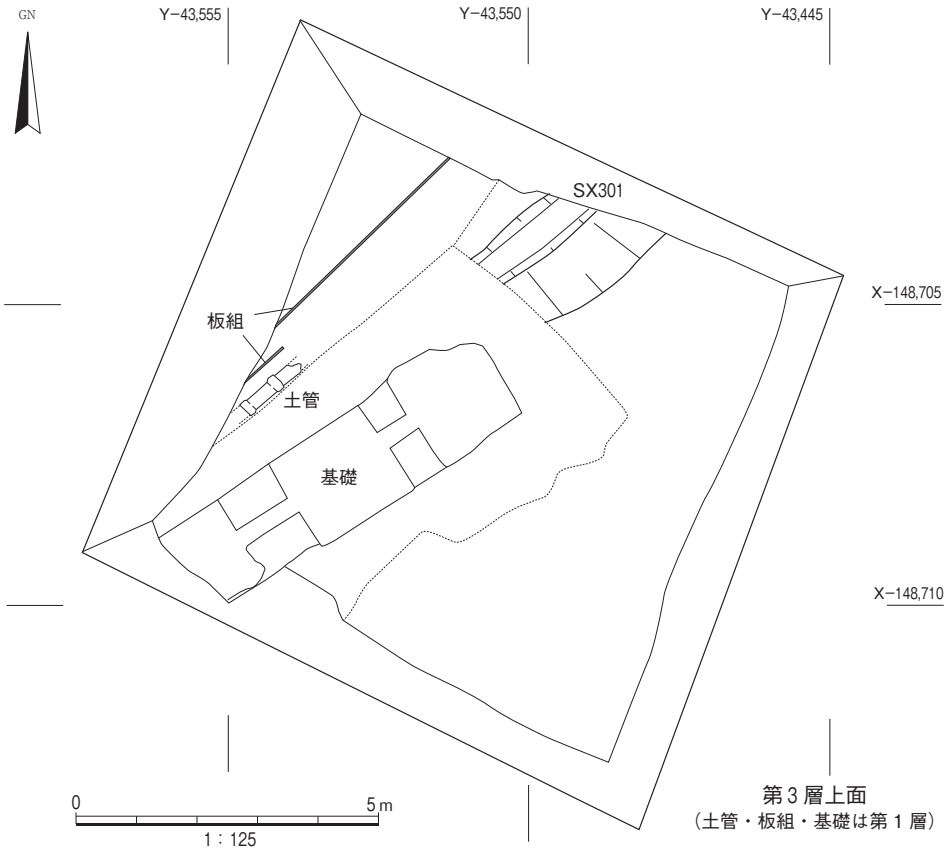

GN
Y−43,555
Y−43,550
Y−43,445
X−148,705
X−148,710
SX301
板組
土管
基礎
0
5m
1：125
第3層上面
（土管・板組・基礎は第1層）

図5　遺構平面図

し休止があったことが推測される。第４層からは瓦器椀底部細片２、須恵器東播系鉢３が出土した。これらは13世紀代、中世に遡る資料であるが地層の年代は近世と考えられる。

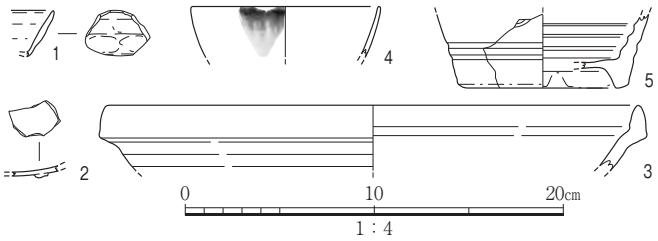


図６　出土遺物実測図
第５層（１）、第４層（２・３）、SX301（４・５）

第３層上面では、北西への落込みSX301を検出した。前段階から続く北西への斜面を加工したもので、深さは0.6mある。低い部分の肩付近には幅0.5m、深さ0.2mの溝が掘られている。溝内の埋土は自然堆積の中粒～粗粒砂層で、それより上位は埋戻し土である。相当する作土層は第２層によって失われているが、第３層上面の耕作に伴うものであろう。SX301からは備前焼・肥前磁器・中国産青白磁・桟瓦などが出土し、18世紀後半以降に位置づけらる。４は肥前磁器染付碗である。５は中国産青白磁梅瓶底部で、体部外面には陰刻を有する。底部外面は露胎である。５は14世紀頃のものであろう。

続く第２層段階にも耕作地として利用されている。第１層は調査対象としていないが、西北部で基礎地業に係わると推定できる板組、土管、建物基礎などを確認した。注目されるのはこれらの方位であり、北西に位置する道路ではなく、南東に位置する道路と似た方位を取ることである。周辺の街区と同じ北西側の道路は新しく設けられたものであり、それ以前は、谷の傾斜に沿った地割りが長期間続いていたことを示す。

３）まとめ

今回の調査地では北東に流下する真法院谷の岸に近い南東側斜面を検出することができた。また、この斜面が次第に埋没していく過程を示すことができた。近世以降、厚い整地が施されるが、傾斜は強く、近年まで地割りは地形の制約を受けていたようである。ごく限られた範囲の調査となったため、各地層の性格や年代観は推測の部分も多いが、今後の周辺の調査に期待したい。

また、遺物は総じて少なかった。従来の想定通り、堂ヶ芝廃寺の中心はより北東方向にあり、谷に近い調査地周辺に寺院に係わる施設を想定することは難しいと考えられよう。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990、「観音寺本堂の建て替えに伴う堂ヶ芝廃寺発掘調査（DS88－１）略報」：『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.117－126

2005、「堂ヶ芝廃寺遺跡発掘調査（DS04－１）報告書」：『平成16年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.29－35

大阪文化財研究所2015、「DS87－３次調査」：『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』、pp.43－46

天王寺区味原本町14－５における建設工事に伴う

難波京朱雀大路跡発掘調査(NS17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区味原本町14－５
調 査 面 積　　約40㎡
調 査 期 間　　平成29年７月19日～平成29年７月21日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、平田洋司

1）調査に至る経緯と経過

調査地は難波京朱雀大路跡に位置し、前期難波宮朱雀門からは約１㎞南方に当る。朱雀大路の存在を示す遺構としては、朱雀門から南方140mの地点で行われたNW14－３次調査で検出された、前期難波宮の時期の道路側溝と考えられる溝が現在のところ唯一の事例である[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016]。想定される範囲内に上町台地を削り込む大小さまざまな谷があることから、こうした地形を克服して直線的な道路を敷設することが可能であったかどうかが、朱雀大路の存否を考えるうえで重要な要素となっている。今回調査地にも「味原谷」と呼称する谷が推定されており、谷の名残として、東方には大正７(1918)年に埋め立てられるまで「味原池」があったほか、谷の痕跡は調査地周辺の地割の乱れにも如実に示されている。

今回の調査地では大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下1.8m以下の深さで近世以前の遺構面・遺物包含層が検出されたことから、調査を実施することとなった。敷地東部の東西８m、南北５m、40㎡を調査対象とし、事前に事業者側でアスファルトの撤去作業を行ったのち平成29年７月19日より調査を開始した。重機による掘削は後述の第2d層上面付近までとし、以下は人力による掘削とした。また、掘削深度が深くなることから、現地表面下2.0mより下位については安全のため、四周に犬走りを設けてその内部で掘削を行った。途中、適宜に遺構検出・掘削、図面作成、写真撮影を行い調査を進め、平成29年７月21日、機材類の撤収を含む現地における調査を完了した。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP＋○mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。

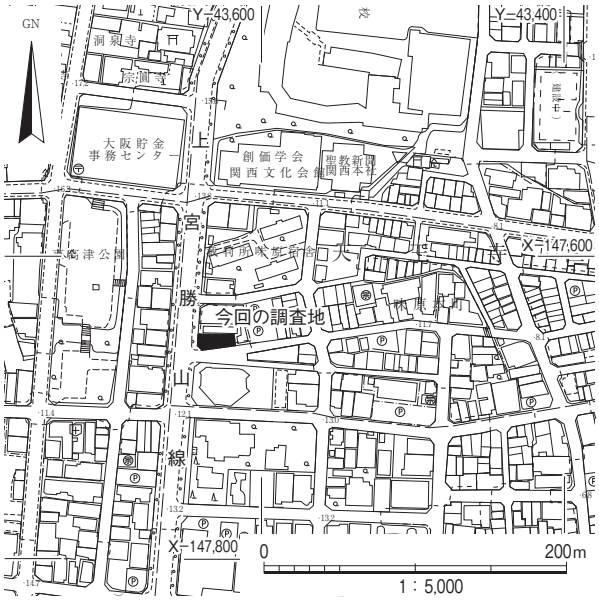


図１　調査地位置図

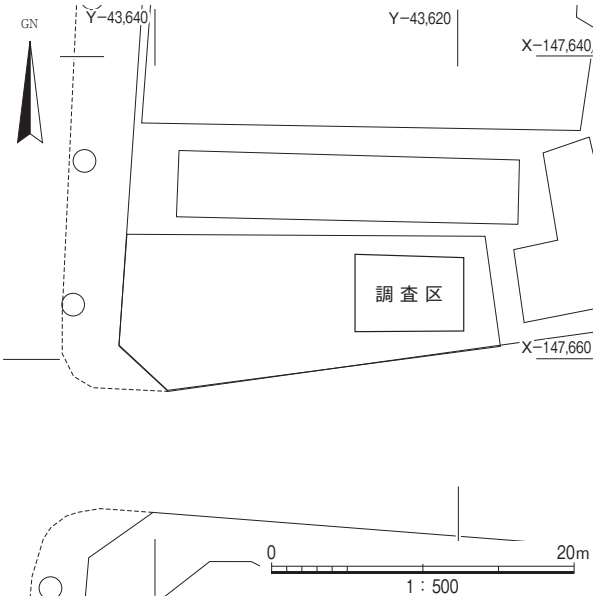


図２　調査区位置図

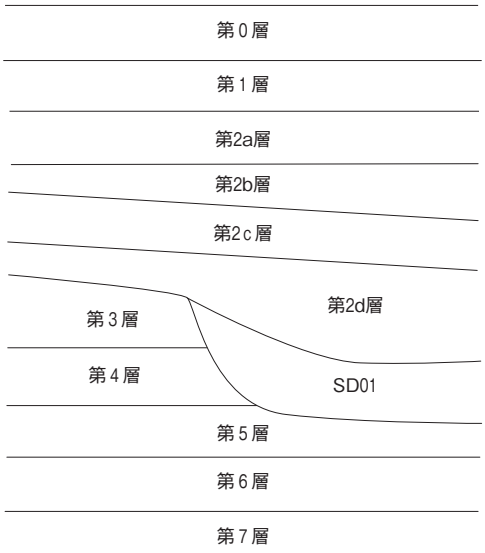


図3　地層と遺構の関係図

2）調査の結果

ⅰ）層序（図3・4、図版）

調査地の現況地形はTP+11.6mとほぼ平坦である。調査では部分的な掘削を含めて、現地表下4.0mまでの地層を確認した。

第0層：現代整地層で層厚は約80cmである。

第1層：炭を含む暗褐色（10YR5/3）粗粒砂混り中粒砂質シルトからなる近代・現代の整地層である。層厚は15～20cmである。

第2層：シルト偽礫を多く含む整地層で、第2a～2d層に細分した。本層は最大150cmに及び、下位の溝を埋めるほか、周辺の嵩上げを行っている。

第2a層はシルト偽礫を含む暗褐色（10YR5/3）粗粒砂混りシルト質中粒砂からなる整地層で、第2層による整地の最終段階として水平に整地されている。層厚は20～30cmである。

第2b層はシルト偽礫を多量に含むにぶい黄褐色（10YR5/3）粗粒砂質シルトからなる整地層で、第2c層上面が低くなる調査地東部に最大層厚20cmで分布する。

第2c層はシルト偽礫・炭を含むにぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質中粒砂からなる整地層で、層厚は20～40cmである。

第2d層はシルト偽礫を多量に含む褐色（10YR4/4）細粒～中粒砂とシルト質細粒～中粒砂の互層となる整地層である。後述のSD01を埋めたものであり、層厚は20～80cmである。第2d層からは18世紀

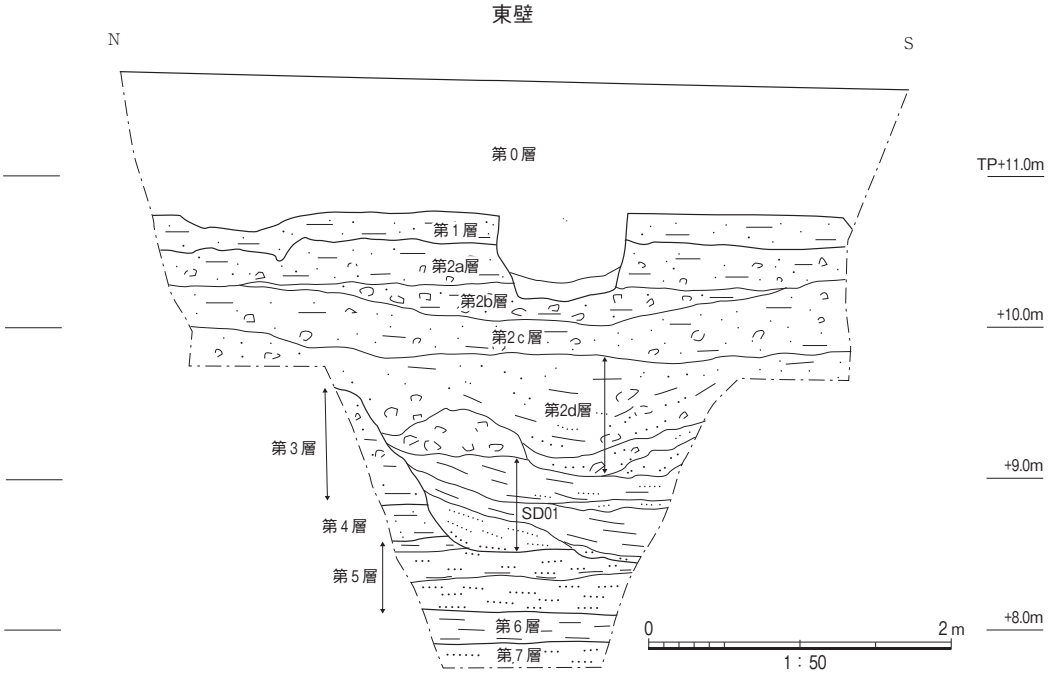


図4　地層断面図

後半とみられる土師器・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前磁器などが出土した。このうち肥前磁器染付蓋４を図化した。

第３層：シルト偽礫・炭を多く含むにぶい黄褐色(10YR4/3)からなる整地層で、層厚は80㎝以上である。ごく少量の土師器片が出土したのみである。

第４層:褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂と中粒～粗粒砂の薄い互層からなり、整地層と考えられる。層厚は20㎝で比較的固く締まる。土師器皿１が出土した。細片のため時期は特定しがたいが、17世紀後葉を前後するくらいのものであろう。

第５層：上部は暗灰黄色(7.5Y4/2)シルト、下部はにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂からなる水成層で、下部の粗粒砂層は途中に水成層のシルトの薄層を介在することから、さらに２層に細分できる。層厚は40～50㎝である。本層以下は部分的な掘削で確認したのみであるが、いずれも谷内の堆積物と考えられる。

第６層：褐灰色(10YR4/1)シルトからなり、やや暗色化する。層厚は20㎝である。

第７層：灰色(5Y4/1)粗粒砂層で、層厚は20㎝である。

ⅱ)遺構と遺物(図４・５、図版中・下)

第５層以下は厚い水成層が続き、遺構は検出されなかった。調査地は谷に位置していると考えられる。遺物が出土しなかったため、今回確認した各層の年代は不明であるが、積極的に開発を行った痕跡は第５層以下では認められなかった。朱雀大路に係わる整地があったとしても、少なくとも調査地までは及んでいないといえよう。

整地が行われた第４層上面は生活面であると考えられるが、遺構は確認できなかった。整地の時期は出土遺物から17世紀後葉頃と考えられる。

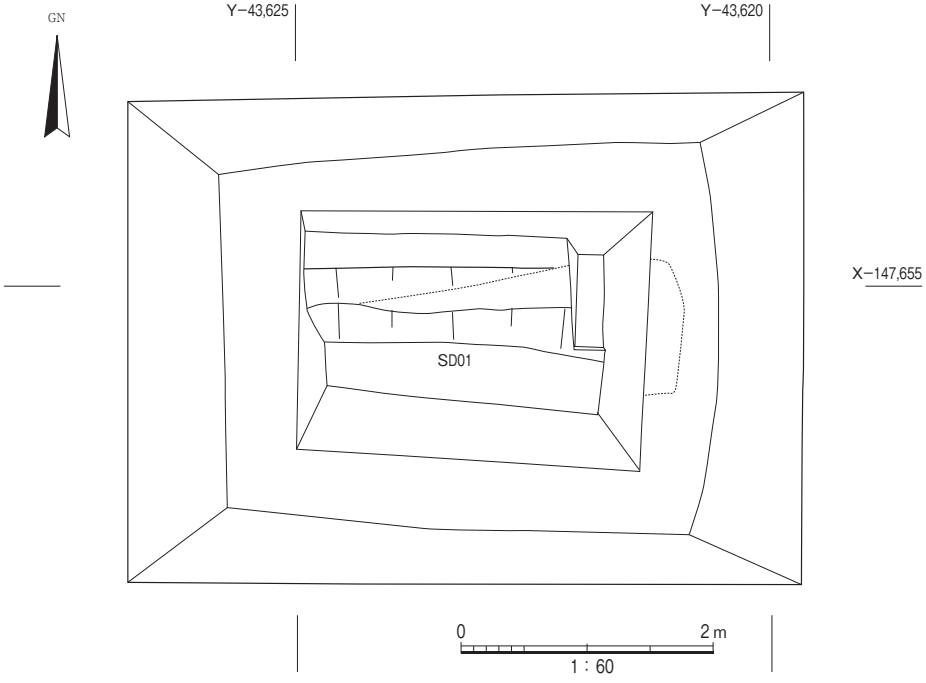


図４　第３層上面の遺構

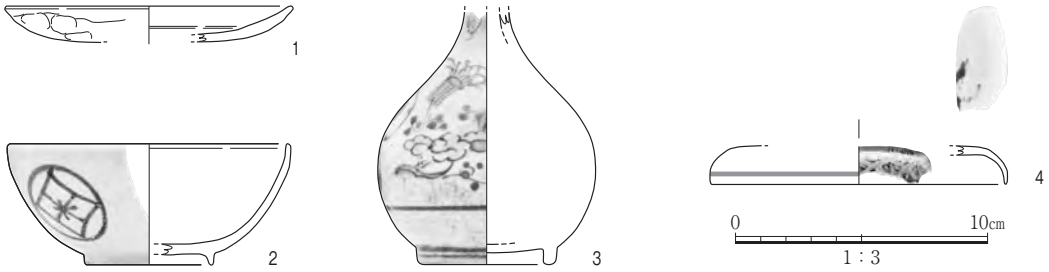


図５　出土遺物実測図
第４層（１）、SD01（２・３）、第2d層（４）

第４層上に80㎝以上の整地がなされた第３層上面では東西方向の溝SD01を検出した。

SD01：幅3.0m以上、深さ1.2m以上の東西方向の溝である。埋土は下部はシルトおよび砂主体で流水の痕跡が確認できる自然堆積層、上部は第2d層の整地層である。北側の肩を確認したのみであるが、流水の痕跡が認められたこと、壁面の南端部では逆に北に下がる堆積も確認できたことから、池のような広い遺構ではなく、ある程度の幅で収まるものとして溝と判断した。出土遺物として土師器・肥前磁器・堺擂鉢のほか漆椀片などが出土した。２・３は肥前磁器で、２は染付碗、３は染付瓶である。これらの遺物は18世紀代前半のものであろう。

SD01の機能であるが、地形的には東側が低くなっていくことから、東側への排水と考えられる。「味原池」へと排水したのかもしれない。規模が大きいことから第３層の整地と連動して計画的に設置された可能性が高い。その後、18世紀代のうちに第２層によりSD01が埋められるとともに再び地盤の嵩上げが行われる。

３）まとめ

今回の調査は小面積ながら調査地周辺の地形的な変遷を追うことができた。まず、調査地が谷内に位置することが明らかとなった。自然堆積層からの出土遺物がないため、時期は不明であるが、徳川期、第５層の整地が行われるまでは積極的な開発は認められなかった。朱雀大路の設置に伴なう整地、およびその後の道路整備に伴う整地の有無は不明であるが、少なくとも今回調査地まで及んでいないといえる。18世紀代に入ると大規模な整地が行われ、周辺の嵩上げとともに溝が設置されるなど、広範囲を対象とした開発が行われるようになったといえよう。

引用・参考文献）
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016、「中央区上町一丁目24－23における建設工事に伴う難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW14－３）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2014）』

天王寺区寺田町二丁目188－２他における建設工事に伴う

難波京朱雀大路跡発掘調査(NS17－２)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区寺田町２丁目188－２他
調 査 面 積　　約175㎡
調 査 期 間　　平成29年９月14日～10月２日
調 査 主 体　　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋工、平田洋司

1）調査に至る経緯と経過

調査地は古代の道路とされる難波京朱雀大路跡の遺跡範囲内に当る。朱雀大路の存在を示す遺構としては、朱雀門から南方140mのNW14－３次調査で検出された前期難波宮の時期の道路側溝と考えられる溝が現在のところ唯一の事例で、道路側溝芯々間を32.7mに復元している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016]。上町台地を下刻する大小さまざまな谷を克服して直線的な道路を敷設することが可能であったかどうかが、朱雀大路の存否を考えるうえで重要な要素となっている。今回の調査地にも、四天王寺東門付近から南東方向に延びる四天王寺東門谷が推定され、北東約150mのSK16－１次調査では同谷の北肩が確認されている[大阪文化財研究所2016]。

今回調査地では、大阪市教育委員会の試掘により地表下2.3m以下で古代の遺物を含む包含層が検出されたことから、調査を実施することとなった。調査区は東西２箇所に設定し、東区･西区と呼称した。規模はいずれも東西７m、南北12.5mである。事業者側で地表下約1.5～２mまでの地層を重機で除去した後、平成29年９月14日より調査に着手した。調査は土置場との関係から東区より開始し、東区が終了したのちに西区の調査を行った。両調査区とも事前の掘削で残された近代の整地層である第１層までを重機により除去し、以下は人力による掘削で進めた。途中、安全のために四周に犬走りを設け、平面的な調査は工事深度との関係から地表下３mとし、東区で第６層上面、西区で第７層上面まで行い、以下は部分的な掘削により下位の地層の把握に努めた。適宜に遺構検出・掘削、図面作成、写真撮影を行いながら調査を進め、10月２日に資材の撤収を含む現地における調査を終了した。

基準点はMagelan社製ProMark3によって測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）で、TP+○mと記した。

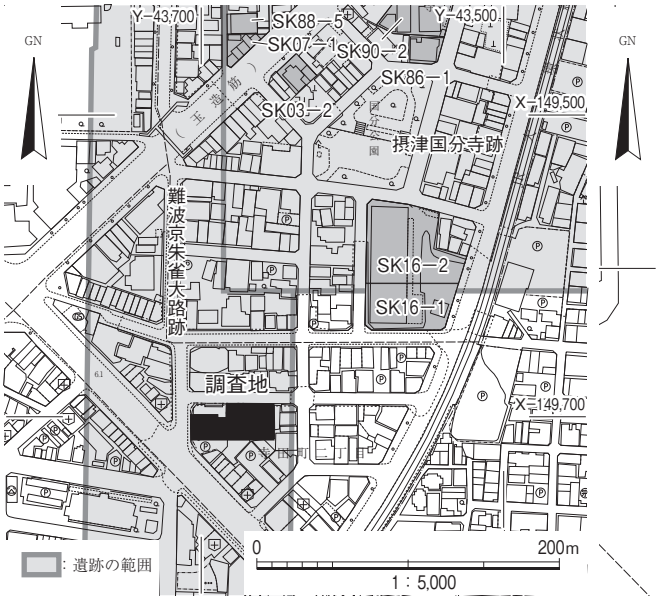


図１　調査地位置図

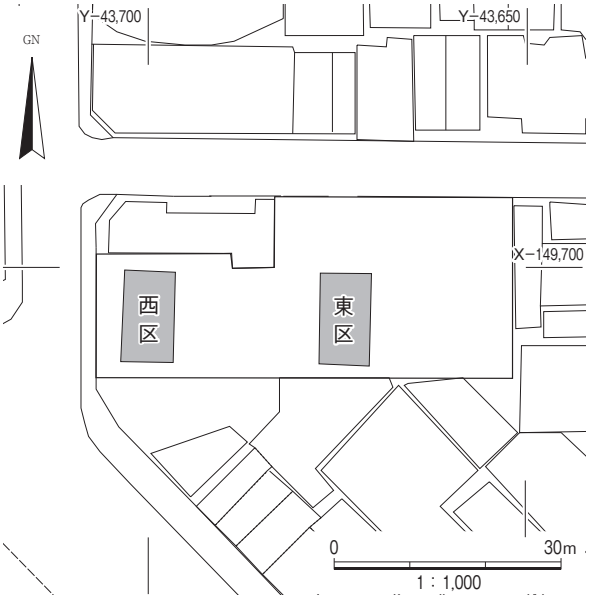


図２　調査区配置図

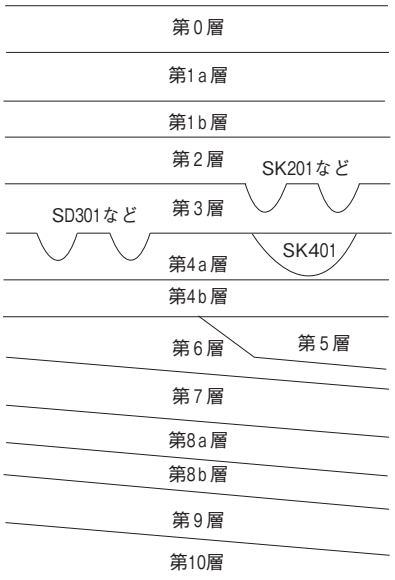


図3　地層と遺構の関係図

2）調査の結果

ⅰ）層序（図3・4）

現地表の標高はTP+5.6～5.8mと平坦である。調査では部分的な掘削を含めて、現地表下4.0mまでの地層を確認した。調査区は谷内に位置しており、上流側である西区が高く、東区が低い地形から徐々に平坦になる過程が観察できた。

第0層：現代整地層および攪乱で、層厚は西区で70～150cm、東区で110～150cmである。

第1層：近代の整地層で2層に大別した。上部の第1a層は廃棄物が主体で、薄い整地層を介在する。層厚は西区で80～90cm、東区で40～80cmである。木屑・金属・煉瓦・陶磁器・ガラス瓶・炭など大正時代を主体とする廃棄物を多く出土した。下部の第1b層はシルト偽礫を含むオリーブ黒色（7.5Y3/1）粗粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は西区・東区ともに10～20cmである。

第2層：灰色（7.5Y4/1）粗粒砂質シルトからなる近代の作土層で、層厚は西区で20～30cm、東区で10～20cmである。

第3層：シルト偽礫を含む灰色（5Y4/1）粗粒砂質シルトからなる近世の作土層で、層厚は西区で20～30cm、東区で20～40cmである。土師器・須恵器・瓦器・瓦片など中世以前の遺物のほか、17世紀代を主体とする陶磁器類が出土した。本層上面では第2層を埋土とする小土壙を検出した。

第4層：上部の第4a層と下部の第4b層に区分した。第4a層は氾濫堆積層の第4b層が擾乱を受けたもので、西区では灰色（10Y5/1）シルト質粗粒砂からなる作土層で、層厚は10～15cmである。東区ではシルト偽礫を少量含む灰色（10Y5/1）粗粒砂からなり、部分的に本来の堆積構造を残すが、作土層の可能性が高い。層厚は15～20cmである。第4b層は上方に粗粒化する氾濫堆積層である。西区では灰色（5Y5/1）シルト質細粒～粗粒砂からなり、層厚は5～10cm、東区では灰色（10Y5/1）細粒～粗粒砂層からなり、層厚は10～15cmである。第4層は区分して掘削できなかったが、土師器・須恵器・瓦

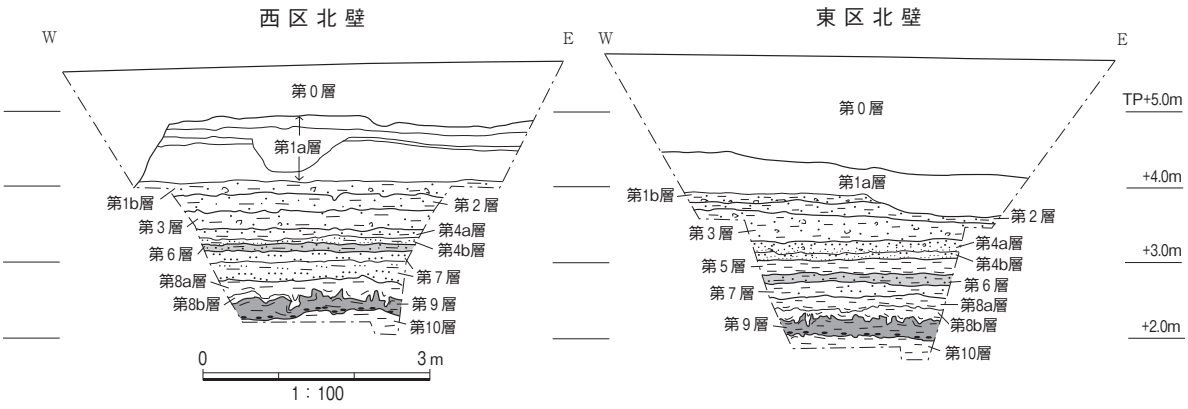


図4　地層断面図

器・瓦質土器・瓦片など多くが上部付近から出土した。14～15世紀代に位置付けられる。本層上面にて土壙のほか、第３層を埋土とする小溝を検出した。

第５層:東区でのみ確認した湿地性の堆積層で、灰色(7.5Y5/1)シルトからなり、層厚は20cmである。土師器・須恵器・瓦片が少量出土したのみであるが、上下層の出土遺物から時期は中世と推定できる。

第６層：第７層の上部が擾乱を受けたもので土壌生成により弱く暗色化する。西区では黄灰色(2.5Y4/1)シルト質中粒～粗粒砂層で、層厚は20cm、東区では黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粗粒砂層で、層厚は15～20cmである。土師器・須恵器・黒色土器・瓦片を含み、平安時代に位置付けられる。

第７層:氾濫堆積層で、西区では灰色(5Y5/1)中粒砂質シルト～粗粒砂からなり、層厚は20～40cm、東区では灰色(5Y5/1)シルト質粗粒砂層からなり、層厚は10～20cmである。本層以下は西区では、調査区の北壁および西壁沿い、東区では北壁および東壁沿いに設けたトレンチでの部分的な掘削でのみ確認した。土師器・須恵器・瓦片など古代の遺物が少量出土した。

第８層：湿地性の堆積層で、上部の第8a層と下部の第8b層に区分した。第8a層は西区では黄灰色(2.5Y5/1)シルト～粗粒砂質シルトからなり、層厚は10～30cmである。東区では黄灰色(2.5Y5/1)シルトからなり、層厚は20cmである。第8b層は第8a層に類似するがやや色調が暗く、西区ではオリーブ灰色(5GY6/1)シルトからなり、層厚は20cm未満で部分的に堆積する。東区では黄灰色(2.5Y5/1)シルトからなり、層厚は10～20cmである。第８層以下は地震による変形を受けており、第９層との境界ではコンボリュート構造を示す激しい凹凸が顕著に認められる。本層からは遺物は出土しなかった。

第９層：黒褐色(2.5Y3/1)シルトからなる湿地性の堆積層で、基底付近には植物遺体を多く含む。西区・東区ともに層厚は30cmである。出土遺物はごく少量であるが、西区からは飛鳥～奈良時代の土師器片などが出土した。ただし、黒色土器片が１点出土しており、地層の年代は平安時代まで降る可能性がある。

第10層：黄灰色(2.5Y4/1)シルトからなる湿地性堆積層で、層厚は30cm以上である。遺物は出土しなかった。

ⅱ)遺構と遺物(図５～７)

平面的に調査を行ったのは第３層上面以下、調査深度との関係から西区で第７層上面まで、東区で第６層上面までであり、それ以下は一部の深掘りで確認したのみである。

本調査地で特徴的なものとして谷を検出した。調査地全体が谷に当っていること、底までの調査を行えていないことから、規模や方向等は今回の調査結果のみでは不明であるが、周辺の調査成果を合わせると、今回検出した谷は、四天王寺東門付近から南東方向に延びる四天王寺東門谷の一部と考えられる。層序の項で記したように上流側が高く、下流側が低い地形から次第に平坦になっていく過程を検出した。以下、層序と地層出土の遺物、遺構とあわせて谷内の埋没過程を中心に記すこととする。

古代以前の状況については不明であるが、湿地性の堆積層である第９層からは少量の土師器のほか棒状土錘が出土した。１・２は土師器杯で１は深い杯部を持つ。内面には暗文、体部外面にはミガキが認められる。２は風化のため調整は不明であるが、口縁上端に強いナデ調整を行う。１は飛鳥時代前半、２は飛鳥時代末葉～奈良時代初頭のものと推定できる。３・４は棒状土錘で、ともに端部は平

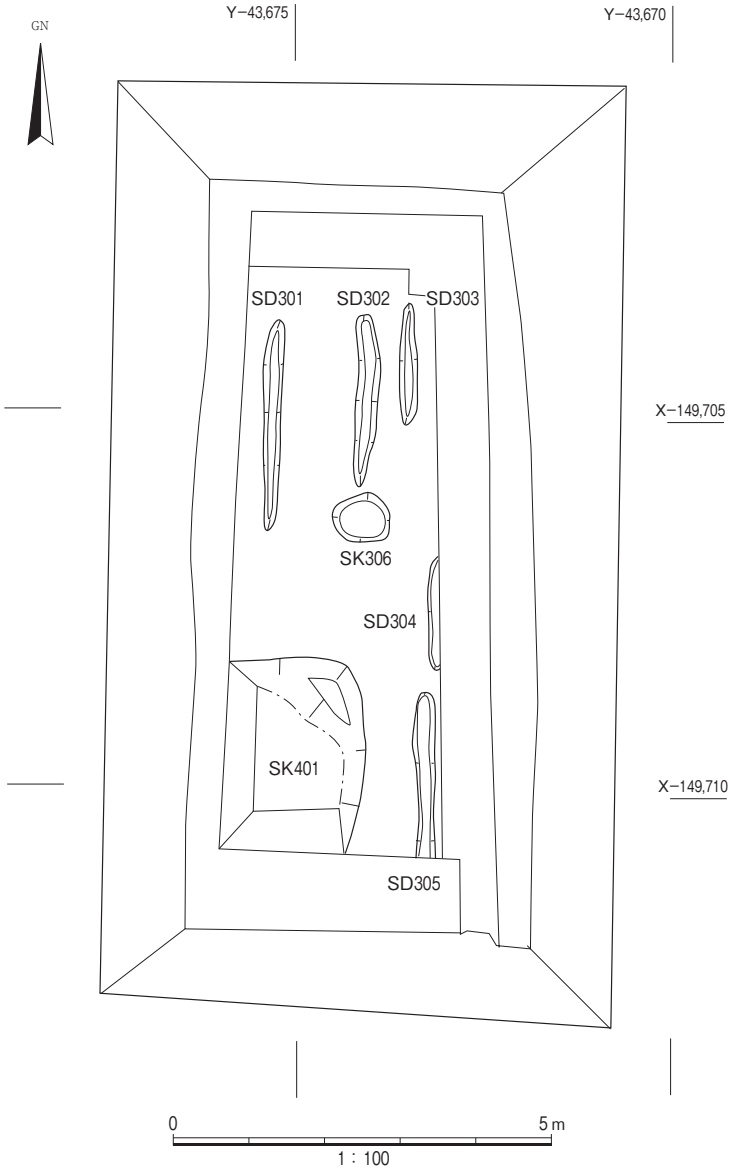


図５　東区第４層上面平面図

担な面を持つよう整形されている。３は22.2ｇ、４は14.8ｇである。このほか１点ではあるが内黒の黒色土器Ａ類片が出土しており、混入でなければ地層の時期は平安時代まで降る。続く第８層も湿地性の堆積層であり、第７層は氾濫堆積層である。第７層からは土師器・須恵器・瓦片など古代の遺物が少量出土した。５は丸瓦片で、内面には布目痕が認められる。

続く第６層は古土壌で、この時点で谷は一時期安定した環境になったと想定できる。第６層からは土師器・須恵器・黒色土器・瓦片など平安時代までの遺物が出土した。６は土師器皿で短く直線的に立ち上がる口縁部を有する。７は黒色土器Ａ類椀で内面には暗文を有する。これらはともに10世紀代のものであろう。

難波京朱雀大路が設置されたとすれば、遺物の年代からは第９層あるいはそれ以前、第９層の遺物を混入であるとしても第６層までの時期であったといえる。積極的に谷を埋めた形跡は認められず、湿地状の環境であったことから、道路と考えるのは困難であろう。NW14－３次調査で検出された溝から復元される大路側溝芯々間の距離が32.7mであることから、今回の調査地が道路域ではなかった可能性もあるが、少なくとも大路沿いの宅地を含めた大規模な整地は、谷内に位置する今回の調査地では行われていないことが指摘できよう。

続く第５層は湿地性の堆積層であることから、下流側が閉塞して湿地化したと推定できよう。第５層は低い東区でのみ検出されたが、この堆積によって東区と西区の高さはほぼ等しくなった。

東区では第５層上面で、第５層が存在しない西区では第６層上面で、第4b層で埋まる踏込みを多数検出し、再び人間が入り込める環境となったようである。

第4b層の氾濫堆積層ののちは積極的な土地利用が認められるようになる。第4a層として作土層が認められた。第4b層と区分して掘削することはできなかったため、耕作に係わる小溝など遺構は検出

できなかった。第4a層出土遺物と考えられるものに土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・瓦片などがあり、多くは古代の遺物であるが、中世後半の遺物が含まれる。ただし、いずれも細片で図化しうるものはない。8は地層の時期を示すものではないが、7世紀末葉～8世紀初頭の須恵器杯Bである。

第4層上面では、東区西南端で土壙SK401を検出した(図5)。東西1.8m、南北2.5m以上で、深さは1.0m以上である。埋土は第4層以下の偽礫主体で、埋めたものである。また、第9層の偽礫が認められることから、少なくともあと0.4m程度は深さがあったことが指摘できる。野井戸とも考えられるが、性格については不明である。土師器・須恵器・瓦器・瓦片などが出土したが、遺構の時期を示すものではない。上下の地層の時期から中世後半から近世初頭と考えられる。

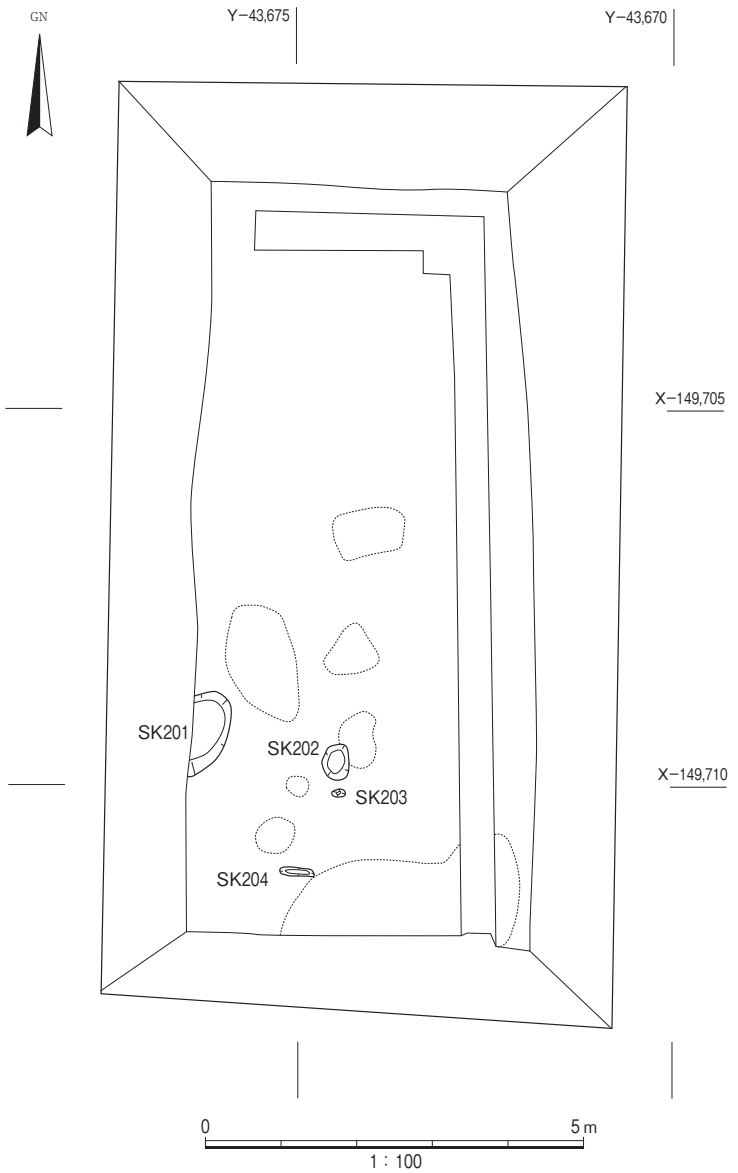


図6　東区第3層上面平面図

また、第3層下面の遺構として第4層上面では東区で耕作に係わると考えられる南北方向の小溝SD301～305を検出した(図5)。幅0.2～0.3mで深さは0.1m未満、埋土は作土層である第3層である。また、小土壙SK306も深さ0.1m未満で埋土が第3層であることから耕作の際に生じた窪みの可能性が高い。第3層からは、土師器・須恵器・瓦器・瓦片など中世以前の遺物のほか、17世紀代を主体とする陶磁器類が出土した。9は肥前陶器皿で、内底面に胎土目がある。高台周辺は露胎である。10は瓦質土器火鉢で花文のスタンプを持つ。11は1039年初鋳の皇宋通宝であるが、薄く、いわゆる近世の模鋳銭の可能性がある。

第3層上面では、第2層下面の遺構として東区で小土壙SK201～204を検出した(図6)。いずれも深さは0.1m未満、埋土は作土層である第2層であり、耕作の際に生じた窪みと推定できる。第2層からの出土遺物はないが、近代の耕作に伴うものであろう。

近代に第1b層の整地が施されたのちは、第1a層として調査区内に多量の廃棄物が持ち込まれる。木

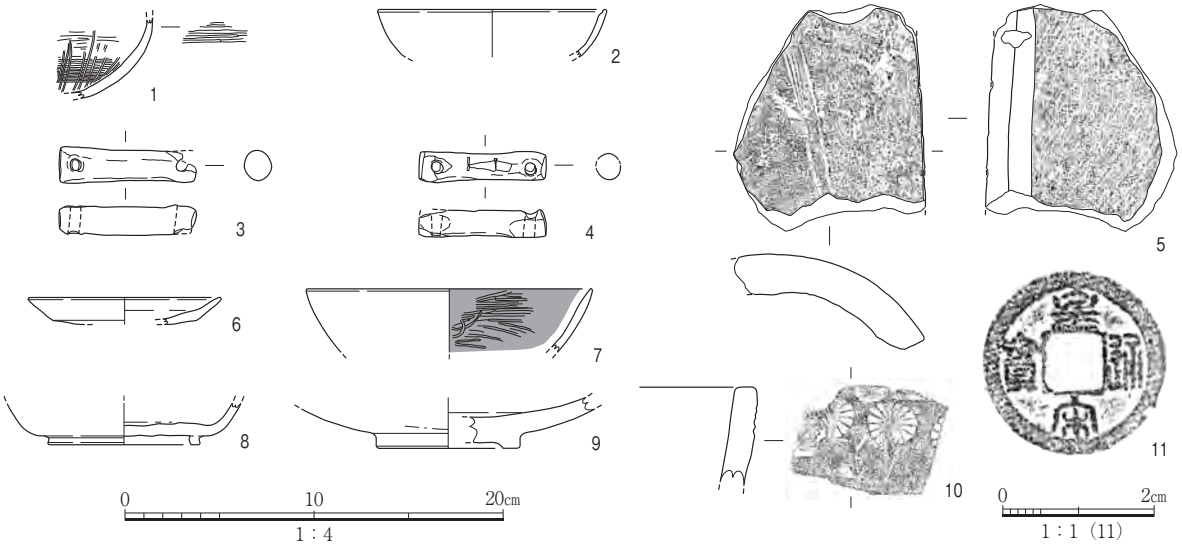


図７　出土遺物実測図

第９層（１～４）、第７層（５）、第６層（６・７）、第4a層（８）、第３層（９～11）

屑･金属･煉瓦･陶磁器･ガラス瓶･炭などの大正時代の遺物を主体とする。調査対象とはしなかったが、なかには高瀬貝を利用した貝ボタンの製造に係わる多くの未製品、多量の板材や金属片など、産業に係わるものが多く含まれるほか、陶磁器類をはじめとして薬瓶・化粧瓶など当時の生活を考える上で興味深い資料が多数ある。この整地によって調査地は１m近く嵩上げされて、周辺の高さに近くなったと推定できる。

３）まとめ

今回の調査では調査地が谷内部に位置していること、および次第に平坦になっていく過程を確認した。難波京朱雀大路が設置されたと考えられる時期には調査地は周囲より低い湿地であったが、整地層などは検出されず、少なくとも今回の調査地については、谷を埋めて道路の設置あるいはその周辺の開発を行った痕跡は認められなかった。

谷内は徐々に埋没し、平安時代頃に一旦安定した環境となるが、再び湿地および氾濫堆積に見舞われる環境となる。中世後半以後は耕作域として利用され、近代まで続く。その後、大正時代を中心として、多量の廃棄物が持ち込まれ、現在の標高に近くまで埋め立てられた。

今回の調査は谷内のごく一部のみであり、難波京朱雀大路の実態や谷内の環境および土地利用の変遷についてはさらなる周辺の調査の蓄積に期待したい。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016、「中央区上町一丁目24－23における建設工事に伴う難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW14－３）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2014）』

大阪文化財研究所2016、『天王寺区国分町73－２における建設工事に伴う摂津国分寺跡発掘調査（SK16－１）報告書』

天王寺区玉造本町１－22における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS17－４)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区玉造本町１－22
調 査 面 積　　64㎡
調 査 期 間　　平成29年９月19日～９月20日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋工、清水和明

1）調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城の東南にある「玉造口」の南西側に位置し、上町台地の東麓を下刻する谷である「清水谷」に接する。付近の調査では、北東100mのOS89－146次調査地[大阪市文化財協会2002]で、豊臣期の南北方向の堀が確認され、惣構の東南部に開口する玉造口の一部とみられている。さらに下位層では弥生時代の遺構・遺物も出土している。そのほか近隣の調査では以下のものがある。西に隣接するOS14－１次調査地[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016]では、清水谷の主谷に通じると考えられる北へ落ち込む傾斜面が見つかり、谷斜面を埋める自然の堆積層から縄文時代晩期～中世の長期間にわたる遺物が出土している。この地層が豊臣期あるいは徳川初期に大規模に埋められた状況で確認され、豊臣期とすれば1594年の惣構南堀に係る造成の可能性が指摘されている。東60mのOS15－５次調査地[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]では南北方向の溝が並行して認められ、弥生・飛鳥時代遺物を含むものの豊臣期以降となる可能性があるとされている。長堀通の北向かい側のOS16－３次調査地[大阪文化財研究所2017]では南側の谷に向かう落込みが検出され、惣構南堀の北肩と目されている。このように、当地における調査では清水谷という自然地形による地層の堆積状況と土地利用との関係、また豊臣期の惣構南堀の手がかりをつかむことが主たる目的となる。

大阪市教育委員会が行った試掘調査で、地表下約1.9m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたことにより、発掘調査を実施することとなった。

調査は平成29年９月19日から開始した。当初計画の東西８mの調査区を設定すると隣地境に近すぎるため、総面積は計画通り64㎡を確保しつつ東西を７mに縮めた。現代の盛土および攪乱層を重機により掘削したが、調査区中央付近に規模の大きな攪乱があり、第１～４層は調査区の西北部でわずか

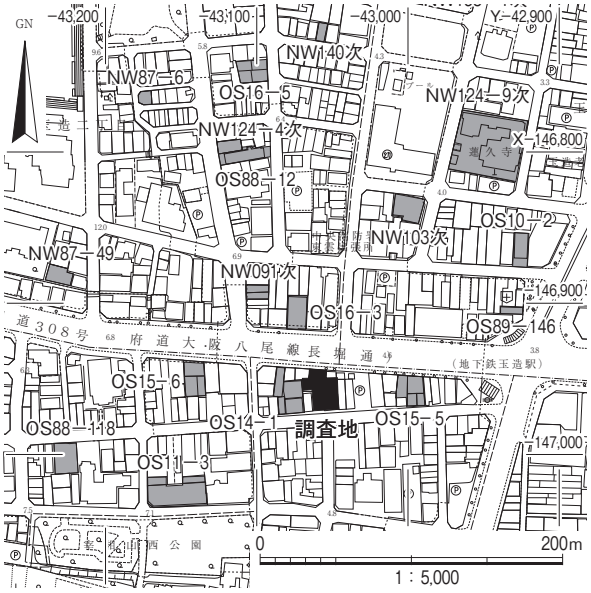


図１　調査地位置図

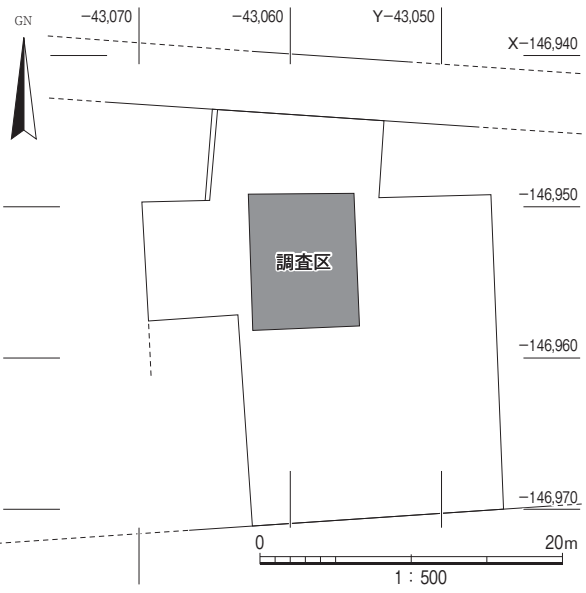


図２　調査区配置図

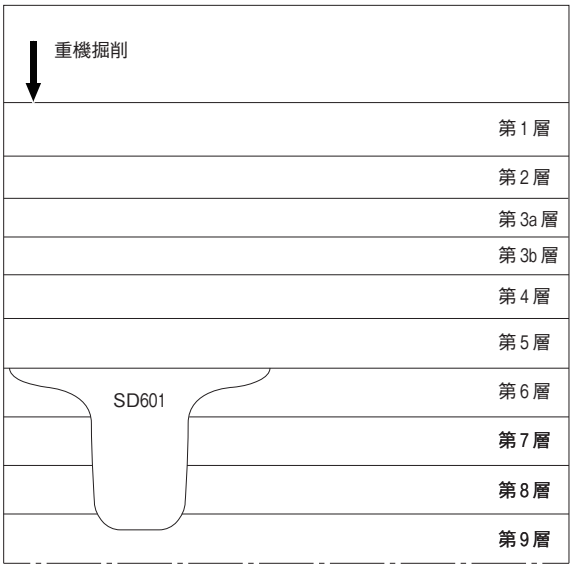


図３　地層と遺構の関係図

に残るのみであり、地層断面の観察記録にとどまった。下位の第５層以下の層準において遺構・遺物の検出と写真・図面などによる記録作業を行い、地表下約3.0mの第９層までを調査して同年９月21日に機材を撤収し、現地における全ての作業を終了した。

なお、方位は現場で記録した街区図を１/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

２)調査の結果

ⅰ)層序(図３・４)

調査区の現況地形は、およそTP+5.0mでおおむね平坦である。本調査地の地層は東西ではほぼ水平に、南北ではやや南へ低く傾いている。

第１～４層は重機で掘削したため詳細は不明であるが、岩相からは近代・現代から近世に遡る地層とみられる。以下、確認された地層を調査区北壁での観察を主として記述する。

第１層：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質細粒砂層で、層厚10cm程度の近現代の作土層とみられるが、上面は攪乱によって削平されている。

第２層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極粗粒砂質シルト層で、層厚は最大15cmとなる作土層である。

第3a層：灰色(10Y4/1)細礫混り中粒砂質シルト層で、層厚は最大20cmとなる作土層である。

第3b層：灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルト層で、層厚は最大10cmとなる作土層である。

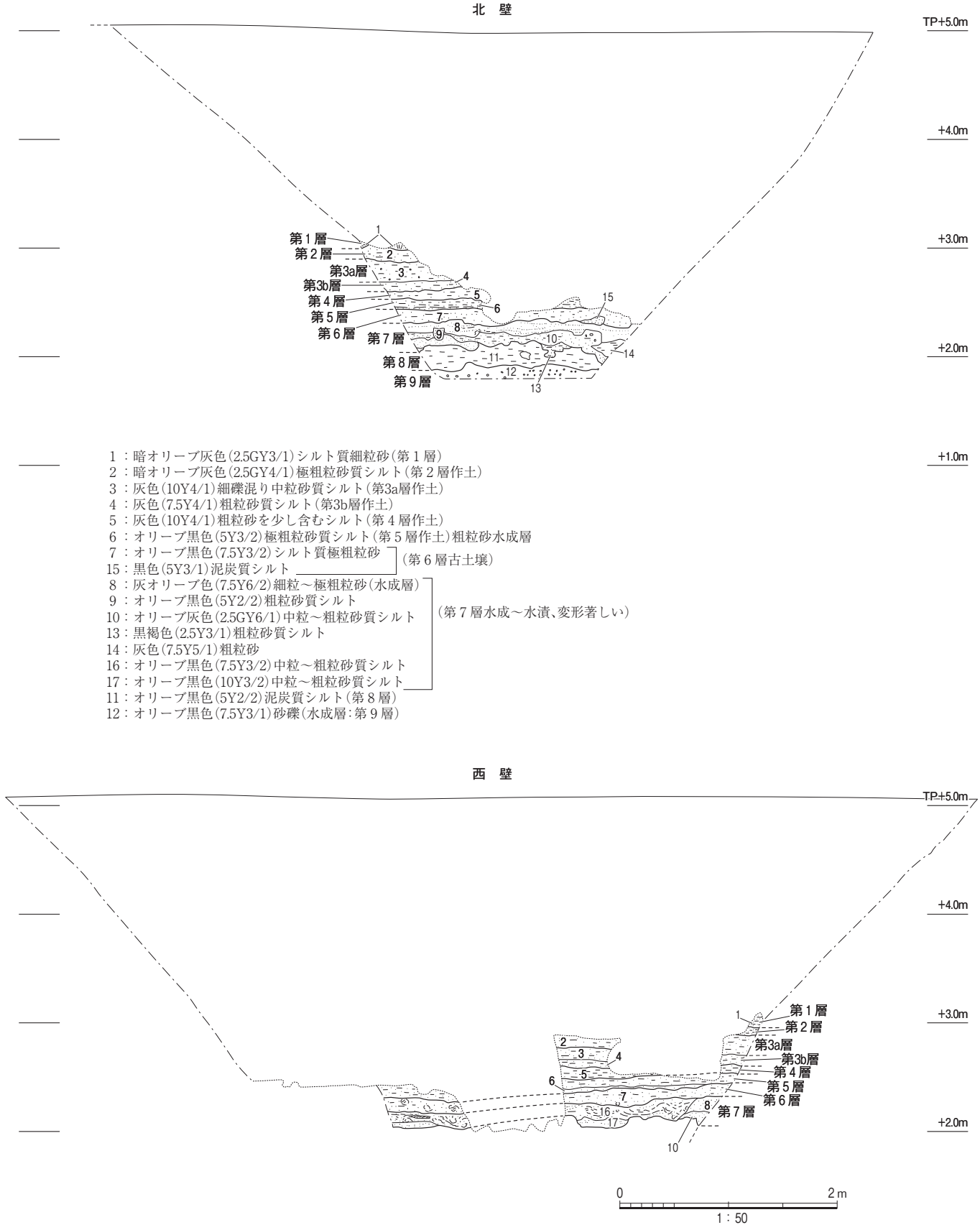
第４層：灰色(10Y4/1)粗粒砂を少し含むシルト層で、層厚は最大10cmとなる作土層である。

第５層：オリーブ黒色(5Y3/2)極粗粒砂質シルト層で、層厚は最大10cmとなる作土層である。瓦器片が出土した。

第６層：オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質極粗粒砂層で、一部は黒色(5Y3/1)泥炭質シルト層となる。層厚は最大15cmとなる古土壌である。上面でSD601を検出した。SD601からは古代の土器が出土した。

第７層:灰オリーブ色(7.5Y6/2)細粒～極粗粒砂層やオリーブ黒色(5Y2/2)粗粒砂質シルト層、オリーブ灰色(2.5GY6/1)中粒～粗粒砂質シルト層などからなり、全体の層厚が最大35cmの水成ないし湿地性の堆積層で、部分的に踏込みによる変形を著しく受けている。古代の土器が出土した。

第８層：オリーブ黒色(5Y2/2)泥炭質シルト層で、有機物を多量に含む。層厚は最大20cmと



1：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質細粒砂(第1層)
2：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極粗粒砂質シルト(第2層作土)
3：灰色(10Y4/1)細礫混り中粒砂質シルト(第3a層作土)
4：灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルト(第3b層作土)
5：灰色(10Y4/1)粗粒砂を少し含むシルト(第4層作土)
6：オリーブ黒色(5Y3/2)極粗粒砂質シルト(第5層作土)粗粒砂水成層
7：オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質極粗粒砂
15：黒色(5Y3/1)泥炭質シルト　(第6層古土壌)
8：灰オリーブ色(7.5Y6/2)細粒～極粗粒砂(水成層)
9：オリーブ黒色(5Y2/2)粗粒砂質シルト
10：オリーブ灰色(2.5GY6/1)中粒～粗粒砂質シルト
13：黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂質シルト
14：灰色(7.5Y5/1)粗粒砂
16：オリーブ黒色(7.5Y3/2)中粒～粗粒砂質シルト
17：オリーブ黒色(10Y3/2)中粒～粗粒砂質シルト　(第7層水成～水漬、変形著しい)
11：オリーブ黒色(5Y2/2)泥炭質シルト(第8層)
12：オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂礫(水成層：第9層)

図4　調査区地層断面図

なる湿地性の堆積層である。古墳時代～古代の遺物が出土している。

第９層：オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂礫層で、層厚は15cm以上となる水成層である。

ⅱ)遺構と遺物(図５～７)

地層断面の観察であるが、第５層から上位は作土層で調査区内で見つかった遺構はない。前項で既述した通り各地層は比較的平坦に堆積しており、遺物の時代も地層の堆積順に変化している。

遺構は第６層の上面で検出されたSD601のみであるため、他の地層から出土した遺物とともに、

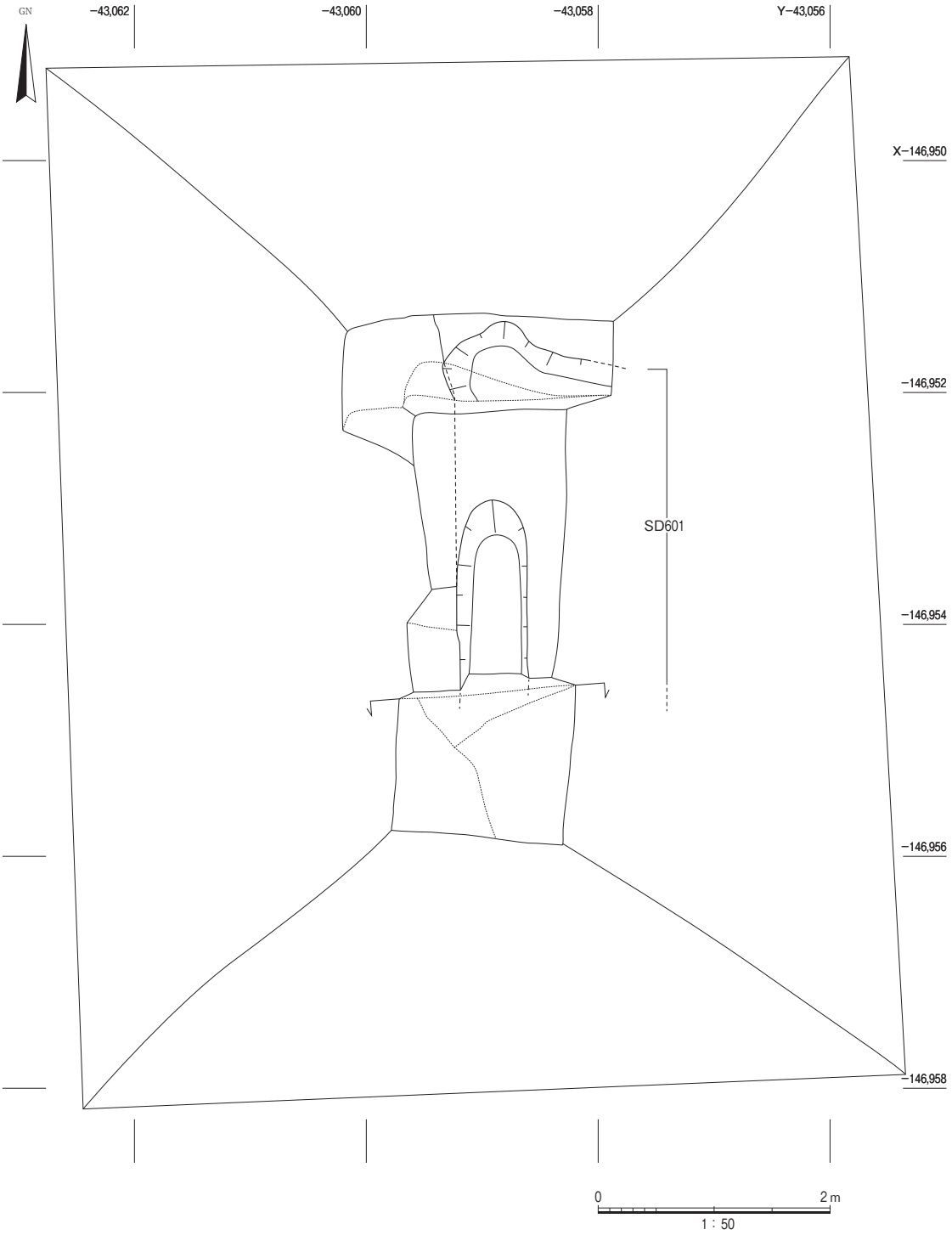
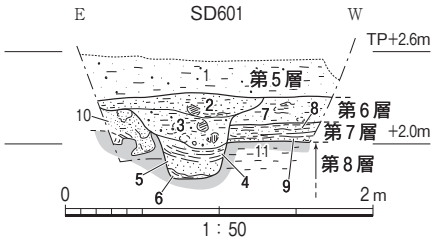


図５　第６層上面遺構平面図



1：黒褐色(2.5Y3/2)含細礫、細粒砂質シルト(第5層作土)瓦器を含む
2：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質極粗粒砂(埋めた土)
3：褐灰色(10YR4/1)含第8層・第7層偽礫、細礫混り中粒砂質シルト(埋めた土)
4：褐灰色(10YR4/1)極細粒砂質シルト(水漬き)
5：褐灰色(10YR4/1)粗粒砂(水成)
6：黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルト(水漬き)
7：黒褐色(10YR3/1)シルト～シルト質中粒砂(第6層古土壌)
8：褐灰色(10YR6/1)シルト質細粒～灰色中粒砂(第7層)
9：緑灰色(2.5GY6/1)極粗粒砂(第7層)
10：褐灰色(10YR6/1)～緑灰色(2.5GY6/1)シルト質細粒～極粗粒砂(第7層)
11：黒色(10YR1.7/1)泥炭質シルト含植物遺体(第8層)土師器含む

図6　SD601断面図

古い順に記述する。

第8層出土遺物

土師器4・5が出土した。4は調整は不明だが口縁端部に内傾する面をもち、古代の杯ないし皿であろう。5は甕の口縁部で端部は上方につまみ上げて外傾する面を作っている。外面はハケ、口縁部の内面はヨコハケ、体部の内面はケズリである。4は古代、5は古墳時代のものであろう。

第7層出土遺物

土師器3が出土した。口縁端部に内傾する面をつくる杯Cであろう。内面には放射状の暗文がある。飛鳥時代に属するものである。

第6層上面遺構

SD601は調査区の北端付近に立ち上がりがあり、東側は調査区外へ不定形な輪郭のまま広がっているが、南側は幅0.6m、深さ0.5mほどの溝となり、調査区外へと延びている。埋土の下部は機能時堆積層で、下から順に黒褐色細粒砂質シルト、褐灰色粗粒砂、褐灰色極細粒砂質シルトが堆積している。流水状態と滞水状態を繰り返していたと考えられる。埋土の上部は廃絶時に埋めた地層で、第7層・第8層の偽礫を含む細礫混り中粒砂質シルト層である。出土遺物には土師器鉢6がある。口縁部に内

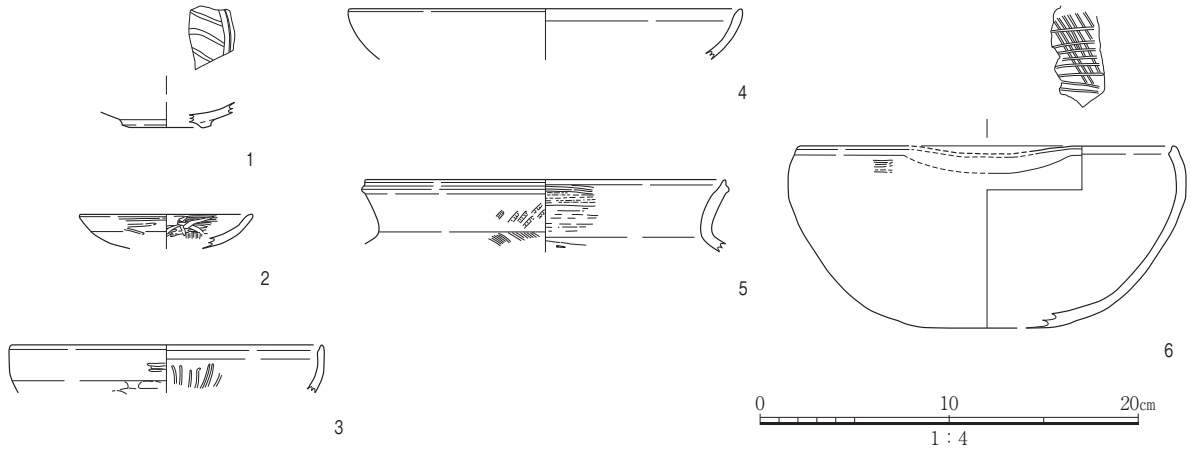


図7　出土遺物実測図

第5層(1・2)、第7層(3)、第8層(4・5)、SD601(6)

傾する端面を作り、直下が最大径となって緩やかに内湾して底部に至る。口縁部の一部を片口状に歪めている。底部の内面に斜格子状のミガキ、口縁部の外面に横方向のミガキが認められる。上下の層準から出土した遺物の時代から、古代後半に属するものと考えられる。

第５層出土遺物

瓦器１・２が出土した。１は椀の底部で、内面にやや粗い暗文があり、高台の断面は台形である。２は皿で内外面に密なヘラミガキを施している。これらは12世紀前半代の物であろう。

３）まとめ

本調査地の地層の堆積状況は、南西に位置するOS14－１次調査区と大きく異なる。OS14－１次調査区で見つかった北へ落ち込む谷の肩は、標高はTP+2.6m付近で本調査区とは南西25m程度の距離で検出されている。本調査区における近世の地層は、第４層より上位でおおよそ同程度の標高と考えられるが、下位の地層では北へ落ちる谷地形は考え難く、むしろ南へ緩やかに傾斜する層理面と、古代に遡るとみられる同方向に水を流す溝が見つかっている。確認できた範囲が狭いため、あまり局地的な地形を論じるべきではないが、こうした状況から清水谷の南肩が相当に入り組んだ複雑な地形であることが想定されよう。近世以前の谷地形と土地利用の関係、谷と豊臣期の惣構南堀との関係を明らかにするため、引き続き周辺での調査を重ねる必要がある。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、『大坂城跡』Ⅵ

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016、「大坂城跡発掘調査（OS14－１）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2014)』、pp.255－262

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017、「大坂城跡発掘調査（OS15－５）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』、pp.277－282

大阪文化財研究所2017、『中央区玉造二丁目15－５・15－６における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査（OS16－３）報告書』

天王寺区清水谷町８－11・14における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS17－５)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区清水谷町８－11・14
調 査 面 積　　約120㎡
調 査 期 間　　平成29年９月13日～９月22日
調 査 主 体　　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋工、南秀雄、桑原武志

1）調査に至る経緯と経過

調査地は徳川氏大坂城天守閣の南方約1.3㎞にあり、豊臣氏大坂城の惣構内に位置する。難波宮期では前期難波宮の宮城南門（朱雀門）跡の南約200mに位置し、朱雀大路が調査地の東至近を通っていたと推定されている。

近隣の調査では、長堀通を挟んだ北東約50mのNW14－３次調査（図１）で、朱雀大路の西側溝の可能性のある遺構が発掘されている[大阪文化財研究所2015]。また西隣のOS96－22次調査では、前期難波宮の造営で廃絶した建物跡、５世紀代の子持勾玉、溝で小区画に分かれた豊臣期の屋敷地などが調査された[大阪市文化財協会1999]。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘結果を受け、既存建物との関係で比較的残りが良いと思われる西端の南北19m・東西４ｍ（西区）を発掘した（図２）。また朱雀大路に接する街区になることから、できるだけ東に寄って古代の遺構が残存する可能性のある場所に東西15m・南北３mのトレンチ（東拡張区）を設けた。基準点はMagellan社製ProMark３により測位したが、結果が芳しくなく、本報告では1/2,500大阪市デジタル地図から世界測地系に基づく座標値と座標北を使用した。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP+○mと記した。

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３～５）

図１　調査地位置図

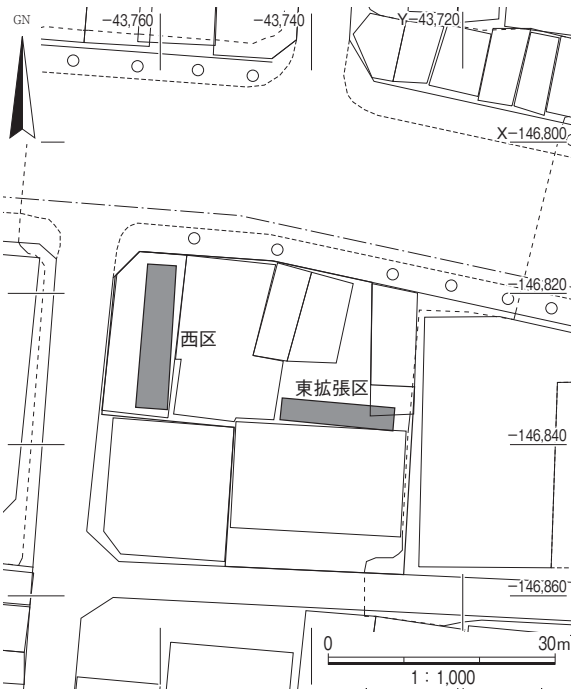


図２　調査区配置図

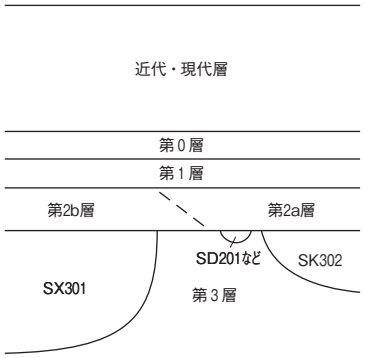


図3　地層と遺構の関係図

現地表の標高は敷地西端でTP+15.7～15.8m、東端でTP+14.7～14.9mで、東へ傾斜している。近代・現代の地層を除いて層名を付した。

第0層：西区北半にある瓦を多量に含むシルト質中粒砂層で、ごく新しい。層厚は10～25cmである。

第1層：東拡張区にある暗オリーブ色(2.5Y3/3)粗粒砂質シルトないしはシルト質中粒～粗粒砂層で、層厚は10～45cmである。上面は遺構面で、北壁に本層を掘って袖石を据えた竈があった。

第2層：近世の作土層で、東拡張区の地層を第2a層、西区の地層を第2b層とした。第2a層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂層で、層厚は15～30cmである。本層の年代は19世紀中葉で、ヨーロッパ産陶器皿5、柚子でんぼの蓋4が出土した(図7)。下面でSD201～204を検出した。第2b層は褐色(10YR4/4)シルト質中粒～粗粒砂層で、下

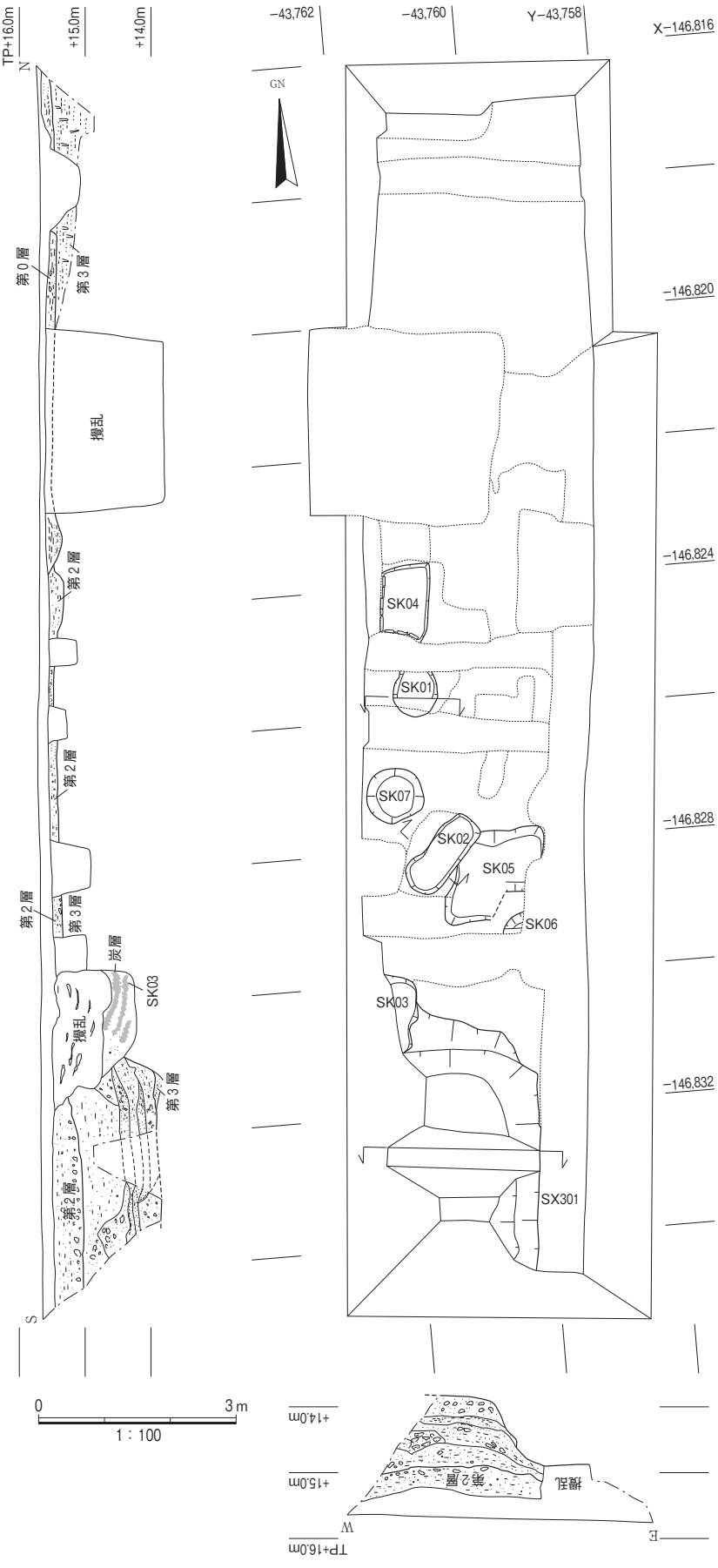


図4　西区第3層上面平面および西壁・南壁地層断面図

部に黄褐色シルト偽礫を含む。層厚は10～45㎝である。

第３層： 明黄褐色(2.5Y7/6)シルト質中粒～粗粒砂ないしはシルト層で、層厚は60㎝以上である。中位段丘層で、多数の生痕化石がある。上面の標高は西区でTP+15.7m、東拡張区でTP+13.4mである。比高は上町台地の傾斜に加え、敷地にかかる上町谷の支谷の影響と推測される。上面でSX301などを検出した。

ⅱ)遺構と遺物

西区(図４・６・７)　西区・東拡張区とも検出した遺構は近世以降のものである。南端にあるSX301は南北４m以上、東西2.5m以上で、深さ1.35mである。西と南に広がり、大きな遺構の北東コーナー部と推定される。底は平らで、埋土に水成層が挟在する(図６)。性格はよくわからないが、遺物の出土量が少ないことから、ごみ捨て穴の類ではない。SX301からは肥前磁器染付碗１・皿２、丹波焼擂鉢３が出土し(図７)、遺構の年代は17世紀後半である。

SK01～07は第３層上面で調査したが、第2b層の遺構の可能性を含むものである。SK01は直径0.70m、深さ0.30mである(埋土は図６)。土人形片が出土した。SK02は長さ1.35m、幅0.55m、深さ0.35mである(埋土は図６)。出土遺物から17世紀中葉の可能性がある。SK04は長さ1.15m、幅0.75m、深さ0.35mの整った長方形である。底の四壁の際を溝状に掘り、平瓦を立てて壁にしており、西・南壁には瓦が残っていた。SK05は東西約1.5m、南北1.35m、深さ0.25mである。

SK06は一部のみが残存し、SK07は浅い。また、SK03は煉瓦が入る新しい土壙で、埋土中に多量の炭があった。

東拡張区(図５)　第２層下面のSD201～204は耕作に係わる遺構と推測される。ほぼ東西方向で、

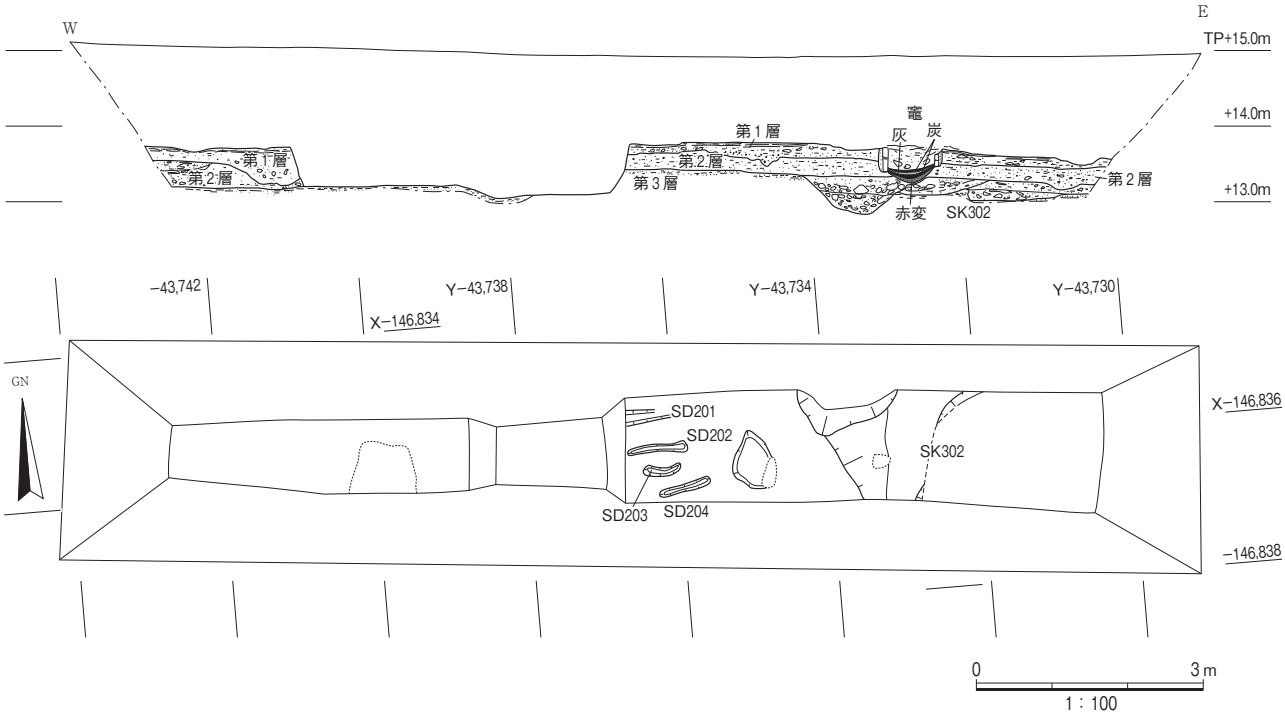


図５　東拡張区第３層上面遺構平面・北壁地層断面図

長さ0.5～0.8m、幅0.05～0.15m、深さ0.03m未満である。東端のSK302はいくつかの土採り穴が連なった土壙であろう。深いもので0.50mあり、埋土は第３層のシルト偽礫と粗粒砂層である。傾向として、東から西方向に掘っては埋められていた。19世紀代の遺構である。

３)まとめ

今回の調査では、17世紀後半のSX301をはじめ徳川氏大坂城期の遺構を調査した。難波宮期やそれ以前の遺構は検出されなかったが、西区は該期の遺構の空白地に当った可能性があり、東拡張区は近世以降の土採り等に遭っていたためで、難波宮正面の重要な地域である点はかわらない。

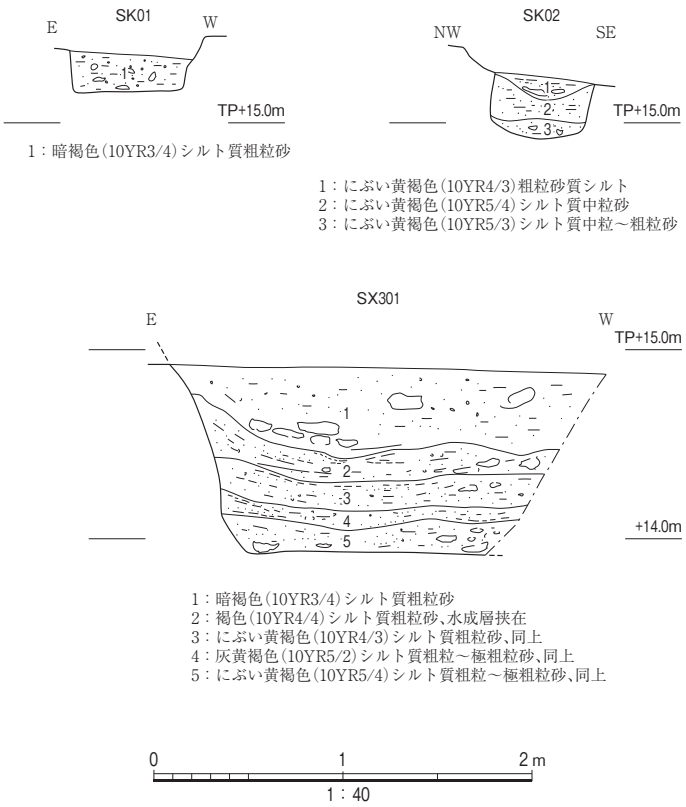


図６　遺構断面図

参考文献

大阪市文化財協会1999、「OS96－22次調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1996年度－』、pp.144－148

大阪文化財研究所2015、『中央区上町一丁目24－23他における建設工事に伴う難波宮･大坂城跡発掘調査(NW14－３)報告書』

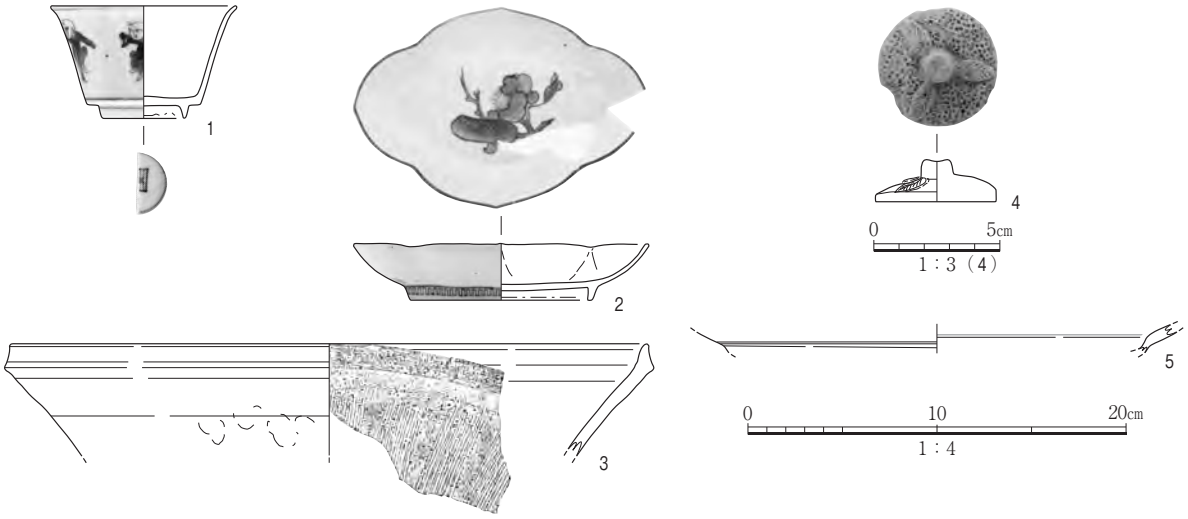


図７　出土遺物実測図

SX301(１～３)、第2a層(４・５)

天王寺区細工谷一丁目70－１における建設工事に伴う
細工谷遺跡発掘調査(SD17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区細工谷１丁目70－１
調 査 面 積　　約175㎡
調 査 期 間　　平成29年11月11日～11月17日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、平田洋司

1）調査に至る経緯と経過

細工谷遺跡は上町台地の東縁に位置し、西を古代の幹線道路とされる難波京朱雀大路跡と接する。地形としては西から東へと低くなる。上町台地東縁には東に開口する開析谷が多く存在し、細工谷遺跡周辺においても五合谷、細工谷、北山谷などの谷が確認されている。細工谷遺跡の発見は1996年、今回の調査地の北側を東西方向に通る計画道路難波片江線の整備工事に伴う試掘調査による。この試掘をうけて行ったSD96－１・97－１次調査は、東西方向に長い調査区であり、東側の細工谷の谷頭周辺からは、全国で初めてとなる和同開珎の枝銭や、富本銭、金属加工を示す遺物群、「百済尼寺」の存在を示す墨書土器などが出土し、全国の注目を集めることとなった[大阪市文化財協会1999]。一方、西側では地山層が高く、後世の削平を受けていたものの、１基ではあるが、７世紀末～８世紀初頭の井戸が検出され、本来はこの地点にも古代の遺構群が存在したことを示す資料となっている。今回の調査地の西側に当るSD08－１次調査では、近世の石列と埋甕が発見されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。また、同調査では巣穴の生痕化石を伴うMa12と推定される段丘構成層が確認されている。

今回調査地では、大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下0.2mで地山層が確認されたことから、調査を実施することとなった。平成29年11月１日より敷地中央部に東西25m、南北７mの調査区を設定し、調査を開始した。現代整地層直下が地山層であったため、重機による掘削は現代整地層のみとし、地山層上面にて遺構検出作業、写真撮影・図面作成などの記録作業を行った。なお、土置場の確保のため、調査区を３分割して西部、東部、中央部の順に、順次掘削・埋戻しを行いながら調査を進めた。途中、谷の一部と考えられるSX201を検出した。SX201は範囲が広く、深く掘削する必

図１　調査地位置図

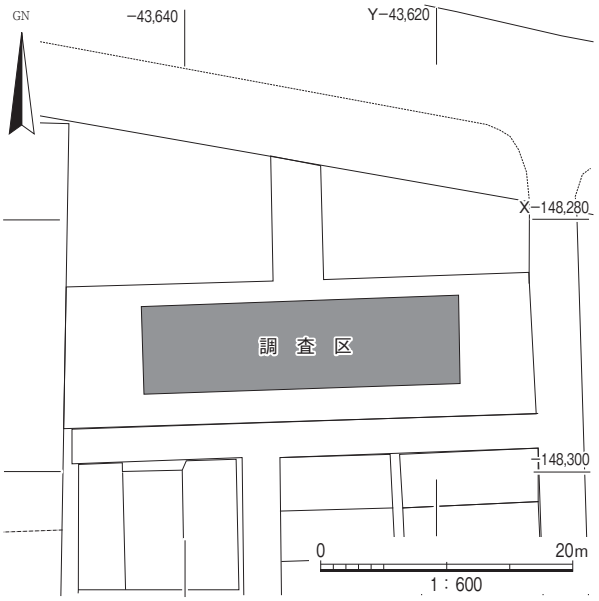


図２　調査区位置図

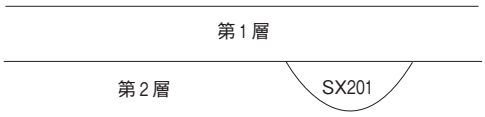


図３　地層と遺構の関係図

要があったが、近隣住人の通行路の関係上、安全柵の設置ができなかったこと、また、埋土の状況から遺物の出土が期待できないほど古い時期の可能性が高いと判断したことから、これについては一部のトレンチ調査にとどめ、掘削後すぐに埋戻し作業を行った。現地における作業は平成29年11月17日に完了した。基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値（東京湾平均海水面値）で、TP+○mと記した。

２）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４、図版１）

調査地は北から南、西から東へと下がっており、もっとも高い西北部でTP+10.7m、もっとも低い東南部でTP+9.6mと約１mの差がある。ただし、平坦に造成された結果であり、調査地西側の敷地とは崖をなして3.6mもの標高差があることから、東西方向の本来の傾斜はさらに急であったと推測される。今回の調査地では、現代整地層直下が地山層であった。

第１層：バラス・改良土主体の現代整地層で固く締まる。駐車場として利用されていたため、その基礎となる造成であろう。層厚は20～30㎝であった。

第２層：灰色（10Y4/1）粘土からなる地山層である。層厚は120㎝まで確認した。本層上面には直径２～４㎝程度の巣穴化石が多数確認された。西側のSD08－１次調査で確認されたMa12と推定される海成粘土層であろう。巣穴化石の埋土は黄褐色（2.5Y5/4）細粒～粗粒砂である。本層上面で谷の一部と考えられるSX201を検出した。

ⅱ）遺構と遺物（図４・５、図版１・２）

遺構検出は第２層上面で行った。人為のものではないが、調査地の中央部で谷の一部と考えられるSX201を検出した。

SX201　調査地北側で東西幅11.5m、南側で東西幅8.5mを測る。南側で一部を掘削したのみであるが、深さは1.0mであった。埋土は下部を中心に第２層の偽礫を多く含み、砂が主体で非常に固く締まっている。植物遺体を多く含み、水流の痕跡が認められる。また、原因は不明であるが変形構造が確認できた。底付近は凹凸が激しい。遺物は出土しなかった。自然に形成されたものであり、形状は不明であるが、調査地内では南北方向となる谷の一部と考えられる。北側のSD96－１次調査地では確認されていない。直上が現代整地層であり、時期については推測の域を出ないが、周辺に遺構群が展開すると考えられる古墳時代以降に属するとすれば、多少なりとも遺物が含まれてもよさそうなこと、また、埋土に周辺で観察されるさまざまな時期の包含層に該当するものが見られないこと、から周辺において人々の活動が活発になるよりも古い時期に形成されたと推定しうる。一方、上町台地の隆起が始まって以後に形成されたことは水流の痕跡や偽礫の存在、植物遺体などから明らかであるが、古くは隆起の過程で形成された可能性も指摘しておきたい。また、近隣の調査地では複数の大規模な地滑りの痕跡も認められており、成因のひとつと考えられるかもしれない。

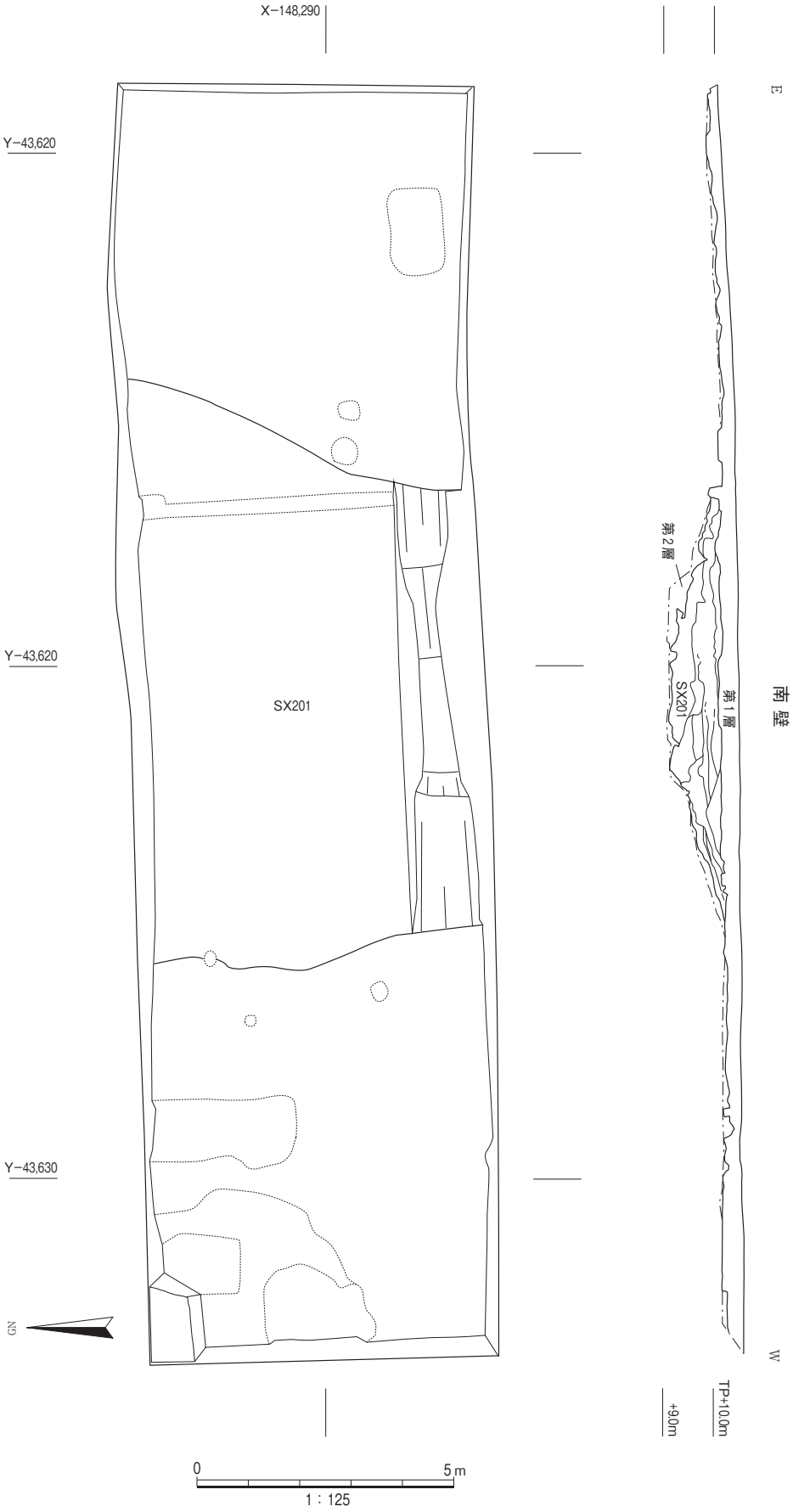
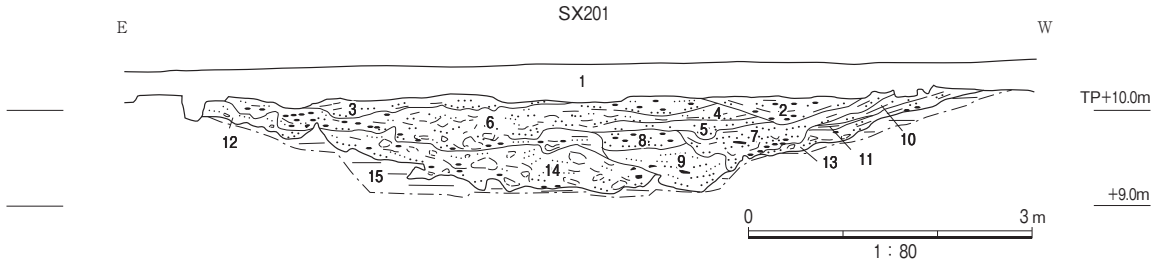

X−148,290
Y−43,620
Y−43,620
Y−43,630
SX201
GN
0
5m
1：125
E
W
南壁
第2層
第1層
SX201
TP+10.0m
+9.0m

図4　平面図・地層断面図



1：現代整地層[第1層]
2：植物遺体多く含むオリーブ褐色(5Y3/1)シルト質中粒～粗粒砂
3：暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト～粗粒砂
4：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質中粒～粗粒砂
5：灰色(7.5Y5/1)粗粒砂
6：第2層偽礫・植物遺体多く含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト質中粒～粗粒砂
7：植物遺体多く含むオリーブ褐色(5Y3/1)シルト質粗粒砂
8：植物遺体多く含む黒褐色(2.5Y3/1)中粒～粗粒砂
9：植物遺体多く含むオリーブ灰色(10Y4/2)粗粒砂
10：灰色(5Y4/1)粗粒砂質粘土
11：オリーブ灰色(10Y5/2)粘土
12：第2層偽礫多く含む緑灰色(10GY5/1)粗粒砂質粘土
13：第2層偽礫多く含む緑灰色(10GY5/1)粗粒砂質粘土
14：第2層偽礫多く含む暗緑灰色(10GY4/1)粗粒砂～粗粒砂質粘土
15：灰色(10Y6/1)粘土[第2層]

図5　SX201断面図

今回の調査では、SX201以外の遺構や遺物は確認されなかった。西側敷地との標高差が示すように、調査地に平坦地を造成するに際して大きく削平を受けたことは明らかである。

3)まとめ

今回の調査地では期待された古代の遺構は検出されなかった。ただし、すでに遺構面が大きく削平されているため検証ができなかったということであり、SD96－1次調査の井戸が示すように本来の遺構の有無を判断することはできない。

また、谷の一部と推定できる落込みを検出した。形成時期が不明であり、ただちに周辺の地形と結び付けて考えることはできないが、今後の調査によって時期やつながりが確認できる可能性があり、周辺の調査を行う際には注目しておく必要があろう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』I

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「細工谷遺跡発掘調査(SD08－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.309－320

天王寺区国分町151－１の一部における建設工事に伴う

摂津国分寺跡発掘調査(SK17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区国分町151－１の一部
調 査 面 積　　約19㎡
調 査 期 間　　平成29年11月６日～９日
調 査 主 体　　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋工、岡村勝行

1）調査に至る経緯と経過

調査地は四天王寺の南東約600mの上町台地北部の東縁に位置し、古代寺院の摂津国分寺跡推定地の北西部に当る。周辺ではこれまで10箇所ほどの調査が行われており、古代の遺構は未確認であるが、SK88－５次・SK90－２次・SK96－９次調査などで同寺創建瓦とみられる均整唐草文軒平瓦をはじめとした古代瓦が多数出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991・1998、大阪文化財研究所2015]。また、南部のSK16－１次調査では、傾斜地を下刻した開折谷の最下部で古代の地層が検出されている。

大阪市教育委員会により実施された試掘調査で、地表下約1.5m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする古代から中世の遺物を含む遺構面および遺物包含層が検出された。この結果を受け、本調査は敷地中央やや北寄りに一辺４mの調査区を設定し（図２）、平成29年11月６日に開始した。まず重機で地表下0.9mまで掘削し、その後、下位層を人力で掘り下げた。層序に応じて、順次遺構・遺物を検出し、実測・写真撮影による記録を進めた。最終面では、中世に遡る南北溝SD301を検出し、その西肩を確認するために、一部拡張を行って頭書の調査面積となった。11月９日に現地における全作業を終了し、資材・機材を撤収した。

なお、本報告で用いた基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４）

図１　調査地位置図

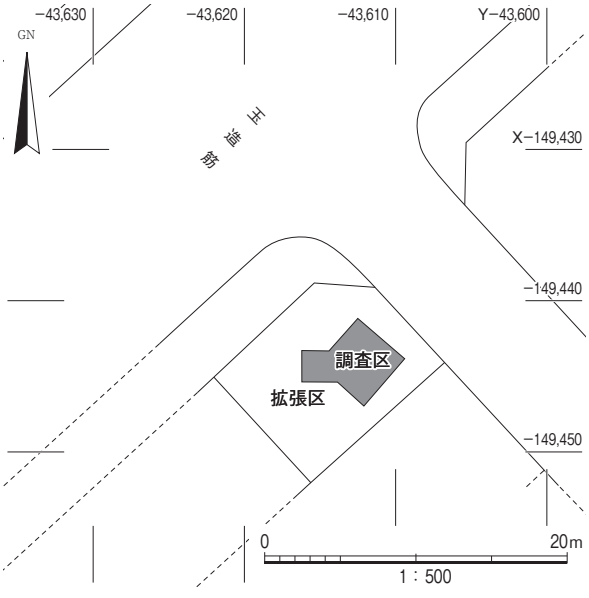


図２　調査区配置図

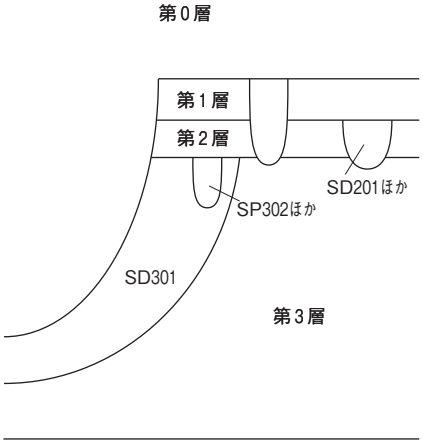


図3　地層と遺構の関係図

現地表の標高はTP+9.5mと平坦である。近代以降の第0層を除き、下位の地層は計3層に分かれた。調査区北壁の状況から以下にそれぞれを記す。

第1層：オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は15cm前後である。19世紀中頃の関西系陶器のほか、肥前磁器や瀬戸美濃焼磁器などを含む。

第2層：灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は10cm前後である。古代～中世瓦のほか、肥前陶器碗5、備前焼鉢などが出土し、豊臣後期の地層である可能性がある。上面で18世紀中頃の遺構を検出した。

第3層：オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト質粘土～緑灰色(10GY6/1)極細粒砂からなる地山層である。上面で中世の南北溝SD301、SP302～304を検出した。

ii)遺構と遺物(図5～8)

a．中世の遺構と遺物

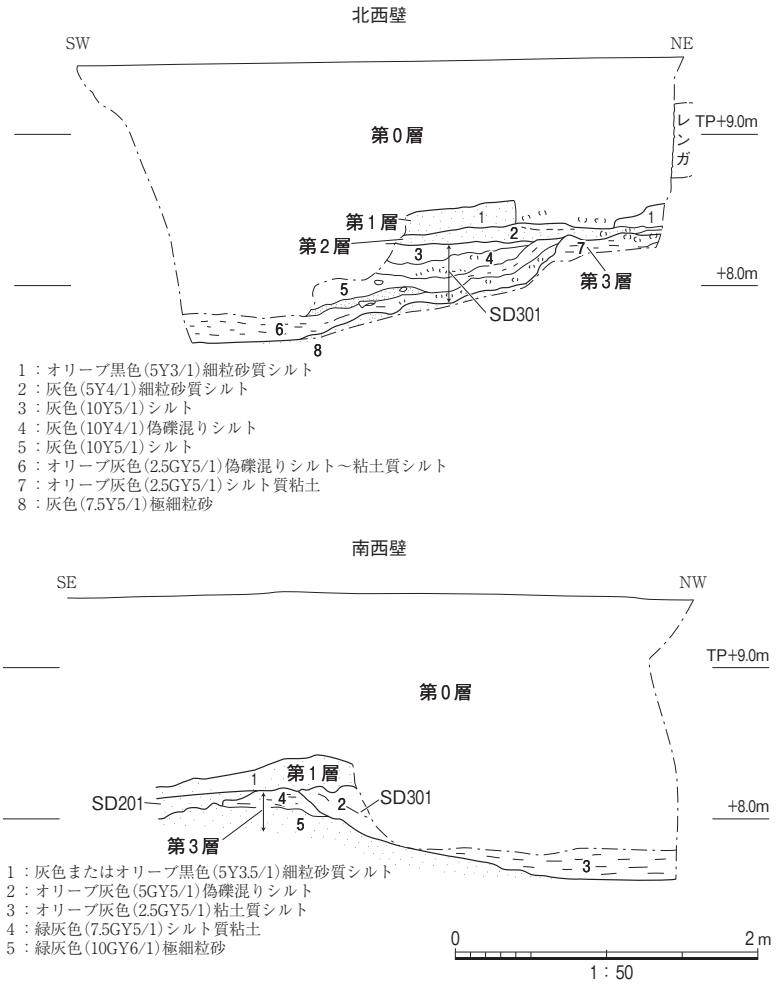


図4　地層断面図

第3層上面で溝、小穴を検出した。SD301は南北方向の溝で、幅2.0m以上、深さ0.6mである。東肩の一部以外は攪乱で削平されている。西肩を確認するため、調査区を約2m西側へ拡張したが、攪乱が深く、確認できなかった。溝の最深部がその中軸線と想定すると、幅は2.6mに復元できる。埋土は灰色シルトを基本とし、最下層は自然堆積で、上層は偽礫が混じり、最終的には埋め立てられている。中国産青磁碗、備前焼擂鉢2、古瀬戸片口鉢3、常滑焼甕、瓦質羽釜1・鉢4、古代～中世の瓦が出土した。主要な遺物は全体に15世紀後半～16世紀前半のもので、埋没年代はその頃と考えられる。SP302～304はSD301の東肩からやや下がった場所で

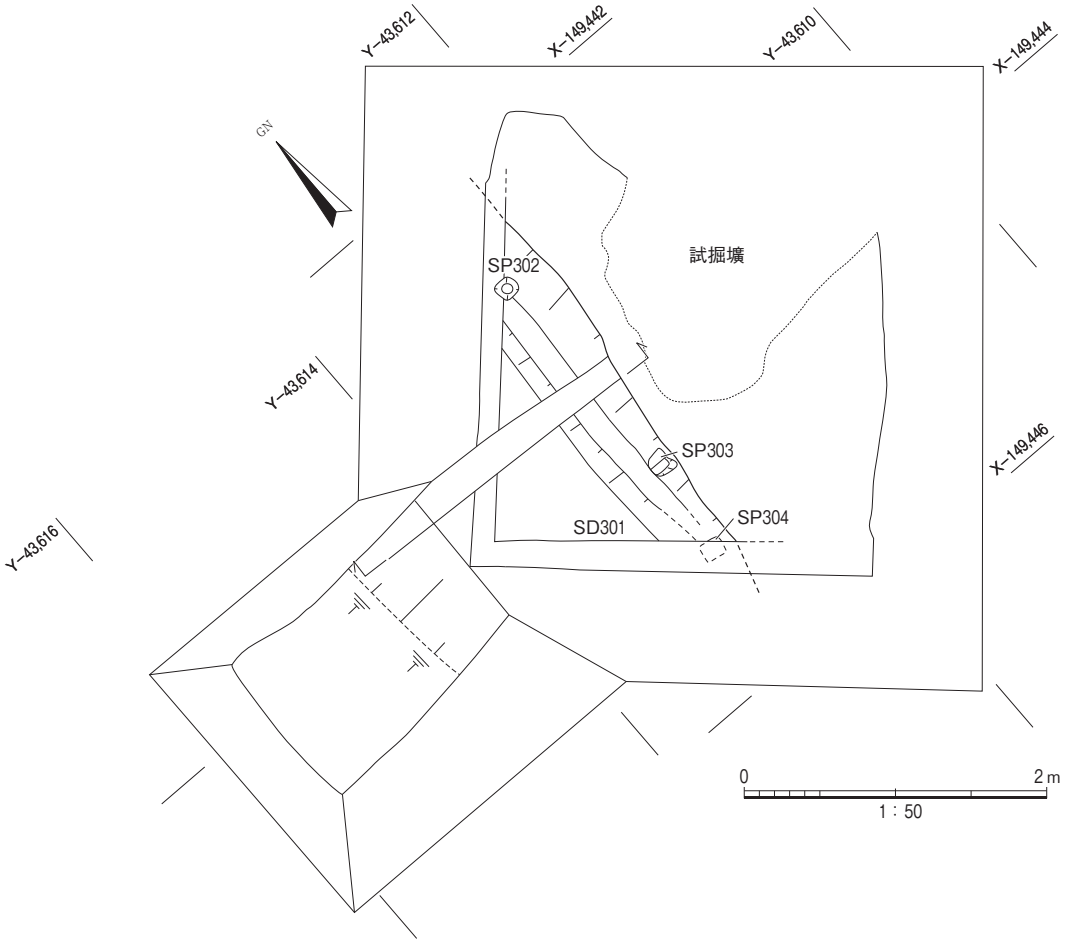


図５　第３層上面遺構平面図

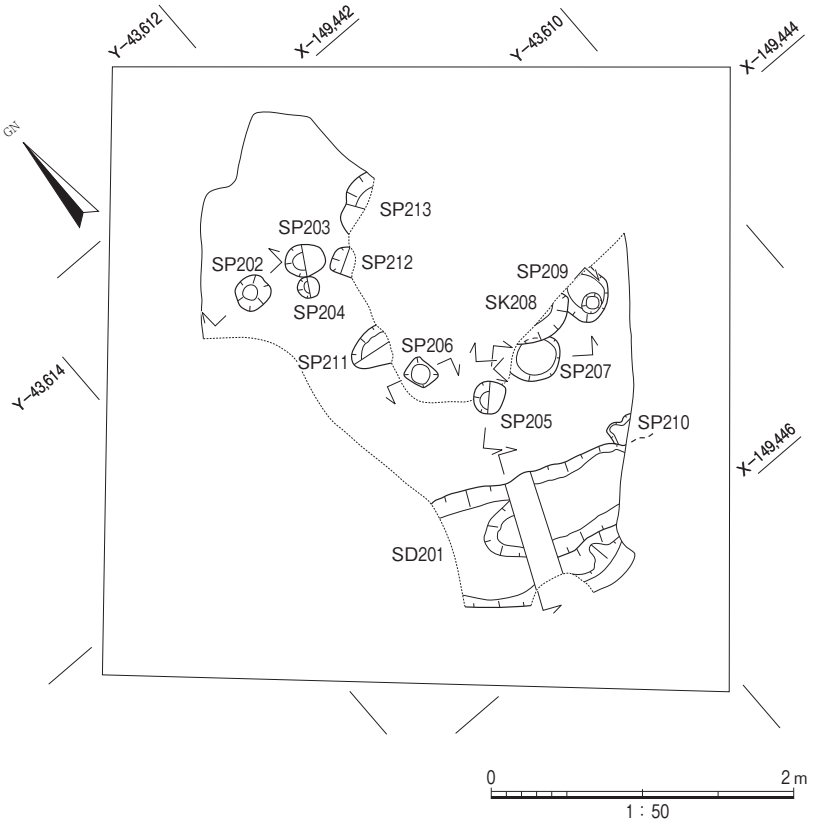


図６　第２層上面遺構平面図

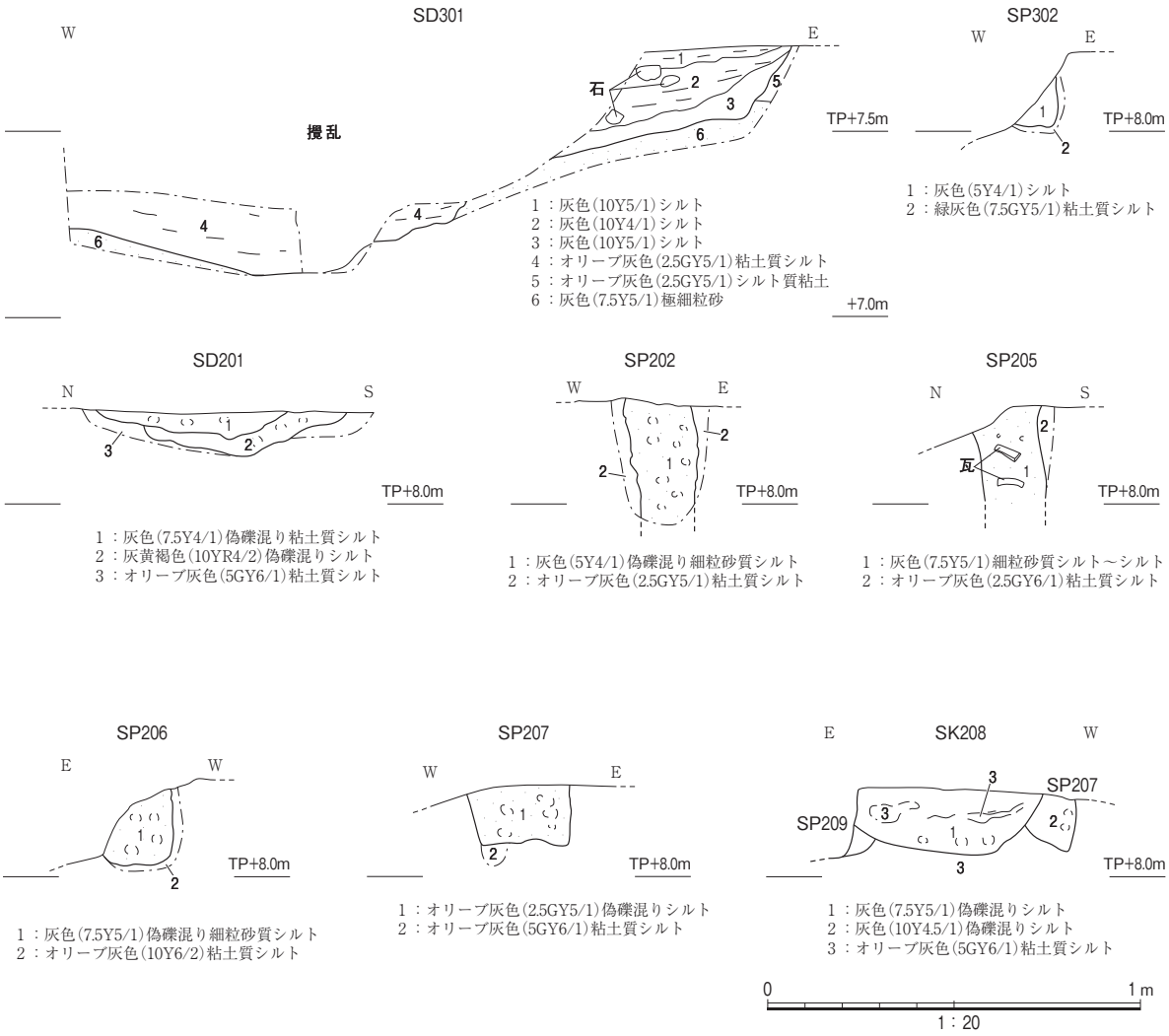


図７　遺構断面図

検出された小穴である。いずれも一辺0.12～15mの方形で、深さは20㎝前後であった。

ｂ．江戸時代の遺構と遺物

第２層上面で溝、土壙、柱穴を検出した。SD201は東西方向の浅い溝状遺構で、幅0.6m前後である。肥前磁器、平瓦の破片が出土した。SK208は一辺0.5m、深さ20㎝の土壙である。SP202～207、SP209～213は、一辺0.15～0.4mの柱穴あるいは小穴で、SP209からは18世紀中頃の肥前磁器皿が出土している。

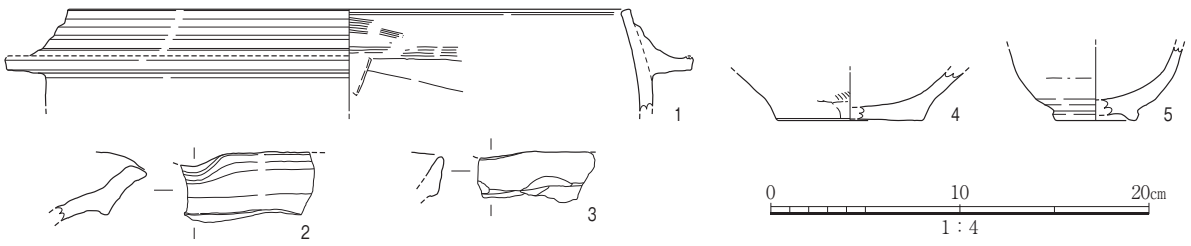


図８　出土遺物実測図

SD301（１～４）、第２層（５）

3）まとめ

今回の調査では、限られた面積ではあったが、中世後期の南北溝を検出することができた。少し距離は離れているが、四天王寺の西側、同旧境内遺跡でも同様の溝群が検出されており、寺域を区画する溝と考えられている。今後の周辺域での調査の進展に期待したい。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所1991、「摂津国分寺跡における範囲確認調査（SK90－２）略報」：『平成２年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.61－65

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「養父孝乃介氏の建設工事に伴う発掘調査（SK96－９）」：『平成８年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.75－79

大阪文化財研究所2015、「SK88－５次調査」：『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』、pp.55－58

大阪文化財研究所2017、「天王寺区国分町73－２における建設工事に伴う摂津国分寺跡発掘調査（SK16－１）報告書」

天王寺区空清町２－２の一部における建設工事に伴う
宰相山遺跡発掘調査(SS17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区空清町２－２の一部
調 査 面 積　　約193㎡
調 査 期 間　　平成29年４月19日～平成29年５月２日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工

1）調査に至る経緯と経過

宰相山遺跡は上町台地の東縁に位置し、遺跡東方で台地を構成する上町層が沖積平野の下に沈む地域に立地する。宰相山遺跡の北辺は、上町台地を下刻して東に開く開析谷である清水谷に画されており、大坂城跡の南東に接し、難波京朱雀大路跡が西側を南北に延びている。宰相山遺跡は1938年に市営真田山プールの建設に際して発掘が行われ、船材とされる木材や、重圏文軒丸瓦などの遺物が出土して遺跡として認知されるようになった[平林悦治1938]。1995年度には上記調査地の東隣でSS95－２次調査が行われ、縄文時代早期から近世にかけての各時代の遺構や遺物が発見された[大阪文化財研究所2015]。近年では、大坂冬ノ陣の際の「真田出丸」を明星高校敷地に比定する説が有力となり、注目されている。

調査地は難波京朱雀大路跡の東約70mで、明星高校からは道路を隔てて西に隣接する（図１・２）。北側は西南西から東北東方向への方位をもつ帯状の街区であるが、これは清水谷の谷筋に当る。本調査では、東西18m、南北8.4mの調査区を設定した。第１層から第３層までを重機を用いて掘削し、以後は人力により、第５層（地山層）上面で遺構を検出、掘削した。地層と遺構の掘削では遺物の捕集に努め、適宜に写真撮影、実測図作成によって記録保存を図った。また、第５層上面で、調査区の北西に清水谷の一部が発見されたため、大阪市教育委員会文化財保護課の指示により、42㎡の拡張を行った。基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値（東京湾平均海水面値）で、TP+○mと記した。

2）調査の結果

図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

ｉ)層序と地形(図３・４、図版上・中)

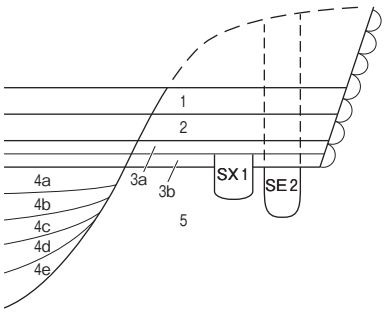


図３　地層と遺構の関係図

調査地の現況地形は平坦であったが、南側は高さ約2.5mの石垣を介して高くなっていた。東側も道路から擁壁を介して調査区側が１～２m低くなっており、大勢としては、調査地の北を東西に延びる清水谷へ向う斜面にある。南側・東側の段差からみても北へ下がる斜面を雛壇状に切土して平地を造成したことは明らかであった。なお、南側の石垣は広範囲に被熱して赤変しており、これを第二次世界大戦時の空襲による火災の痕跡と捉えれば、平地造成は近代以前と考えることができた。

以下、主に調査区北壁の地層断面に基づいて層序を述べる。

第１層：灰色瓦礫混り砂からなり、現地表面を構成する現代の整地層である。層厚は約20～60cmであった。調査区東部では本層直下で地山層が検出された。

第２層：明黄褐色砂礫からなり、現代の整地層である。層厚は平均約10cmで、本層を埋土とする遺構内では約50cmを測った。

第３層：第二次世界大戦を前後する時期の整地層で、２層に分かれた。

第3a層はにぶい黄色細礫混り粗粒砂からなり、層厚は５～10cmで、上部が土壌化してわずかに暗色を呈する部分があった。本層を埋土とする遺構には焼土を含むものが多く、空襲による火災に遭ったものとみられる。

第3b層はにぶい黄色細礫混り砂からなり、層厚は約10cmで、上部が土壌化してわずかに暗色を呈する部分があった。後述する防空壕SX１は本層上面から掘り込まれていた。

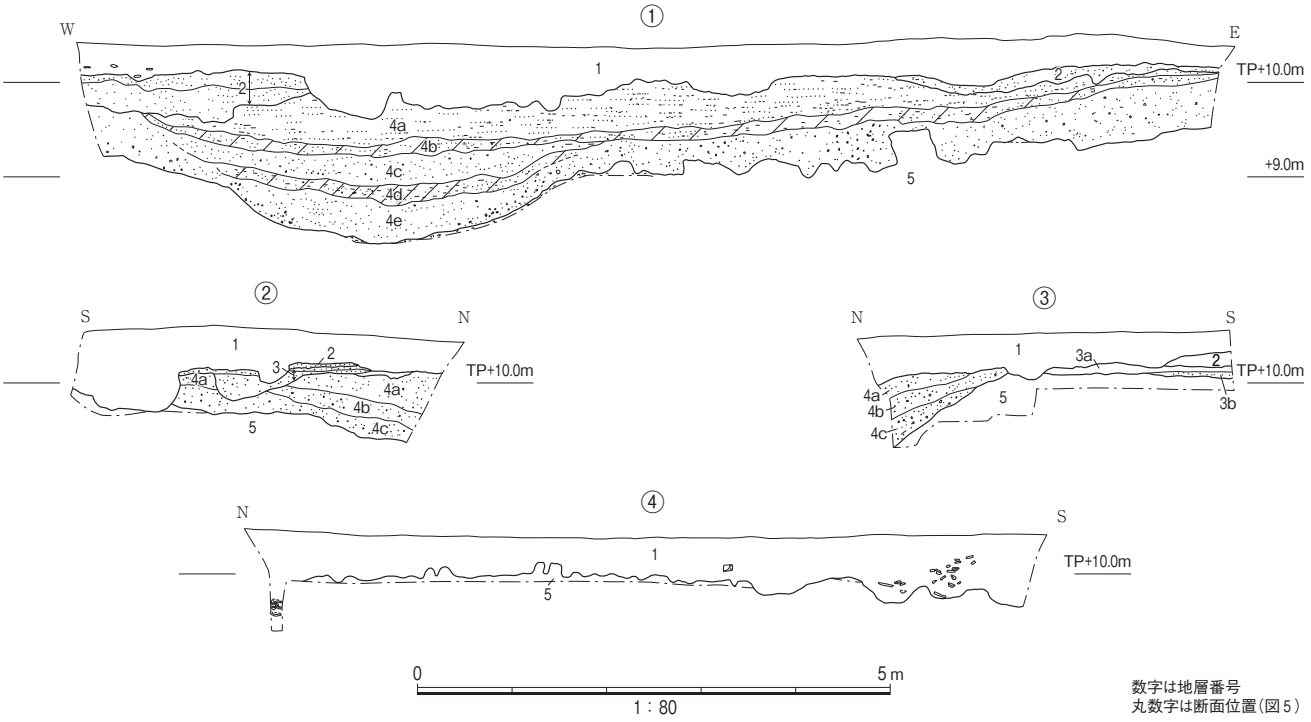


図４　地層断面図

第４層：地山層（第５層）上面で検出された谷の埋土で５層に細分することができた。

第4a層は黄褐色細礫混り中粒～細粒砂からなり、層厚は最大で50㎝であった。ラミナの薄層が観察でき、谷内に土砂が流入して堆積したものとみられた。

第4b層はオリーブ褐色シルト質砂からなり、層厚は約10㎝であった。下位層が土壌化したもので、わずかに暗色を帯びていた。

第4c層は黄褐色細礫混り砂からなり、谷の中央付近で最も層厚が厚く、約30㎝であった。ラミナは顕著ではなかったが、細礫～粗粒砂が横方向に並ぶ箇所が観察されたことから自然堆積したものと判断した。

第4d層は黄褐色細礫を含むシルト質砂からなり、谷の中央付近で最も層厚が厚く、20㎝であった。下位層が土壌化したもので、わずかに暗色化し、谷の肩方向に向っては層界が不明瞭になっていた。

第4e層は黄褐色細礫混り砂～大礫混り中粒～粗粒砂からなり、層厚は最大で約50㎝であった。大礫を混じる粗粒な堆積物は谷肩が崩れながら堆積したものとみられた。一方、比較的細粒な堆積物は谷の中央付近でみられ、崩落した土砂がさらに中央部に流れ込んで堆積したものとみられた。

第５層：明黄褐色砂礫からなる地山層である。粗粒な堆積物からなること、ラミナ構造が顕著であることから地山層の上部が失われた状態とみられ、上述の切土造成がその原因とみられる。

ⅱ）遺構と遺物（図５～８、図版中・下）

遺構検出は第５層上面で行い、調査区の北辺で谷が検出されたほか、調査区西部で土壙および小穴群、中央部で防空壕SX１と井戸SE２を確認した。

谷　東西12m、南北６mにわたって検出され、北に向って深さを増し、最も深い箇所で0.9mであった。谷への落込みは東西に延びており、調査区北側を東西に走る清水谷の南の落ちに当るとみてよい。谷内の埋土は、先述のように自然堆積したものばかりで、人為的に埋められたことはなかった。出土遺物からみて第４層の年代は縄文時代から奈良時代で、谷の上部が遺存しないので確たることはわからないが、奈良時代には谷の縁辺部はかなり埋まっていたと考えられる。

谷内の第４層からは縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器のほか、陶質土器・土馬が出土した（図６）。１は縄文土器深鉢の口縁部で、口縁上端部にキザミメを施し、口縁部外面には波状にD字状刺突文を施す。調整は内面・外面ともに貝殻条痕である。縄文時代早期末の茅山下層式ないしは粕畑式に属するものであろう（註１）。２は弥生土器の高杯脚部で、円形のスカシ孔を有する。弥生時代後期であろう。３は古式土師器の壺口縁部で、二重口縁壺の可能性がある。４は陶質土器壺で、体部外面に螺旋状沈線を施す。５～11は須恵器である。５は杯身で、TK47型式に属する。６・７は鉢形の器台とその脚部である。８は壺の体部である。９は壺で、完形で出土した。やや軟質の焼成で、器壁が厚く、体部下半をヘラケズリする。10は杯蓋で、天井部に回転ヘラケズリ痕が見られる。TK209型式の古相に属する。11は甕の口縁部で、外面にカキメを施す。12・13は土師器杯Ａである。内面には斜放射状暗文を施す。14～20は土馬である。胎土の特徴からみて、14～18で一個体、19･20で一個体であったと考えられる。14は頭部である。目と鼻を刺突によって表現し、口は横方向に篦状工具で窪ませている。額から首にかけては面繁を線刻で表現し、装飾を円形の刺突で表わす。たてがみは立体的に作

り出すが、上部は欠失する。15は胴の一部で、鞍とみられる線刻と障泥上部の装飾表現が見られる。16は前足とみられる破片である。文様はない。17は右後足で、円形の連続刺突文で尻繋を表現し、線刻で杏葉を表わしている。脚の付け根に革帯を表現する線刻を施している。以上の胎土は砂粒を少量含み、色調は赤褐～黒褐色で、黒斑を有することから野焼であろう。19は鞍部分の破片で、前輪と後輪を立体的に表現している。鞍橋部は円形刺突文によって装飾的に表現されている。20は足の破片で、文様はない。19・20の色調は黄褐色で、胎土には細かな砂粒を多く含み、やや軟質の焼成である。これらの土馬は古墳時代後期に属するものであろう。

以上、谷出土遺物は谷肩・埋土の崩落や再堆積の影響で本来の地層との関係に乱れはあるが、概ね第4a・第4b層出土のものは飛鳥～奈良時代に属し、最も新しい遺物は杯13で８世紀前半である。第4c～4e層出土のものは弥生時代から古墳時代の６世紀代までに属するが、５世紀代の遺物が最も多く、

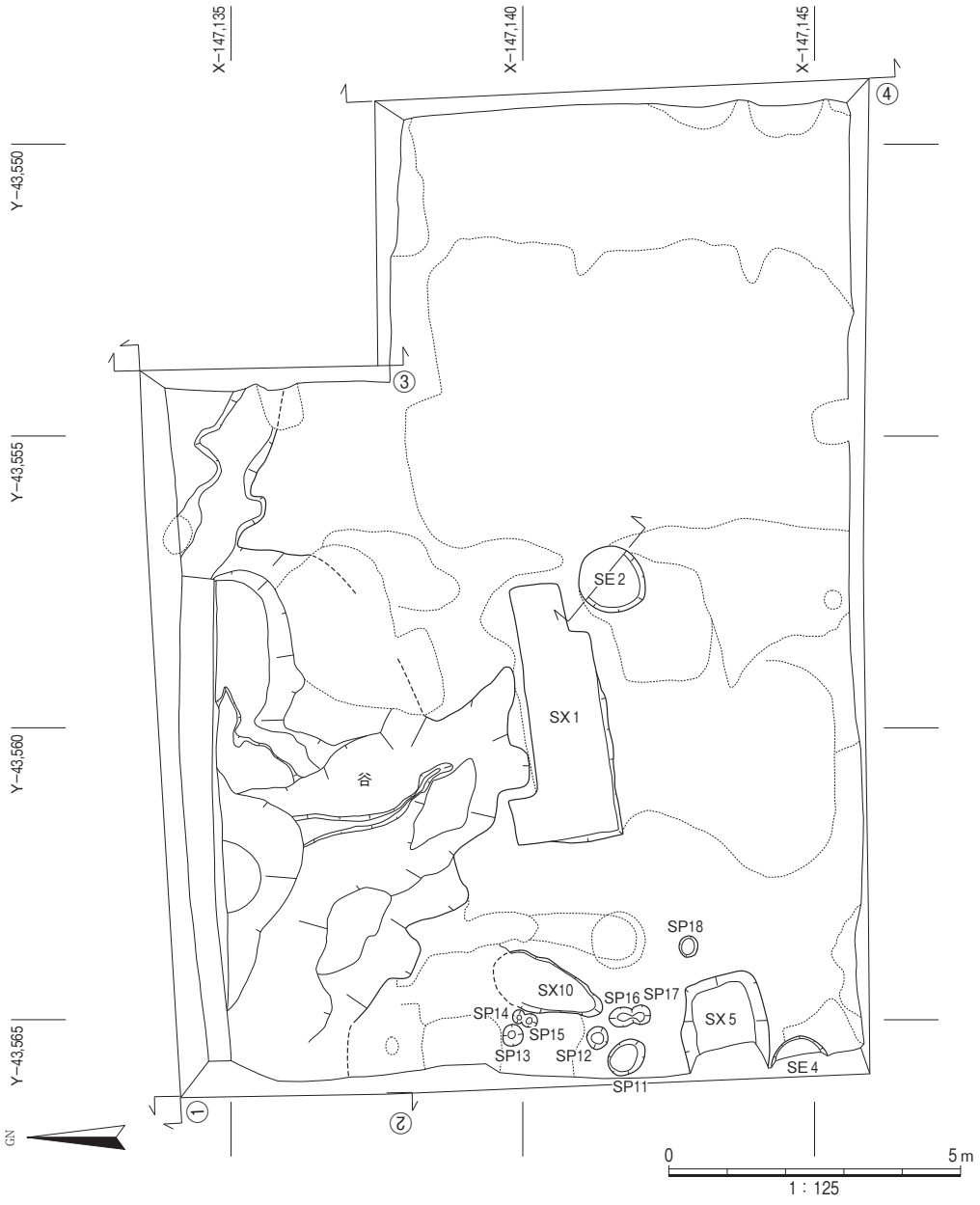


図５　遺構平面図

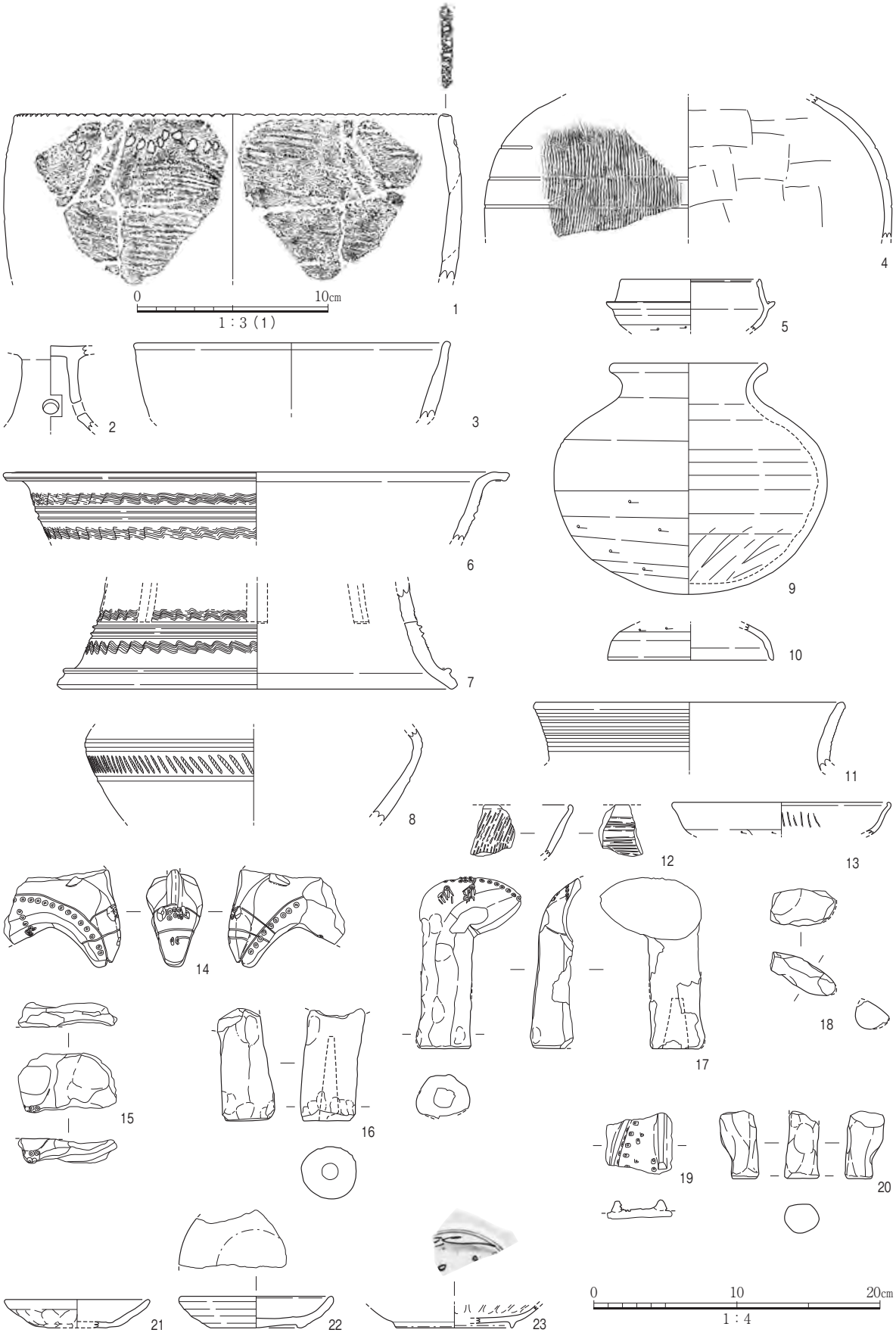


図６　遺物実測図

第４層一括（１・10・14・19・20）、第4a層(13)、第4b層(12・15)、第4a～第4b層(11)、第4c層（２・５～７・９・16～18)、第4b～第4c層（８）、第4c～第4d層（４）、第4e層（３）、SE２(21～23)

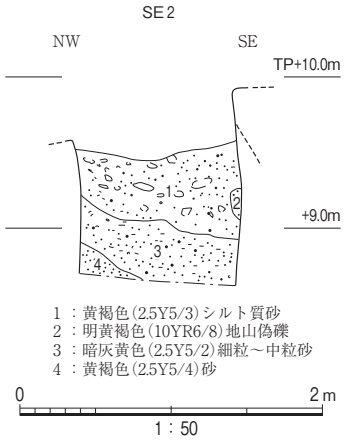


図7　SE2断面図

最も新しい遺物は壺9とみられる。縄文土器1も本来第4e層に含まれていたものであろう。

SE2　円形の平面形をもつ井戸で、直径は1.1m、深さは1.2mまで掘削したが、底には達していない。埋土はシルト質砂～砂で、人為的に埋められていた。遺物は土師器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・中国産青花のほか、丸・平瓦、金属製品が出土した。21は土師器皿である。口縁部外面にはナデを施す。22は瀬戸美濃焼の丸皿で、底部内面は無釉である。23は中国産青花の皿である。これらの遺物からみて本遺構の年代は豊臣後期に求められる。

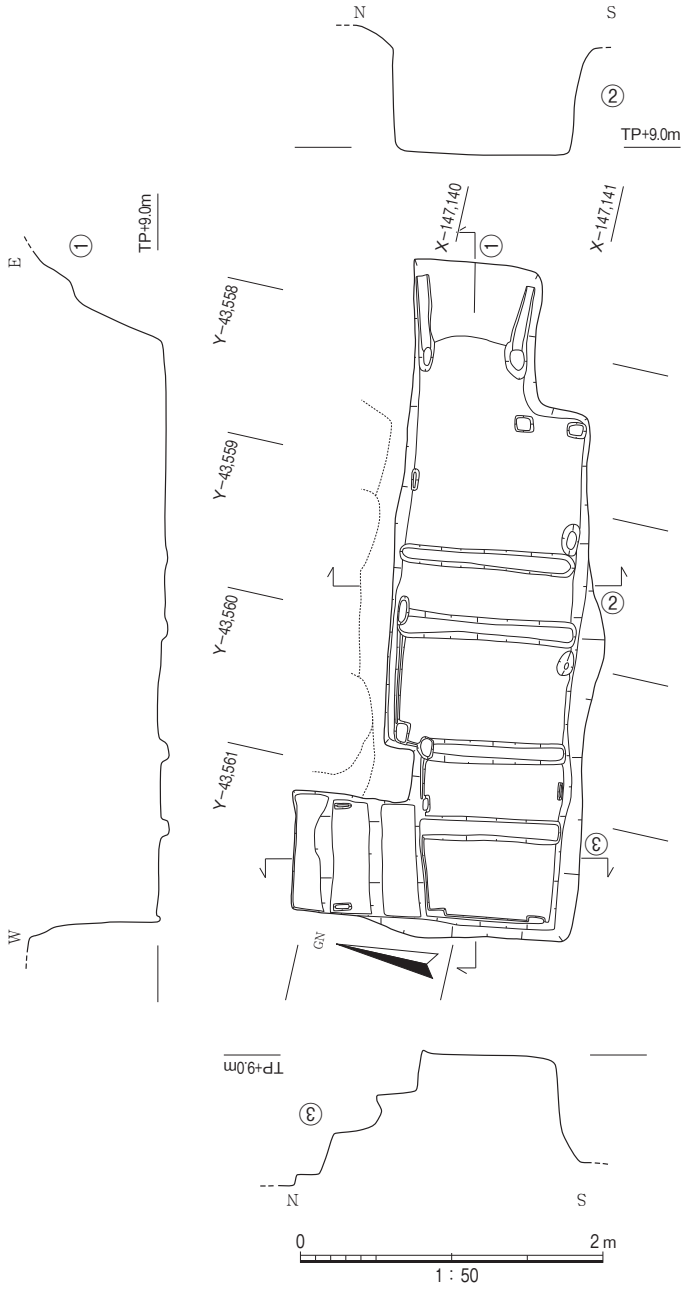


図8　SX1平面断面図

SX1　東西4.4m、南北1.9m、現存する深さ0.8mで、東西に長軸をもつ防空壕である。放棄する際に内部で火を焚いてゴミなどを焼却しており、壁面が赤変したり、煤けていたりしていた。入口は北西と東の2箇所にある。北西のものは地山を削り出して3段の階段を設えている。東の入口は急なスロープになっており、その左右には角材の痕跡が残っていることから、梯子を設置して出入りしたものとみられる。主室は東西3.4m、幅は1.4mであるが、西側の入口に接する部分は1.1mとやや狭くなっている。床面には、主軸に直交する方向で幅15cmほどの角材が敷かれていた圧痕があり、一部に炭化した角材が遺存した。これは根太の痕跡で、この上に板材の床が張られていたとみられる。主室床面の壁際には、10～20cmの柱の痕跡が巡っており、壁との間には幅2～3cmの細い溝が観察される部分があった。これは板材の圧痕で、柱を立て、土壁との間に壁材を固定したものである。実際に壁材が炭化して遺存する箇所があった。天井の構造は不明であるが、柱が雁行して配置されており、ジグザグに梁を架けたか、あるい

は桁材を介して梁を架けて天井を支持したものとみられる。埋土は灰色砂で、焼却後に埋められていた。

調査区の西辺で検出された土壙や井戸、小穴群も近代のものであり、SX１と近い時期のものである。

以上、調査地の平坦部分で発見された遺構は、谷の他に豊臣後期と近代のものがあることになる。近代のものはその分布が平面的な広がりをもつことから、谷に向う斜面を雛壇造成した時期はこれらに近いものと考えられる。南の石垣にみられた被熱痕も併せて考えれば、それが戦前に行われたとみるのが妥当であろう。豊臣後期の遺構は一基のみで、この時期に平地造成が行われたならば、周辺にもっと同時期の遺構があって然るべきである。それがないということは、豊臣期には斜面はあってその上に遺構群が展開し、そこから掘り込まれた特に深いSE２のような遺構が削平されずに残ったと考えられるのである。

３）まとめと若干の考察

・今回の調査地は清水谷の南斜面に当るが、近代に切土をして平地を造成したものと考えられた。近代の遺構には空襲による火災の痕跡がみられた。

・近世の遺構は豊臣後期の井戸１基のみが発見された。本来、清水谷斜面上にあった遺構群のうち、特に深い遺構のみが残ったものとみられる。真田丸と直接に関連しそうな遺構・遺物は発見されなかった。

・清水谷の南側の肩部を検出した。他の遺構と同様に上部を削平されているとみるべきであるが、谷内の堆積層を確認し、各層から遺物を得ることができた。遺物の検討から、これらの堆積層の年代は縄文時代早期末から奈良時代である。特筆すべき遺物としては縄文時代早期末の土器と古墳時代の土馬がある。縄文時代早期の土器は大阪市内では出土例が少ない。土馬は三繋や鞍、障泥、杏葉までを表現する例としては珍しいものである。

堆積層はすべて自然堆積したもので、この時代の中では人為的な谷埋め工事は行われていなかった。当調査地は、７～８世紀の難波京中心大路の東70mに当り、メインストリートに面して建物などが特に荘厳された地域に当る。しかし、今回の調査成果では谷に対して積極的な土地開発が行われた痕跡はみられなかった。このことは難波京やその中心大路の整備状況に係る重要な事柄と考えられるが、その解釈については、今後の調査成果の蓄積を待って、慎重に行っていくべきであろう。

註）

（１）大阪歴史博物館松尾信裕氏のご教示による。

引用・参考文献）

大阪文化財研究所2015、「SS95－２次調査」：『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』、pp.27－41

平林悦治1938、「大阪市内発掘刳船伴出の木製盤」：『考古学雑誌』第28巻第11号、日本考古学協会

天王寺区勝山二丁目333における建設工事に伴う
四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区勝山２丁目333
調 査 面 積　　約17㎡
調 査 期 間　　平成29年８月３日～８月９日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長 高橋工、積山洋

1）調査に至る経緯と経過

調査地は摂河泉を代表する古刹・四天王寺の東門から南南東100m余に位置している（図１）。この地は四天王寺東方に遺存する難波京の条坊制地割が展開する地域に当り、古代から中世、近世にいたる各時代の遺構・遺物が検出されている。

東隣の敷地で行われた2007年度のST07－２次調査では13世紀の東西溝かとみられる遺構などが検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。またこの北側で行われたST16－２次・96－１次調査では中世に属する東西方向の堀跡や井戸跡などが多数発見されている[大阪文化財研究所2017]。

調査地で大阪市教育委員会が行った試掘調査で、当該地点がST07－２次調査と同様の谷地形に当り、地表下約1.7m以下の深さで遺物包含層が検出されたことから、発掘調査を実施することとなった。調査は比較的遺跡の残存状況が良いと思われる敷地の中央～南部で、東西４m×南北６m、計24㎡の調査区が計画されたが、実際には土置き場が確保できず、南北4.4mと調査区を縮小することとなった（図２）。調査期間は上にあげたとおりである。建設工事の深度との関係上、調査深度は地山の上町層には達していない。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を１/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）を用いて TP+〇mと表記した。

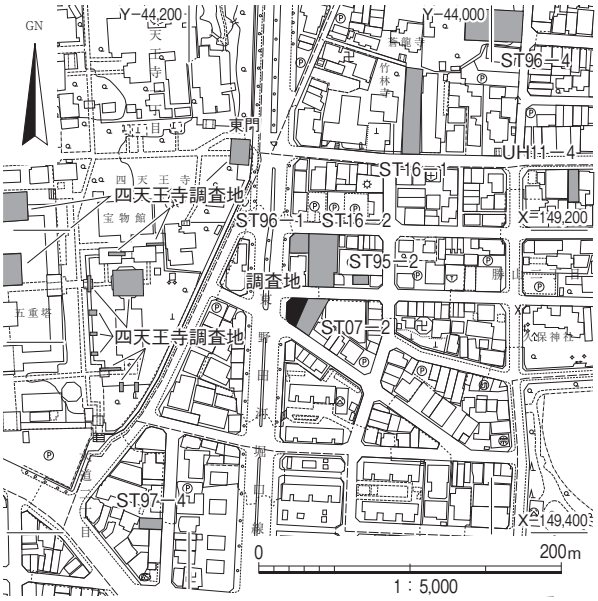


図１　調査地位置図

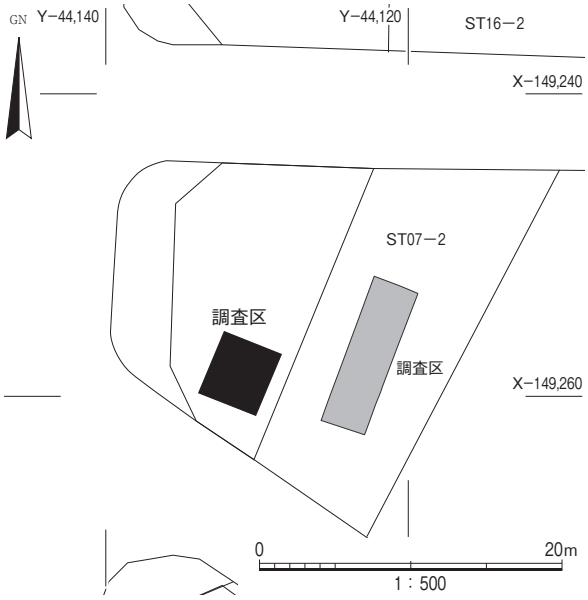


図２　調査区位置図

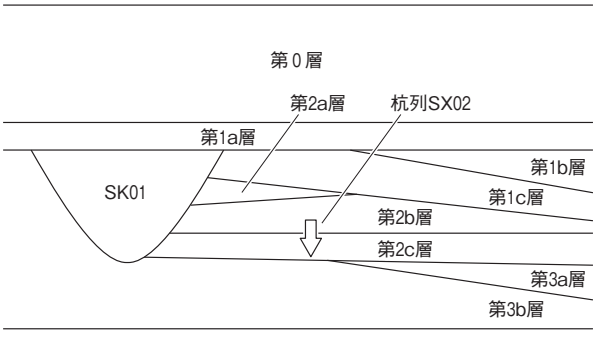


図３　地層と遺構の関係図

２)調査の結果

ⅰ)層序(図３・４)

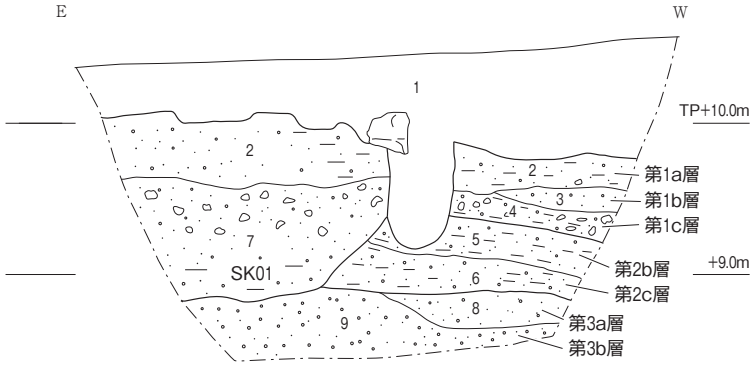
調査地の現地形は北西から南東に向かって低く傾斜している。調査開始時には第０層から第2a層までを重機で掘削した。

第０層：近現代の攪乱層である。TP+10.4～10.5mの現地表面から厚さ40～80cmを測る。

第１層：西向きに低く傾斜しており、３層に細分される。第1a・1b層は暗褐色～にぶい黄褐色の礫・砂混りシルト層で、いずれも作土層である。厚さは第1a層が20～40cm、第1b層は20cm以下で、調査区の南東部には堆積していなかった。第1c層は礫・砂・シルトなどの偽礫からなる厚さ５～20cmの盛土層である。

第２層：本層も西向きに低く傾斜しており、３層に細分された。第2a層は図４の範囲にはなく、調査区北東部に分布していた褐色(10YR4/4)シルト混り礫・砂の盛土層で、厚さは25cm以下である。第2b・2c層は黄褐色の礫・砂混りシルト層で、いずれも作土層とみられる。厚さは第2b層が20～30cm、第2c層は15～30cmであった。遺物から、第2b層は15世紀末～豊臣期(16世紀末～17世紀初頭)の頃、第2c層は15世紀頃とみられる。

第３層：２層に細分される。第3a層は暗灰黄色砂礫層で、ラミナは観察されないが、下位の第3b層に由来する砂礫とみられる。調査区の南西部に分布し、厚さは30cm以下であった。第3b層は黄褐色砂礫層で、ラミナが観察される水成層であった。最大層厚約40cmで、調査深度のTP+8.5mよりさらに深く連続していた。古代や12～13世紀の遺物を含むが、最新の様相をもつ土師器皿(図６－16)などから、15世紀頃とみられる。



1：近現代攪乱層
2：暗褐色(10YR3/3)礫･砂混りシルト
3：にぶい黄褐色(10YR4/3)礫･砂混りシルト
4：暗褐色(10YR3/3)シルト混り礫･砂
5：灰黄褐色(10YR4/2)礫･砂混りシルト
6：にぶい黄褐色(10YR4/3)礫･砂混りシルト
7：灰黄褐色(10YR4/2)シルト混り礫･砂
　黄褐色(10YR5/8)礫･砂混りシルトの偽礫を含む
8：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂礫
9：黄褐色(2.5Y5/4)砂礫

0　2m
1：50

図４　南壁地層断面図

ⅱ)遺構と遺物(図５～７)

第3b層の遺物　第３層に伴う遺構は発見されなかったが、遺物は第3b層から比較的多く出土している。図６－11は中国産白磁碗、12・13・15・16・23は土師器皿、14は瓦器皿で、古代から中世のも

のであるが、最新の様相を示すのは土師器皿16である。17は東播系須恵器こね鉢、18・22は瓦器椀、19の瓦質土器羽釜は小破片で不明な部分もあるが、河内型の可能性がある。21は砥石である。20および図７－24～30は瓦である。20は丸瓦、24・26～28・30は平瓦、25は軒丸瓦、29は軒平瓦で、20以外は古代に属する。29は磨滅が著しく瓦当部分は剥落している。25は四天王寺の単弁十葉蓮華文軒丸瓦[四天王寺文化財管理室編1985]の66～68・71・73の一群に類似し、これらよりも花弁中央の稜が明瞭である。平瓦の凸面は24・30が縄タタキ、26・28が格子状タタキで、27は平行する縦方向の強いナデでタタキを消している。

以上のうち、19の羽釜が河内型であれば14世紀後半～15世紀のものとみられるが、16の土師器皿は15世紀に属するとみられる。

第２層の遺物

第2c層と第2b層から遺物の出土をみた。第2c層出土の土器は図６－７～10、第2b層出土は同１～６である。第2c層の土器は、7が土師器皿、8が瓦器椀、9が土師器羽釜、10が東播系須恵器こね鉢である。これらは12～13世紀に属し、地層の年代を示す遺物ではない。第2b層では、１が中国産青花、２は火を受けて不明な部分もあるが、中国産青磁の可能性があり、３も中国産青磁碗である。４は土師器皿、５は中国産青磁皿、６は瓦器鉢である。このうち１がもっとも新しく、豊臣期に属するが、他の遺物は15世紀頃のものが多い。

杭列SX02　第2b層の上面で発見した杭列で、北北東～南南西の方向をとっている(図５)。杭の多

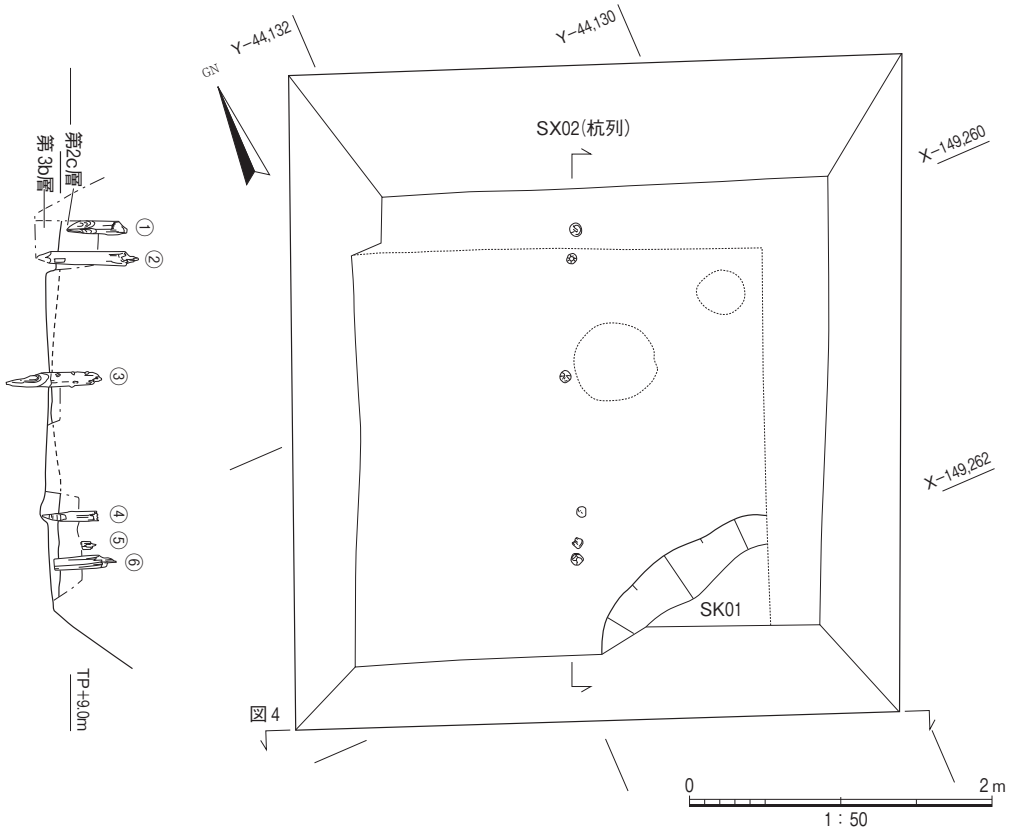


図５　遺構平面図

SK01は第1c層上面、SX02は打設面不明

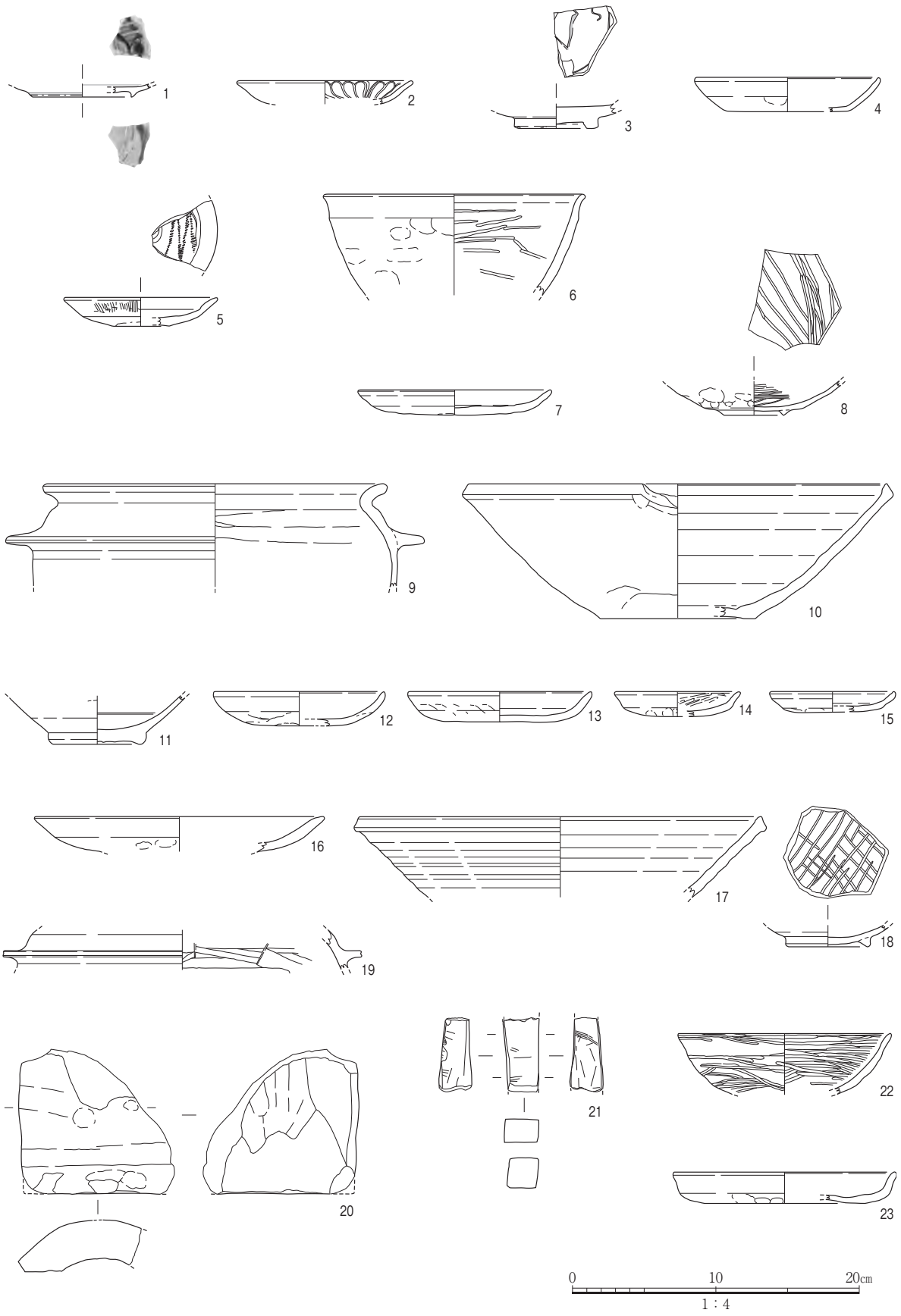


図６　出土遺物実測図（１）

第2b層（１～６）、第2c層（７～10）、第3b層(11～23)

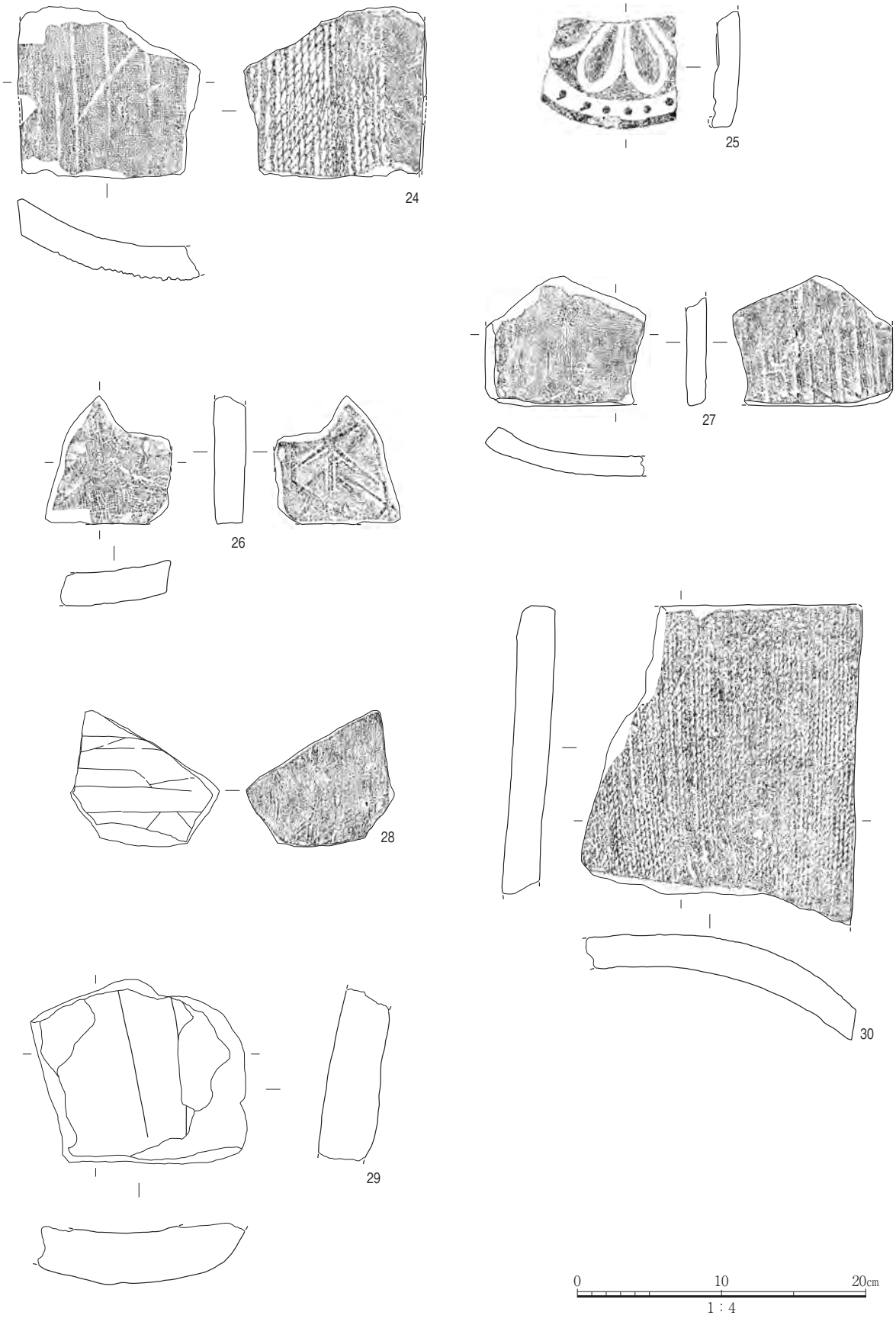


図７　出土遺物実測図（２）
第3b層(24～30)

くは下端が第3b層に達しているが、①のように第2c層内で終っている例もある。この杭列が本来どの層位で設けられたものであるかは、第2b層より上層を機械で掘削したため不明である。

土壙SK01　調査区の南端で部分的に検出した土壙で、深さは約80㎝である。人為的に埋められていた。この土壙は図４では掘込み面が不明であるが、東壁断面の観察によれば、第1c層上面からである。東播系須恵器の破片などが出土しているが、遺構の年代を直接示すものとは考えにくく、本来の年代は不明である。

３）まとめ

今回の調査では、東隣で行われたST07－２次調査との関連がポイントであったが、その調査で東西方向の堀かと推定されたSX４はこちらでは検出されなかった。またST07－２次調査のような13世紀の遺構も発見されていない。

ST07－２次調査ではTP+9.9mで地山の上町層が検出されているのに対し、今回調査地ではTP+8.5mまで掘り下げても地山は検出されず、かつ各層は西に低く傾斜する傾向がみられた。調査地の西、四天王寺との間には南東に開く埋没谷「四天王寺東門谷」があったことが判明している[趙哲済ほか2014]が、今回の調査地はちょうどその谷の東側斜面、ST07－２次調査地は斜面上端部付近に位置しているとみられる。このような地形復原資料を得られたことが、今回の調査の成果と言える。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査（ST07－２）報告書」：『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.69－74

大阪文化財研究所2017、『天王寺区勝山二丁目323－１他における建設工事に伴う四天王寺旧境内遺跡発掘調査（ST16－２）報告書』

四天王寺文化財管理室編1985、『四天王寺古瓦聚成』、柏書房、pp.14・136

趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」『平成21～25年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』巻頭図版１～７　pp.９－22

天王寺区石ケ辻町37－１他における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区石ケ辻町37－１他
調 査 面 積　　139㎡
調 査 期 間　　平成29年５月10日～平成29年５月16日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工

1）調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は難波宮跡と四天王寺の間の上町台地上に立地し、東には難波京朱雀大路跡を介して細工谷遺跡・摂津国分寺跡などが隣接する。調査地は難波京朱雀大路跡とされる南北道路推定地の西50mに当る（図１）。本調査地は上町台地の東縁部にあり、本来、高低差の激しい地形上にある。調査地から難波京朱雀大路跡をはさんで東側は、SD06－２・３次調査地で、北東方向から台地に入り込む埋没谷である「五合谷」が検出されており、その谷筋は現況地形にも名残を留める［大阪市文化財協会2007］。

周辺での既往の調査では、細工谷遺跡の成果が注目される。調査地の南東約200mで行われたSD96－１・97－１次では、国内最古の貨幣とされる７世紀の富本銭や奈良時代の和同開珎の枝銭、「百済尼」、「尼寺」と記された墨書土器などが発見され、古代寺院との関係が考えられている［大阪市文化財協会1999］。また、前述のSD06－２・３次調査では、「五合谷」の谷底に、７～８世紀を通じて維持・管理された排水路が発見された。谷は埋め立てられておらず、朱雀大路推定地のすぐ東側に当ることから、古代に大路が敷設されたことについて疑問が呈された。一方、大路推定地西辺に当るNS16－１次調査地では「五合谷」の一部とみられる地形を埋め立てた地層が見つかっているが、その年代については古代に遡る可能性があるとするに留まっている［大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018］。このように、調査地周辺は、大阪の古代史、難波京を考察する上で重要な地域であるといえる。

当地では、大阪市教育委員会によって行われた試掘調査で、地表下1.1mで発掘調査を要する近世以前の遺構面および遺物包含層が発見されたため、本調査は行われることになった。当初に予定されていた調査区は東西13m、南北７mであったが（図２；北区）、東辺のごく一部を除いて前建物解体工

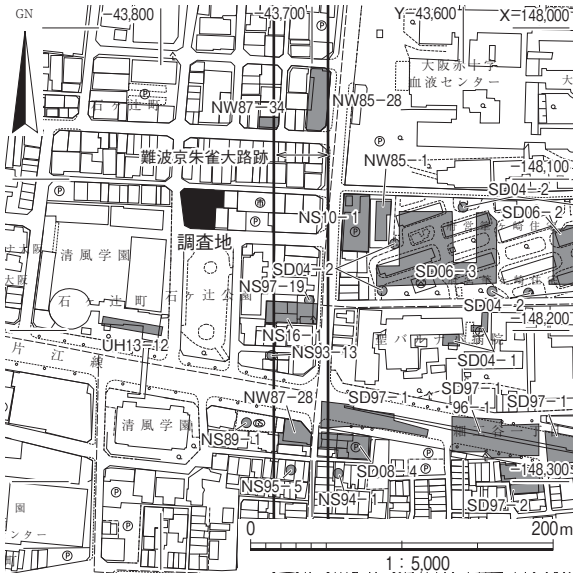


図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

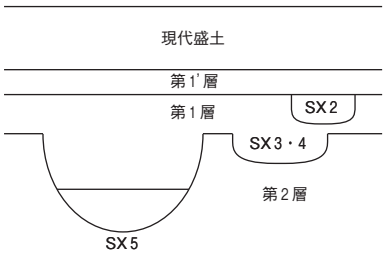


図３　地層と遺構の関係図

事による攪乱が地表下1.8mまで及んでおり、遺構・包含層が遺存しないことが判明した。これを受けて大阪市教育委員会より調査区を拡張する指示があり、南区(東西６ｍ×南北３ｍ)、西区(東西５ｍ×南北６ｍ)を設定し、この順で調査を進めた。

調査において、掘削は現代の地層については重機を用いて行い、そのほかはすべて人力によった。地層ごとに掘削と遺物の捕集を行い、遺構の検出と掘削を行った。進行に応じて、適宜に実測図や写真撮影で記録保存に努めた。本調査で用いた基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値(東京湾平均海水面値)で、TP+○mと記した。

２)調査の結果

ⅰ)層序(図３・４)

調査地の現況地形は平坦で、TP+16m前後の高さであった。調査前の解体工事によって形成された現代整地層の下位で以下の地層を確認した。

第１'層：暗褐色細礫混り砂からなり、下位層を耕起した作土層である。層厚は27㎝で、解体工事の際に攪乱を受け、西区の東壁でごく一部が確認された。

第１層：黄灰色細礫混り砂からなり、地山層を掘り込んだ土採り穴を埋め立て、さらに盛土して平地を造成した際の整地層である。層厚は約50㎝で、土採り穴を埋めた箇所では最大で2.0mであった。上面から土壙状の遺構SX２が掘り込まれているのが北区の東壁・南壁断面で確認された。本層は肥前磁器・関西系陶器の細片を含み、18世紀後半の地層である。

第２層：黄褐色粘土質シルト～細粒砂からなる地山層である。生痕化石であるサンドパイプが顕著にみられ、上方へ細粒化していた。本層上面で土採り穴SX１・３～５が検出された。

ⅱ)遺構と遺物(図５、図版)

遺構検出は、第２層上面で一括して行い、SX１～５を検出した。

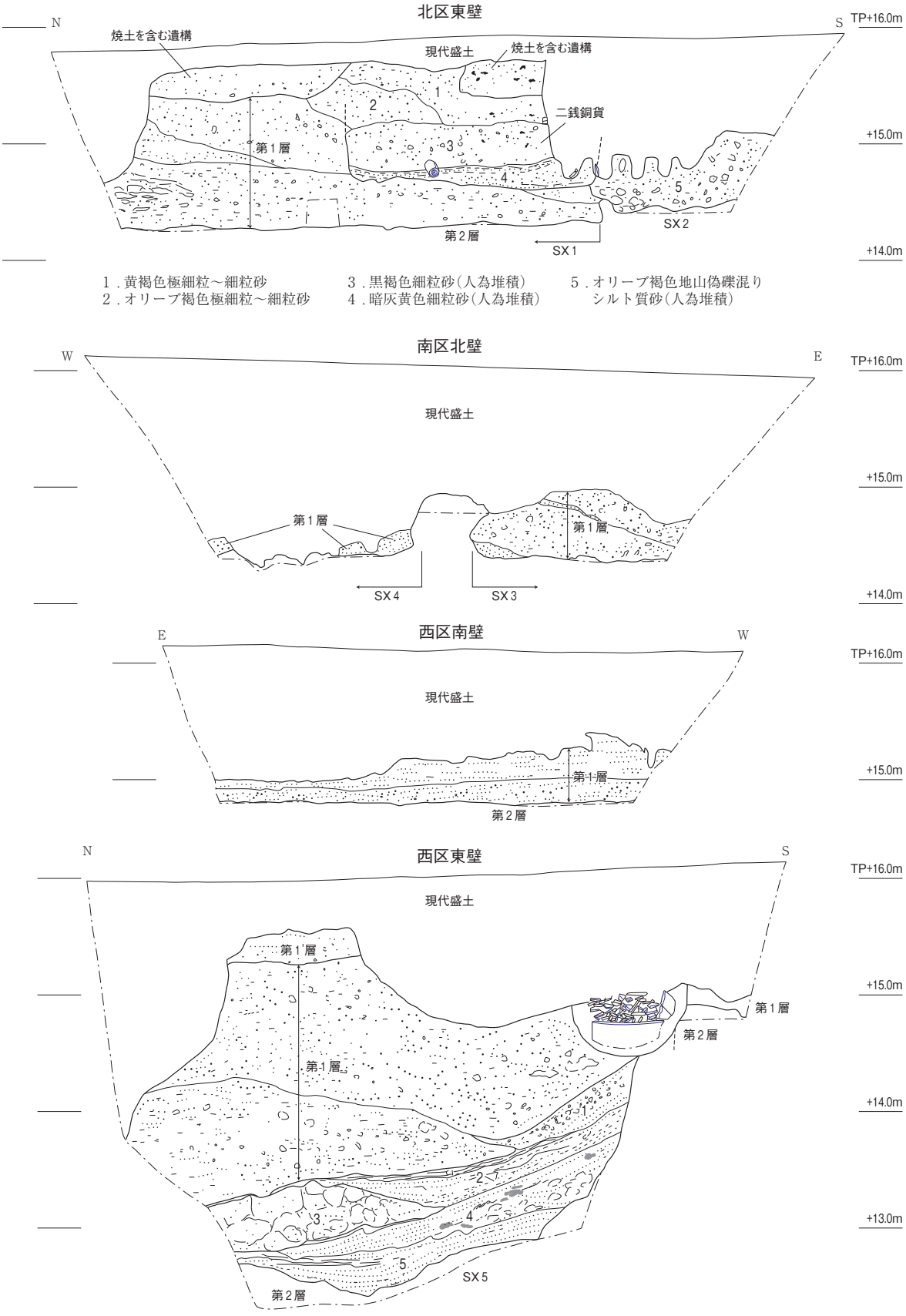
SX１　北区東壁際で検出した土採り穴である。東西1.05m以上、南北3.97m以上で、深さは0.17mであった。第１層で埋められていた。西の肩沿いに約１m間隔で木杭が３本打ち込まれており、土留めの板を抑えたものかと思われた。遺構内には掘削に用いられた鍬状の工具痕がみられた。

SX２　SX１の南に接して検出された土壙である。東西0.50m以上、南北1.20m以上で、深さは約0.1mであった。埋土はオリーブ褐色偽礫混りシルト質砂で人為的に埋められていた。

SX３　南区の東部で検出された土採り穴である。東西2.70m以上、南北2.22m以上で、深さは0.48mであった。第１層で埋められていた。遺構の壁の一部はオーバーハングしていた。

SX４　南区の西部で検出された土採り穴である。東西1.66m以上、南北2.25m以上で、深さは0.55mであった。第１層で埋められていた。

SX５　西区の東部で検出された土採り穴である。東西2.40m以上、南北4.57m以上で、深さは2.48mであった。埋土は上部・下部に分かれ、上部は第１層で、遺構を埋め立てるとともに、その上を最大



1．黄褐色極細粒～細粒砂
2．オリーブ褐色極細粒～細粒砂
3．黒褐色細粒砂(人為堆積)
4．暗灰黄色細粒砂(人為堆積)
5．オリーブ褐色地山偽礫混りシルト質砂(人為堆積)

1．灰オリーブ色粘土(流入)
2．灰オリーブ色シルト～細粒砂(流入)
3．暗黄褐色地山偽礫(崩落)
4．にぶい黄色地山偽礫混りシルト～砂(流入)
5．灰黄色極細粒～細粒砂(滞水)

0　2m
1：50

図4　地層断面図

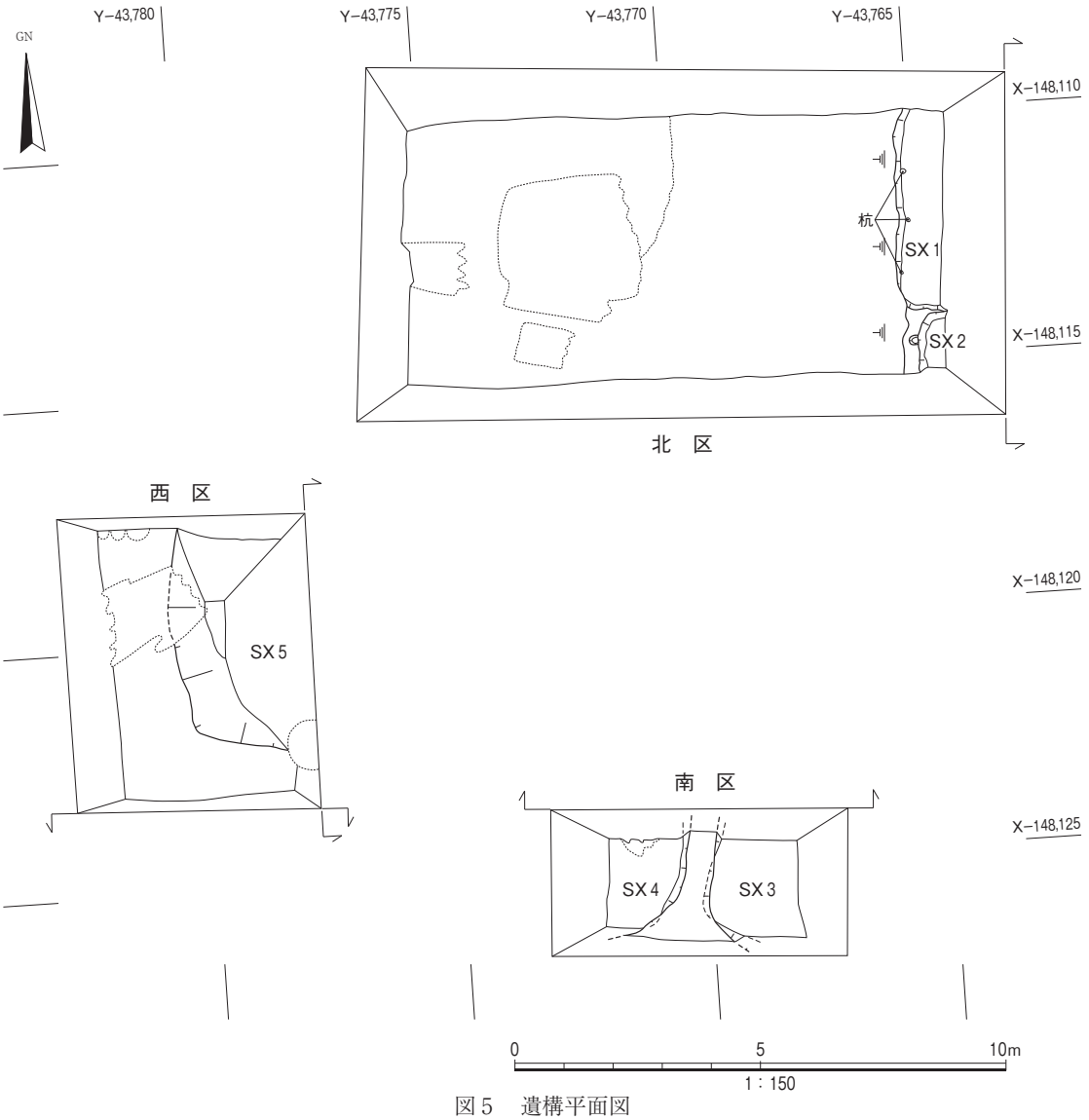


図５　遺構平面図

50cmの厚さで覆っていた。下部はラミナが顕著な自然堆積層からなり、周囲から水が流入して形成されたものとみられた。径20～30cmの地山偽礫層もみられ(図４下の３)、遺構内部が崩落したものとみられた。土採り穴として掘削された後、おそらくは農業用の灌水溜めとして利用されたものであろう。上部より関西系陶器土瓶蓋３(図６)が出土し、18世紀後半の年代が求められる。

SX１・３～５は第１層の年代観から、18世紀後半以降に埋められている。SX２はこれらより掘込み面が上なので後出し、二銭銅貨が出土した土壙(東壁地層断面で確認)に切られるので明治時代以前である。

その他の遺物

SX１からは古代の土師器甕１が出土した。現代整地層からは中世の瓦器碗２が出土した。いずれも本来所属する層準を遊離した遺物である。

３)まとめ

・近世後半の土採り穴を検出した。これらの遺構は、江戸時代後半に「天王寺土」として好んで土壁に

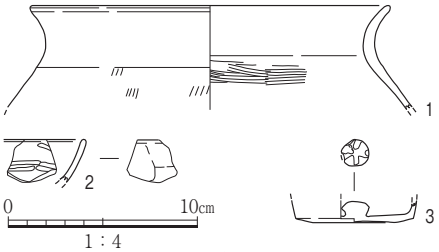


図６　遺物実測図

SX１（１）、現代整地層（２）、SX５（３）

用いられた土を採取した跡である。

・中世や古代の遺物は出土したが、該期に遡る遺構は発見されなかった。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『細工谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

大阪市文化財協会2007、『細工谷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018、「難波京朱雀大路跡発掘調査（NS16－１）報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)』、pp.433－440

天王寺区上本町八丁目303－８他における建設工事に伴う

上本町遺跡発掘調査(UH17－２)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区上本町８丁目303－８他
調 査 面 積　　約90㎡
調 査 期 間　　平成29年６月15日～平成29年６月21日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、平田洋司

1）調査に至る経緯と経過

調査地は南北方向の幹線道路である上町筋沿い、難波片江線から南へ約350mの地点に位置し、上町台地脊梁部の高い部分に当る。周辺では多くの調査がなされており、古代から近世に至るまでの遺構・遺物が多く検出されている。なかでも東南東約200mで行われたUH09－２次調査では、谷をまたいで架けられた南北方向の奈良時代の橋の跡が確認され、この位置が推定条坊ラインに一致することから、難波京における条坊の存在を確実に示す資料として注目された[大阪文化財研究所2010]。また、南南西約200mのNW81－４次調査では、奈良時代の井戸が発見され、「米家」の墨書がある土器が出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983]。

今回の調査地では大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下0.3m以下で近世以前の遺構面・遺物包含層が検出されたことから、調査を実施することとなった。敷地南側に東西15m、南北６mの調査区を設定し、平成29年６月15日より調査を開始した。重機による掘削は遺構部分を除いては地山層である第２層上面までとし、以下は人力による掘削とした。重機による掘削を進めたところ、東北部にコンクリートガラなどを多く含む、深く大きな攪乱が存在し、旧建物基礎解体時のものと判断できたため、その部分は攪乱範囲の確認にとどめ掘削を行わないこととした。途中、適宜に遺構検出・掘削、図面作成、写真撮影を行い調査を進め、６月19日に記録作業を終え、６月21日に機材類の撤収を行い現地における調査を完了した。

以下の本文等に示す標高はT.P.値（東京湾平均海面値）で、TP＋○mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。

図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

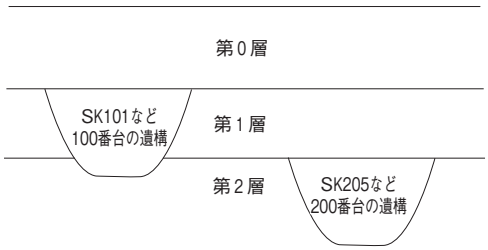


図３　地層と遺構の関係図

２）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４）

調査地の現況地形は解体工事後の整地がなされており、TP+19.0～19.4mでほぼ平坦であるが、調査地から西では急激に西方に下がる。調査では部分的な掘削を含めて、現地表下1.2mまでの地層を確認した。

第０層：現代整地層および攪乱で、層厚は40～70㎝である。多くの地点で本層が直接第２層を覆っていた。

第１層：炭を含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質粗粒砂からなる整地層である。調査区東南部で層厚20㎝で認められるほかは削平を受けてほとんど遺存しない。本層上下の遺構の年代観からは18世紀代の整地層と考えられる。本層上面の遺構としては土壙・小穴がある。

第２層：黄褐色（10YR4/6）中粒～粗粒砂からなるいわゆる地山層である。もっとも残りのよい部分では上部に細礫混り粘土の箇所が確認できた。本層上面の遺構としては土採り穴がある。

ⅱ）遺構と遺物（図４・５、図版）

遺構検出作業は第２層上面で行った。壁面の観察や埋土から、第１層より下位に掘削面があるもの、第１層より上位に掘削面があるものに区分できたため、今回報告では前者については200番台、後者については100番台の遺構番号を付した。

第１層より下位のものとして土採り穴を検出した。

土採り穴としてSK201～213が該当する。重なりが最小限となるよう掘削されていること、底部が平坦であること、一部で確認できたにすぎないが、細礫混り粘土から砂に変化した時点で掘削を停止していること、埋め戻されていること、などが土採り穴の根拠としてあげられよう。TP+10.2～10.4mが掘削底で、台地斜面に合致するよう東へと徐々に低くなっている。埋土は第２層の偽礫を含むシルト質中粒～粗粒砂層である。

SK201～203は南壁沿いで検出した。調査区南へと続くため、南北長は不明であるが、東西長は1.8～2.6mである。遺構の重なりからみた先後関係は（古）SK201→SK202→（新）SK203と東に行くほど新しい。

SK204～209は調査区東南部で検出した。全体がわかるものはないが、東西1.6～2.3m、南北1.7m程度である。先後関係がわかるものは（古）SK207→SK208→（新）SK209である。

SK210～213は調査区北部で検出した。全体がわかるSK212で東西2.0m、南北1.5mである。先後関係は（古）SK210→SK211→SK212→（新）SK213である。

これらの配置を見ると、北で東に振る現在の街区と同じ方位であることがまず注目される。また、東西・南北方向ともに比較的通りがよく、整然と掘削されていることが指摘できる。土採り穴としては小型であることも特徴のひとつであろう。なお、図４では南のSK201と北のSK212・213の間に空間があるように見えるが、この部分は攪乱を受けていることから、本来は分布していた可能性がある。一方、これより西側についても攪乱が多く、遺構は検出されていないが、SK212の西側から調査地南

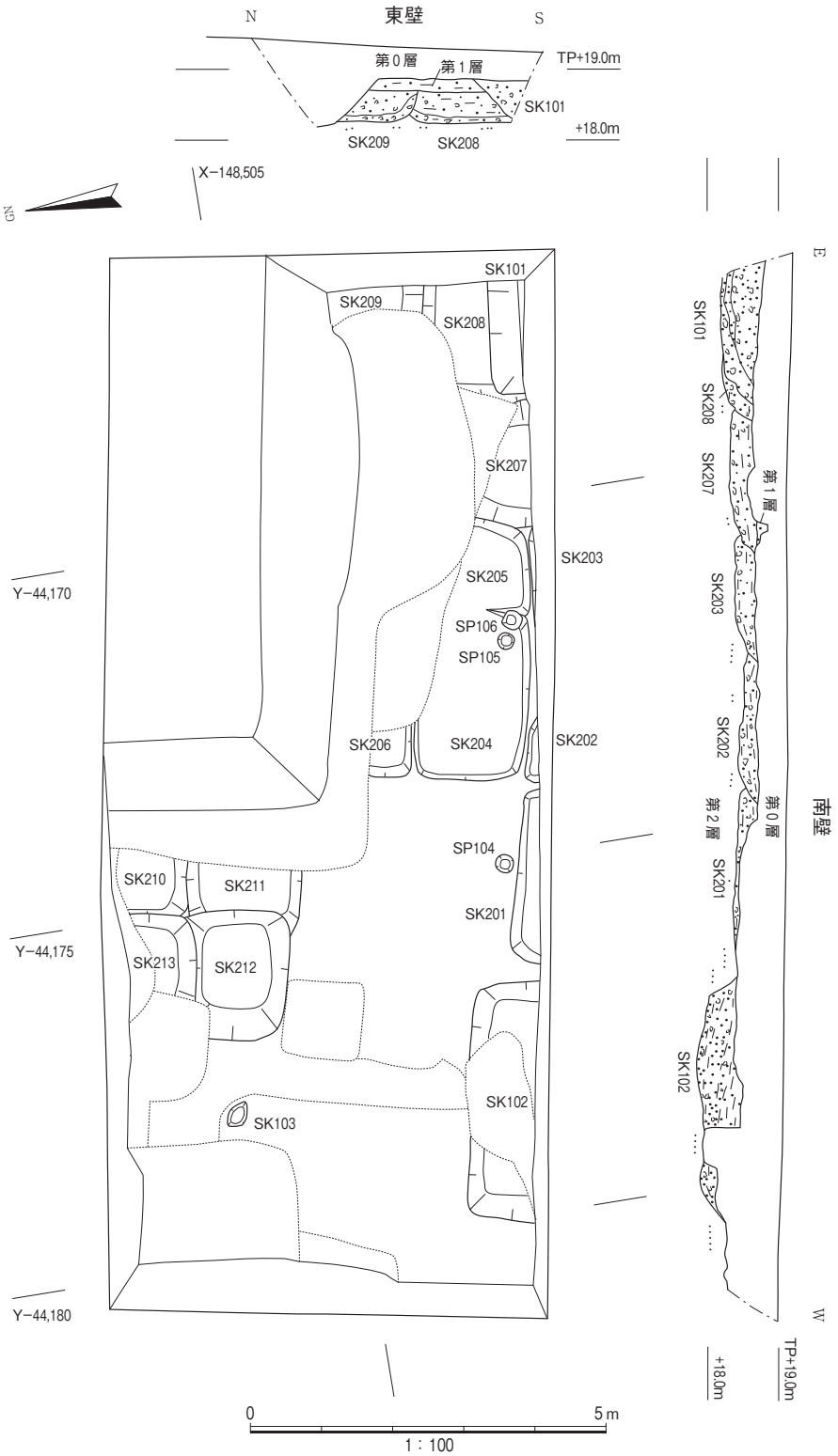


図４　地層断面図・遺構平面図

側にかけて幅0.6m程度で第２層が高く南北方向に遺存する場所がある。この部分でも検出されなかったことから、SK212の西側は土採り穴が分布しないか、少なくとも作業用通路と推定できる余地はあったことは確実である。

土採り穴からの出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器類・瓦等がある。SK208からは須

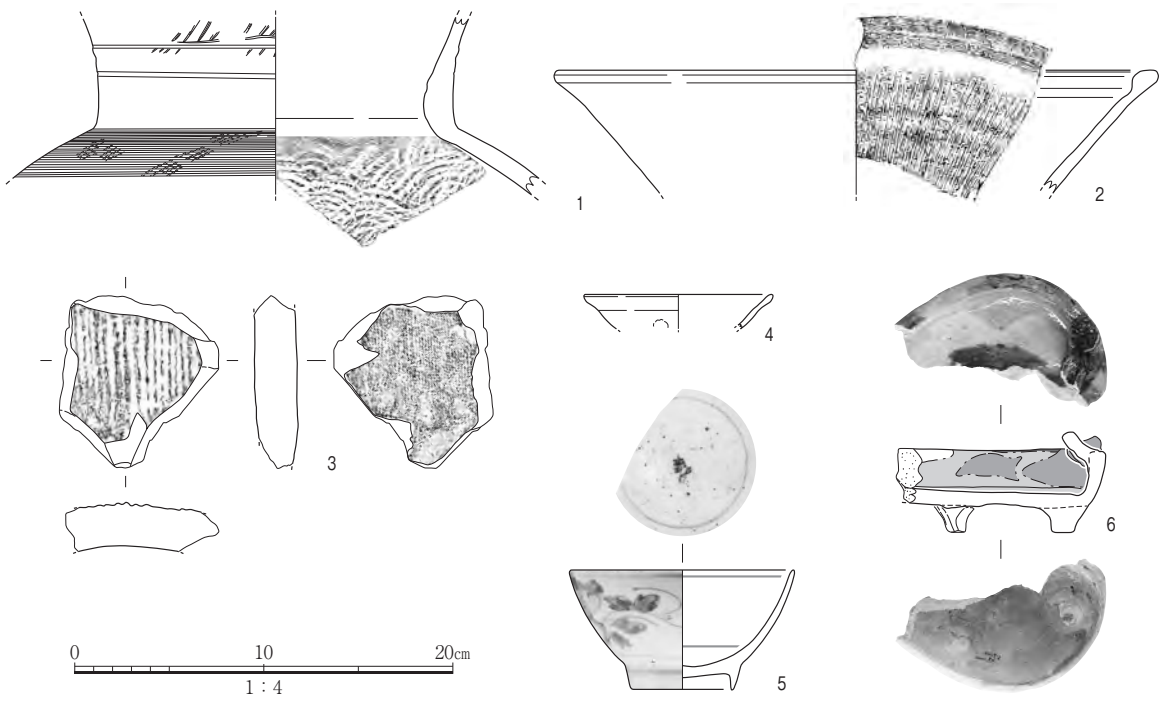


図５　出土遺物実測図
SK208（１・２）、SK212（３）、SK213（４）、SK102（５・６）

恵器甕１、丹波焼擂鉢２が出土した。このうち２は17世紀中葉～後葉に位置付けられる。SK212からは平瓦片３が出土した。土師質で凹面に布目痕、凸面に縄タタキ痕を残す。SK213からは土師器皿４が出土した。細片ではあるが14～15世紀のヘソ皿であろう。他に細片のため図化できていないが、SK201からは関西系陶器片、SK207・212からは肥前磁器細片が出土している。遺構の性格上、出土遺物が遺構の時期を直接示すものではないが、明確に18世紀代に降る遺物はないことから、17世紀代の土採り穴として考えておきたい。なお、出土遺物の主体は細片ではあるが古代の土師器・須恵器片であることから、本来は古代の遺構が周辺に存在していた可能性がある。

第１層より上位の遺構としては土壙SK101～103、小穴SP104～106がある。SK101は調査区東壁での観察結果から、その他の遺構については埋土に第１層の偽礫を含むことから、第１層より上位の遺構と判断した。

SK101　調査区東南隅で検出した。東西2.0m以上、南北0.8m以上、深さ0.6m以上の平面形が方形の土壙である。埋土は第１層以下の偽礫を含む砂主体の埋戻し土である。遺物は出土しなかった。

SK102　調査区西南部で検出した。東西3.4m以上、南北1.2m以上、深さ0.7m以上の平面形が方形の土壙である。埋土は第１層以下の偽礫を含む中粒～粗粒砂とシルト質中粒砂の互層である。土師器・須恵器・丹波焼・関西系陶器・肥前陶磁器・瓦片のほか土人形など、18世紀後半～19世紀前半の遺物が出土した。５は肥前磁器広東碗で18世紀末～19世紀に位置づけられる。６は軟質施釉陶器鉢で緑色釉が掛かる。底部外面は露胎である。17世紀代後葉のものであろう。

SK103　調査区西部で検出した最大長0.4m以上、深さ0.3mの土壙である。平面形が不整形であり、土壙の底付近のみが遺存したものと考えられる。肥前磁器・関西系陶磁器など19世紀前半の遺物が少

量出土した。

SP104～106　調査区南部で検出した小穴である。いずれも直径0.2m、深さ0.1m程度が遺存していた。このうちSP105からは19世紀前半と考えられる土師器灯明皿・関西系陶器片などが出土した。

3）まとめ

今回の調査では17世紀代と推定される土採り穴群を検出した。上本町遺跡の台地脊梁部から斜面にかけてはこれまでの調査でも土採り穴群が検出されており、徳川期には広く土採りの場所として利用されていたことが追認された。今回のように小型の土採り穴を主とするもの、大型を主とするものなど、いくつか構成に差が見られるようであり、その違いが意味するところなど今後検討していく必要があろう。

難波宮期を含む豊臣期以前の遺構については確認することができなかった。遺物は出土していることから、削平を受けた可能性が高い。

引用・参考文献）

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、「難波宮跡（NW81－4次）発掘調査概報」：『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57－62

大阪市文化財協会2010、『上本町遺跡発掘調査報告Ⅰ』

天王寺区北山町１－３における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH17－４)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区北山町１－３
調 査 面 積　　約250㎡
調 査 期 間　　平成29年10月５日～10月25日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、積山 洋

1）調査に至る経緯と経過

調査地は古代の都である難波京のメインストリートとされる「難波京朱雀大路跡」の西約100mに位置している（図１）。周辺では数多くの調査が実施され、京域の条坊制地割の跡や古代の遺物の発見が続いている。また、地形は東に向かって低く傾斜する緩斜面となっている。

当該敷地で大阪市教育委員会が行った南北２箇所の試掘調査では、南側で地山（上町層）が地表下0.7mで検出されるのに対し、北側では地表下1.7mまで掘り下げても地山が検出されなかった。そこで、地山が浅ければ難波京の遺構が残っているとの予想のもとに、敷地の南側で本調査を実施することになった（図２）。調査面積・期間は頭書にあげたとおりである。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）を用いてTP+○mと表記した。なお、本文中の近代に属する遺物の記述は、学芸員小田木富慈美が行った。

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４）

第０層：現代の攪乱層と、その下に累積している近代・現代の地層である。TP+11.4mの現地表から、西端で60㎝、東端で190㎝、中央やや東の深い部分で約300㎝の厚みを測る。

以下の第１～３層はいずれも上町層である。

第１層：西端で確認されたオリーブ褐色の砂礫層である。斜交ラミナが顕著に認められる水成層である。上面が第０層に削られており、残存する厚さは最大60㎝余である。

図１　調査地位置図

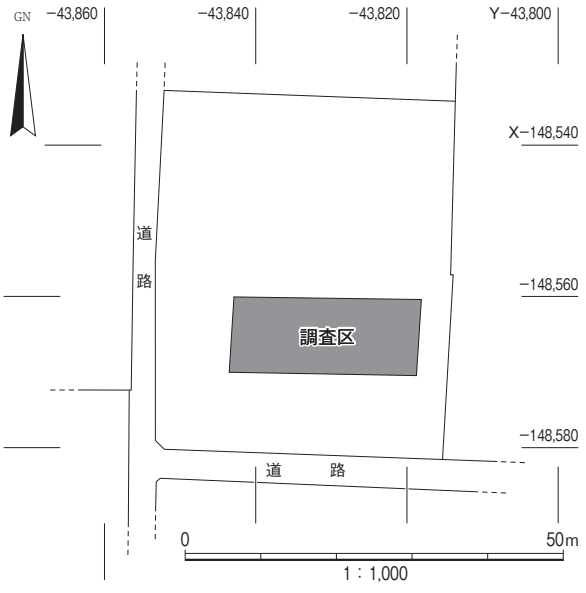


図２　調査区配置図

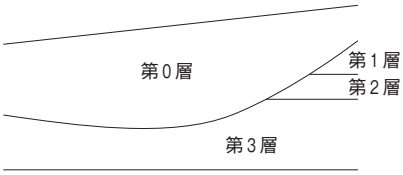


図3　地層と遺構の関係図

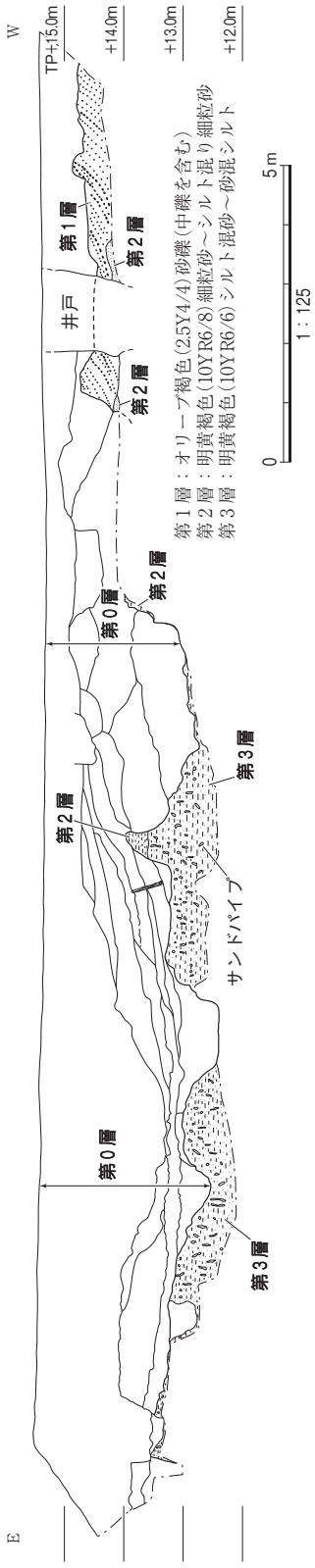


図4　地層断面図

第２層：明黄褐色細粒砂層～シルト混り細粒砂層で、侵食により上面を第１層に削られていた。ラミナははっきりみられなかったが、非常に均質であり、これも水成層とみられる。中央～西側で部分的に検出したのみであるが、TP+14.6～15.3mに堆積していた。

第３層：明黄褐色シルト混り砂～砂混りシルト層で、垂直方向のサンドパイプが顕著にみられる。直径２㎝前後で、カニの巣穴とされる。本層堆積時の環境が潮間帯に属していたことを物語る。層厚は120㎝以上である。

ⅱ)遺構と遺物(図５)

今回の調査では近代・現代の攪乱が著しく、近世以前の遺構は残っていなかった。

以下に第０層出土遺物について述べる。１～４は須恵器で、１・２は杯蓋である。３は杯Bの身、４は壺の体部である。いずれも８世紀を中心とするが、１と３は９世紀初頭まで降るかもしれない。５は土師器の皿で、暗文が残っているので８世紀後半までは降らない。６は中国産青磁碗で、蓮弁文を施す。14～15世紀であろう。７はイギリス産硬質陶器で、鉢または皿の底であろう。底部外面には茶褐色顔料の銅版転写で「IMPERIAL IRONSTONE CHINA」「COCKSON , CHETWYND & Co」と記されていることから、1866年～1872年の間にイングランド西南部のスタッフォードシャーで生産されたものと考えられる。８・９はいずれも近代の白磁で、外面に手描き染付で「高橋病院」と記すことから、病院用の什器であり、このうち９は「吸い飲み」と呼ばれるものである。

３)まとめ

調査の開始前は古代の難波京に関わる遺構・遺物の検出が期待されたが、近代･現代の攪乱により、遺構は発見されなかった。とはいえ、少量ながら遺物の出土はみることができた。検出された地山(上町層)のようすから見ると、北東に開く谷が調査区内を横切っているようにも思われた。今後、周辺にてさらなる発掘調査の進展が期待される。

なお、「高橋病院」についてみると、1889(明治22)年の医師名簿『日本医籍』には、大阪市内の開業医として、南新町・高橋信

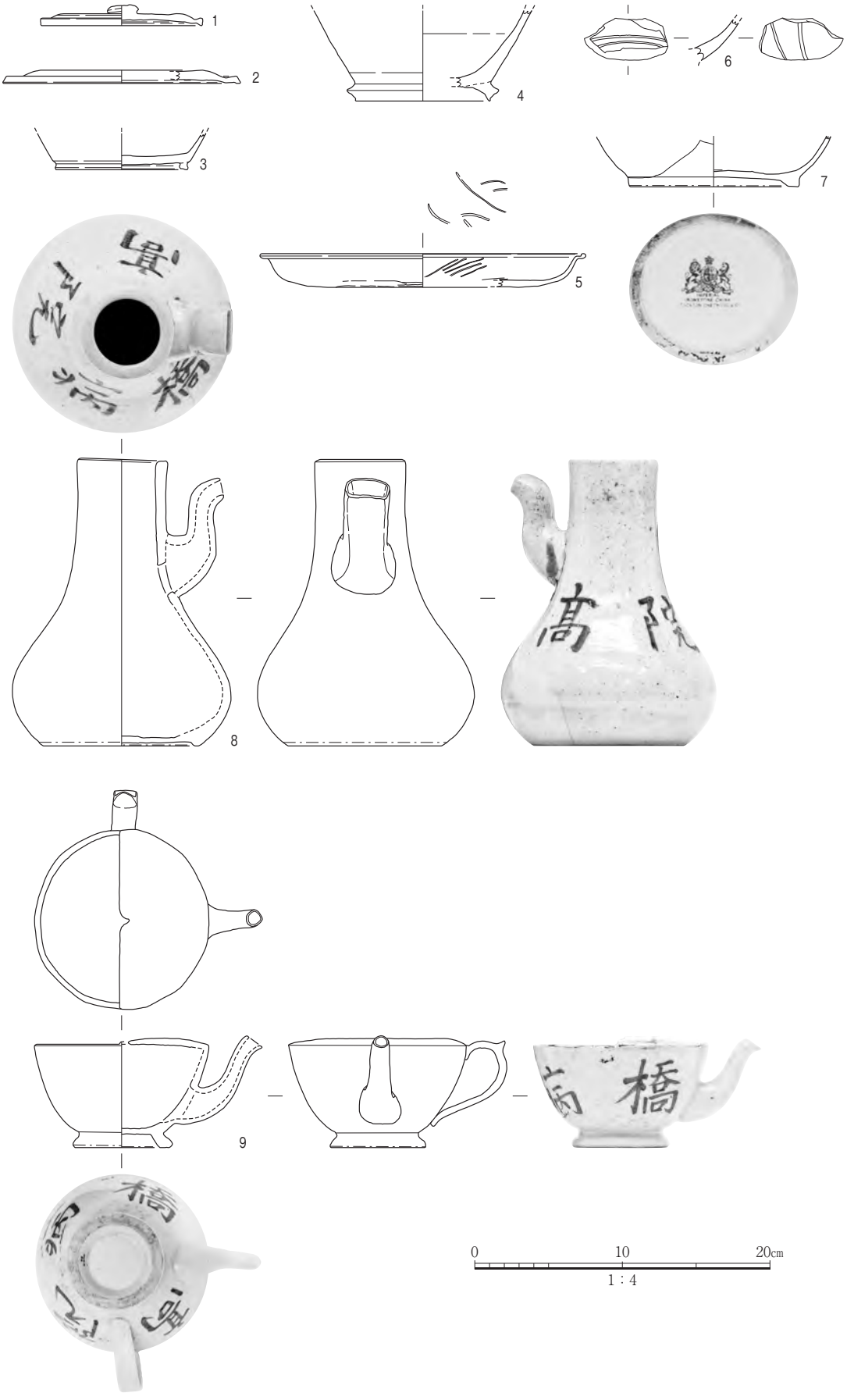


図５　出土遺物

次郎、鰻谷東町・高橋謙造、八幡町・高橋健蔵、三津寺町・高橋周平、江戸堀北通・高橋正直、江戸堀南通・高橋浩平、若松町・高橋正純などが記されるが、高橋病院の名は見られない[内務省衛生局1889]。また、1922(大正11)年の『帝国医師名簿』、1931(昭和６)年の『大日本医師名簿』にも、大阪市内で「高橋病院」の名は認められなかった[斎藤平八郎1922・金原商店出版部1930]。1898(明治31)年の『帝国医籍宝鑑』によると、「高橋病院」は全国私立病院の項目に１件のみあり、その住所は神戸市元町である[山口力之助1898]。今回の調査で出土した遺物は、この「高橋病院」の什器であったかどうかは確実ではないが、手描き染付で病院名を記すことから、明治時代のものである可能性が高く、什器を備えることができる程度の規模を持つ病院に備えられたものであったとみられる。

引用・参考文献

内務省衛生局1889、『日本医籍』忠愛社　国立国会図書館デジタルコレクション

山口力之助1898、『帝国医籍宝鑑』南江堂　国立国会図書館デジタルコレクション

斎藤平八郎1922、『帝国医師名簿』帝国医師名簿発行所　国立国会図書館デジタルコレクション

金原商店出版部1930、『大日本医師名簿』昭和６年版、金原商店　国立国会図書館デジタルコレクション

積山洋2010、「複都制下の難波京」：平成18～21年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』、pp.79－96

天王寺区石ケ辻町31－２他における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH17－５)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区石ケ辻町31－２他
調 査 面 積　　104㎡
調 査 期 間　　平成29年12月12日～12月15日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工

1）調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は難波宮跡と四天王寺の間の上町台地上に立地し、東には難波京朱雀大路跡を介して細工谷遺跡・摂津国分寺跡などが隣接する。調査地は難波京朱雀大路跡とされる南北道路推定地の西40mに当る（図１）。地形的には、本調査地は上町台地の東縁部にあり、本来、高低差の激しい地形上にある。調査地から難波京朱雀大路跡をはさんで東側は、SD06－２・３次調査で、北東方向から台地に入り込む埋没谷である「五合谷」が検出されており、その谷筋は現況地形にも名残を留める［大阪市文化財協会2007］。

周辺での既往の調査では、細工谷遺跡の成果が注目される。調査地の南東約250mで行われたSD96－１・97－１次調査では、国内最古の貨幣とされる７世紀の富本銭や奈良時代の和同開珎の枝銭、「百済尼」、「尼寺」と記された墨書土器などが発見され、古代寺院との関係が考えられている［大阪文化財研究所1999］。また、前述のSD06－２・３次調査では、「五合谷」の谷底に、７～８世紀を通じて維持・管理された排水路が発見された。谷は埋め立てられておらず、朱雀大路推定地のすぐ東側に当ることから、古代に大路が敷設されたことについて疑問が呈された。一方、大路推定地西辺に当るNS16－１次調査地では「五合谷」の一部とみられる地形を埋め立てた地層が見つかっているが、その年代については古代に遡る可能性があるとするに留まっており［大阪文化財研究所2017］、大路の存否についてはいまだ霧中の感がある。こうした難波京朱雀大路の問題をはじめとし、調査地周辺は大阪の古代史、難波京を考察する上で重要な地域であるといえる。また、周辺では、近世に降ると建物の壁に用いる壁土の採掘が盛んに行われた。近隣のUH17－１・NS10－１次調査などでは18世紀以降の土採り穴が発見されている［大阪文化財研究所2017、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012］。

図１　調査地位置図

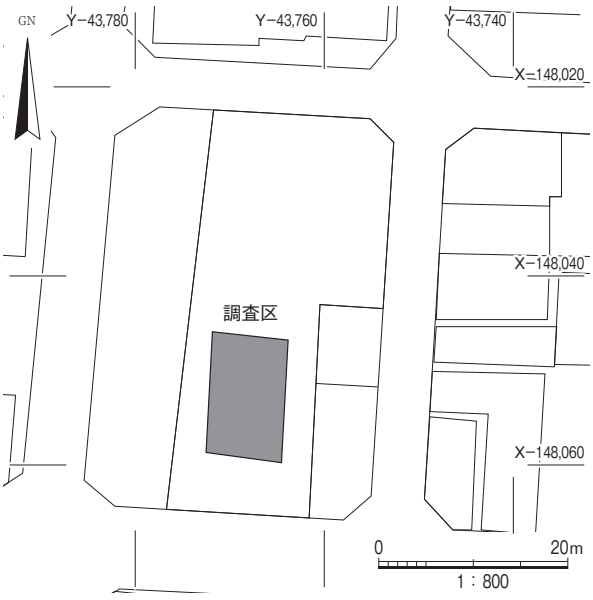


図２　調査区配置図

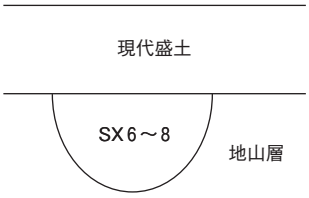


図３　地層と遺構の関係図

当地では、大阪市教育委員会によって行われた試掘調査で、地表下約１m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。今回の調査は、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に実施した。

調査において、掘削は現代の地層については重機を用いて行い、そのほかはすべて人力によった。地層ごとに掘削と遺物の捕集を行い、遺構の検出と掘削を行った。進行に応じて、適宜に実測図や写真撮影で記録保存に努めた。本調査で用いた基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値(東京湾平均海水面値)で、TP+○mと記した。

２)調査の結果

ⅰ)層序(図３・４)

調査地の地表面は、TP+16m前後で平坦な地形であった。層序は以下の通りである。

現代盛土層：灰色瓦礫混り砂からなり、層厚は50～110㎝以上であった。

地山層：黄褐色極細粒～細粒砂からなり、層厚は80㎝以上であった。上方に細粒化し、海棲生物のものとみられる巣穴化石が顕著にみられた。上町層を構成する地層である。本層上面で土採り穴が検出された。

ⅱ)遺構と遺物(図４～６)

調査区の南壁沿いに１基(SX6)、北壁沿いに３基(SX7～9)の土採り穴を検出した。後者３基は現代の掘削によって大きく損壊されていた。

SX6　東西3.3m以上、南北1.1m以上で、深さは1.3mであった。平面形は隅丸方形を呈するものであろう。埋土は黄褐色地山偽礫混り砂～シルトからなり、人為的に埋められていた。埋戻しの土砂は東側から投入されていた。遺構の壁面はえぐり込まれてオーバーハングしていた。土師器・肥前磁器の細片が出土した。

SX7　東西1.5m以上、南北0.9m以上で、深さは0.7mであった。平面形は不整な楕円形を呈する。埋土は３層からなり、下層は砂混りの地山偽礫、中・上層は粘土質～砂質シルトで埋められていた。壁面にはオーバーハングしている個所があった。土師器甕片が出土した。

SX8　東西2.9m以上、南北0.4m以上で、深さは0.5mであった。大部分を破壊されて、南側の一辺のみが遺存していた。埋土は２層からなり、下層はシルト質砂、上層は粗粒砂混り地山偽礫で埋められていた。壁面にはオーバーハングしている個所があった。被熱した土師器皿・須恵器甕・丹波焼壺の細片が出土した。土師器皿２は口径20cmを計り、口縁部内面をわずかに肥厚させている。奈良時代のものであろう。

SX9　東西1.0m以上、南北1.4m以上で、深さは0.8mであった。平面形は円形を呈するものであろう。埋土は２層からなり、上・下層とも地山偽礫混り砂～シルトで埋められていた。両層の間には地山層が流水によって再堆積した薄層が挟在し、埋戻しには時間的な間隙があったことが窺えた。土師

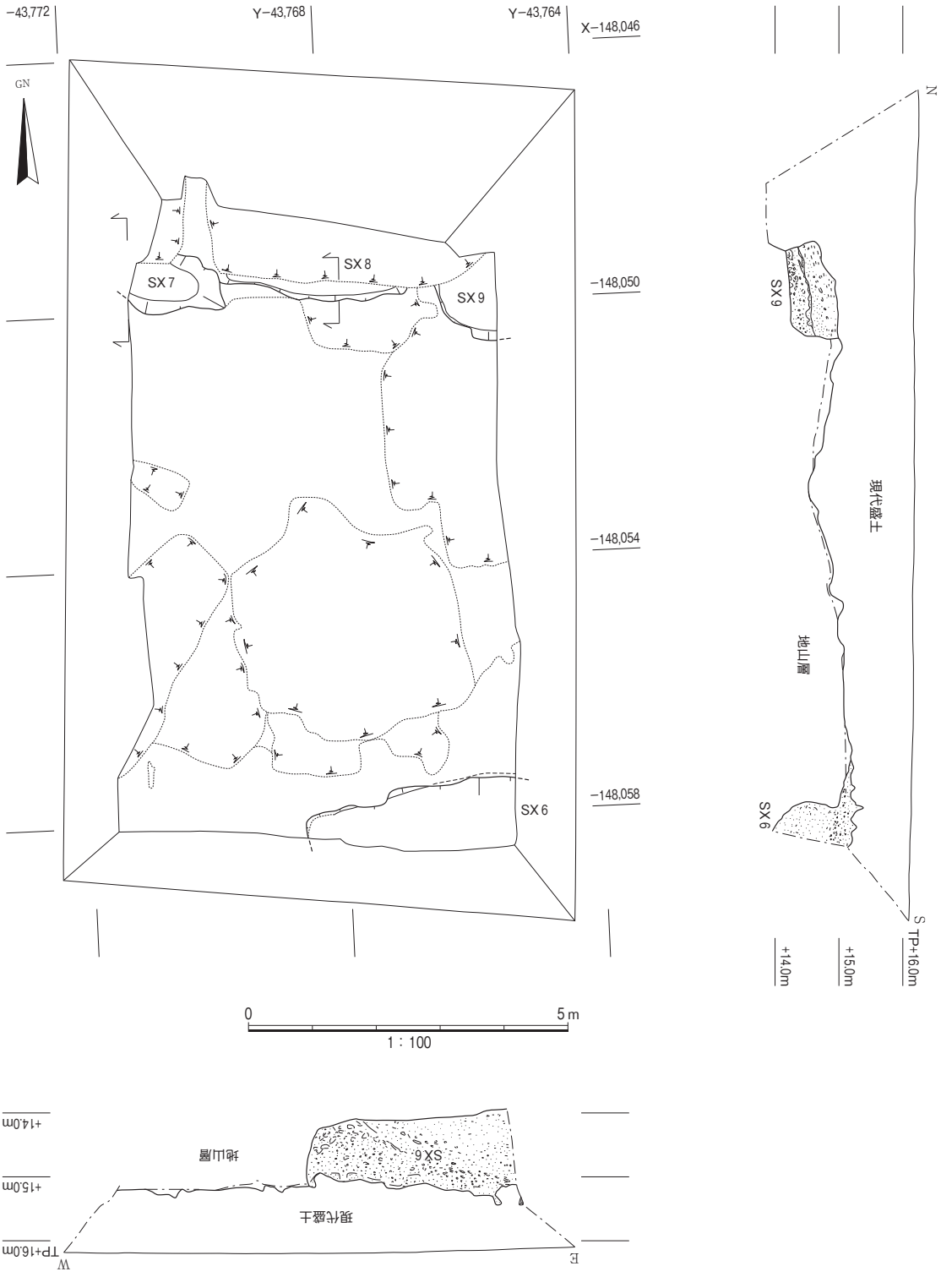


図 4　遺構平面図および地層断面図

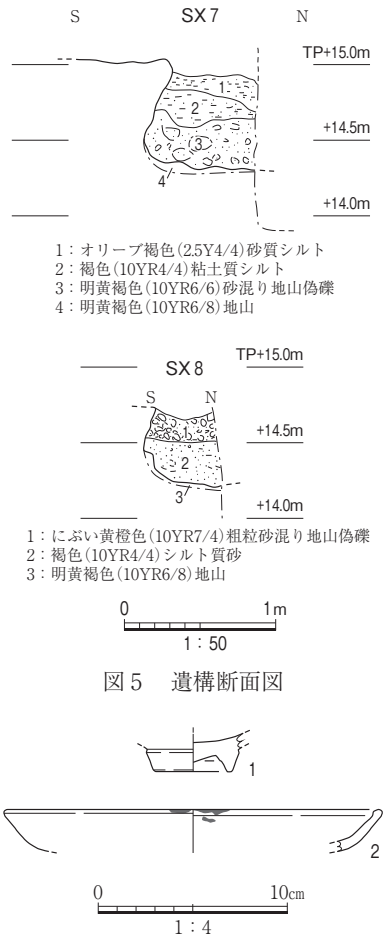


図５　遺構断面図

図６　出土遺物実測図
SX９(１)、SX８(２)

器細片、肥前磁器片が出土した。肥前磁器１は碗の底部である。17世紀中葉以降のものであろう。

以上の遺構は、地山層の砂質な部分に掘削されていること、壁面がオーバーハングするものがあること、埋土に地山層があまり含まれず、掘削された地山層が搬出された可能性が高いことからみて、土採り穴と考えるのが妥当である。採掘されたのは地山層の砂質土で、製陶には不向きであろうから、やはり壁土の採掘を目的としたものと考えられる。時期については、詳細な時期を決定できる遺物は出土しなかったが、肥前磁器１などからみて、17世紀中頃以降に属するものとみてよい。

３)まとめ

今回の調査では４基の土採り穴が発見された。同様な遺構は当地域から四天王寺北方にかけて多数検出されている[大阪文化財研究所2012]。時期的には18世紀以降のものが大部分である。江戸時代に、数寄屋造りの建築が流行するにつれ、白壁を用いない自然な発色の土壁が好まれるようになったといい、仕上がり感や発色から各地に特産の壁土が生まれた。京都の聚楽土･稲荷土、淡路島の浅黄土などがそれで、これらは仕上げの上塗り用色土であった。大阪では天王寺土(別名大阪土)があり、中塗りから上塗りにも用いられ、梨目で赤みの混じった黄色に仕上がり、人気があった。江戸でも用いられたという[山田幸一1984]。近鉄上本町駅から四天王寺にかけての上町台地上で発見される土採り穴は、この天王寺土を採掘した跡とみてよかろう。

ただし、数寄屋造りは茶の湯の流行と関係があり、茶の湯の流行は豊臣期からすでにみとめられるので、土採り穴の年代がほとんど18世紀以降であることとは齟齬をきたす。この時期の大坂では妙知焼け(1724年)などの大火があって、多くの家屋が焼失し、その再建に必要とされた建材もかなりの量であったことにも注意をはらうべきである。

土採り穴に関しては、近年、資料的な蓄積がなされてきており、その分布や形態的特徴、時期的な変遷など、総合的な研究が期待される。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「難波京朱雀大路跡発掘調査(NS10－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.291－295

大阪市文化財協会1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅰ

大阪市文化財協会2007、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅱ

大阪文化財研究所2012、『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅳ
大阪文化財研究所2017、『天王寺区石ヶ辻町41－８における建設工事に伴う難波京朱雀大路跡発掘調査（NS16－１）報告書』
山田幸一1984、「壁土」:『大日本百科全書』小学館

天王寺区上汐四丁目３－10他における建設工事に伴う
上本町発掘調査(UH17－７)報告書

調 査 個 所　　大阪市天王寺区上汐４丁目３－10他
調 査 面 積　　44㎡
調 査 期 間　　平成30年２月１日～２月７日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工

1）調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は、大阪市内を南北に貫く上町台地上に立地し、北を大坂城跡・難波宮跡、南を四天王寺旧境内遺跡、東を難波京朱雀大路跡に画され、西は台地西縁の海蝕崖上まで広がっている。遺跡の東側は台地東縁に近いため、開析谷によって地形の起伏は大きい。台地の最高所は上汐筋沿いにあって、南南西から北北東方向に延びて脊梁部を形成し、東西方向には下がっていく地形である。同遺跡は弥生時代から近世にかけての集落跡とされるが、顕著な土地開発の始まりは古墳時代中期頃に求められ、特に古代においては難波京が展開し、近世には寺町や南・北平野町などに寺院・町屋が軒を並べた。今回の調査地は同遺跡のほぼ中央部で台地最高所に近く、旧高野街道の東に面する（図１・２）。近隣で行われた発掘調査では難波京に係る成果が注目される。調査地のすぐ東側にあるUH10－５次調査地では、難波京の条坊推定線に平行する東西方向の溝が検出され、それに架設された橋脚とみられる柱穴が発見された[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。溝からは７世紀中葉から８世紀前半にかけての土器が出土した。北西50mのUS06－１次調査地では、８世紀から９世紀初頭の掘立柱建物群が発見され、難波京内の官人層の屋敷地である可能性が考えられた[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。南のUH07－２次調査では８世紀中葉の水溜状遺構[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]、UH11－12次調査では８世紀の掘立柱建物[大阪文化財研究所2012b]、NW81－４次調査では「米家」を墨書した土器を出土した８世紀代の井戸[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983]などが発見されている。また、南東のUH08－９次調査では７世紀後葉の井戸[大阪文化財研究所2012a]、UH09－２次調査では推定条坊線に合致する８世紀の橋遺構[大阪文化財研究所2010]が発見されている。このように、調査地周辺は上本町遺跡の中でも特に飛鳥・奈良時代の遺構・遺物が

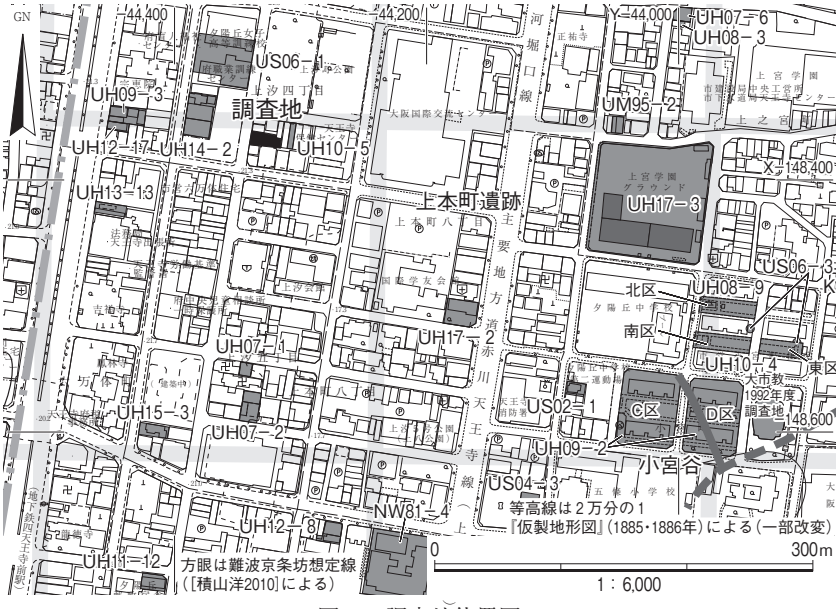


図１　調査地位置図

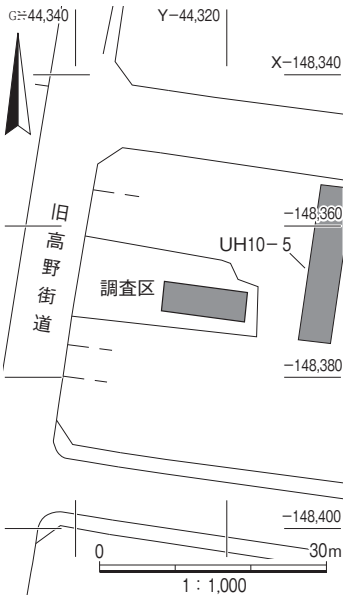


図２　調査区配置図

残る地域であり、難波京やその条坊を考える上で重要な地域である。

今回の調査地においては、大阪市教育委員会によって行われた試掘調査で、地表下１m以下で本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面や遺物包含層が検出され、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に本調査が実施された。

調査において、掘削は古代の地層(後述する第５層)までは重機を用いて行い、そのほかはすべて人力によった。地層ごとに掘削と遺物の捕集を行い、遺構の検出と掘削を行った。進行に応じて、適宜に実測図や写真撮影で記録保存に努めた。本調査で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海水面値)で、TP＋○mと記した。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３～５)

調査地の現況地形はTP＋21mで平坦であるが、これは宅地造成によるものである。やや範囲を広げてみると、調査地から東側は南北に延びる凹地となっており、調査地はその西斜面にあることがわかる(図３)。こうした状況は本来の地形をある程度反映したものであろう。

調査地の層序は以下の通りで、現地表以下を６層に分けることができた(図４・５)。

第１層：瓦礫混りの灰色砂からなり、現地表面を構成する整地層である。下面は下位層を破壊して凹凸が激しく、層厚は最大で100㎝であった。

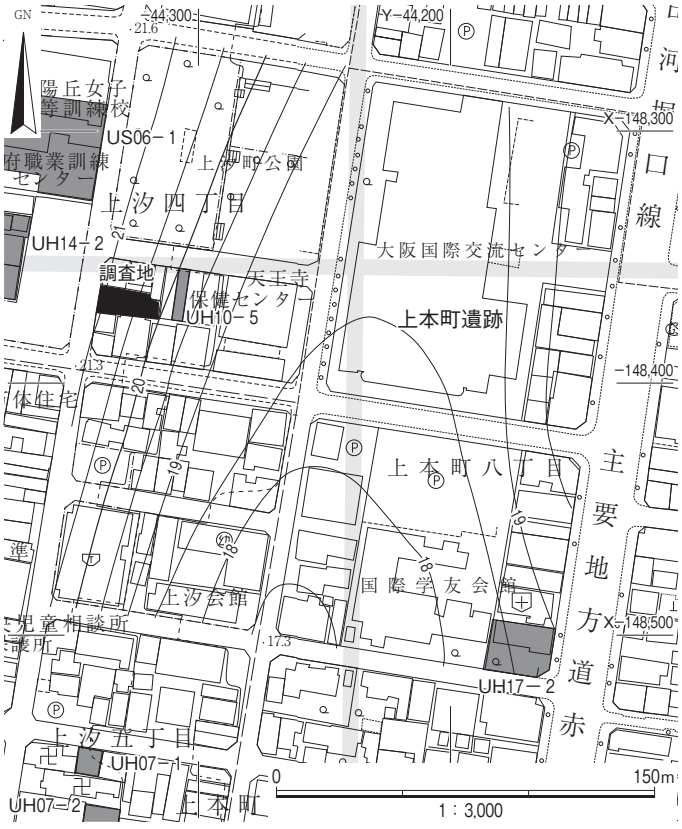


図３　周辺の現況地形

第２層：黒褐色砂からなる近代・現代の整地層である。層厚は15～50㎝であった。

第３層：近世の整地層で２層に分かれた。第3a層は地山偽礫混り黒褐色シルト～細粒砂からなり、層厚は30㎝であった。第3b層は地山偽礫からなり、層厚は30㎝であった。第3b層は東端部にしか分布せず、東へ下がる地形を平坦に造成するため、低い箇所にのみ客土されたものとみられた。年代が知れる遺物は出土しなかったが、下位層の年代からみて概ね19世紀以降の地層であろう。

第４層：褐色砂からなる近世の整地層である。層厚は最大で60㎝であった。本層上面からSK１・SD３が掘り込まれており、第５層上面で検出したSD５は本

層によって埋められていた。肥前磁器や関西系陶器など18世紀中葉の遺物が含まれていた。

第５層：地山偽礫混り黄褐色粘土質シルトからなる整地層である。上面は削剥され、調査区東端部にのみ分布していた。層厚は最大で15㎝であった。土師器・須恵器を含み、古代に遡るものとみられる。

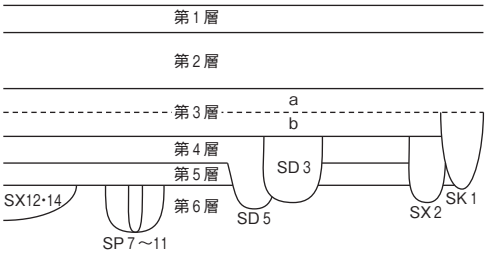


図４　遺構と地層の関係図

第６層：明黄褐色シルトからなる地山層である。上面の高さは、調査区西部でTP＋20.05mであるのに対して同東部ではTP＋19.80mとやや下がっていた。西部では、本層は近世・近代の遺構・地層に直接削剥されているので本来はより高かったはずである。本層の上面では柱穴など古代の遺構が検出された。

ⅱ）遺構と遺物（図５～７）

ａ．第６層上面の遺構

柱穴・土壙・溝・不整形な落込みが検出された。SP９より東の遺構は第５層を除去して第６層上面で検出した。一方、SP８より西側には第５層が分布せず、第４層を除去して第６層上面で検出した。したがって、東半部の遺構は古代に属するのに対し、西半部の遺構には中世から近世のものが含まれる可能性がある。

柱穴・小穴は４個（SP７・９・10・15）あった。SP７は平面形が一辺0.5～0.6mの隅丸方形で、深さは0.1mほどであった。かなり上部が破壊された状態であろう。直径0.2mほどの柱痕跡がみとめられた。掘形からは土師器の細片が出土した。形態からみて古代のものとみられる。小穴SP９・10・15はやや小型の一辺が0.3mほどで、深さは0.2～0.3mほどであった。明確に柱痕跡がみとめられるものはなかった。出土遺物は土師器細片のみで、詳しい時期がわかるものはなかった。第５層を除去して検出されたので、これらは層位的にみて古代の遺構である。

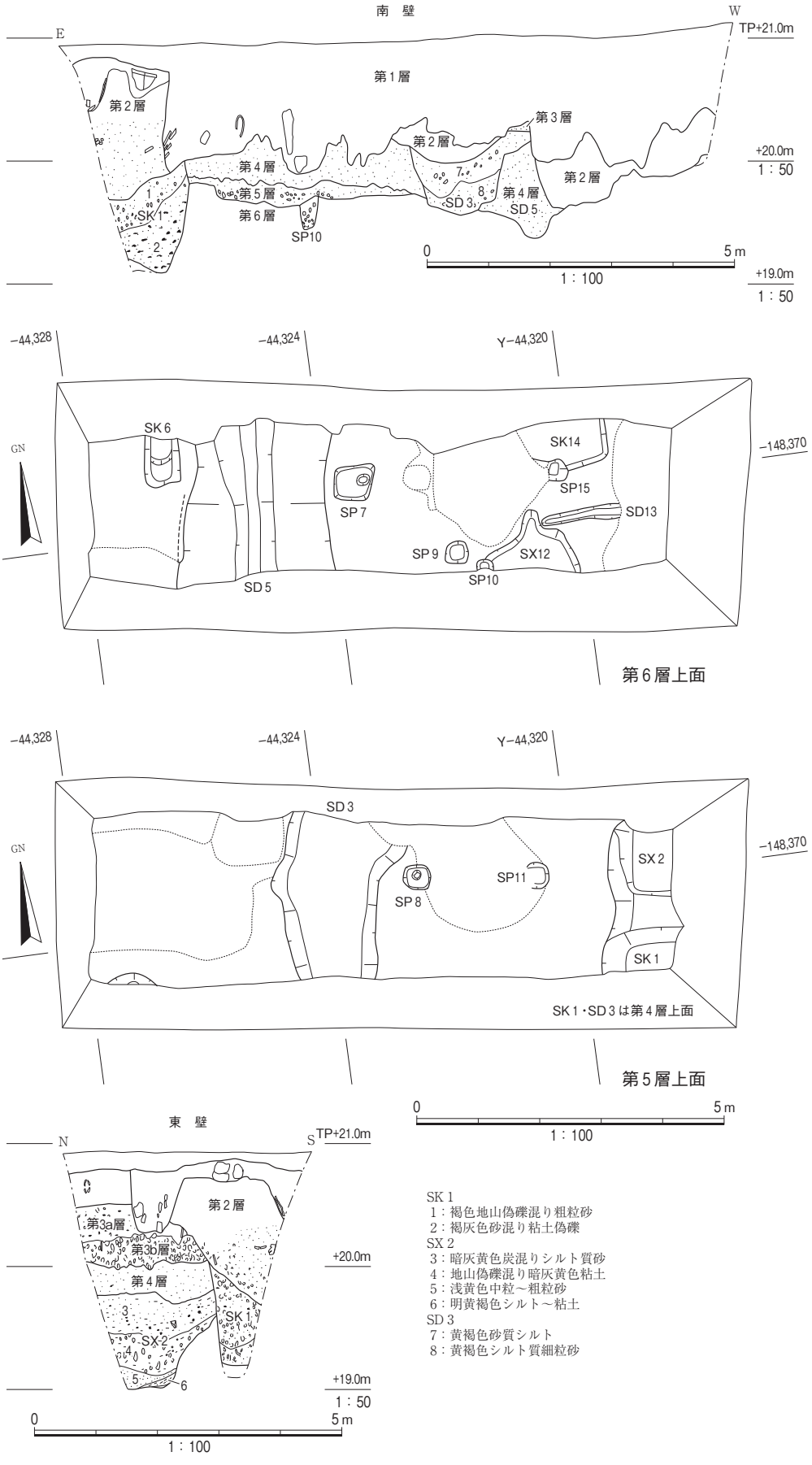
SD５は調査区西部で検出された溝で、幅2.5m、深さ0.3mで、南北に延びる。底部は二段掘り状に急激に深くなっていた。埋土は最下部に粘土がごく薄く自然堆積し、全体には第４層で埋められていた。17世紀中葉の肥前磁器皿が出土した。この頃からに機能し、18世紀中葉には埋められたものであろう。

SD13は東部で検出され、幅0.2m、深さ0.1m未満である。ほぼ東西に延び、第５層で埋められていた。古代の遺構である。

SX12・14は東部で検出された平面形が不整形の落込みで、深さは0.1mほどであった。いずれも第５層で埋められていた。いずれからも土師器・須恵器が出土した。SX14から出土した土師器１は皿の口縁部、２は甕の口縁部である（図７）。奈良時代のものであろう。

SK６は調査区西部で検出された土壙で、平面形は東西0.6m、南北0.9m以上の長方形で、深さは0.2mであった。地山層偽礫を含む砂で埋められていた。出土遺物はなかったが、埋土は上記遺構と異なり、中世以降に降る可能性がある。

ｂ．第５層上面の遺構



SK 1
1：褐色地山偽礫混り粗粒砂
2：褐灰色砂混り粘土偽礫
SX 2
3：暗灰黄色炭混りシルト質砂
4：地山偽礫混り暗灰黄色粘土
5：浅黄色中粒～粗粒砂
6：明黄褐色シルト～粘土
SD 3
7：黄褐色砂質シルト
8：黄褐色シルト質細粒砂

図5　遺構平面・断面図

柱穴・溝・土壙などが検出された。重機によって第５層上面まで掘削したので、本来上位層上面より掘り込まれていた遺構も本層上面で検出した。

柱穴（SP８・11）は平面形が一辺0.3mほどの隅丸方形で、深さは0.4mほどであった。SP８には柱の抜取り穴がみられた。両遺構は東西に1.8mの間隔で並び、本来、一つの建物を構成していた可能性がある。SP11からは中世の平瓦片が出土した。中世の遺構であろう。

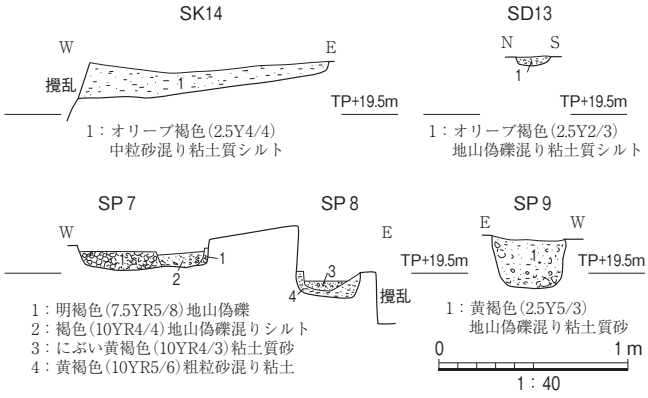


図６　遺構断面図

SD３は中央部やや西で検出された溝で、幅約1.5m、深さ0.8mで南北に延びる。平面的に検出したのは底部付近のみで、上部は南壁地層断面での観察による。埋土は２層からなり、下層は黄褐色シルト質細粒砂で、上層は黄褐色砂質シルトで埋められていた。出土遺物には17世紀中葉頃のものが含まれるが、第４層上面から掘り込まれており、同層の年代を考慮すると遺構の年代は18世紀中葉以降となる。下位のSD５とほぼ同じ位置に掘られ、区画溝であった可能性が考えられる。その場合、西側の高野街道を正面とする家屋の裏手の敷地境であったのかもしれない。

SK１は調査区の南東隅で検出された土壙で、第3b層上面から掘られていた。東西1.2m以上、南北0.7m以上で、深さは0.9mである。埋土は２層に分かれ、下層は褐灰色砂混り粘土偽礫、上層は褐色地山偽礫混り粗粒砂でいずれも人為的に埋められていた。ごみ捨て穴であろう。関西系陶器・瀬戸美濃焼・大谷焼、植木鉢など18世紀末～19世紀中頃までの遺物が出土した。瀬戸美濃焼磁器染付碗７を図示した（図７）。

SX２は調査区の北東部で検出された土壙状の落込みで、第４層上面から掘られていた。東西1.0m以上、南北1.1m以上で、深さは0.8mである。埋土は大きく２層に分かれ、底部から0.2mまでは明黄褐色シルト～粘土や浅黄色中粒～粗粒砂が自然堆積し、その上は地山偽礫混り暗灰黄色粘土や暗灰黄色炭混りシルト質砂で埋められていた。水が溜まった痕跡があり、灌水用の水溜めなどの機能が考えられる。肥前磁器・関西系陶器など18世紀前葉～中葉の遺物が出土した。肥前磁器染付碗６を図示した。

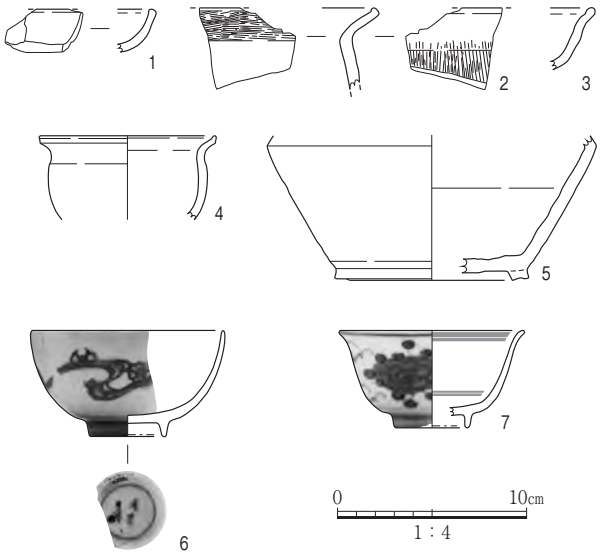


図７　出土遺物実測図
SK14（１・２）、第５層（３～５）、SX２（６）、SK１（７）

c．地層出土の遺物

第５層出土の遺物を図示した(図７)。土師器杯３は口縁端部内面がわずかに玉縁状をなす。土師器４はミニチュアの甕で、口縁端部外面と頸部に強いナデを加えている。須恵器５は壺の体部で、直線的なプロポーションをもつ。これらは奈良時代に属し、地層の年代を示すものである

３)まとめ

・本調査地は上町台地脊梁部の東にある凹地の西側斜面に立地する。この凹地は谷頭で、谷が南へ延びるのか、あるいは凹地として完結するのかを解決するために、南側での調査成果の蓄積が待たれる。

・明確に建物を復元するに至らなかったが、古代の柱穴を検出した。７～８世紀代の遺構はUS06－１次調査やUH10－５次調査などでも発見されており、周辺は難波京の宅地が展開していた地域とみられる。

・徳川期の遺構が検出された。高野街道に面した町屋を想定することができる。US06－１次調査では豊臣後期の遺構も発見されており、南平野町の町屋との関連性が考えられる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、「難波宮跡(NW81－４次)発掘調査概報」:『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57－62

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「上本町南遺跡発掘調査(US06－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.251－259

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「上本町遺跡発掘調査(UH07－２)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.249－261

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「上本町遺跡発掘調査(UH10－５)報告書」:『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.29－39

大阪市文化財協会2010、『上本町遺跡発掘調査報告Ⅰ』、pp.１－85

大阪文化財研究所2012a、『上本町遺跡発掘調査報告Ⅳ』、pp.１－52

大阪文化財研究所2012b、『上本町遺跡発掘調査報告Ⅴ』、pp.１－18

浪速区難波中三丁目１－１他10筆における建設工事に伴う

難波貝層遺跡発掘調査(NB17－１)報告書

調 査 個 所　大阪市浪速区難波中３丁目１－１他10筆
調 査 面 積　約300㎡
調 査 期 間　平成29年８月21日～９月１日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長 高橋工、積山洋

1）調査に至る経緯と経過

調査地は、縄文・弥生時代の遺跡として知られる難波貝層遺跡の南部にあたる（図１）。東隣は近世江戸幕府が非常時に備えた米蔵である難波御蔵跡、南隣は弥生・古墳時代と推定されている船出遺跡、やや西方には中・近世の集落跡である浪速元町遺跡などがある。

北西100m余で行われたNK02－１次調査、南西100m弱で行われたFD02－１次調査ではいずれも顕著な遺構・遺物は検出されていないが、前者では地表下約２m以下で水平ラミナが発達した海浜成層がみられ、後者でも地表下約1.2m以下に海浜成層が検出されている［大阪市文化財協会2003］。

建設工事に先立って当該地で実施された試掘調査により、地表下約1.0m以下の深さで近世以前の遺構面および遺物包含層が発見されたため、今回の発掘調査を行うこととなった。調査は、敷地が南北二箇所に分かれているため、北区で東西13m・南北10m、南区で東西12m・南北10mの規模で計画されたが、南区では近現代の攪乱層が広く深く及んでおり、西側に拡張して遺跡に伴う地層を追求したが、全体に遺跡の残りはかなり悪かった（図２）。機械による掘削は北区で地表下約1.3m、南区では大部分が地表下約1.7mまでで、後述する第２層以下で人力による掘削と遺跡調査を実施した。調査期間は上に述べた通りである。

以下の本文等に示す標高はT.P.値（東京湾平均海面値）で、TP+○mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を１/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。

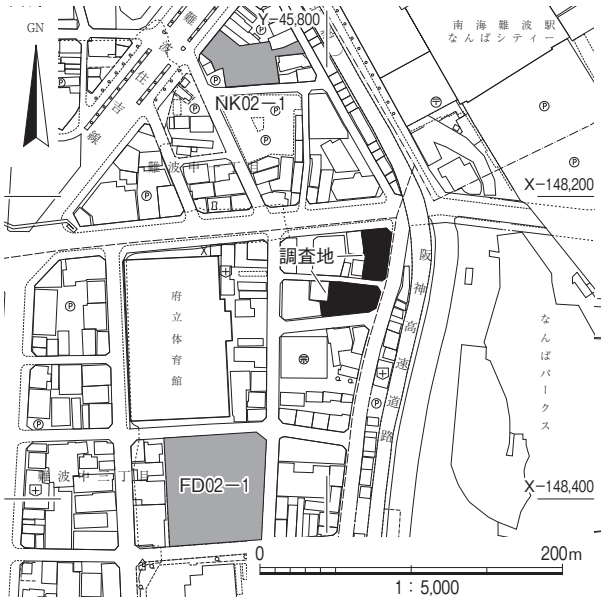


図１　調査地位置図

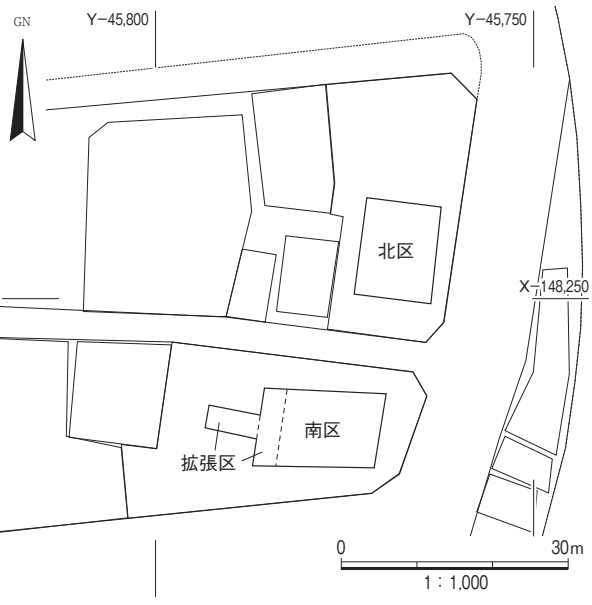


図２　調査区位置図

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４）

以下に述べる層序は北区を中心とし、遺跡の残りが悪かった南区については補助的に触れることとする。なお、現地表面はTP+2.6mである。

第０層：現地表面から深さ1.3～２m以上におよぶ近現代の攪乱層である。

第１層：南区にごく部分的に残っていたにぶい黄褐色砂混りシルト層で、層厚は15～20cm余である。作土層とみられる。

第２層：にぶい黄褐色の礫混り砂層で、残存層厚は約20cmである。北区では本層以下を調査の対象とした。出土した土器から、15～16世紀の年代が想定される。

第３層：にぶい黄褐色礫混り砂層である第3a層（層厚は約15cm）と、暗褐色シルト混り砂層の第3b層（層厚は最大約30cm）に分けられ、前者はさらに第3a－１層・第3a－２層に細分された。第3a－２層は水成層であり、第3a－１層はそのラミナが攪乱等により失われた部分である。第3b層には上面からの踏込み跡が顕著にみられ、第3a－２層の砂で埋まっていた。

第４層：第4a層は黄褐色中粒砂層、第4b層は黄褐色砂礫層で、いずれも自然堆積の水成層である。第4a層

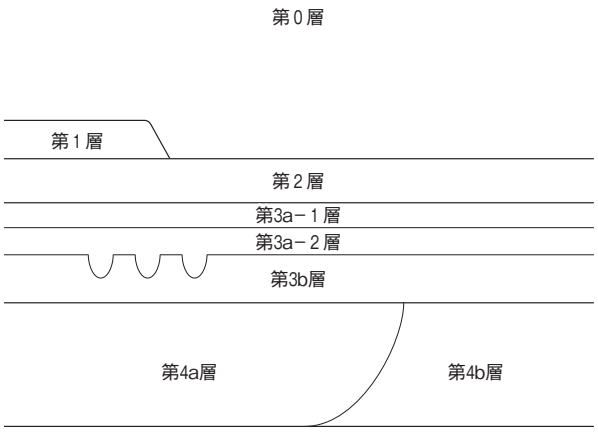


図３　地層と遺構の関係図

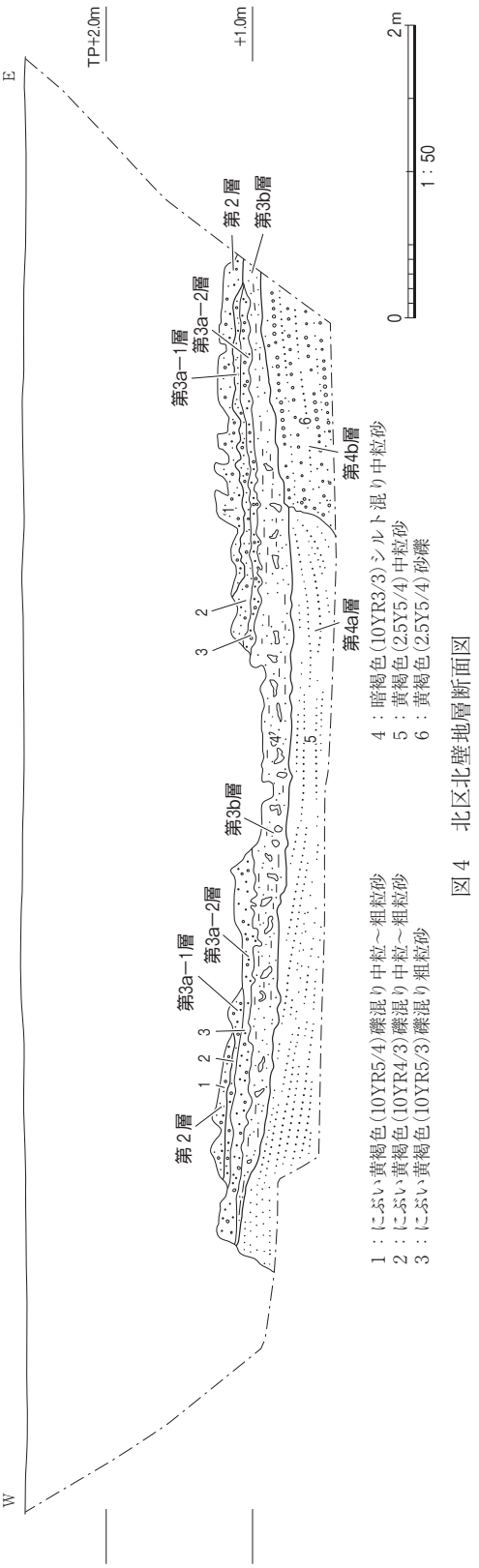


図４　北区北壁地層断面図

は東端に顕著な斜交ラミナが見られるので、強い水流によって第4b層を削ったものと思われる。第４層はTP+1.1m以下で検出され、層厚は調査範囲で約60㎝であるが、さらに深くまで堆積しているとみられる。FD02－１次等で検出されている海浜成層に連続するとみられる当地の基盤層である。

ⅱ)遺構と遺物(図５～７)

今回の調査では目立った遺構の検出はなかった。図５では北区北半部に第4a層上面の地形の窪みを示し、南半部に第4b層の残存範囲を示した。また図６に南区の平面図を掲げた。

以下に出土遺物について述べる(図７)。１～３は第２層から出土した。１は須恵器の壺とみられ、体部にタタキを施したのち、圏線が巡らされている。２は古代の土師器杯であるが、器面調整等の詳細は不明である。３は15～16世紀頃の備前焼擂鉢で、内面に摺目がみられる。４は第4a層から出土した古代の土師器甑で、内面に横方向のハケメ、外面には主に縦方向のハケメがみられる。

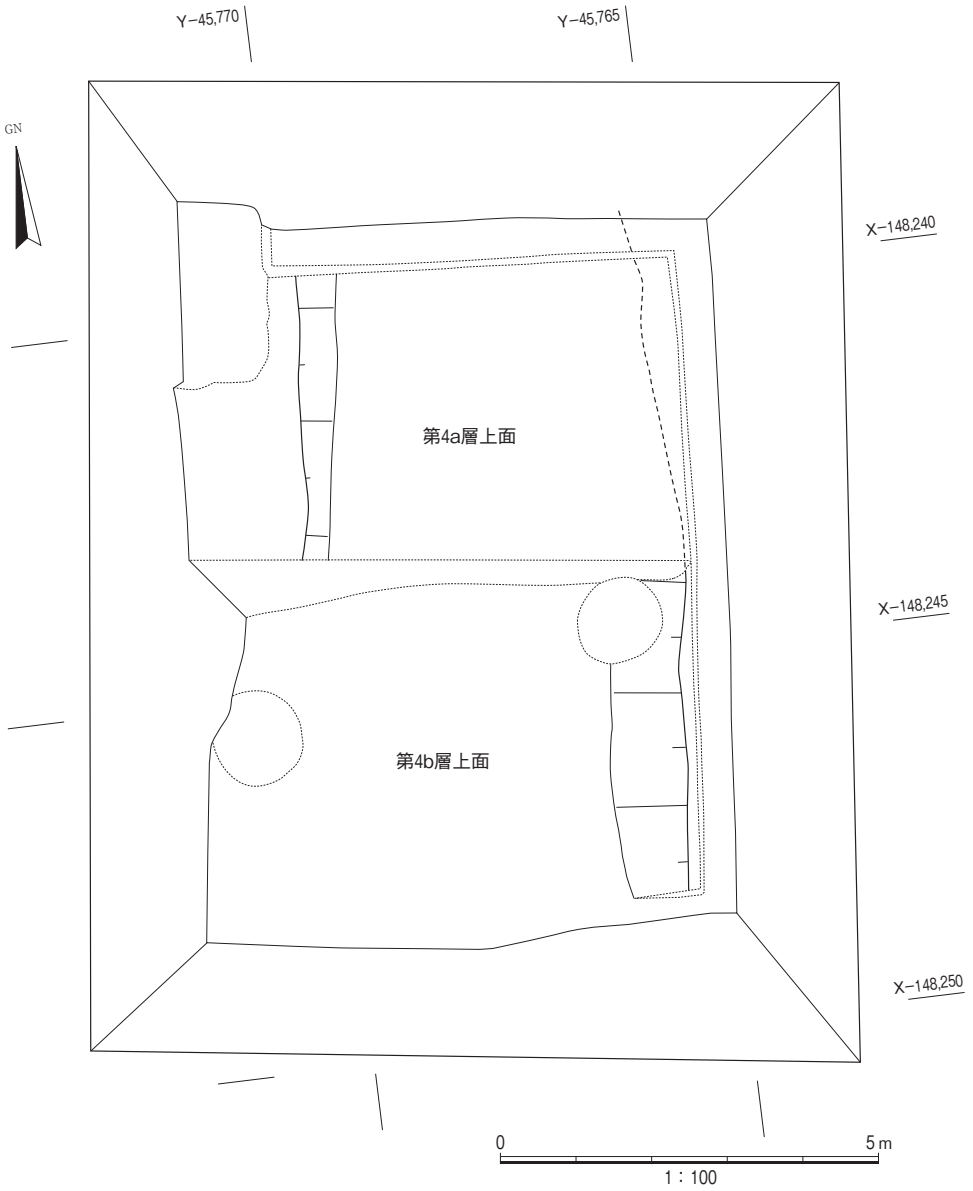


図５　北区4a・4b層平面図

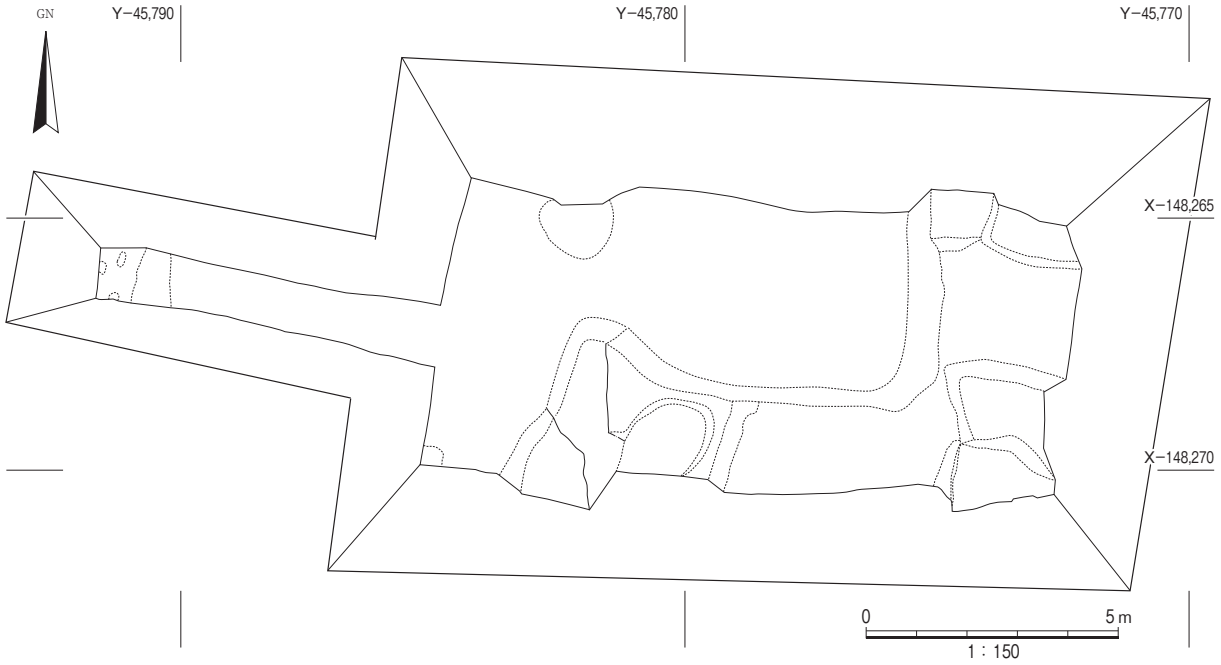


図６　南区平面図

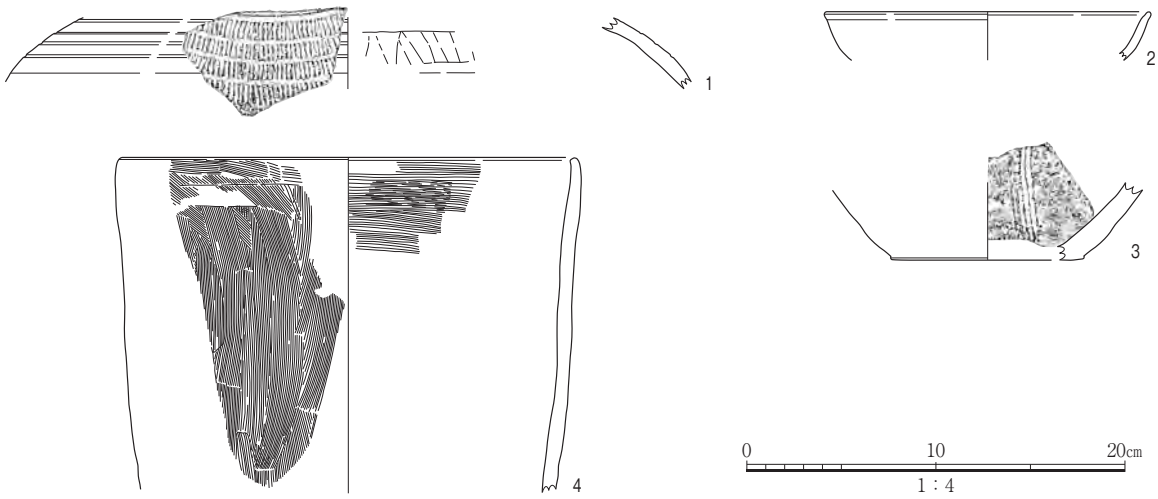


図７　出土遺物実測図
第4a層（４）、第２層（１～３）

３）まとめ

今回の重要な調査成果は、第4a層から古代の土器４が出土したことである。この土器は細かい年代比定は困難であるが、６～７世紀ごろであろうか。調査地は上町台地西縁に形成された難波砂州上に位置しており、近年の地形復元によれば、「砂州C」と「砂州D」の境界付近にあたり、砂州Cは古墳時代中ごろ、砂州Cは古墳時代末から間もない頃に形成されたと考えられている[趙哲済ほか2014]。このいずれかの砂州が形成された年代に関わるのがこの土器である。

難波貝層遺跡の調査例はまだまだ少なく、将来に期待されるところが大である。

大阪市文化財協会2003『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』―2001・2002年度―、pp３～４
趙哲済ほか2014「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」『大阪上町台地の総合的研究』大阪文化財研究所、pp17

浪速区元町二丁目３－９他における建設工事に伴う

浪速元町遺跡発掘調査(NB17－２)報告書

調 査 個 所　　大阪市浪速区元町２丁目３－９他
調 査 面 積　　約205㎡
調 査 期 間　　平成29年11月20日～12月１日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、南秀雄、桑原武志

1）調査に至る経緯と経過

浪速元町遺跡は、南海難波駅の西300mにある中世の集落遺跡である（図１）。最新の古地形復元によれば、遺跡は飛鳥～奈良時代に陸化した沿岸州（浜堤3A）に立地する[趙哲済・中条武司2017]。当地には難波荘といわれる荘園があり、1154（久寿元）年に京都岡崎の成勝寺領となり、1337（延元２）年には後醍醐天皇により渡辺党が難波荘の地頭職に任命された[新修大阪市史編纂委員会1988]。中世末から近世には、下難波村・難波村という城下町に近接する村があった。

今回の調査の敷地中央に、浪速元町遺跡の最初の発掘であるNK96－１次調査地がある（図１）。そこでは12～14世紀頃の遺物が出土した南北溝と土壙、水溜の可能性のある17世紀の大型土壙などが検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998]。南に隣接するNB16－１次調査でも、15世紀前後に主に機能し16世紀前半に埋められた同様の南北大溝や、17世紀初の水溜状大型土壙などがあった。また、17世紀代の井戸やごみ穴などの宅地に関する遺構があった[大阪文化財研究所2017]。北西約100mのNK12－１次調査では、12世紀末～13世紀前半の瓦器椀が出土した井戸や、中世末から豊臣期と推定される礎石建物が検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]。

本調査は、NK96－１次調査地を挟んで、西区（南北10m×東西15m）と東区（南北11m×東西５m）を対象とした（図２）。西区では、かつての建物に係るセメントで固めた地層が深くまで及び、遺構は西北のみに残っていた。東区もかつての建物の地下室などが過半を占め、遺構は北部のみに残っていた。西区は第２層上面から、東区は第１層上面から調査を開始し、沿岸州の堆積層である第５層上面までを平面的に調査した。

本報告では1/2,500大阪市デジタル地図から世界測地系に基づく座標値と座標北を使用した。標高

図１　調査地位置図

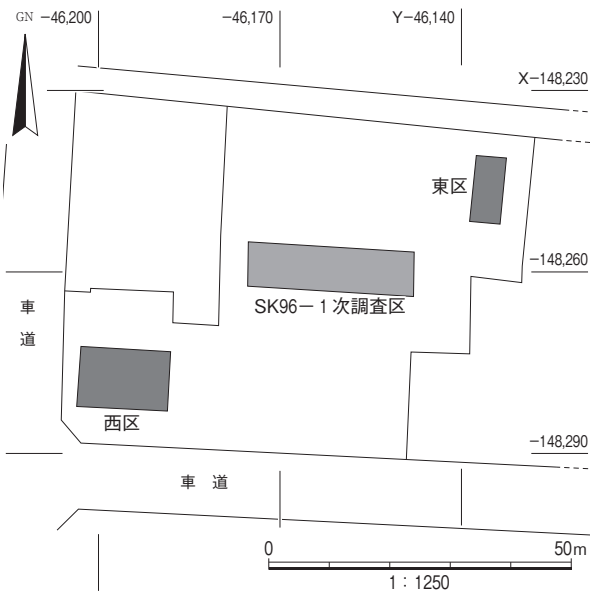


図２　調査区配置図

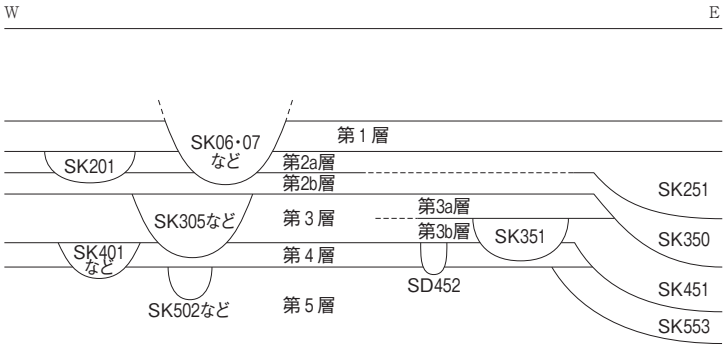


図３　地層と遺構の関係図

はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP±○mと記した。

２）調査の結果

ｉ）層序（図３・４）

現地表の標高はTP+2.0～2.1mである。厚さ50～80cmの現代盛土下から層名を付した。以下は西区を主体に記載した。

第１層：褐色（10YR4/4）中粒砂質シルト層で最大層厚は20cmである。18世紀後半以降の盛土である。

第２層：小礫混り褐色（10YR4/4）中粒砂質シルト層の第2a層と、細礫混り褐色（10YR4/6）中粒砂質シルト層の第2b層からなる盛土である。層厚は第2a層が７～30cm、第2b層が20～30cmである。第2a層上面は明瞭な遺構面で、SK201などがあった。第２層は、東区ではシルトやシルト質中粒～粗粒砂の薄層を重ねた整地層が相当する。時期は17世紀末～18世紀初と推定され、ほぼNK96－１次調査の第２層に当る。図８の12の丹波焼脚は西区第２層の出土である。

第３層：褐色（10YR4/6）中粒砂質シルト層の盛土で、層厚は15～40cmである。上面でSK305などを検出した。東区では、黄褐色（2.5Y5/3）の第3a層と暗オリーブ褐色（5Y4/3）の第3b層からなる、細礫を多く含むシルト質中粒砂層（層厚20～25cm）がこれに相当し、整地の方向から道路の可能性がある。第3b層上面にSK351があった。徳川期（1615年以降）の17世紀の地層で、ほぼNK96－１次調査の第

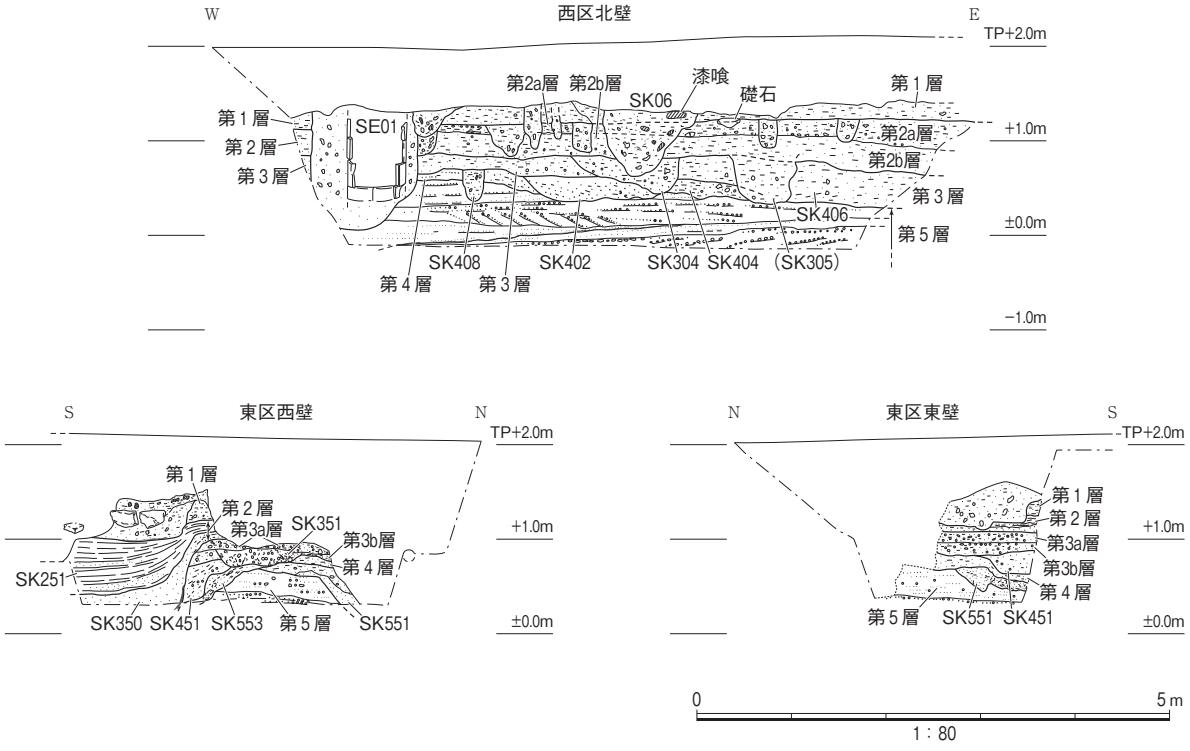


図４　西区・東区地層断面図

３層に当る。

第４層:褐色(10YR4/4)シルト質中粒～極粗粒砂層で層厚は８～15㎝である。下限は豊臣後期(1598～1615年)で、上限は明確でないが中世まで遡る。第４層上面で東区SK451などを検出した。NK96－１次調査の第４～５層に相当する。

第５層：黄褐色(10YR5/6)～明黄褐色(10YR6/8)の細粒～中粒砂層、極粗粒砂～細礫層からなる水成層である。おおむね水平ないし東から西へ傾くラミナがあるが、西から東へ急傾斜するラミナも見られる。層厚は70㎝以上である。第５層上面で東区SK553などを検出した。NK96－１次調査の第６層に当る。本層からは土師器甕１、７世紀中葉の須恵器蓋杯２、土師質蛸壺３が出土した(図８)。先述の浜堤3Aを構成する地層である。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．西区(図５・６・８)

・第５層上面

いくつかの小土壙があった。直径は0.20～0.40mで、深さは0.10～0.15mである。出土遺物から時期は決め難いが、中世後半～末の遺構であろう。

・第４層上面

中世末から豊臣期(1580～1615年)頃と推定される遺構である。

SK401は長さ1.55m、幅1.05m、深さ0.10mで、一段深くなった所に礎石状の石があった(図６)。北壁にかかるSK402・404は一連の遺構かもしれない。東西1.85m、深さ0.25mで、埋土は褐色(10YR4/4)シルト質粗粒～極粗粒砂層である。その東のSK406は一部のみの検出で、東へ広がっている。

SK405は長さ0.7m以上、幅0.60m、深さ0.20mである(図６)。遺構の時期より古い、14世紀代の瓦質土器羽釜５が出土した(図８)。SK407は直径0.6m以内、深さ0.25mで、埋土は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質細粒砂層であった。北壁にかかる柱穴状のSK408は、直径0.22m、深さ0.33mで、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂層であった。

・第３層上面

17世紀中頃～後半の遺構と推定される。

SK301は直径0.55m、深さ0.1m以上で、埋土はシジミ等の貝殻で占められていた。遺構の時期よりは古いと考えられる瀬戸美濃焼皿６が出土した(図８)。SK302は長さ0.70m、幅0.35m、深さ0.35mである(図６)。その東のSK303は深さ0.20mである。北壁にかかるSK304は第４層上面で平面形を把握したもので、埋土は細礫混り褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルト層であった。SK305は東西1.20m、南北0.9m以上、深さ0.45mであり(図６)、平面では明瞭に検出できなかったが、北壁に僅かに達する遺構であった。

・第2a層上面より上

第2a層上面は18世紀前～中葉の遺構面と推定され、本層に伴う遺構に200番台の番号を、より上から掘り込まれたと判断した遺構に二桁の番号を付した。

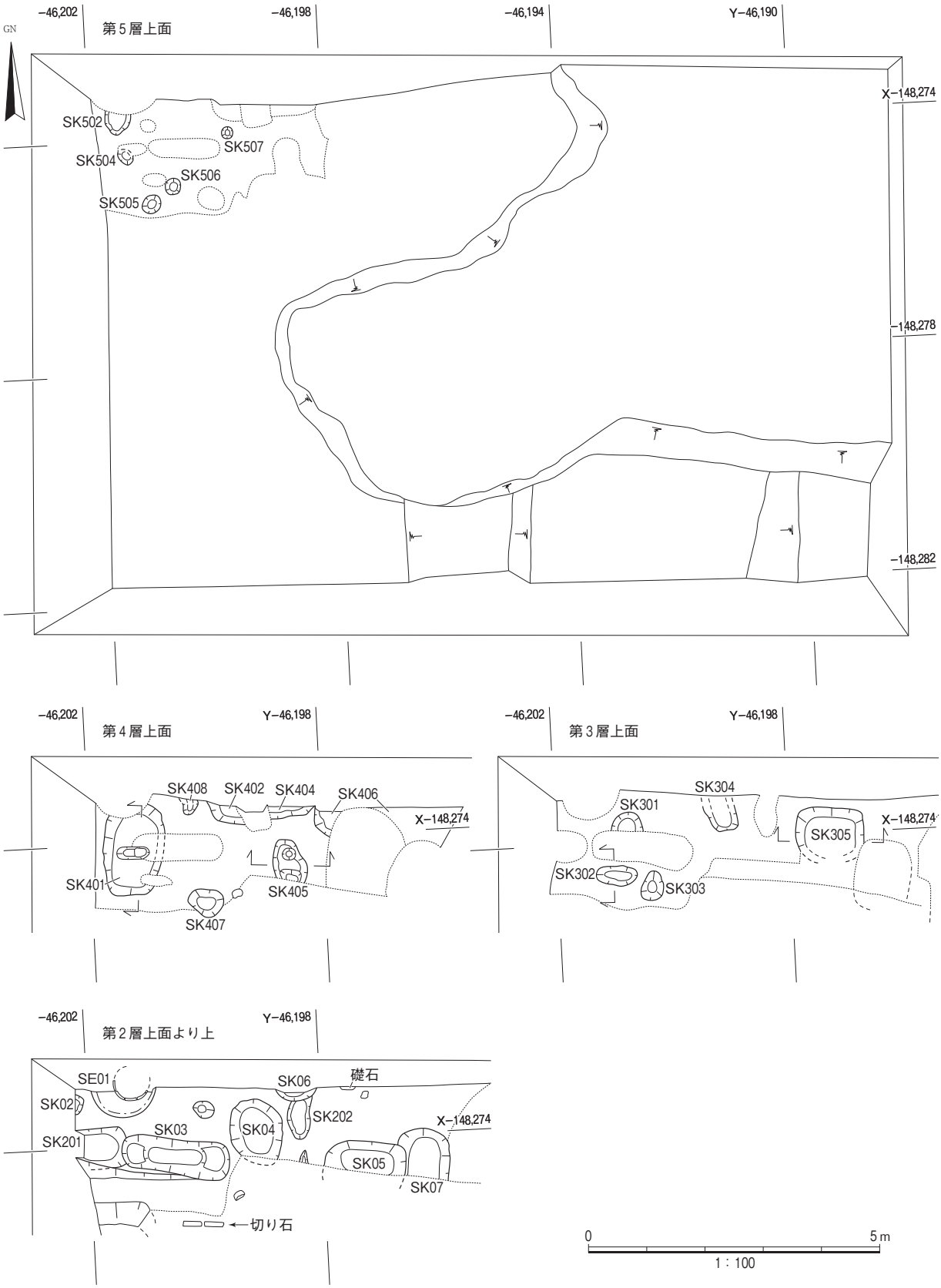

−46,202
−46,198
−46,194
Y−46,190
GN
第５層上面
X−148,274
SK502
SK507
SK504
SK506
SK505
−148,278
−148,282
−46,202
Y−46,198
第４層上面
SK408
SK402
SK404
SK406
X−148,274
SK401
SK405
SK407
−46,202
Y−46,198
第３層上面
SK304
SK301
SK305
X−148,274
SK302
SK303
−46,202
Y−46,198
第２層上面より上
SE01
SK06
礎石
SK02
SK202
X−148,274
SK03
SK04
SK201
SK05
SK07
←切り石
0
5ｍ
1：100

図５　西区遺構平面図

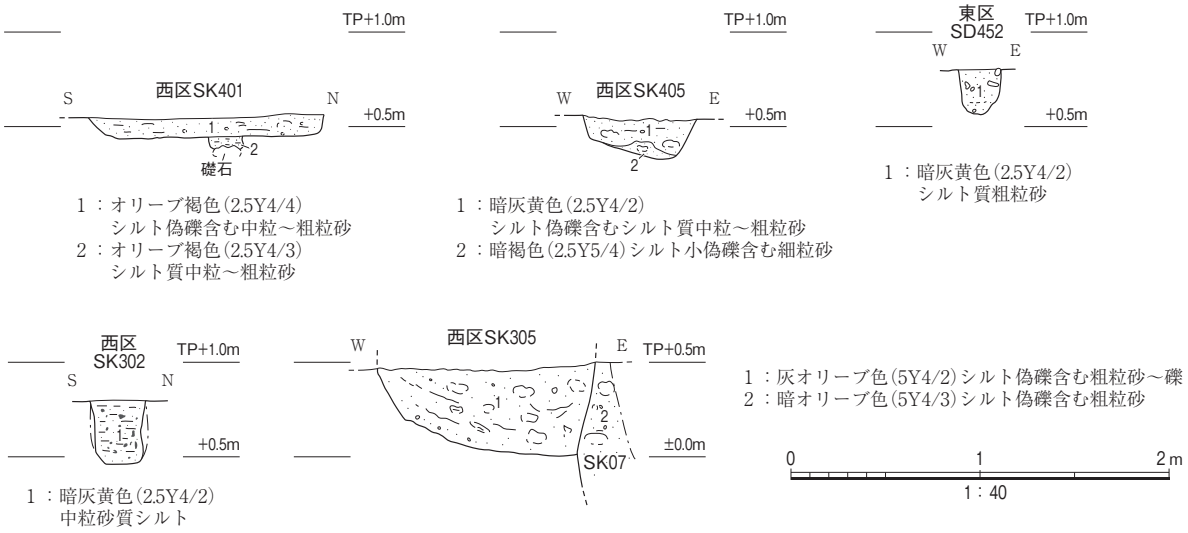


図６　遺構断面図

SK201は長さ0.9m以上、幅0.7m前後、深さ0.35mで、18世紀前半の遺構である。類似の東西に細長い土壙SK03(18世紀後半～19世紀初)に切られている。SK202は長さ約0.8m、幅0.45m、深さ0.25mであった。

平面では捉えていないが、北壁の観察から、第２層上面に柱穴状の遺構が東西に並んでいるように見える(図４)。第2a層上面には、SK202東の礎石とともに、塀や建物等があった可能性がある。SK202・03・05の形状と並び具合とあわせ、敷地西の南北道に面した東西方向の屋敷割がこの頃には成立していた可能性がある。

ｂ．東区(図６・７・８)

・第５層上面

北へ深くなるSK551と、南へ深くなるSK553があり、西壁の観察ではSK553が新しい。SK551は深さ0.4m以上で、下層がオリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂層、上層が細礫混り暗褐色(10YR3/4)シルト質中粒砂層で埋められていた。SK551からは15世紀代の瓦質土器羽釜４が出土した。

SK553は東西3.5m以上、深さ0.4m以上で、褐灰色(10YR5/1)シルト質中粒～粗粒砂層と第４層で埋められていた。中国産青磁碗等が出土し、豊臣期までは降らない。規模や緩やかな肩の特徴は、周辺で見つかっている水溜状の土壙と類似する。

東壁際のSK552は深さ0.15mで、形態はよくわからない。

・第４層上面

SK553とほとんど重なった場所にSK451があった。SK451は深さ0.45m以上で、埋土は褐灰色(10YR5/1)中粒～粗粒砂層であった。肥前陶器碗７が出土し、SK451が埋められたのは豊臣後期頃である。SK553からSK451へ、同様の遺構が踏襲された可能性がある。

SD452はSK451へ繋がる溝である。幅0.15～0.20m、深さ0.23mである(図６)。

・第3a・b層上面～第２層上面

細礫を多く混ぜた整地層の分布域を道路と推定しておく(SF354)。方向はよくわからないが、深いごみ穴SK350を避ければ東西の可能性がある。SF354では遺構面が二つあり、第3b層上面でSK351、

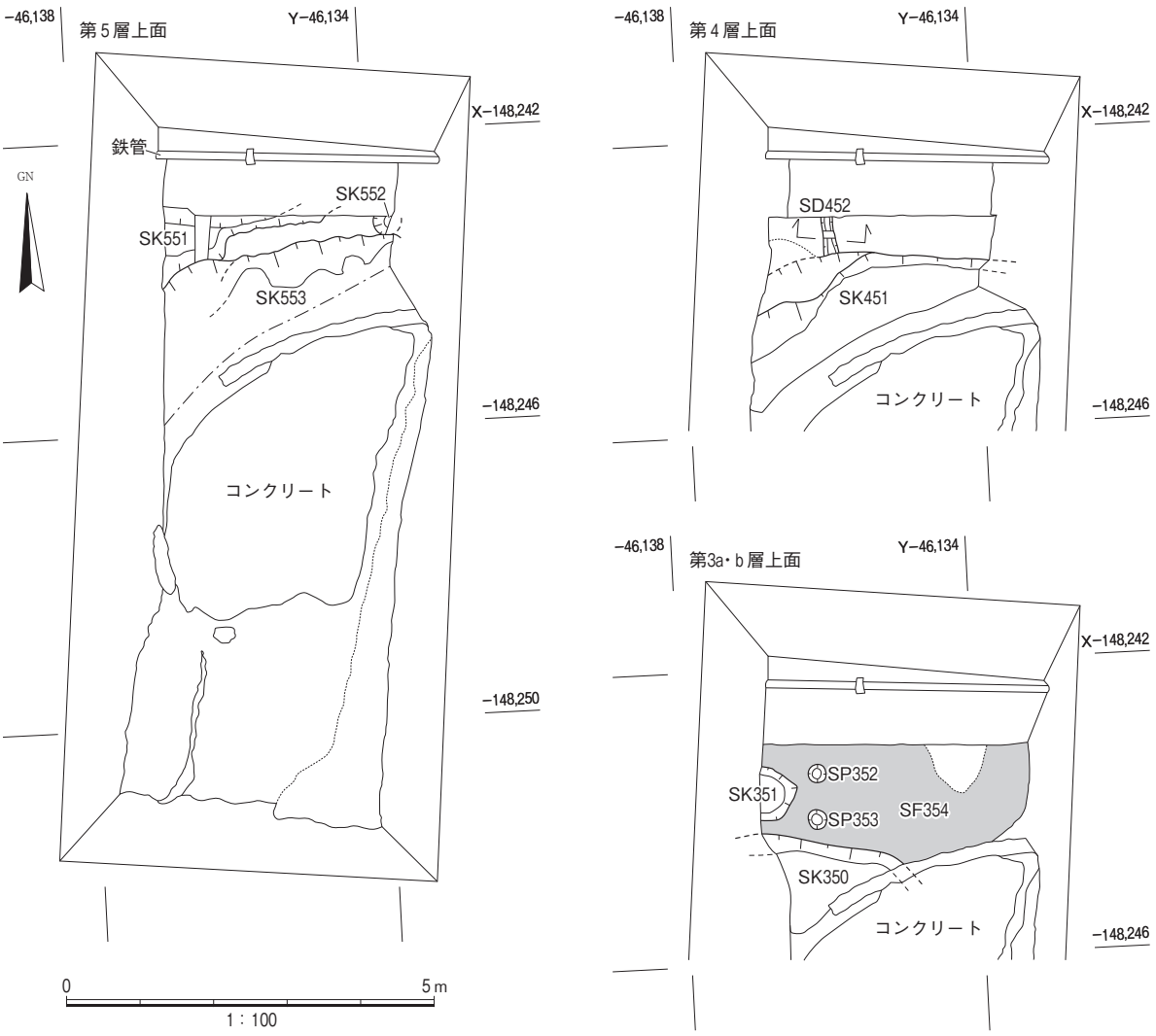


図7　東区遺構平面図

SP352・353、第3a層上面でSK350を検出した。

SK351は直径0.95m前後、深さ0.20mで、西区SK301と同様にシジミ等の貝殻が多量に捨てられていた。SP352は直径0.20m、深さ0.13m、SP353は直径0.25m、深さ0.35mである。

SK350は東西２m以上、南北1.5m以上、深さ0.7m以上である。底近くに炭層があり、下半は黒褐色(2.5Y3/2)中粒～粗粒砂層で埋められていた。土師器皿9・焙烙10、肥前陶器皿8、小判型の硯11が出土し、SK350は17世紀中～後葉の遺構である。上半(SK251)は第２層上層の灰黄色(2.5Y6/2)シルトや粘土・中粒砂で丁寧に埋められていた。

3)まとめ

今回の調査では、遺跡が立地する砂州から、中世の難波荘や近世の村落までの時期の地層や遺構を辿ることができ、それらはNK96－１次調査と対比が可能である。本来、周辺の地層や遺構はよく残っていると推定され、浪速元町遺跡は、発掘によって中世以降の大阪の拠点集落の形成過程を明らかにし得る有力地である。

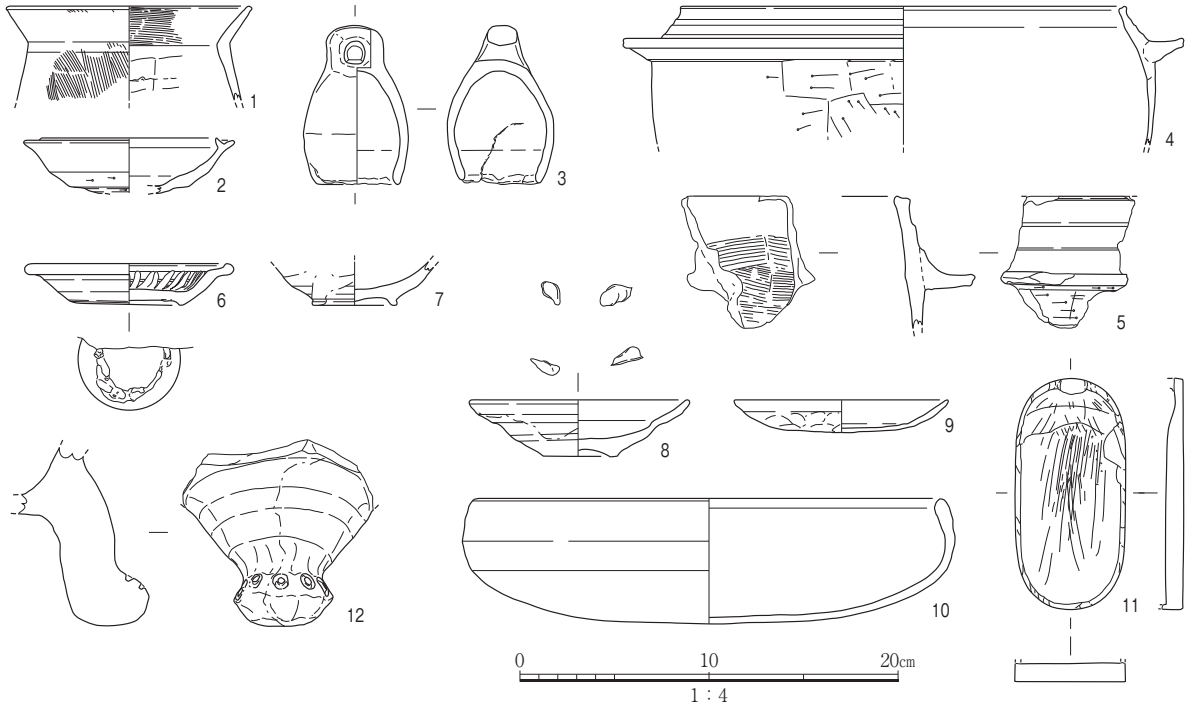


図８　出土遺物実測図

第５層（１～３）、東区SK551（４）、西区SK405（５）、西区SK301（６）、
東区SK451（７）、東区SK350（８～11）、第２層(12)

引用・参考文献

新修大阪市史編纂委員会ｓ1988、『新修大阪市史』第２巻、p.164

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「浪速元町計画による建設工事に伴う発掘調査（NK96－１）」：『平成８年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.91－100

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「浪速元町遺跡発掘調査（NK12－１）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』、pp.365－372

大阪文化財研究所2017、『浪速区元町二丁目７－27における建設工事に伴う浪速元町遺跡発掘調査（NB16－１）報告書』

趙哲済・中条武司2017、「大阪沿岸低地における古地理の変遷－「上町科研」以降の研究－」：『ヒストリア』264号、pp.３－23

浪速区敷津東三丁目１１－９における建設工事に伴う
敷津遺跡発掘調査(SX17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市浪速区敷津東３丁目11－９
調 査 面 積　　56㎡
調 査 期 間　　平成29年９月11日～９月14日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋工、清水和明

1）調査に至る経緯と経過

調査地は市営地下鉄大国町駅南側の国道25号線大国交差点北東角に近接する。調査地の東400m弱には今宮戎神社があり、その南は旧今宮村であった。今宮は、古くより朝廷に属して中世には「蛤売」など広く商業活動に従事した今宮供御人の本拠地とみられている。

調査地を含む敷津遺跡は大阪海岸低地上にある大阪湾に沿った難波砂州に立地する。敷津遺跡は本調査地に北接するSX08－１次調査地を中心とした半径150m程度の範囲で、東側は敷津小学校付近を境界とするが、既往の調査は遺跡北東外で進んできた。大阪木津卸売市場内では、2006～2009年度に３件の調査（SX06－１次・08－２次・09－１次）が行われ、13～14世紀の畠跡やハマグリ・シオフキなど貝や魚類が廃棄された遺構が見つかったことから、今宮供御人との関係を示唆する資料として注目されている［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008・2010b、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011］。その東側の敷津遺跡B地点（SX11－１次）でも13世紀の廃棄土壙が検出されている［大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013］。一方、SX08－１次調査地ではTP+0.1m［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010a］、敷津遺跡C地点（SX16－１次）ではTP+1.5m付近で海浜砂礫層が見つかり［大阪文化財研究所2017］、東から西へ低くなる砂州の堆積状況も明らかになりつつある。

大阪市教育委員会が行った試掘調査で、地表下約1.3m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたことにより、発掘調査を実施することとなった。

調査は平成29年９月11日から開始した。旧建物の解体時における整地層（第０層）および第１～４層は重機で掘削し、地層断面のみを記録した。地表下約1.3mの第５層から同約1.7mの第６層までは遺構・遺物の検出と写真・図面などによる記録作業を行い、それ以下は第８層までを深掘りしたトレンチの

図１　調査地位置図

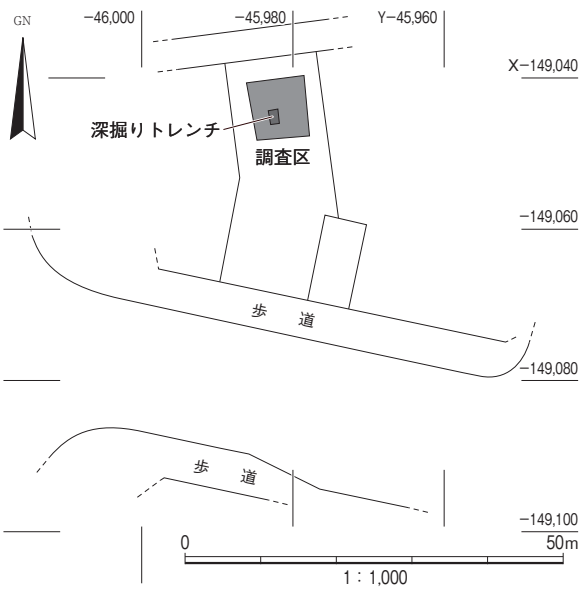


図２　調査区配置図

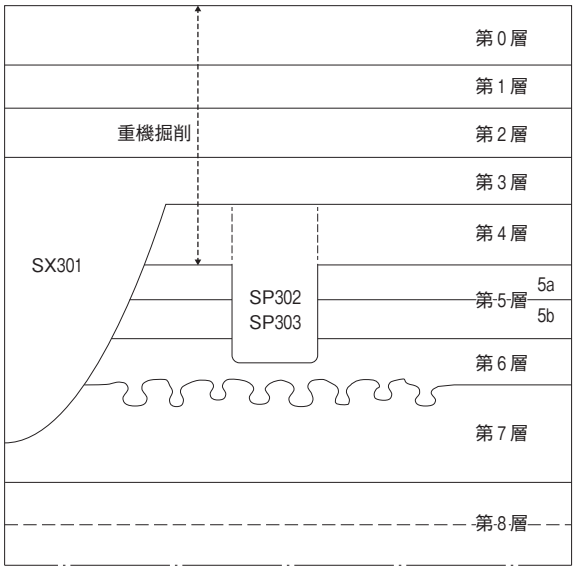


図3　地層と遺構の関係図

断面のみで確認し、同年９月14日に機材を撤収して現地における全ての作業を終了した。

なお、方位は現場で記録した街区図を１/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３・４)

調査区の現況地形は、およそTP+2.0mでわずかに西へ低くなっているが、地層断面で確認できるほどではなく、概ね水平に堆積している。

第０層：旧建物解体後の整地層で、最大層厚は約80cmである。

第１層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土・シルト・砂が混在する地層で、最大層厚約30cmの現代整地層である。

第２層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極粗粒砂～細礫混りシルト質中粒砂層で最大層厚約50cmの作土層である。

第３層：黄褐色(2.5Y5/3)極粗粒砂～細礫質中粒砂層で最大層厚約40cmの作土層である。第２・３層の年代は下位のSX301より新しく近世後半から近代にかけてであろう。

第４層：にぶい黄橙色(10YR6/4)細礫質中粒砂層で、最大層厚約20cmの作土層である。調査区南部で本層上面から南へ落ち込むSX301が掘られており、18世紀代の肥前磁器碗・皿などが出土しているため、本層の年代はそれ以前に求められる。

第５層は上下の第5a層・第5b層に２分した。本層の上面精査ないし掘削中に瓦器2と須恵器5が、また本層以下を掘削中に土師器3・4が出土したため、13世紀代の地層と考えられる。

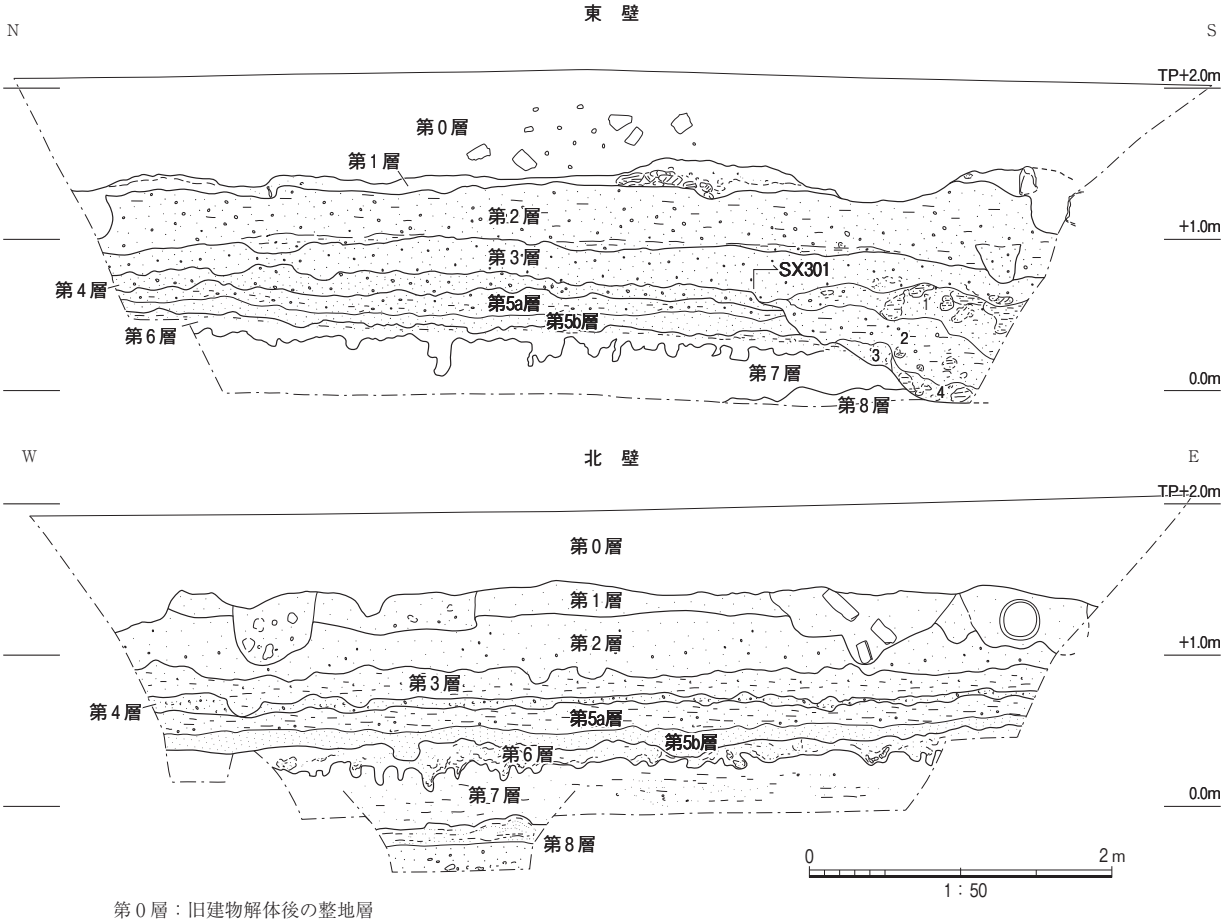
第5a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫混りシルト質中粒砂層で最大層厚約20cmの作土層である。本層上面で上述のSX301のほかSP302・303を検出した。

第5b層：黄褐色(2.5Y5/4)極細粒～細粒砂層でわずかにシルト質である。水成層起源とみられるがラミナは認められず第5a層の耕作による擾乱を受けたものであろう。

第６層:暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質極細粒～極細粒砂層で最大層厚約20cmの水成層である。調査区北壁西よりでは本層上面で第5b層で埋まる小さな凹みがあるが、平面調査で遺構は検出されなかった。また、踏込みによる下面の凹凸が多数ありラミナの変形も明瞭である。本層からは13世紀前～中葉の瓦器1が出土した。

第７層：黒色(5Y2/1)細礫混り極細粒砂層ないし泥炭質シルト～シルト質極細粒砂層で、最大層厚約50cmの植物遺体を多く含む湿地性堆積層である。出土遺物はなく時期は不明である。

第８層は海浜付近で形成された砂礫層と離水して陸地化が進んだ時期に堆積した地層とみられる。



第０層：旧建物解体後の整地層
第１層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土・シルト・砂層(現代整地層)
第２層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極粗粒砂～細礫混りシルト質中粒砂層(作土層)
第３層：黄褐色(2.5Y5/3)極粗粒砂～細礫質中粒砂層(作土層)
第４層：にぶい黄橙色(10YR6/4)細礫質中粒砂層(作土層)
第5a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫混りシルト質中粒砂層(作土層)
第5b層：黄褐色(2.5Y5/4)極細粒～細粒砂層(水成層起源でラミナ未確認)
第６層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質極細粒～極細粒砂層(水成層、ラミナの変形が明瞭)
第７層：黒色(5Y2/1)含植物遺体・細礫混り極細粒砂、泥炭質シルト～シルト質極細粒砂層(ラミナ未確認)
第８層：(上部)灰色(10Y4/1)シルト質泥炭、極細粒砂の薄層ラミナの互層(離水期の堆積層)
：(下部)黒褐色(10YR2/2)中礫～極粗粒砂層(海成砂礫層)
SX301：(１)暗灰黄色(2.5Y4/2)含暗灰黄色シルト質粗粒砂偽礫・細礫、中粒～粗粒砂層
：(２)暗灰黄色(2.5Y4.5/2)含暗灰黄色シルト質粗粒砂偽礫、細礫混りシルト質中粒～粗粒砂層
：(３)暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒～粗粒砂層
：(４)黒褐色(10YR2/2)含灰色シルト偽礫、シルト質細粒砂層

図４　調査区地層断面図

上部は灰色(10Y4/1)シルト質泥炭と極細粒砂の薄層ラミナによる互層で、層厚は20cm以下である。離水期の堆積層とみられる。下部は黒褐色(10YR2/2)中礫～極粗粒砂層で層厚は20cmを確認した。海浜砂礫層である。湧水のためラミナの観察は一部であるが、ほぼ水平とみられた。いずれも出土遺物はなく時期は不明である。

ⅱ)遺構と遺物(図５～７)

本調査では第６層上面(図５)・第5a層上面(図６)で遺構検出を行ったが、遺構が見つかったのは第5a層上面のみであった。図５には第７層以下の地層を確認したトレンチの位置のみを記した。

ａ．第６層出土遺物(図７)

本層の掘削中に瓦器椀１が出土した。浅い体部に低い高台がつくもので、外面は上部がヨコナデ、下部がユビオサエである。底部内面に平行する暗文が疎らにつけられている。13世紀前～中葉のもの

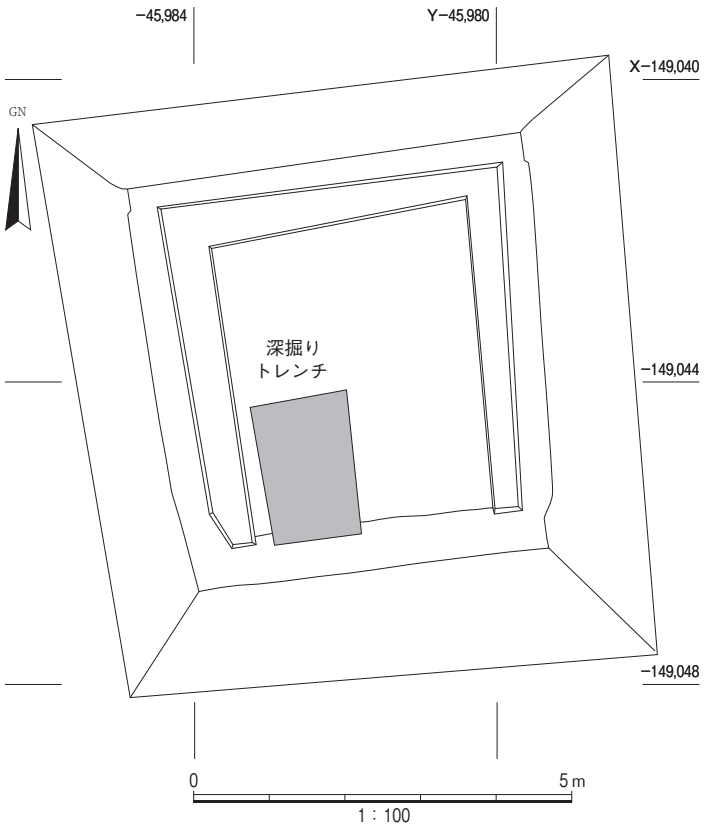


図５　第６層上面平面図

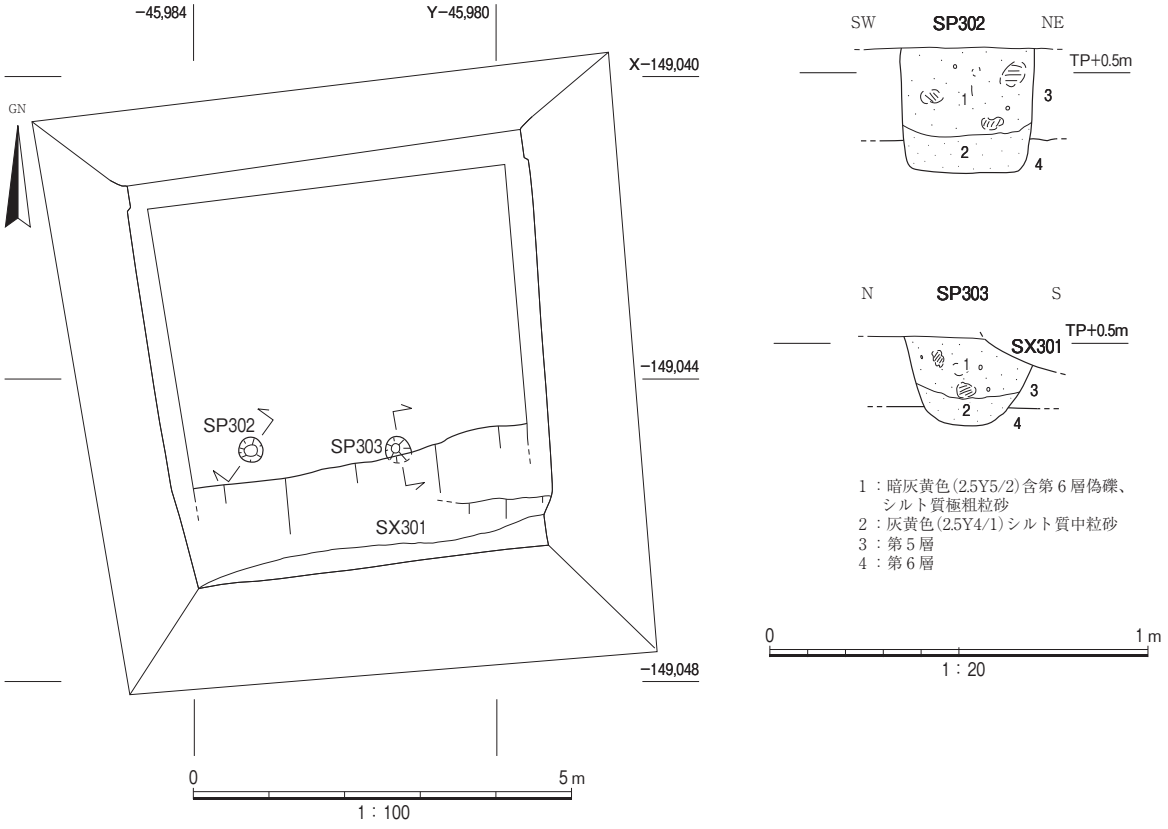


図６　第5a層上面遺構平面・断面図

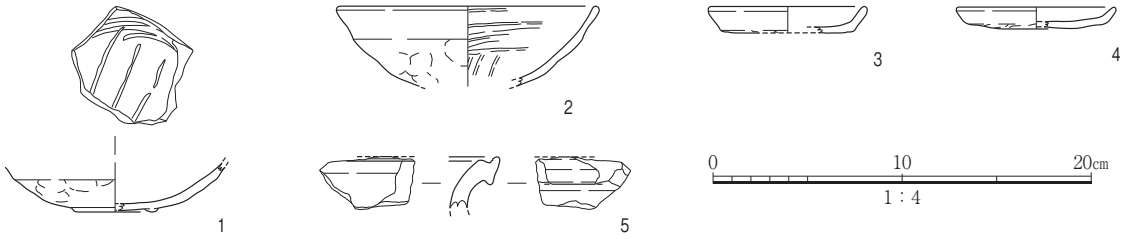


図７　出土遺物実測図
第６層（１）、第５層以下（３・４）、第５層（２・５）

である。

ｂ．第5a層上面遺構（図６・７）

本層上面で検出した遺構には、SX301・SP302・303がある。

SX301は既述したとおり第４層上面の遺構である。調査区の南端付近で東西に延び、南へ落ち込む。方位はE11° Nである。深さは0.8mで、埋土は細分されるものの、シルトないしシルト質粗粒砂の偽礫を多く含む暗灰黄色～黒褐色の細礫混りシルト質中粒～粗粒砂層で埋められている（図４東壁）。底に水成ないし水漬きの堆積物は認められなかった。図化していないが18世紀代の肥前磁器碗・皿が出土し徳川期に属する。

SP302はSX301の北にある小穴で、直径0.35m、深さ0.3mである。埋土の下部は灰黄色（2.5Y4/1）シルト質中粒砂、上部は暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト質極粗粒砂で第６層の偽礫を含んでいる。出土遺物はなく本来の掘込み面は不明であるが、埋土はSX301と大差ないため第４層上面であろう。

SP303はSP302の東約２mにある小穴で、直径0.35m、深さ0.25mである。埋土はSP302と同一で、出土遺物はなかった。南部をSX301に壊されているが、埋土からはSP302と同じく徳川期の遺構と考えられよう。

第５層の掘削中に瓦器椀２が、上面の精査中に須恵器甕５が出土した。２は底部を欠くが、１と同じ型式で、耕作により巻き上げられた可能性がある。５は東播系の須恵器で、口縁端部を上下につまんで肥厚させている。そのほか、本層以下を掘削したトレンチからは土師器皿３・４が出土した。短い立ち上がりの小皿で、13世紀中～後葉のもので、第５層の時期を示す。

３）まとめ

本調査地では中世以前に形成された海浜砂礫層を検出し、次第に離水が進んで13世紀頃には湿地帯になっていた状況を確認することができた。少量ながら作土層から出土した13世紀代の遺物は、これまでの調査結果と同じく、中世の今宮供御人の活動が付近に及んでいたことを示すものと考えられるが、遺跡の中心は本調査地より北東側にあたると予想される。近世には落込みや小穴も確認された。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「敷津遺跡発掘調査（SX06－１）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2006）』、pp.283－294

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010a、「敷津遺跡発掘調査（SX08－１）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地

発掘調査報告書(2008)』、pp.449－453
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010b、「敷津遺跡発掘調査(SX08－２)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.455－460
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「敷津遺跡発掘調査(SX09－１)報告書」:『平成21年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)』、pp.213－222
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「敷津東遺跡B地点発掘調査(SX11－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.445－450
大阪文化財研究所2017、『浪速区敷津東三丁目４－１における建設工事に伴う敷津遺跡C地点発掘調査(SX16－１)報告書』

西淀川区竹島三丁目12における建設工事に伴う
竹島遺跡発掘調査(TK17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市西淀川区竹島３丁目12
調 査 面 積　　100㎡
調 査 期 間　　平成29年４月４日～４月13日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長 高橋工、絹川一徳

1）調査に至る経緯と経過

調査地は新たに発見された室町～江戸時代の複合遺跡であり、竹島遺跡と命名された（図１）。調査地の北西側400mには1937（昭和12）年に工場建設に伴って弥生～平安時代の土器が多数発見された加島遺跡、東側約500mには古代～近世の複合遺跡である加島１丁目所在遺跡が所在する［大阪文化財研究所2011］。加島一帯は中世に「加島鍛冶衆」と呼ばれる集団が盛んに鉄器生産を行っており、江戸時代（18世紀中頃）には調査地の北側約600mで加島鋳銭所（現在の香具波志神社境内から富光寺にかけての敷地）が設置されていた。

調査地一帯は淀川の沖積作用によって陸化が進んだデルタ地帯で、淀川河口には多くの島（中州）が形成された。当地の「竹島」や「加島」・「御幣島」など島が付く地名が多いのは、古代に天皇が即位ごとに周辺の海で行った八十島祭に由来する中州の島々であったことによる。調査地の南隣には1594（文禄３）年に勧請された竹島天神社の跡地があり、この頃には調査地周辺には集落があったとみられるが、加島遺跡のように陸化がいち早く進んだ場所では弥生時代から集落が営まれ、平安時代以降は淀川水運の要衝として栄えた［新修大阪市史編纂委員会1988、趙哲済2005、大阪文化財研究所2011・2012］。

今回の調査に先行して行われた大阪市教育委員会による試掘調査において、地表下約0.8m以下の深さで中世の遺構と遺物の存在が確認された。この遺構面の年代や遺構・遺物の分布状況と当該地の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的として本格的な発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は４月４日から着手した。予定箇所に東西10m×南北10mの100㎡の調査区を設定し（図２）、重機により現代の盛土や攪乱土を掘削した。その後、以下の地層を人力により掘り下げながら、

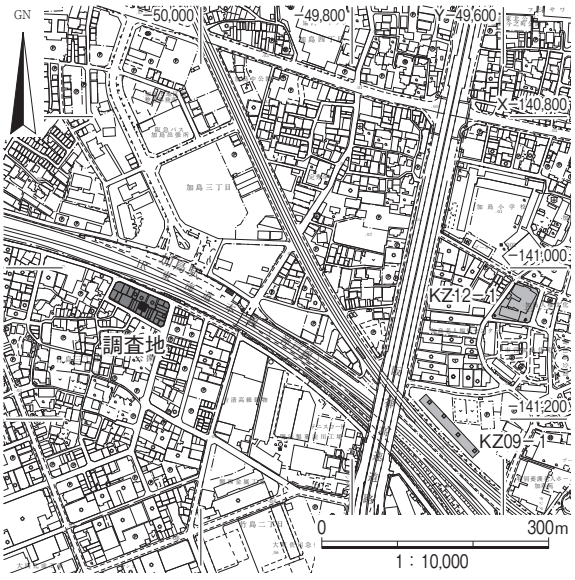


図１　調査地の位置

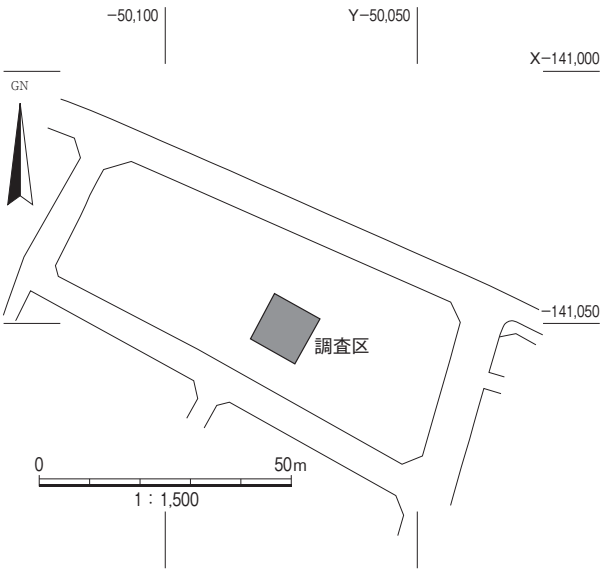


図２　調査区の配置図

遺構面の精査と遺構の検出・掘削、出土遺物の採集、必要な実測作業と写真撮影などの記録作業を適宜実施した。４月13日に調査に必要な現地作業がすべて終了した。

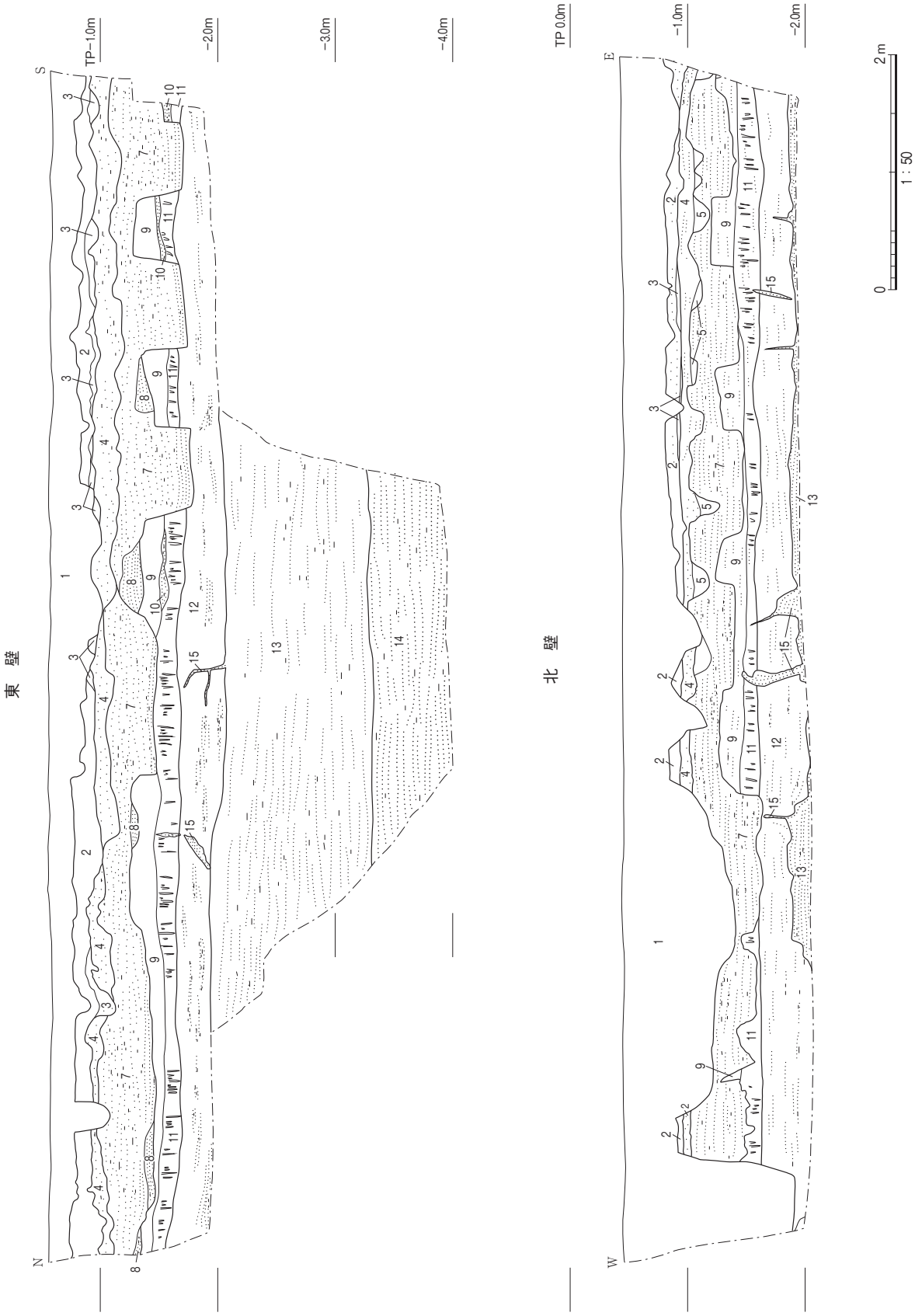


図３　東壁・北壁地層断面図

なお、基準点はMagellan社製ProMark3で測位を行い、本報告書で用いた方位と座標値は世界測地系座標(平均直角座標系第Ⅵ座標系)を基準にしている。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±○mと記した。

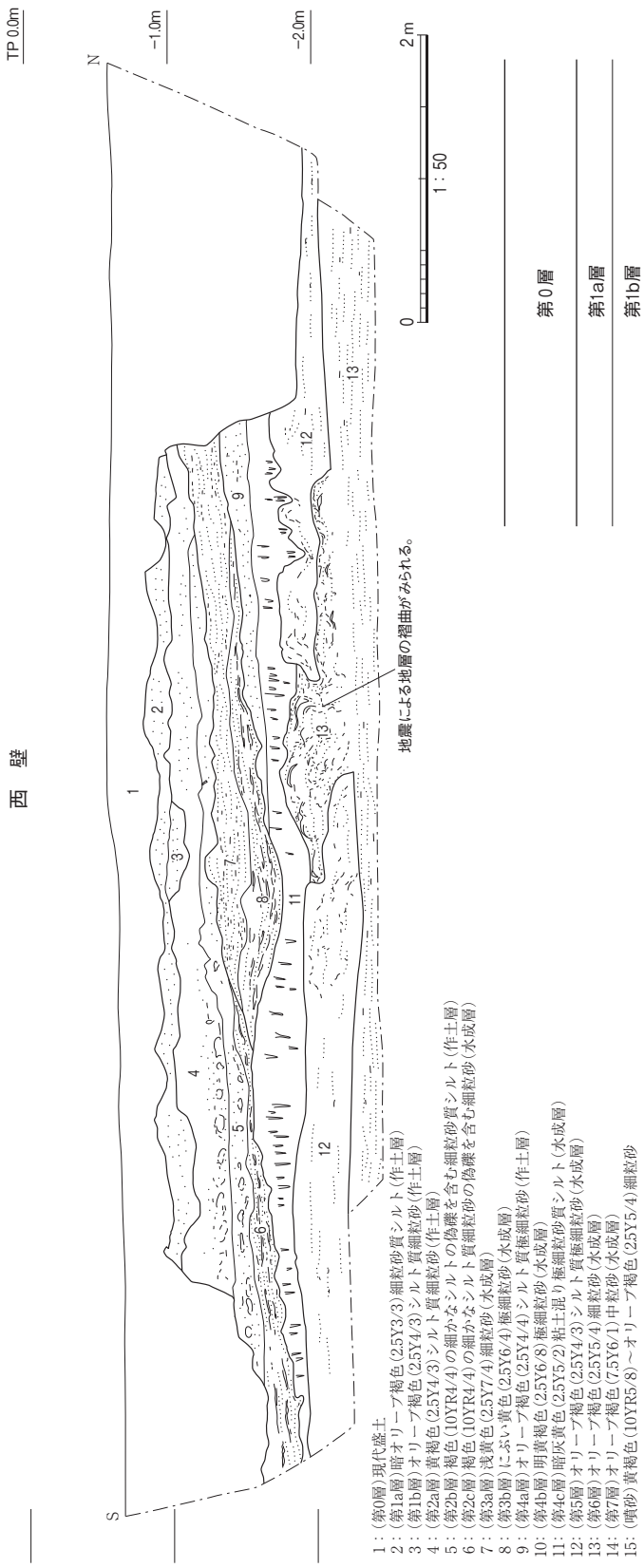


図4　西壁地層断面図

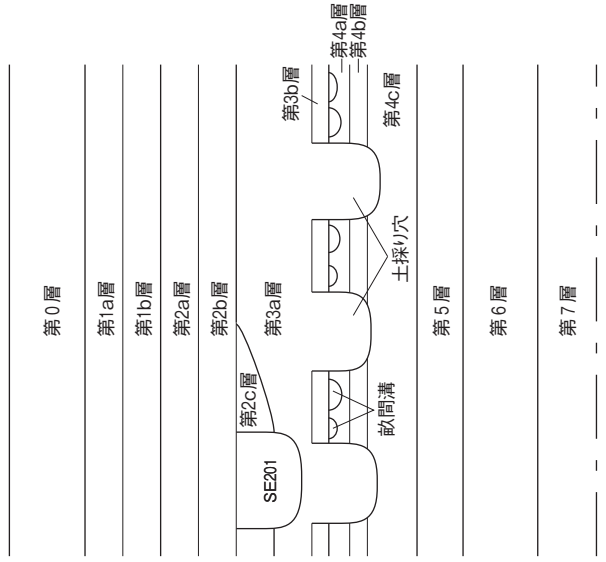


図5　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序(図3～5)

調査地は平坦な地形で、現地表の標高はTP－0.5m前後であった。以下の第0～7層を確認した。

第0層：調査地の全域をほぼ均等に覆う現代盛土で、層厚は50～150cmであった。

第1a層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルトの作土層で、層厚は15～20cmであった。旧表土で、近代以降の地層である。

第1b層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂の作土層で、調査区内で断続的に堆積していた。層厚は5～10cmで、近代以降の地層である。

第2a層：黄褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂の作土層で、層厚は10～30cmであった。本層からは肥前磁器、瀬戸美

濃焼磁器が出土した。19世紀後半の地層である。

第2b層：褐色(10YR4/4)の細かなシルトの偽礫を含む細粒砂質シルトの作土層で、調査区の西部に堆積していた。層厚は10～15cmであった。本層からは19世紀の肥前磁器が出土した。

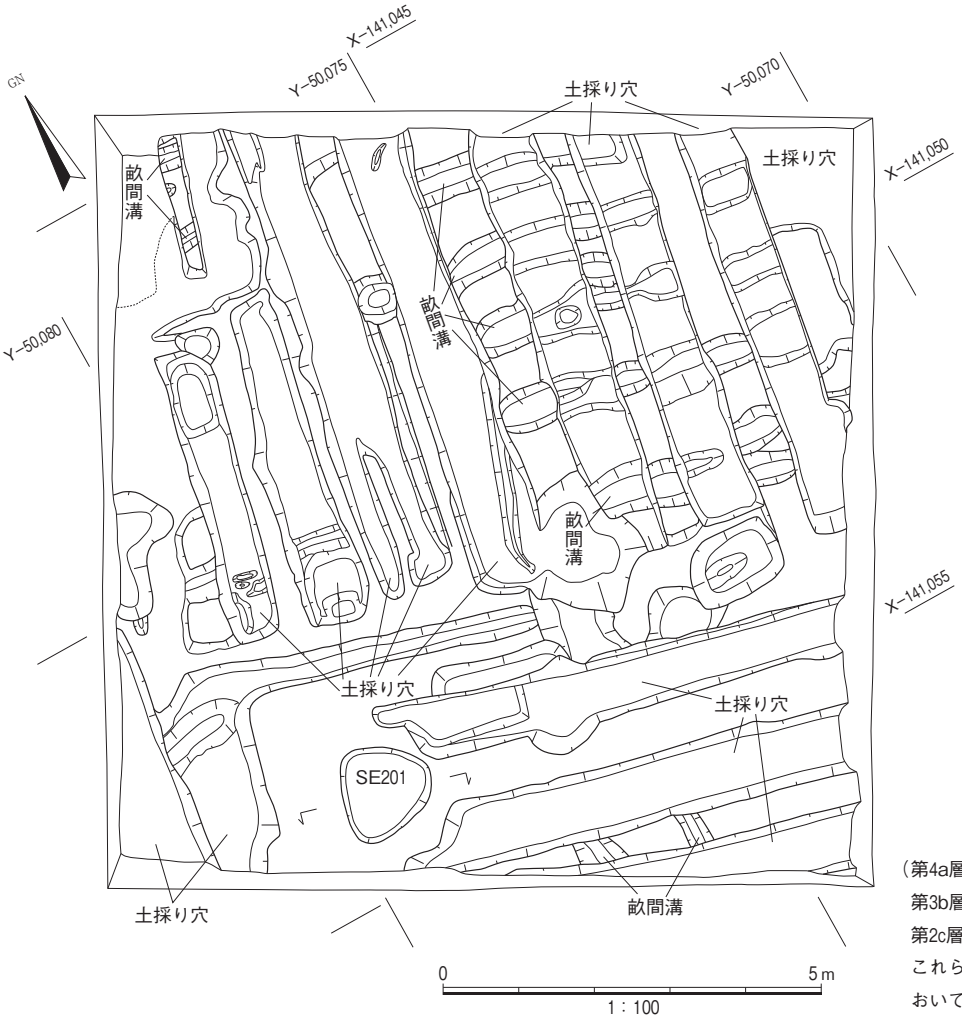
第2c層：褐色(10YR4/4)の細かなシルト質細粒砂の偽礫を含む細粒砂の水成層で、調査区の南西部で部分的に堆積していた。層厚は約20cmであった。本層からは18世紀後半の肥前磁器・陶器が出土した。また、第2c層上面で井戸SE201を検出した。

第3a層：浅黄色(2.5Y7/4)細粒砂の水成層で、層厚は50～60cmである。本層からは18世紀の肥前磁器が出土した。

第3b層：にぶい黄色(2.5Y6/4)極細粒砂の水成層で、調査区内に断続的に堆積していた。層厚は10～20cmである。本層の上面で溝状に掘られた土採り穴を検出した。

第4a層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒砂の作土層で、層厚は約20cmである。本層の上面で畝間の溝群が検出され、中世後半の灰釉陶器甕、土師器椀、備前焼擂鉢、瓦、鍛冶滓などが出土した。

第4b層：明黄褐色(2.5Y6/8)極細粒砂の水成層で、調査区の東側に断続的に堆積していた。層厚は



（第4a層上面遺構：畝間溝、
第3b層上面遺構：土採り穴、
第2c層上面遺構：SE201。
これらの遺構は第4a層上面において一括して検出した）

図6　遺構平面図

５～10㎝である。第4b層以下からは遺物は出土しなかった。

第4c層：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土混り極細粒砂質シルトの水成層で、酸化鉄のうん管状斑紋が発達する。層厚は15～35㎝である。

第５層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂の水成層で、層厚は30～50㎝である。

第６層：オリーブ褐色(2.5Y5/4)細粒砂の水成層で、層厚は約120㎝である。上面には本層から派生する噴砂が認められた。

第７層：オリーブ褐色(7.5Y6/1)中粒砂の水成層で、層厚は約70㎝以上である。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．中世の遺構と遺物(図６・８)

第4a層上面で東南東－西北西方向に延びる畝間とみられる溝群を検出した。幅0.4～0.6m、深さは0.2～0.3mで、埋土はオリーブ褐色のシルト質細粒砂であった。後述する土採り穴によって削平されていた。第4a層からは土師器椀１、備前焼擂鉢２が出土した。１は鎌倉時代、２は室町時代の遺物とみられる。この層から出土した遺物は少ないが、近世のものが認められないことから畝間の溝群もおおむね中世の遺構と推定される。

ｂ．近世の遺構と遺物(図６～８)

第3b層上面で溝状に掘られた土採り穴を検出した。土採り穴は北北西－南南東方向に７条、東北東－西南西に３条が認められ、長さ４ｍ以上、幅0.6～1.0m、深さ0.2～0.5mで箱形の断面を呈する。下層の作土の採取が目的であったと考えられる。埋土は第3a層の細粒砂が充填していることから、第3b層の薄い水成層が堆積した後に土採りが行われ、埋め戻されることがなく、再び水中に没したようである。第3a層からは17世紀の肥前磁器とみられる青磁碗の細片が出土しており、土採りも同時期に行われたと考えられる。

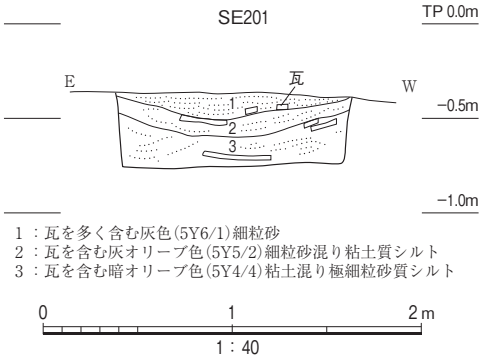


図７　SE201断面図

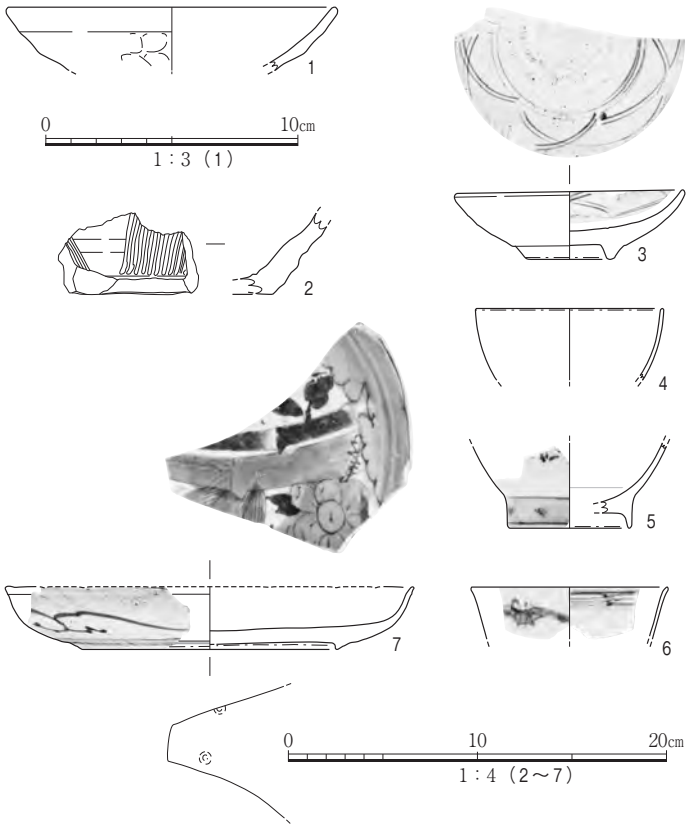


図８　出土遺物実測図

第4a層(１・２)、SE201(３)、第2c層(４)、第2b層(５・７)、第2a層(６)

第2c層上面で第2b層の時期に掘られた野井戸とみられるSE201を検出した。埋土からは井戸瓦が出土しており、本来はこれらの瓦が井戸側として組まれ、井戸の廃絶時に解体されたのであろう。ほかにSE201からは肥前磁器皿３が出土した。見込みは蛇の目釉剥ぎが施されている。18世紀後半のものである。

第2c層からは４、第2b層からは５・７、第2a層からは６が出土した。肥前磁器碗４は口縁に口紅（鉄錆）を引いたもので18世紀、肥前磁器の広東碗５・皿７はいずれも18世紀後半～19世紀初頭、６は端反りの瀬戸美濃焼磁器碗で19世紀第２四半期のものであろう。

３）まとめ

調査地一帯に砂州が形成され、土地の開発が始まったのは中世以降である。周辺で行われたKZ09－１次調査でも鎌倉～室町時代の遺構が見つかっており、第4a層上面で検出した畝間と同様に水際には近接していたものの、陸化が進んだ場所を選びながら耕作地として利用が始まったものとみられる。ただし、その後も幾度か水成層に覆われることから、低湿な環境は近世に至るまで続いたようである。調査地の南側に隣接する敷地に天神社が勧請されたのが1594（文禄３）年であることから、この頃には周辺に集落が営まれたのであろう。第3b層上面で検出された土採り穴もこうした周辺の開発に伴って掘削されたものとみられる。

引用・参考文献

新修大阪市史編纂委員会1988、『新修大阪市史』第１巻、大阪市

趙哲済2005、「河内平野の古地理変遷」：平野区誌編集委員会編『平野区誌』、p24

大阪文化財研究所2011、『大阪市淀川区加島１丁目所在遺跡発掘調査報告書』

大阪文化財研究所2012、『淀川区加島１丁目（加島人権文化センター）における埋蔵文化財試掘調査（KZ12－１）報告書』

淀川区宮原三丁目３－９他３筆における建設工事に伴う
宮原３丁目所在遺跡発掘調査(MH17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市淀川区宮原３丁目３－９他３筆
調 査 面 積　　約600㎡
調 査 期 間　　平成29年10月２日～11月21日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、絹川一徳、桑原武志

1）調査に至る経緯と経過

調査地は新たに発見された、中世～近世の集落遺跡である宮原３丁目所在遺跡に当る（図１）。調査地の北東、JR・地下鉄新大阪駅の周辺には宮原遺跡があって、東西500m、南北250mほどの広がりをもつ。宮原には、文献史料によれば13世紀頃から宮原荘などの荘園があって、領主として南都の社寺の名もみえる。宮原遺跡では12～15世紀の集落に関係する遺構や遺物が発見され、上の荘園との関係がみとめられる。宮原遺跡の東には西淡路１丁目所在遺跡と崇禅寺遺跡が展開し、前者では古墳時代前期～中世の遺構・遺物が、後者では弥生時代末～中世の遺構・遺物が発見されている。特に崇禅寺遺跡では、埴輪片を含む墳丘崩落土[大阪府教育委員会2003]が発見されるなど、古墳時代中期の墳墓も存在するとみられ、注目される。

今回の調査地は宮原遺跡の南西約300mに当る。南にはMH09－１次調査のⅢ区調査地があって、弥生時代末～古墳時代中期の遺物が出土し、江戸時代の耕作に係る遺構や、遺物が出土している[大阪文化財研究所2010]。

当地では、大阪市教育委員会による試掘調査で、近世以前の遺構面や遺物包含層が発見され、地表下1.8m以下について発掘調査が必要と判断された。これをうけて本調査が行われることとなり、頭書の日程で発掘調査を行った。発掘調査は、建築工事側による土留め・杭打ち工事の後に行い、土留め範囲内の600㎡について行うこととした（図２）。掘削は､瓦礫を含む現代の地層の下面（地表下約1.8m）までを重機によって行い、それ以下の地層の掘下げ、遺構検出、遺構の掘下げは人力によった。土留め支保工の強度の関係から、地表下3.3mを掘削の限界とした。途中、適宜に写真撮影・平面・断面図によって記録を作成した。なお、本報告で用いた基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、方

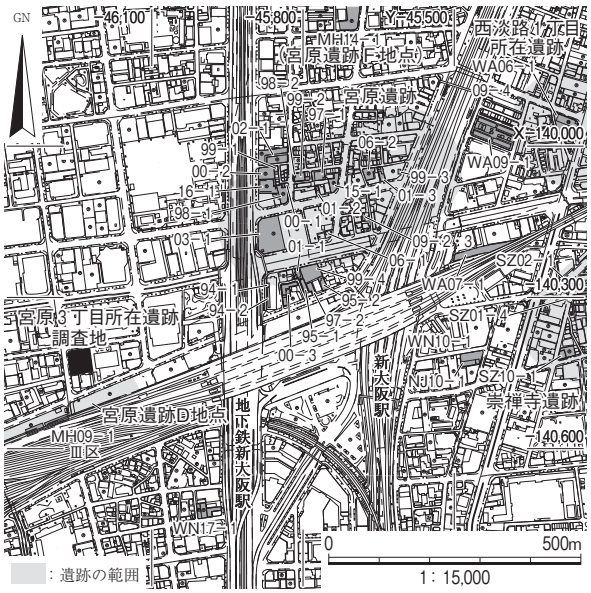


図１　調査地位置図

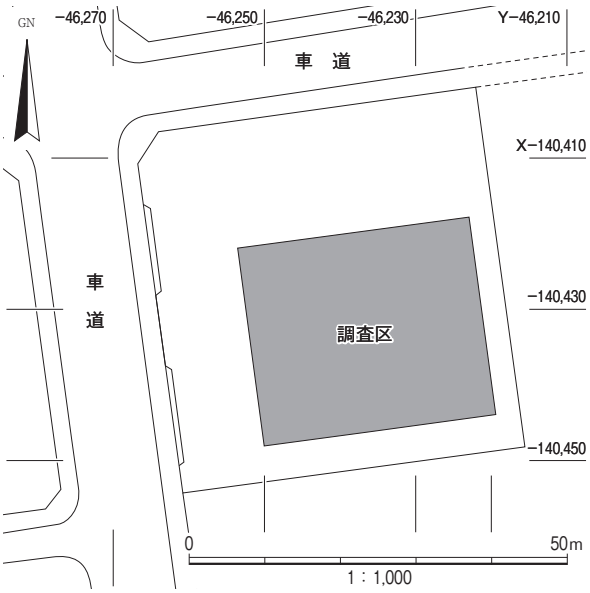


図２　調査区配置図

位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±○mと記した。

2)調査の結果

ⅰ)層序(図3・4、図版1)

調査地の地表面はTP+1.5～1.1mで、北へ向ってわずかに下がっていた。地表面を構成する現代の盛土層の下で、現代の作土以下の1～3層をみとめることができた。以下、北壁の地層で代表して記載する。

第1層：現代の作土層で、第1a・1b層に細分することができた。第1a層は灰褐色(7.5Y4/2)中粒砂混りシルト質粘土からなる水田作土である。上位層の盛土が行われる際に上面を削剥され、遺存する層厚は5㎝ほどであった。本層下面で鋤溝が検出された。

第1b層はオリーブ黒色(7.5Y3/2)細粒砂混り粘土質シルトからなる作土層で、層厚は10㎝である。本層中には、関西系陶器・磁器から煉瓦、プラスチック片までが含まれ、19世紀から現代までの間に営まれた水田の作土である。本層下面で鋤溝が検出された。

第2層:作土層で第2a･2b･2c層に細分することができた。第2a･2b層中には瓦器、瀬戸美濃焼陶器、肥前陶器・磁器、関西系陶器などが含まれ、19世紀前半まで営まれた耕作地の作土である第2c層からは遺物は出土しなかったが、第2a・2b層には瓦器片が含まれた。このことから、第2c層が中世に遡るか、あるいは、第2層に先行する中世の作土層があった可能性が考えられる。第2層は調査区北半部で厚く堆積し、第2c層の下面は南半部で約20㎝低くなっていた(図4西壁地層断面図)。南半部の本層以下では遺構は検出されなかった。

第2a層は灰褐色(7.5Y4/2)細礫を含む細粒砂質シルトからなり、層厚は15～30㎝である。

第2b層は暗オリーブ色(5Y4/3)細礫を含む粘土混り細粒砂質シルトからなり、層厚の最大は15㎝で、調査区北半部にあり、南へ向って層厚を減じ南半部では分布しない箇所もあった。本層上面では畝間群が検出された。

第2c層は灰色(7.5Y4/1)細粒砂を含むシルト質粘土からなり、層厚は20㎝である。調査区の北半部にのみ分布し、本層上面で土壙・畝間などが検出された。

第3層：氾濫性堆積層で、第3a・3b層に細分することができた。弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を含み、この頃に形成された地層である。

第3a層は灰オリーブ色(5Y5/2)砂礫からなり、層厚は20㎝である。

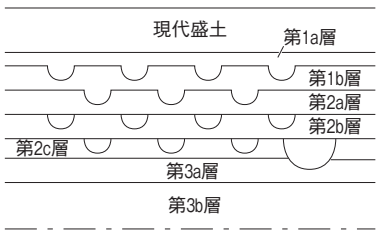


図3　地層と遺構の関係図

第3b層は灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒～極粗粒砂からなり、層厚は40㎝以上である。なお、調査区中央部で掘削限界の地表下3.3m(TP－1.8m)まで部分的に深掘りを試みたが、第3層と同様な氾濫性堆積層が続いていた。

ⅱ)遺構と遺物(図5～9)

検出された遺構はすべて中世から近世にかけて継続された耕作

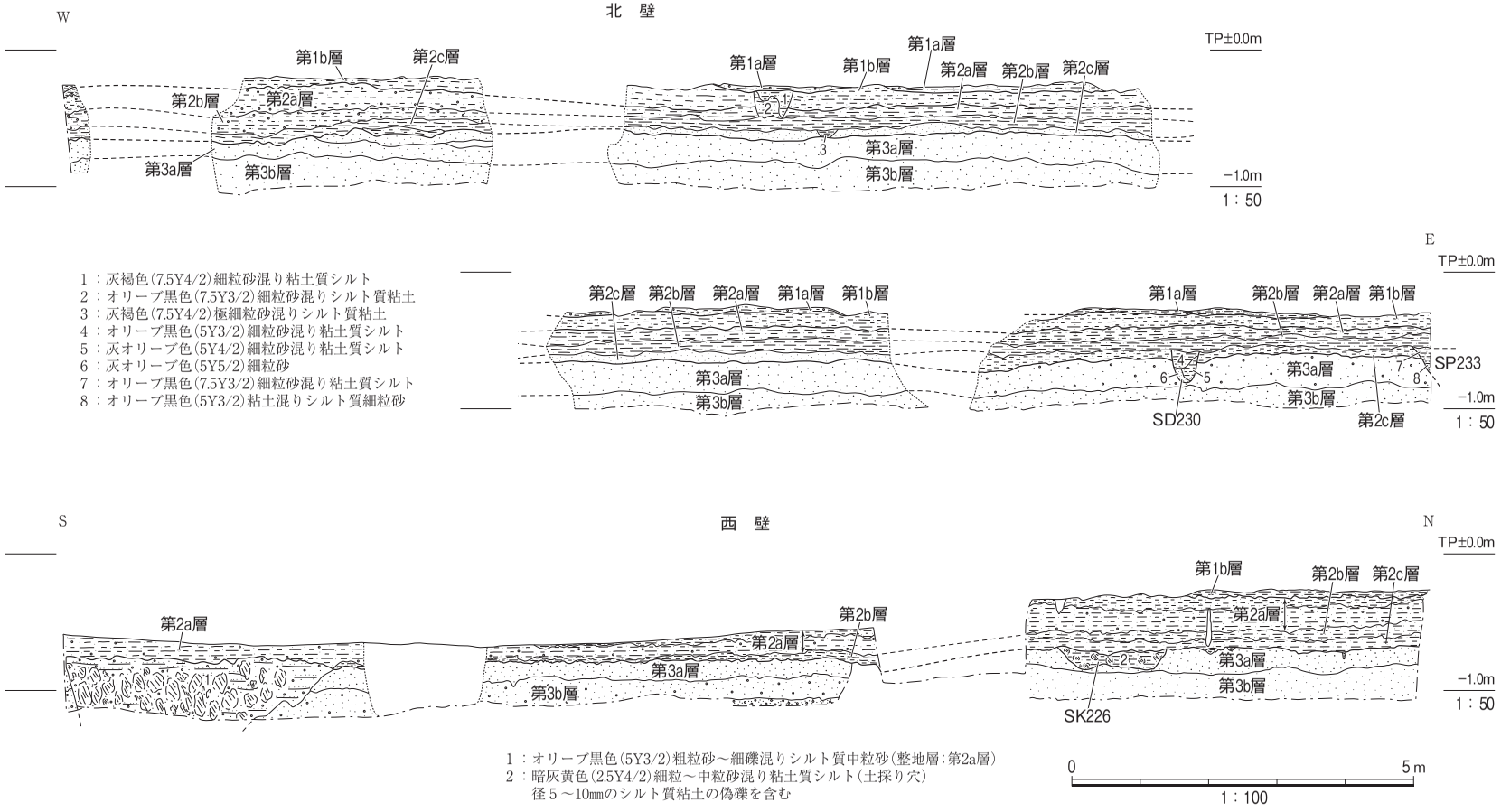


図4　北壁・西壁地層断面図

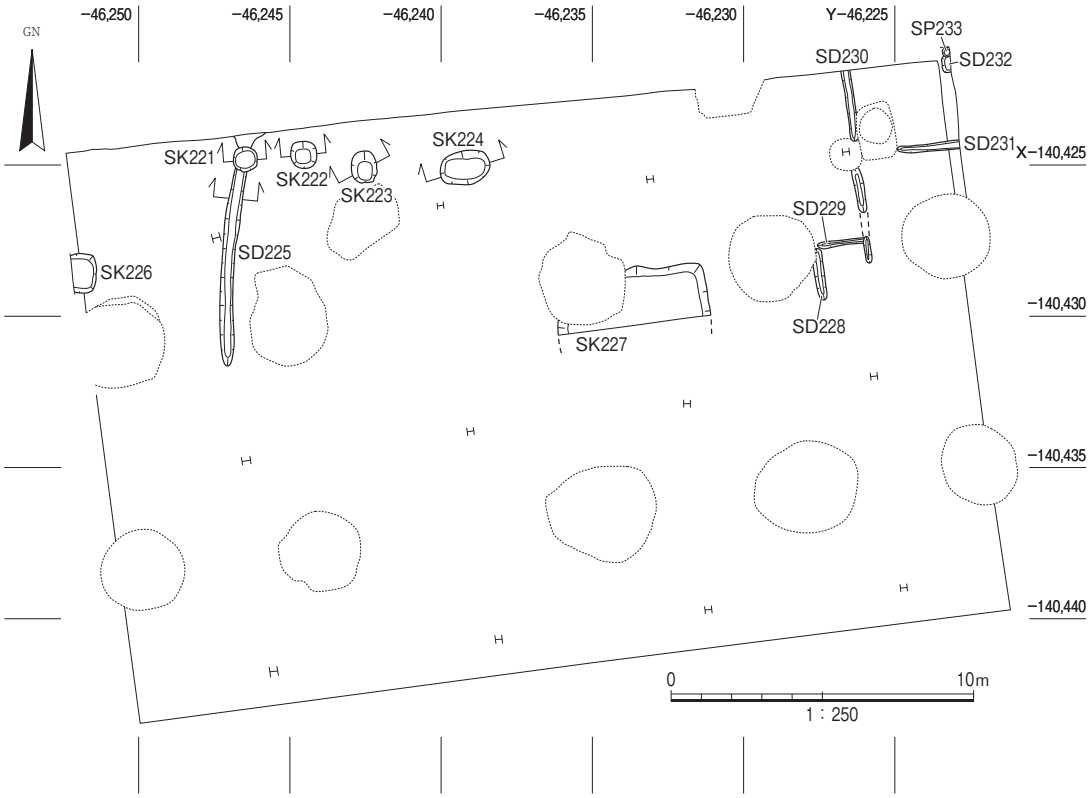


図５　第2c層上面遺構平面図

に係るものである。以下、検出面ごとに遺構について報告し、最後に地層出土の遺物について述べる。

ａ．第2c層上面の遺構（図５、図版１）

調査区の北半部で土壙と畝間、落込み、小穴を検出した。

SK221～224　北西部で、ほぼ東西に４基が並ぶように分布していた。SK221～223は径が0.8～1.0mほどの円形か楕円形を呈し、深さは0.30～0.15mほどであった。埋土はいずれも２層に分かれ、上層は黒色の粘土質シルトで、下層は灰色～黄褐色の砂で埋められていた（図９、図版２）。自然堆積層はみとめられなかった。土壙の機能は特定できないが、掘削が砂質の下位層に達していることから、作土に砂粒を混ぜ込んで土質を調整するための土採り穴かもしれない。SK226も同様な土壙で、平面形は隅丸方形とみられ、南北は1.3m、深さは0.3mであった。SK227は東西5.2m、南北1.8m以上で、南半部を失うが平面形が隅丸方形を呈する土壙とみられる。深さは0.3mを測り、細粒砂含むシルトで埋められていた。上記土壙よりは大型であるが、類似するものであろうか。なお、SK222からは弥生土器片が出土したが、遺構の年代とは関係のない混入品である。

SD225･228～232はほぼ東西･南北方向に延びる畝間である。幅0.2～0.4m、深さは0.1～0.2mほどで、埋土は細礫混りシルト質細粒砂で埋められていた。

SP233は調査区の北東隅で検出された小穴で、平面形は直径0.3mの円形を呈し、深さは0.2mあまりであった。SD232を切っていた。

以上の遺構からは、直接に遺構の年代を示す遺物は出土しなかったが、第2b・2a層は中世から近世にかけての遺物を包含するので、下位の第2c層は中世に属する可能性がある。

ｂ．第2b層上面の遺構（図６、図版１）

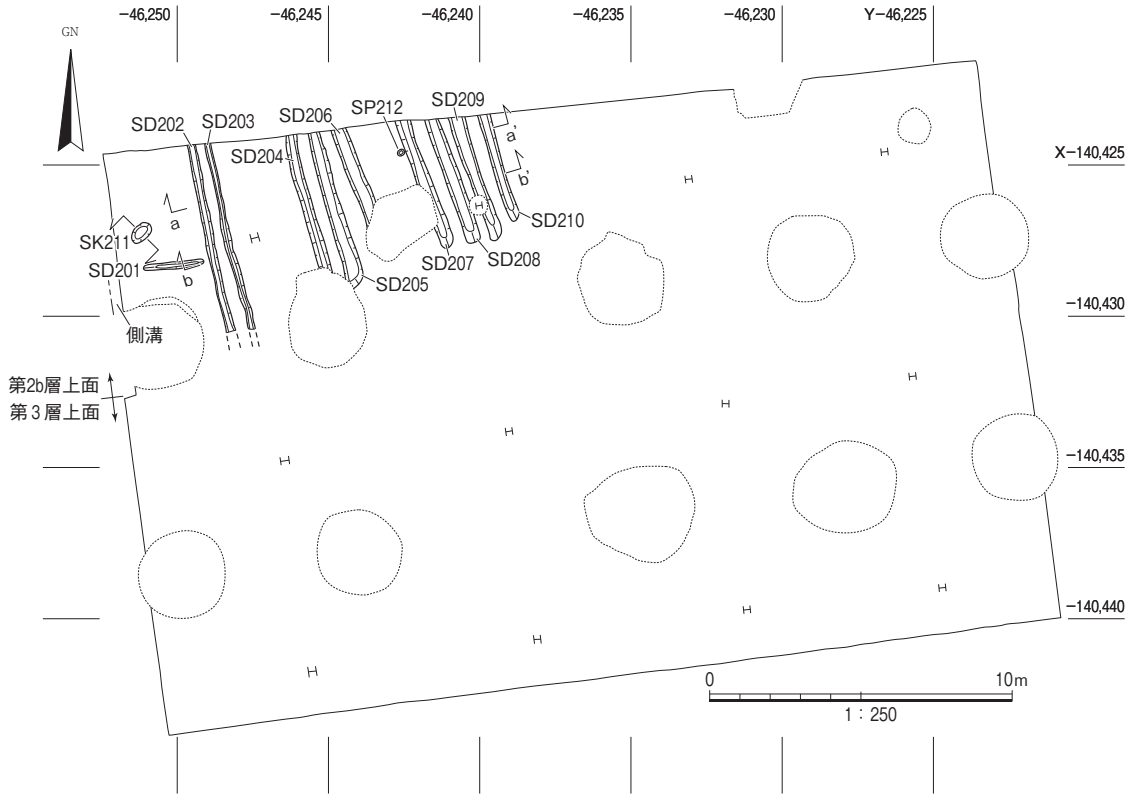


図６　第2b層上面遺構平面図

調査区の北西部で畝間と土壙を検出した。

SK211は平面形が楕円形の土壙で、長径0.8m、短径0.5m、深さ0.2mである。極細粒砂混り粘土質シルトで埋められていた(図９)。

SD201はほぼ正東西に延びる畝間で、幅0.2m、深さ0.1mである。SD202～210は、ほぼN15° Wの方位をもち、平行して延びる。幅は0.2～0.6m、深さは0.05～0.20mで、これらの溝の埋土は黄灰色粘土質シルトで、人為的に埋められていた。

上記の遺構からは、直接に遺構の年代を示す遺物は出土しなかったが、第2b・2a層は中世から近世にかけての遺物を包含するので、その間の時期に属するとみてよい。

ｃ．第1b層下面の遺構(図７、図版２)

調査区の北部で鋤溝群と溝を検出した。

鋤溝群は幅0.15～0.20m、深さ0.05～0.10mほどで、E8° Nの方位をもつ。平行して無数にみられるが、基本的に重複はなかった。直径0.3m前後の小穴を交える。小穴は深さ0.05～0.10mほどで深いものではない。

鋤溝群の南部に、平行して延びる溝SD101が検出された。幅0.7～1.4m、深さは0.2mで、南側は幅0.4m、深さ0.2mほどで二段落ちになっている。埋土は２層に分かれ、上層は粘土混りシルト質中粒砂、下層はシルト質細粒砂～中粒砂でいずれも自然堆積していた。南側の肩には板を当て、それを杭で押さえて土留めとしていた。畠への給水のための溝である。

ｄ．第1a層下面の遺構(図８)

調査区の中央部と南部で鋤溝群を検出した。

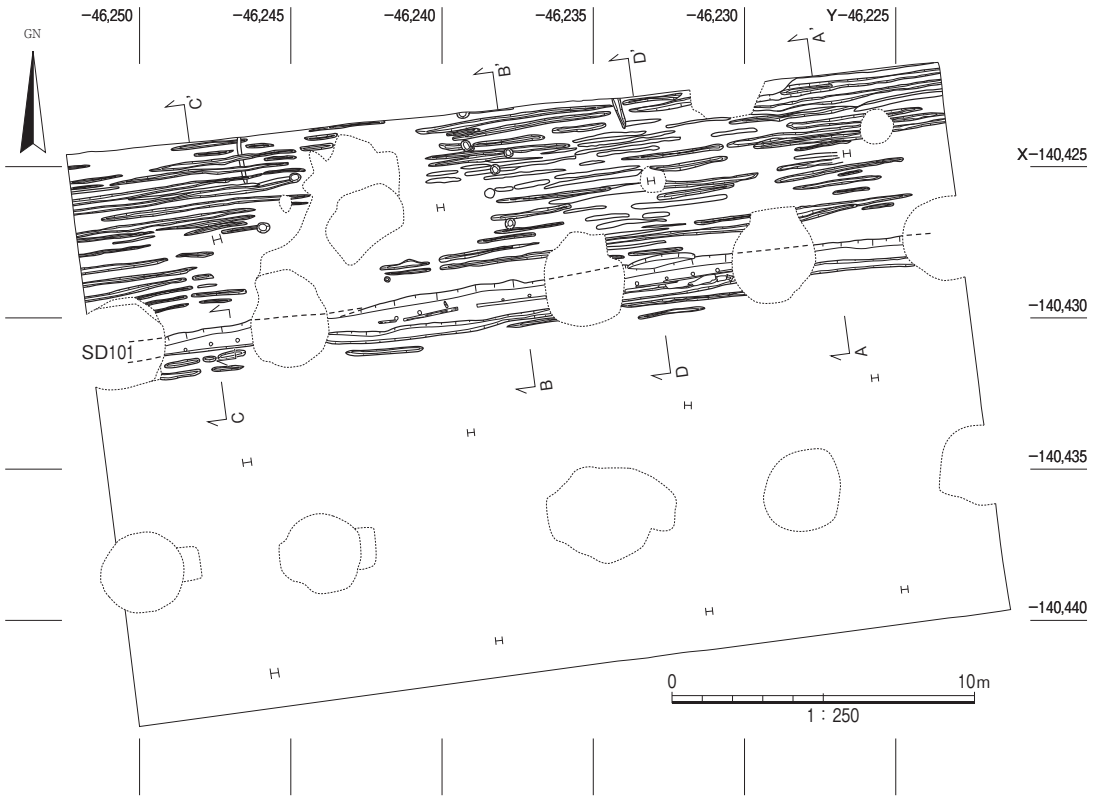


図７　第1b層下面遺構平面図

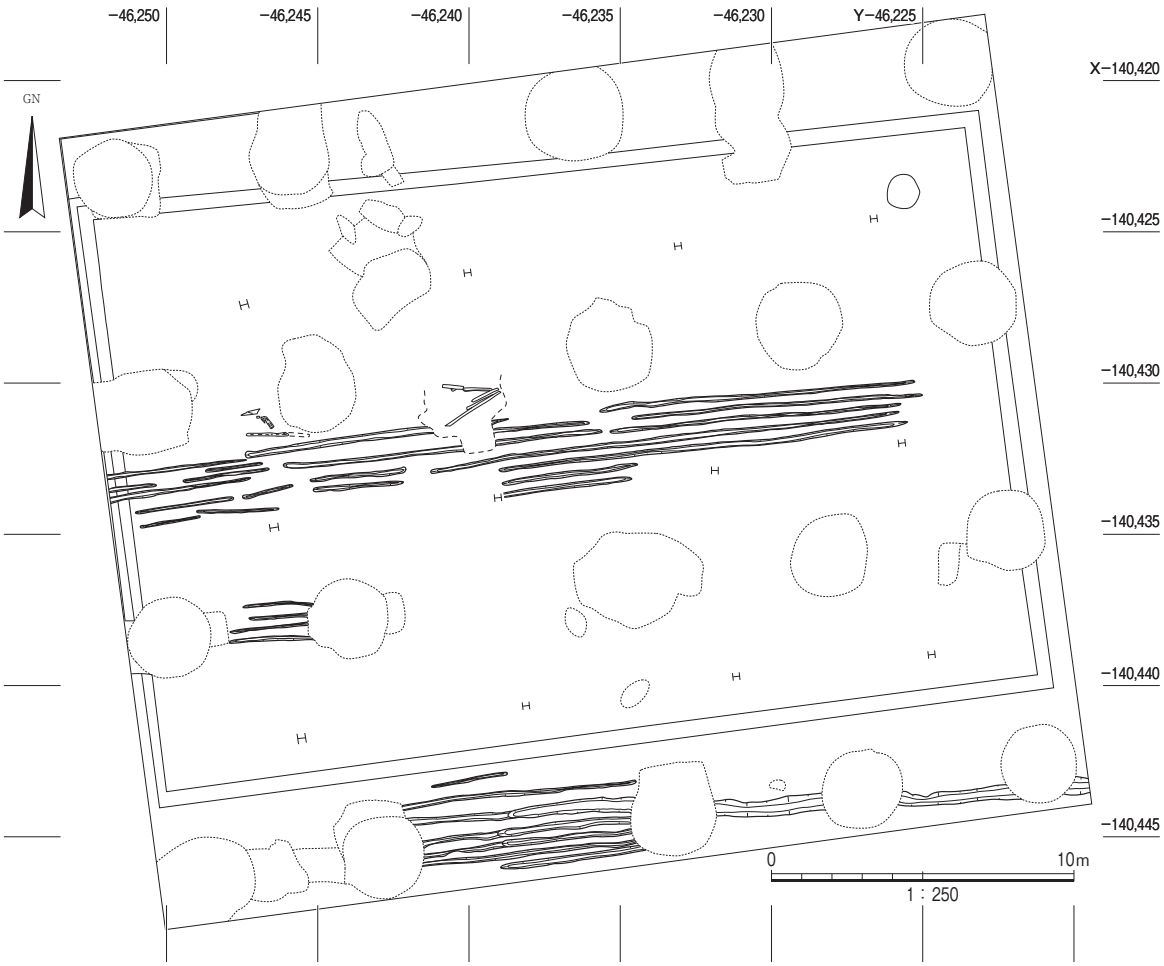


図８　第1a層下面遺構平面図

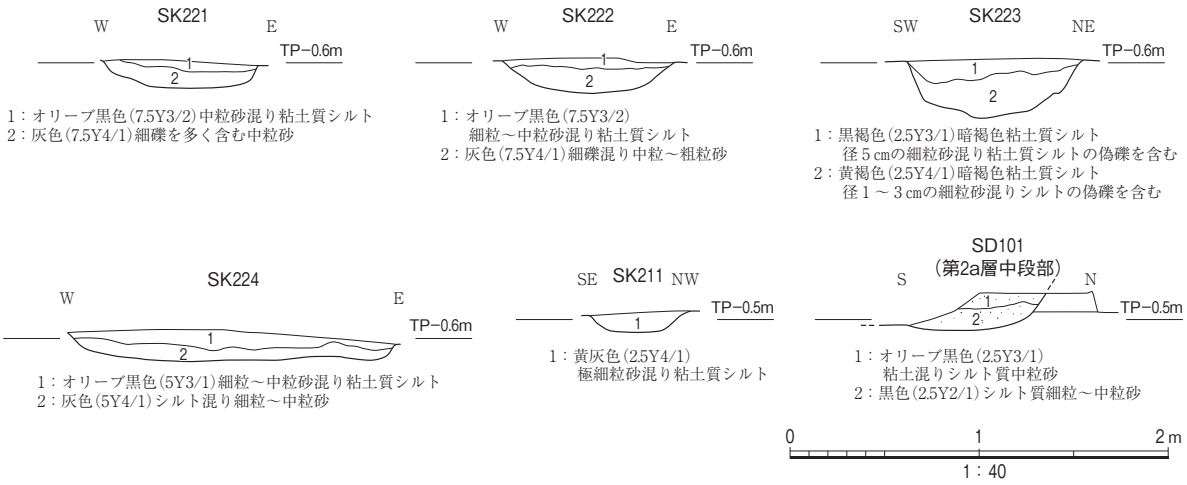


図９　遺構断面図

鋤溝群は幅0.1～0.2m、深さ0.05～0.10mほどで、第1b層下面のものと同じ方位で掘られている。溝間の距離は0.4mほどである。鋤溝からは近世後半の遺物が出土したが、遺構の年代には関係のない混入品である。

ｅ．出土遺物(図10)

第３層から出土した遺物では１～３を掲示した。弥生土器１は台付鉢の脚台部で、裾広がりの形態をもち、２段の凹線と３段の円形スカシ孔で装飾する。畿内第Ⅳ様式に属する。２・３は古式土師器で、２は東部瀬戸内系複合口縁壺の口縁部である。３は高杯の脚部である。布留式でも古相を留める。４は瓦器椀で第2b層上面のSD204から出土したが、遺構の年代を表すものではなく、耕作の開始時期を示唆するものである。備前焼擂鉢５は第２層から出土し、豊臣期のものである。これも同様に、この時期にも耕作が継続したことを示している。

３)まとめ

今回の調査で得られた成果を以下にまとめる。

・氾濫性堆積層である第３層から弥生土器(第Ⅳ様式)、古式土師器(布留式)の出土をみた。第３層以下は同様な堆積が続くことを確認しており、淀川デルタを構成する堆積物の最上部とみてよい。とすれば、上記遺物は当地が陸化した時期に近い頃のものと考えられよう。当地南側のMH09－１次調査でも弥生時代中期～古墳時代中期の遺物が

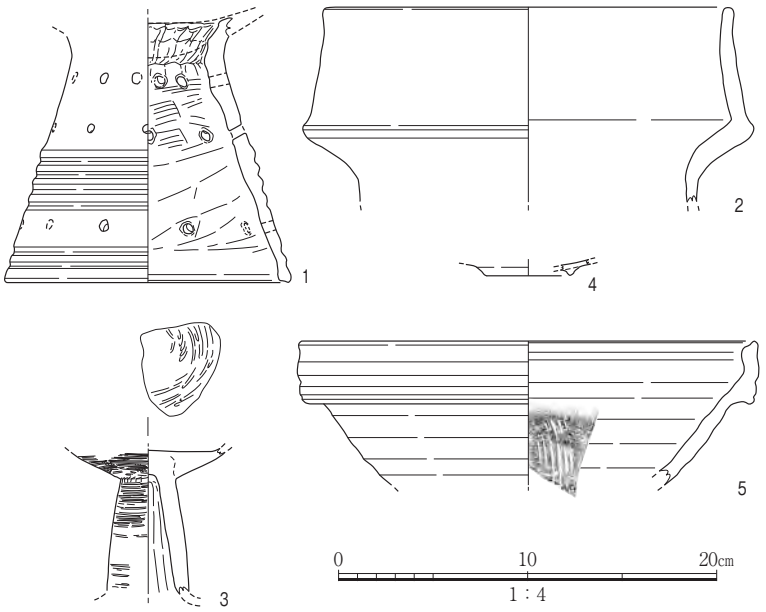


図10　出土遺物実測図

第３層(１～３)、SD204(４)、第２層(５)

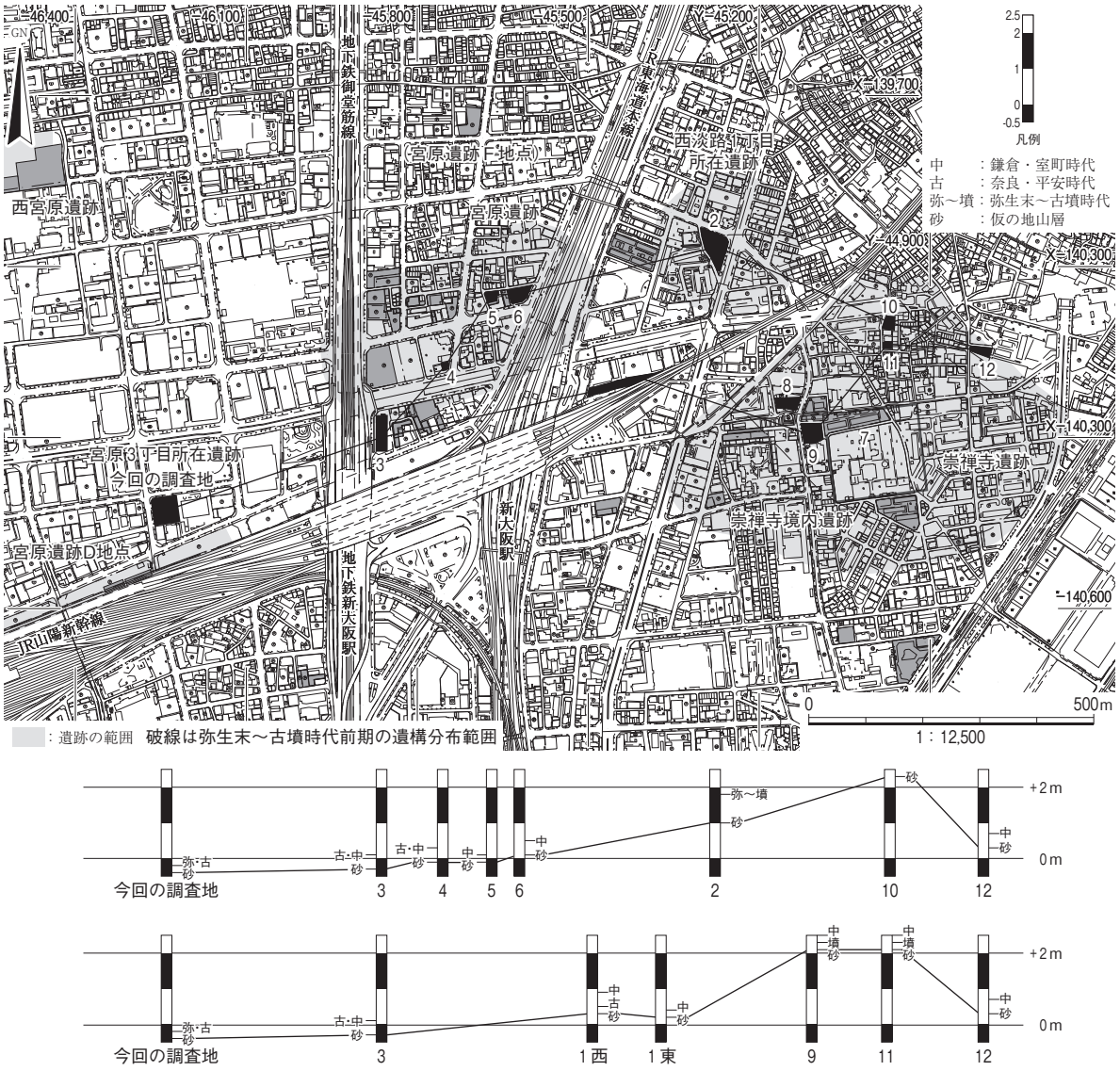


図11　宮原遺跡・西淡路１丁目所在遺跡・崇禅寺遺跡と地形

（調査次数は図１参照）

出土していて、近隣に同時期の集落が存在したことが想定されている[大阪文化財研究所2010]。このことを併せ考えると、当地周辺が陸化した時期は弥生時代中期から古墳時代前半期とみて大過はないであろう。ちなみに、宮原から西方にかけては、崇禅寺遺跡が立地する微高地(所謂天満砂堆)の側方に当り、TP±０m付近から西へ緩やかに下がるほぼ平坦な地形が想定できる(図11)。西宮原遺跡のWM09－１・２次調査でもTP－0.7mの砂層上部で飛鳥時代の土器が出土しており、弥生時代から７世紀頃にかけて、宮原遺跡西方の広い地域が陸化していったとみることができるのではないだろうか。

・中世から現代にかけて連続する作土層を検出した。第２層は中世から19世紀前半までの遺物を包含し、土地利用の開始が中世に遡り、それが江戸時代後半にまで続いたことがわかる。第１層はそれに連続する時期で、現代の盛土層で埋められるまで続いていたことになる。こうした堆積状況は前述のWM09－１・２次調査地と同様で、やはり宮原遺跡西方の広い地域でこの期間に農地の開発が始まり、継続されたとみてよいのではないだろうか。そして、このように農地として安定した地形環境が宮原荘などを生みだす背景としてあったのであろう。

引用・参考文献

大阪府教育委員会2003、『崇禅寺遺跡』（大阪府文化財調査報告2002－４）

大阪文化財研究所2010、『宮原遺跡発掘調査報告』

大阪文化財研究所2011、『西宮原遺跡発掘調査報告』

淀川区西中島七丁目４－２における建設工事に伴う
西中島７丁目所在遺跡発掘調査(WN17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市淀川区西中島７丁目４－２
調 査 面 積　　184.5㎡
調 査 期 間　　平成29年８月18日～８月25日
調 査 主 体　　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工

1）調査に至る経緯と経過

西中島７丁目所在遺跡は中世・近世の集落跡で、本調査地はJR新大阪駅の南約200mにあって、新御堂筋の西に面する。宮原遺跡の南400mに位置し、宮原遺跡の東には西淡路１丁目所在遺跡、崇禅寺遺跡が隣接している（図１）。これらの遺跡は、微高地である天満砂堆の北端部に立地しており、その南には西中島遺跡があって、天満砂堆の主軸方向である南北に弥生時代以降の遺跡が立地するものとみられる。砂堆の側方（東・西）の地形は河内平野・西大阪平野となって、約２mの比高をもって漸次に高度を減じる。遺構・遺物の分布も希薄となり、概ね弥生時代以降には陸化し、中世以降には主に耕地として利用されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、大阪文化財研究所2011]。本調査地は砂堆の西側方の西大阪平野中にあり、北西約300mで行われた宮原遺跡D地点の発掘調査では、近辺に弥生時代中期～古墳時代中期の集落があったことが想定されている[大阪文化財研究所2010]。

本調査地においては、大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、地表下1.1m以下で本格的な発掘調査を必要とする中世の遺構面および遺物包含層が発見された。これを受けて、地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に本調査が行われることとなった。当初に予定されていた調査区は東西９m、南北21m（189㎡）であったが、重機等の安全な通行を確保して南北を20.5mとし、頭書の面積となった（図２）。掘削は現代の地層（後述の第１層）については重機を用いて行い、そのほかはすべて人力によった。地層ごとに掘削と遺物の捕集を行い、遺構の検出と掘削を行った。進行に応じて、適宜に実測図や写真撮影で記録保存に努めた。本調査で用いた基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値（東京湾平均海水面値）で、TP±○

図１　調査地位置図

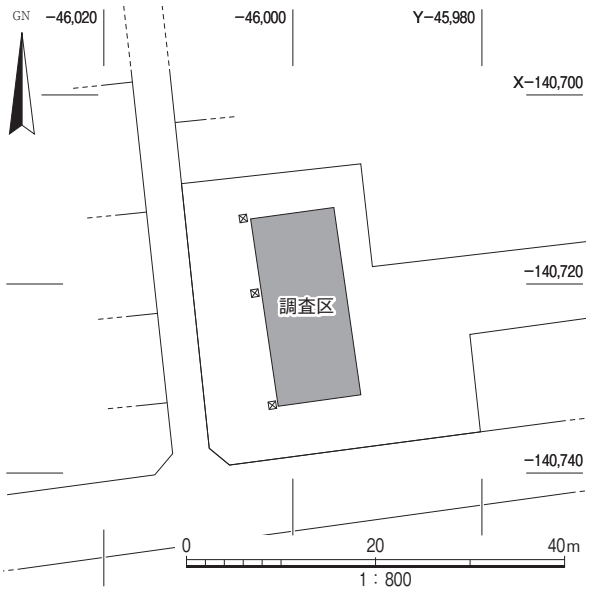


図２　調査区位置図

mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3)

調査地の現況地形は平坦で、地表面はTP+0.3～+0.7mであった。以下の4層を認めた(図版上)。

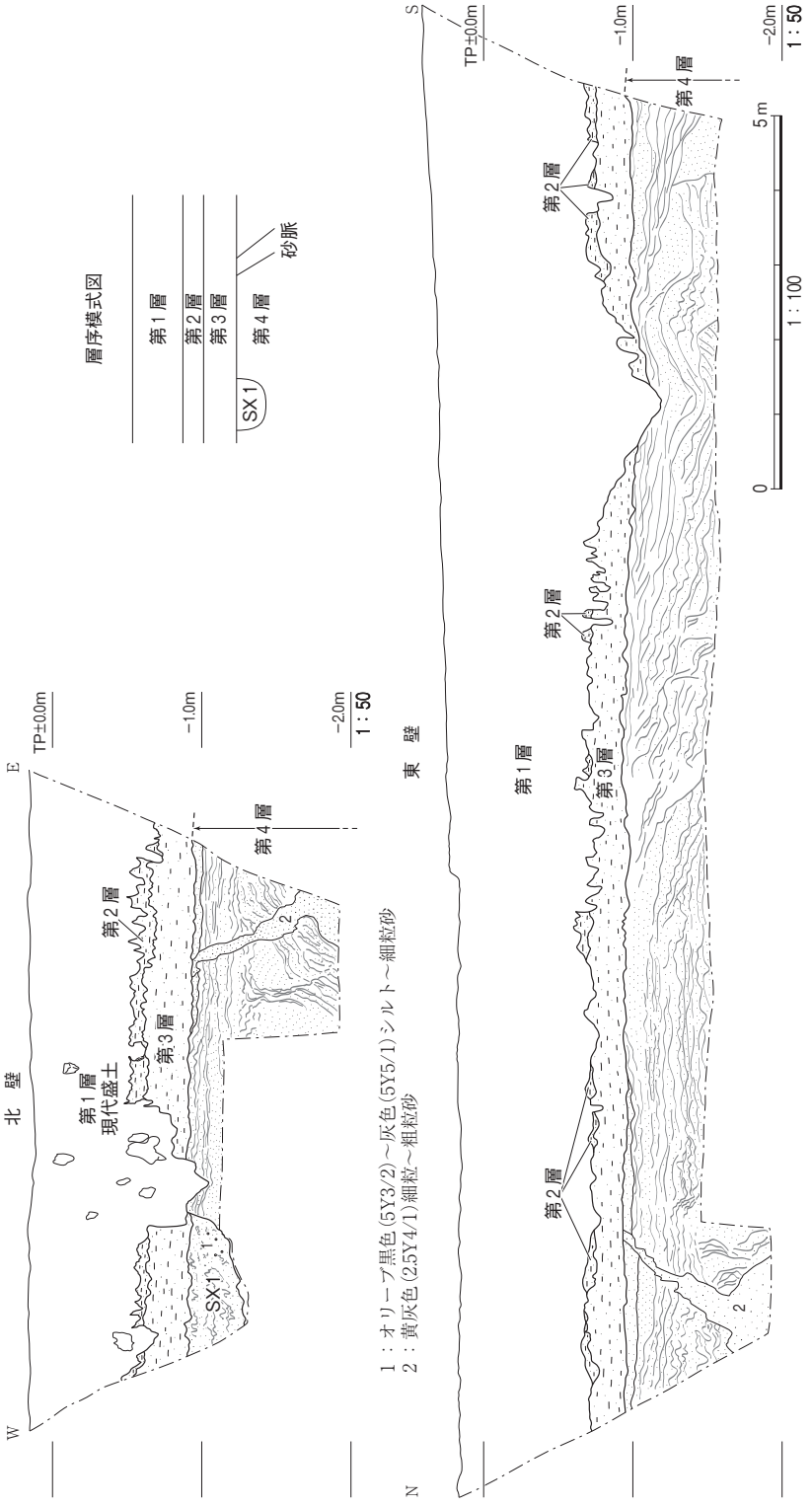


図3　層序模式図および地層断面図

第1層：灰色瓦礫混り砂からなる現代の整地層である。層厚は80～120cmであった。

第2層：黒褐色粘土質シルトからなる作土層である。上面を削剥されて部分的に遺存しており、層厚は最大で10cmであった。明治時代末期とみられる瀬戸美濃焼磁器碗を含み、近代以降の地層である。

第3層：黒褐色シルト～極細粒砂からなる作土層である。調査区全面に遺存しており、層厚は25～30cmであった。上面は第2層とともに激しく削剥されており、畦畔などは検出されなかった(図版下)。13～19世紀の遺物を含むが、下位層から中世末頃とみられる遺物が出土しており、主に近世に形成された地層である。

第4層：黄灰色砂～オリーブ黒色シルトからなる河成堆積層である。上面を第3層によって削剥

され、層厚は95㎝以上であった。瓦片13(図５)が出土し、中世末頃に堆積したものとみられる。ラミナの傾斜方向からみて、概ね東北東から西南西への水流によって堆積したものとみられた(図版中)。本層上面でSX１と砂脈が検出された。砂脈は調査区の北東隅で検出され、幅は最大20㎝で、北西－南東方向に延びており、第４層下部の黄灰色細粒砂～粗粒砂が70㎝以上噴き上がったものとみられた。砂脈周辺のラミナには、水平方向に断ち切られたり、変形した状況が観察された。本層が形成された中世以降の地震によるものである(図版上)。

ⅱ)遺構と遺物(図４・５)

ａ．遺構　SX１調査区北西隅で一部分を検出した落込みである。東西1.8m以上、南北1.4m以上、深さは0.4mで、平面形は弧状を呈する。埋土は灰色シルト～細粒砂の河成堆積層で、上方に細粒化し、中位以上でシルトの薄層が目立った。部分的に検出したのみで、遺構の性格

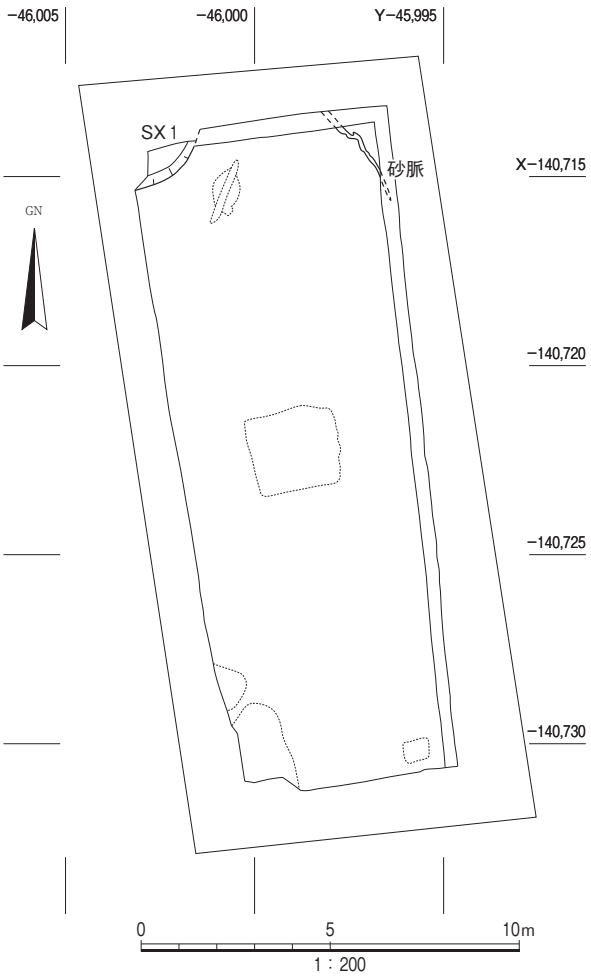


図４　第４層上面平面図

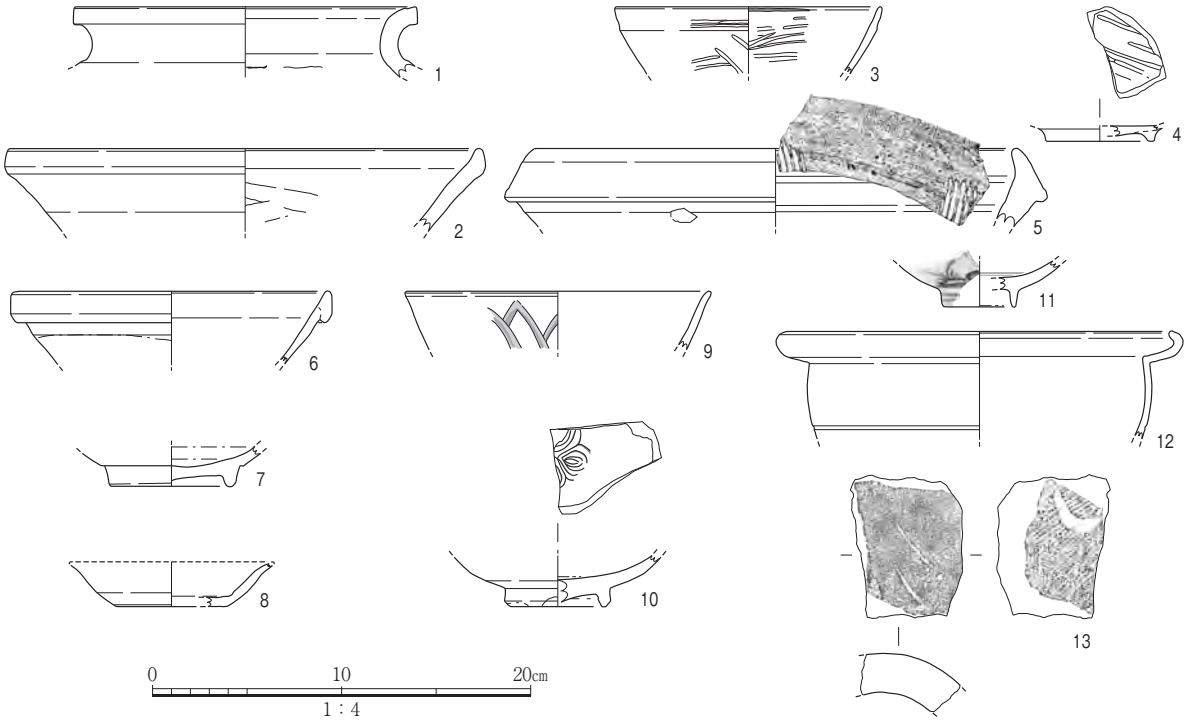


図５　出土遺物実測図
第４層(13)、第３層(１～12)

は不明であるが、自然流路の屈曲部分と考えられる。遺物は出土しなかった。

b．各層出土の遺物　主要な出土遺物を図５に示した。１～12は第３層から出土した。１は東播系須恵器甕口縁部である。２は東播系須恵器こね鉢である。３・４は瓦器椀、５は備前焼擂鉢である。６～８は中国産白磁で、６・７は碗、８は皿である。９・10は中国産青磁碗で、10は印花文を施す。11は肥前磁器染付碗、12は関西系陶器土鍋である。１～４は12～13世紀、５～10は13～15世紀、11は17世紀中葉、12は19世紀に属する。

13は第４層から出土した丸瓦片で、内面に布目を有する。中世末頃のものであろう。

第３層出土遺物には中世のものが含まれるが、第４層にも中世末頃の遺物が含まれるので、これらは本来、下位層に属するもので、11や12などが第３層の年代を代表する遺物とみてよい。

３）まとめ

今回の調査では中世の遺物が比較的まとまって出土した。これらには顕著な磨滅はみとめられず、河成層によって長距離を運ばれてきたとは考えられない。また、同時期の遺構もないので、当地にあった遺構が耕作によって破壊された結果とも考えられない。近隣に同時期の集落があり、そこから客土や河成層とともに運搬されてきた可能性があろう。

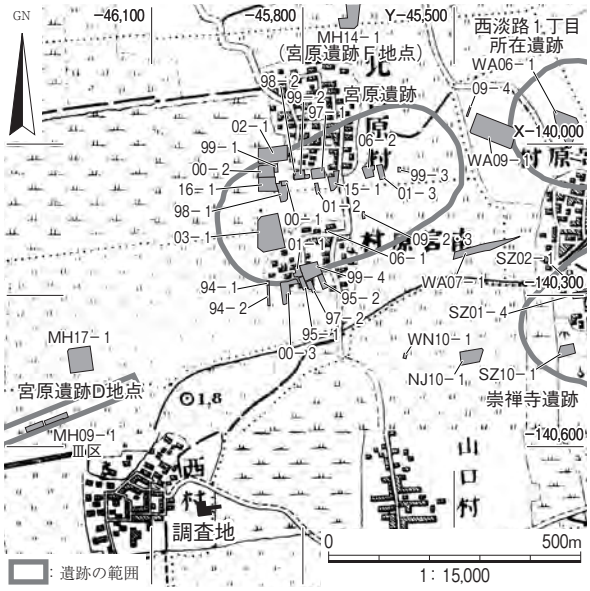


図６　新大阪付近古地図
（『２万分の１仮製地形図』（1885）に既往の調査地を加筆）

近世には作土層がみとめられ、水田が営まれていたものとみられる。これは天満砂堆西側での既往の調査成果と合致する様相である。ただし、本調査地では耕作の開始は中世までは遡らず、他に遅れたようである。

近代にも作土層がみとめられ、水田であったことがわかる。明治時代の地図（図６）からは、調査地は「西村」集落の外れで水田との境界に位置していたことが看取され、調査成果と齟齬はないとみてよい。

近世以降、耕作地としての利用形態は昭和にまで継続し、こうした状況は新幹線の開通に伴う周辺の土地開発によって現在の景観へと変化したのである。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「西淡路１丁目所在遺跡B地点発掘調査（WA07－１）報告書」：『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2007）』、pp.305－316

大阪文化財研究所2010、『宮原遺跡発掘調査報告』

大阪文化財研究所2011、『西宮原遺跡発掘調査報告』

東淀川区相川一丁目１－19・７－３における建設工事に伴う
相川遺跡発掘調査(AI16－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市東淀川区相川１丁目１－19・７－３
調 査 面 積　　560㎡
調 査 期 間　　平成29年３月２日～４月13日
調 査 主 体　　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、積山 洋

1)調査に至る経緯と経過

調査地は大阪市の北部を流れる神崎川と北摂から流れてくる安威川に挟まれた沖積低地に位置する。神崎川は、大阪湾への排水路として785(延暦４)年に開削された「三国川」(註１)にあたるとされ、調査地の南約200mを西流している。安威川は調査地の西隣を南西へ流れ(図１)、二つの川は調査地の南西約450mで合流する。

この地で計画された建設工事に先立ち大阪市教育委員会による埋蔵文化財の試掘調査が行われた結果、瓦器等の遺物が出土したため、本調査を実施することとなった。調査は工事予定地の南端に東西40m・南北14mの調査区を設けて実施した(図２)。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を１/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP+○mと表記した。

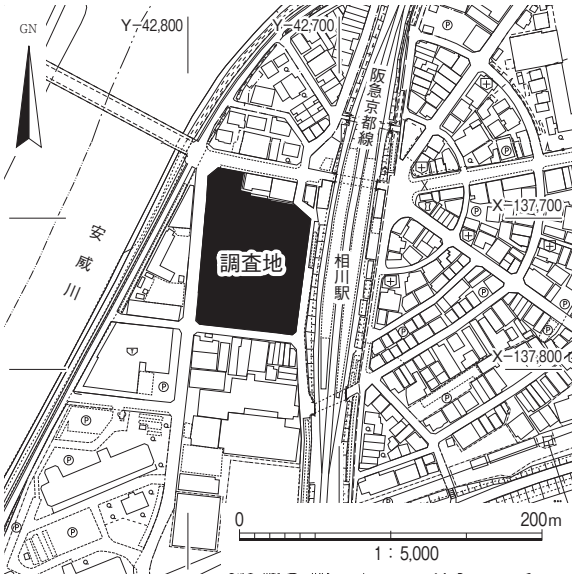


図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

2)調査の結果

ⅰ)層序(図３・４)

調査地の標高は、西端でTP+4.4m、東端でTP+3.9mである。その直下は現代の攪乱層および盛土で、その深さは0.4～1.9mであった。

第１層：西端でTP+2.7m、東端でTP+3.0mより上に堆積する作土層で、厚さは最大で約１mである。

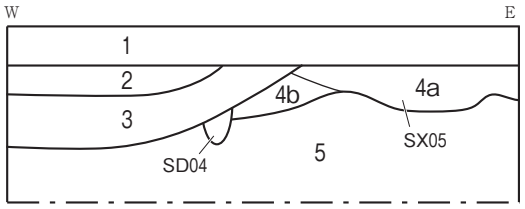
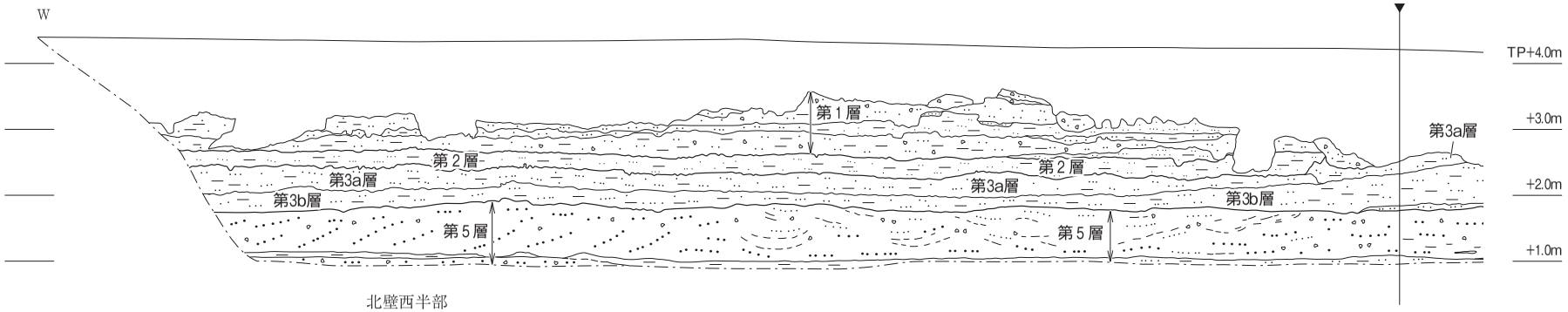
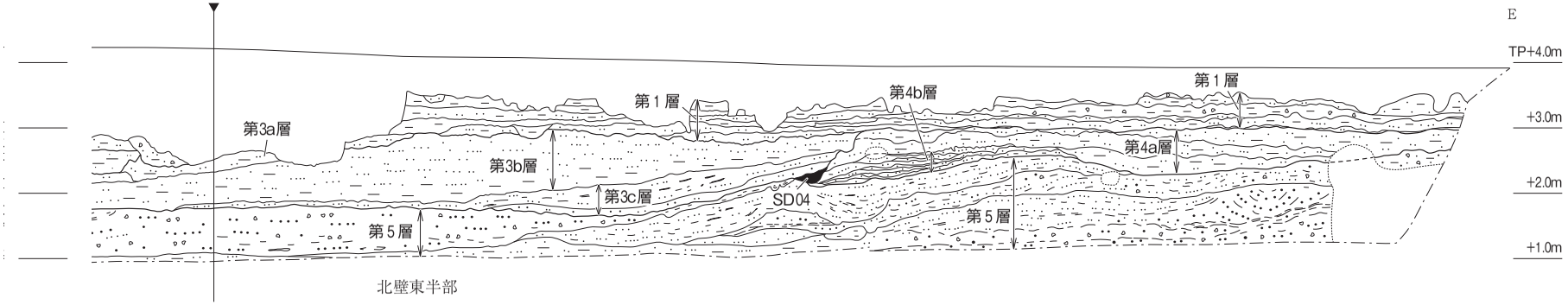


図３　地層と遺構の関係図



北壁西半部

第１層：オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト混り細粒砂～にぶい黄褐色（10YR5/4）礫・砂混りシルト
第２層：灰オリーブ色（5Y4/2）細粒砂混り粘質シルト
第3a層：灰オリーブ色（7.5Y5/2）細粒砂
第3b層：灰オリーブ色（5Y4/2）細粒砂混りシルト
第５層：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂礫



北壁東半部

第１層：オリーブ褐色（2.5Y4/4）細粒砂混りシルト～にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂混り粘質シルト
第3b層：暗オリーブ色（10Y4/3）細粒砂～シルト
第3c層：黄褐色（10YR5/6）～にぶい黄色（2.5Y6/4）粗粒砂～細粒砂混りシルト
第4a層：暗灰黄色（2.5Y4/2）～褐色（7.5YR4/4）シルト～中粒砂混りシルト
第4b層：黄褐色（2.5Y5/3）～オリーブ褐色（2.5Y4/4）細粒砂～シルト
第５層：暗灰黄色（2.5Y5/2）～にぶい黄色（2.5Y6/4）砂礫

図４　北壁地層断面図

５～６層に分かれるが、機械で掘削したため、年代等の詳細は不明である。下限は近代と思われる。

第２層：調査区の西半に分布していた自然堆積の粘土質シルトで、層厚は20～30㎝である。

第３層：調査区の西端から東部にかけて分布する自然堆積層である。層厚は調査区西端で70㎝、分布の東端で130㎝である。大きく３層に分かれ、上から第3a～3c層としたが、第3b～3c層は一連の堆積であろう。第3b層上面で土壙SK01が検出されている。本層から古式土師器の甕(図６－９)・瓦器椀(同10・12)・土師器皿(同13)、肥前磁器染付皿(同11)。肥前陶器皿(同14)などが出土し、また器種はわからないが土師器脚部(同７)も本層出土とみられる。14は第3a層出土なのでこの地層は確実に江戸時代である。12は第3b層除去中に検出した浅いくぼみSX02から出土したが、細片であり、第3b・c層も江戸時代をさほどさかのぼる年代とは考えにくい。

第４層：調査区の東部東半には第２・３層が分布せず、かわって第４・５層が微高地となって堆積していた。第４層は第３層に削られながら残存しており、本来はさらに西側にも堆積していた可能性が高い。本層は２層に分かれ、第4a層はさらに３層ほどに分かれるが、いずれも作土の可能性がある砂混りシルトが主体であり、厚さは25～70㎝である。第4b層は部分的ながらラミナが残っており、一連の水成層と思われる。最大層厚40㎝である。第4b層上面で溝SD04が検出された。第４層やこの時期の遺構から年代が判明する遺物は出土していない。

第５層：本調査区の最下層の砂礫層で、西半では斜向ラミナが明瞭に認められる洪水層である。本層は東半では西半に比して70～80㎝ほどの微高地となっていた。これも第3c層に削られて残った高まりであり、最上部には細粒砂～砂混りシルトが認められた。出土遺物には土師器皿(図６－１～３・８)、13世紀代の中国産白磁の碗(同４)・皿(同６)、備前焼擂鉢(同５)などがある。年代の下限を示すのは、２・８であり、16世紀とみられる。

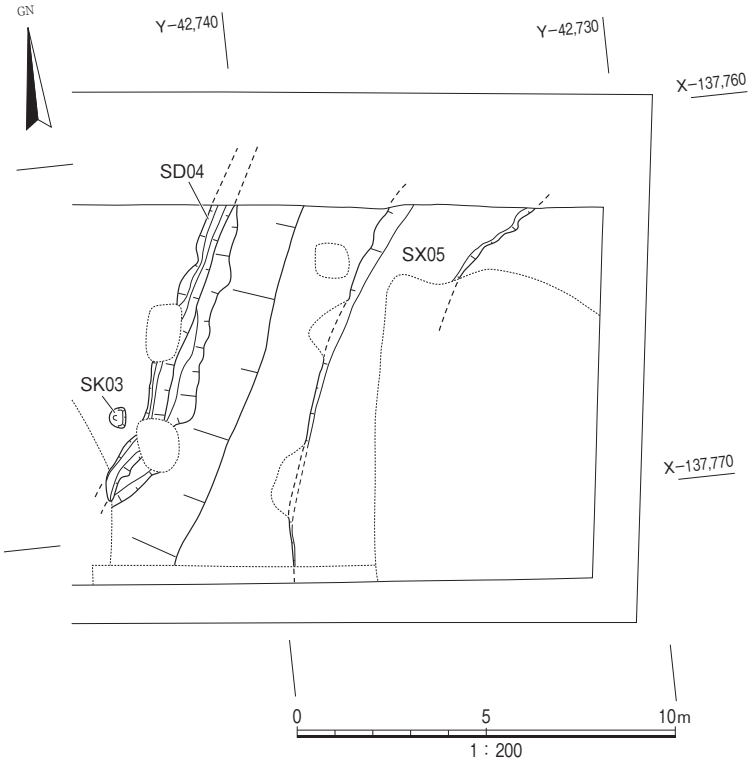


図５　第4b層上面平面図(東半部)

ⅱ)遺構と遺物

第4b層上面(図５)

SD04：第４・５層の高まりの西斜面に沿って検出された幅約0.5m、深さ0.15mほどの溝であるが、遺物は出土していない。

SK03：SD04と同一面で検出された小土壙で直径0.4m、深さ0.2mの規模である。年代を示す遺物は出土していない。

第３層

図示していないが、SK01は調査区西半部で第3b層上面で検

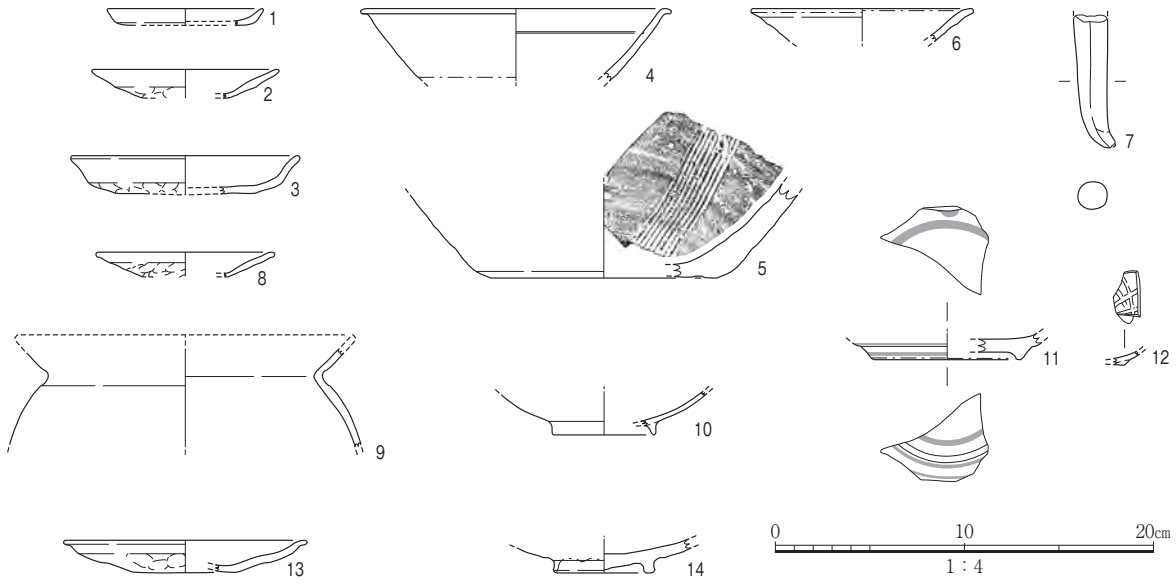


図６　出土遺物実測図
５層（１～６・８）、３層（７・９～14）

出された浅い不定形な土壙で、出土遺物はない。SX02は遺構というより、第3b層中の浅い窪みとみるのが適当である。

３）まとめ

本調査地ではたび重なる水成層がみられたが、人間による開発をうかがわせるのは第４層段階の遺構であろう。その年代は不詳であるが、第５層・第３層の年代から、およそ16～17世紀ごろとみられる。しかしそれも長くは続かず、ふたたび当地の大半は第３層・第２層によって覆われる。第３層は調査区東端には分布しないことから、西隣の安威川から運ばれた土砂とみられる。その後の水成層である第２層（粘土質シルト）は当地が滞水環境下にあったことを物語る。開発等の人間活動が安定するのは第１層段階であり、その開始時期は確定できないが、早くとも江戸時代である。

冒頭で述べたように、調査地の南を流れる神崎川は古代の三国川（人工水路）に比定されることが多いが、上に見たような当地の変遷からみると、古代の開発の形跡が全く見当たらず、こうした比定が果たして妥当なのかという疑問が浮かぶ。これが今回の調査から派生した新たな課題である。

相川遺跡は今回が初めての調査であったが、地形変遷にかかわる貴重なデータを得ることができた。今後とも調査の進展が望まれる。

註）

（１）『続日本紀』延暦４年正月庚戌（14日）条に「使を遣して摂津国神下、梓江、鯵生野を掘り、三国川に通ぜしむ。」とある。

東淀川区西淡路六丁目１－１他における建設工事に伴う
西淡路６丁目所在遺跡発掘調査(WX17－１)報告書

調 査 個 所　大阪市東淀川区西淡路６丁目１－１他
調 査 面 積　約192㎡
調 査 期 間　平成29年９月４日～15日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長 高橋工、岡村勝行

1）調査に至る経緯と経過

調査地は神崎川の南200m、新発見の中世～近世の集落遺跡である西淡路６丁目所在遺跡に位置する（図１）。南100mには縄文・弥生時代遺物の散布地である淡路遺跡が存在する。当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約0.6m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする中世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。この結果を受け、本調査は敷地南西部に東西21m、南北12mの調査区を設定し（図２）、平成29年９月４日に開始した。重機で現代盛土を掘削したところ、旧建物の解体時に生じた深い攪乱層が調査区の約半分に及んでいることが判明した。これらの地層と現代作土（第２層）を重機によって除去し、その後、下位層を人力で掘り下げた。層序に応じて、順次遺構・遺物を検出し、実測・写真撮影による記録を進めた。自然堆積層である第６層以下については、攪乱壙を利用し、調査区東寄りに深掘りトレンチを設定し、地表下2.1mまで断面観察を行った。９月14日に現地における全作業を終了し、資材・機材を撤収した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP+○mと記した。

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４）

現地表の標高はTP+2.3mとほぼ平坦である。調査では地表下2.1m（TP+0.2m）までの地層を確認し、現代盛土（第０層）より下位を10層に大別した。各層の岩層は次の通りである。なお、いずれの地層か

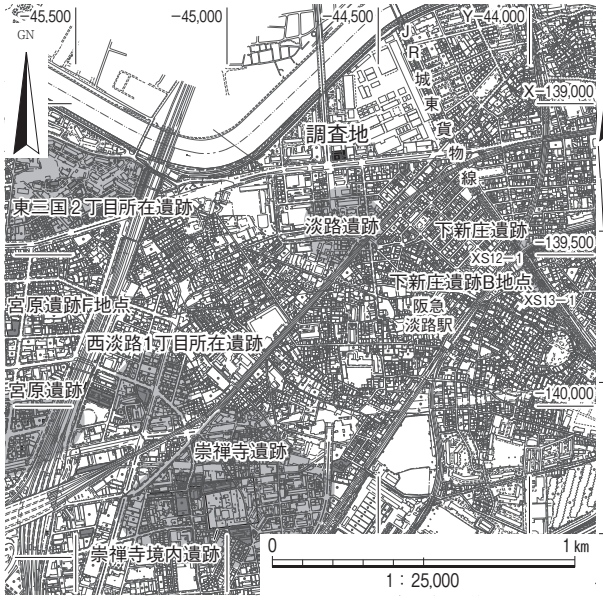


図１　調査地位置図

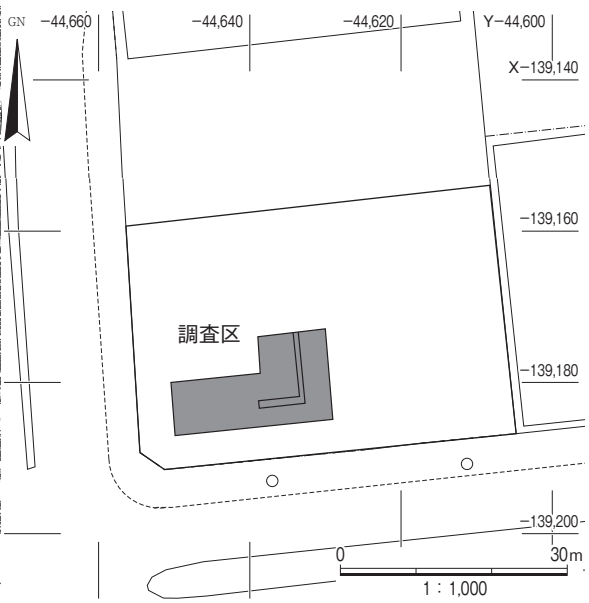


図２　調査区配置図

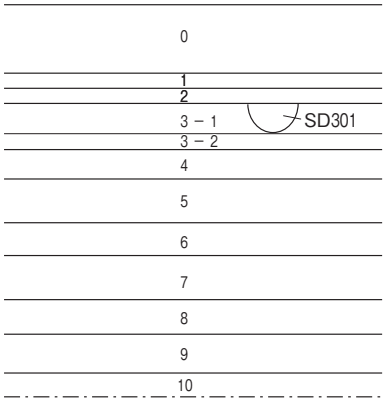


図３　地層と遺構の関係図

らも遺物を確認することができなかった。

第１層：灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルトからなる現代の作土層で、層厚は約８cmである。

第２層：黄褐色(2.5Y5/6)粘土質シルトからなる現代の作土層で、層厚は約８cmである。

第３層：２層に分かれる。

第３－１層は暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトからなる作土層で、層厚は約12cmである。上部にマンガン斑が多く認められる。上面でSD301を検出した。

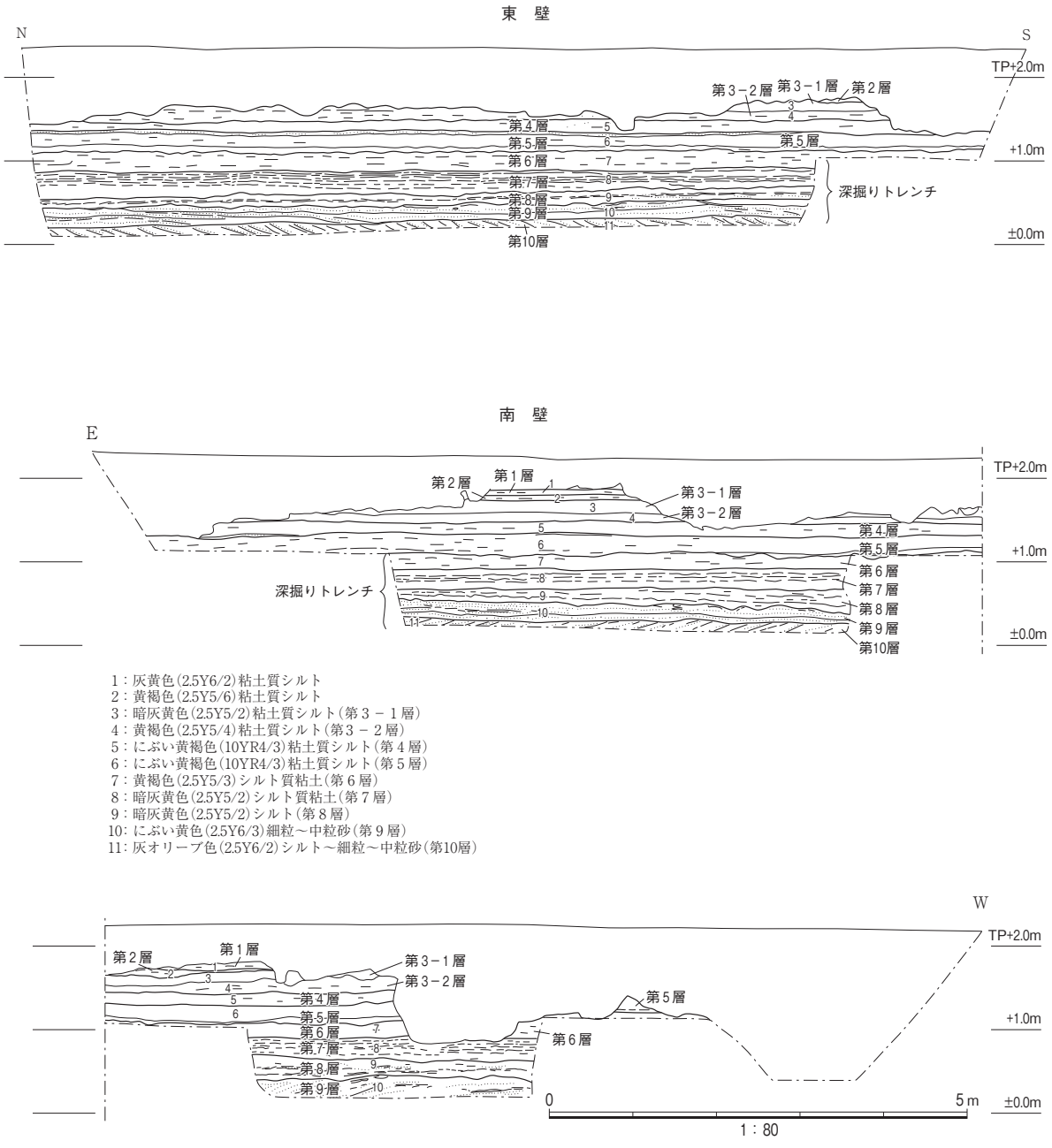


図４　東壁・南壁地層断面図

第３－２層は黄褐色(2.5Y5/4)粘土質シルトからなる作土層で、層厚は約10㎝である。鉄の沈着が顕著である。

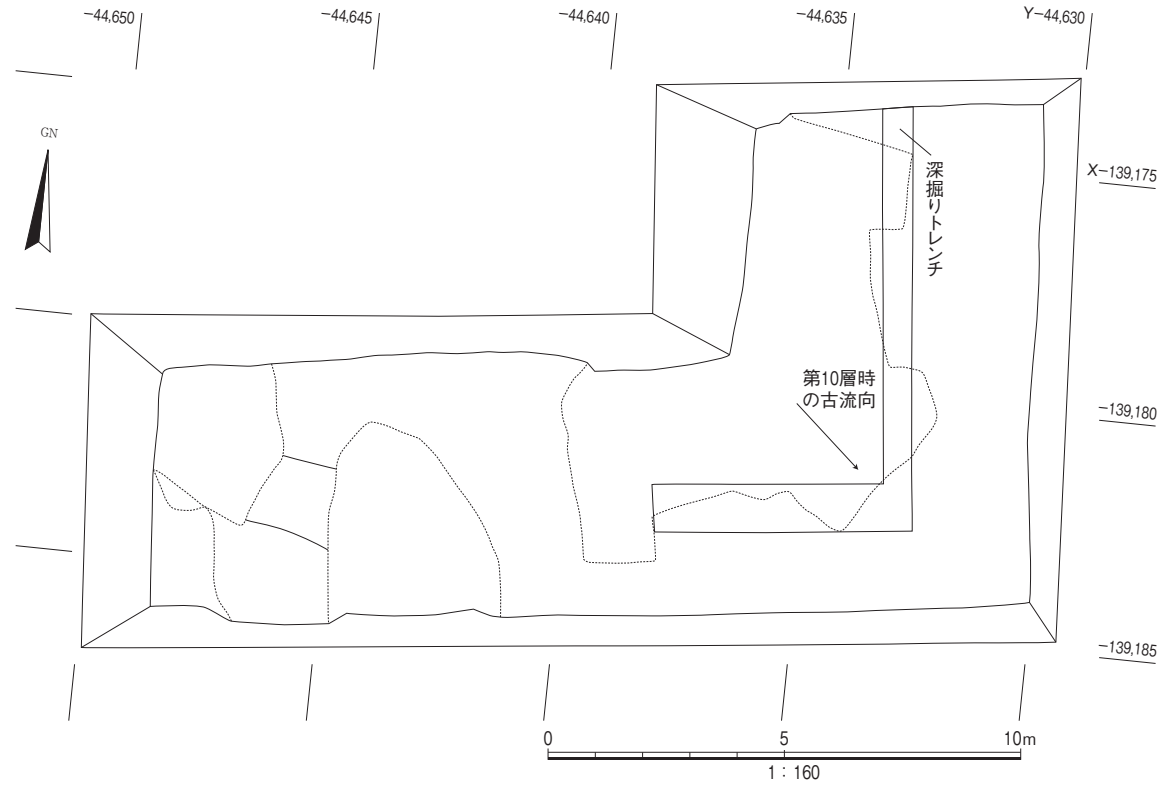


図５　第６層上面遺構平面図

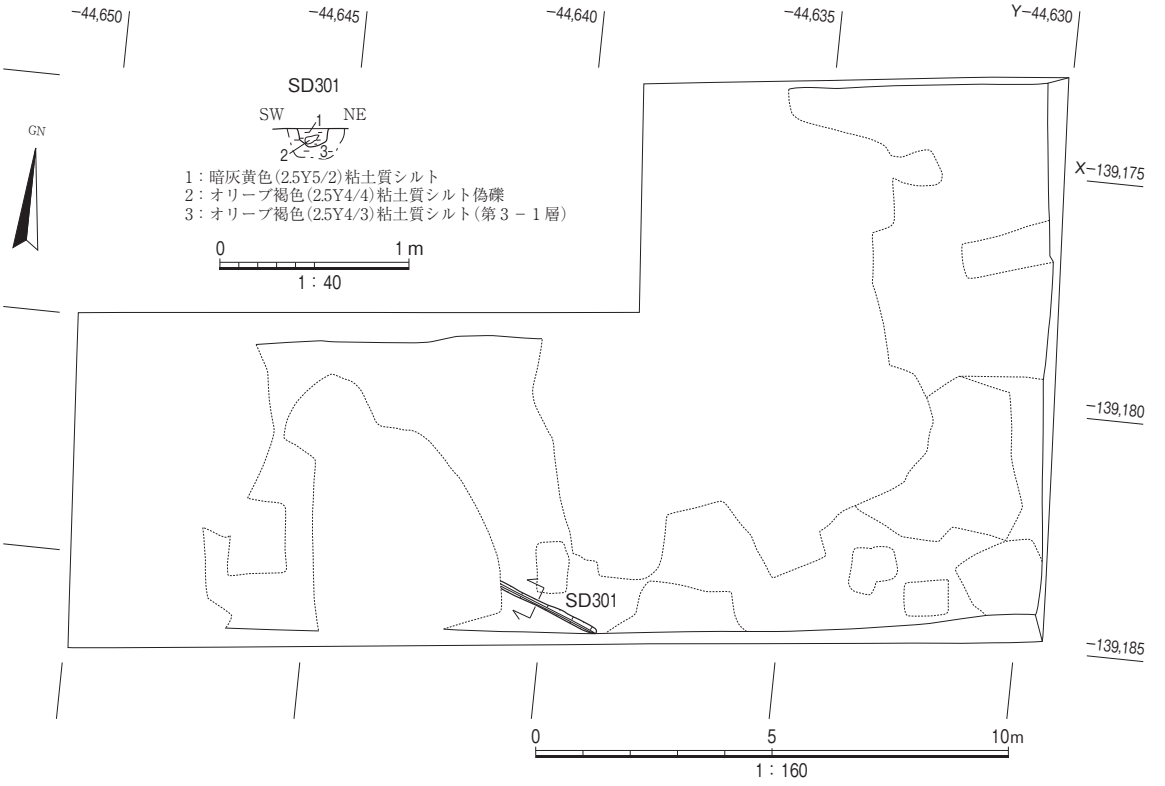


図６　第３層上面遺構平面図およびSD301断面図

第４層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトからなる作土層である。層厚は約10㎝である。

第５層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトからなる作土層である。層厚は約20㎝である。

第６層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粘土からなる自然堆積層である。層厚は約20㎝である。

第７層：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土を主体とする自然堆積層である。層厚は約20㎝で、層厚２～３㎜の極細粒砂を挟在し、５層前後に分かれる。

第８層：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトを主体とする自然堆積層である。層厚は約20㎝で、層厚５～10㎜の極細粒砂を挟在し、５層前後に分かれる。

第９層：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒～中粒砂からなる自然堆積層である。層厚は約20㎝である。

第10層：灰オリーブ色(2.5Y6/2)シルト～細粒～中粒砂からなる自然堆積層である。層厚は15㎝以上で、斜行ラミナが顕著である。東壁・南壁の地層断面から、古流向は北西から南東と考えられる。

ⅱ)遺構と遺物(図５～６)

ａ．近世以降の遺構

調査区中央南端近くの第３－１層上面でSD301を検出した。長さ2.2m以上、幅0.16m、深さ0.10mである。耕作に伴う溝と考えられる。遺物は出土しなかったが、近世以降の可能性が高い。

３)まとめ

今回の調査では、第１～５層まで作土層を検出したが、時期を特定する遺物を確認することができず、耕作の正確な時期は不明である。第10層形成時の古流向は北西から南東と考えられ、古地形復元のデータを得た。調査地の南100mには縄文・弥生時代の散布地とされる淡路遺跡があり、今後の周辺域での調査の進展に期待したい。

東淀川区東中島五丁目89－１における建設工事に伴う
崇禅寺遺跡発掘調査(SZ17－1)報告書

調 査 個 所　　大阪市東淀川区東中島５丁目89－１
調 査 面 積　　216㎡
調 査 期 間　　平成29年７月25日～８月３日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、南 秀雄

1）調査に至る経緯と経過

崇禅寺遺跡は大阪市の北方、JR新大阪駅の東に広がり、弥生時代後期～古墳時代前期の集落を主とする複合遺跡である。今回の調査地（図１）周辺の成果では、北西約80mの大阪府教育委員会の調査で、墳丘の崩落土と考えられる地層とともに多数の埴輪が出土し、数十mクラスの古墳の存在が確実となった[大阪府教育委員会2003]。同地点では、15世紀半ばに建立された崇禅寺を囲む防御用の二重の堀と柵も検出された。また東接するSZ11－２次調査では、古墳時代前期の土壙などがあった[大阪文化財研究所2012]。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘結果を受け、建設予定の建物の配置に合せて二つの調査区（１区・２区、共に18× 6 m）を設定して行った（図２）。元の建物基礎やその撤去の際の攪乱が自然堆積層（第２層）以下に及ぶところも多く、第２層上面以外の遺構面は残っていなかった。１区の調査は７月25日～31日、２区は７月28日～８月３日の間で行い、最後に２区中央部を深掘りして地層を観察した。本報告では1/2,500大阪市デジタル地図から世界測地系に基づく座標値と座標北を使用した。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP±〇mと記した。

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４）

現地表の標高はTP+3.3～3.5mで、厚さ１m内外の近代～現代の地層を除いて層名を付した。

第１層：オリーブ褐色（2.5Y4/6）細粒～中粒砂層で、層厚は10㎝未満である。第２層が擾乱された地層や作土層などで、江戸時代までの遺物を含む。本層上面で２区のピットや埋甕を検出し

図１　調査地位置図

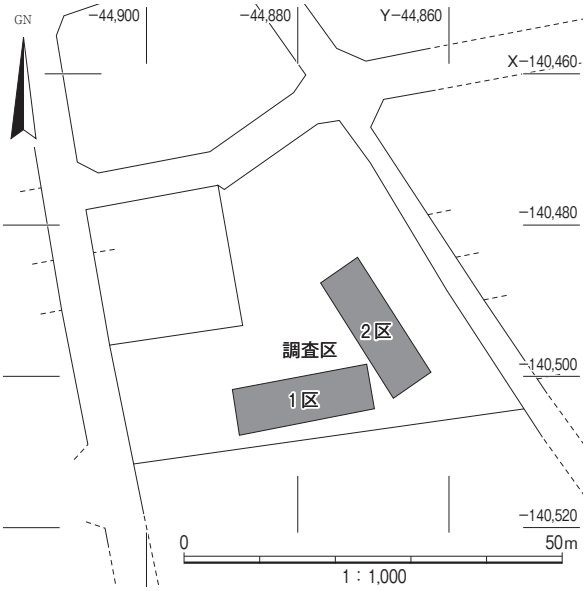


図２　調査区配置図

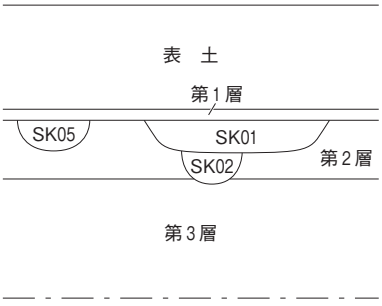


図3　地層と遺構の関係図

た。第1層からは土師器高杯1・甕脚部2が出土した(図8)。

第2層：　黄褐色(2.5Y5/3) ～にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒～中粒砂層で、層厚は40～85cmである。わずかに上方細粒化し、ラミナは明瞭でないところが多い。1区西端では礫が増え、最大6～7 cmのものを含む。第2層は、第3層の観察と合わせて後浜の堆積層と推定される(註1)。本層上面でSK01・03～06を検出した。1区北壁際トレンチの掘削中に庄内式～布留式期の土師器片1点が出土したが、本層に伴うかは確実でない。

第3層：第2層より粒径が大きくなるところで区分し、以下を一括して第3層とした。層厚は130cm以上である。深掘り部の地層を主に記すと、TP+1.1m以下に層厚50cm以上の沿岸州と推定される砂礫層がある。2層に分かれ下層のラミナは西に傾く。その上のTP+1.1m ～1.8mには、黄褐色(2.5Y5/4) ～にぶい黄褐色(2.5Y6/3)の細礫～中礫層または細礫～中礫を含む中粒～粗粒砂層と、中粒～粗粒砂層の組合せが、7セット程度観察できた。礫は最大長5～6 cmの亜円礫や扁平な礫である。礫を多く含む地層が沿岸州の堆積層、中粒～粗粒砂層が前浜の堆積層と考えられる。遺物は出土していない。

まとめると、第3層堆積時は、沿岸州とみられる外浜から前浜の堆積が繰りかえす環境であったが、第2層になって離水して後浜となり、この後に人が生活できる環境となったと推定される。

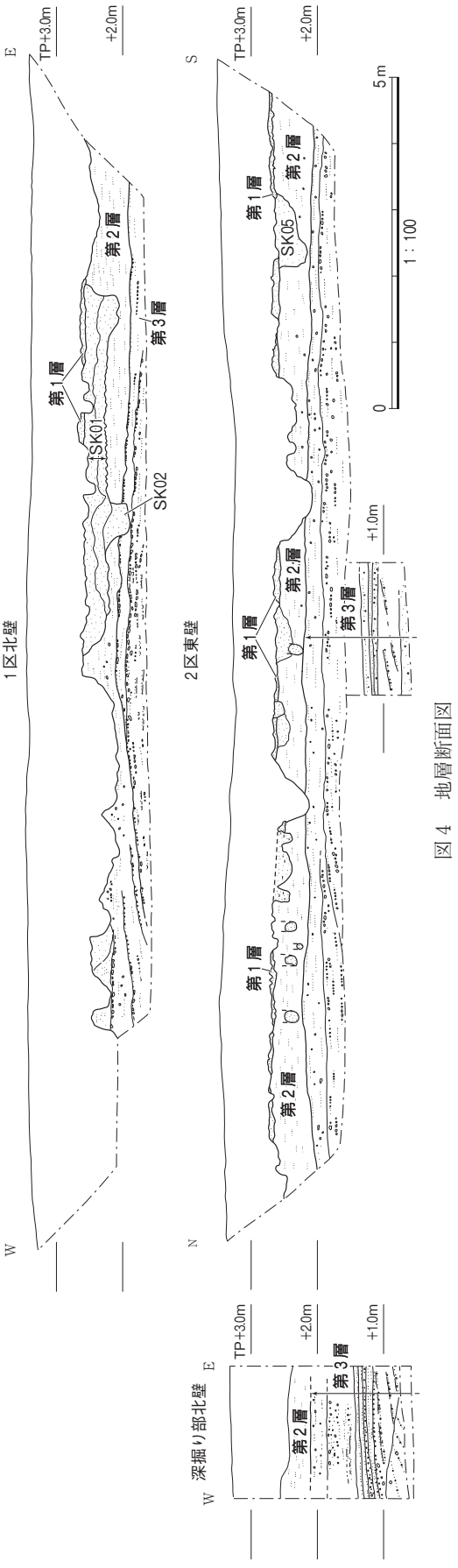


図4　地層断面図

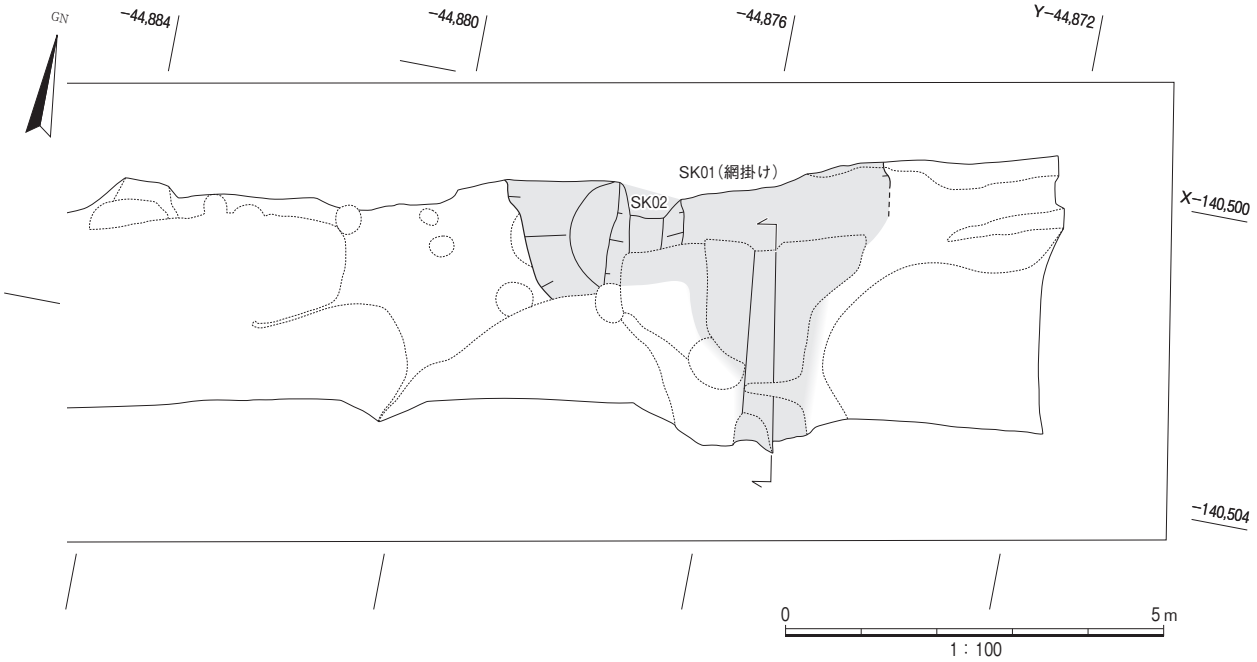


図５　１区遺構平面図

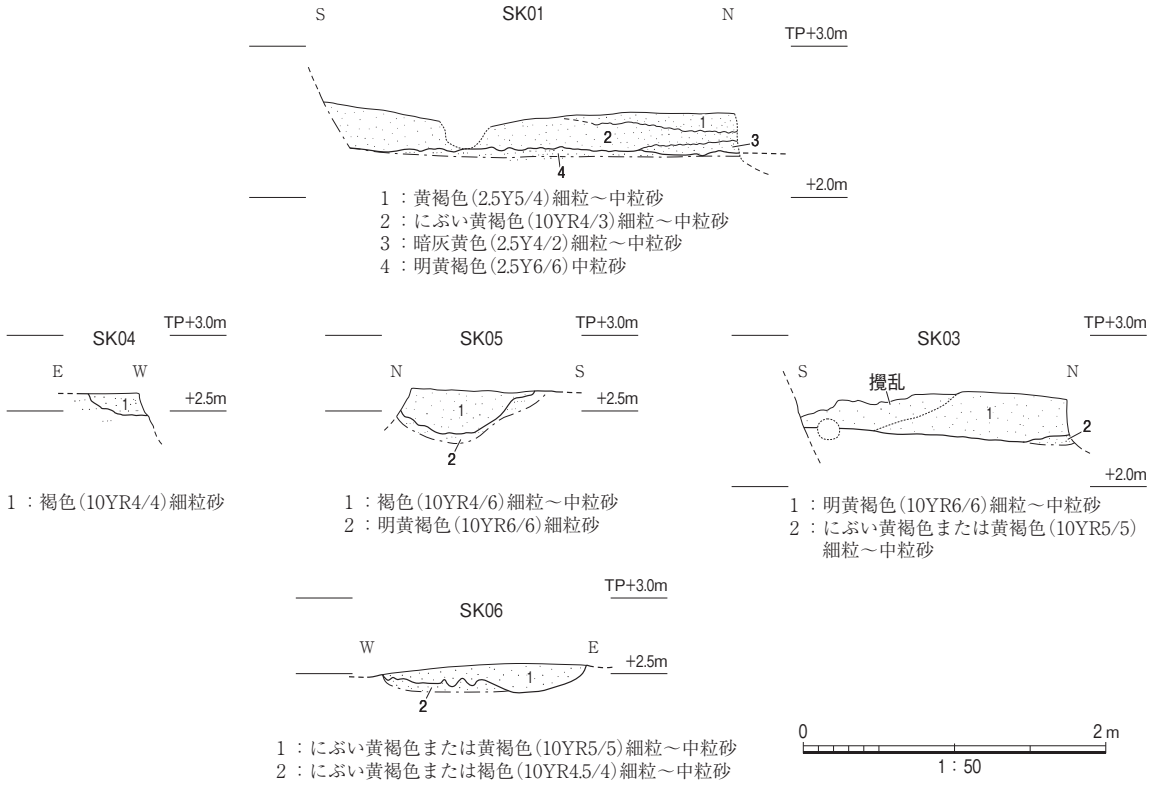


図６　遺構断面図

ii）遺構と遺物

１区（図５）　東側の第２層上面でSK01を、SK01の下でSK02を検出した。SK01は攪乱により平面形が捉えられないが、北壁断面から東西は5.60m、南北3.6m以上である（写真中段）。深さは0.30～0.50mで、底はシャープな凹凸があった。埋土はにぶい黄褐色（10YR4/3）などの細粒～中粒砂層であった（図６）。SK01からは土師器高杯の脚部３、高杯の口縁部４が出土した。少量だが庄内式～布留式期

の土器が出土し、須恵器は出土していない。SK02は南北1.4m以上、東西0.95m、深さ0.40mである。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂層である。SK02はSK01と一連の遺構の可能性もある。

平面形が捉えられず、SK01の性格はよくわからない。大きさや底面がほぼ平らなこと、深さなどから竪穴建物の可能性もある。その際は、北壁断面の東壁近くの窪みが周壁溝で、SK02が柱穴などの竪穴建物に伴う遺構の可能性が考えられる。しかし、他に主柱穴等がないこと、土器の量の少なさ、炭や焼土片などの生活の痕跡が見られないことなどは否定的材料である。

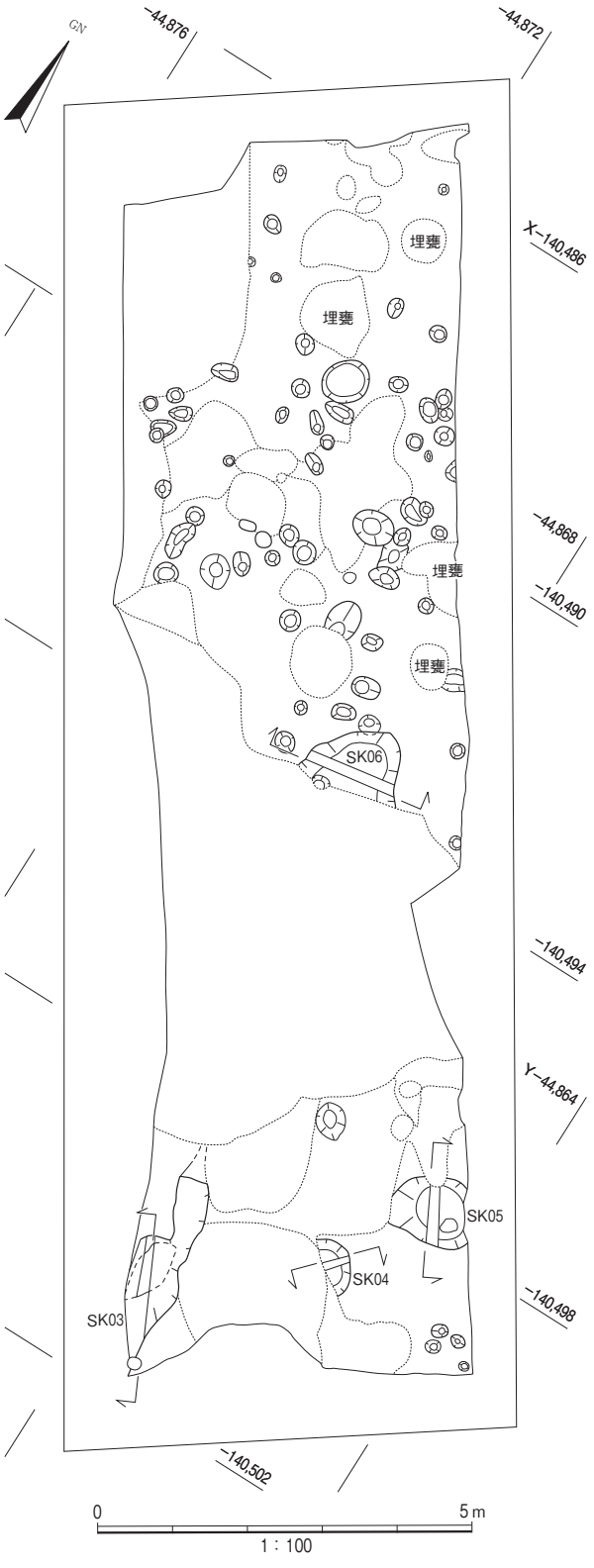


図7　2区遺構平面図

2区(図7)　南半に庄内式～布留式期の可能性が高い土壙SK03～06があり、主に北半に第1層上面検出の多数のピットと埋甕があった。

SK03は南西隅にあり、調査区外の西へ広がっていた。攪乱のため平面形はわからないが、南北2.8m以上、東西0.8m以上、深さ0.30mである。埋土は明黄褐色(10YR6/6)細粒～中粒砂層であった(図6)。SK03からは布留式甕5が出土した(図8)。

SK04は直径0.8m前後の円形と推測され、深さは0.15mである。埋土は褐色(10YR4/4)細粒砂層で、遺物は出土していない。

SK05は南北0.95m、東西1.1m以上、深さ0.45mであった。埋土は褐色(10YR4/6)細粒～中粒砂層で、埋土中に長さ0.25mの石があった。SK05からは土師器鉢の口縁部6、土師器壺7・8が出土した。

調査区中央部のSK06は東西1.5m前後、南北1m以上、深さ0.20mである。埋土は黄褐色(10YR5/5)細粒～中粒砂層で、土師器甕片が出土した。

主に北半に集中するピットと埋甕は、19世紀以降の所産と推定される。明らかに最近の遺物を出土しないピットは約50個あり、直径

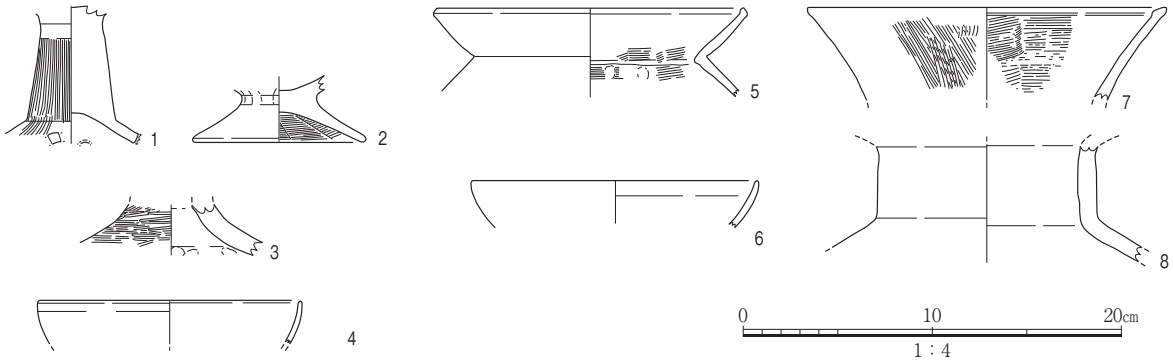


図８　出土遺物実測図

第１層（１・２）、SK01（３・４）、SK03（５）、SK05（６～８）

は0.15～0.50m、深さは深いもので0.4mである。埋土は主に暗褐色（10YR3/4～3/3）シルト質中粒砂層であった。埋甕は少なくとも４基あり、ピット群より総体的に新しい。

３）まとめ

遺構の性格は不明な点が多いが、従来の調査と同様に、調査地点にも弥生時代末から古墳時代前期の集落に関連した遺構があったことはまちがいない。ただ、出土遺物が少量であることから、集落の縁辺などに当っていたと推測される。崇禅寺遺跡では、調査地点ごとに微細な地形環境の変遷を復元し、地道な調査を続けていくことで成果があがっていくと考える。

註）

（１）沿岸州、前浜と後浜の推定は（公財）大阪市博物館協会の小倉徹也学芸員による。

参考文献

大阪府教育委員会2003、『崇禅寺遺跡』（大阪府埋蔵文化財調査報告2002－４）

大阪文化財研究所2012、『崇禅寺遺跡発掘調査報告』Ⅱ

東成区東中本二丁目256－３における建設工事に伴う
東中本遺跡発掘調査(CM17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市東成区東中本２丁目256－３
調 査 面 積　　121㎡
調 査 期 間　　平成30年１月22日～２月２日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、南 秀雄、桑原武志

1）調査に至る経緯と経過

調査地点は、縄文時代の貝塚として知られる森の宮遺跡から東へ約１kmに位置する、新発見の埋蔵文化財包蔵地（東中本遺跡）である。地下鉄中央線の緑橋駅の南で、中央大通と今里筋の交差点の南東角に当る（図１）。近年、大阪市内の鶴見・城東・北区などの発掘調査によって、淀川の三角州が発達して河内湾が陸化したようすが詳細にわかってきた。当地は南の大和川側からの陸化の様相がわかる地点になる。また、旧平野川の自然堤防上にあった中道村などの集落の成立時期を知る手がかりを得られる可能性があった。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘で近世以前の遺物が検出されたことを受け、敷地北西の一辺11mを対象に行った（図２）。18世紀以降と推定した水田作土である第３層までを重機で掘削し、第４層上面から第７層上面の間を平面的に調査した。干潟と推定した第７層以下は、南北5.7m・東西4.7mの範囲を約1.6m掘り下げて堆積状況を調査した。

本報告では、1/2,500大阪市デジタル地図から世界測地系に基づく座標値と座標北を使用した。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP±〇mと記した。

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４）

現地表の標高はTP+1.2～1.3mであり、厚さ40～80㎝の現代盛土の下から層名を付した。

第１層：暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒～粗粒砂質シルト層で層厚は10～20㎝である。旧耕土である。

第２層：上部は暗灰黄色（2.5Y5/2）細粒砂質シルト、下部は黄褐色（2.5Y5/3）細粒砂から成り、層

図１　調査地位置図

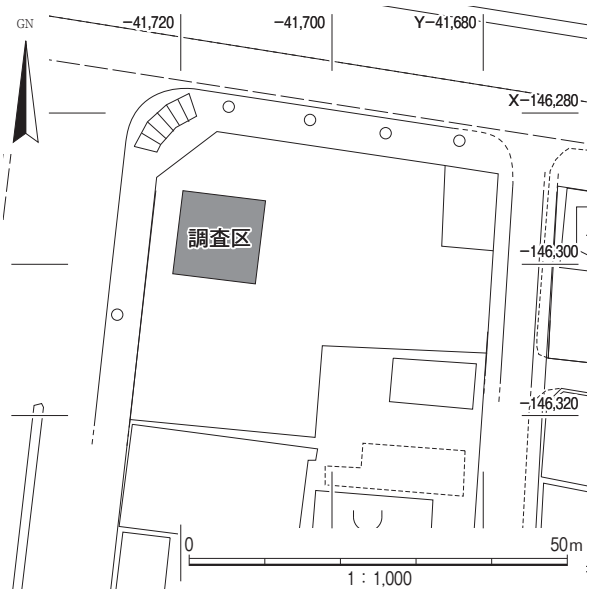


図２　調査区配置図

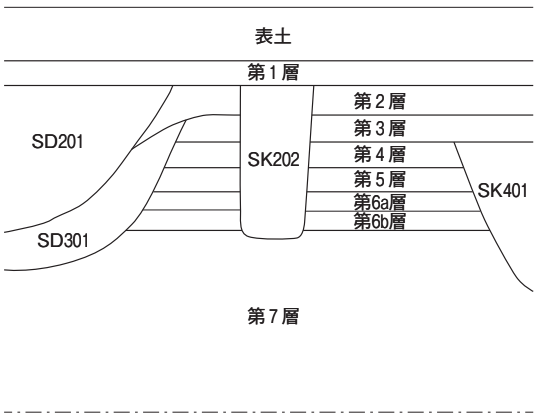


図3　地層と遺構の関係図

厚は15～20cmである。ほぼ自然堆積層である。本層上面にSD201・SK202があった。

第3層：黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂質粘土～シルト層で層厚は20～40cmである。18世紀以降の水田作土である。上面でSD301を検出した。

第4層：上部は灰色(5Y4/1)中粒砂質粘土、下部は黒色(2.5Y2/1)粘土から成る。層厚は5～20cmで、踏込みにより凹凸が激しい。水田作土である。陶磁器がなく、瓦器・土師器片しか出土せず、中世に遡る可能性が高い。上面にSK401があった。

第5層：黄灰色(2.5Y4/1)粘土～シルト層で層厚は15cmである。水田作土で上位層の影響を受けた凹凸がある。出土遺物がなく、時期はわからない。

第6層：黒褐色(2.5Y3/2)粘土～シルトで粘土偽礫が混る第6a層と、黄褐色(2.5Y4/1)粘土～シルトの第6b層から成る。第6a層は層厚10cm、第6b層は15～20cmである。第6層は基本的に上方細粒化した自然堆積層で、人為や植物による擾乱が及ぶ範囲を第6a層としたが、第6b層との層界は明瞭でな

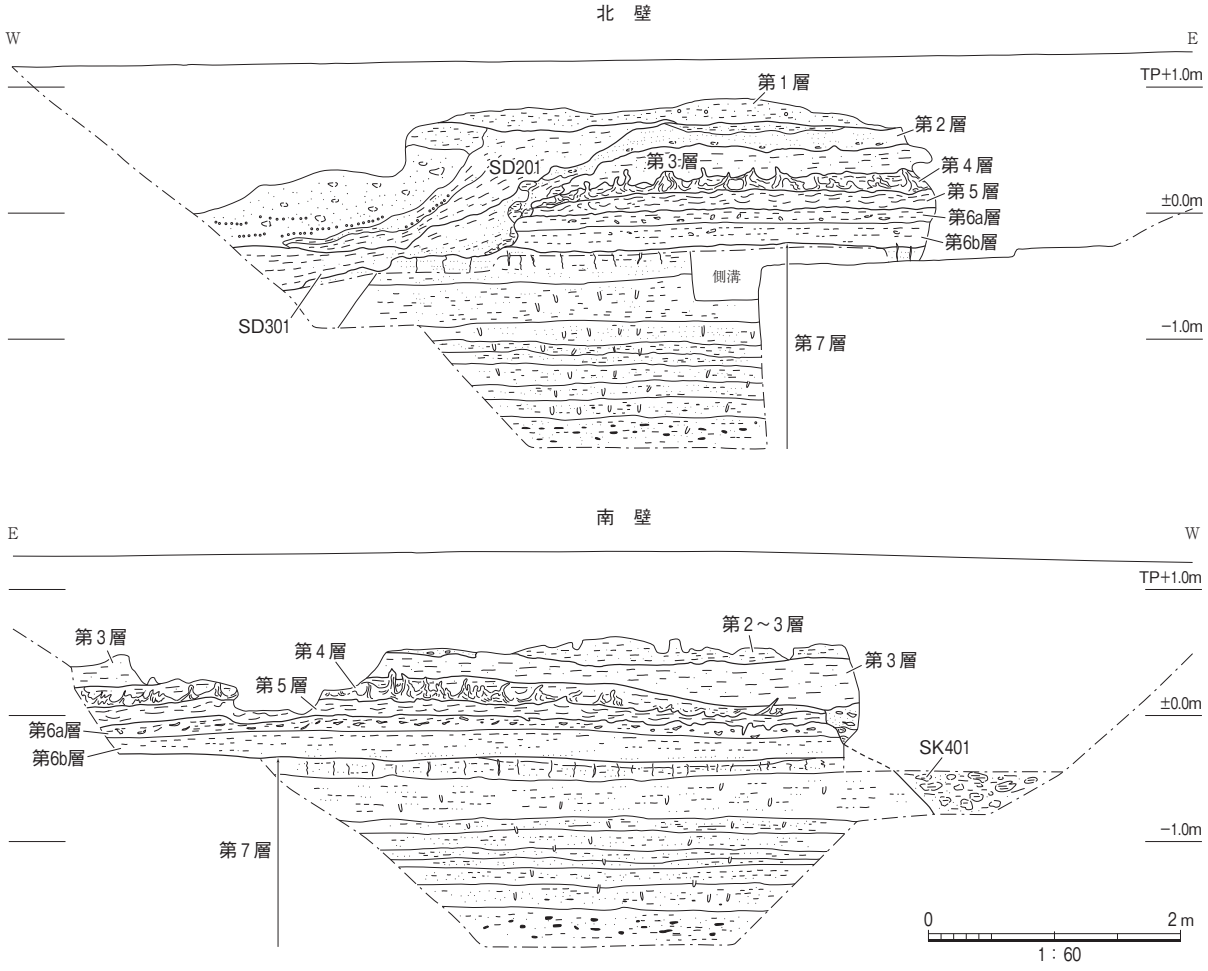


図4　地層断面図

い。出土遺物がなく、時期はよくわからない。

第７層：灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質細粒～中粒砂層で層厚は160㎝以上である。泥質の層と砂質の層が交互に続くが、境は明瞭でない。カニなどの巣穴が多数あり、上面から20㎝程度は植物の根によって擾乱されている。第７層は干潟の堆積層である。下部の約40㎝の間には木片が多く、洪水で運ばれた可能性がある。時期はよくわからないが、第６層の最下部と最上部、第５層で年代測定ができる枝などをサンプリングした。

以上の観察結果をまとめると、調査地点はTP－1.9(－α)～－0.3mの間(第７層)は、大和川などによって運ばれた土砂によって形成された干潟になっており、陸化した後、後背湿地となって第６層(TP－0.3～±0m)が堆積した。第５層以上は、後背湿地の堆積物などを利用して連綿と水田が作られた。陸化と水田化の時期は不分明だが、第４層から遅くとも中世より前である。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．第４層上面(図５)

調査区南西でSK401を検出した。SK401は試掘坑とSD301によって大部分が壊されているが、南

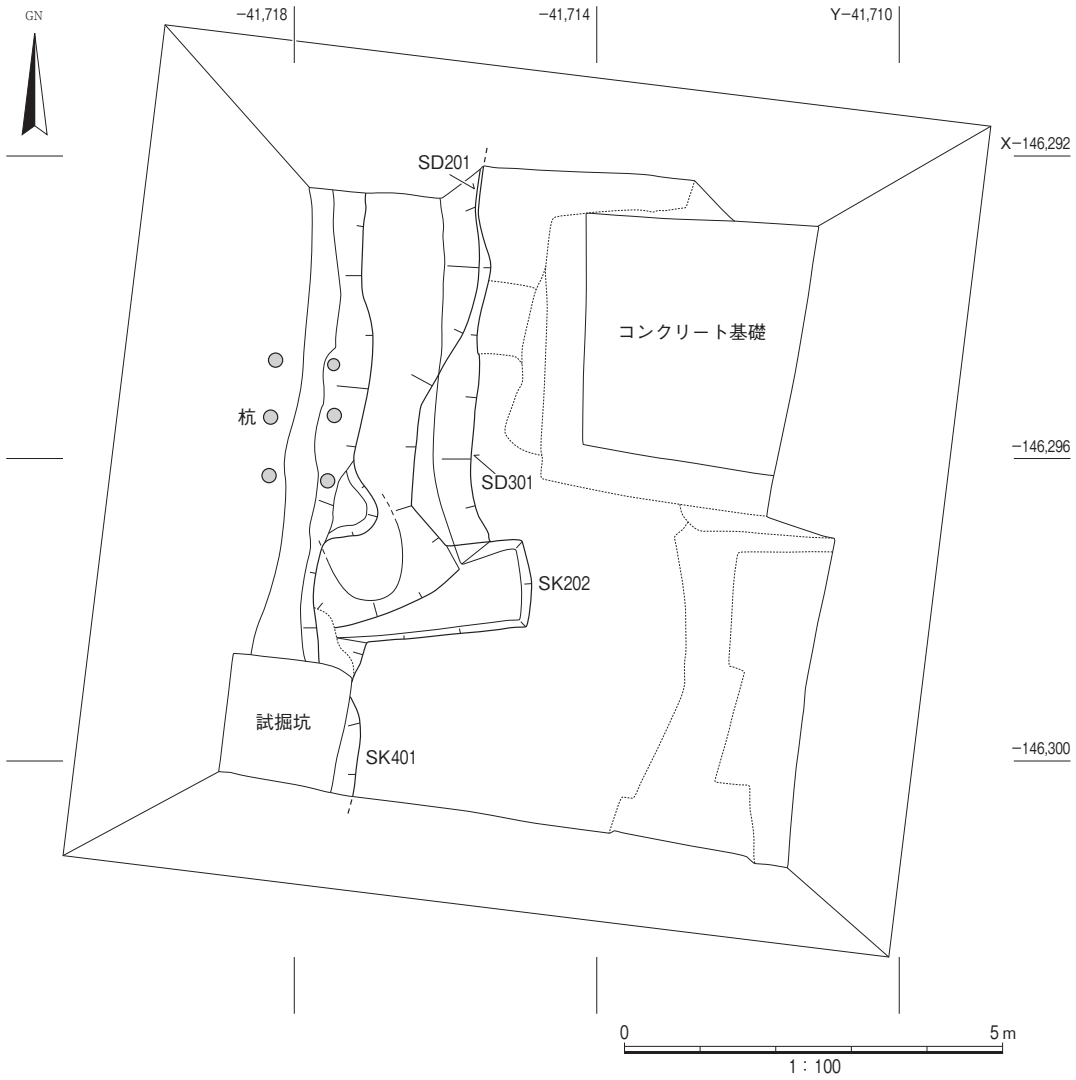


図５　遺構平面図

壁断面からすると深さ0.9m以上あり、底は出ていない(図４)。南や西へ続く大きな土壙と推測される。肩はなだらかで、粘土偽礫混り灰色(5Y4/1)細粒砂で一度に埋められていた。遺物はなかったが、検出面から中世後期～近世前半の遺構の可能性がある。肩の形状、深さ、埋め方などから、市内の海岸部などの低地帯で見つかっている大型の水溜状土壙が想起される。

ｂ．第３～２層上面(図５・６)

SD301は南北方向の大きな溝で、西肩は調査区外になる。幅3.5m以上、深さ1.4m前後である。底には、細粒砂のラミナを含む水成の灰色(7.5Y4/1)粘土層が溜っていた(図４)。SD301は主要な灌漑水路で、第２層堆積後も同じ場所でSD201として維持され続けた。SD201は、幅はSD301と同程度で、深さは1.0m前後である。SD201の下半は、粗粒砂のラミナを含む水成の褐灰色(10YR5/1)粘土～シルト層で埋まり、上半はにぶい黄色(2.5Y6/4)中粒～粗粒砂層で埋められていた(図４)。

SD301とSD201の間で出土遺物にさほどの差はなく、19世紀前葉～中葉である。1885(明治18)年測図の地図には表現されていないが、1929(昭和４)年の地図には、該当箇所に北流する水路が描かれている。

SD201に連接してSK202があった。SK202は長さ2.50m、幅1.15m、推定の深さ１m強で、整った直方体を成している。用途はよくわかないが、SD201と同時に埋められていた。

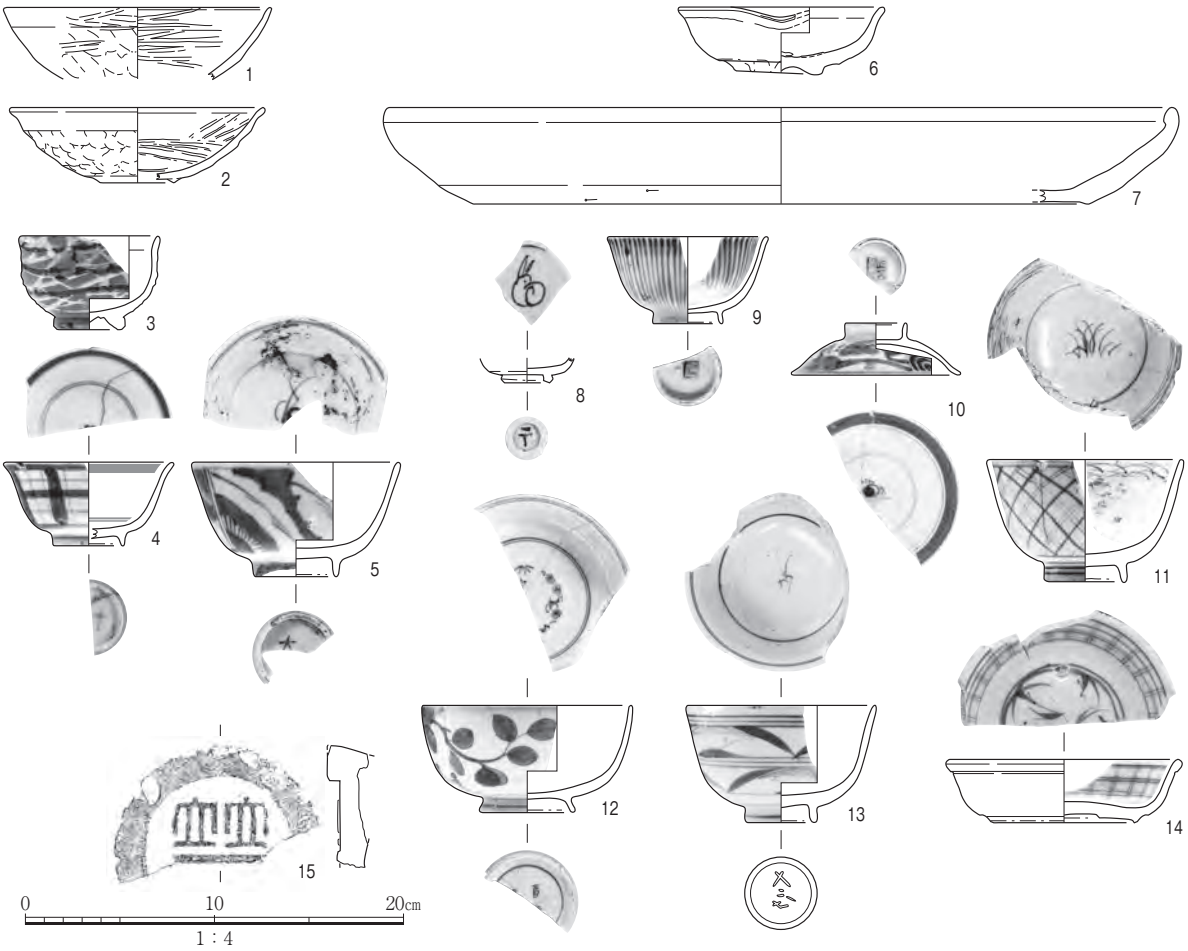


図６　出土遺物実測図

SD301(３～５)、SD201(１・２・６・７～15)

また、西壁際に直径20㎝弱の６本の杭が並んでいた。SD201と関連する可能性もあるが、近代の建物の基礎杭と思われる。

SD301とSD201からは図６の遺物が出土した。瓦器椀１・２、肥前陶器皿６、備前焼鉢７、中国産青花小杯８は遺構より古い遊離資料である。瓦器椀は摩滅しておらず、近辺に12～13世紀の遺跡がある可能性もある。３～５はSD301の出土で、萩焼のピラ掛け碗３、瀬戸美濃焼磁器染付碗４、砥部焼染付碗５である。SD201からは肥前磁器染付碗12、瀬戸美濃焼磁器染付の碗９と蓋10、砥部焼染付の碗11・13と皿14が出土した。軒丸瓦15の瓦当文様は、篆書体「竹」冠の下がわからない。

２）まとめ

・中世に遡ると推定される地層上面で大型の土壙を検出し、19世紀に利用された灌漑水路を調査した。

・干潟から陸化し、水田化される過程を追うことができた。中世以前と推定される地層は現地表から１～1.5mにあり、自然堤防などの微地形や旧集落の場所を勘案して調査地を選定することで、中世以前を対象に発掘成果をあげることができるだろう。

旭区新森七丁目１－７他における建設工事に伴う
森小路遺跡発掘調査(MS17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市旭区新森７丁目１－７他
調 査 面 積　　70㎡
調 査 期 間　　平成29年12月14日～12月21日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋工、清水和明

1）調査に至る経緯と経過

本調査地は森小路遺跡東端を南北に延びる国道479号線（内環状線）に東面する新森５丁目の関西電力（株）旭東変電所敷地内に当る。当遺跡は弥生時代～中世の集落遺跡として知られ、本調査地に近接する既往の調査でも、弥生～古墳時代の遺構・遺物が多数検出されている。

北西に接するMS93－29次調査地では、弥生時代中期前葉とみられる水成層で埋没する落込みの上位で、弥生時代中期の土壙のほか古墳時代中期の井戸・土壙も見つかっている[大阪市文化財協会2001]。西へ50m弱のMS85－30次調査地では同時期の水成層で埋没する北へ向かう落込みや中世の溝がある[大阪市文化財協会1985]。また、西へ70m程のMS88－５次調査地では弥生時代中期全般および後期の土壙と古墳時代中期の土壙などが見つかっているなど[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990]、集落の中心地はより西に想定されているものの、周辺では弥生時代をはじめとして遺構・遺物が顕著に発見されている地域である。なお、この弥生時代中期の水成層は時期によって若干分布する範囲に変化がみられるものの、遺跡北部で東西に延びる微高地より南側の低地にある調査地多数で確認されている。淀川の氾濫性堆積物が河内潟を埋積する過程の地層であるが、調査地の北北東100m付近に近接するMS01－26次調査地では確認されず[大阪市文化財協会2003]、本調査地が微高地との変換点付近に当ると理解される。

大阪市教育委員会による試掘調査では、地表下約0.7m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面が検出されたことにより、発掘調査を実施することとなった。周辺の調査成果からは、特に弥生時代の集落や落込みを埋める水成層の広がりなど古地形に係わる情報を得ること、また古墳時代以降の遺構についても存在を確認することなどをおもな目的とした。

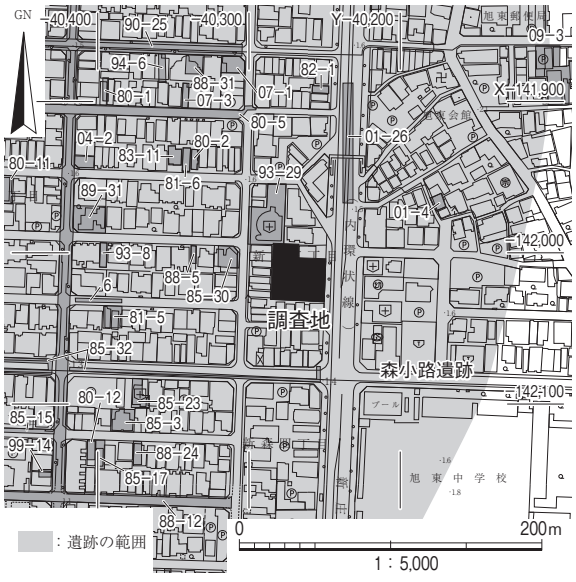


図１　調査地位置図

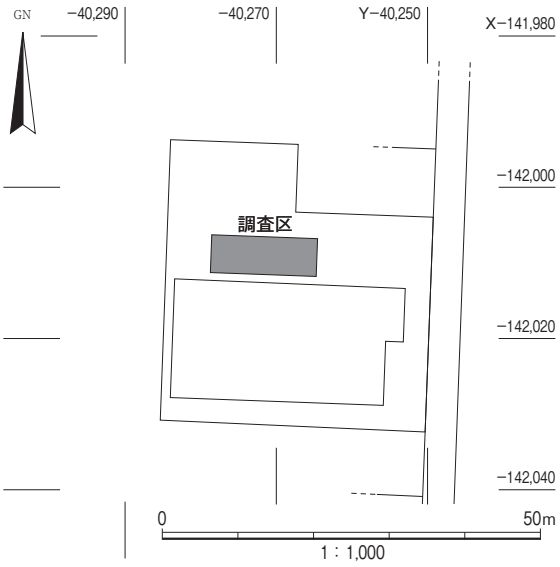


図２　調査区配置図

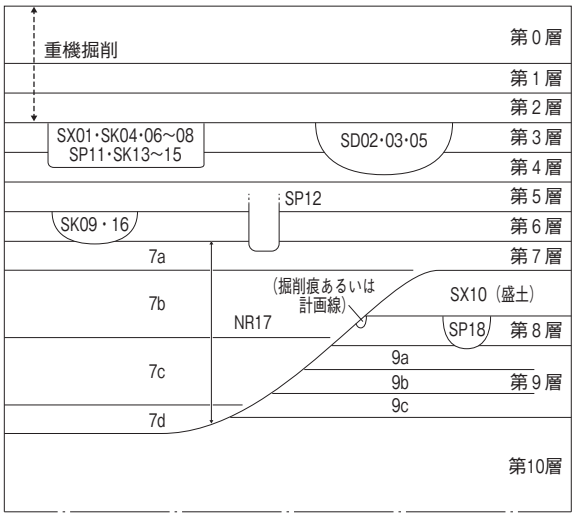


図３　地層と遺構の関係図

調査は平成29年12月14日から開始した。当初計画のとおり東西14m、南北５mの調査区を設定し、地表から約0.7m下の後述する第３層上面までを重機で掘削し、古代の遺構を調査した。その後、下位の第７層上面・第８層上面で弥生時代中期の遺構を調査し、各面で遺構・遺物の検出と写真・図面による記録作業を行い、同年12月21日に機材を撤収し、現地におけるすべての作業を終了した。

また、本文で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３～５)

調査地はTP+1.6mで概ね平坦な地形であるが、調査地を含む400m四方で概観すれば、北東から南西に向けて0.5m程度低くなる緩やかな傾斜地となっている。

調査で確認された地層は、11層に大別した。以下に各地層の詳細を記す。

第０層：変電所の建設にかかる現代の整地層で、層厚は40㎝程度である。

第１層：黒褐色(2.5Y3/1)細礫混り粗粒砂質シルト層ないしオリーブ黒色(7.5Y3/1)細礫混り粗粒砂質シルト層で、層厚は10㎝程度だが、調査区西端では層厚40㎝程まで厚くなり、底が低く段をなしている。現代の作土層である。

第２層は灰色(10Y5/1)シルトを中心にわずかに粗粒砂が混じる。層厚15㎝程度の近世の作土層であるが、調査区西端では第１層と同じく一段低くなっている。本層まで重機で掘削した。

以下の第３～６層が揃って確認できたのは調査区東端のごく一部である(図５　東壁地層断面図)。これは水成層である下位の第７層が堆積した後、調査区東端側のわずかに低い場所で各層が形成されたためと考えられる。

第３層：灰オリーブ色(5Y5/2)極細粒砂質シルト層で、層厚15㎝以下の古土壌である。本層の上面で、古代の遺構を検出した。

第４層：黒褐色(2.5Y3/2)極細粒砂質シルト層で、層厚は15㎝程度の古土壌である。

第３・４層の出土遺物は未確認であるが、上下の地層や遺構の年代から古墳時代～古代の地層と考えられる。

第５層：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト層で層厚10㎝程度の古土壌である。上下の地層に比して暗色化が進んでいる。本層内遺構のSP12から古墳時代の土師器高杯８が出土したことから、古墳時代の

地層と判断される。周辺調査地では古墳時代中期の遺構が検出されており、8は同時期のものであろう。

第6層：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト層で、層厚10cm程度の古土壌である。本層上面の遺構に調査区西部のSK09があり、畿内第Ⅳ様式に属する弥生土器が埋納されていたことから、本層は弥生時代中期後葉に属すると考えられる。

第7層：第7a～7d層の4層に細分された水成層だが、東調査区東壁では層厚30cm以下と薄くなり、第7b層以下は細分できなかった。後述するSX10より西側では自然流路のNR17を埋積し、調査区西壁では層厚90cm以上となる。

7a層：灰色(5Y4/1)シルト層で、調査区の全域に層厚10cm弱で薄く堆積しているが、西壁では南壁側で厚くなっている。

7b層：灰色(5Y5/1)～灰オリーブ色(7.5YR4/2)細粒砂～シルト層である。

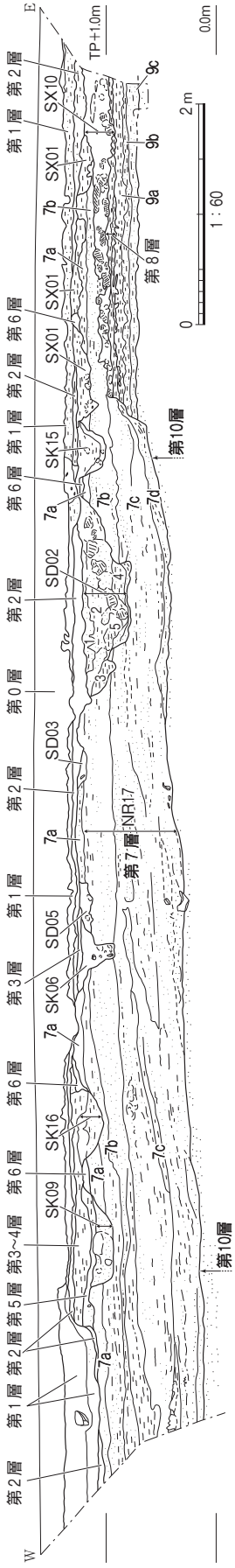
7c層：灰色(10Y5/1)～(7.5YR5/1)細粒砂～シルト層である。

7d層：灰色(10Y5/1)～(7.5YR5/1)粗粒砂～シルト層で、NR17の東側の立ち上がり付近の基底に堆積していた。

第7層からは弥生時代中期中葉の第Ⅲ様式に属する土器4・5や環状石斧6(7a層)などが出土した。

第8層：上部は暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト層で層厚10cm弱、下部は暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト層で層厚5cm程度である。本層上面は盛土遺構であるSX10構築時の旧地表面で、盛土中からは第Ⅱ様式に属する1～3などの弥生土器が出土した。

第9層：下位の第10層の最上部が離水後に



層序

第1層：黒褐色(2.5Y3/1)細礫混り粗粒砂質シルト(現代作土)
　オリーブ黒色(7.5Y3/1)細礫混り粗粒砂質シルト(現代作土)
第2層：灰色(10Y5/1)わずかに粗粒砂混りシルト(近世作土)
第3層：灰オリーブ色(5Y5/2)極細粒砂質シルト
第4層：黒褐色(2.5Y3/2)極細粒砂質シルト
第5層：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト
第6層：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト
第7層：(7a層)灰色(5Y4/1)シルト
　(7b層)灰色(5Y5/1)～灰オリーブ色(7.5YR4/2)細粒砂～シルト
　(7c層)灰色(10Y5/1)～(7.5YR5/1)細粒砂～シルト
　(7d層)灰色(10Y5/1)～(7.5YR5/1)粗粒砂～シルト
第8層：(上部)暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト
　(下部)暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト
第9層：(9a層)オリーブ黒色(5Y3/1)シルト
　(9b層)暗灰黄色(2.5Y4/2)少し粗粒～極粗粒砂質シルト
　(9c層)暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルト
第10層：灰オリーブ色(5Y6/2)極粗粒砂

遺構埋土

SX01：暗灰黄色(2.5Y5/2)含細粒砂シルト偽礫、極細粒砂質シルト
SD02：(1)灰色(5Y4/1)中粒砂質シルト
　：(2)灰色(7.5YR4/1)中粒砂質シルト
　：(3)オリーブ黒色(5Y3/1)シルト
　：(4)灰色(5Y4/1)極粗粒砂質シルト
　：(5)灰オリーブ色(5Y5/2)中粒砂質シルト
SD03：灰オリーブ色(5Y4/2)極細粒砂質シルト
SD05：暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト
SK06：オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルト
SK09：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト
SX10：暗灰黄色(2.5Y4/2)含暗褐色シルト偽礫、細粒～粗粒砂質シルト
SK15：(上部)黒褐色(2.5Y3/2)含シルト偽礫、細粒砂質シルト
　：(下部)黄褐色(2.5Y5/3)含シルト偽礫、細粒砂質シルト
SK16：灰色(7.5YR4/1)中粒砂質シルト

図4　調査区北壁地層断面図

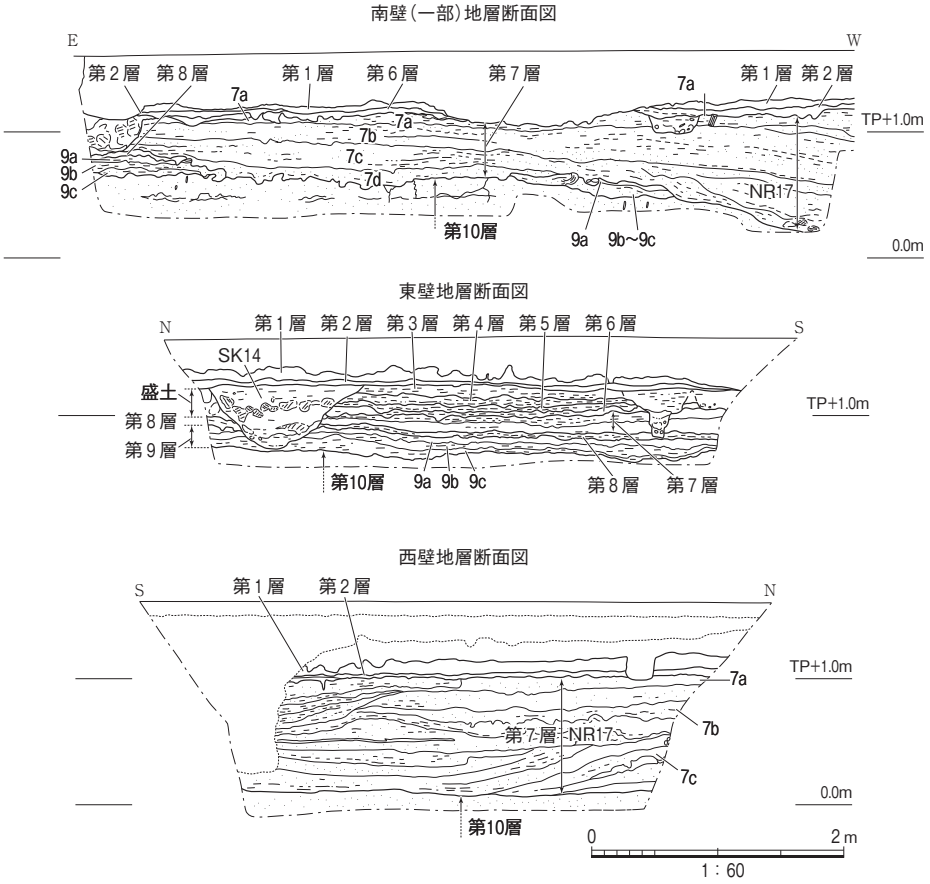


図５　調査区南壁(一部)・東壁・西壁地層断面図

土壌化して形成された地層で、第9a～9c層の３層に細分された古土壌である。本層から下位の層準で出土した遺物はない。

9a層:オリーブ黒色(5Y3/1)シルト層で、層厚は10cm程度である。上面に乾痕があり、第８層が入っている。

9b層：暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒～極粗粒砂質シルト層で、層厚は10cm弱である。

9c層：暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルト層で、層厚は10cm程度である。

第10層：灰オリーブ色(5Y6/2)細礫混り中粒～極粗砂層で、層厚30cm以上を確認した。調査区全体で確認された水成層である。

ⅱ)遺構と遺物(図６～９)

調査した遺構は弥生時代と奈良時代に属する。

ａ．弥生時代の遺構と遺物(図６・９)

弥生時代では第８層上面と第６層上面の２層準で遺構を検出した。

第８層上面の遺構には調査区東端のSX10がある(図６)。第８層を作業面として東西3.2m以上、南北1.5m以上の範囲で検出された高さ0.2mの盛土遺構である。南辺と西辺がやや鋭角に合わさって角をなすようにみられるため、多角形となる盛土の西南隅を検出したと推測するが、全体の形状は不明である。盛土を除去すると、西南隅の裾で下端と同じ方位で短い溝が４個所掘削されていた(写真１)。

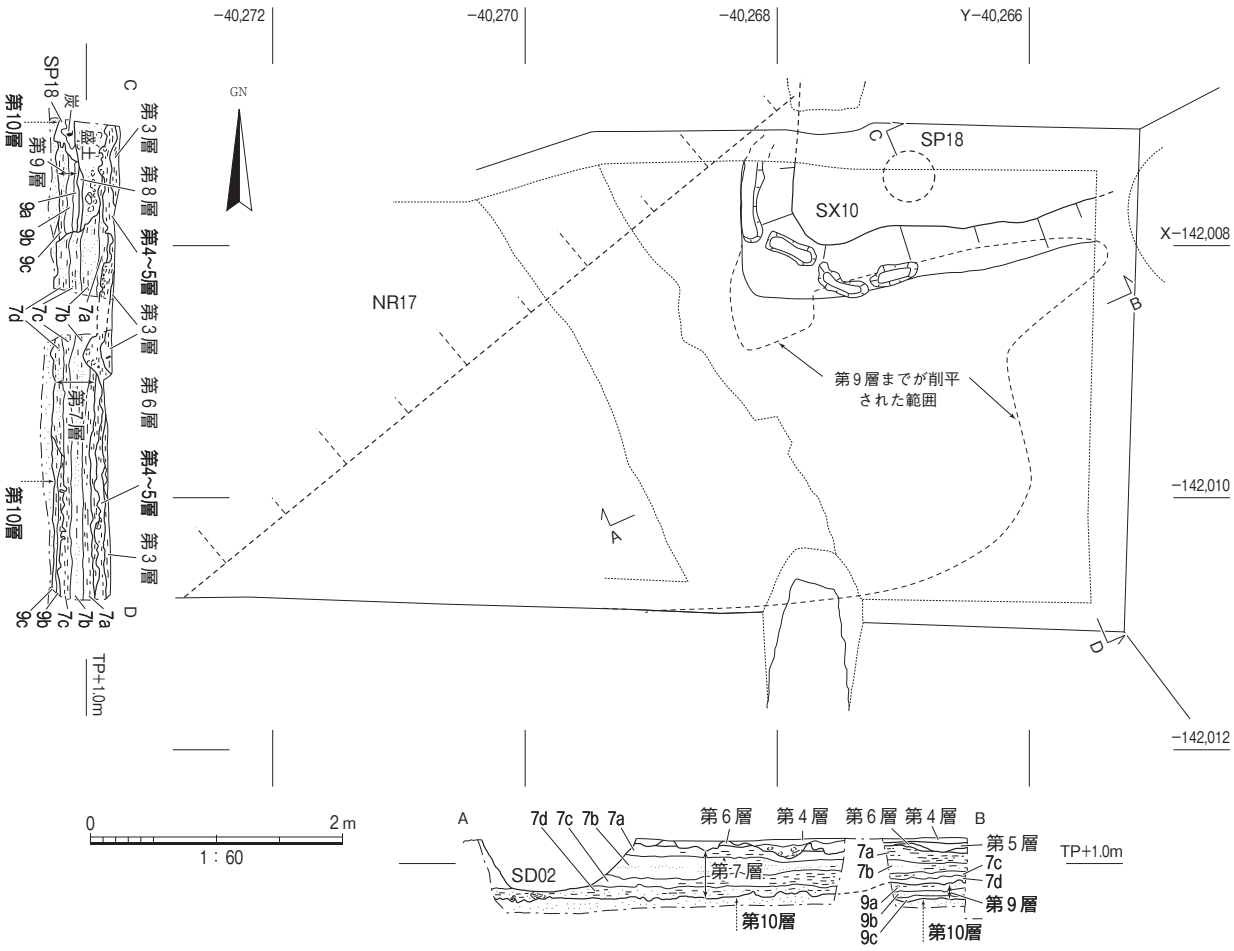


図６　SX10平面・断面図

埋土に第８・９層の偽礫を含み、盛土の際の掘削痕か、あるいは盛土西南隅の位置を示した計画線の可能性も考えられる（図６・写真１）。盛土西南隅の外側は2.0m程度の幅で第９層が完全に削平されており、さらにその外はやや浅く第９層の基底付近が残る程度まで削平ないし踏込みで擾乱されていたが、調査区東壁付近の範囲は狭く浅いため、平面は不定形である。周囲の土を掘削して盛り上げたと考えられるが、調査区の範囲では第９層に由来する偽礫はなく、より中央側の盛土などに利用された可能性が考えられる。盛土からは弥生土器１～３が出土した。１は壺で口縁端部を垂下させ、波状の刻目をつけている。２・３は甕で、口縁部が緩やかに外反するものである。これらは弥生土器の第Ⅱ様式に属する弥生時代中期前葉のものである。

また、SX10の基底でSP18が掘削されているが（図６C－D断面）、断面のみの観察にとどまった。埋土に第８層の偽礫を含むため、第８層上面の遺構であろう。

先述のNR17はSX10の西南隅から調査区西外まで広がる自然流路で、北東から南西へ流れている。第７層は氾濫によってSX10南側にもあふれ、第7a層の段階ではSX10をほぼ覆っている。

写真１　SX10南西裾の掘削痕（西から）

写真２　環状石斧６出土状況（東から）

NR17からは４・５をはじめとする弥生土器や磨製石器が出土した。４は甕で口縁部から屈曲の明瞭な頸部を経て、膨らみを持つ胴部に至る。胴部は内外面とも縦方向のハケを施し、口縁部は内面が横方向のハケ、外面はヨコナデで調整している。５は細頸壺で、外面の頸部から胴部との境付近にかけて縦方向のミガキを、胴部は横方向のミガキを施している。これらは第Ⅲ様式のもので、弥生時代中期中葉に属する。そのほか、調査区の西南角付近（図７）で第7a層から環状石斧６が出土した（写真２）。外径8.5㎝、内径2.3㎝、厚さ1.8㎝である。

SK09・16は調査区北壁西部で見つかった小型の土壙で、平面の調査を行っていないため、その位置を図７に示した。SK09は東西0.9m、深さ0.3m弱で、第５層に覆われた暗黄灰色（2.5Y4/2）極細粒砂質シルトを埋土としている。内部に口縁部を西に向けた弥生土器壺７を横位に埋納していた。７は重機掘削時に破損したもののもとは完形品とみられる。上下にやや肥厚させた口縁部に凹線を巡らせ、短い頸部の下は中央付近が最大径となる胴部で、中央のやや上位に列点文を施している。頸部から胴部中央まではタテハケ、下部は縦方向にミガキを施している。第Ⅳ様式の弥生時代中期後葉のものである。SK16も調査区壁面の断面のみの確認であるが層準から同時期の遺構であるため、弥生時代中期後葉の遺構が調査地付近に分布することが明らかとなった。

以上のほかに、古代の遺構からも混入した弥生土器が出土している。壺９・高杯10はSK07から出土した。９は口縁端部をわずかに下方へ肥厚させ、頸部に縦方向のミガキを施している。10は高杯の、低い椀形となる杯部である。これらは第Ⅲ～Ⅳ様式のもので、第７層に含まれていたものであろう。

b. 古墳～奈良時代の遺構と遺物（図７～９）

古墳時代の遺構は多くないが、第７層上面でSP12を検出した。埋土から第５層内遺構と判断され、古墳時代の土師器高杯の杯部８が出土した。

古代では溝や土壙などの遺構を第３層上面で検出した。調査区東半で北西から南東に延びる溝を3条検出した。

最も幅広く深い溝はSD02で、幅1.15m、深さ0.35mである。溝の基底の高さは調査区内ではほぼ一定である。埋土の下部は水漬きの灰色極細粒砂質シルトで、機能時堆積層である。上部は灰色極細粒砂ないし暗灰黄色極細粒砂質シルトなどを主体とする偽礫で埋められていた。

SD03やSD05はSD02に平行する溝で、幅は0.45m ～1.0m、深さは0.05m程度とSD02に比べて幅も狭く浅い。

SD02からは奈良時代の土器が出土した。11・12は土師器皿で、11は口縁部をやや外方に折り曲げている。12は口縁端部をつまみ上げてわずかに内側へ折り曲げている。杯Aの可能性もある。13は土師器杯Aで、口縁部をやや外方に曲げ、口縁端部をわずかに内側へつまみ上げている。いずれにも暗

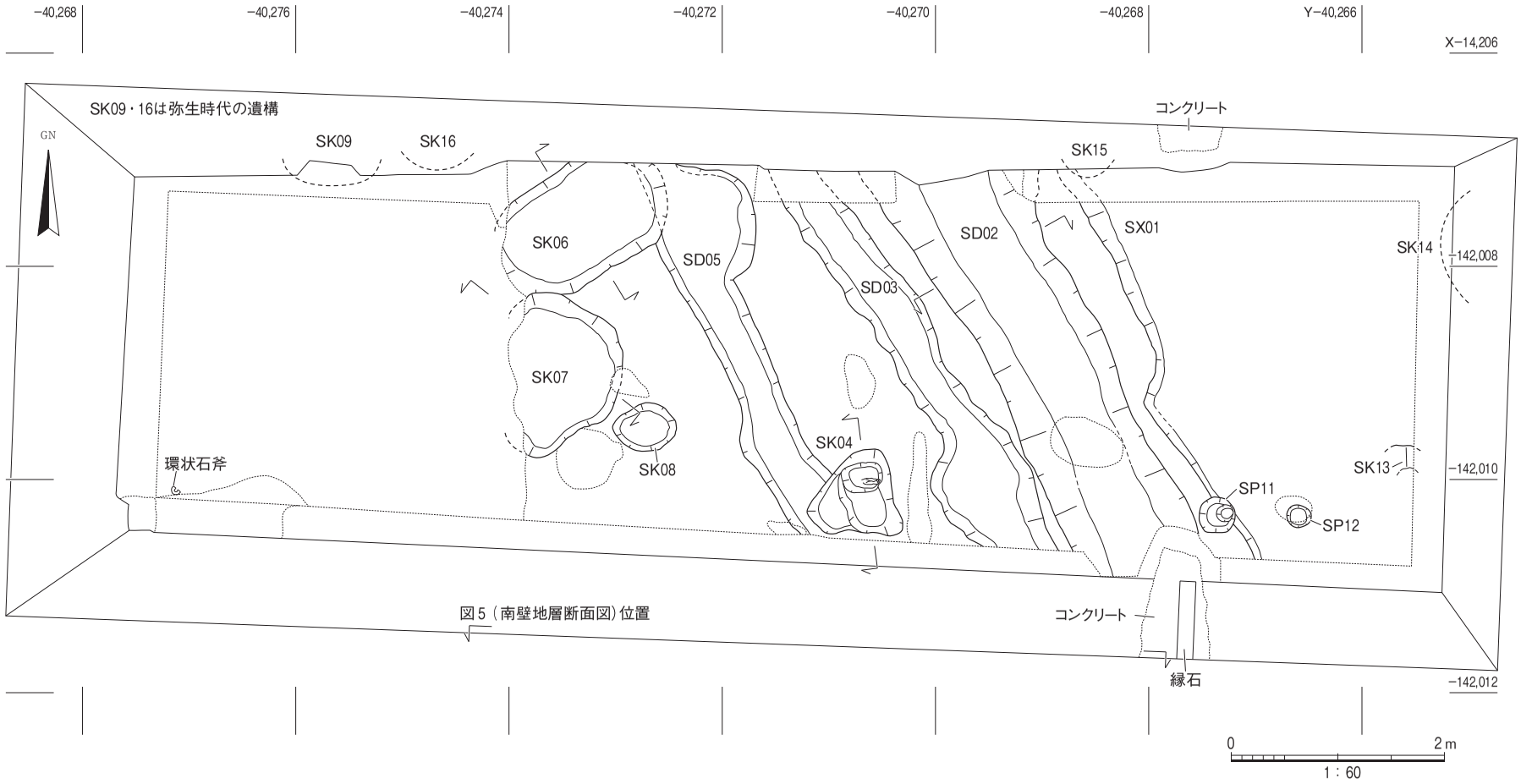


図7　古墳～奈良時代の遺構平面図

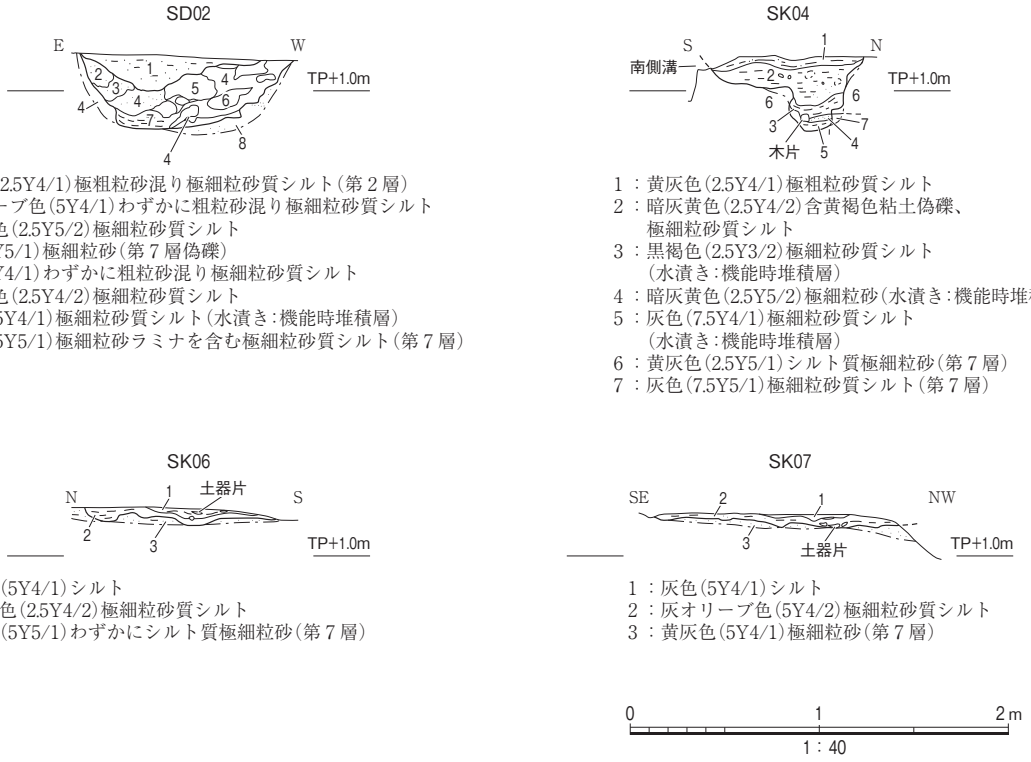


図８　古墳～奈良時代の遺構断面図

文はない。15は須恵器杯Bである。底部外面にヘラによる直線があり、ヘラ記号の可能性がある。17は須恵器甕の口縁から頸部片である。SD03からは土師器杯A14が出土した。これらは奈良時代のものである。

またSD05の周辺ではいくつかの土壙を検出した。

SK04は南北0.8m、深さ0.4mで、北側が深い段掘りとなっている。基底には水漬きの黒褐色極細粒砂質シルトと暗灰黄色極細粒砂層があり、機能時堆積層である。遺構の上部は黄褐色粘土の偽礫を含む暗灰色極細粒砂質シルトで埋められていた。SK06・07は深さ0.1mの浅い土壙で、黄灰色ないし灰オリーブ色極細粒砂質シルト層を埋土としていた。

SD02の東側で調査区外に広がるSX01は、踏込みなどによって荒らされたため遺構の輪郭が不明瞭となっているが、SD02に並行する短い溝や浅い窪みなど複数の遺構が合わさったものである。SK13はその一つで、須恵器杯Bの16が出土した。

SK14は調査区東壁の断面で確認した。南北1.2m、深さ0.5mで、暗褐色の偽礫を多く含む黄褐色および暗灰黄色シルト質細粒砂層の埋土で埋められていた。

これらはSD02と同層準であり、奈良時代の遺構であろう。

3)まとめ

本調査では、周辺調査地の成果と同じく、弥生時代中期および古代の遺構を検出することができた。

弥生時代では森小路遺跡では希少な盛土を伴う中期前葉のSX10を検出した。墳丘の可能性もあるが、周溝ははっきりせず、祭祀などに伴うとみられる土器も出土していないことから積極的に肯定は

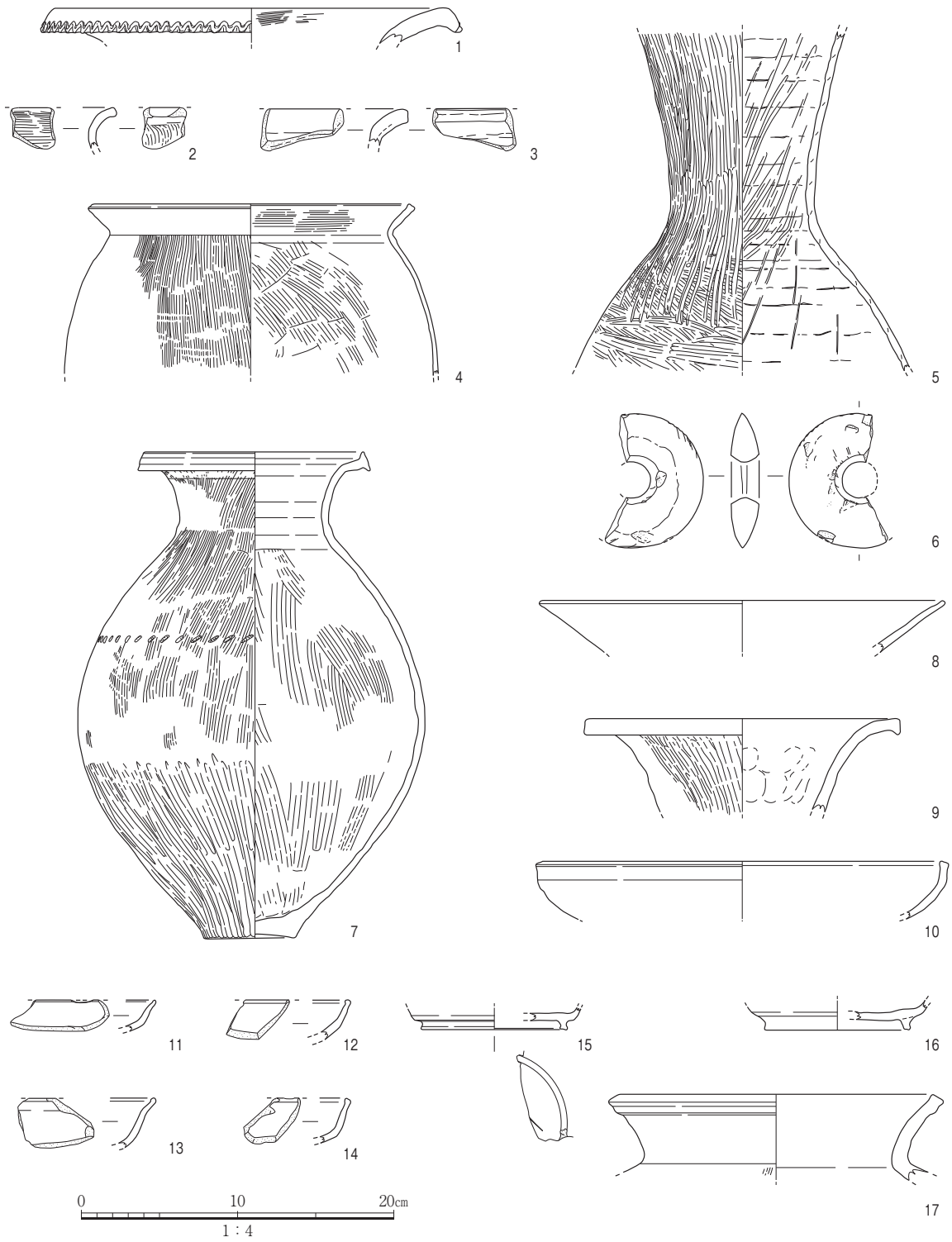


図９　出土遺物実測図

SX10(１～３)、NR17(４～６)、SK09(７)、SP12(８)、SK07(９・10)、SD02(11～13・15・17)、SD03(14)、SK13(16)

できない。SX10より西側に広がるNR17は本調査地の北西に位置するMS93－29次調査地のSX01とつながる可能性があろう。NR17を埋積した第７層を挟んで中期後葉に降る土器埋納遺構のSK09が検出されたことも重要で、当該期の集落の広がりを明らかにするうえでも、周辺での今後の調査に注意する必要がある。

古代には溝や土壙が見つかっている。溝は一定期間開口していたもので、耕作地への導排水などの機能が想定されよう。

本調査地周辺は遺跡中央部側に比べて調査個所がさほど多くないが、遺構の検出される高さは地表面から浅く、開発によって失われやすい条件であるため、今後とも細密な調査が必要と考えられる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990、「鵜木邸建替えに伴う森小路遺跡発掘調査(MS88－5)略報」:『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.149－162

大阪市文化財協会1985、『山本マンションの建築に伴う森小路遺跡発掘調査(MS85－30)略報』

大阪市文化財協会2001、「MS93－29次調査」:『森小路遺跡発掘調査報告Ⅰ』、pp.169－172

大阪市文化財協会2003、「森小路遺跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－』、pp.119－126

城東区中央二丁目22－２・24における建設工事に伴う
蒲生遺跡Ｂ地点発掘調査(GM16－１)報告書

調 査 個 所　　城東区中央２丁目22－２・24
調 査 面 積　　130㎡
調 査 期 間　　平成29年３月28日～４月７日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋工、清水和明

1）調査に至る経緯と経過

調査地は、京阪本線とJR城東貨物線が交差する地点から東へ100m付近に位置し、淀川や寝屋川が形成する氾濫原上に位置する。本調査地の付近ではこれまでに行われた発掘調査がなく、近い場所では北西510mの榎並城跡伝承地（EN01－５次調査地）［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003］と南南西430mの蒲生遺跡（GM13－１次調査地）［大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015］が上げられる。前者では13～15世紀代の遺構・遺物がまとまって出土し、また、16世紀中葉の遺物も見つかっていることから中世の榎並荘および榎並城との関連が注目された。後者では近世の耕作地のほか、飛鳥時代の落込みや畦畔状の高まり、甕や高杯、竈などの遺物が出土し、周辺に古代の集落が存在したと推測されている。本調査地は蒲生遺跡の範囲外となる新発見遺跡であり、蒲生遺跡B地点とされている。

当該地における大阪市教育委員会の試掘調査では、地表下約1.4mで近世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。そこで当該地における地層や遺構の年代と広がりを明らかにするため、平成29年

図１　調査地位置図

（遺跡範囲は『大阪府地図情報提供システム』2017年９月現在から転載）

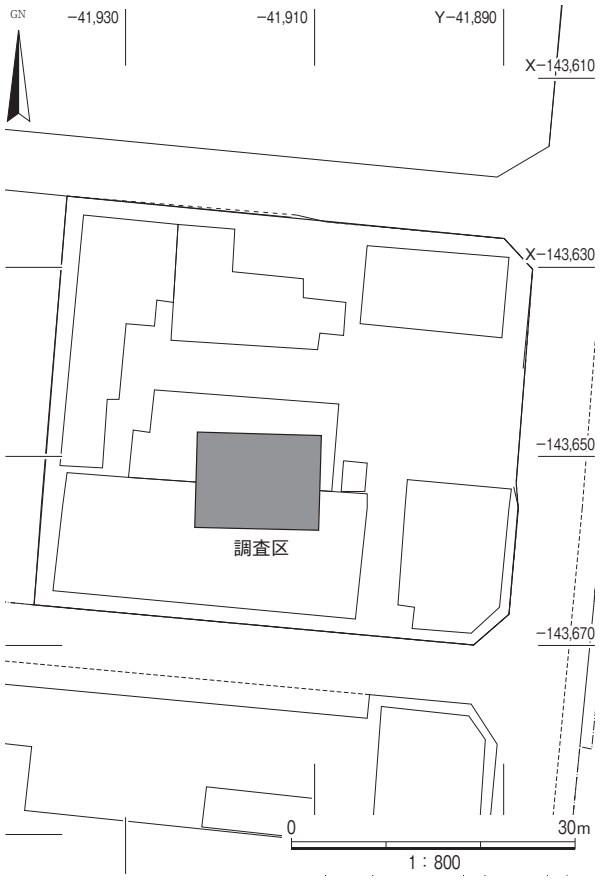


図２　調査区配置図

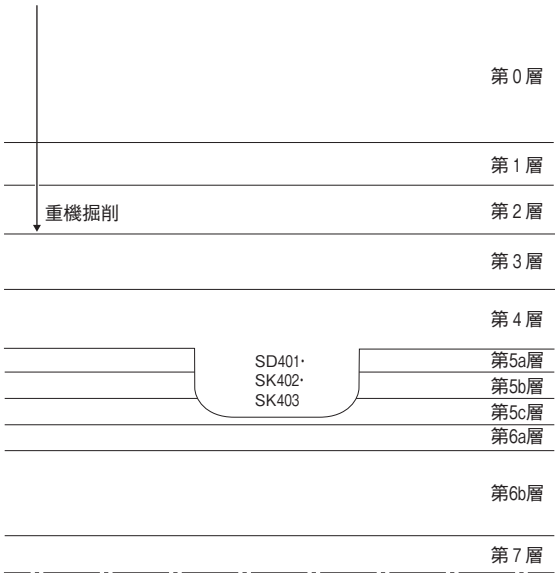


図3　地層と遺構の関係図

3月28日から調査を開始した。調査区は東西13m、南北10mに設定した。重機によって現地表下約1.4mに堆積する第2層までを掘削し、下位の第3層から調査を開始した。調査区全体の平面調査は第3層上面・下面、第4層下面の3面で行い、第5層の上部に形成された湿地性堆積物層の一部を掘削して適宜写真・図面による記録作業を進めた。それ以下は現地表下3.45mの第7層までの堆積状態を断面で確認し、同年4月7日に現地における全ての作業を終了した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

2)調査の結果

ⅰ)層序(図3・4)

調査区の現況地形は、TP+1.0m前後でおおむね平坦である。

調査区の層序は以下の8層に大別した。調査区北壁ないし東壁の地層断面により各層を記述する。

先述のとおり第2層までは重機により掘削している。

第0層：現代の整地層で、層厚は130cm程度である。

第1層：オリーブ黒色(10YR3/1)シルト質中粒砂層で、層厚15cm程度の現代作土層である。

第2層：黒色(7.5Y2/1)シルト質極粗粒砂S層で、層厚20cm程度の作土層である。正確な時期は不詳だが、近代・現代と推測される。

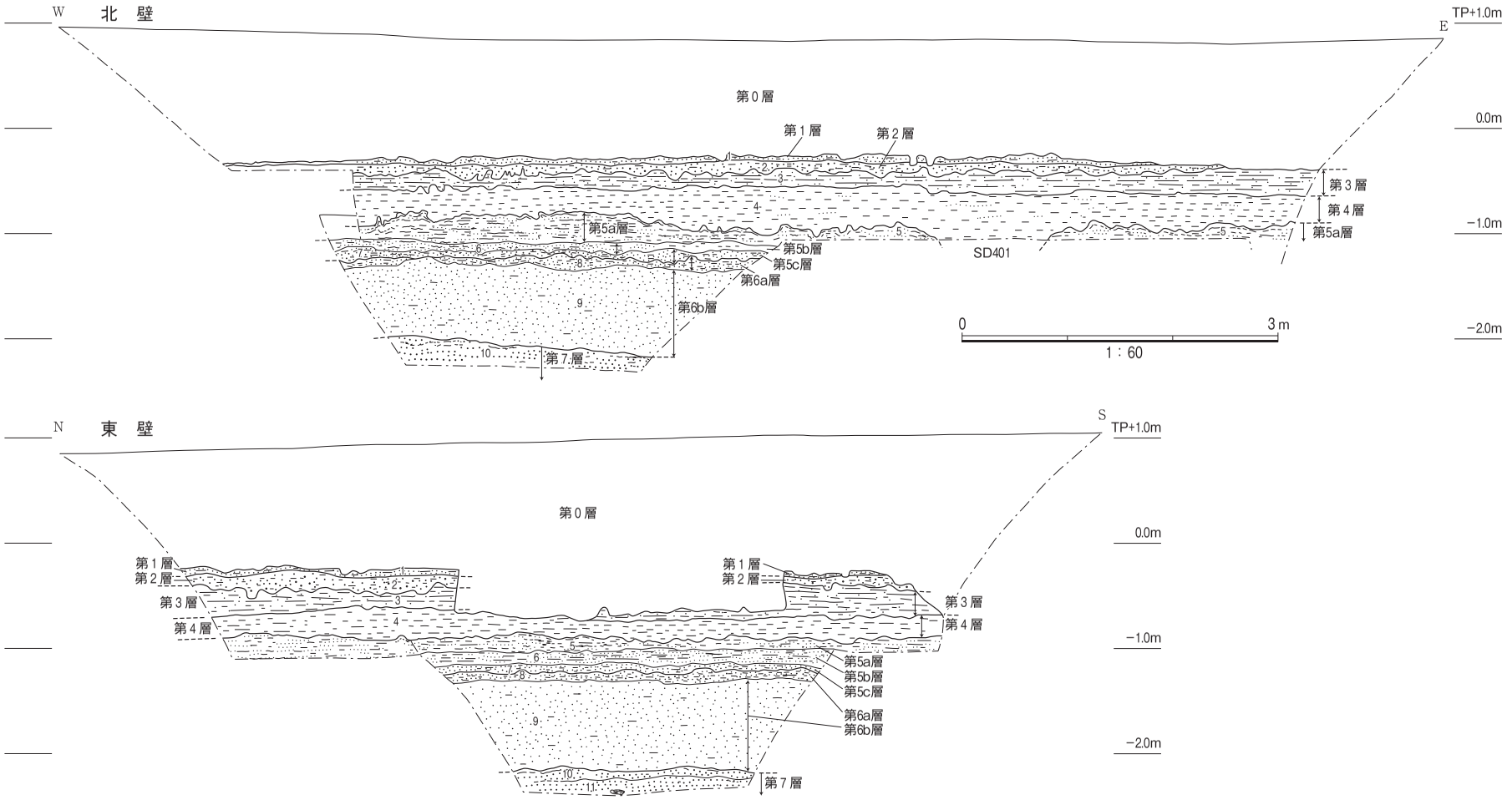
第3層：オリーブ黒色(5Y3/1)極細粒砂混りシルト質粘土層で、耕作によって変形の著しい青灰色シルト偽礫を含む層厚30cm程度の作土層である。18世紀後半に属する。

第4層：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト層で、層厚20～40cm程度の作土層である。本層の下面で溝・土壙を検出した。肥前磁器1や土師器焙烙2など17世紀後葉ないし末の遺物や遊離資料とみられる10世紀末の輸入銭3が出土した。

第5層以下は湿地性堆積層ないし河川の氾濫堆積層で、当地における開発が開始される以前に形成された地層である。

第5層：上・中・下の3層に細分された。

第5a層は黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト層で、植物遺体を多く含み、有機質のラミナが確認された。層厚30cm弱の湿地性堆積層である。本層の掘削中に弥生土器と思われる細片が出土しており、年代の上限を示す。第5b層はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂層で、有機質を含む層厚15cm程度の湿地性堆積層である。第5c層はオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質中粒～粗粒砂層で、層厚15cm程



1：オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質中粒砂(作土)
2：黒色(7.5Y2/1)シルト質極粗粒砂(作土)
3：オリーブ黒色(5Y3/1)含青灰色シルト偽礫、極細粒砂混りシルト質粘土(作土)
4：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト(作土)
5：黒褐色(2.5Y3/1)含有機質ラミナ、植物遺体、極細粒砂質シルト(湿地性堆積物、第5a層)
6：オリーブ黒色(5Y3/1)含有機質、シルト質極細粒砂(湿地性堆積物、第5b層)
7：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質中粒～粗粒砂(植物擾乱を受けている、第5c層)
8：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒～中粒砂(植物擾乱を受けている、第6a層)
9：オリーブ黒色(5Y2/2)わずかにシルト質細粒～中粒砂(河成堆積物、第6b層)
10：オリーブ黒色(5Y3/1)含有機物ラミナ、粗粒～極細粒砂(河成堆積物、第７層)
11：オリーブ黒色(5Y3/1)中粒～粗粒砂(河成堆積物、第７層)

図４　調査区地層断面図

度である。植物根による擾乱を受けているが、河川の氾濫堆積層を起源とする。

第６層：上下２層に細分された。

第6a層はオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒～中粒砂層で、層厚５～15㎝程度である。植物根による擾乱を受けているが、氾濫堆積層を起源とする。第6b層はオリーブ黒色(5Y2/2)細粒～中粒砂層でわずかにシルト質である。層厚70㎝程度である。ラミナは未確認だが氾濫堆積層であろう。

第７層：オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒～極細粒砂層で有機物ラミナを認める。層厚25㎝以上の氾濫堆積層である。

ⅱ)遺構と遺物(図５～７、図版一・二)

本調査で確認された遺構は近世である。ほかに第５層の時期の上限を示す遺物として弥生土器と思われる細片がある。あまり摩耗が進んでおらず地層の時期を示す可能性もあるが、図化していない。

ａ．第４層下面遺構(図５・６、図版一・二)

溝１条と土壙２基が見つかった。SD401は幅1.20m、深さ0.25m弱、方位はＮ８°Ｅとなる溝である。SK402は南北1.30m、深さ0.15mのやや南北に長い土壙で、SK403は直径1.70m、深さ0.08mの平面がほぼ円形となる土壙である。これらの遺構の埋土は全て黒褐色(2.5Y3/1)シルト層で、出土遺物はない。

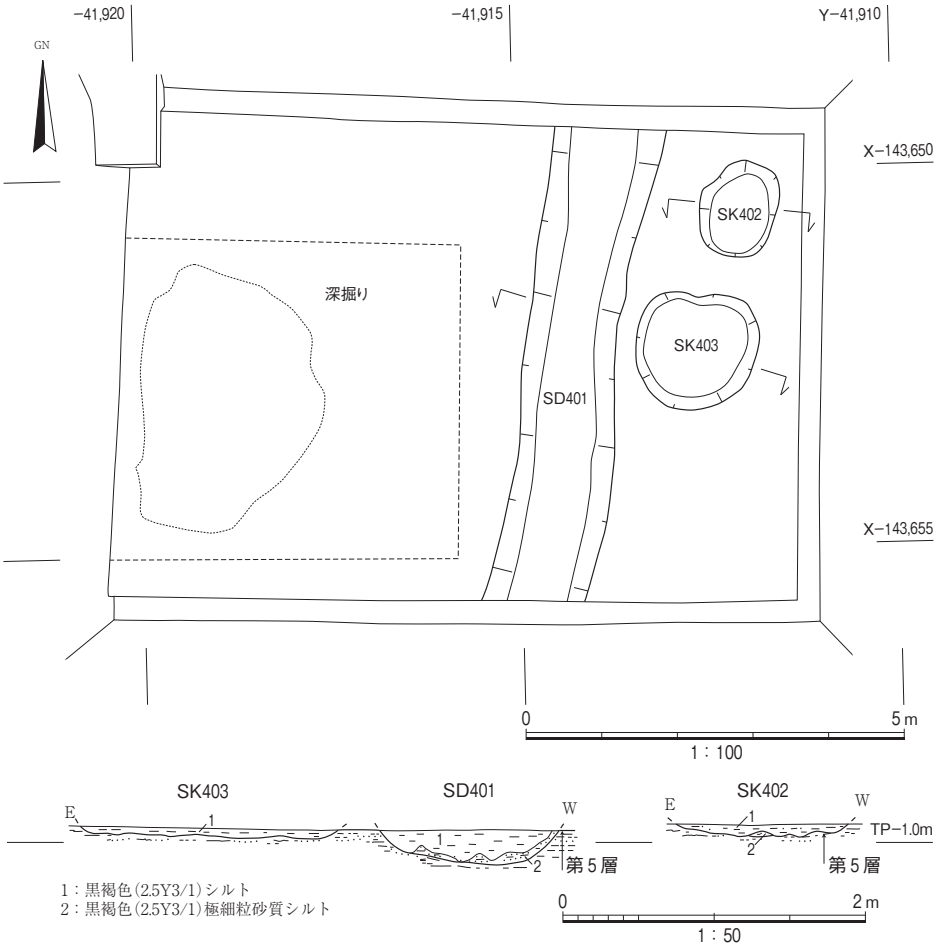


図５　第４層下面遺構平面・断面図

第４層から出土した遺物に肥前磁器１、土師器焙烙２など17世紀後葉ないし末のものがある。染付皿１は染付皿、２の外面はかき上げであろう。これらは第４層および遺構の時期を示すものである。３は北宋の至道年間(995～997年）に鋳造された至道元寶である。文字を草書体とする型の一種類で、外縁の帯が広い。摩耗が進んでいる。

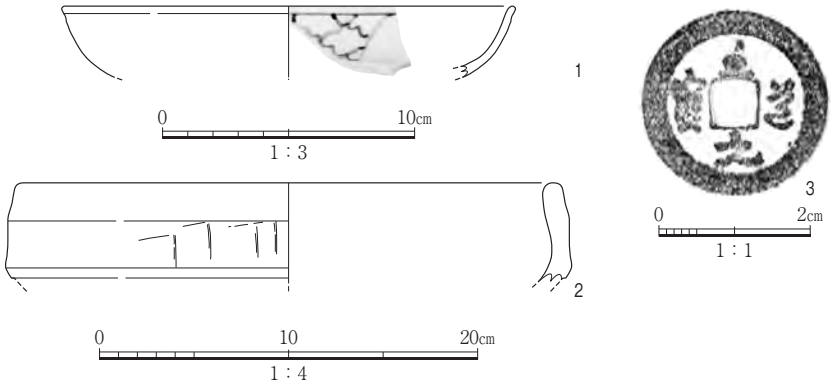


図６　第４層出土遺物実測図

ｂ．第３層下面および上面の調査(図７、図版二)

第３層の下面と上面で遺構の検出作業を行ったが、確認できた遺構はなかった。

第３層からの出土遺物には18世紀後半の土師器焙烙、丹波焼お歯黒壺、肥前磁器碗や関西系陶器土瓶などがあるが、細片のため図化していない。

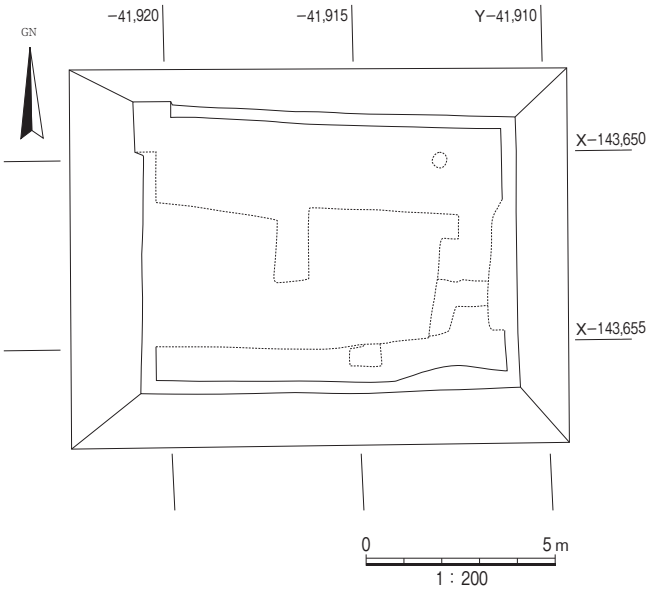


図７　第３層上面検出状況平面図

３）まとめ

以下に、本調査の成果をまとめる。

・当該地域では17世紀に遡って耕作地として開発されていたことが明らかとなった。

・それより古い少なくとも弥生時代以前は低湿地であり、開発困難な環境であるが、あまり摩耗していない土器片が出土しているため、周辺に弥生時代の集落が存在する可能性が考えられよう。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「榎並城跡伝承地発掘調査（EN01－５）報告書」:『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.83－87

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、「蒲生遺跡発掘調査（GM13－１）報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.571－578

城東区新喜多一丁目１－３他６筆における建設工事に伴う
新喜多遺跡発掘調査(SQ17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市城東区新喜多１丁目１－３他６筆
調 査 面 積　　175㎡
調 査 期 間　　平成29年４月４日～４月13日
調 査 主 体　　公益財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工

1）調査に至る経緯と経過

新喜多遺跡は新規に発見された近世の集落遺跡である。調査地では（図１・２）、大阪市教育委員会による試掘調査が行われ、地表下1.6m以下に本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が発見された。今回の調査は、こうした地層の年代や、遺構･遺物の分布状況などを把握し、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的として行うこととなった。

本調査では、現代の整地層を重機によって除去し、近世の自然堆積層である第２層以下の地層と遺構を人力によって掘削した。その途中、適宜に写真撮影・実測図の作成などの記録保存を行い、遺物の捕集に努めた。

基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）で、TP±○mと記した。

2）調査の結果

ｉ）層序（図３・４）

調査地の現況地形は平坦で、地表面の標高はTP+１m前後であった。地表面を構成していたのは瓦礫混り灰色砂からなる現代の整地層で、本層最下部の暗褐色粘土質シルト偽礫から、18世紀代とみられる中国産青花皿２・同鉢３、17世紀後葉～18世紀前葉の肥前磁器染付小杯４、同碗５・６および肥前陶器赤絵碗７、19世紀後葉の瀬戸美濃焼磁器染付碗８が出土した。これらは本層の年代を示すものではなく、客土に混入していたものである。

現代整地層の下位で以下の地層を確認した。

図１　調査地位置図

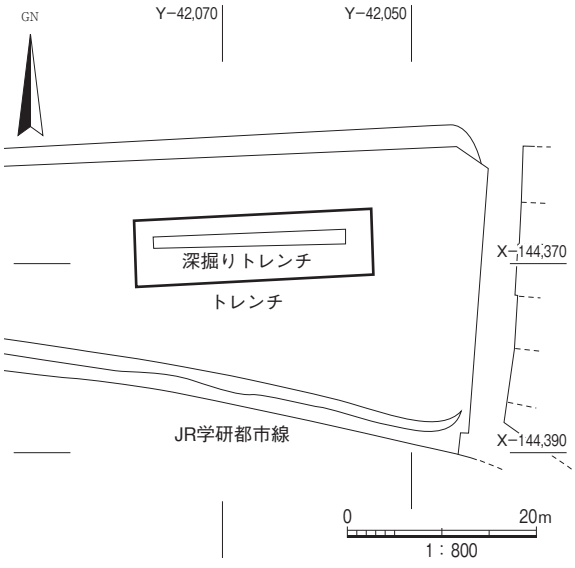


図２　調査区位置図

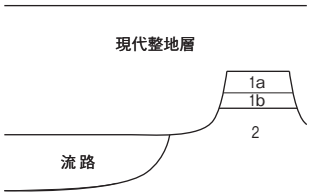


図３　地層と遺構の関係図

第１層は近代から現代のものとみられる作土層で、南壁地層断面でわずかに遺存するのが確認された。２層に分層することができた。両層から遺物は出土していない。

第1a層：オリーブ黒色中粒～粗粒砂からなり、層厚は15cmほどであった。

第1b層：灰オリーブ色砂質シルトからなり、層厚は20cmほどであった。

第２層：灰色砂質粘土～褐色シルト質粘土からなる自然堆積層である。上方にわずかに細粒化していた。層厚は70cm以上であった。上面で自然流路が検出された。

ⅱ)遺構と遺物(図５)

流路　調査区の西北部で検出され、西流する自然流路である。検出されたのは南の肩部分で、幅は1.5m以上、深さは約30cmであった。暗灰黄色砂が自然堆積して埋没していた。上部を削剥され、現代整地層が直接覆っていて、第１層との先後関係は明らかではない。第２層が近世に属するので、それ以降に形成されたものである。埋土からは近世の平瓦、12～13世紀代とみられる土師器皿(図５－１)、中世の土師器羽釜、須恵器片が出土した。近世が本層の所属する年代であり、そのほかの遺物は混入品である。

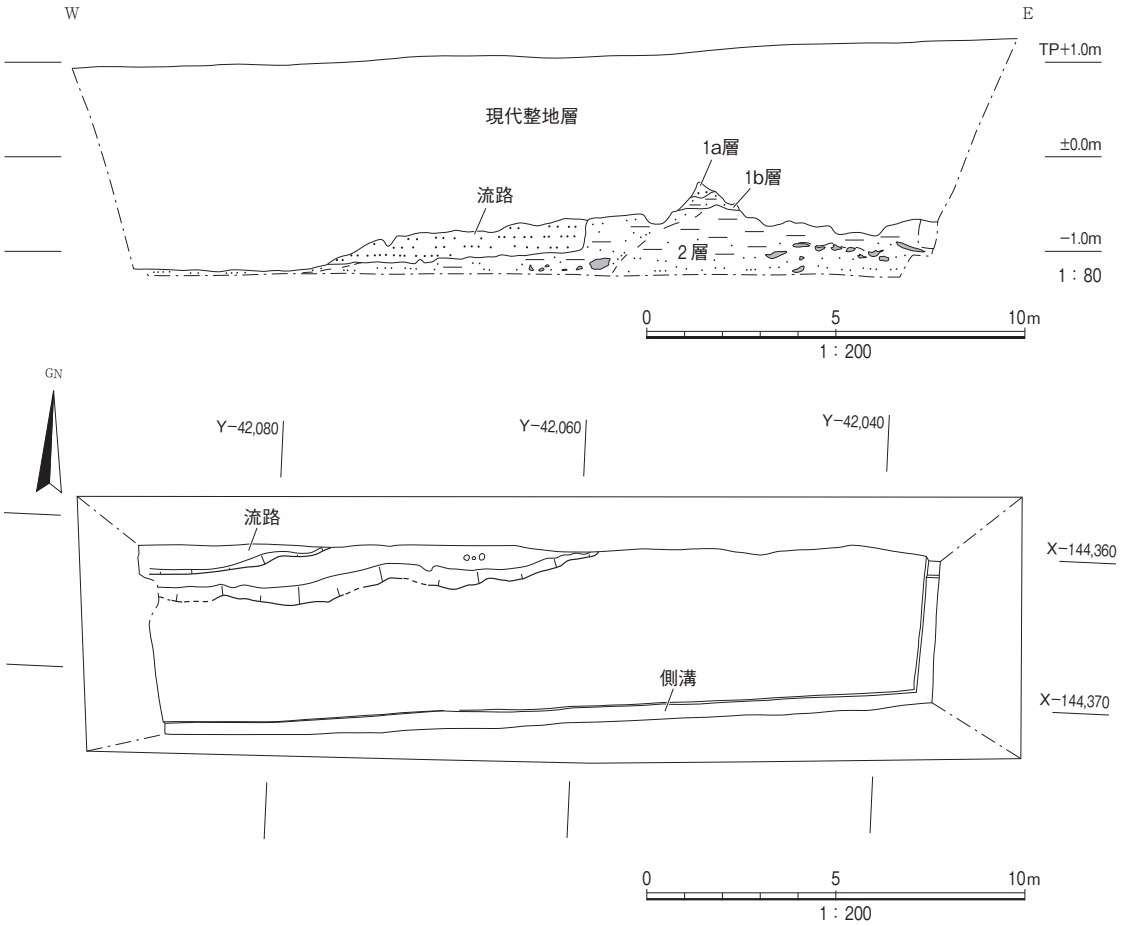


図４　北壁地層断面図・第２層上面平面図

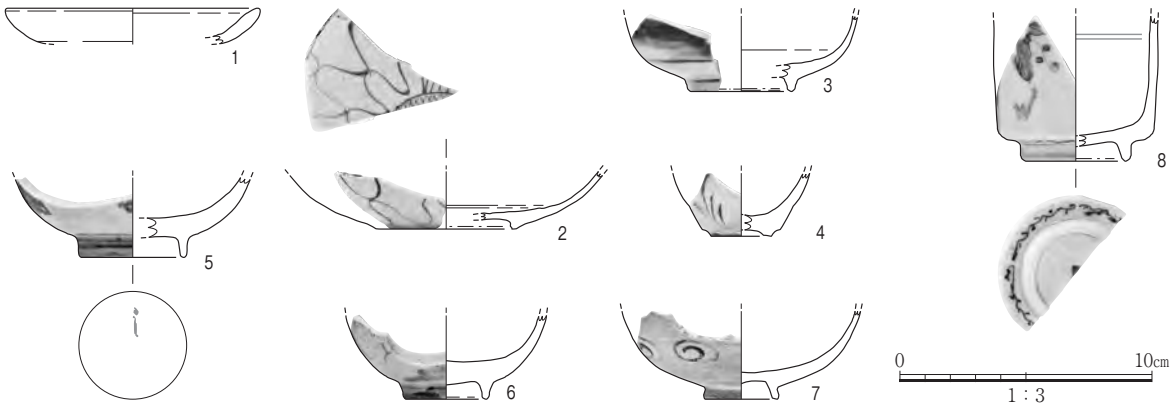


図５　出土遺物実測図
第２層（１）、現代整地層（２～８）

３）まとめ

・近世以降の自然流路を検出した。

・中世から近世にかけての遺物が出土したが、いずれも本来所属する層準を遊離していた。

自然流路以下の層準は水成層が続くとみられ、調査地周辺が安定した陸地となったのは、流路の年代以降である可能性が高い。

阿倍野区王子町二丁目17－14における建設工事に伴う
王子町2丁目所在遺跡発掘調査(OZ17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市阿倍野区王子町２丁目17－14
調 査 面 積　　240㎡
調 査 期 間　　平成29年４月17日～５月15日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長 高橋工、絹川一徳

1）調査に至る経緯と経過

調査地は中世～近世の集落遺跡で、新発見の王子町２丁目所在遺跡である。海成層の堆積面が原形である上町層上部で、後期更新世の中位段丘相当層からなる上町台地のほぼ中央に位置し、台地の高所に立地する。調査地の西側には南北に細長い上町台地の脊梁部に沿った阿倍野筋（阿倍野街道）が接しており、西は大阪湾に、東は桃ヶ池の谷側に向かって下降する地形である。阿倍野筋を挟む南西側は、熊野神社の末社で平安時代に熊野参詣の街道筋に祀られた九十九王子のひとつである阿倍王子神社と阿倍野元町所在遺跡があり、南約300mには弥生時代後期の溝を検出した北畠公園遺跡[大阪文化財研究所2011]、南約600mに中世の小溝群などが検出された王子町４丁目所在遺跡[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]がある（図１）。また、北西約500mには聖天山古墳や丸山古墳で知られる阿倍野古墳群があり、北約１㎞には弥生時代終末～古墳時代前期の集落跡が見つかった阿倍野筋南遺跡がある。さらに周辺には、南西１～２㎞にかけて４世紀後半の前方後円墳である帝塚山古墳、５世紀末～６世紀前半の万代古墳および帝塚山東遺跡、６世紀後半の二本松古墳[寺井誠2011]からなる帝塚山古墳群がある。このように調査地一帯は弥生時代から古墳時代にかけて集落が営まれ、その後も連綿と土地開発が進んだ歴史的にも重要な地域である。

平成29年２月27日に大阪市教育委員会が調査地内で試掘調査を行ったところ、地表下約0.3mで中世の遺物包含層が検出され、遺物と遺構の遺存状況を確認するために本格的な発掘調査を実施するこ

図１　調査地の位置

図２　調査区の配置図

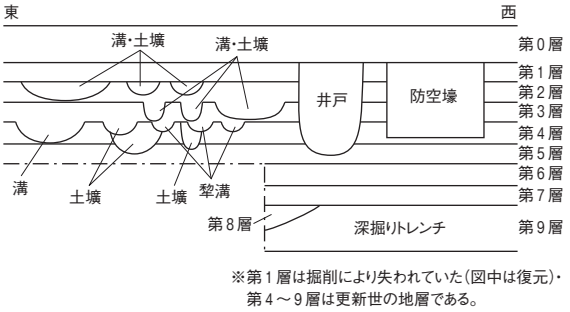


図3　地層と遺構の関係図

ととなった。発掘調査は平成29年4月17日に着手した。発掘資機材を搬入したのち、東西30m×南北8mで240㎡の調査区(図2)を設定し、4月18日から重機掘削によって現代盛土の除去を開始した。以降は人力による遺物包含層の掘下げを進め、遺構検出・掘削、測量・記録などの必要な現場作業を行い、5月15日に発掘を終了した。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海水面)で、TP+○mと記した。また、本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することで得た世界測地系に基づく座標北を基準とした。

2)調査の結果

ⅰ)層序(図3・4)

調査地は上町台地の脊梁部付近の平坦地で、TP+15.2m前後である。以下の第1～第9層が認められたが、第7層以下は調査区の南西側に地層観察のために設定した深掘りトレンチで確認した。

第0層：現代盛土で、調査区全体を20～30cmの厚さで覆っており、南東隅は大きく攪乱されて約80cmの層厚があった。

第1層：暗褐色(10YR3/3)細礫混りシルト質細粒砂層の作土で旧表土であるが、旧建物の解体工事による削平によって殆どが失われており、調査区の北東から中央北側で窪みを埋めるように僅かに堆積していた。近代以降の地層で、層厚は不明である。

第2層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫を含む中粒～細粒砂混り粘土質シルト層の作土で、調査地全体に10～15cmの層厚で堆積していた。著しく摩耗した土器細片を多く含む。陶磁器片も含んでおり、近世の地層である。

第3層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～極細粒砂混り粘土質シルト層の作土で、調査区全体に約10cmの層厚で堆積していた。土師器・瓦器細片を含む。中世後半の地層である。

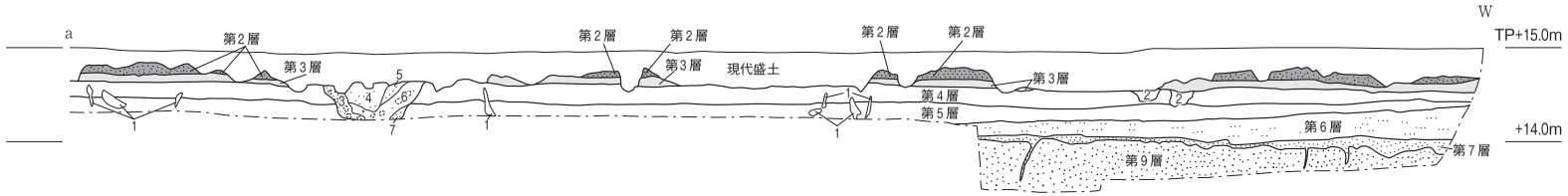
第4層：褐色(10YR4/4)極細粒砂混りシルト質粘土層で、植物などの擾乱により上部は土壌生成が認められた。調査区全体に堆積しており、層厚は20～30cmであった。第4層以下は上町層上部を構成する更新世堆積物である。

第5層：褐色(10YR4/4)極細粒～細粒砂混り粘土質シルト層で、調査区の全体に堆積していた。層厚は約20cmである。

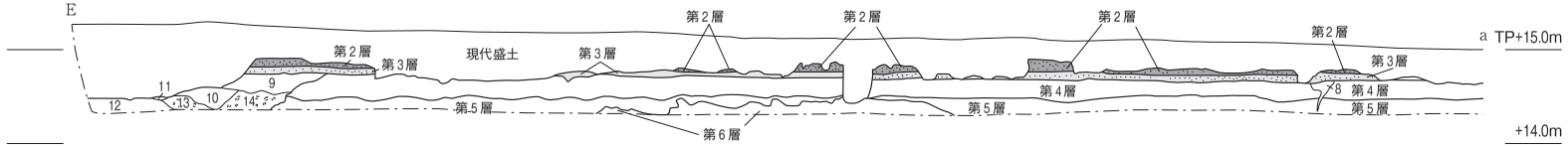
第6層：明黄褐色または黄褐色(10YR5.5/6)細粒～中粒砂混りシルト質粘土層で、調査区の全体に堆積していた。南西側の深掘りトレンチで確認した層厚は約20cmである。南壁中央付近では、本層の上部が地震の影響とみられる褶曲によって変形していた。

第7層：黄褐色または褐色(10YR4.5/6)粘土混り細粒砂質シルト層で、層厚は約10cmである。本層から上下の方向に派生する砂脈が認められた。地震によるものとみられる。なお、第7～第9層は

南壁西半



南壁東半



1：にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂混り粘土質シルト(根痕)
2：褐色(10YR4/6)粘土混り極細粒砂質シルト(根痕)
3：わずかに粗粒砂を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混り粘土質シルト(倒木痕)
4：わずかに粗粒砂を含む明黄褐色(10YR6/6)細粒砂混り粘土質シルト(倒木痕)
5：明黄褐色(10YR6/6)細粒～極細粒砂混りシルト質粘土(倒木痕)
6：黄褐色粘土の細粒を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～極細粒砂混りシルト質粘土(倒木痕)
7：明黄褐色(10YR6/6)細粒砂混り粘土質シルト(倒木痕)
8：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混り粘土質シルト(根痕)
9：にぶい黄褐色(10YR5/4)極細粒砂混り粘土質シルト(倒木痕)
10：褐色(10YR4/4)極細粒砂混り粘土質シルト(倒木痕)
11：褐色(10YR4/4)極細粒砂混り粘土質シルト(倒木痕)
12：橙色(7.5YR6/6)極細粒砂混り粘土質シルト(倒木痕)
13：径2㎝程度の黄褐色粘土の偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)極細粒砂混りシルト質粘土(倒木痕)
14：径2㎝程度の黄褐色粘土の偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)極細粒砂混りシルト質粘土(倒木痕)

第0層：暗褐色(10YR3/3)瓦礫を含む中粒砂混りシルト質粘土(現代盛土)
第1層：暗褐色(10YR3/3)細礫混りシルト質細粒砂(旧表土。近代以降の作土)
第2層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫を含む中粒～細粒砂混り粘土質シルト(近世の作土)
第3層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～極細粒砂混り粘土質シルト(中世後半の作土)
第4層：褐色(10YR4/4)極細粒砂混りシルト質粘土(上部が植物擾乱により土壌化。後期更新世中位段丘相当層)
第5層：褐色(10YR4/4)極細粒～細粒砂混り粘土質シルト(後期更新世中位段丘相当層)
第6層：明黄褐色または黄褐色(10YR5.5/6)細粒～中粒砂混りシルト質粘土(上部が地震により褶曲か。後期更新世中位段丘相当層)
第7層：黄褐色または褐色(10YR4.5/6)粘土混り細粒砂質シルト層(地震による砂脈あり。後期更新世中位段丘相当層)
第8層：橙色(7.5YR6/8)粘土混り極細粒～細粒砂質シルト(上部が地震により褶曲か。後期更新世中位段丘相当層)
第9層：明黄褐色(10YR6/6)中粒～粗粒砂をわずかに含む粘土混りシルト質細粒砂(後期更新世中位段丘相当層)

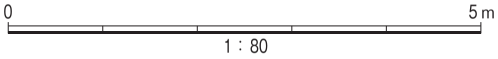


図4　南壁地層断面図

深掘りトレンチのみで確認した地層である。

第８層：橙色(7.5YR6/8)粘土混り極細粒～細粒砂質シルト層で深掘りトレンチの北側で部分的に認められた地層である。岩相は第７層に類似しており、酸化鉄の沈着が著しい。層厚は５～10㎝であるが、北側に向かって厚みを増していた。本層上部も地震の影響とみられる褶曲が認められた。

第９層：粗粒砂をわずかに含む明黄褐色(10YR6/6)粘土混りシルト質細粒砂層で、層厚は40㎝以上であった。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．第４層上面検出遺構(図５・７)

第４層上面で土壙SK451・452、小穴SP453～456を検出した(図５)。SK451・452は方形の土壙で、SK451は長さ1.20m、幅0.95m、深さ0.40m、SK452は長さ0.68m、幅0.56m、深さ0.12mであった。SK451は土壙内が焼かれており、壁面が赤色に変色していた。その後に底面を除く壁面へ薄く粘土を貼り付けている。鍛冶関係の遺構の可能性があるが、調査区からは関連する遺物はまったく認められず、用途は不明である。SK451からはTK43型式の須恵器杯身１が出土した。遺構から出土した遺物はわずかであるが、中世の遺物が見られないことから、これらの遺構群の年代は６世紀後半に遡る可能性がある。

ｂ．第３層下面検出遺構(図５・７)

第４層上面で第３層から掘り込まれた溝・犂溝・土壙・小穴などの遺構を検出した。溝SD408、犂溝SD405・409～413・415・416・418・420～424・428・432・434～436・439・440・448、土壙SK402・403・406・407・414、小穴SP401・404・417・419・425～427・429～431・437・438・441～447・449・450からなる(図５)。SD408は幅1.00～1.06m、深さ0.10mの東西方向の溝である。東西とも調査区外へ延びており、直線状で溝幅や深さも均一であることから、地割りを示す区画溝であったとみられる。SD408からは土師器皿２、瓦器椀６が出土した(図７)。いずれも14世紀のものとみられる。犂溝群もSD408と同じ東西方向であった。幅0.10～0.20m、深さ0.05～0.10mのものが中心で、埋土は褐色(10YR4/6)極細粒砂混り粘土質シルトが主体をなす。SD421からは瓦器椀３が出土した(図７)。13世紀末～14世紀初頭のものとみられる。土壙・小穴は深さ0.10～0.15mのものが中心で、埋土は犂溝群と共通する。

ｃ．第２層下面検出遺構(図６・７)

第３層上面で第２層から掘り込まれた溝・犂溝・土壙・小穴などの遺構を検出した(図６)。SD303は幅0.60～0.90m、深さ0.10mの東西方向の溝で、SD308･309も同方向の犂溝である。幅0.30m程度、深さ0.05mである。埋土はSD303がにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土混り細粒砂質シルト、SD308・309が褐色(10YR4/4)粘土混り細粒砂質シルトである。土壙SK304～307・310・311・313、小穴SP301・302・312はいずれも深さ0.10m前後と浅く、埋土も犂溝と共通する。遺構の時期は埋土が第２層とほぼ共通していることから、近世の遺構であろう。

ｄ．第２層上面検出遺構(図６)

第２層上面で溝SD201、土壙SK202・203を検出した。SD201は幅0.90～1.05m、深さ0.15mで、

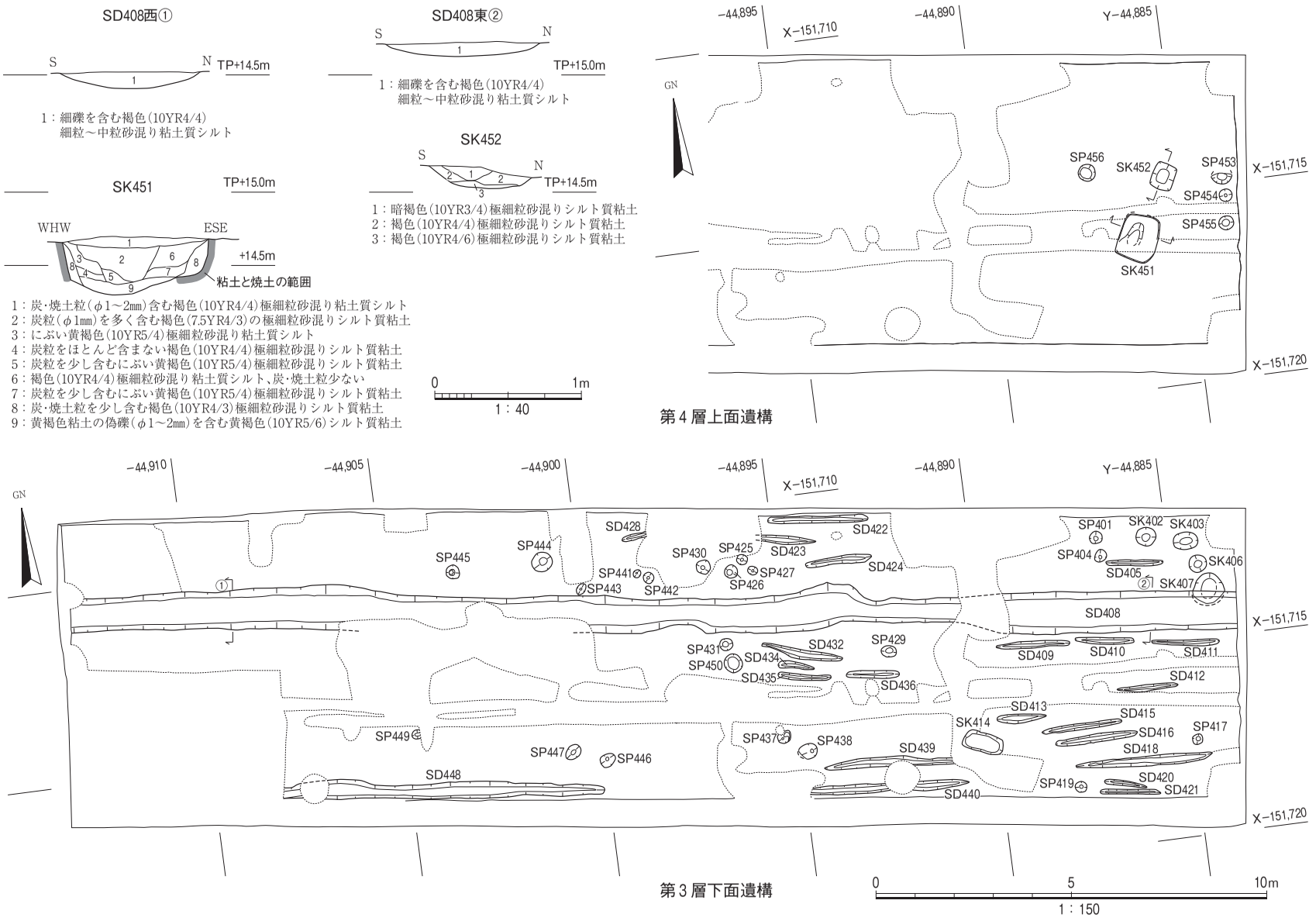


図5　第4層上面・第3層下面遺構平面・断面図

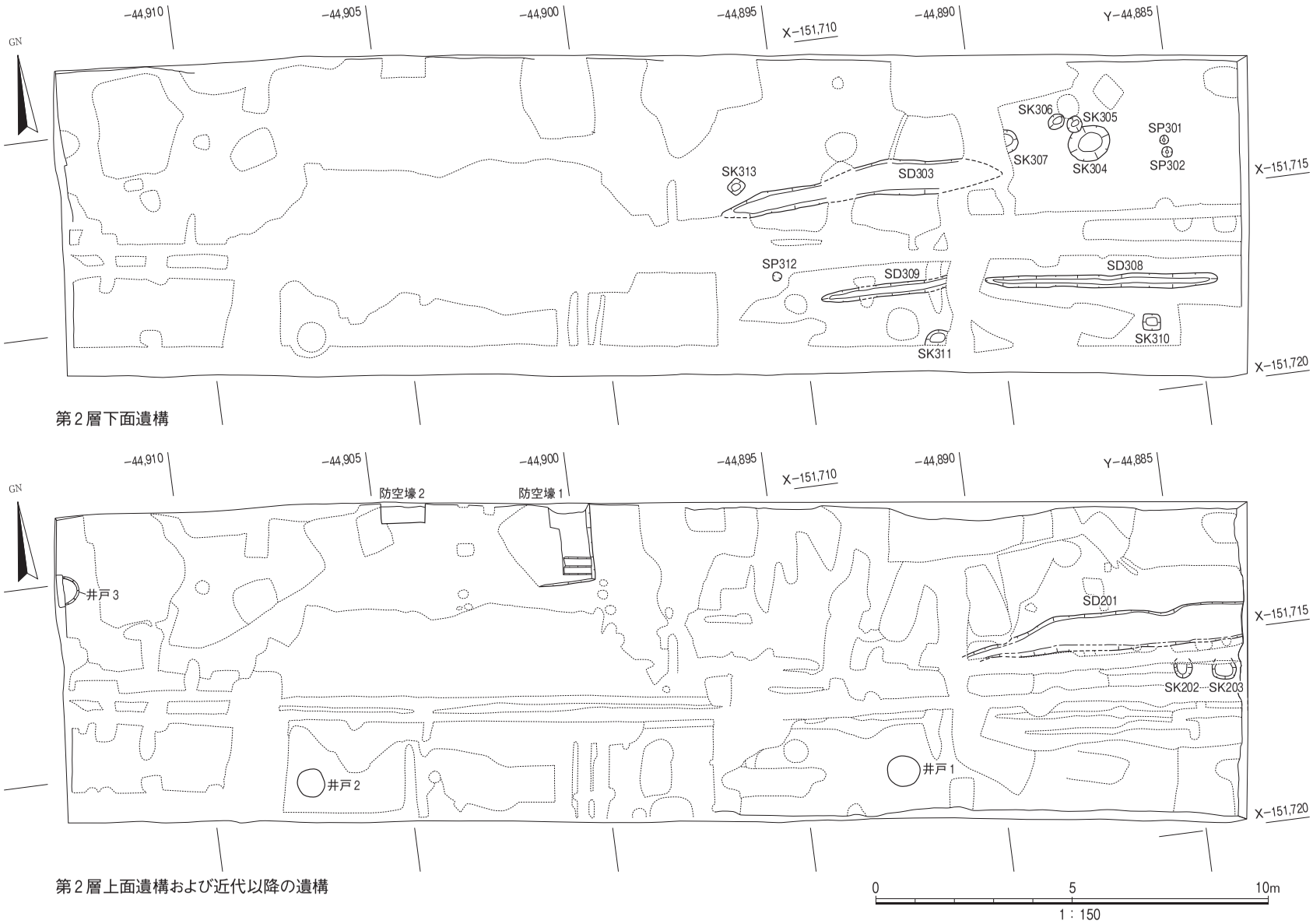


図６　第２層上面・下面遺構および近代以降の遺構平面図

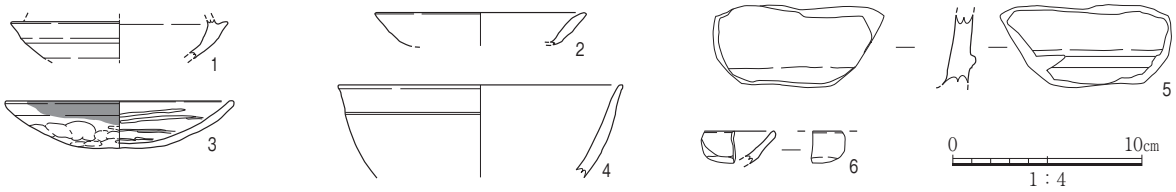


図７　出土遺物実測図
SK451（１）、SD408（２・６）、SD421（３）、第２層（４・５）

埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土混りシルト質細粒砂である。SK202・203は深さ0.10mと0.15mで、埋土は褐色(10YR4/4)粘土混り細粒砂質シルトである。

ｅ．近代以降の遺構(図６)

調査区の中央北端で太平洋戦争時に設営された小規模な防空壕２基と同時期とみられる井戸３基を確認した。防空壕は残存する深さがいずれも0.90m程度であった。戦後に埋められたものとみられ、床面にガラス瓶や鉄製缶が残されていた。

ｆ．その他の遺物(図７)

地層の年代を反映するものではないが、第２層からは中国製青磁碗４、瓦質土器５が出土した。５は奈良火鉢で、いずれも15世紀前半のものであろう。

３)まとめ

今回の調査地は新発見の遺跡であるが、古墳時代後期の可能性がある遺構を確認することができた。SK451は壁面が被熱しており、さらに薄く粘土を貼り付けた方形の土壙であった。出土遺物がわずかであったため、用途は特定できなかったが、鍛冶関連の遺構の可能性がある。また、調査地は中世以降、耕作地として連綿と土地利用が続いたことを示しているが、中世後半の区画溝とみられるSD408の存在は、近隣に集落があったことを示唆するものである。今回の発掘調査では集落跡の発見には至らなかったが、今後の当地域周辺におけるさらなる調査研究の進展に期待したい。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「阪南団地建替事業(阿倍野区王子町四丁目)に伴う埋蔵文化財発掘調査(OZ07－１)報告書」:『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.335－344

大阪文化財研究所2011、『北畠公園遺跡発掘調査報告』

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「阿倍野区王子町四丁目における建設工事に伴う王子町４丁目所在遺跡発掘調査(OZ10－１)報告書」:『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.335－344

寺井誠2011、「二本松古墳と住吉」:『なにわの考古学30年の軌跡－足の下に眠る歴史－』 特別展『発掘された日本列島2010』地域展図録、pp.84－94

松尾信裕2005、「帆立貝形前方後円墳を発見！」:『葦火』第115号、pp.４－５

阿倍野区松虫通三丁目65－１の一部他における建設工事に伴う
聖天山古墳発掘調査(SY17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市阿倍野区松虫通３丁目65－１の一部他
調 査 面 積　　約248㎡
調 査 期 間　　平成29年６月５日～６月23日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、積山 洋

1）調査に至る経緯と経過

調査地は南北に延びる上町台地の西側斜面に位置しており、台地の稜線からは約500mを測る。上町台地の西斜面は傾斜が急な海食崖をなし、随所に開析谷が入り込んでいるが、調査地は北と南に開析谷が入り込み、さらに西に海食崖が落ち込む高台に位置する（図１）。

調査地の小字は「北天狗塚」であり、聖天山古墳（後述）がこの小字の地に存在する（図８）。周辺には「柘榴塚」・「南天狗塚」・「松虫塚」などの小字名が残ることから、かつて古墳が点在していたと推測され、「阿倍野古墳群」と称されている［上田宏範1988］。

近隣で行われた発掘調査は、1996年度・2006年度の丸山古墳（MA96－２次・06－１次）、2002年度の阿倍野筋南遺跡（AS02－２次）などがある。MA96－２次調査は1923年に墳丘が破壊された跡地の調査であり現地で古墳の痕跡を発見することができなかった［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998］が、MA06－１次調査では古墳時代の円筒埴輪や飛鳥時代の須恵器、また古代の瓦などが出土している［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008］。AS02－２次調査では７世紀後半頃と推測される建物跡が発見されている［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004］。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、４箇所の試掘坑のうち１箇所で、地表下約1.2mに本格的な発掘調査を必要とする中世の土器包含層が検出されたため、本調査を実施することとなった。調査は、東西９ｍ×南北20mの調査区を設定して掘削を進め、その後、東側に調査区を拡張した（図２）。調査期間は頭書に述べた通りである。

以下の本文等に示す標高はT.P.値（東京湾平均海面値）で、TP+○mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標

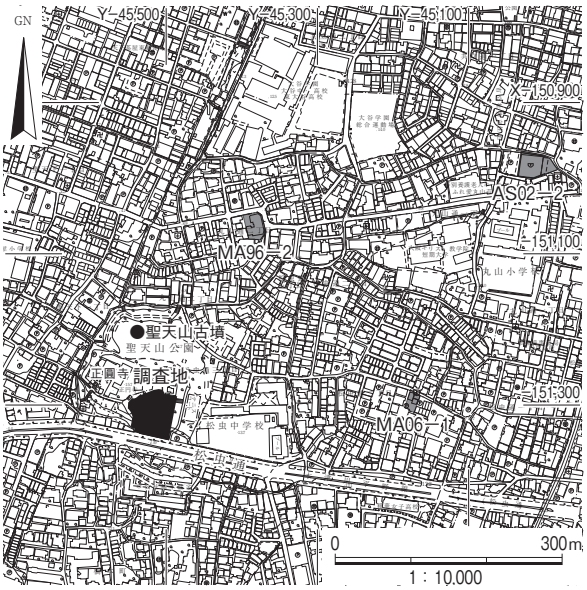


図１　調査地の位置

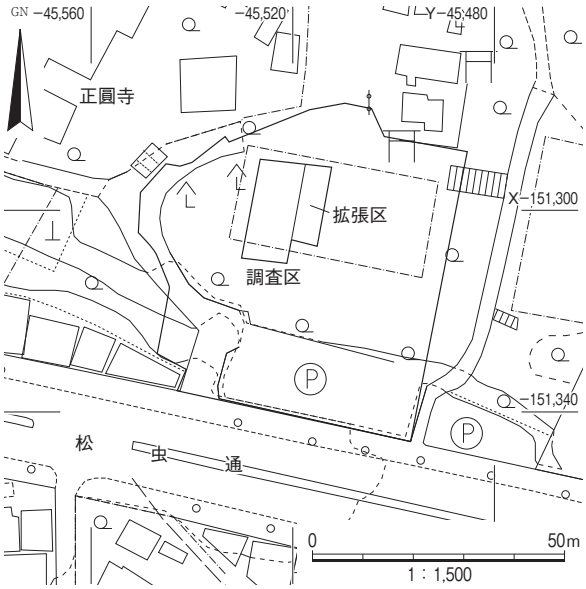


図２　調査区の配置図

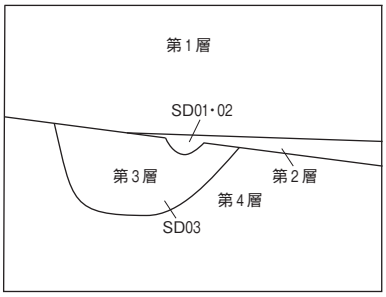


図３　地層と遺構の関係図

に乗せたものであり、座標北を基準とした。

２)調査の結果

ⅰ)層序(図３・４・６)

第１層：TP+15.8mの現地表面から深さ0.2～0.9mほどの現代の盛土層・攪乱層等である。

第２層：主に調査区の南西に堆積していた黄褐色砂混りシルト層で、比較的淘汰されていることから、作土層とみられる。層厚は最大で10㎝で、肥前磁器を含む近世の地層である。本層の下面にて並行する溝SD01・02が検出された。

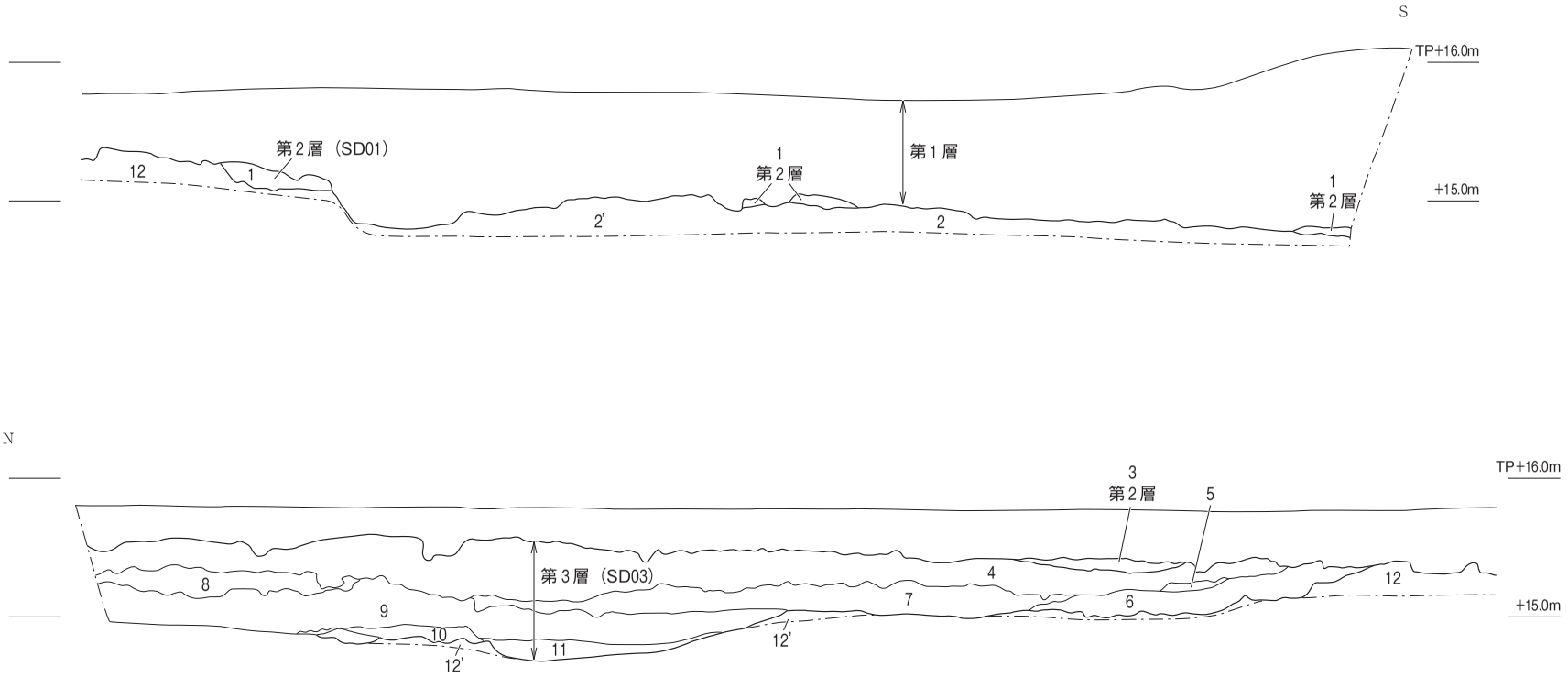
第３層：後述する南北大溝SD03の埋土である。細分は可能であるが、各層とも主に地山である上町層の様々な偽礫からなり、一度で埋めたものとみられる。出土遺物は図７に示したほか、実測できない小片ながら16世紀頃の備前焼が出土しており、時代は中世後期に属する。

第４層：主に褐色系の砂混りシルトからなる地山の上町層である。調査地中央でTP+15.4mで検出され、現地形と同じく南西へ低く傾斜していた。南端ではTP+14.8mで検出される。

ⅱ)遺構と遺物(図５～７)

ａ．第４層上面

上町層上面では南北大溝SD03が検出された。幅4.2～4.6m、深さ0.4～0.8mで、南に向かって低く傾斜していた。第３層によって人為的に埋められていた(図４・６)。出土遺物は、先述した備前焼が最新のものであり、中世後期の大溝である。そのほかにこれより古い遺物が多く出土した。図７－１～４は瓦器椀である。高台が比較的しっかりしている１、高台が消失しつつある４、無高台の３などがあり、12～14世紀のものである。なお、４は溝掘削時の排土からの出土である。５は弥生時代末から古墳時代前期に多く見られる飯蛸壺とみられるが、それらよりもかなり小型である。６は黒色土器椀で、内外面とも炭素が吸着したB類であり、10世紀代に属する。７は須恵器杯身で、復元径は10.6㎝を測る。飛鳥時代の７世紀第２～第３四半期の土器である。８も須恵器で、古墳時代後期～飛鳥時代(６～７世紀)の器台とみられる。外面に波状文が見られる。９も７世紀の須恵器杯身である。10は古墳時代中期の初期須恵器壺であり、５世紀前半のものである。11は土師器壺で、複合口縁を有する。12～21は古墳時代の埴輪である。12は朝顔形埴輪、13～15は円筒埴輪である。いずれも内外面の残りは良くなく、わずかにハケメが認められる程度だが、無黒斑とみられ、タガの突出度、基底部の仕上がりからみると、やはり中期の範囲で収まり、後期に降ることはなさそうである。また、図化できない埴輪の中に、形象埴輪もある(写真１)。16～19は家形埴輪である。16・17は壁部分、18は棟木の先端を表現した部分であろう。19は床付近の壁で側回り突帯が剥がれた痕跡を有する。20・21は形状が不明であるが、焼成・胎土の特徴から形象埴輪の一部とみられる。20は斜めに張り出す部分が付き、衣服の裾部分などの可能性がある。21は正方形の板状を呈する破片で、写真上部は本体に斜めに貼り付けられていたと考えられる。

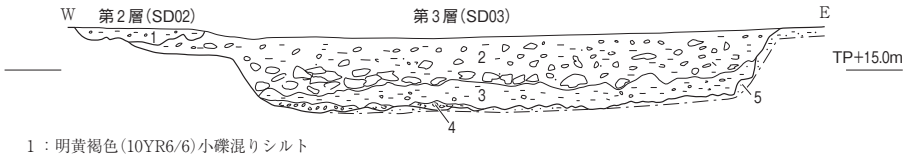


1：黄褐色(10YR5/6)砂混りシルト
2：明黄褐色(7.5YR5/6)粘土質シルト(上町層)
2'：黄褐色(10YR5/8)～明黄褐色(10YR7/6)シルト(上町層)
3：明黄褐色(10YR6/6)砂混りシルト
4：明黄褐色(10YR6/6)シルト
5：明黄褐色(10YR6/4)シルト
6：にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト・明褐色(7.5YR5/8)シルト・明黄褐色(10YR6/9)砂混りシルト・黄橙色(10YR7/8)シルトなどの偽礫からなる
7：黄橙色(10YR7/8)シルト・明黄褐色(10YR6/6)シルト　偽礫からなる
8：にぶい黄橙色(10YR6/4)・明黄褐色(2.5Y7/6)シルトなどの偽礫からなる
9：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトの偽礫を主体に明褐色(10YR6/6)シルトなどを含む
10：黄橙色(10YR7/8)シルト
11：明黄褐色(10YR7/6)シルト((上町層)の偽礫を少し含む)
12：明黄褐色(10YR7/6)シルト混り細粒砂(上町層)
12'：黄橙色(10YR8/6)砂混りシルト(上町層)

図４　東壁地層断面図

GN
−45,525
−45,520
Y−45,515
X−151,290
X−151,295
SD03
−151,300
図6
−151,305
SD01
SD02
−151,310
図4
0
5m
1：100

図5　遺構平面図



1：明黄褐色(10YR6/6)小礫混りシルト
2：黄褐色(10YR5/8)シルト･褐色(10YR4/6)シルト･暗褐色(10YR3/4)シルトなどの大小の偽礫など(図４－７)
3：黄褐色(10YR5/6)砂混りシルトを主体とし､にぶい黄褐色(10YR6/4)シルトなどの小さな偽礫など(図４－９)
4：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト･黄褐色(10YR5/8)シルトなどの小偽礫など
5：黄褐色(10YR5/6)シルト混り細粒砂(上町層)

0　2m
1：50

図６　SD03断面図

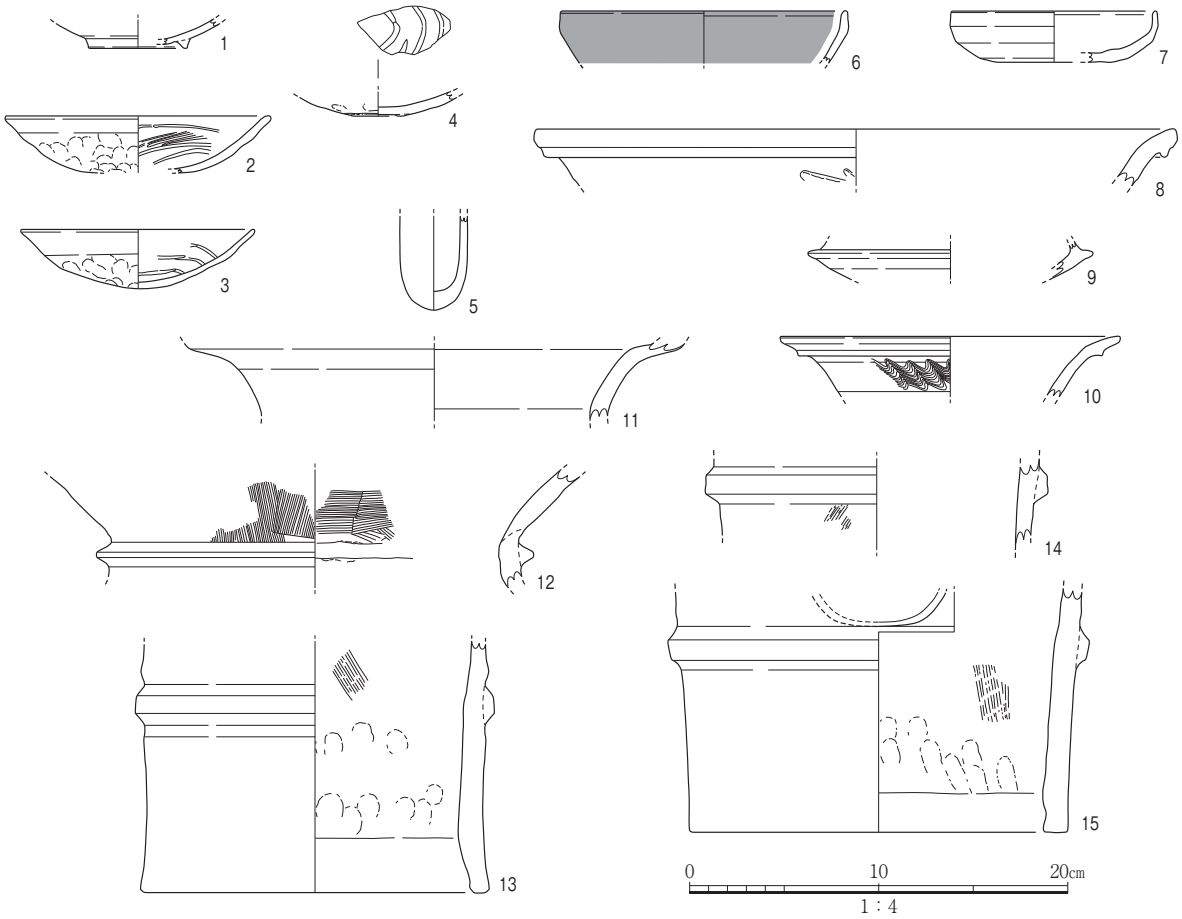


図７　出土遺物実測図
１～３・５～15(SD03)、４(排土)

ｂ．第２層下面

SD01・02は平行する浅い溝で、南向き斜面を北から南へ大きくカーブしていた。最大幅約0.8m、深さは0.15m以下である。SD01はSD03と重複し、SD03を切っていた。遺物は出土していないが、埋土が第２層なので近世の遺構である。

３)まとめ

今回の調査成果は以下の通りである。

第一に、古墳時代の埴輪や須恵器が出土したことがあげられる。冒頭の「経緯と経過」で述べたように、調査地周辺には「塚」地名が多く見られ(図８)、中には古墳の存在も知られている。調査地の北約

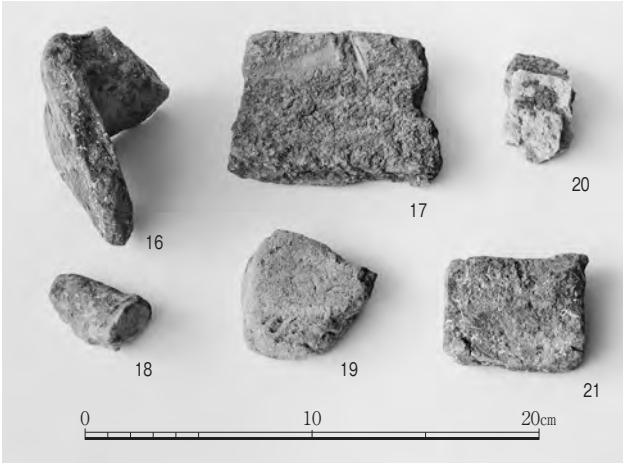


写真１　形象埴輪
家形埴輪(16～19)、不明(20・21)

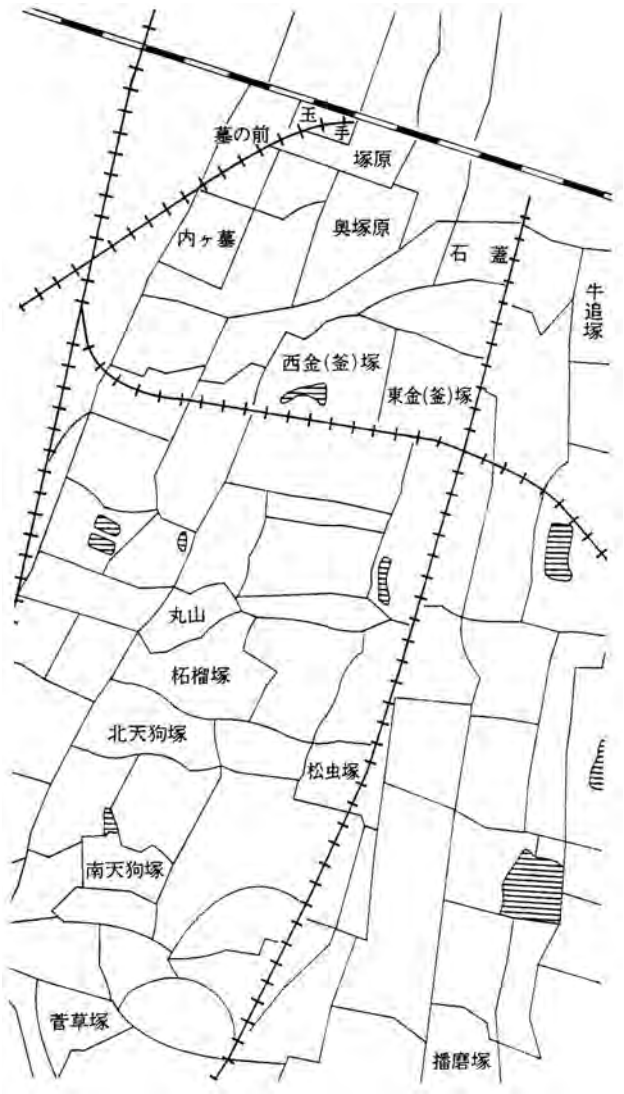


図８　阿倍野　塚の小字分布図
調査地と聖天山古墳は北天狗塚に位置する
［上田宏範1988］より

100mには聖天山古墳があり、1951年11月16日の朝日新聞が土砂採取中に古墳が発見されたこと、当時大阪府教育委員会の藤沢一夫が調査を行ったことを報道している。それによると、墳形は円墳であり、主体部は横穴式石室で、出土遺物は須恵器壺・提瓶、鉄刀、ガラス小玉、琥珀製棗玉、円筒埴輪などである。提瓶の写真観察をもとに、６世紀後半の年代が推測されている［山本彰1996］が、その時期に埴輪を持つ古墳はほとんどないため、もう少し古い可能性があるかもしれない。いずれにせよ、６世紀の後期古墳であることは動かない。

今回出土した埴輪は、円筒埴輪のみならず朝顔形や形象埴輪もあり、後期まで降らない可能性が高いとみられる。長原古墳群の円筒埴輪と須恵器の共伴関係からみると、出土した初期須恵器との関係も無視できない［積山洋1988］。また、今回の調査地が南向き斜面であるのに対し、聖天山古墳は同じ高台の北向き崖面の上に位置している。こうしたことから、今回発見の埴輪は、聖天山古墳の近隣にあった別の古墳のものであるとみられる。

第二に、飛鳥時代、平安時代、鎌倉時代などの須恵器・黒色土器・瓦器などが出土したことは、やはり近隣に各時代の集落があったことを示唆している。上町台地に多くの人々が継続して居住していたことの片鱗といえよう。

第三に、南北大溝SD03には滞水や流水の痕跡はまったくなく、高台に設けられた小規模な空堀といった趣であることも注意される。その年代が16世紀であるとすれば、戦国時代に当るわけであり、先述した立地からみてもなんらかの軍事的施設の存在を示唆する

かにみえる。SD03の緩やかなカーブからみると、西側がその内部であったかもしれない。そこには正圓寺が現存している。

発掘調査の結果、新たな発見がまた新たな課題を生むことになったが、この地域ではこれまで発掘例が少ないこともあり、今後、調査の進展が期待される。

引用・参考文献

上田宏範1988、「大阪市域の古墳」:『新修大阪市史』第１巻、pp.351－424

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「東急不動産による建設工事に伴う発掘調査(MA96－２)」:『平成８年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.111－118

2004、「阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS02－２)報告書」:『平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.65－68

2008、「丸山古墳発掘調査(MA06－１)報告書」:『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.97－100

積山洋1988、「円筒埴輪の検討」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ、pp.123－129

山本彰1996、「上町台地の考古資料三題」:大阪府教育委員会『平成６・７年度　有形文化財・無形文化財等　総合調査報告書』、pp.144－147

住吉区苅田四丁目17－１他における建設工事に伴う
苅田４丁目所在遺跡発掘調査(KL17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市住吉区苅田４丁目17－１他
調 査 面 積　　40㎡
調 査 期 間　　平成29年10月３日～10月４日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋工、清水和明、桑原武志

1）調査に至る経緯と経過

本調査地は苅田４丁目所在遺跡の東北部に位置する。同遺跡は住吉区東部にあって上町台地東縁に立地し、これまで調査された箇所は多くはないが、平成14年度の本遺跡における最初の発掘調査を契機に、中世の鋳造に関連する遺跡として注目されている。今回の調査地から西南西250m付近のKL02－１次調査地では粘土採掘壙と考えられる多数の土壙とともに鋳造関連遺物が、同200m弱のKL06－１次調査地では15世紀を中心とする室町時代の井戸や区画溝・柱列など工房関連の施設が見つかり、より多くの廃棄された鋳型や炉壁、鞴の羽口、鉱滓が出土したことから、当地に鋳造を生業とする鋳物師集団が存在していたことが確実となっている[大阪市文化財協会2004・2008]。KL07－１・２次調査地でも15世紀前半に埋め戻された井戸や、ほぼ同時期と考えられる柱穴が見つかっており、15世紀前半までには集落が形成されていたと考えられる[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。この集団は中世に堺市北部から住吉区南部にかけて存在した河内鋳物師と呼ばれる鋳物師集団の一つである「かつた村」の鋳物師に該当すると推定されている[大阪市文化財協会2004]。

一方、今回の調査地の南数10mにあるKL09－１次調査地（東区）では、15世紀中葉～16世紀中葉に存在した大溝が検出され、集落の外周を区画する溝の可能性が指摘されており、鋳造関係の遺物もそれ以前の南西方向で行われた調査に比して希薄になっている[大阪文化財研究所2011]。こうした点から、鋳物師集団の活動の中心は遺跡の南部側にあるものと想定されている。

本調査地では、大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下約1.0m以下の深さで近世以前の遺構面および遺物包含層が検出され、発掘調査を行うこととなった。苅田４丁目所在遺跡の北東側における遺構や遺物の広がりと、利用状況を明らかにすることが主たる目的となる。

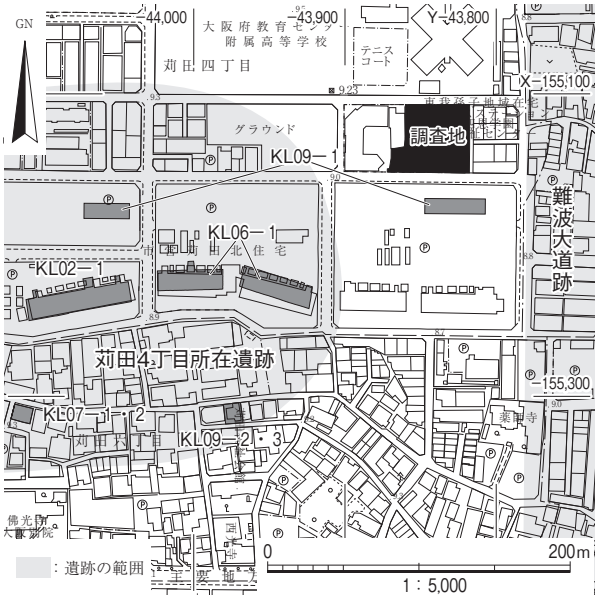


図１　調査地位置図

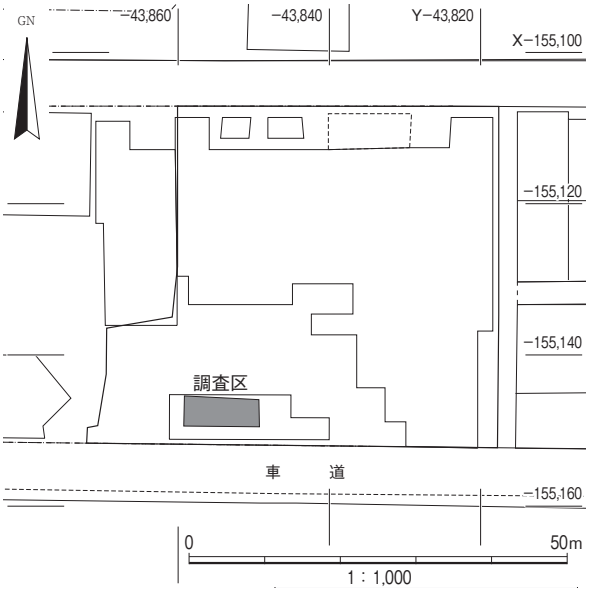


図２　調査区配置図

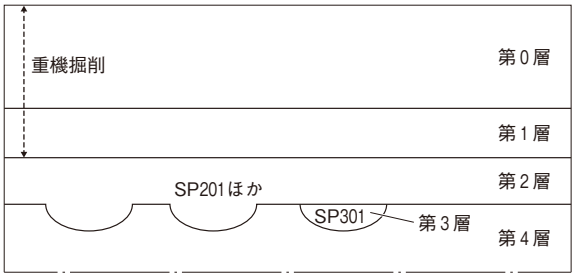


図3　地層と遺構の関係図

そこで、平成29年10月３日から調査を開始した。当初は調査地の西南部に東西13m×南北３mの調査区を予定していたが、並行して進められていた旧建物の解体工事との干渉を避けるため、東西10m×南北４mに変更した。地表下約1.0mの第２層上面まで重機で掘削しつつ人力により第２層を掘削し、段丘構成層(後述の第４層：地山層)上面で遺構を検出した。続いて遺構の掘削と遺物の取上げを行いながら写真・図面による記録作業を行い、10月４日に現地におけるすべての作業を終了した。

なお、方位は現場で記録した街区図を１/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

２)調査の結果

ⅰ)層序(図３・４)

調査区の現況地形は、およそTP+9.2mで概ね平坦である。

第０層：旧建物建設時の現代整地層で、最大層厚は約90㎝である。

第１層：３層に細分される。調査区の西部に層厚20㎝のオリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトを主体とした作土層があり、上位に地山偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層が薄く客土された後、全域に黒褐色(2.5Y3/2)含細礫シルト質中粒砂を主体とする層厚20㎝の作土層が分布している。客土は作土の床土である可能性があろう。出土遺物は確認していないが、第２層より新しいことから近世の作土層と考えられる。

第２層：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルト層で層厚約20㎝の作土層である。200番台の遺構は本層を埋土とする。出土遺物から中世後半を中心とする作土層であろう。

第３層：黒色(7.5YR1.7)シルト層で、調査区西部のSP301の埋土でのみ確認された。

第４層：明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質粘土を主体とする段丘構成層で、地山層に当る。

ⅱ)遺構と遺物(図４～６)

本調査では第４層(地山層)上面で遺構検出を行った。SP301のみ第３層を埋土とし、ほかは第２層を埋土としている。

SP301：調査区西部にある一辺が0.45m、深さ0.25mの小穴である。埋土は地山偽礫を含む黒色(7.5YR1.7)シルト層で、埋めた土とみられる。出土遺物には瓦器椀の細片１がある。内外面を丁寧に仕上げており、12世紀のものとみられる。

SD203：調査区東部にある幅0.25m、深さ0.1m程度の小さな溝で、土師器細片３、鉱滓片４などが出土した。

SP201：調査区東端にある南北0.45m、深さ0.1m弱の小穴で、出土遺物はない。

SP202：調査区東端にある南北0.4m、深さ0.1m弱の小穴で、出土遺物はない。

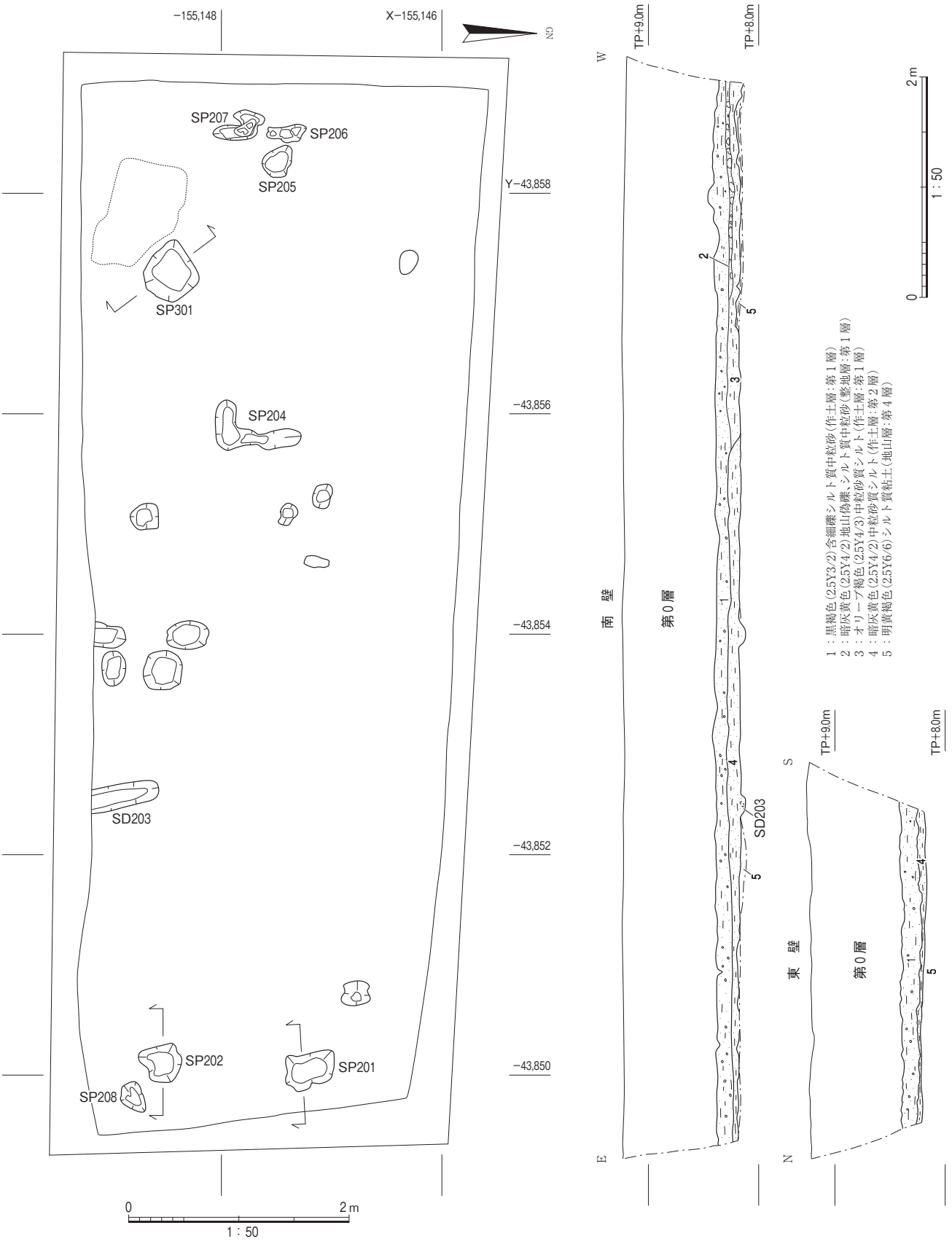
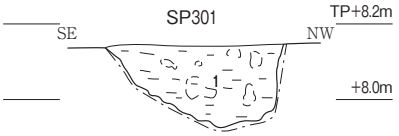


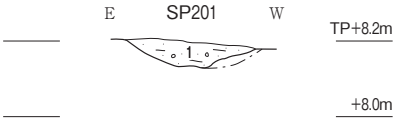
図4　調査区地層断面・遺構平面図

図５　出土遺物

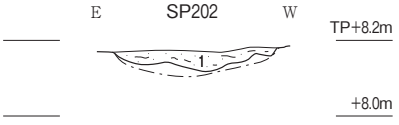
SP301(１)、SD203(３・４)、SP204(５・６)、SP208(２)



１：黒色(7.5YR1.7)含地山偽礫、シルト
(埋めた土)



１：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルト



１：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルト

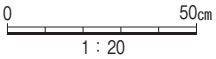


図６　第４層(地山)上面遺構平面・断面図

SP204：調査区中央やや西よりにある南北0.8m程度の不定形な小穴で、炉壁細片５や瓦質土器細片６などが出土した。

SP208：調査区東端にある東西0.3m程度の小穴で、瓦器椀細片２が出土した。

SP201・202以外の200番台の遺構からは中世の遺物のみが出土しているが、いずれも耕作により細片となり摩耗も進み詳細な時期は不詳である。本調査地の南側で15世紀代を中心に集落が活性化するとみられていることから、これらの遺構もその頃の可能性が高い。また、共伴する炉壁・鉱滓の破片もやはり細片化し、鋳造に直接係る遺構は検出されなかった。

３)まとめ

本調査地では中世の作土層やそれを埋土とする小穴を検出した。また、それに先行する12世紀代の小穴を検出した。このような結果から、当地は中世集落の生産域として利用されていたと考えられ、これまでの知見と同様に鋳物師集団の拠点は本調査地よりも南の旧苅田村側にあると考えられる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「苅田４丁目所在遺跡発掘調査(KL07－２)報告書」:『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.115－122

大阪市文化財協会2004、『苅田４丁目所在遺跡発掘調査報告』、pp.1－61

大阪市文化財協会2008、『苅田４丁目所在遺跡発掘調査報告Ⅱ』、pp.1－96

大阪文化財研究所2011、『苅田４丁目所在遺跡発掘調査報告Ⅲ』、pp.1－44

住吉区長居東四丁目69－２における建設工事に伴う
南住吉遺跡発掘調査(MN17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市住吉区長居東４丁目69－２
調 査 面 積　　約56㎡
調 査 期 間　　平成29年７月24日～平成29年７月28日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長 高橋 工、松本啓子

1）調査に至る経緯と経過

調査地はJR阪和線と長居公園通の交差地点から阪和線の高架に沿った東側の道路を約180m南下した地点にあって、南住吉遺跡中央部のやや東よりに位置する（図１）。南住吉遺跡は東西約1.6㎞、南北約1.0㎞の広がりをもち、MN85－37次調査で６世紀末～８世紀初頭の掘立柱建物群が検出されたほか、遺跡の範囲内では、弥生時代～中世の遺構・遺物が見つかっている［大阪市文化財協会1998a・2002・2004、大阪文化財研究所2012など］。本調査地周辺では、北西約200mのMN95－20次調査とMN01－14次調査で、弥生時代中期の井戸や古墳時代の韓式土器、中世の柱穴や溝などが見つかり、南東約400mのMN87－21次調査では古代の土壙や中世の溝が見つかった［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1997・2003、大阪市文化財協会1998b］。本調査地においても同様の遺構・遺物の出土が見込まれた。

工事に先立つ大阪市教育委員会による試掘で、地表下0.4m以下で中世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたため、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷を把握するための基礎資料を得ることを目的に本調査を実施することになった。調査は図２のとおり敷地内に東西７m、南北８mの調査区を設け、平成29年７月24日から開始した。地表下0.4mまでの地層を重機によって除去し、以下を人力によって精査し、写真・図面等の記録をとった。７月28日に現地における掘削や記録などの作業を終え、器材等を撤収して調査を完了した。

なお、本報告の平面図に示す方位は、現場で記録した街区図を１／2500大阪デジタル地図にあてはめて得た世界測地系座標の座標北で、標高はT.P.値（東京湾平均海面値）で、TP＋〇mと記した。

図１　調査地位置図

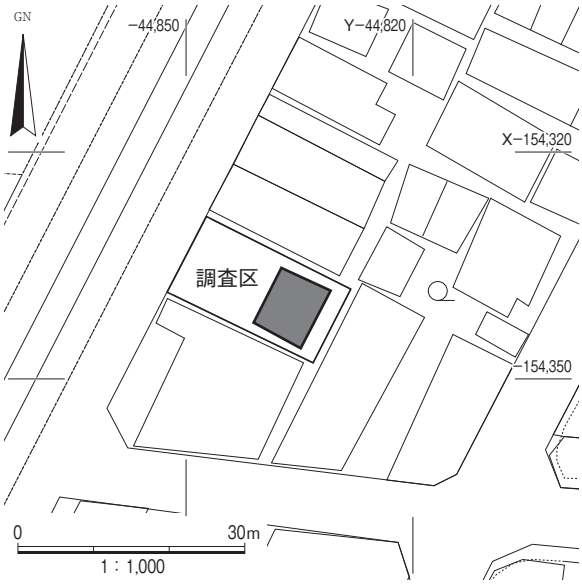


図２　調査区配置図

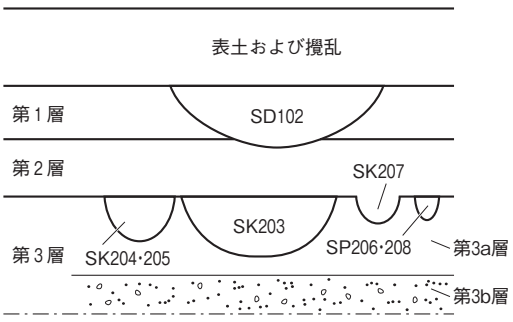


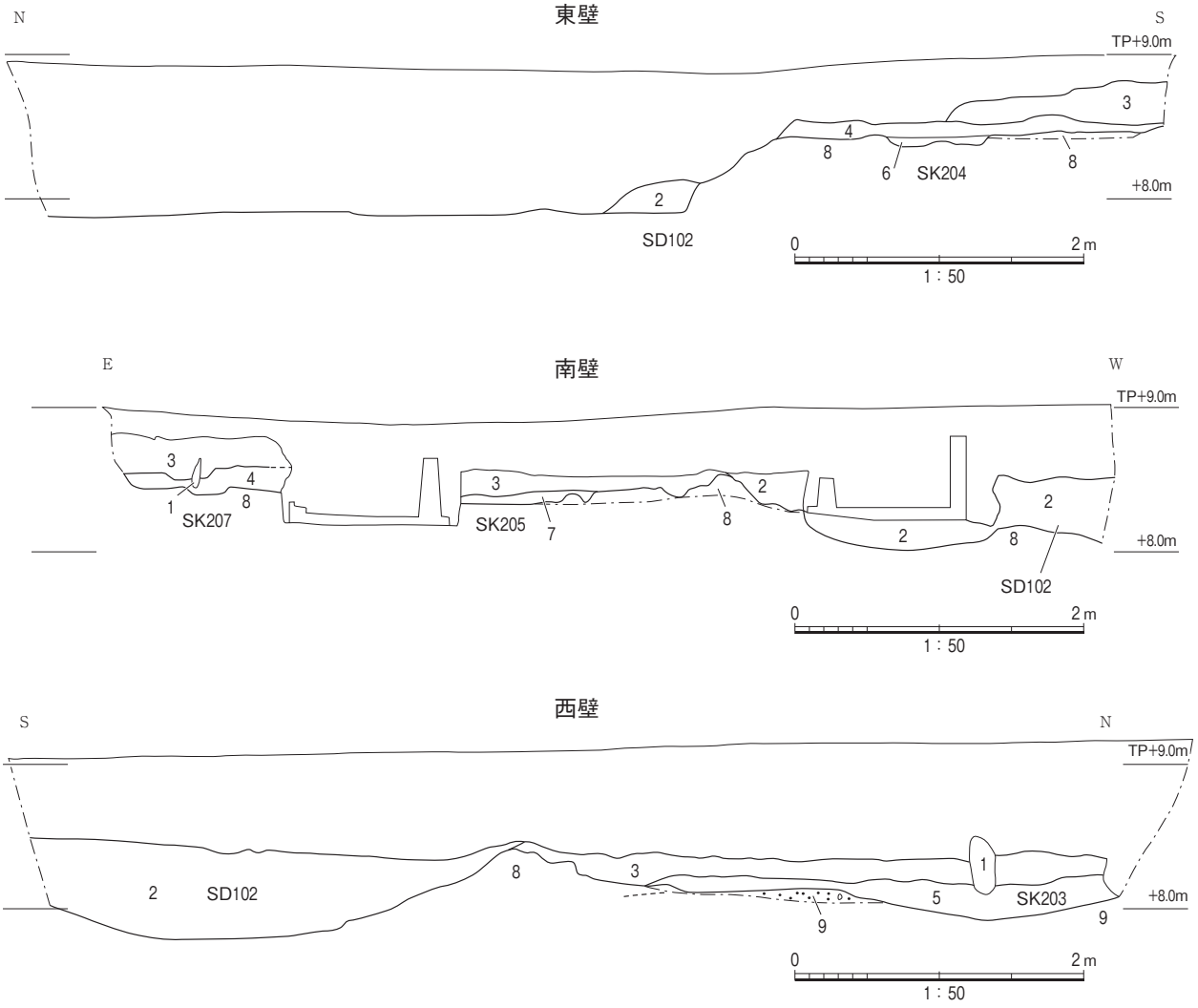
図３　地層と遺構の関係図

２）調査の結果

ｉ）層序（図３・４）

調査地の地表面の標高はTP+9.0m前後で、調査地内は平坦であった。調査区の東半が大きく攪乱されているため、調査区西半の各層について記述する。本調査の基本層序は以下のとおりである。

第１層：酸化鉄・マンガンに汚染されたにぶい黄褐色（10YR5/4）粘土混り細粒砂質シルト層で、最大層厚



杭
　1：にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土･砂混りシルト
SD102
　2：にぶい黄褐色（10YR5/4）礫･炭混り粘土質シルト
　（マンガンの斑紋あり）
第１層
　3：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土混り細粒砂質シルト
　（酸化鉄･マンガンの斑紋あり）
第２層
　4：褐色（10YR4/4）炭･粘土混り細粒砂質シルト（マンガンの斑紋あり）
SK203
　5：明褐色（7.5Y5/6）炭･礫混りシルト質粘土
SK204
　6：にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂質シルト（酸化鉄の斑紋あり）
SK205
　7：にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂質シルト～シルト
　（酸化鉄の斑紋あり）
第３層
　8：黄褐色（10YR5/6）細粒砂混りシルト質粘土（地山）
　9：黄褐色（10YR5/8）粘土混り砂質礫（地山）

図４　地層断面図

30㎝の作土層である。本層上面までを重機により除去した。遺物は出土していないが、本層上面で17世紀末～18世紀前半のSD102を検出し、下位の第２層が中世以降と考えられることから、中世から17世紀末～18世紀前半までのいずれかの時期の作土層と考えられる。

第２層：褐色(10YR4/4)炭・粘土混り細粒砂質シルト層の作土層である。層厚は15㎝ほどである。第３層上面のSK203から瓦器の破片１が出土したことから、本層は中世以降の作土層と考えられた。本層下面でSK207を検出したほか、第３層上面でSK203～205、SP206・208を検出した。

第３層：段丘構成層で、２層が観察された。上部の第3a層は黄褐色(10YR5/6)細粒砂混りシルト質粘土層で、TP+8.5m以下の深さで見られた。その下の第3b層はSK203の底面で観察した黄褐色(10YR5/8)粘土混り砂質礫層である。調査区北端のTP+8.1mほどの深さで見られたが、湧水層であることと、調査区北部の壁面が崩れたため、西壁断面の観察に留め、掘削はしていない。

ⅱ)遺構と遺物(図５・６)

今回の調査では、中世の遺構と近世の遺構が検出された。

中世の遺構は、第３層上面のSK203～205、SP206・208と、中世に遡る可能性のある第２層下面のSK207である。

SK203は調査区の北半に位置する南北5.0m以上、東西3.5m以上の土壙で、明褐色(7.5Y5/6)炭・礫混りシルト質粘土で埋まっている。北端が調査区外に延び、東側を攪乱により削平されているため、全体像はわからないが、底面の形状を見ると一辺が２m以上の方形または長方形の土壙がいくつも重なっているようにみえる。土採り穴と考えられる。SK203から瓦器の破片１が出土した。

SK204は、幅約0.7m、長さ1.3m以上、深さ0.1m未満の南北方向の土壙である。水の流れた痕跡は

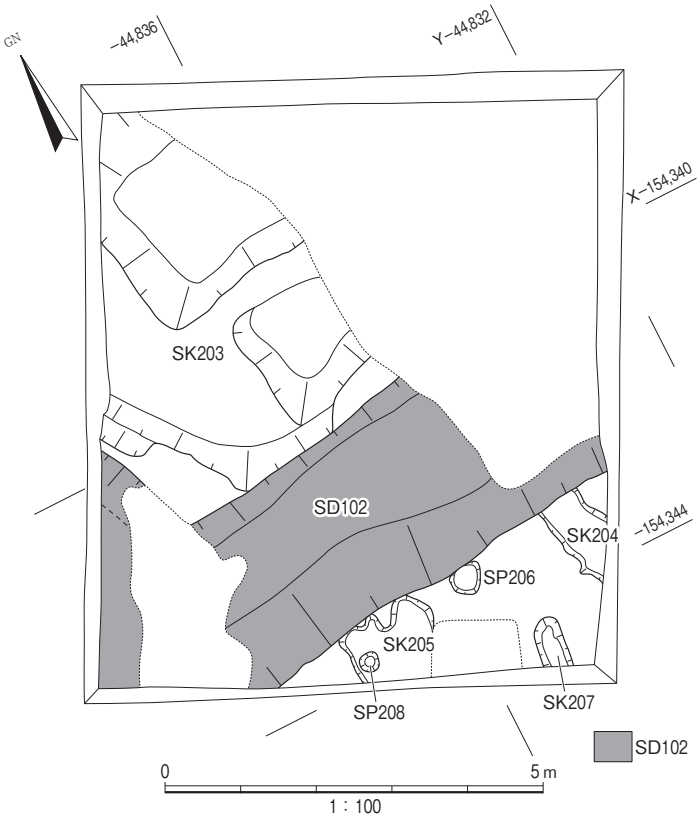


図５　遺構平面図

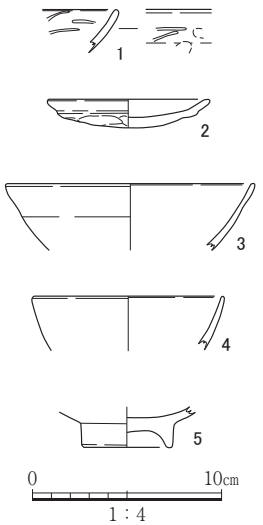


図６　出土遺物実測図
SK203(１)、SK204(２)、
SK205(３)、SD102(４・５)

なく、埋土がにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトで、酸化鉄に汚染されている。耕作痕跡と考えられる。遺物は平安時代後半の土師器皿2が出土した。

SK205は、東西約1.2m、南北1.1m以上の不整形な土壙で、幅0.6mほどの溝2本がV字状に重なっているようにも見える。深さは約0.1mである。埋土はSK204に似たにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト～シルトで、酸化鉄に汚染されていることもSK204と似ている。SK204同様の耕作痕跡であると考えられる。遺物は平安時代後半の土師器椀3が出土した。

SP206は、長径約0.5m、短径約0.4mの平面楕円形の小穴で、深さは5㎝である。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)炭・礫混り粘土質シルトで酸化鉄に汚染されている。遺物は出土していない。

SP208は、SK205の底面で見つかった直径約0.3mの小穴で、深さは約3㎝である。埋土は灰白色(2.5Y7/1)砂質シルトで酸化鉄に汚染されている。遺物は出土していない。

SK207は、幅約0.4m、長さ0.7m以上の南北方向の土壙で、深さは5㎝ほどである。埋土は第2層の褐色(10YR4/4)炭・粘土混り細粒砂質シルトで酸化鉄に汚染されている。耕作痕跡と考えられる。

近世の遺構はSD102である。

SD102は、幅約2.5m、深さが約0.7mある溝で、調査区内を東西に横切り、溝の南端や西端は調査区外のため全貌はわからないが、調査区西端で北へ曲がることが確認された。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)マンガン・礫・炭混り粘土質シルトで、マンガンに汚染されている。水の流れた痕跡は見られなかった。区画溝の可能性がある。埋土から肥前磁器碗4と肥前陶器呉器手碗5が出土した。17世紀後半のもので、この溝の埋まった時期を示す。

3)まとめ

今回の調査から、第3層上面の遺構が平安時代後半の耕作痕跡や土採り穴で、第2層下面の遺構が中世の耕作痕跡と判明した。また、近世前半の17世紀末～18世紀前半の区画溝とみられる遺構も見つかった。これらのうち中世の遺構は生産活動に伴うもので生活域はすぐ近くに存在すると推定される。本調査地周辺における南住吉遺跡の調査はまだ多くはないが、今後の調査とあわせてさらなる検討を行いたい。

引用参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1997、「細井氏による建設工事に伴う発掘調査(MN95－20)略報」:『平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.169－177

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「南住吉遺跡発掘調査(MN01－14)報告書」:『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.97－100

大阪市文化財協会1998a、『南住吉遺跡発掘調査報告　付矢田部遺跡・帝塚山古墳』

大阪市文化財協会1998b、「MN87－21次調査」:『南住吉遺跡発掘調査報告』、pp.60－63

大阪市文化財協会2002、『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅱ

大阪市文化財協会2004、『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅲ

大阪文化財研究所2012、『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅳ

住吉区墨江三丁目60－15における建設工事に伴う
住吉行宮跡発掘調査(SN17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市住吉区墨江３丁目60－15
調 査 面 積　　40㎡
調 査 期 間　　平成29年６月19日～６月22日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長 高橋工、絹川一徳

1）調査に至る経緯と経過

本調査地は、国指定史跡である住吉行宮跡から南西約100mに位置する（図１）。住吉行宮は、南北朝時代の1352（正平７）年、吉野から移った後村上天皇が住吉大社の神官であった津守氏の居館（正印殿）を行宮としたことに始まる。後村上天皇が1368（正平23）年に崩御し、長慶天皇が即位して吉野に移るまでの約９年間行宮であった[三浦圭一1988]。調査地の一帯は上町台地南部の西縁に当り、西と北側に向かって緩やかに下降する地形で、北250mには西流する細江川（通称細井川）があり、河口部に形成された入江は「住吉の細江」と呼ばれた古代の港である住吉津があった。この住吉津に関連して筒男三神と神功皇后を祭神とする住吉大社は、本調査地の北西400mに位置する。

住吉行宮跡の周辺で行われた既往の調査では、行宮として利用された津守氏の居館の存在を窺わせる遺構・遺物が見つかっている。行宮跡の東側では、SM89－２次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991]で平安時代の瓦のほか14世紀後半の土器が多数出土し、SN10－１次調査[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]で井戸から13世紀後半の青磁・土師器・瓦器や瓦質土器が出土した。南側では、SN05－1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]において中世以前とみられる柱穴や奈良時代中頃から平安時代初期にかけての遺構・遺物が見つかっており、SN98－５次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000]で幅約２mの正東西方向の溝から瓦や中国産白磁・青磁、李朝、瀬戸美濃焼など15世紀から16世紀前半にかけての多彩な遺物が出土した。この東西方向の溝と出土遺物の時期が共通する正南北方向の溝が行宮跡の西側で行われたSN16－１次調査で見つかっている[大阪文化財研究所2016]。

当地では、大阪市教育委員会が平成29年５月２日に行った試掘調査において、中世・近世の遺物包

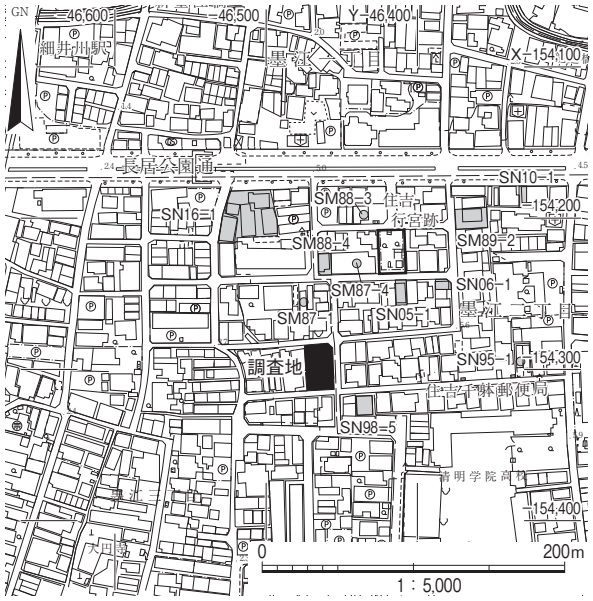


図１　調査地の位置

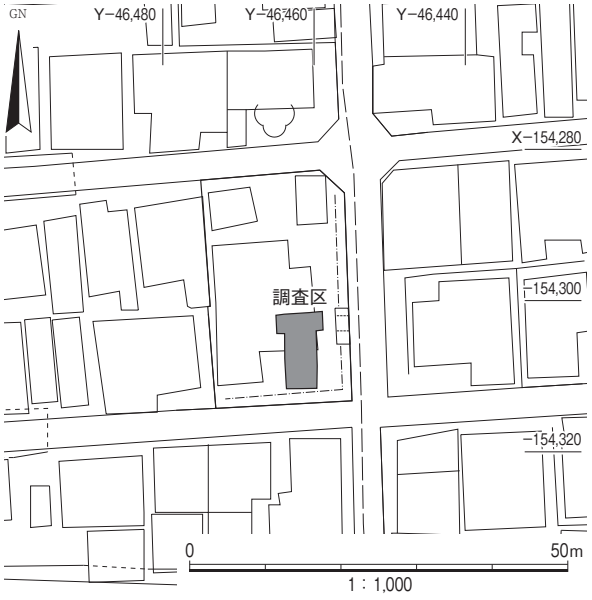


図２　調査区の配置図

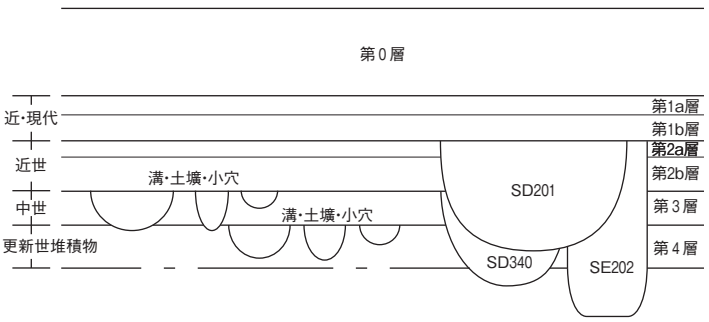


図3　地層と遺構の関係図

含層が確認されたため、本格的な発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成29年6月19日に着手した。地層の遺存状況が比較的良好とみられた調査地の南東側に東西4m×南北10mで40㎡の発掘区を設定した(図2)。6月19日に重機により表土や攪乱土の掘削を行い、以下を人力で掘削した。その過程で発掘区北端において東西方向の溝SD340を検出したことから、溝の規模や方向を確認するために調査区の北端を東西方向にそれぞれ1mほど、T字形に拡張した。6月22日には現地におけるすべての作業を終えて撤収し、調査を完了した。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海水面)で、TP+○mと記した。また、基準点はMagellan社製ProMark3で測位を行い、本報告書で用いた方位と座標値は世界測地系座標(平均直角座標系第Ⅵ座標系)を基準にしている。

2)調査の結果

ⅰ)層序(図3・4)

調査地はほぼ平坦でTP+5.0m前後である。上町台地の西縁に位置していることから、調査地より西側は緩やかに下降する斜面地となっている。以下の第0～4層を確認した。

第0層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫～極粗粒砂混り粘土質シルトの現代盛土で、調査区全体に30～40cmの厚さで堆積していた。調査区の南東は、建物解体・更地工事によって一部が大きく攪乱されており、層厚は約80cmであった。

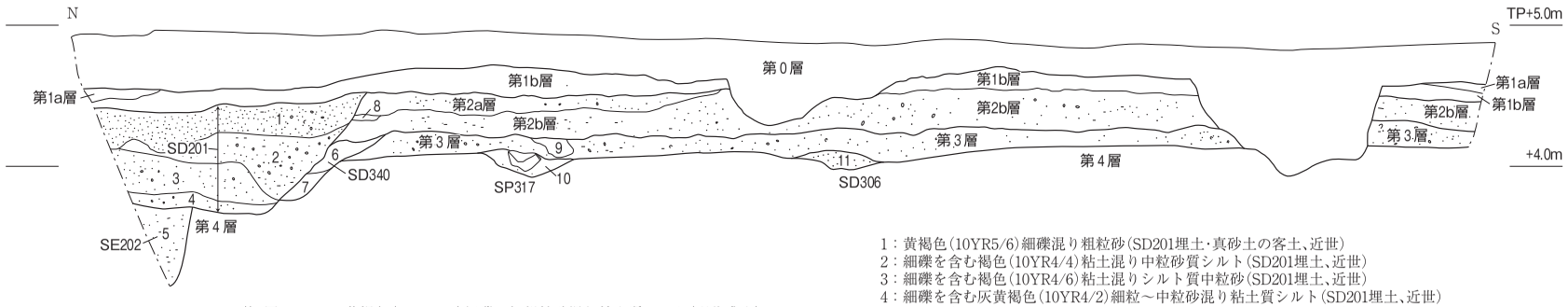
第1層：旧表土であるが、工事のために一部が削平されていた。近・現代の遺物を含む地層である。第1a・1b層に細分された。第1a層は炭粒を多く含む黒褐色(10YR2/3)粘土混りシルト質中粒砂の作土層で調査区の北端と南端でわずかに認められた。層厚は5cm前後であった。第1b層は細礫を含む黒褐色(10YR3/2)粘土混りシルト質中粒～粗粒砂の作土層で、調査区全体で認められた。層厚は10～20cm程度であった。

第2層:近世の遺物を含む地層で、第2a・2b層に細分された。第2a層は細礫を含む暗褐色(10YR3/3)細粒砂混りシルト質粘土の作土層で、調査区の北半に堆積していた。層厚は10cm程度であった。第2b層は褐色(10YR4/4)粘土混り細粒砂質シルトの作土層で、調査区全体に20～30cmの層厚で堆積していた。第2b層からは肥前磁器染付碗19が出土した(図9)。17世紀中葉のものとみられる。

第3層：細礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～粗粒砂混り粘土質シルトの作土層である。調査区の全体に堆積しており、層厚は15cm前後であった。本層には10世紀後葉～16世紀の土器が細片となって多数含まれていた。中世後期の地層である。

第4層：明褐色(7.5YR5/8)粘土質砂礫層である。固くしまった更新世の堆積物で、中位段丘相当

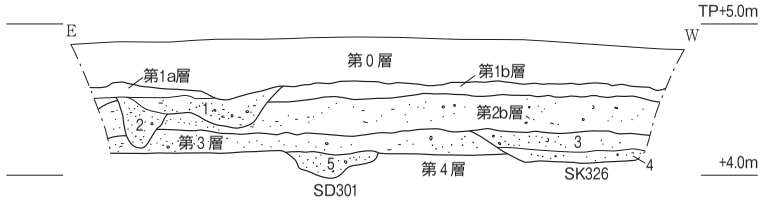
東　壁



第0層 ： にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫～極粗粒砂混り粘土質シルト(現代盛土)
第1a層： 炭粒を多く含む黒褐色(10YR2/3)粘土混りシルト質中粒砂(旧表土・作土)
第1b層： 細礫を含む黒褐色(10YR3/2)粘土混りシルト質中粒～粗粒砂(作土)
第2a層： 細礫を含む暗褐色(10YR3/3)細粒砂混りシルト質粘土(作土)
第2b層： 褐色(10YR4/4)粘土混り細粒砂質シルト(作土)
第3層 ： 細礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～粗粒砂混り粘土質シルト(作土)
第4層 ： 明褐色(7.5YR5/8)粘土質砂礫(更新世・中位段丘相当層)

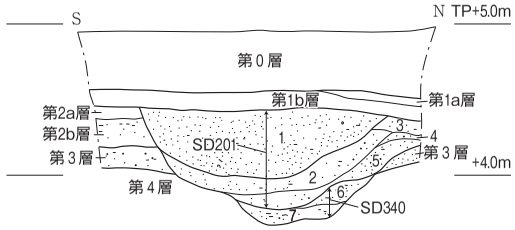
1：黄褐色(10YR5/6)細礫混り粗粒砂(SD201埋土・真砂土の客土、近世)
2：細礫を含む褐色(10YR4/4)粘土混り中粒砂質シルト(SD201埋土、近世)
3：細礫を含む褐色(10YR4/6)粘土混りシルト質中粒砂(SD201埋土、近世)
4：細礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂混り粘土質シルト(SD201埋土、近世)
5：黒褐色(2.5Y 3/1)中粒～粗粒砂混り粘土質シルト(SE202埋土、近世)
6：細礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土混り中粒砂質シルト(SD340埋土、中世末)
7：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土混り中粒砂質シルト(SD340埋土、中世末)
8：細礫を含む褐色(10YR4/4)粘土混り細粒砂質シルト(第2a層相当)
9：細礫を含む褐色(10YR4/6)粘土混り細粒砂質シルト(根痕)
10：にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫を含む細粒～中粒砂混り粘土質シルト(SP317埋土、中世)
11：オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質細粒砂(SD306埋土、中世)

南　壁



1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細礫を含む中粒砂混りシルト質粘土(作土：第1a層相当)
2：黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂混り粘土質シルト(作土：第1a層相当)
3：暗褐色(10YR3/3)粘土混り極細粒～細粒砂質粘土(SK326埋土、中世末)
4：灰黄褐色(10YR4/2)粘土混り中粒～粗粒砂質シルト(SK326埋土、中世末)
5：細礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂混り粘土質シルト(SD301埋土、中世)

拡張部西壁



1：黄褐色(10YR3/6)細礫混りシルト質粗粒砂(SD201埋土、近世)
2：褐色(10YR4/4)細粒砂混りシルト質粘土(SD201埋土、近世)
3：細礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂混り粘土質シルト(SD201埋土、近世)
4：褐色(10YR4/6)細礫を含む粘土混り細粒砂質シルト(SD201埋土、近世)
5：細礫を含む褐色(10YR4/4)極細粒～細粒砂混りシルト質粘土(SD201埋土、近世)
6：細礫を含む褐色(10YR4/6)シルト混り粘土質細粒砂(SD340埋土、中世末)
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫混りシルト質粘土(SD340埋土、中世末)

0　2m
1：50

図4　地層断面図

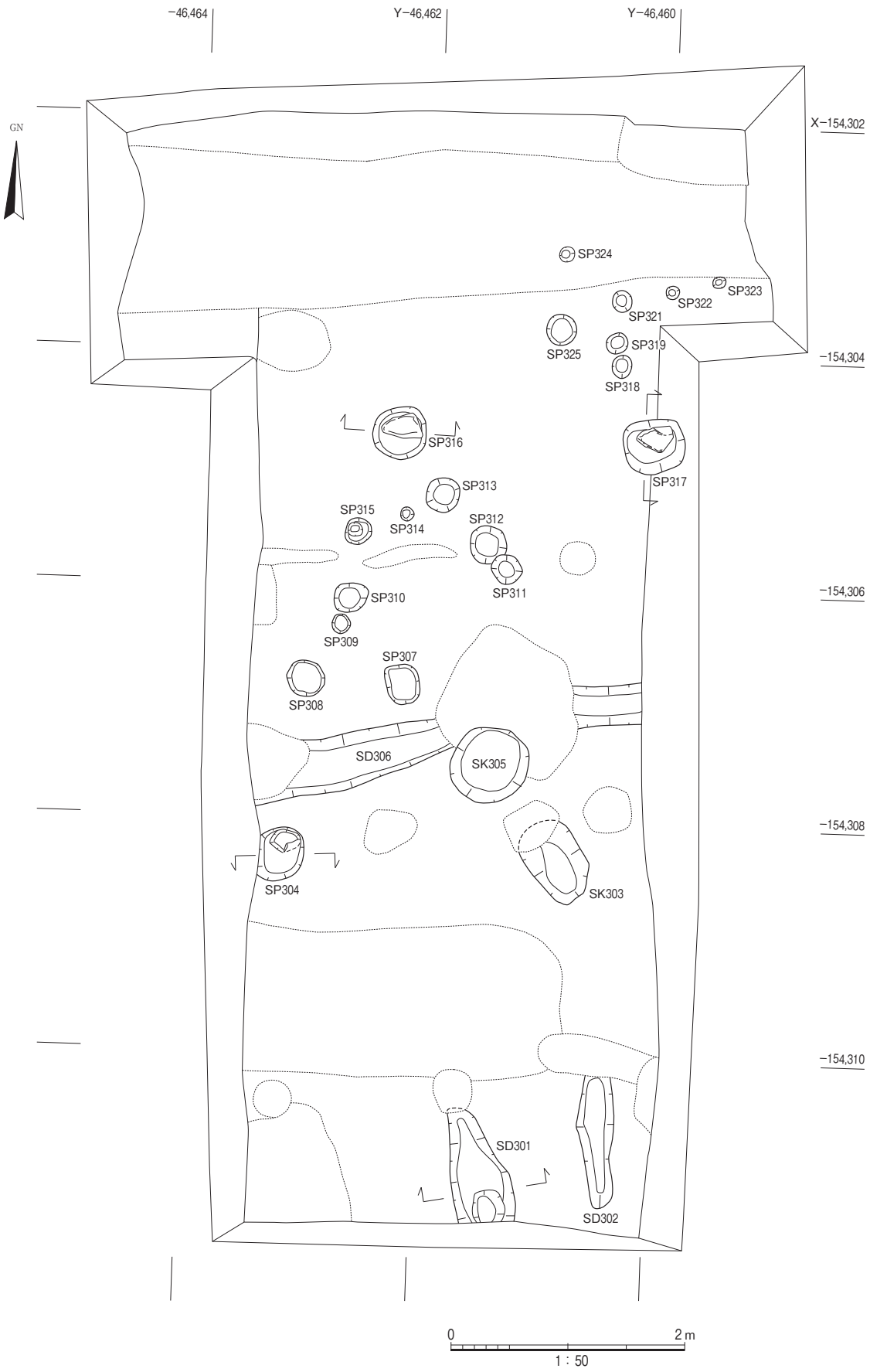


図５　第４層上面検出遺構平面図

層とみられる。層厚は90㎝以上であった。

ⅱ)遺構と遺物

第４層上面、第３層上面、第2a層上面において以下の遺構を検出した。第４層上面と第３層上面検出遺構が中世、第2a層上面検出遺構が近世の遺構である。

ａ．第４層上面検出遺構(図５・８)

第４層上面で、南北方向の溝SD301・302、東西方向の溝SD306、土壙SK303・305、柱穴・小穴SP304・307～319・321～325を検出した。大半の遺構埋土は暗褐色や暗灰黄色、灰黄褐色の細礫を含む細粒～粗粒砂混り粘土質シルトまたは粘土混り細粒～粗粒砂で、岩相は第３層とほぼ共通する。本来は第３層が堆積する過程で掘り込まれた遺構とみられる。

SD301・302は調査区の南端で検出した。SD301は幅0.51m、深さ0.16mで、SD302は幅0.31m、深さ0.08m、SD306は幅0.47m、深さ0.12mである。いずれも耕作に伴って形成された小溝とみられる。SD301からは須恵器鉢17が出土した(図９)。10世紀後葉～11世紀前葉のものとみられる。

SK303は長径0.53m以上、短径0.47m、深さ0.07m、SK305は円形の土壙で径0.66m、深さ0.44mである。

SP304・316・317はいずれも礎石を伴う柱穴である。SP316・317は直線上にあり、そのほかSP304も含めて複数の建物があった可能性があるが、確実に組み合うものは認められなかった。SP304からは土師器皿11が出土した(図９)。口縁部を直線的に立ち上げてヨコナデを施し、端部を丸く仕上げている。底部は糸切りをしている。13～14世紀のものであろうか。これらの柱穴以外の遺構は耕作に伴う小穴や杭痕とみられる。

第３層からは土師器皿３、瓦器皿13、和泉型瓦器椀14が出土した(図９)。３は手づくね成形で、口縁を外反させたのち、端部を丸めて玉縁状に仕上げている。12～13世紀のものとみられる。13は14世紀、14は12世紀前葉のもので、14は外面上半部に水平方向のミガキ、下半部は簡略化されたやや粗いミガキを施し、内面に圏線と平行線状のミガキを施す。

第３層は概ね10世紀後葉～16世紀の遺物を包含しており、第４層上面で検出した上記の遺構も中世の複数時期のものが混在しているとみられる。

ｂ．第３層上面検出遺構(図６・８)

中世後期の地層である第３層上面で東西方向の溝SD329・336・337・340、溝状遺構SX330、土壙SK326・331・334・335・339のほか、SP327・328・332・333・338の小穴を検出した。

SD329・336・337は耕作に伴う小溝とみられる。深さはSD329が0.24m、SD336・337が0.03mとごく浅い。SD337からは土師器皿１が出土した(図９)。口縁部にヨコナデを施し、端部をわずかに外反させる。底部はユビオサエで仕上げている。12～13世紀のものであろう。

SD340は調査区の北端で検出した。ほぼ正東西方向の溝で、幅1.00m以上、深さ0.40m以上である。後世も継続して利用しており、上部が削平されていることから、本来の規模は不明である。SN98－５次・SN16－１次調査で、15世紀後半～16世紀前半とみられる津守氏の居館に係わる正方位の溝が見つかっており、SD340からも15～16世紀の遺物が多く出土している。溝の規模は不明なところがあ

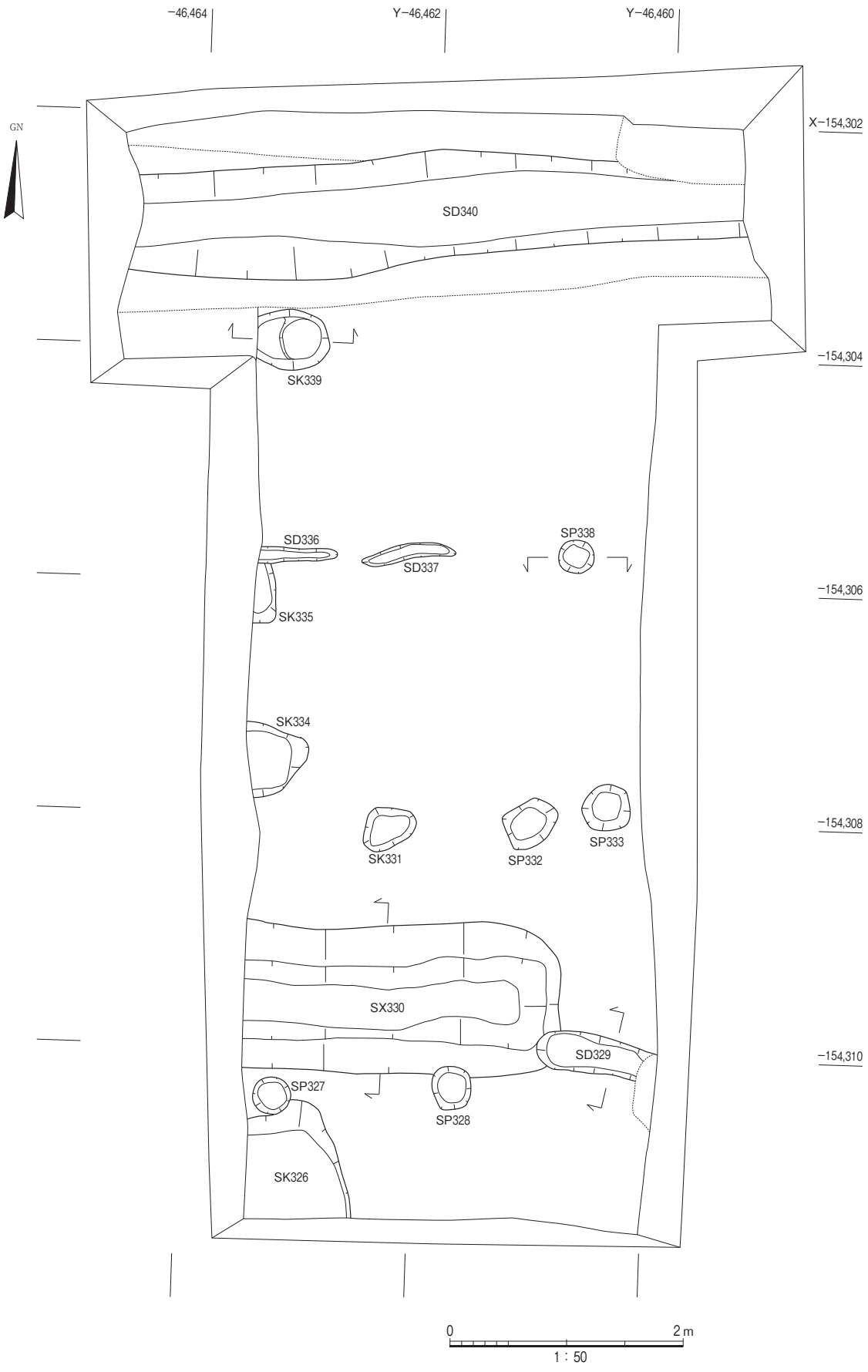


図 6　第 3 層上面検出遺構平面図

るが、SD340も津守氏の居館に関係する溝であった可能性がある。近世に至るまで同じ位置で溝として利用されているとことから、何らかの土地区画を示す境界として長期間機能した溝かもしれない。

SD340からは土師器皿2・7・9・10が出土した(図9)。2は口縁部が底部から直線的には張り出したもので、端部はやや丸みを帯びる。口縁部はヨコナデを施す。12～13世紀のものであろう。7も口縁部はヨコナデを施し、やや外反気味に仕上げられている。ナデによって内底面の端部がやや凹み、底面と口縁部の境界は明瞭である。9は淡褐色の精良な胎土で、口縁部はヨコナデを施し、端部を丸く仕上げている。外面底部はユビオサエのまま不調整である。10は褐色の精良な胎土で、口縁部にヨコナデを施し、端部を丸くかつ薄く仕上げている。外面底部はユビオサエのまま不調整である。7・9・10はいずれも16世紀前半のものとみられる。

SX330は幅1.25m、深さ0.30mで、調査区外の西側へ延びる。細長い土壙の可能性もある。SX330からは土師器皿4・5、瓦質土器羽釜16が出土した。4は口縁部をヨコナデ、端部は丸く仕上げている。5も口縁部をヨコナデ、端部にさらに強くヨコナデを施して面取りをしたもので、端部の断面が台形状を呈する。また端面の中央は、ヨコナデによって圏線状の凹みがみられる。4・5は12～13世紀、16は15世紀前半のものであろう。

SK326は南北1.00m以上、東西0.90m以上、深さ0.18mで、SK331・334・335・339は深さ0.1～0.25mであった。SP327・328・332・333・338は深さ0.1～0.2mであった。なお、SP325(第4層上面検出)・333・338は、ほぼ直線上に並んでおり、径や深さも相似していることから掘立柱建物となる可能性がある。SP338からは土師器皿8が出土した。口縁部を直線的に立ち上げてヨコナデを施し、端部は丸く仕上げている。底部は糸切りをしている。13～14世紀のものであろうか。

第3層上面検出遺構からはおもに中世後期の遺物が出土しており、その中心は16世紀前半である。遺構の大半はこの時期に属すると考えられる。

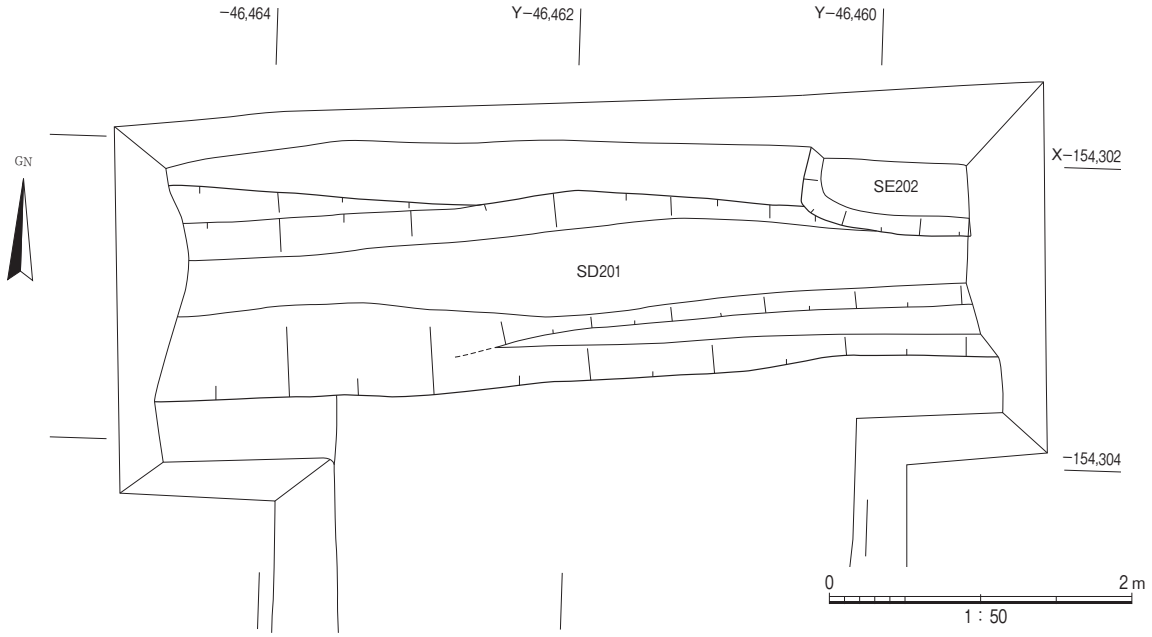


図7　第2a層上面検出遺構平面図

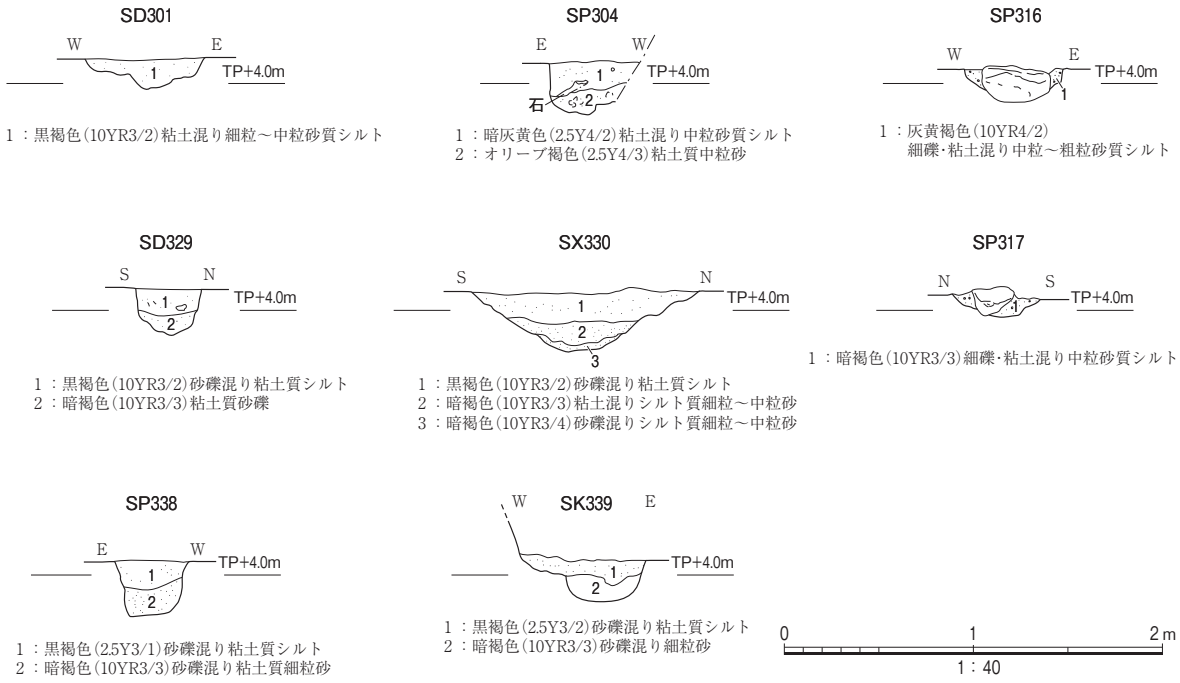


図８　遺構断面図

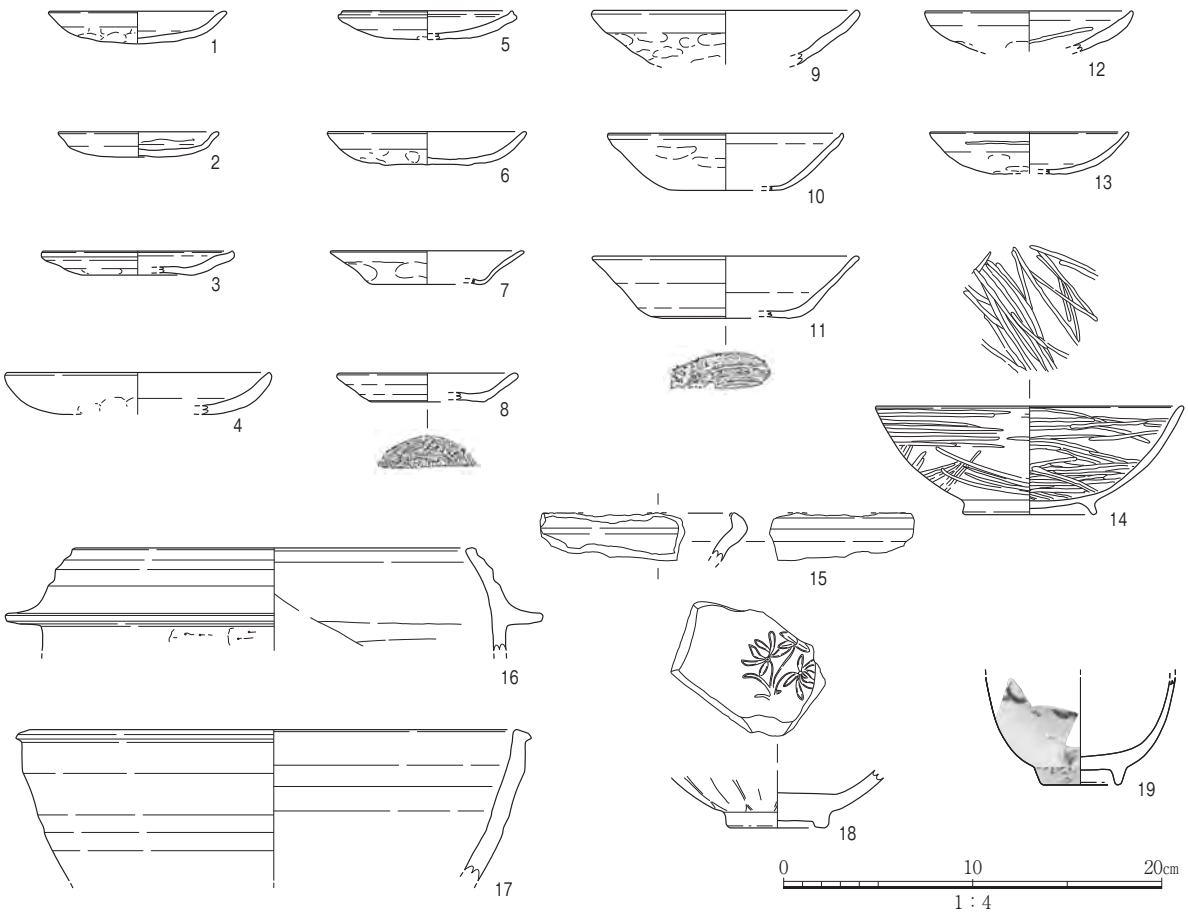


図９　出土遺物実測図

SD301(17)、SP304(11)、SX330(４・５・16)、SD337(１)、SP338(８)、SD340(２・７・９・10)、
SD201(15)、SE202(６・12)、第３層(３・13・14)、第2b層(18・19)

ｃ．第2a層上面検出遺構（図７・８）

近世の地層である第2a層上面において調査区北端で溝SD201、野井戸SE202を検出した。SD201は正東西方向の溝で、幅1.40m、深さ0.78mである。SD340と同じ位置に近世に継続して設けられた溝で、真砂土とみられる黄褐色（10YR3/6）細礫混りシルト質粗粒砂の客土で最終的に埋められている。近世の遺物は認められなかったが、SD201からは瓦質土器の鍋15が出土した。16世紀のもので、本来はSD340の埋土に包含されていた遺物であろう。

野井戸SE202は調査区の北東隅で見つかった。一辺1.00m以上、深さ1.30m以上であった。遺構の時期を示す遺物ではないが、土師器皿６、瓦器皿12が出土した。６は口縁部をヨコナデ、内底面にナデを施す。外底面はユビオサエである。６が12～13世紀、12が15世紀のものである。これらも本来はSD340に属する遺物であろう。

第2b層からは17世紀中葉の肥前磁器染付碗19が出土していることから、第2a層上面で検出されたSD201・SE202の年代は概ね近世後期と考えられる。そのほか、第2b層からは、本来の地層の年代を示す遺物ではないが、中国産龍泉窯系青磁碗18が出土した。外面は蓮弁、内面の見込みは印花文を施す。角高台で内側は露胎である。15～16世紀のものであろう。

３）まとめ

本調査では、正東西方向の溝SD340を検出した。出土遺物から16世紀前半の溝とみられる。既往の調査ではSN16－１次で正南北方向の大溝が、SN98－５次で正東西方向の溝が見つかっており、いずれも16世紀前半の遺物を伴っていた。これらは津守氏の居館を囲む外郭溝であった可能性がある。SD340もほぼ同じ時期で、正東西方向であることから、この溝も津守氏の居館と何らかの係わりを推定しうる。また、第３層には10世紀後葉～16世紀の遺物が包含されており、周辺で見つかった遺構・遺物の時期と共通する。今回の調査では確実な建物跡などは認められなかったが、調査地付近は津守氏の居館の郭内と推定され、近接した場所では居館を構成する建物群の発見が見込まれよう。今後も規模を問わず継続的に発掘調査を重ね、その成果を蓄積していくことが必要である。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990、「芦分邸新築工事伴う住吉行宮跡発掘調査（SM88－４）略報」：『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.231－237

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、「木下邸新築工事伴う住吉行宮跡発掘調査（SM89－２）略報」：『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.233－238

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、「一二氏による建設工事に伴う住吉行宮跡発掘調査（SN98－５）」：『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.103－107

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「住吉行宮跡発掘調査（SN05－１）報告書」：『平成17年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.85－89

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「住吉区墨江二丁目における建設工事に伴う住吉行宮跡発掘調査（SN10

－１）報告書」：『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.67－73
大阪文化財研究所2016、『住吉区墨江三丁目62－109の一部における建設工事に伴う住吉行宮跡発掘調査（SN16－１）報告書』、pp.１－19
三浦圭一1988、「第三章　南北朝内乱期の大阪　第一節　南北朝内乱の幕開き」：『新修大阪市史　第二』、pp.368－377

平野区背戸口五丁目２－10他５筆における建設工事に伴う
平野野堂遺跡発掘調査(HN16－２)報告書

調 査 個 所　　大阪市平野区背戸口５丁目２－10他５筆
調 査 面 積　　約418㎡
調 査 期 間　　平成29年３月１日～平成29年４月６日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工・平田洋司

1）調査に至る経緯と経過

調査地は南港通と大阪内環状線の交差点から北北西約200m、平野野堂遺跡の北端付近、旧平野川が形成する沖積地に位置する。周辺の遺跡としては北東に平野環濠都市遺跡がある。平野野堂遺跡は古墳時代の散布地とされるが、これまで試掘調査のほかは大阪市教育委員会によって工事に伴う確認調査がいくつか行われたのみであり、その実態は明らかでない。

今回の調査地では大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下0.7m以下で中世以前の遺構面および遺物包含層が確認されたため、調査を実施することとなった。排土置場の確保から調査は２分割して行うこととし、それぞれ北区・南区と呼称した。調査は平成29年３月１日より開始し、調査区の設定の後に、南区西側より重機による掘削を開始した。重機による掘削は後述の第２層までとしたが、掘削を進めるにつれ、西側については第２層が近世作土の落込み埋土に当っていることが判明したため、中央以東では掘削を浅くし、第２層中位までとした。なお、西側約2.5mについては大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、遺構検出作業を行わずに直ちに埋め戻すこととなった。第３層上面での遺構検出作業を終えたのち、既設の基礎および攪乱を避けて深掘部を設定し、下位層の調査を行った。第３層については重機によって除去し、平面的な遺構検出作業は第５層上面まで行い、さらに下位については部分的な掘削で確認した。南区の調査が終了後、北区の調査を行った。重機掘削は第１層までとし、その他は南区に準ずる。途中、適宜に遺構検出・掘削、図面作成、写真撮影を行い、平成29年４月６日、機材類の撤収を行い現地における調査を完了した。

基準点は街区基準点を用いた閉合トラバース測量によって測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値（東京湾平均海水面値）で、TP+○mと記した。

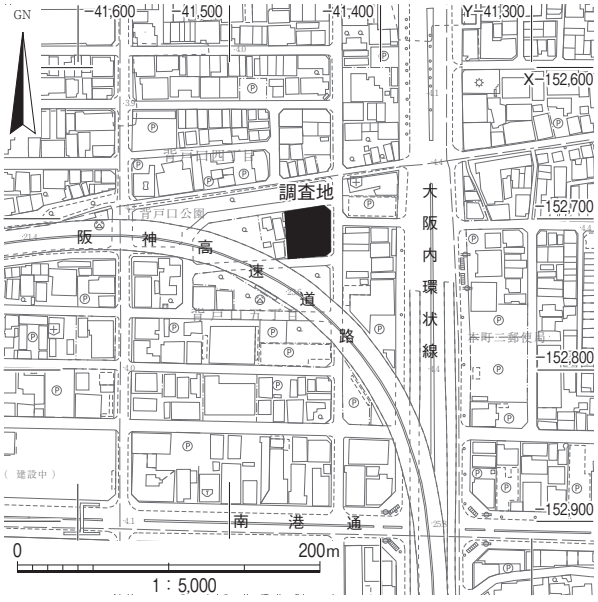


図１　調査地位置図

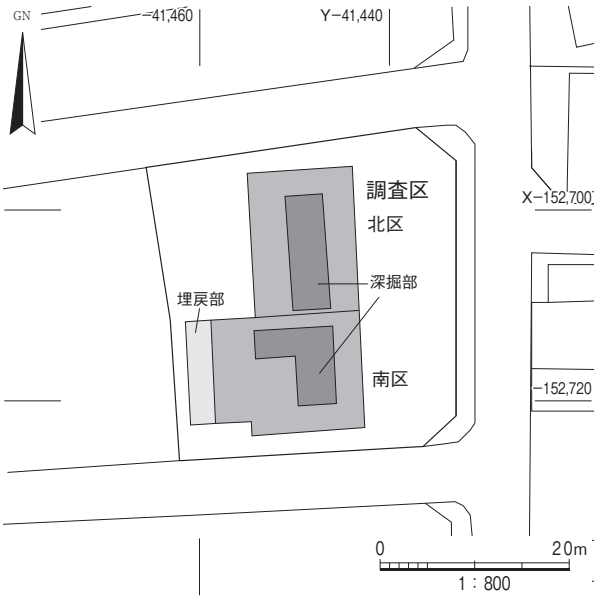


図２　調査区位置図

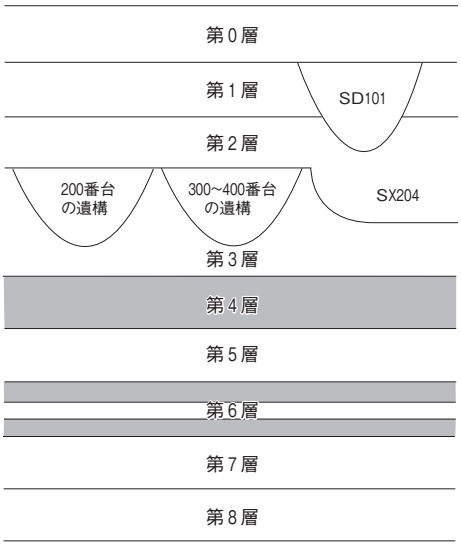


図3　地層と遺構の関係図

2）調査の結果

ⅰ）層序と地形（図3・4、図版一）

調査地の現況地形はTP+4.0～4.2mとほぼ平坦である。調査では部分的な掘削を含めて、現地表下3.7mまでの地層を確認した。

第0層：現代整地層および攪乱である。層厚は約40cmであるが、東壁および南壁沿いは攪乱が深くまで及ぶ。

第1層：暗灰黄色（2.5Y4/2）粗粒砂混り細粒砂質シルトからなる近代～現代の作土層である。層厚は約10cmである。本層上面でSD101を検出した。

第2層：シルト偽礫含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）粗粒砂混り細粒砂質シルトからなる近世の作土層である。層厚は約10～40cmで、西部ではSX204の埋土として存在する。古代を中心とする土師器・須恵器片を多く含むが、肥前磁器のほか19世紀代に降る陶磁器類も少量出土した。試掘調査時において中世の包含層とされた地層にあたる可能性が高い。

第3層：シルト少量含む灰オリーブ色（5Y3/2）細粒砂・黄褐色（2.5Y5/3）細粒砂・オリーブ黒色（10Y3/1）シルトなどからなる氾濫堆積層である。本層以下は北区・南区の深掘部により確認した。層厚は120～130cmである。最下部はシルト主体、それより上位ではシルトを少量含む細粒砂主体でラミナが顕著に見られ、上部に向かうほど堆積単位が薄くなる。最上部は第2層段階の植物根による擾乱および鉄分の沈着によって本来の堆積構造が乱されている。南東から東南東の方向から堆積したと推定される。本層以下からは遺物は出土していない。本層上面にて多くの柱穴のほか、土壙・溝を検出した。

第4層：黒色（5Y2/1）シルトからなり、層厚10cm程度で暗色帯を形成する。植物遺体を多く含み、湿地状の環境下で堆積したと考えられる。上面の標高はTP+2.3～2.4mとほぼ平坦である。遺物が出土していないため年代は明らかでないが、北方約1.2kmの平野馬場遺跡で確認されている古墳時代初頭の湿地性堆積層[大阪文化財研究所2011]に相当する可能性がある。

第5層：上部はオリーブ黒色（5Y3/1）細粒砂質シルト、中部は灰色（7.5Y5/1）粗粒砂、下部は灰色（7.5Y5/1）シルトからなる氾濫堆積層である。本層下部以下は一部で確認したのみである。層厚は100cmである。

第6層：黒褐色（2.5Y3/2）シルトの2枚の暗色帯からなり、間に灰色（7.5Y5/1）シルトを介在する。本層以下は北区の一部でのみ確認した。上部の暗色帯は植物遺体を多く含む。層厚は30cmである。北方の平野馬場遺跡で確認されている弥生時代終末の古土壌[大阪文化財研究所2011]に相当する可能性がある。

第7層：灰色（7.5Y5/1）シルトからなる湿地性の堆積層で層厚は40cmである。

第8層：灰色（7.5Y5/1）粗粒砂からなる水成層で層厚は20cm以上である。

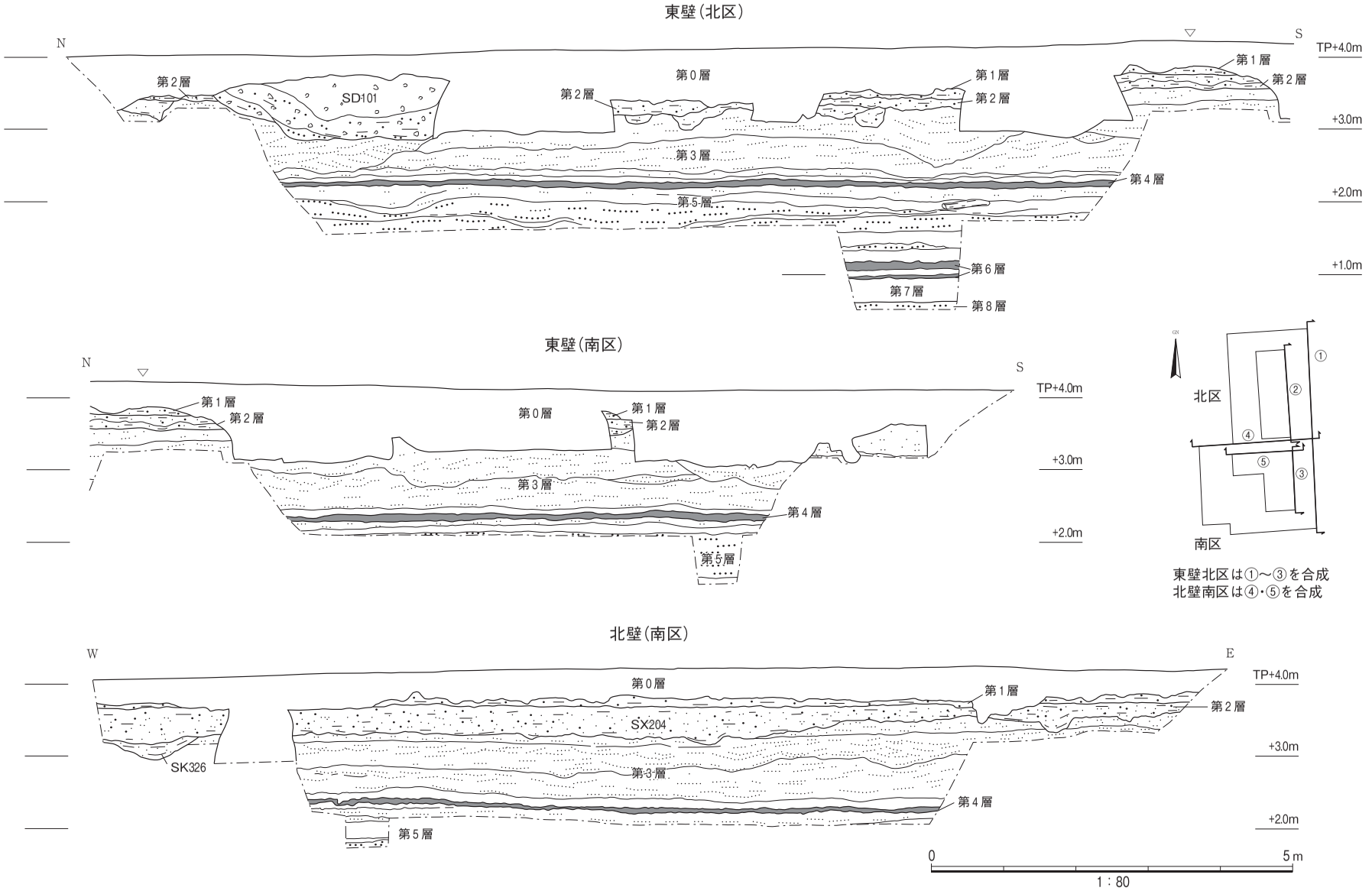

東壁(北区)
N
S
TP+4.0m
+3.0m
+2.0m
+1.0m
第2層
SD101
第0層
第1層
第2層
第3層
第4層
第5層
第6層
第7層
第8層
東壁(南区)
N
S
TP+4.0m
+3.0m
+2.0m
第1層
第2層
第0層
第1層
第2層
第3層
第4層
第5層
北区
南区
①
②
③
④
⑤
東壁北区は①～③を合成
北壁南区は④・⑤を合成
北壁(南区)
W
E
TP+4.0m
+3.0m
+2.0m
第0層
第1層
第2層
SX204
SK326
第3層
第4層
第5層
0
5m
1：80

図4　地層断面図

ⅱ)遺構と遺物(図５～７、図版二・三)

遺構検出作業は第５層、第４層、第３層それぞれの上面で行ったが、このうち遺構が検出されたのは第３層上面のみであった。第３層上面では古代を主体として一部中世に降る可能性のある多くの柱穴・溝などのほか、第１層上面に掘込み面のある溝、第２層を埋土とする落込み、埋土から近世に降ると想定される土壙等が見つかった。検出面は同一であるが、煩雑となることから、ここでは古代～中世の遺構と近世以降の遺構とに大別して記すこととする。

ａ．古代から中世の遺構と遺物

多くの柱穴のほか、溝・土壙などがある。第３層上面で遺構検出作業を行ったが、多くの攪乱のほか、西側では後述のSX204によって上面が大きく削平を受けており、本来の遺構の分布は不明である。また、第３層の上部は第２層段階の耕作に伴う植物根による擾乱および鉄分の沈着等により、本来の堆積構造が観察し難く、遺構検出作業が困難であった。そのため、第３層上部を任意分層発掘しながら遺構検出作業を繰り返し行った。

以下、主要なものについて記す。

柱穴群　調査区全体で約100基程度の柱穴を確認した。平面形は、多くは一片0.4～0.6mの隅丸方形から方形で、0.8m程の大型の柱穴もある。柱痕跡は多くの柱穴で確認でき、礎板を据えた例もある。深さは検出面の遺存状況により0.1～0.4mとさまざまであるが、底面の標高ではTP+2.9～3.2mであり、3.1m付近がもっとも多い。埋土は多くが第３層に由来する偽礫であることから、柱穴の底部付近が遺存していると考えられる。出土遺物の時期としては７世紀中頃～８世紀代と幅があり、飛鳥～奈良時代の柱穴が混在していると考えられるが、出土遺物の時期によって柱穴の形態に特徴は見いだせなかった。なお、調査区中央東端で検出したSP388・389・420など平面形が0.3mほどの円形で小型の柱穴は、埋土が明らかに上記とは異なる。また、SP388・389は柱痕跡底に礎石を有する。時期を決する遺物は出土していないが、他の柱穴に比べて時期が降る可能性が高く、平安時代以降と考えておきたい。

柱穴の並びや出土遺物から２棟の掘立柱建物を復元した。

SB301　調査区西南部で検出した２間(4.2m)以上×２間(4.2m)以上の掘立柱建物である。柱穴の底部がわずかに遺存するのみである。北で西に42°降り、後述の溝SD354・355と並行する。柱穴からは土師器・須恵器片が出土した。須恵器杯G蓋１はSP332から、須恵器杯Ｇ２はSP329から出土した。これらの出土遺物から飛鳥時代(７世紀後葉)の建物と考えられる。

SB302　調査区東南部で検出した一群で復元した。南北２間(2.8m)以上、東西２間(4.2m)以上の総柱の掘立柱建物で南北方向の柱間隔が短い。もう１間東や南に展開する可能性もある。柱穴からは少量の土師器・須恵器片が出土した。このうち図化できない細片ではあるが、SP303からは飛鳥時代と考えられる須恵器杯底部が、SP306からは須恵器杯B底部が出土し、飛鳥時代後葉～奈良時代前葉の建物と推定できる。

ほかに建物としてはいくつか復元できる可能性がある。特に、柱穴群の分布からは、調査区北部で北で20°～30°西に振る方位の一群(**柱穴群Ａ**)、調査区中央部で北で30°～40°西に振る方位の一群(**柱**

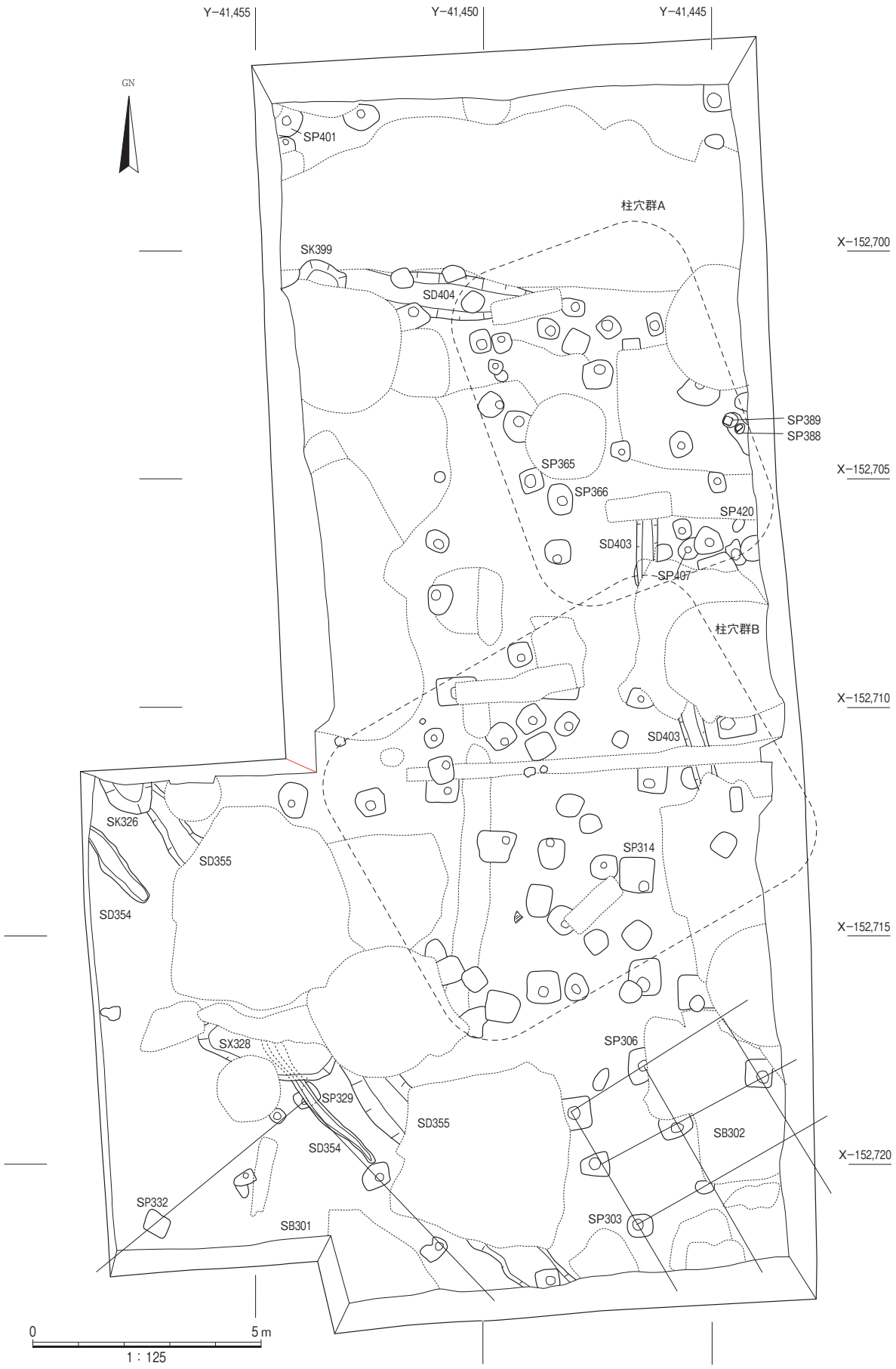

Y−41,455
Y−41,450
Y−41,445
GN
SP401
柱穴群A
X−152,700
SK399
SD404
SP389
SP388
SP365
X−152,705
SP366
SP420
SD403
SP407
柱穴群B
X−152,710
SD403
SK326
SD355
SP314
SD354
X−152,715
SX328
SP306
SP329
SD355
SB302
SD354
X−152,720
SP332
SB301
SP303
0
5 m
1：125

図５　古代～中世の遺構

穴群Ｂ）があり、これらのまとまりの中で建物が数棟復元できると考えられよう。ただし、決定的な要素に欠けることから、可能性として留めることとしておきたい。

これらの建物の時期であるが、時期の推定の手掛かりとなる遺物を出土した柱穴には以下のものがある。調査区西北隅で検出したSP401からは６世紀後葉～７世紀初頭の須恵器杯Ｈ３が出土した。柱穴群ＡのSP407からは６世紀末葉～７世紀前葉の須恵器杯Ｈ４が出土した。柱穴群ＢのSP314からは８世紀前葉～中葉とみられる土師器杯５、柱穴群ＡのSP366からは土師器杯Ｂあるいは皿Ｂの底部片６、胎土に白色砂粒を多く含む淡路播磨系の製塩土器７が出土した。時期は決定できないが奈良時代のものであろう。柱穴群ＡのSP365からは須恵器甕８が出土した。以上のように柱穴群から出土した遺物は６世紀後葉から８世紀中葉と幅がある。飛鳥～奈良時代を通じて建物群が存在したと考えておく。

SD354・355　調査区西南部で検出した溝である。北で西に38°振る方位で平行する。上部を後述の近世の落込みSX204によって削平されているため遺存状況は悪い。SD354はSB301とした建物の柱穴より新しく、後述のSX328に先行する。SD355はSX328および後述のSK326に先行する。SD354は幅0.2～0.4mで、深さはもっとも残りのよい部分で0.1m、SD355は幅0.6～1.1m、深さはもっとも残りのよい部分で0.1mであった。埋土はいずれもシルト偽礫を含む粗粒砂混り細粒砂質シルトである。SD355からは土師器・須恵器片が少量出土した。９は土師器杯Ｃである。風化のため内面の暗文の有無は不明である。これらの溝の時期は出土遺物や遺構の先後関係から飛鳥時代（７世紀後葉～８世紀前半）の間と考えられる。

SD404　調査区北部で検出した東西方向の溝である。標高の高い東側で検出されなかったことから土壙の可能性もある。埋土は炭化物を含む細粒砂質シルトである。土師器・須恵器片が出土した。10は須恵器杯Ｇ蓋、11は須恵器長脚２段高杯の脚部である。11はやや古い特徴を示すが、他の遺物は７世紀後葉に位置付けられよう。

SD403　調査区東部で検出した溝である。途中攪乱により失われているが、南北５m分を確認した。幅0.3～0.4m、深さは0.2mである。柱穴群より新しい。少量の土師器片が出土したのみで、時期は不明であるが、埋土は他の遺構群と異なっており、平安時代以降に降る可能性がある。

SK399　調査区西北部で検出した土壙である。東西1.1m、南北0.5m以上で、深さは0.3mである。埋土は炭化物を多く含む粗粒砂質シルトで、上部は人為的に埋められている。切合い関係からSD404より新しい。土師器・須恵器片が少量出土した。このうち12は底部付近から出土した須恵器杯Ｇで７世紀後葉に位置付けられよう。

SK326　調査区西部で検出した土壙である。東西1.0m、南北0.5m以上で北部は調査区外へ続く。埋土は粗粒砂質シルトである。SD355より新しい。土師器・須恵器・製塩土器が出土した。13は土師器杯Ａである。風化のため内面の暗文の有無は不明である。14は須恵器皿、15は須恵器壺でわずかに外反する口縁端部はナデにより窪む。また、図化できなかったが、製塩土器は砂粒を多く含む淡路播磨系である。これらの遺物は８世紀前半に位置付けられよう。

SX328　調査区西南部で検出した。東西3.0m以上で深さは0.1m未満と底付近がわずかに残存して

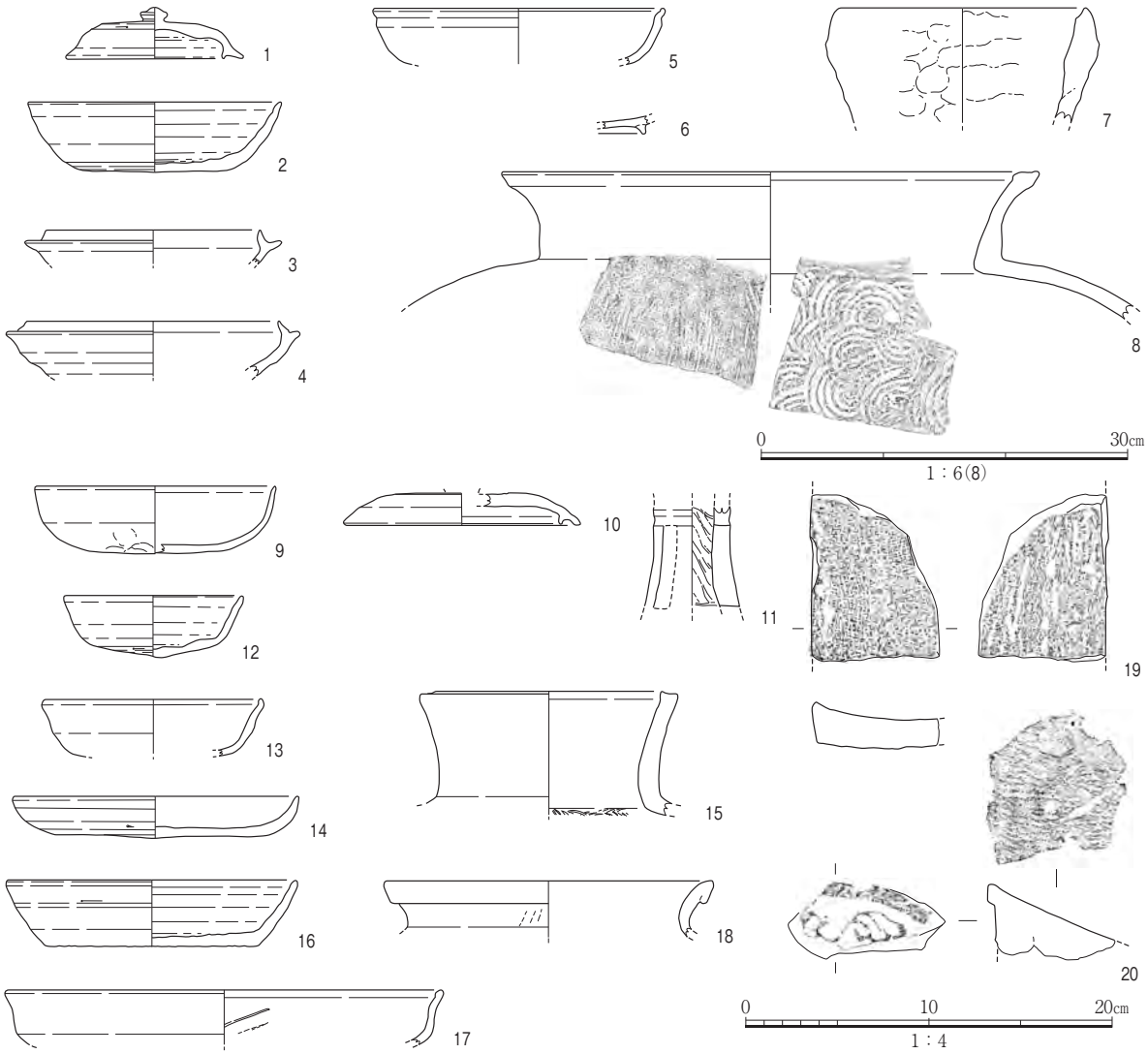


図６　出土遺物実測図

SP332(1)、SP329(2)、SP401(3)、SP407(4)、SP314(5)、SP366(6・7)、SP365(8)、SD355(9)、SD404(10・11)、SK399(12)、SK326(13～15)、SX328(16～19)、SD101(20)

いたのみで、本来の形状・規模は不明である。SD354より新しい。土師器・須恵器・瓦片が出土した。17は土師器皿で内面に放射状の暗文を有する。16は須恵器杯で底部は平坦である。18は須恵器甕である。19は土師質の平瓦片で凸面は縄目タタキ、凹面は布目が認められる。これらの遺物は８世紀後葉に位置付けられる。

以上のように調査区全域において、多数の柱穴群のほか土壙・溝などを確認した。建物として復元できたものは少なく、さらなる検討を加える必要があるが、密度を考えると建替えを含めて長期間建物群が展開していたといえよう。時期は出土遺物が少量で、細片のものが多いこと、また、柱穴という性質上、出土遺物のみをもって決定することはできないこともあり、確定することはできなかったが、他の遺構の出土遺物や上層からの遺物を含めて判断すると、飛鳥～奈良時代を通じて建物群が存在した可能性が高い。なお、平安時代以降に降る可能性がある遺構も含まれるが、上層に含まれる遺物を含め、出土遺物の量としては少なく、平安時代にはこれらの建物群は衰退したと想定しうる。

ｂ．近世以降の遺構と遺物

遺構検出作業は第３層上面にて行った。第３層上面の土壙、第２層の落込み・溝、第１層上面からの溝などがある。以下主要なものについて記す。

SK201～203　調査地北部で検出した平面形が円形の土壙である。後述のSX204に先行する。SK201は直径1.5m以上、深さ0.4m、SK202は直径1.8m、深さ0.4m、SK203は直径1.5m、深さ0.3mである。いずれも底部は平坦で、埋土はシルト偽礫を多く含む人為による埋戻し土である。SK202からは土師器・須恵器片のほか肥前陶器・瓦片が、SK203からは土師器・須恵器のほか肥前陶磁器・瓦片などが出土しており、18世紀後半以降に位置づけられる。

SX204　調査区全域で確認した西への落込みである。埋土は第２層の作土層で、底付近では細粒砂～シルトの偽礫を多く含み、西部を一段下げて耕作を行ったと推定できる。東肩部のラインは北でやや東に振る方位を持ち、北部では後述のSD101近くで西に曲がる。深さは0.3mで底部やSX204に平行して耕作に伴う小溝が認められる。古代を中心とする土師器・須恵器が多く出土したが、肥前磁器など近世の陶磁器片を含む。SK201～203が本遺構の埋土除去後に検出されたこと、および埋土最上部からは19世紀代に降る陶磁器片も出土したことから、本遺構が形成された上限は不明であるが、最終的には19世紀代に降る。

SD101　第１層上面で検出した西で北にやや振る方位をもつ東西方向の溝である。幅3.8m、深さは1.0mである。両肩付近には杭が認められ、護岸施設があったと推定できる。規模・方位から区画に係る溝であろう。埋土には水流の痕跡が認められ、数度にわたる掘返しが行われ、最終的に近代に埋め戻されている。南肩が比較的直線的なのに対し、北肩は掘返し等によっていくぶん不整形となる。土師器・須恵器片のほか18世紀後半から近代の陶磁器・瓦・レンガ片を多く含む。なお、混入品ではあるが20は飛雲文軒丸瓦で外区の一部を残す。軒丸瓦としては近江以外では出土例の少ない事例であり注目される。なお、SX204がSD101の部分で西に曲がることから、SD101はSX204の形成された時期にはすでに存在していた可能性がある。

３）まとめ

今回の調査地では多くの柱穴群のほか土壙・溝を確認することができた。建物として復元できたものが少なく、さらなる整理が必要であるが、飛鳥～奈良時代を通じて建物群が展開することが明らかとなった。その成立の契機や性格は不明であるが、立地を考えると河川の氾濫によって生じた沖積地の開発に伴う可能性がある。また、少量ではあるが飛雲文を含む瓦の出土は周辺に寺院・官衙などの施設があったことを推測させる。平安時代にはこれら建物群は衰退すると考えられるが、このことは近接する平野環濠都市遺跡において平安時代以降に遺構・遺物が多く認められ、開発が進むことと関連するかもしれない。

平安時代以降、中世の状況については明らかでないが、近隣の試掘調査等で作土層が確認されていることから耕作域としておもに利用されたのであろう。

近世になっても耕作域として利用され、今回の調査区においても地下げを伴う耕作の様子が確認で

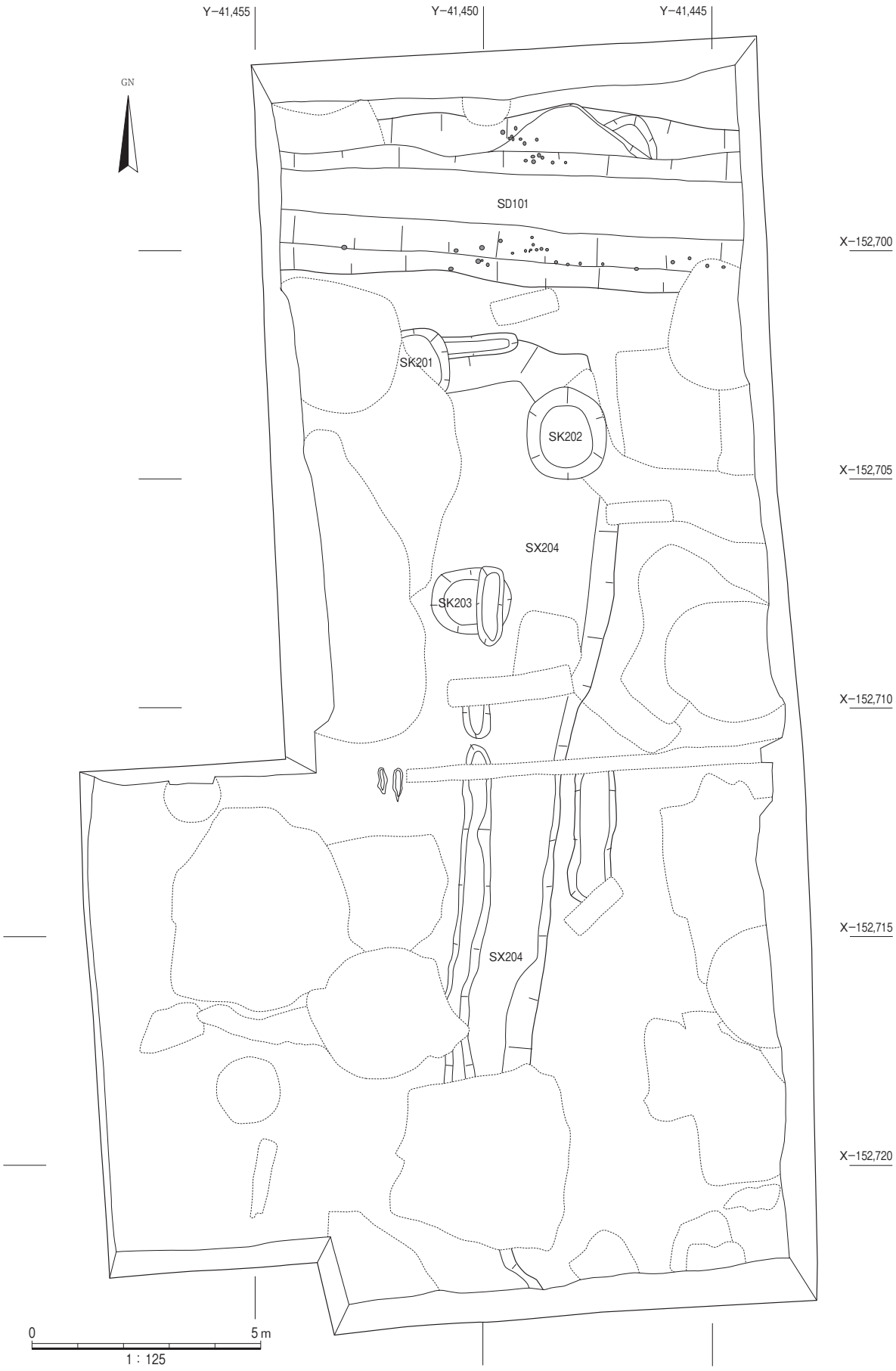

Y−41,455
Y−41,450
Y−41,445
GN
SD101
X−152,700
SK201
SK202
X−152,705
SX204
SK203
X−152,710
X−152,715
SX204
X−152,720
0
5 m
1：125

図７　近世以降の遺構

きた。また、近代に埋没する水路は近世から存在してたとも考えられ、調査地周辺の区画を考えるうえでも興味深い資料である。

また、下位の地層を確認できたことも大きな成果のひとつである。遺構・遺物はなかったものの、今回検出した複数の暗色帯は広範囲に分布している可能性が高く、周辺の遺跡とのつながりや当遺跡の地形的成立を探る手掛かりとなろう。

平野野堂遺跡の調査はこれまで少なく、その実態については不明であったが、今回の調査を契機として周辺の調査のさらなる進展とともに、成果の蓄積が望まれる。

引用・参考文献）

大阪文化財研究所2011、『平野馬場遺跡発掘調査報告』

平野区長吉長原三丁目５－１他における建設工事に伴う
長原遺跡発掘調査(NG17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市平野区長吉長原３丁目５－１他
調 査 面 積　　120㎡
調 査 期 間　　平成29年10月30日～11月10日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、南 秀雄

1）調査に至る経緯と経過

大阪市平野区の東南部に位置する長原遺跡は、旧石器時代以降、近世にいたる複合遺跡である。調査地は長原遺跡の西部に位置し、近接してNG88－54・95－20・95－54次調査地などがある（図１）。調査地から東至近のNG88－54次調査では、墳丘長24.1m（周濠を含む全長34.3m）に復元される帆立貝形の前方後円墳「南口古墳」が発掘されている。南口古墳は長原古墳群築造の終末期である６世紀中頃と推定されている［大阪市文化財協会1995］。また調査地南東のNG95－20・95－54次調査では、５世紀後半～６世紀初めの掘立柱建物跡や井戸が検出され、付近にこの時期の集落が広がっていた。とくにNG95－54次調査のSB706は溝に囲まれ、庇などが付く大型建物の可能性がある。飛鳥時代には、南側300mから続く灌漑用と考えられる南北方向の溝群が検出されている［大阪市文化財協会2000］。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘を受け、南北15m・東西８mを対象とした（図２）。旧耕土を剥いだ第２層上面より調査を始め、第３層以下は期間と遺構面の数・深さを勘案して面積を約３分の２に縮め、NG13層に当る第７層上面まで発掘した。本報告では、基準点は1/2,500大阪市デジタル地図から世界測地系に基づく座標値と座標北を使用した。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP+○mと記した。

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４）

現地表の標高はTP+12.0～12.1mである。厚さ約１mの盛土の下の旧耕土から層名を付した。

第１層：黒褐色（2.5Y3/1）シルト質中粒砂層で層厚は10～20㎝である。NG１層に当る。畠の作土で、

図１　調査地位置図

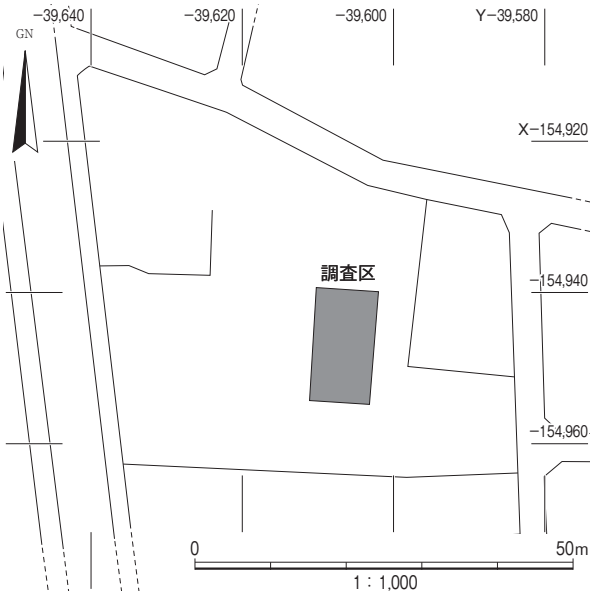


図２　調査区配置図

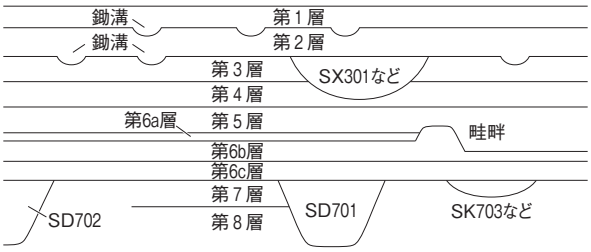


図３　地層と遺構の関係図

下面に東西方向の鋤溝群があった。

第２層：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質中粒～粗粒砂層で層厚は５～13㎝である。畠の作土で、下面に南北方向の鋤溝群があった。第２層からは肥前磁器染付の広東碗13、信楽焼甕14が出土した(図６)。

第３層：シルト偽礫混り暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中粒砂質シルト層で層厚は10～40㎝である。上面でSX301・302を検出した。第３層からは肥前磁器染付碗12が出土した。第２～３層は近世の作土でNG２層に当る。

第４層：シルト偽礫混りオリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒～粗粒砂層で層厚は５～20㎝である。ラミナは明瞭でない。

第５層：黄褐色(2.5Y5/3)細粒～粗粒砂の水成層で、層厚は５～25㎝である。近隣の調査から第４～５層はNG４層に当ると推定される。

第６層：黄褐色(2.5Y5/6)シルト～極細粒砂の水成層の第6a層、灰色(5Y5/1)粗粒砂質粘土層の第6b層、シルト・粘土偽礫混り黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂質粘土層の第6c層から成る。層厚は第6a層で最大10㎝、第6b層で15～20㎝、第6c層で10～20㎝である。第6b・6c層は水田の作土である。第6c層からは須恵器蓋杯11が出土した。第6a～6c層はNG６層に当る。

第７層：灰色(10Y6/1)シルト層で層厚は20㎝である。上面でSD701・SK703などを検出した。第７層はNG13層に当る。

第８層：オリーブ灰色(2.5GY5/1)中粒砂質粘土層で層厚は25㎝以上である(図５のSD701断面図)。第８層はNG14層に当る。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．第７層上面(図５・６)

SK703は南北4.8m以上、東西2.3m以上、深さ0.15ｍの浅い土壙で、須恵器蓋杯１～４、土師器甑５、円筒埴輪６が出土した(図６)。１～４は５世紀後半のもので、６は南口古墳と関連する遺物であろう。

SK703の底でSK707・SP706を検出した。SK707は不定形で、深さ0.25mであった。土師器堝の把手10が出土した。SP706は直径0.25m、深さ0.15mであった。

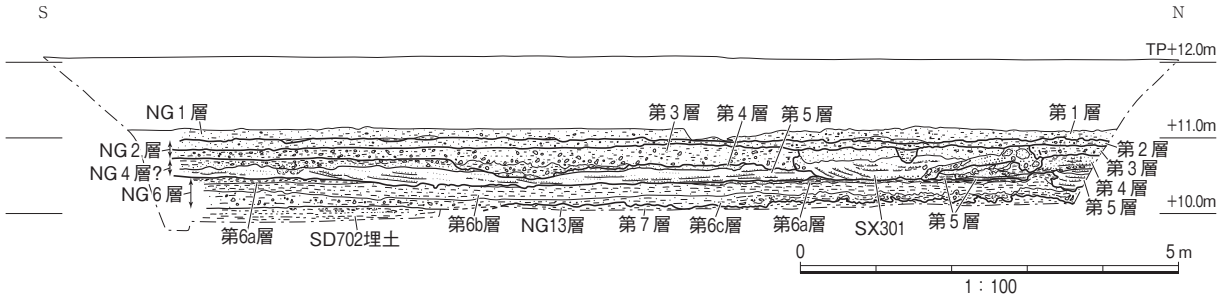


図４　西壁地層断面図

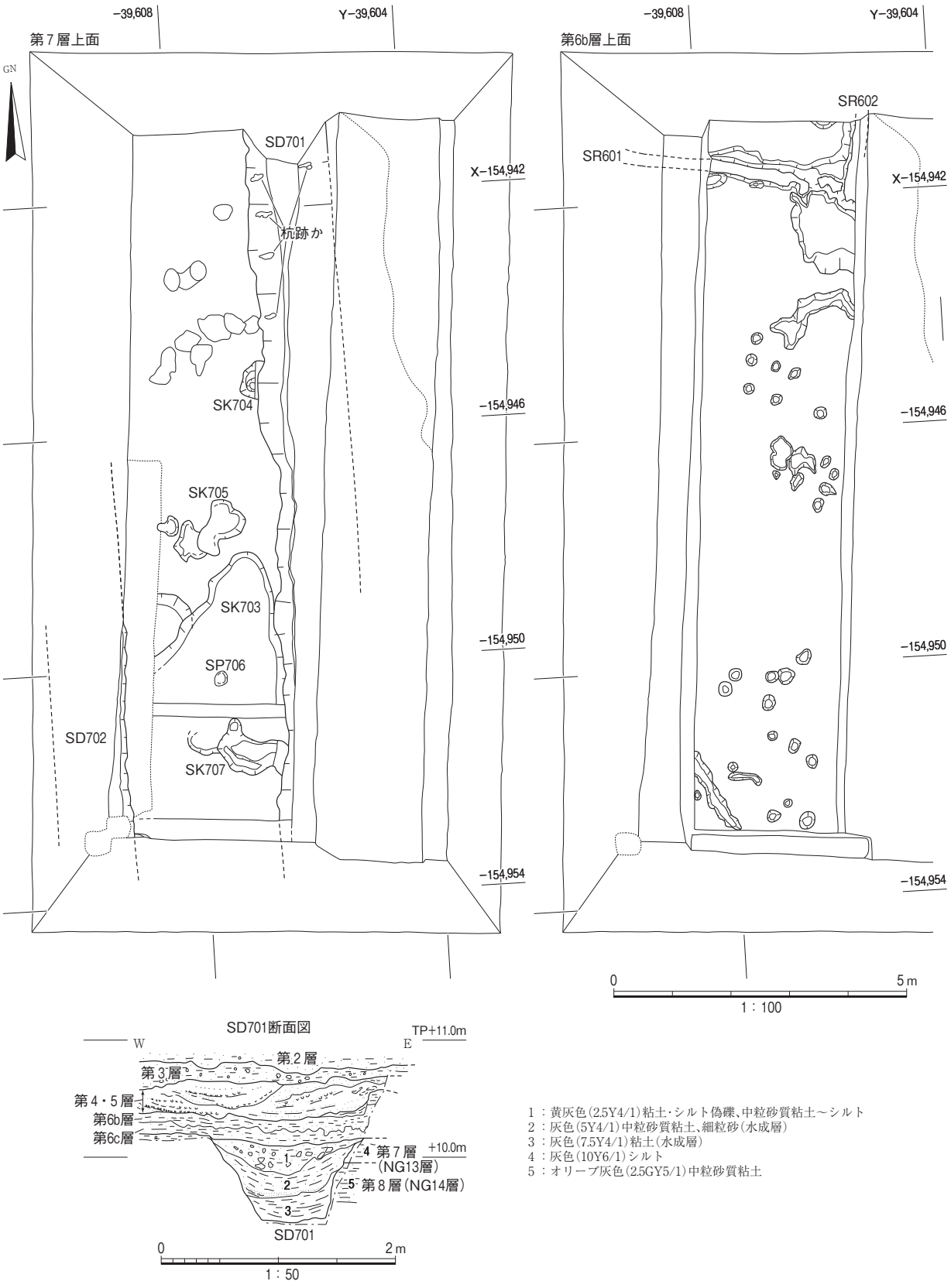


図５　第７層上面・第6b層上面遺構平面図およびSD701断面図

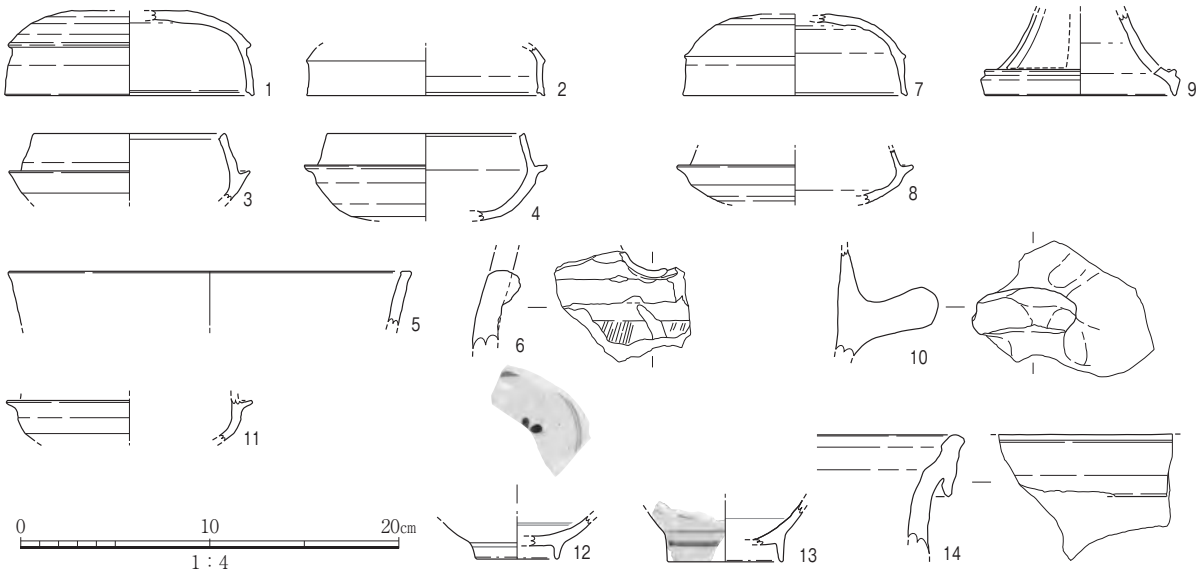


図６　出土遺物実測図

SK703(１～６)、SD701(７・８)、SK705(９)、SK707(10)、第6c層(11)、第３層(12)、第２層(13・14)

SK705は浅い窪みで、須恵器高杯脚９が出土した。SK704はSD701より古く、南北0.65m、深さ0.15mであった。

以上は、南東のNG95－20・95－54次調査で発掘された５世紀後半～６世紀初めの集落と同時期の遺構である。

SD701･702は南北方向の溝である。NG95－20次調査のSD601･603･604と方向や断面形が類似し、南から北へ流れる一連の灌漑用水路と考えられる。SD701は幅1.30m、深さ0.70mで、断面は逆台形である。下部は機能時の粘土層で徐々に埋まり、上部は人為的に埋められている(図５下)。SD701では、杭跡と推定される直径0.15～0.20mの痕跡が５ヶ所にあった。SD701からは須恵器蓋杯７・８が出土した。

SD702は東肩部のみの検出であるが、方向、層準、埋土が同じことから、SD701と同様の溝と推定される。

SD701・702は出土遺物が少なく、細かい時期は決め難いが、第６層の水田形成時には埋まっており機能していない。

ｂ．第6b層上面(図５)

調査区の北で畦畔SR601とSR602を検出した。SR601は西北西－東南東の方向に延び、高さ0.1m前後、下底幅0.35～0.50mである。SR601を挟んで北側が0.1～0.15m低くなっていた。SR602はSR601と直交する畦畔であるが、幅はわからない。SR601・602が作られた水田面には、窪みや踏込みなどが多数あった。

周辺の調査例からすると飛鳥～奈良時代の水田跡である。

ｃ．第３層上面・第２層下面(図７)

第３層上面でSX301・302を検出した。SX301は南北3.20m、東西1.2m以上、深さ0.40mである。過半は中粒～粗粒砂の水成層で埋まり、上部などはシルト偽礫や中粒～粗粒砂で埋められていた。

SX302は南北６m以上、深さ0.15m以上である。これらの性格はよくわからない。

第２層下面には南北方向の耕作痕が密にあった。18世紀後半以降の畠に伴うものである。

３）まとめ

今回の調査では、南から続く灌漑用水路と一連のSD701・702を検出した。この水路群の整備は、飛鳥時代における長原・瓜破遺跡一帯での大規模な耕地開発を示すと考えられている。また、５世紀後半頃の遺物や飛鳥時代以降の水田跡など、これまでの周辺での各時期の成果を補強する資料を得た。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

大阪市文化財協会2000、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV

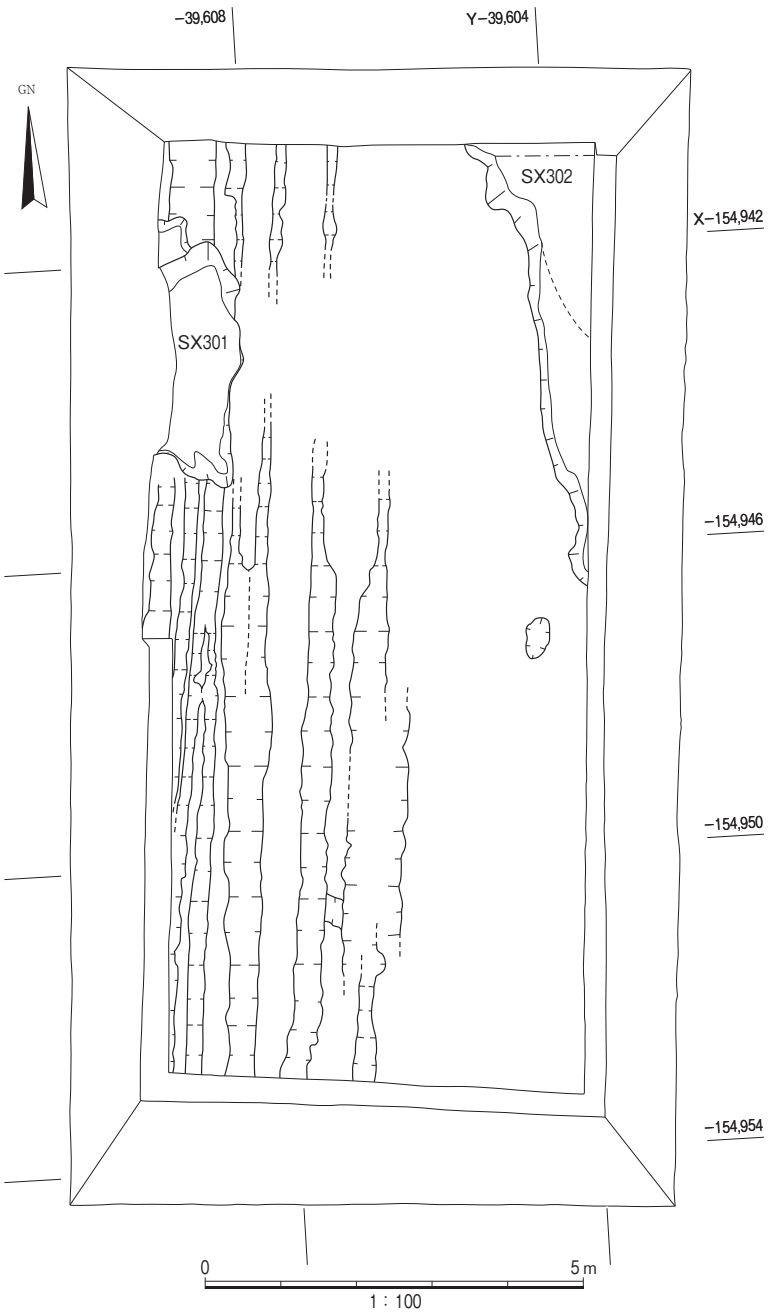


図７　第３層上面・第２層下面遺構平面図

平野区瓜破一丁目13－29における建設工事に伴う
瓜破北遺跡発掘調査(ＵＲ17－１)報告書

調 査 個 所　　大阪市平野区瓜破１丁目13－29
調 査 面 積　　約63㎡
調 査 期 間　　平成29年８月21日～平成29年８月25日
調 査 主 体　　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　　調査課長　高橋 工、平田洋司

1）調査に至る経緯と経過

瓜破北遺跡は瓜破遺跡に北接し、瓜破台地の先端に位置する。今回の調査地から西方約100m付近で1976年からの阪神高速道路や共同溝・下水などの工事に伴い集中的に調査が行われ、瓜破北遺跡として命名された。これらの調査では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての竪穴建物や掘立柱建物、方形周溝墓などが見つかり、なかでも新代の方格規矩鏡や後漢代の内行花文鏡片が出土したことで注目された[大阪市文化財協会1980]。近隣の調査では、東方約150mに位置するUR07－２次調査で後期旧石器時代の石器製作跡のほか、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡が検出された[大阪市文化財協会2009]。南東約100mのUR81－３次調査では詳細な時期は不明であるが、弥生時代後期～古墳時代と考えられる溝が検出され[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983a]、北西約50mのUR81－５次調査では弥生時代の沼状堆積層が確認された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983b]。

今回の調査地では大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下1.25m以下で中世以前の遺構面・遺物包含層が検出されたことから、調査を実施することとなった。敷地南側に東西９m、南北７mの調査区を設定し、平成29年８月21日より調査を開始した。重機による掘削は近世作土層の第３層下面までとし、以下は人力による掘削とした。平面的な調査は工事深度の関係から地表下1.7mの第７層上面まで行い、以下は調査区西側にて部分的な掘削を行い、下位の地層の観察を行った。途中、適宜に遺構検出・掘削、図面作成、写真撮影を行って調査を進め、８月25日に機材類の撤収を含む現地における調査を完了した。

基準点はMagelan社製ProMark3によって測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）で、TP+○mと記した。

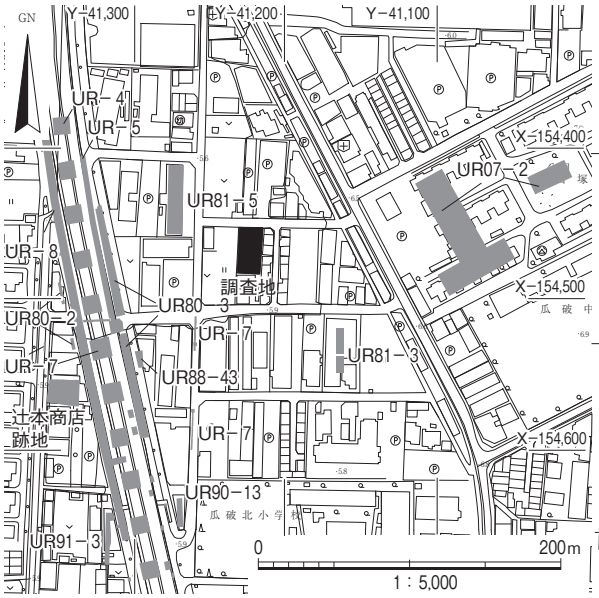


図１　調査地位置図

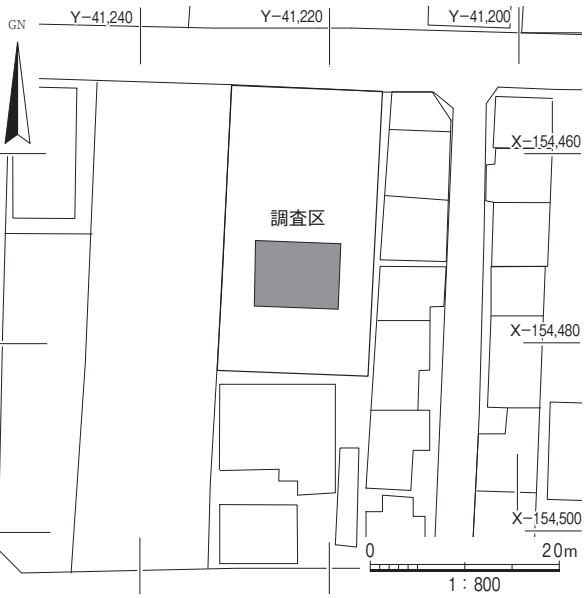


図２　調査区配置図

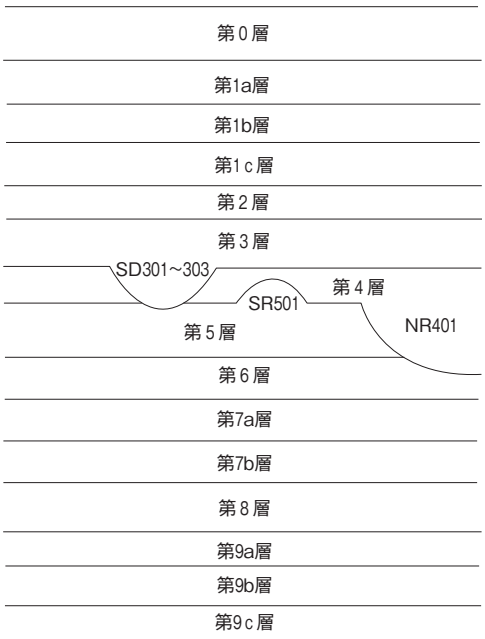


図3　地層と遺構の関係図

2）調査の結果

ⅰ）層序（図3・4）

調査地の現況地形はTP+5.9～6.2mでわずかに北方に低くなる。調査では部分的な掘削を含めて、現地表下3.1mまでの地層を確認した。

第0層：現代整地層および攪乱で、層厚は80～90cmである。

第1層：近代～現代の作土層および客土層で3層に細分できた。第1a層は灰色（10Y4/1）～オリーブ黄色（10Y3/2）粗粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は15～20cmである。周辺が宅地化される直前の時期に当る。第1b層はシルト偽礫を多く含む暗オリーブ色（5Y4/3）粗粒砂質シルトからなる客土層で、層厚10cm未満で部分的に遺存する。第1c層はオリーブ黒色（7.5Y3/2）粗粒砂質シルトからなる近世の作土層で、層厚は10～20cmである。

第2層：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）細粒～粗粒砂からなる氾濫堆積層で、西方ほど粗粒化する。層厚10cm未満で部分的に遺存する。

第3層：オリーブ灰色（5GY5/1）粗粒砂質シルトからなる近世の作土層で、層厚は10～20cmである。本層下面において溝を検出した。土師器・瓦器・肥前陶器片が出土し、17世紀前半の遺物を含む。

第4層：暗オリーブ色（5Y4/4）細粒～中粒砂からなる氾濫堆積層で、層厚10cm未満で部分的に遺存するほか、調査区北西のNR401の埋土である灰オリーブ色（7.5Y5/2）粗粒砂および灰色（10Y4/1）シルトで、層厚40cm以上で分布する。

第5層：オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルトからなる中世の作土層で、層厚は20cmである。上面にて畦畔のほかヒトおよび偶蹄類の踏込みが検出された。土師器・須恵器・瓦器片が出土した。

第6層：オリーブ灰色（5GY5/1）シルト層で、層厚5cm未満で調査区南部に部分的に遺存する。遺物は出土しなかったが、暗色化し、古代～中世の古土壌の可能性がある。

第7層：氾濫堆積層で、2層に細分した。本層以下は部分的な観察を行ったのみである。第7a層はラミナが顕著に見られる暗緑灰色（7.5GY4/1）～オリーブ黒色（10Y3/2）粗粒砂からなり、層厚は40cmである。第7b層は炭化物のラミナが見られるオリーブ黒色（10Y3/1）シルトからなり、層厚は10～20cmである。

第8層：炭化物を少量含むオリーブ黒色（7.5Y3/1）シルトからなる湿地状の堆積層であり、暗色化している。下位を中心に踏込みの可能性がある凹凸が認められた。層厚は10cmである。遺物は出土しなかったが、周辺の調査との対比から弥生時代後期～古墳時代前期に相当する層準の可能性がある。

第9層：一部を確認したのみであるが、上方に細粒化する堆積層で3層に細分した。第9a層は灰色（10Y4/1）シルトからなり、わずかに暗色化する。層厚は10cmである。第9b層は灰色（10Y4/1）シル

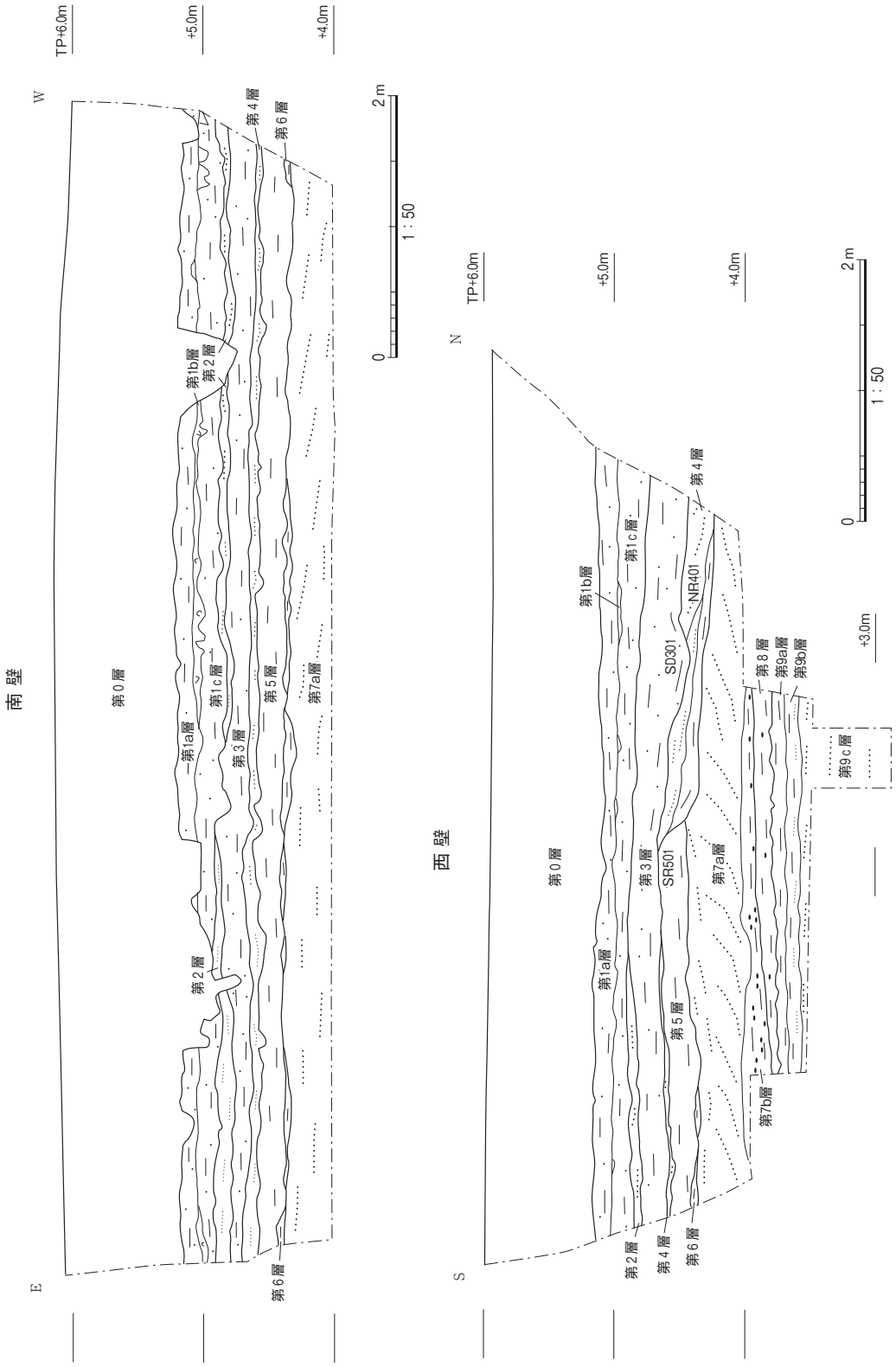


図４　地層断面図

ト～細粒砂質シルトからなり、層厚は10cmである。第9c層は灰色(5Y4/1)粗粒砂で、層厚は65cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物(図５・６、図版)

第６層上面より下位では、遺構・遺物ともに確認できなかった。第８層は周辺で確認されている弥

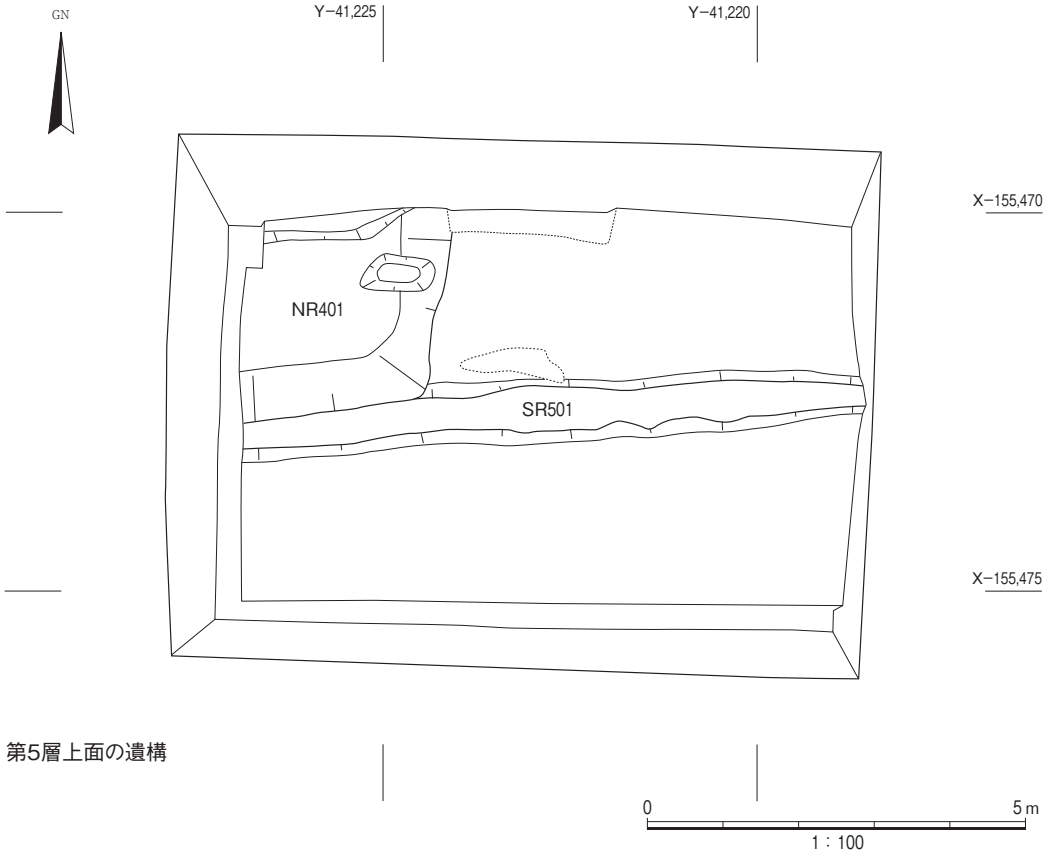

GN
Y−41,225
Y−41,220
X−155,470
X−155,475
NR401
SR501
第5層上面の遺構
0
5m
1：100
GN
Y−41,225
Y−41,220
X−155,470
X−155,475
SD301
SD302
SD303
第3層下面の遺構
0
5m
1：100

図５　遺構平面図

生時代後期～古墳時代前期の包含層に対比される可能性が高いが、遺構が検出される地域の標高は時期が不明な南東のUR81－３次調査を含めTP+4mより上位にあるのに対して、今回の調査地ではTP+3.8mとやや低く、また湿地状の堆積であった。北西のUR81－５次調査では沼状の堆積物であったことを合わせると、本調査地から北側には周囲より低い地形が存在していたと考えられる。

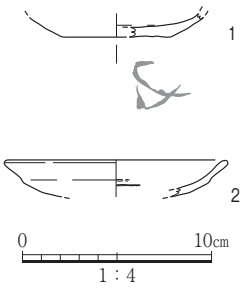


図６　出土遺物実測図
第５層（１）、SD303（２）

第５層上面では畦畔、ヒトおよび偶蹄類の踏込みのほか、自然流路を検出した。

SR501　調査地中央で検出した東西方向の畦畔である。幅は0.5～0.8mで高さは５㎝未満と低い。

NR401　調査地西北端で検出した自然流路である。第５層の水田を壊し、オーバーフローした堆積物は第４層として第５層の作土層を覆っている。一部を検出したのみであるが、本流は北側にあると推測できる。

第５層からは土師器・須恵器・瓦器細片が少量出土した。１は火襷の痕跡がある平坦な底部の須恵器杯である。古代のものであるが、細片のため詳細は不明である。時期を決するだけの遺物はないが、瓦器を含むことから第５層の水田の年代は中世と考えられる。

第４層上面では、第３層下面の遺構として溝を検出した。

SD301　調査区北側で検出した幅2.6m以上、深さ0.2m未満の東西方向の溝で、北へ段状に下がる。遺物は出土しなかった。

SD302　幅0.6～1.2m、深さ0.1m未満の東西方向の溝である。土師器・瓦器・肥前陶器・産地不明陶器片が少量出土した。図化できなかったが、肥前陶器片は17世紀前半の特徴がある。

SD303　幅1.1m以上、深さ0.1m未満の東西方向の溝である。土師器・瓦器細片が出土した。このうち２は13世紀代の瓦器皿であるが、遺構の時期を示すものではない。

これらの溝は不整形で、埋土が作土層である第３層であることから、単独で機能した溝ではなく、耕起の際に小溝が重なり合って生じた窪みと考えられる。第３層の時期は出土遺物から17世紀前半に年代の一端がある。

３）まとめ

今回の調査では中世の畦畔・作土層および近世の作土層を検出し、中世以降は耕作域として利用されていることが判明した。古代以前については遺物もなく不明であるが、周辺で遺構群が検出されている弥生時代後期～古墳時代前期の時期には、本調査地が居住に不向きな低地に位置していた可能性を指摘できた。

瓜破北遺跡では、東部および西部において近年調査例が増加したが、本調査地周辺では瓜破北遺跡調査当初の例が多く、また、北側では調査が及んでいない。最新の知見にもとづく今後の調査の蓄積によって、調査地周辺の様相はより明らかになるであろう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1980、『瓜破北遺跡』

大阪市文化財協会2009、『瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅴ』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983a、「瓜破北遺跡(UR81－3次)発掘調査概報」:『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.83－88

1983b、「瓜破北遺跡(UR81－5次)発掘調査概報」:『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.89－92

第 2 部

本庄東遺跡発掘調査（SHH17－1）報告書

調 査 箇 所	北区本庄東二丁目7－10・7－11
調 査 面 積	9㎡
調 査 期 間	平成29年9月28日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本庄東遺跡は弥生時代の集落にかかわる遺跡で、本調査地はその南よりに位置している。周辺では弥生時代から中世にかけての各時代の調査成果が得られている。敷地内の南西寄りで東西・南北3ｍ角の調査区を設けて作業を行い（図1・2）、調査区東部での部分的な深掘りも含め現地表下約2.3ｍまでの地層を確認した（図3・4）。

〈調査の結果〉

1．層序(図3・図版1)

現地表下0.4～0.5ｍまでは近現代の盛土で、1.0ｍ前後までが近世以降の堆積とみられ、灰色シルト質砂（第１層）、黄褐色シルト質砂（第２層）、黄褐色砂（第３層）などからなり、盛土および耕作土である。その下に部分的に水成の黄褐色砂（第４層）があった。その下位に灰色シルト質砂（第５層）があって中世の耕作土の可能性がある。その下に灰～黒色シルト～砂（第６層）があり、堆積が乱れるものの、主に植物その他の活動による擾乱とみられた。1.4ｍ前後以下は黄～黄白砂～砂礫層で地山である（第７層）。2.3ｍ程度まで確認しており、同様な砂礫が続いていた。

2．遺構と遺物(図4・図版1・2)

平面的な検出作業は第５層の上・下面、および第７層の上面で主に行った。第７層の上面では直径10㎝前後の小穴SX01群が認められたが、人為的なものではないようである。第５層の下面では小さな凹凸が確認され、耕作等に伴う可能性がある。また、第５層の上面では近世以降の廃棄に伴う

図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

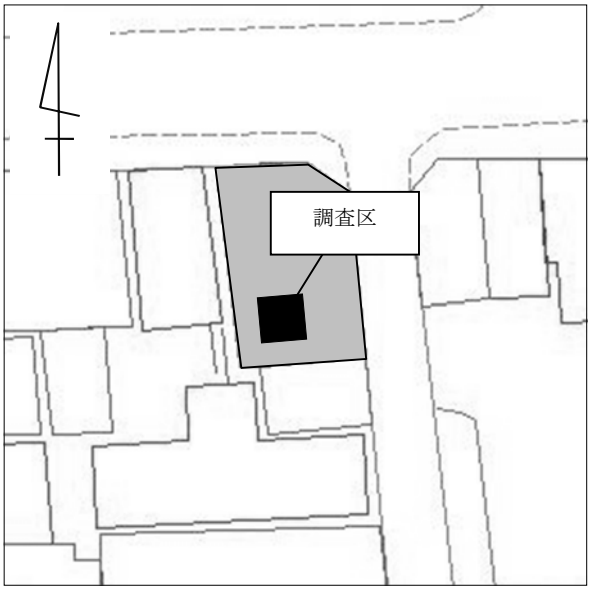


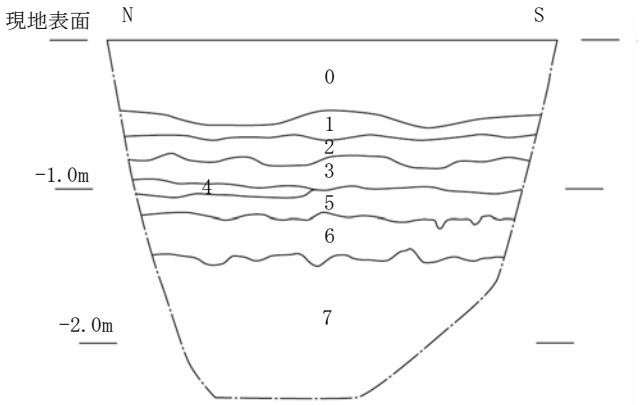
図２　調査区配置図　縮尺1:500

落込みがSK02・03があった。

遺物では第５層から瓦器が、第３層からは肥前陶器や肥前染付磁器など、SK03から肥前染付磁器などが出土している。

〈まとめ〉

本調査地では現地表下1.4m前後以下で自然堆積のベースである第７層が確認された。その後に陸化し、活用が始まっていた。遅くとも中世以降に土地利用が本格化したようで、中世以降の土器・陶磁器類が出土している。耕作に主に用いられたようだが、近世あるいは近代に宅地等に変化したようである。本調査では弥生時代などの古くさかのぼる遺構・遺物は認められなかったものの、土地利用の変遷などについて基本的な成果を得ることができた。



0：現代表土・近現代盛土
1：褐灰色シルト質砂（第１層　近世以降の盛土か）
2：灰～黄褐色砂（第２層　近世以降盛土か）
3：黄褐色砂（第３層　近世以降耕作土か）
4：黄褐～赤褐色砂（第４層　水成層）
5：灰色シルト質砂（第５層　中世の堆積か）
6：灰～黒色砂～シルト（第６層　植物等の擾乱あり）
7：黄～灰白色砂礫（第７層　自然堆積・地山）

図３　　東壁地層断面図

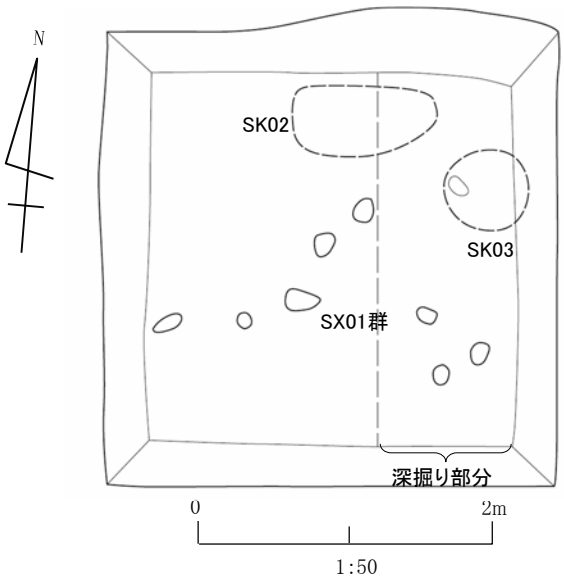


図４　　遺構平面図
（第７層上面および第５層上面の状況を図示）

天満本願寺跡発掘調査（STN17－1）報告書

調 査 箇 所	大阪市北区天満一丁目35-1・36-1
調 査 面 積	8.4㎡
調 査 期 間	平成29年7月28日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、櫻井 久之

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は当遺跡の中央部やや西寄りに位置している(図１)。敷地の北辺中央に調査区を設定し、重機により上掘りを進めたところ、調査区の北辺・南辺に沿って大規模な攪乱があることがわかった。そのため調査区の形状を東西方向に若干長い、東西3.0m、南北2.8mとした(図２)。今回の調査では地表下1.5m前後にある遺構面を調査対象としたため、地表下1.52mに確認された灰黄色粘土層(第３層)の盛土上面において遺構検出を行った。

〈調査の結果〉

1. 層序と遺物（図３・図版１上）

調査区の西壁に沿って幅0.4mのトレンチを入れ、地表下2.2mまでの地層を観察した。その結果、現代の盛土が約80㎝の厚さを持ち、その下に２枚の近世盛土(第１・２層)、そして第２層上面から掘込まれる溝とみられる遺構が断面に確認された。続く第３層も近世の盛土層で、灰黄色粘土を主体とするものだが、調査区北寄りでは灰黄色細粒砂となる。また、暗灰色シルト質粘土の偽礫が帯状に分布する部分もあり、調査の過程で一時、溝と誤認した。第３層からは18世紀代の陶磁器が多く出土した(図版２下)。第４層は暗灰色シルト質粘土層で層厚40㎝あり、層相より作土と思われる。第５層は暗緑灰色砂質シルト層で、やや堅く締まる。第４・５層から遺物の出土はない。

2. 遺構（図４・図版１・２）

遺構としては、西壁断面に見られた第２層上面の溝と思われるもの、第３層上面で面的に検出した土壙SK01、小穴SP01～06がある。このうちSK01は第２層内の遺構で、埋土中に炭化物が多く含まれていた。検出面からの深さは約10㎝である。SP01～06は一辺10～20㎝の方形プランの小穴で、黄

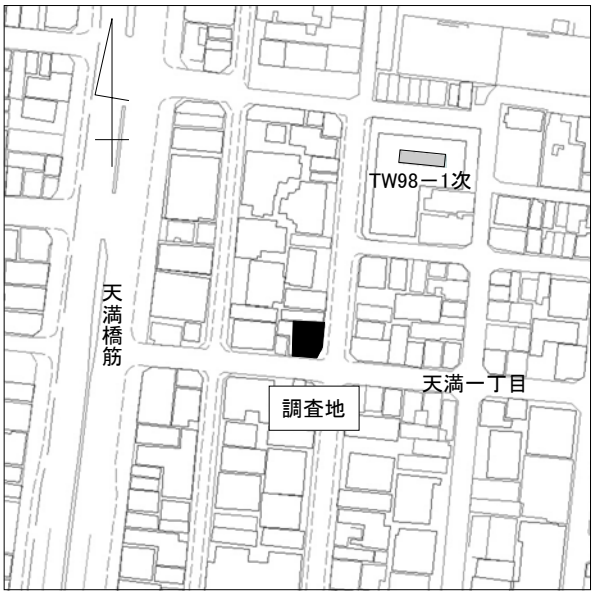


図１　調査地位置図　縮尺1:2,000

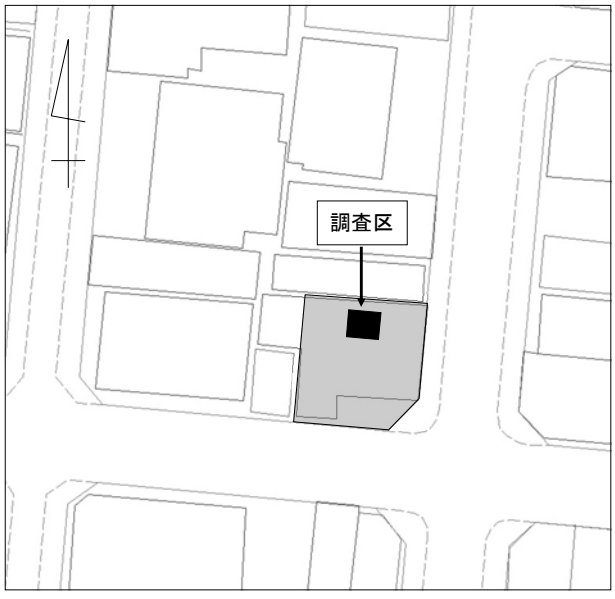


図２　調査区配置図　縮尺1:500

灰色砂質シルトを埋土とする。深さは20～30㎝ある。調査区が狭小なうえ、調査区の北と南側に攪乱があったため、これらの小穴が何の目的で造られたものかは明らかでない。

〈まとめ〉

今回の調査では地表下約1.5ｍの第３層上面に18世紀代の生活面を確認した。本調査地の北50ｍにあるTW98-1次調査地(図１)では、地表下約1.0ｍに18世紀前葉を下らないと判断された地層が見られることからすると、当該調査地周辺は北から南へ向けてわずかに低くなる立地となっていた可能性が考えられる。

〈参考文献〉

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、「学校法人福田学園による建設工事に伴う確認調査（TW98－1）」『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 25-30

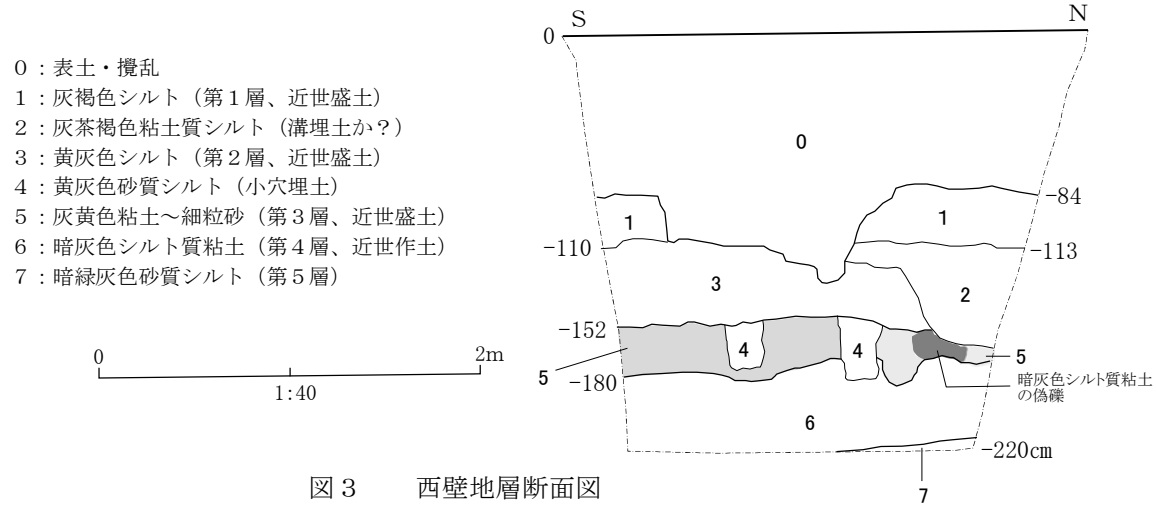


図３　　西壁地層断面図

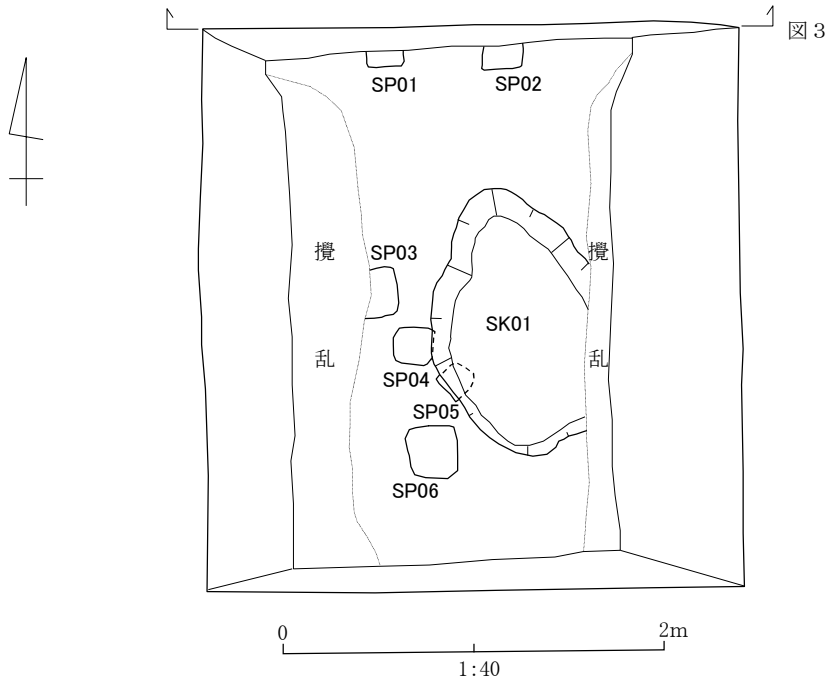


図４　　遺構平面図

大坂城跡発掘調査（SOS17－1）報告書

調 査 箇 所	大阪市中央区北新町1-25
調 査 面 積	12㎡
調 査 期 間	平成29年9月28日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、櫻井 久之

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は谷町筋の西側に位置し、上町台地の西斜面部にある（図１）。また、埋没谷の存在が推定されている南の本町通方向に向かっても緩やかに低くなる地形にある。南北方向に長い長方形の敷地東寄り中央に南北4.0m、東西3.0mの調査区を設けた（図２）。重機を用いて表土掘削を開始したが、地表下１m程度まで地盤改良されており掘削は難航した。また、地表下２m前後まで攪乱されていた。深部の地層の状況を把握するため、調査区の北壁側を地表下2.8m程度までトレンチ状に掘下げたところ、壁面からの湧水が激しくなり、調査区の平面的な調査が困難な状態となった。そのため今回の調査では、北壁断面の観察、断面からの遺物採集が主となった。

〈調査の結果〉

層序と遺物（図３、図版１・２）

調査区北壁では、攪乱層の下に第１層の整地層が見られる。これは地山層を用いたもので、直径数㎝の黄色粘土・灰黄色粘土質シルトの偽礫による第１a層、黄褐色粗粒砂による第１b層に分かれる。近世の瓦・土師器を若干ながら含んでいた。層厚１m以上あり、大規模な整地層である。調査では当層上面で一旦精査したが遺構は確認できなかった（図版１上）。

第２層は灰褐色粘土質シルトで、第１層に覆われる直前の生活面であった。焼土・炭化物等を多く含み、層厚は約10㎝ある。図版２の土師器2～4、備前擂鉢5、須恵器6が出土した。2・3は小皿、4は側面に８弁の花文が数箇所にスタンプされており、香炉であろう。これらに加えて藁苞・竹木舞の痕跡の見られる焼け壁が多く出土した（図版２下段）。これらの遺物よりこの地層は大坂ノ陣に

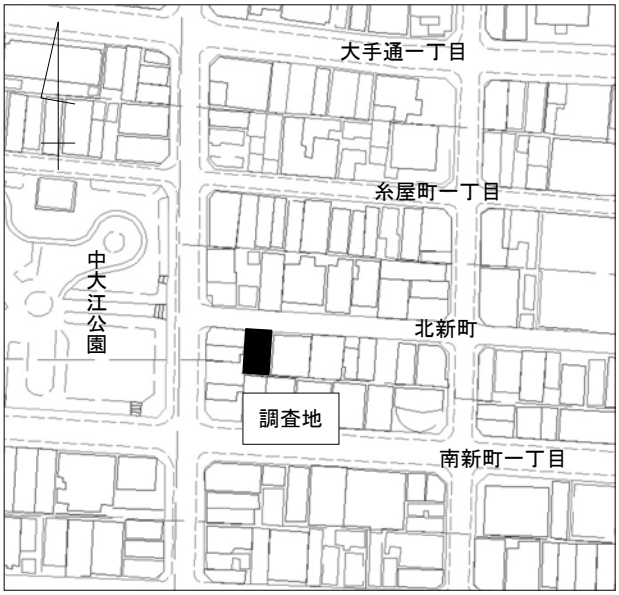


図１　調査地位置図　縮尺1:2,000

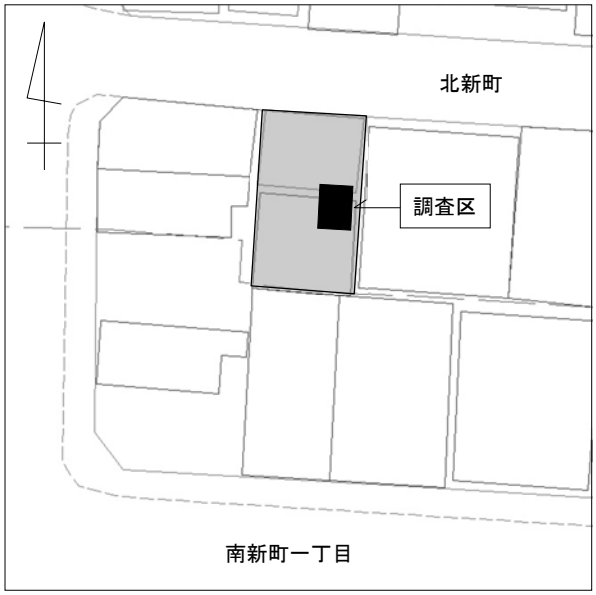


図２　調査区配置図　縮尺1:800

関係する地層と考えられる。

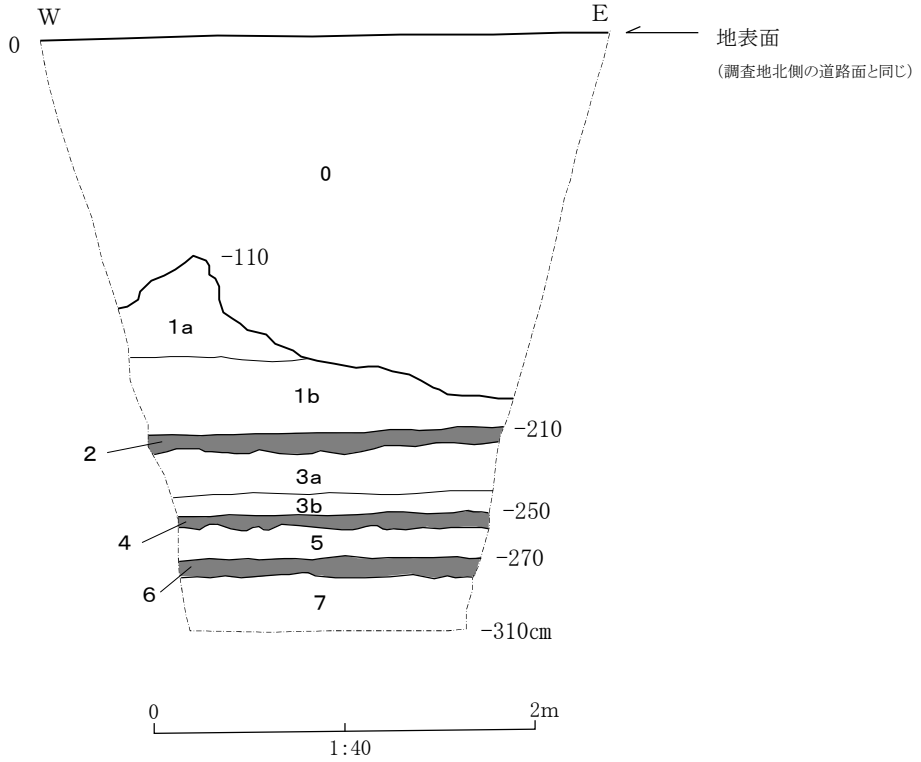
第３層は整地層で、第3ａ層の灰白色細粒砂、第3b層の灰白色粘土に分かれる。層厚約30㎝ある。

第４層は灰褐色シルト質粘土で、上面が生活面となる。図版２の土師器1が出土した。地層は厚いところで10㎝ある。第５層は灰黄色中粒砂でシルト偽礫を多く含み、整地層とみられる。層厚は20㎝ある。第６層は粗粒砂含みの灰色粘土質シルト層で、ある時期の生活面となっていたと思われるが、湧水のため十分な観察ができなかった。層厚は約10㎝である。第７層は黄灰色極細粒砂層で、締りがわるい。台地斜面部の自然堆積の可能性が考えられる。

第７層を30㎝掘下げたところで地表面から3.1ｍに達した。しかし、それまでの範囲には地山層（段丘構成層）は確認できなかった。

〈まとめ〉

今回の調査では地表下約2.1ｍに大坂ノ陣に関係するとみられる第２層を確認することができた。その上面を覆う第１層は、地山層のみを用いた厚さ１ｍ以上になるものであった。大坂ノ陣の痕跡を地下に封じ、新しい都市づくりを行うための大規模かつ計画的な整地事業であったことを窺うことができる。



第０層：攪乱
第1a層：黄色粘土・灰黄色粘土質シルト偽礫（整地層）
第1b層：黄褐色粗粒砂（整地層）
第２層：灰褐色粘土質シルト（焼土・炭化物多く含む）
第3a層：灰白色細粒砂（整地層）
第3b層：灰白色粘土（整地層）
第４層：灰褐色シルト質粘土
第５層：灰黄色中粒砂（整地層、数センチのシルト偽礫含む）
第６層：灰色粘土質シルト（粗粒砂含む）
第７層：黄灰色細粒砂（自然堆積？　締りわるい）

図３　　調査区 北壁地層断面図

大坂城跡発掘調査（SOS17－2）報告書

調 査 箇 所	中央区鎗屋町二丁目45
調 査 面 積	15㎡
調 査 期 間	平成29年10月24日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は大坂城跡の西寄りに位置し、周辺では主に古代から近世にかけての遺構や遺物が確認されている地域である。敷地南よりで東西3m・南北5mの調査区を設けて作業を行った（図1・2）。南北6mの予定であったが、調査区北側で大規模な攪乱があったため、短く変更しての調査となった（図3・4）。遺構内などで現地表下1.5m程度までの状況を確認した。

〈調査の結果〉

1．層序(図3・図版1)

地層では現地表下0.5～0.6mまで近現代の盛土である。0.5～1.2m付近まで灰～褐色砂からなる近世の整地層が複数あった（第１～３層）。その下に部分的に褐灰色シルトなどの地層があり、中世以前の可能性がある（第４層）。それらの下に自然堆積の灰白～黄白色砂があって地山である（第５層）。地山は調査区南よりでは0.8～0.9mで、北部では1.4m以下で確認され、北側へと下る地形となっており、周辺の調査での知見に沿った状況である。

2．遺構と遺物(図4・図版1・2)

平面的な検出作業は第４層上面と第５層地山層の上面で行った。検出遺構は中世あるいは近世初頭以前の可能性があるものとそれ以降とに大別できる。先行する可能性があるものには部分的な検出であるがSX01・02があって、遺物のてがかりはないものの、埋土の状況からさかのぼる可能性がある。それ以外は18世紀以降を主とする近世のものである。井戸の可能性のあるSE03や廃棄に伴う

図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

図２　調査区配置図　縮尺1:500

SK04～13などに加え、礎石14があった。調査区は敷地南側の鎗屋町通に近い側だが、廃棄等に伴う範囲となっていた時期があるようである。

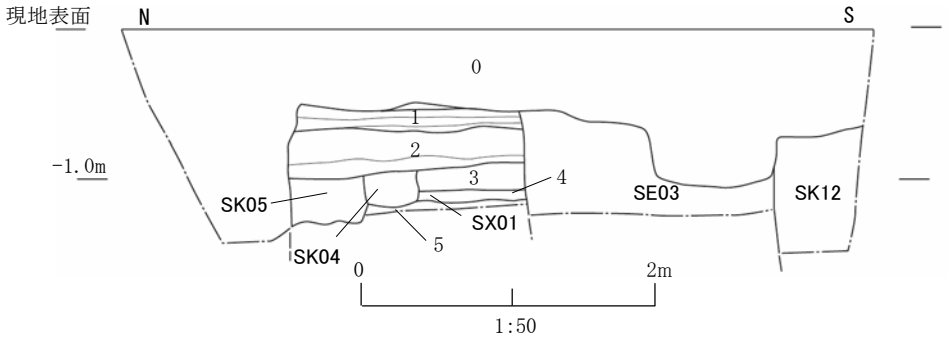
遺物では各地層や近世の廃棄土壙などから陶磁器・土器類や瓦などが出土している。

〈まとめ〉

本調査地では地山面で南から北へと下る地形が確認され、近世以降には整地が繰り返されていた。中世以前あるいは豊臣～徳川初期については十分明らかにできなかったが、遅くとも17世紀後半かそれ以降には廃棄土壙などが多数形成されており、活発に利用されていた状況が確認された。一帯の歴史的変遷にかかわる基礎的な資料を得ることができた。

<参考文献>

大阪市文化財協会2003『大坂城跡』VII



0：現代表土・近現代盛土
1：灰～褐灰色シルト質砂（第１層　近世整地）
2：褐色シルト質砂～黄色砂（第２層　近世整地）
3：灰～暗灰色砂（第３層　近世整地）
4：褐灰色砂質シルト（第４層　中世堆積か）
5：灰白～黄白色砂（第５層　地山）

図３　　東壁地層断面図

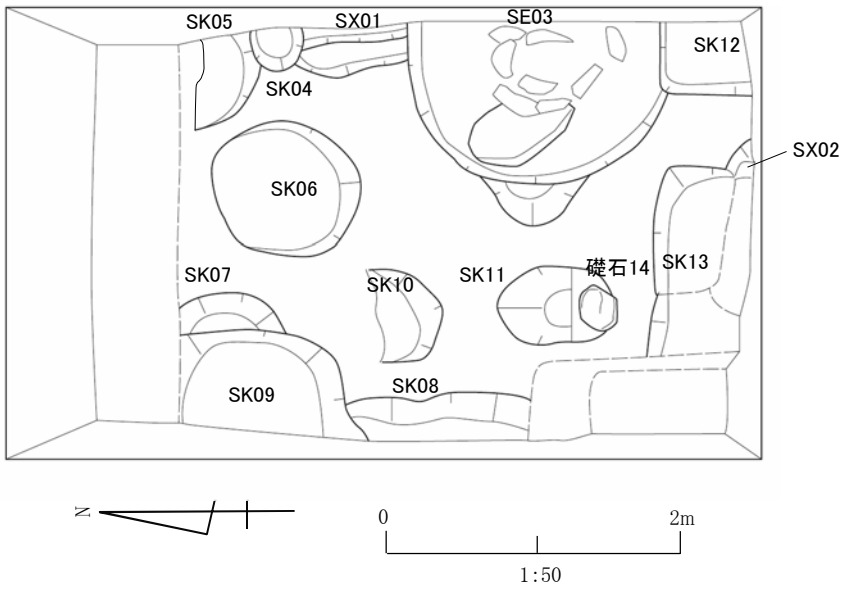


図４　　遺構平面図

島之内２丁目所在遺跡発掘調査（SSI17－1）報告書

調 査 箇 所	大阪市中央区島之内二丁目28-5　他4筆
調 査 面 積	16㎡
調 査 期 間	平成29年12月20日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、櫻井 久之

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は中世・近世の集落跡として知られる当遺跡の南東部に位置している(図１)。この場所から南へ約50ｍで道頓堀川、東へ約150ｍで東横堀川に至る。どちらの堀川も豊臣期に開削され、道頓堀川は大坂の陣後の元和元（1615）年に完成した。

調査地の敷地は奥が北側へ東西約15ｍ、南北約７ｍの広さで張出しており、その部分に東西4.0ｍ、南北4.0ｍの調査区を設けた(図２)。

〈調査の結果〉

1. 層序と遺物（図３、図版１・２）

調査区北壁断面（図３上）に基づいて地層の状況を説明すると、まず地表面を覆う厚さ15㎝の砕石（第０層）下に、炭・焼土を多く含む整地層（第１層）、暗灰褐色シルト（第２層）がある。第２層上面に密着して炭化板材が見られ、同層上面が第２次大戦時の罹災面と考えられる。第２層下には江戸時代末頃の火事後整理に伴う土壙SK01・02、深さ80㎝以上の垂直な壁面をもつ土壙SK03がある。続く第３層は褐灰色シルト、第４層は灰黄色極細粒砂で、ともに整地層である。第３層から図版２下1の染付碗が出土していることから、これらに覆われた第５層上面は江戸時代中頃の生活面と考えられる。第６層は淡緑灰色極細粒砂～シルトで、50㎝の層厚をもつ整地層、第７層は灰色粗粒砂混じり粘土で、層厚10㎝程度あり、上面が江戸時代初め頃の生活面と推測される。第７層を除

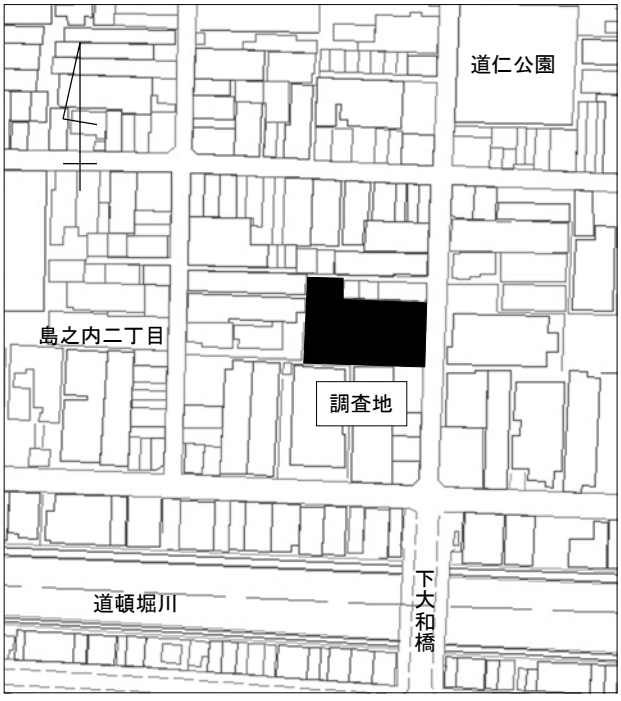


図１　調査地位置図　縮尺1:2,500

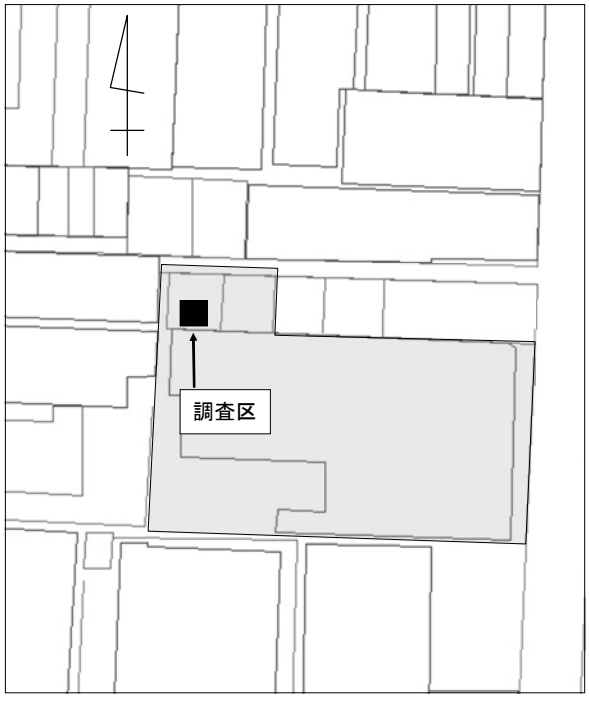


図２　調査区配置図　縮尺1:800

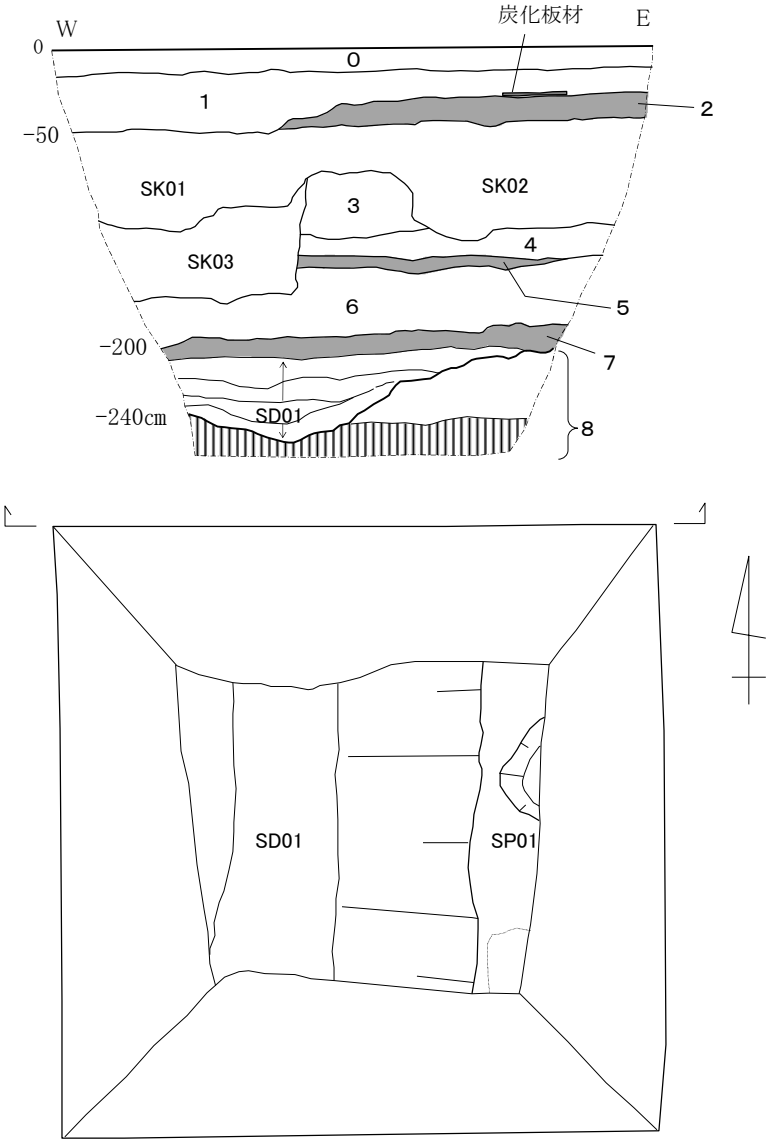
去すると、調査区東側にはこの付近一帯のベースとなる自然堆積層である第８層が現れ、西側には溝SD01の埋土が分布する。第８層は上方の40㎝までが灰黄色細粒砂、それ以深が褐灰色粗粒～極粗粒砂となり、ラミナが観察される。

2．遺構と遺物（図３・図版１・２）

第７層の基底面に溝SD01、小穴SP01を検出した。溝SD01は南北方向をとり、深さ0.6m、幅が推定で2.5mある。溝内には水成の粘土・細粒砂が交互に堆積し、水路として一定期間機能していたことが推測される。埋土最上部より出土した唐津焼碗（図版２下5・6）から17世紀前葉の遺構である。小穴SP01は調査区東壁内に及んでいるため全体の規模は不明である。埋土は黒色砂質シルト、深さは0.12mである。遺物は出土していない。

〈まとめ〉

今回の調査で検出した溝SD01は、出土遺物より道頓堀が開削された慶長17（1612）年～元和元（1615）年と重なる時期の遺構と考えられる。この溝の先がどこまで延びていたかは不明であるが、水路として機能していたことを考えるならば、道頓堀まで延び、この堀川とともに一帯の造成に関係していた溝ではないかと思われ、島之内の開発を知る上で貴重な成果を得ることができた。



第０層：表土（砕石）
第１層：暗褐色シルト、整地層
　　炭・焼土多く含む
第２層：暗灰褐色シルト
第３層：褐灰色シルト、整地層
第４層：灰黄色極細粒砂、整地層
第５層：暗灰色砂質シルト
第６層：淡緑灰色極細粒砂～シルト、
　　整地層
第７層：灰色粗粒砂混じり粘土
第８層：灰黄色細粒砂、
　　褐灰色粗粒～極粗粒砂

SK01・02：灰褐色砂質シルト、
　　火事後整理の土壙
SK03：褐灰色シルト
SD01：灰色粘土と細粒砂の互層

図３　調査区平面・断面図

上本町遺跡発掘調査（SUH17－2）報告書

調 査 箇 所　　大阪市中央区中寺一丁目23

調 査 面 積　　１２㎡

調 査 期 間　　平成29年5月31日

調 査 担 当 者　　課長　植木 久、櫻井 久之

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は当遺跡の北端にあり、大坂城跡の南端である惣構南堀に近い場所でもある。付近では図１に示すUN06－3次調査が行われている。今回は慶長元（1596）年創建と伝える妙壽寺の境内における建築工事に伴い調査を行った。調査区は建物予定地の北東隅に東西4.0m、南北3.0mで設定し(図2)、現地表面から1.6mまでの深度の発掘調査を行い、一部を2.4mまで掘下げ地層確認を行った。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

地層は第０～６層に大別され、第０層（層厚30㎝）が現代盛土・攪乱、第１層（層厚10㎝）が近世盛土、第２層（層厚20㎝）が近世盛土で、第２層の上面を焼土層が覆う。続く第３層（層厚20㎝）が地山起源の偽礫を主体とする盛土、第４層（層厚50㎝）も地山層偽礫を含む盛土であるが、こちらは2.5倍の厚さがあり、ブロックが数㎝大でこなれている。第４層上面には後述する井戸（SE01）がある。井戸の遺物から豊臣後期の盛土であると考えられる。第５層（層厚25㎝）は暗青灰色粘土層で、水田耕作土とみられる。第６層（層厚80㎝以上）は褐色粗粒砂混粘土質シルト層で、非常に堅く締まっている。古代～中世の土器・陶磁器・瓦の小片を多く含んでいた。調査区東壁側にトレンチを入れ、その北端を深掘りしたが地山層である段丘構成層には達しなかった。

2. 遺構と遺物(図4・図版1～3)

遺構としては、第４層上面の井戸SE01がある。直径1.0m、深さ1.0m以上あり、底まで完掘する

図１　調査地位置図　縮尺1:2,000

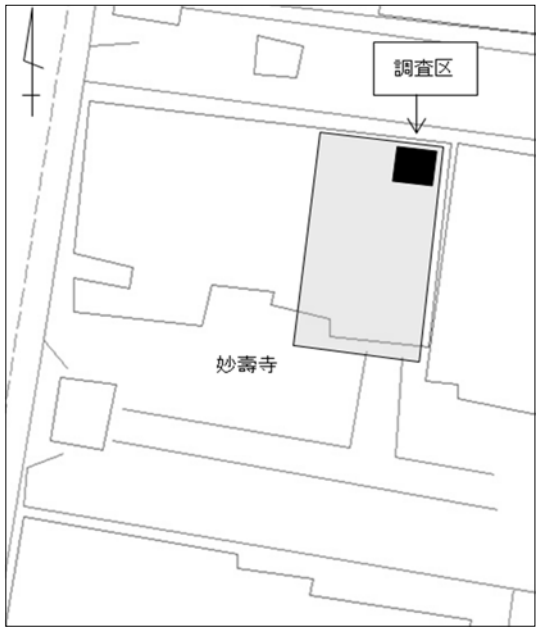


図２　調査区配置図　縮尺1:500

ことはできなかったが、調査した範囲には井戸側の痕跡はなかった。上面から50㎝下がったところから豊臣後期の唐津向付・丹波擂鉢・土師器焼塩壺等がまとまって出土した。このことから、この第４層は文禄３（1594）年の惣構工事の際に掘り上げた土砂による盛土に当たると推測される。

〈まとめ〉

今回の調査では、中世に谷地形を埋め立てて水田を営み、豊臣期に屋敷地となる変遷が窺えた。第４層の上面が妙壽寺の創建時の地面となったものと思われる。この谷地形はUH06－3次調査で確認された「池状の落込みSX19」と一連のものと推測される。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「上本町北遺跡発掘調査（UN06－3）報告書」『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

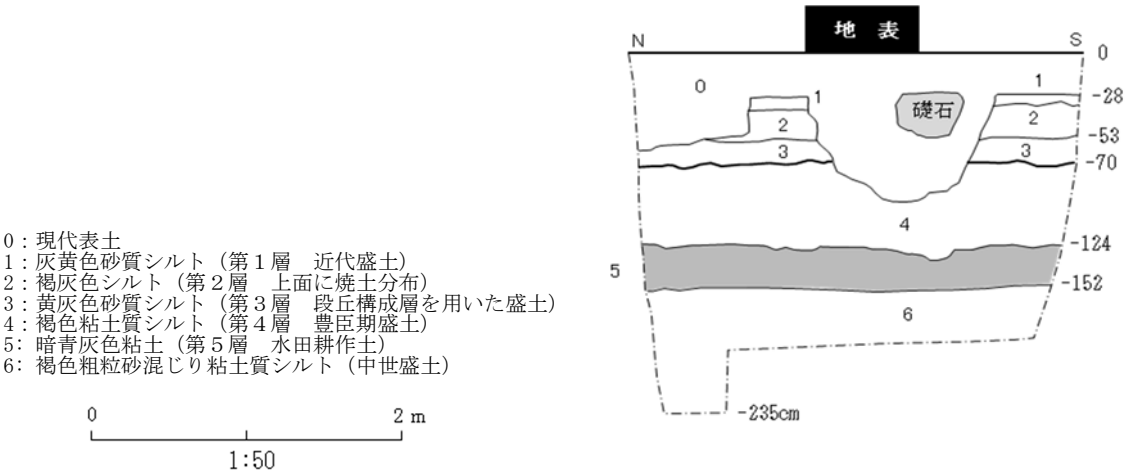


図３　　東壁地層断面図

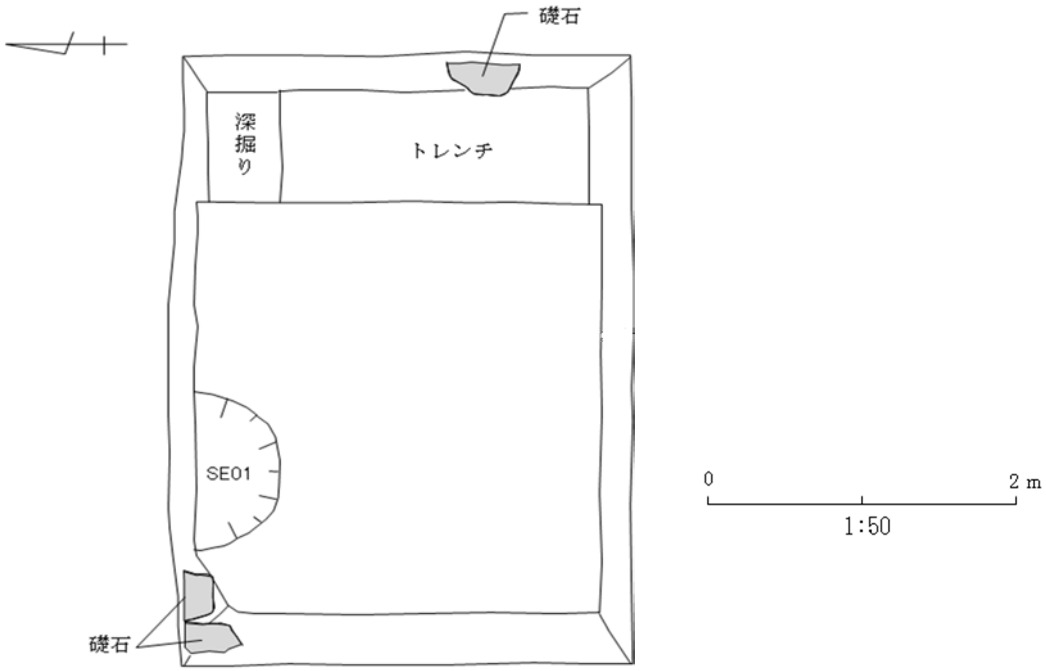


図４　　遺構平面図

上本町遺跡発掘調査（SUH17－3）報告書

調 査 箇 所	中央区東平一丁目３－５
調 査 面 積	12.5㎡
調 査 期 間	平成29年７月28日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

上本町遺跡は弥生時代から近世にかけての集落にかかわる遺跡で、本調査地はその北よりに位置する。古代から近世にかけての遺構・遺物が多数確認されている地域である。敷地内の西よりの位置で南北2.5m、東西5mの調査区を設けて調査を行った。東西の長さは当初7mの予定だったが、調査地の状況などから少し短くしての調査となった。また、北側では攪乱が深くまで及ぶ部分もあり、検出作業や主な観察は南側で行った（図1・2）。調査区西端で行った深掘り部での確認なども含め現地表下約1.2mまでの地層を確認した（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

地層では、現地表下0.5～0.6mまでは近現代の盛土である。その下に漆喰や褐色シルト質砂などからなる整地層があり、近世以降とみられる（第１層）。その下位に褐色粘土質シルトから砂質シルトがあり、近世以前とみられる（第２層）。現地表下0.7～0.8mで黄～橙色シルト～粗粒砂があって、地山である（第３層）。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

主な遺構は第３層の地山上面で検出作業を行い、小穴SP01・02や不定形な落込みSX03～08がある。調査区の南側でSP01・02があり、一部の確認のため性格は不明で、近世の可能性がある。また落込みではSX03～08があった。このうち南壁壁面で主に確認したSX08では地山の粘土偽礫が含まれ、土採りに伴って形成された可能性がある。

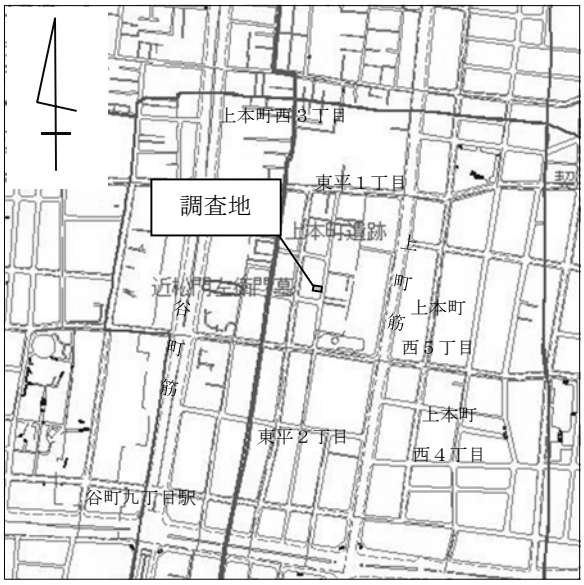


図１　調査地位置図　縮尺1:10,000

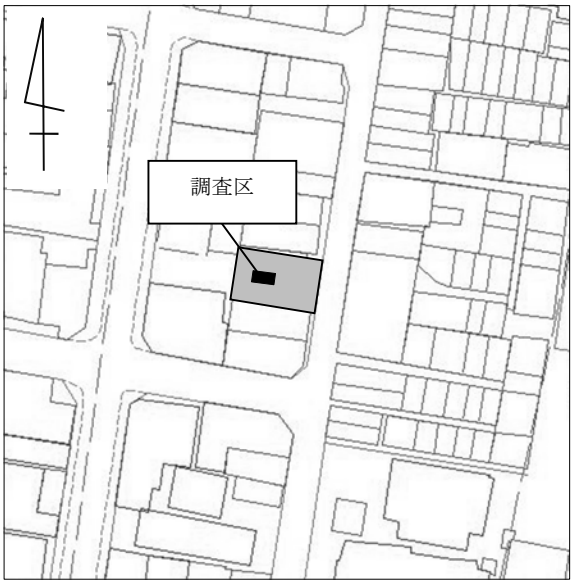
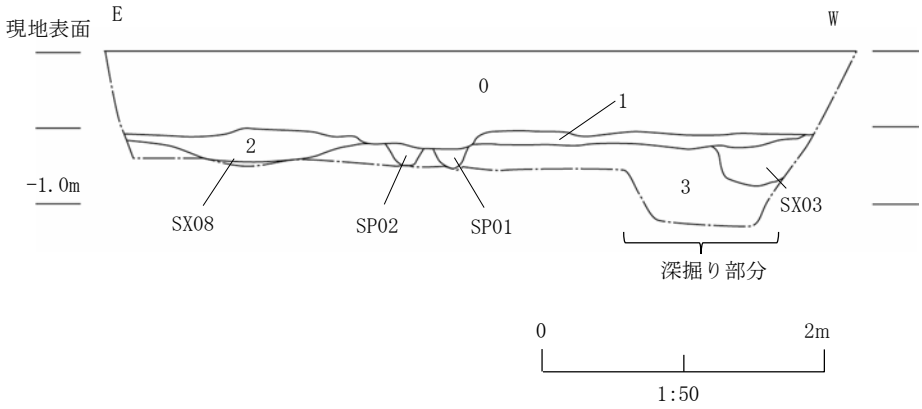


図２　調査区配置図　縮尺1:1,000

遺物は検出した各遺構から出土したものがある。SX03では須恵器や瓦、SX06では土師器が出土した。SX04では土師器や中国産青花碗、肥前陶器、瓦等があり、近世初頭頃の可能性がある。

〈まとめ〉

本調査地では調査区北側での攪乱はあったものの、南半では近現代の盛土以下に地層が良好に遺存していた。地山上面では落込みなどいくつかの遺構が確認でき、近世初頭や中世以前などの遺物が出土した。周辺で見つかっている古代の建物跡などの遺構は確認できなかったものの、中世あるいは近世以降の土地利用の状況をうかがうことができ、調査地周辺の歴史の復元についての基礎的な資料を得ることができた。



0：現代表土・近現代盛土

1：漆喰片含む褐～黒色シルト質細粒砂（第１層　近世以降の整地層）

2：黄褐色シルト質細粒砂（第２層　近世あるいは中世堆積か）

3：黄色シルト質細粒砂～粗粒砂（第３層　自然堆積・地山）

図３　　南壁地層断面図

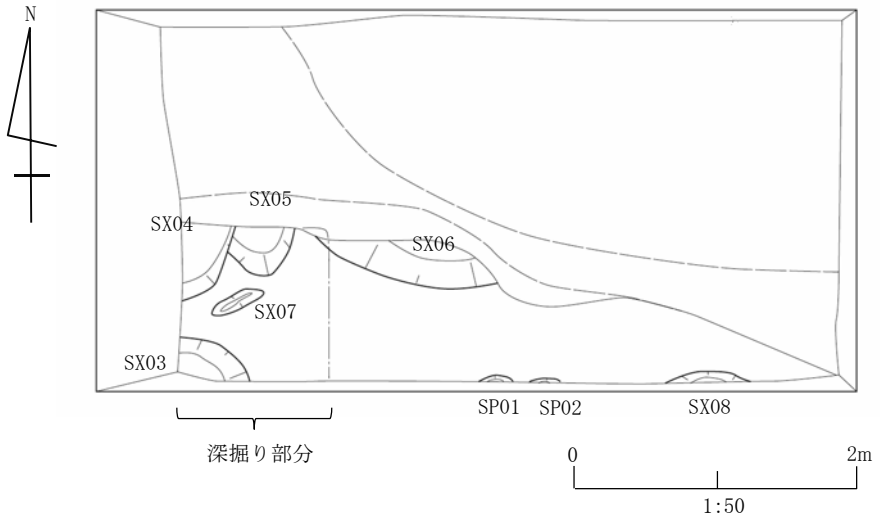


図４　　遺構平面図

難波京朱雀大路跡発掘調査（SNS17－1）報告書

調 査 箇 所	天王寺区勝山二丁目４７－１
調 査 面 積	6.25㎡
調 査 期 間	平成29年8月14日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

難波京朱雀大路跡は奈良時代の都城にかかわる遺跡で、本調査地はその南よりに位置する。周辺では古代から近世にかけて各時代の成果が得られている地域である。敷地内のほぼ中央の付近で東西・南北2.5ｍの調査区を設けて調査を行った（図1・2）。部分的な確認なども含め現地表下約1.4ｍまでの地層を確認した（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

調査区では南半に東西方向に延びる近現代の攪乱があり、南北幅約1.4～1.5m、現地表下1.4m前後まで掘り込まれていた。そのため主な検出作業等は北半や各壁面で行った。地層では現地表下0.4～0.6ｍまでは近現代の盛土（第０層）、その下に灰色砂質シルト（第１層）、黄褐色シルト質砂（第２層）があり、近世あるいは中世の地層の可能性がある。地表下0.6～0.7m以下で黄～黄白色シルト質砂～シルトがあり、自然堆積の地山層である（第３層）。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

主な遺構は第３層の地山上面で検出し、攪乱が及ばないところで落込みSX01～04が確認された。これらは埋土の特徴が第２層に類似している。これらからは遺物が少量出土しており、中世にさかのぼる可能性がある。いずれも部分的な確認で十分に性格を明らかにすることはできなかったが。定型的な柱穴や溝等ではないようである。

図１　調査地位置図　縮尺1:10,000

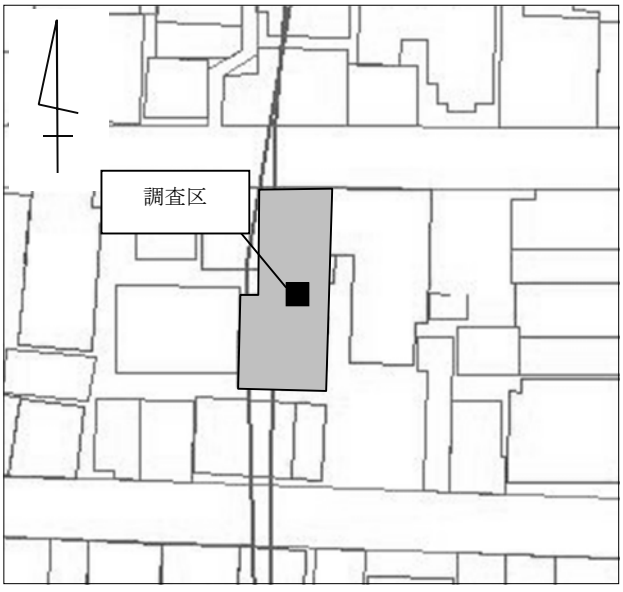
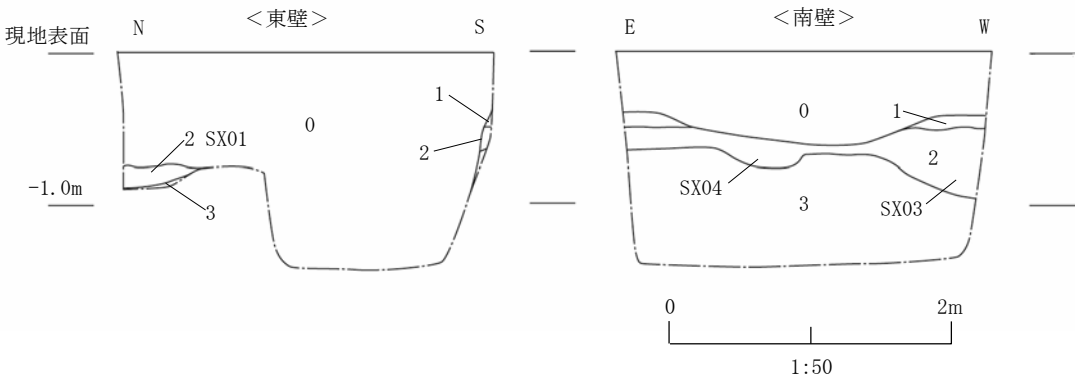


図２　調査区配置図　縮尺1:1,000

遺物は各遺構から出土したものがあり、SX01では土師器や須恵器、SX02では土師器など、SX03では土師器や瓦器片などがある。

〈まとめ〉

本調査地では調査区南半での攪乱はあったものの、地山上面で性格は不明ながら遺構が確認でき、中世以前にさかのぼる遺物が出土した。周辺で見つかっている古代にさかのぼる建物跡や溝などの遺構は確認できなかったものの、土地利用の状況をうかがうことができ、調査地周辺の歴史の復元についての基礎的な資料を得ることができた。



0：現代表土・近現代盛土

1：褐灰色砂質シルト（第１層　近世以降の地層か）

2：黄褐色砂質シルト（第２層　中世堆積か）

3：黄白～白色シルト質砂～シルト（第３層　自然堆積・地山）

図３　　南壁・東壁地層断面図

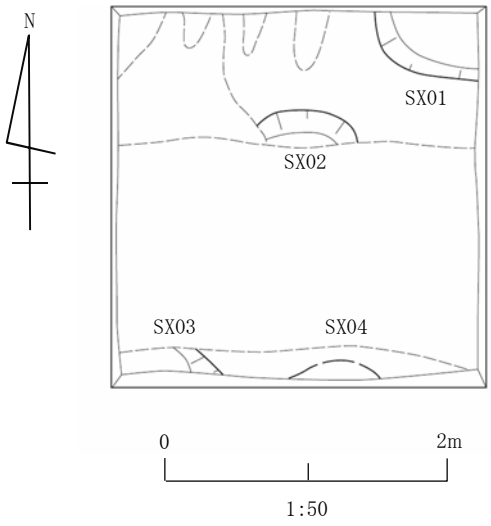


図４　　遺構平面図

伶人町遺跡発掘調査（SRJ17－1）報告書

調 査 箇 所　　大阪市天王寺区下寺町二丁目5-1・5-2

調 査 面 積　　９㎡

調 査 期 間　　平成29年4月25日

調 査 担 当 者　　課長　植木 久、櫻井 久之

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は当遺跡西端に位置し、上町台地西斜面を降りきった松屋町筋に面した場所にある(図1)。そして堺筋を渡った西側には下寺遺跡が存在するといった立地にある。敷地の北東隅部に東西3.0m、南北3.0mの調査区を設定し、現地表面から1.8mまでの深度の発掘調査を行い、一部を2.2mまで掘下げて地層の確認を行った（図2）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

地層の状況としては、まず現代表土・攪乱の下に第1層とした19世紀頃の整地層があり、その中に三和土打ちされた土間面が残っていた。続く第2層は近世耕作土(層厚30㎝)で、溝SD01の埋土上にのみ見られた。第3層は水成層(層厚50㎝以上)で、SD01の機能時堆積層である。染付や軟質施釉陶器が出土した。第4層は近世の耕作土(層厚30㎝)、第5層は中世の耕作土(層厚40㎝)、第6層は周辺での調査事例から中世でも鎌倉時代頃の耕作土(層厚10㎝)と考えられる。さらに続く第7層はそれまでとは層相を異にする黒色粘土層(層厚15㎝)で、出土遺物には古代の土師器片がある。浜堤の後背湿地に堆積したものであろう。第8層は海浜部の堆積砂(層厚40㎝)、第9層は堅く締まった粗粒砂～小礫(層厚40㎝以上)で、段丘構成層である。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

遺構としては、第4層上面の溝SD01がある。また、攪乱のため厳密な掘込み層面は確認できないが、この

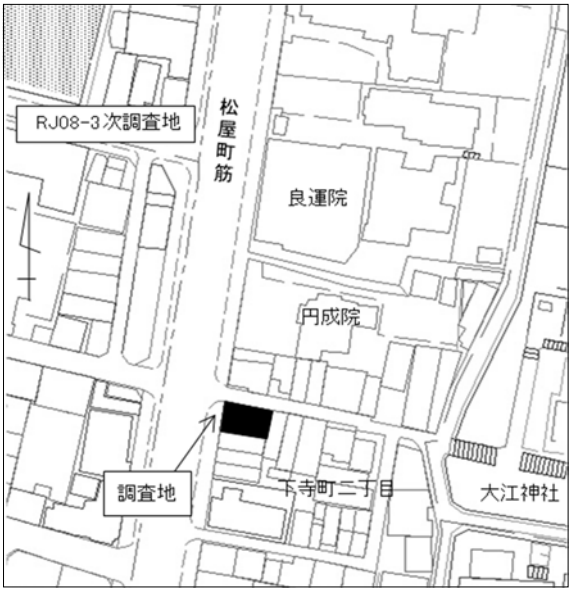


図１　調査地位置図　縮尺1:2,000

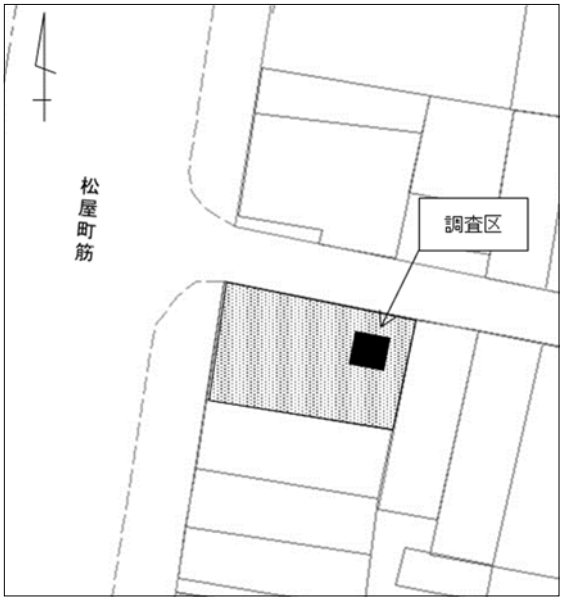
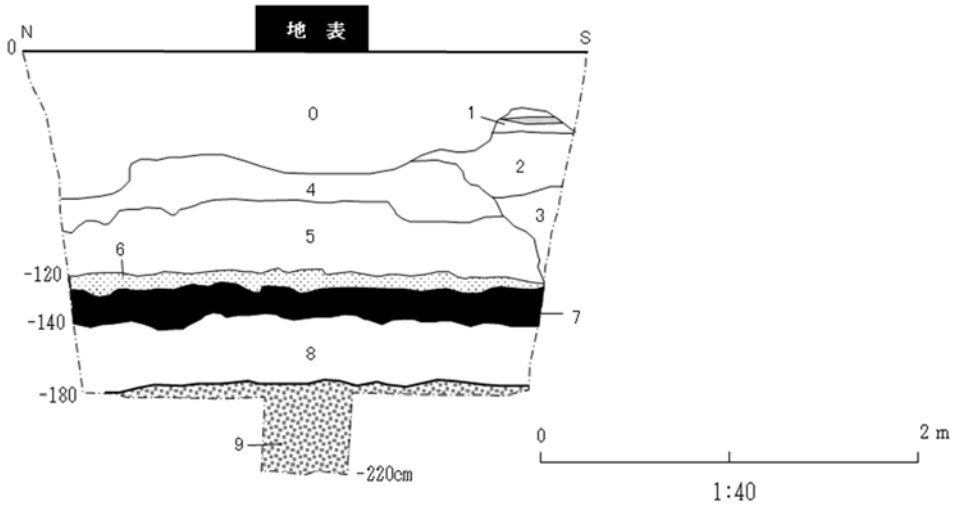


図２　調査区配置図　縮尺1:500

溝と同時期とみられる井戸SE01もあった。さらに第6層下面においては多数の耕作溝が検出された。

〈まとめ〉

今回の調査では地表下約1.25mに第7層とした古代の堆積層が確認された。この地層は今回の調査地の北西100mのRJ08-3次調査地（下寺遺跡）でも確認されており、下寺遺跡と共通する状況がうかがえた。



0：現代表土
1：褐灰色シルト質粘土（第１層　19世紀？整地層、三和土打ち土間面あり）
2：灰白色砂質シルト（第２層　近世耕作土）
3：灰白色細粒砂（第３層　水成層　SD01埋土）
4：茶褐色粘土質シルト（第４層　近世耕作土）
5：黄褐色シルト質粘土（第５層　中世耕作土）
6：褐灰色粗粒砂（第６層　中世耕作土）
7：黒色粘土（第７層　古代湿地性堆積）
8：灰色細粒～中粒砂（第８層　海浜部砂堆）
9：にぶい黄褐色粗粒砂～小礫（第９層　段丘構成層）

図３　　東壁地層断面図

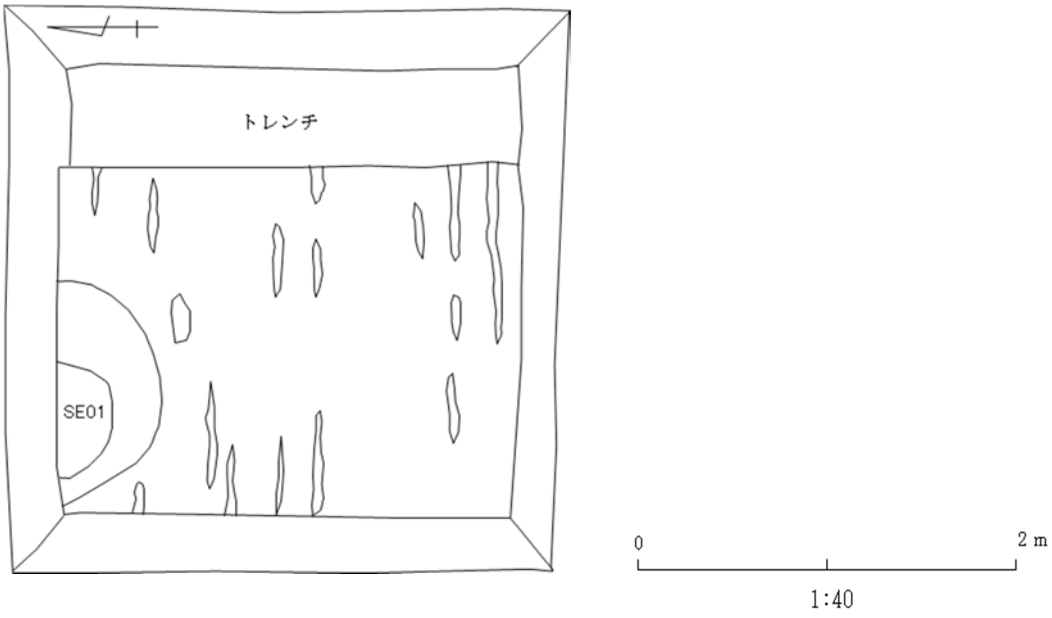


図４　　遺構平面図

宰相山遺跡発掘調査（SSS17－２）報告書

調 査 箇 所	大阪市天王寺区真田山町（真田山公園）
調 査 面 積	125㎡
調 査 期 間	平成30年２月８日～平成30年２月21日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、田中　裕子

＜調査に至る経緯と経過＞

本調査地は天王寺区真田山町の真田山公園内に位置する。縄文時代～近世の遺構や遺物が確認される宰相山遺跡の範囲にあたる。

これまでに真田山公園内においては４度の発掘調査が実施されている（図１）。1948（昭和23）年に市営真田山プールの建設に伴い実施された第１次調査では、奈良時代の船や盤などの木製品、重圏文軒丸瓦や唐代の開元通寶などが出土している。1995年にプールの造営・市営スポーツセンターの建設に伴い行われたSS95－２次調査では東北に開く埋没谷と縄文時代早期から近世に至る各時代の遺構・遺物が検出された。谷西側の微高地では、飛鳥時代の建物跡や正東西方向の溝が検出されている。SS95－２次調査地から谷を挟んだ50ｍ東側に位置するSS02－３次調査地では、縄文時代早期の地すべり堆積層や縄文時代前期の高山寺式の土器片のほか、飛鳥時代の溝と木製鋤が発見された。木製鋤は難波京造営に関わる可能性が指摘されている。なお、SS95－２次調査地とSS02－３次調査地では溝の方向や出土遺物の量に差異があり、推定難波京の西京極ラインが両者の間にあったと考えられている［大阪市文化財協会2004a・大阪文化財研究所2015］。

SS03－１次調査は、2002年に真田山公園の東側テラスにおいて、公園造成の事前調査として実施された。ここでは弥生時代～近代までの遺構・遺物が確認され、南側の調査区では飛鳥時代の溝（SD201）から舟形木製品が出土している。そのほか、古代の地すべり痕跡や近世の土採穴、1888（明治21）年から1932（昭和７）年に当地におかれた騎兵第４大隊の兵営に関わるとみられるレンガ建物が検出されている［大阪市文化財協会2004b］。

今回の調査地は真田山公園東側テラス上、SS03－１次調査地の東側に位置する。2017年に当該地において、建設局公園整備課により石積擁壁の改修工事が計画された。大阪市教育委員会が事前に

図１　調査地位置図

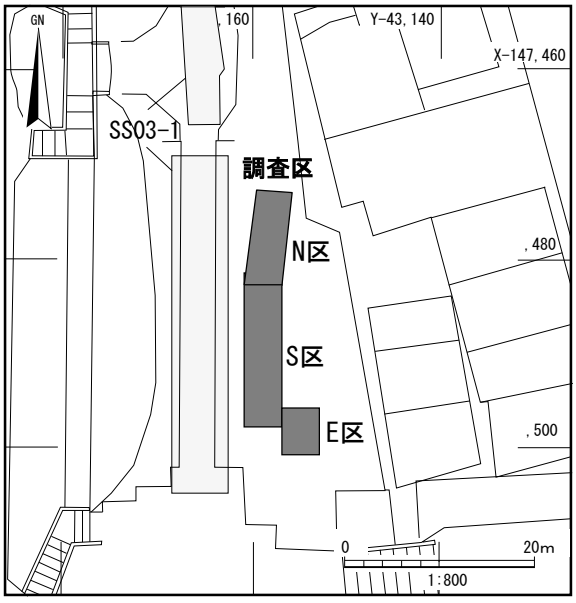


図２　調査区配置図

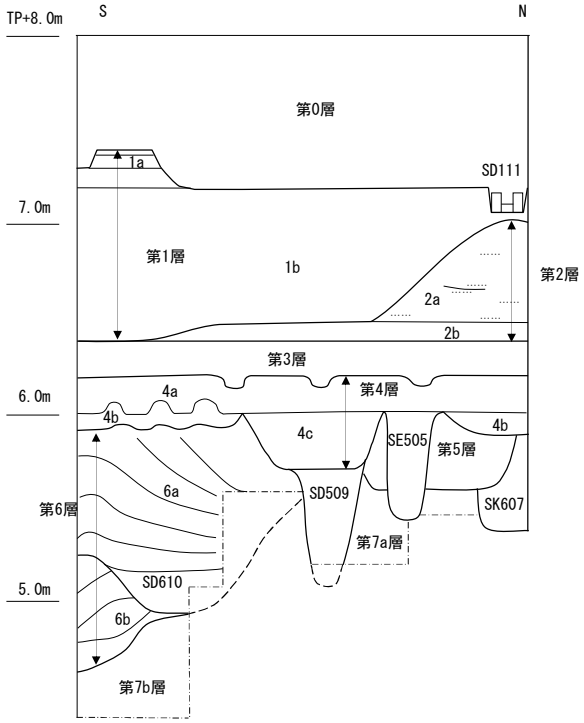


図３　地層と遺構の関係図

試掘調査を４箇所で実施したところ、現地表下2.1m以下で本格的な発掘調査を必要とする中世から近世の遺物包含層が検出された。以上の経緯をうけ、当該地点においても本調査を実施する運びとなった。

調査は連続した南北２箇所の調査区を設定して実施した。南区（Ｓ区）は東西４ｍ、南北20ｍとして掘り下げ始めたが、土置場の確保のため、南北長を16ｍに縮小した。北区（Ｎ区）はＳ区に接続し、地形に従い東に振る形状で、東西４ｍ、南北10ｍを設定した。さらにＳ・Ｎ区の調査を終えた後、SS03－１次調査で検出された飛鳥時代の溝の延長を確認するため、協議の上でＳ区の南東部にＥ区を東西４ｍ、南北５ｍで設定し、掘削を行った（図２）。

作業は平成30年２月７日にフェンス設置等の準備工を行い、２月８日よりＳ区の重機掘削を開始した。重機掘削はＳ・Ｅ区で近世耕作土層である第３層まで行い、Ｎ区では地山層である第７層上面まで行った。以下の地層を人力で掘り下げ遺構・遺物の検出し、図面・写真等の記録作業を行い、平成30年２月21日に現地における調査を終了した。

本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とし、公園内の道路や擁壁を基準として街区図に当てはめて求めたものである。標高はＴ．Ｐ．値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP±〇ｍと表記した。

＜調査の結果＞

１．層序（図３・４）

調査地周辺の標高はTP+8.2ｍで、上町台地の東縁部に位置する。西側のテニスコートや野球場は標高が高く、調査地は東に一段下がったテラス上にある。東側はさらに急激に下がり、玉造筋付近では標高がTP+3.4ｍとなる。また北に向かっても緩やかに下降する地形をしている。南側はほぼ平坦である。

第０層　現代盛土層および攪乱層で、層厚は80～185㎝である。

第１層　近代の盛土層である。建物基礎とみられる第1a層と盛土層の第1b層に細分できる。

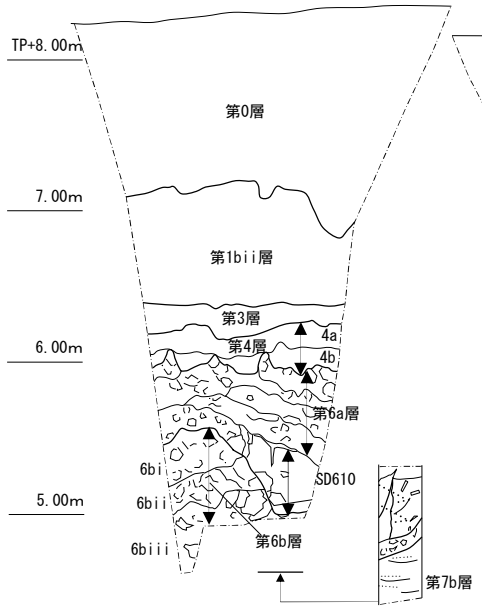
第1a層はＳ区南壁で部分的に確認された。上部に層厚３㎝ほどの灰白色（2.5Y8/1）中粒～細粒砂を敷き、その下に層厚18㎝の灰白色（2.5Y8/2）シルト質細粒砂を固めており、三和土と考えられる。建物の土間部分とみられるが周辺は第０層で攪乱されており、詳細は不明である。

第1b層は黄褐色（10YR5/6）粗粒砂の地山偽礫を主体とし、盛土の単位として第1bⅰ～1bⅲ層に細分される。第1bⅰ層はＳ区南壁際の第1a層の下位でのみ確認でき、層厚10㎝で直径５㎝前後の細かな偽礫で構成されている。整地の最上部といえる。第1bⅱ層は、直径10㎝前後の地山偽礫で構成され、層厚は66～103㎝である。第1bⅲ層はにぶい黄褐色（10YR5/3）細粒砂質シルトを主体とし、層厚８～20㎝である。第1b層からは肥前磁器染付碗**46**や関西系陶器土鍋、銅版転写の瀬戸美濃焼磁器染付碗**47**など19世紀前半までの遺物が出土している。

第１層はSS03－2次調査地でも確認されている、1888（明治21）年から1932（昭和7）年まで当地

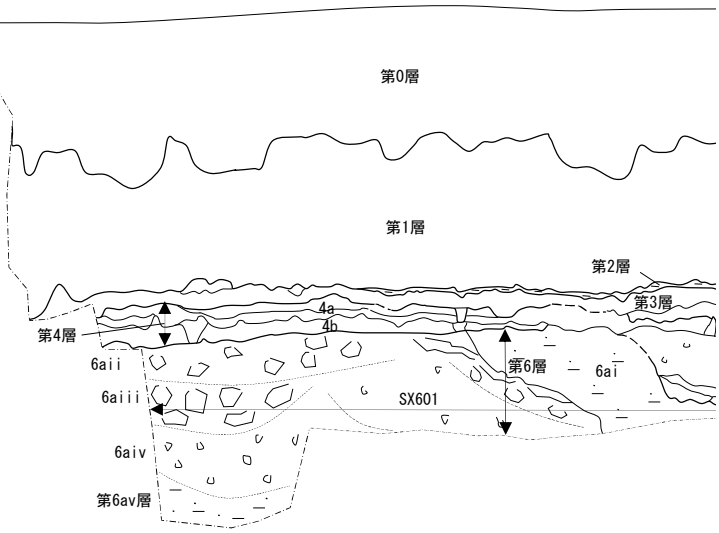
におかれた騎兵第４大隊の調練場造営に関わる盛土層といえよう。
第２層　水成層である。砂を主体とする第2a層と粘土が主体となる第2b層に細分される。第2a層は層厚10～43㎝で、明黄褐色（2.5Y6/6）中粒砂～細粒砂からなり、水平なラミナが観察される。第2b層は層厚５～８㎝で、にぶい黄色（2.5Y6/4 ）シルト～粘土からなる。第2b層の粘土層は調査区全域に分布していたが、第2a層の砂層はＮ区でのみ確認できた。Ｓ区では第1b層によって大きく削平されていた。出土遺物はなく、時期は不明であるが、近世末～近代初期の堆積とみられる。水成層であり、当時付近にため池などが存在した可能性がある。
第３層　層厚15～20㎝で黄灰色（2.5Y5/1）シルト質中粒砂からなる近世の作土層である。調査区全域に分布する。下面で耕作溝を検出した。肥前磁器染付碗**41**、関西系陶器灯明皿**42**など、18世紀～19世紀前葉までの陶磁器を含む。
第４層　近世の作土層と盛土層で、作土である第4a・4b層と盛土層である第4c層に細分できる。
第4a層は調査区全域に分布し、層厚６～18㎝でにぶい黄褐色（10YR6/3）細粒砂質シルトからなる。鉄分の析出が目立つ。第4b層は調査区南部のＳ・Ｅ区で確認できた。層厚３～20㎝、にぶい黄褐色（10YR7/4）細粒砂質シルトからなる。本層上面で東西方向の畝を検出した。また第4b層下面で南北方向の耕作溝**SD406**を検出している。
一方、第4c層はS区で**SD509**を埋めた埋土として確認された。層厚30㎝で褐色（10YR4/4）中粒～細粒砂質シルトからなる。あまり撹拌されておらず、第4a・4b層の耕作地を確保するために埋め立てられた可能性が考えられる。
第4a・4b層からは肥前磁器染付碗**32**・萩焼ピラ掛け碗**33**・丹波焼瓶類**34**など19世紀前葉頃までの遺物を含む。第３層との時期差は少ない。第4c層からは土師器や須恵器など混入品のみ出土している。
第５層　近世の土採穴の埋土である。主にＳ区北端～Ｎ区で確認され、層厚20～46㎝で、黄褐色（10YR5/6）中粒砂質シルトを主体とする地山偽礫で構成される。下面で踏込みがあり、機能時堆積層が存在しない。掘削後すぐに埋め戻されており、第7層の上町層を採取するために掘られたとみられる。遺物の出土はないが、後述する**SK607・608**は本層の下位にあるため、18世紀以降に属する。本層上面より**SE505**や**SD509**といった井戸や溝が掘りこまれている。
第６層　Ｓ区とＥ区で確認された古代の地すべり（**SX601**）の埋土を構成する層である。Ｅ区で確認された溝状遺構（**SD610**）より上部を第6a層、下部を第6b層とする。
第6a層は南から北へ下がる傾斜が連続して５枚以上重なっている。Ｓ区で観察された第6aⅰ層は褐灰色（10YR5/1）中粒砂質シルトからなり、層厚は20～70㎝以上である。第6aⅱ～6av層はＳ～Ｅ区に分布し、同様に南から北へ傾斜する。第6aⅱ層は黒（10YR2/1）極細粒砂に、角張った直径20㎝前後の黒褐色の細粒砂質シルト偽礫で構成される。層厚は12～40㎝で、最上部は畝状に削り残されている。第6aⅲ層は黒色（10YR2/1）細粒砂質シルトの偽礫層で層厚8～30㎝、6aⅳ層は黒褐色（10YR2/2）細粒砂質シルトの偽礫層で層厚８～20㎝、第6av層は褐灰色(10YR4/1)細粒質シルトで層厚44㎝である。弥生土器１～３のほか、須恵器甕６や瓦７・８など、第6a層は奈良時代までの遺物を含む。
第6b層は**SD610**の下部に堆積し、北から南に傾斜する。Ｅ区でのみ確認している。第6bⅰ層は層厚45㎝、灰黄褐色（10YR5/2）細粒砂質シルト、第6bⅱ層は層厚25㎝（10YR5/3）細粒砂質シルト～粘土、第6bⅲ層は層厚47㎝、黄灰色（2.5Y 4/1）粘土～灰色（10YR5/1）極細粒砂の偽礫からなる。第6b層からは弥生土器や須恵器甕のほか、第6bⅲ層から須恵器杯Ｈ身９が出土した。飛鳥時代までの遺物を含む。
第7層　中位段丘構成層（上町層）で、本調査地の地山層である。粘土層の第7a層と砂層の第7b層に細分される。第7a層はＳ区北端部からＮ区で確認され、明黄褐色（10YR7/6）粘土からなる。層厚62㎝以上で、Ｎ区ではサンドパイプが見られた。サンドパイプは粗粒～中粒砂で充填されていたが、本調査地では第7層の上位では上記の砂層は確認されなかった。近世の土採で削平された可能性

E区　西壁

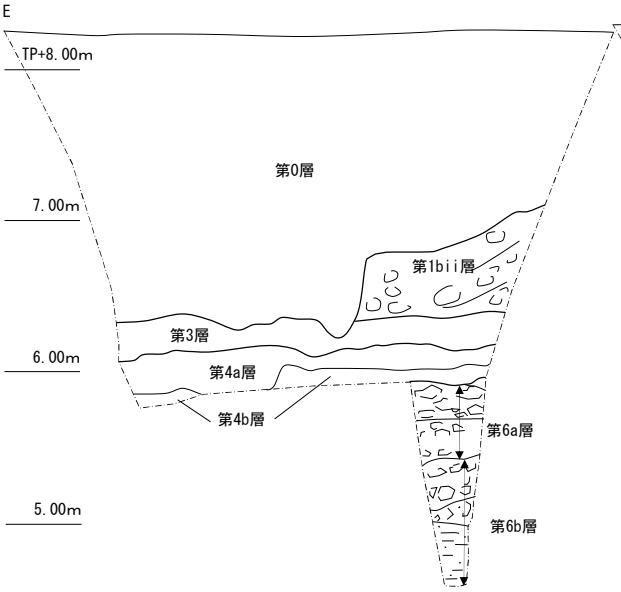


東壁断面図
作成位置

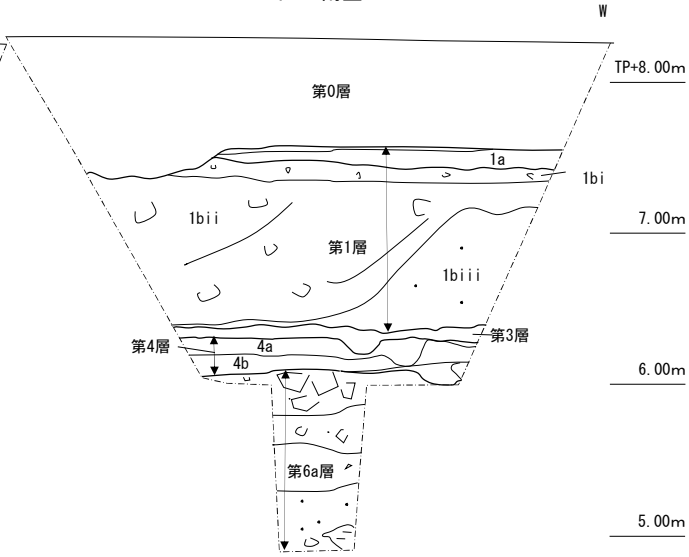
S区　西壁



E区　南壁



S区　南壁



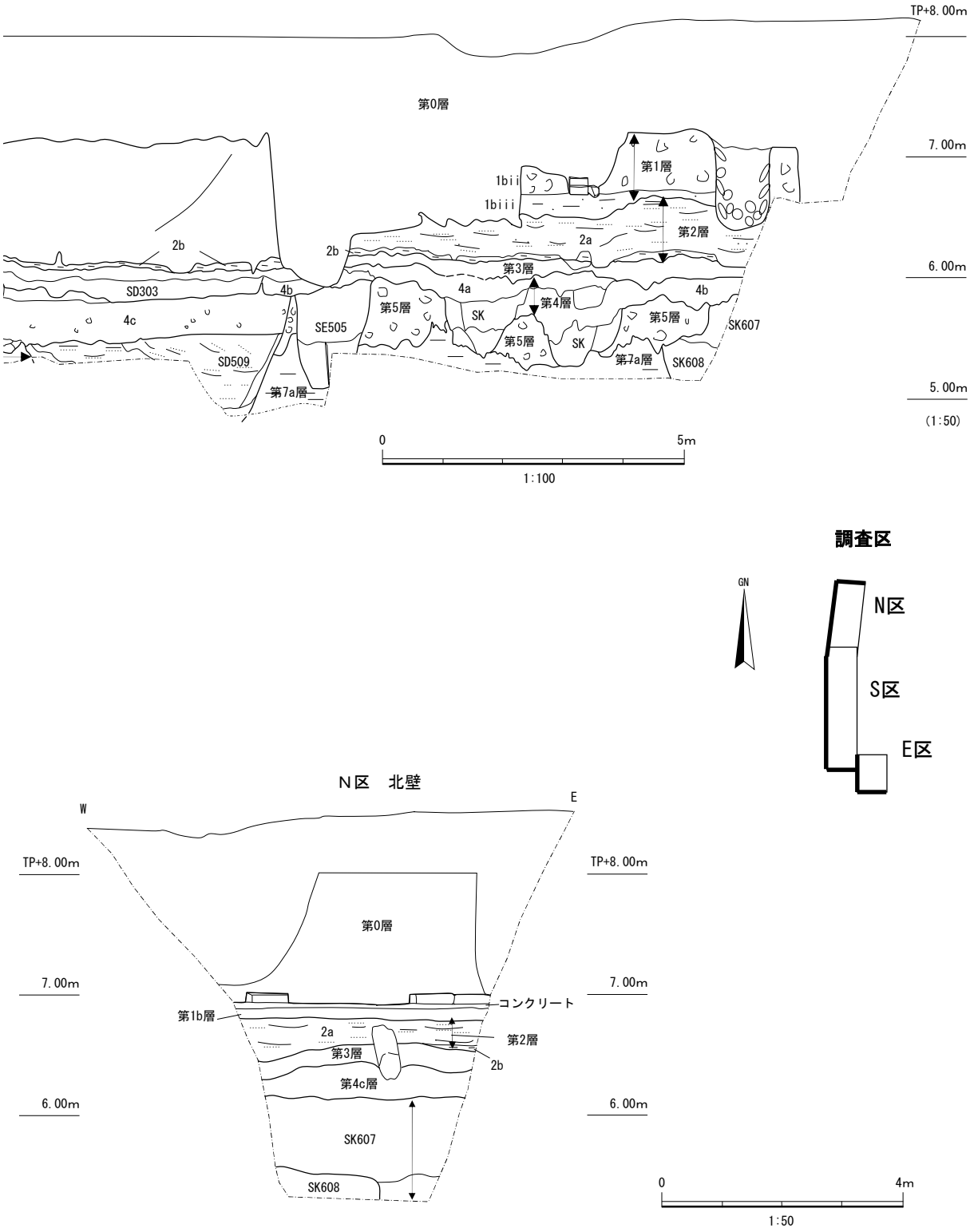


図４　西壁・南壁・北壁　地層断面図

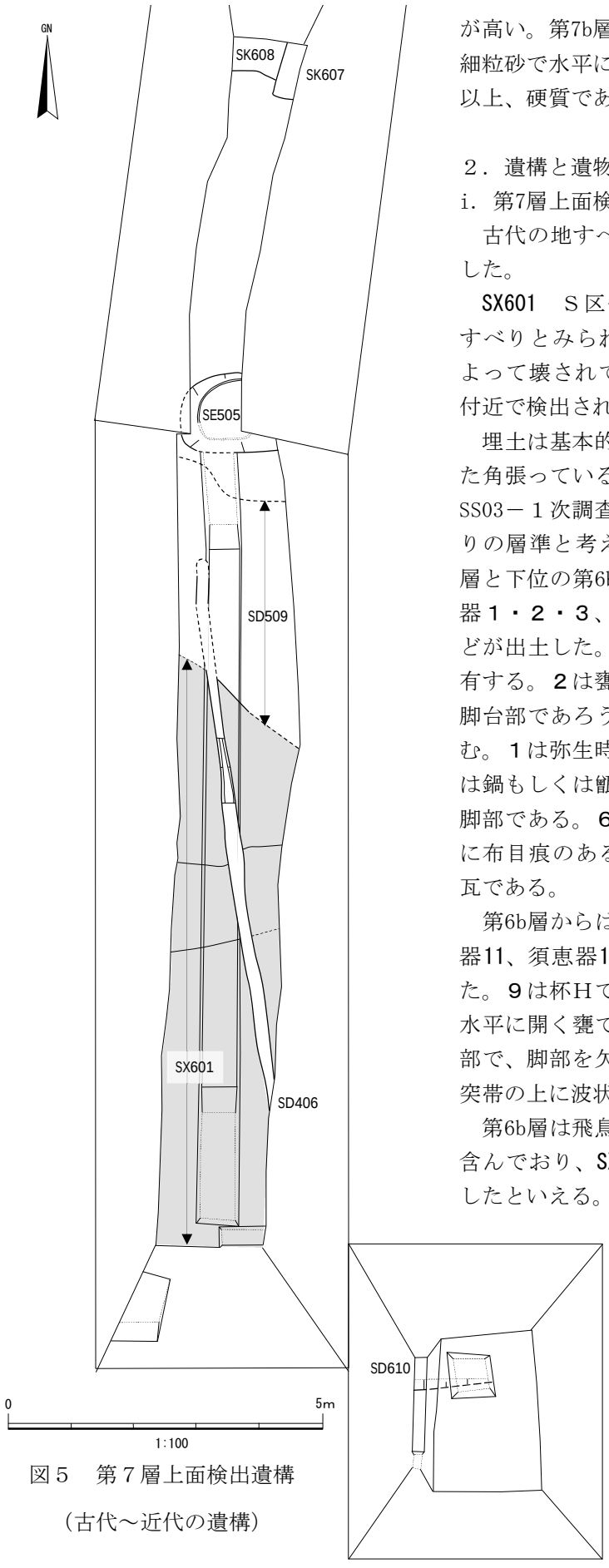


図５　第７層上面検出遺構

（古代～近代の遺構）

が高い。第7b層はＥ区で検出された。灰色(10YR5/1)細粒砂で水平に堆積するラミナが見られる。層厚44㎝以上、硬質である。本層からの遺物の出土はない。

２．遺構と遺物

ⅰ．第7層上面検出の遺構（図５、図版４）

古代の地すべりと溝、近世の溝・井戸・土壙を検出した。

SX601　Ｓ区～Ｅ区において確認された大規模な地すべりとみられる窪みである。北側の肩は、**SD509**によって壊されているが、Ｎ区では第７層がTP＋5.8m付近で検出されており、Ｓ区内で収まるといえる。

埋土は基本的に偽礫を主体とする。偽礫が大きくまた角張っている点、南北方向に連続する点などから、SS03－１次調査で確認された第２層に連続する地すべりの層準と考えられる。**SD610**をはさんで上位の第6a層と下位の第6b層に細分される。第6a層からは弥生土器１・２・３、土師器４・５、須恵器６、瓦７・８などが出土した。１は広口壺で、頸部にヘラ描き沈線を有する。２は甕の底部である。３は器種不明であるが脚台部であろう。ともに長石・石英・チャート粒を含む。１は弥生時代前期新段階に属するとみられる。４は鍋もしくは甑の把手である。５は古墳時代の高杯の脚部である。６は須恵器甕の口縁部である。７は凹面に布目痕のある丸瓦で、厚さは2.1㎝である。８は平瓦である。

第6b層からは須恵器杯９のほか、弥生土器10、土師器11、須恵器12、サヌカイト製剥片13などが出土した。９は杯Ｈで、７世紀中頃に属する。10は口縁部が水平に開く甕である。11は古墳時代の土師器高杯の杯部で、脚部を欠損する。12はハソウの体部とみられ、突帯の上に波状文が施される。

第6b層は飛鳥時代、第6a層は奈良時代までの遺物を含んでおり、**SX601**の地すべりは奈良時代以降に発生したといえる。

SD610　Ｅ区北部の深掘りトレンチ内で確認した。第6b層上面の遺構である。幅1.2ｍ以上、深さ0.5ｍの東西方向の溝とみられる。埋土は底に４～８㎝ほど粘土が堆積し、全体は褐灰色（10YR6/1）シルト質粗粒砂～細礫で埋まる。埋土中に直径20㎝以上のシルト偽礫が混じっており、Ｅ区東壁では溝の

肩部分が崩れているなど、地すべりの影響を受けているようである。

出土遺物は須恵器14～17のほか、土師器高杯・甕とみられる破片である。14は器種不明であるが、突帯が二条ありその間に櫛描き波状文を施す。15～17は甕の体部破片で、15は外面に細い格子叩きがある。16は外面平行叩き、内面は当具痕をナデ消しており、初期須恵器の可能性がある。17は外面平行叩きを格子状に重ね、内面は同心円状の当て具痕が残る。14～16は古墳時代、17は飛鳥時代に属するとみられる。

SD610はTP＋5.0～5.5ｍに位置する。SS03－２次調査で検出したSD201はTP＋6.0～6.7ｍで地山上面に掘られていた。高低差が１ｍほどあるが、地すべりによる影響を考慮すれば、SD201に連続する可能性が考えられ、台地上部から東に排水を図った溝であるといえる。

SK608　東西0.6ｍ以上、南北0.9ｍ以上、深さ0.4ｍ以上の土壙である。湧水の為、完掘できなかった。南側をSK607によって壊されている。埋土はオリーブ黒色（5Y3/1）細粒砂～細粒砂質シルトで、機能時堆積層の可能性がある。

SK607　東西0.5ｍ以上、南北0.9ｍ以上、深さ0.2ｍ以上の方形の土壙で、SK608を壊している。埋土は灰色（5Y5/1）シルト質中粒～細粒砂である。多くの陶磁器を含み、廃棄土壙とみられる。出土遺物は二重網目文の肥前磁器染付碗18、見込みに五弁花文を筆描きする青磁染付碗19のほか、関西系陶器土瓶20などで、18世紀代を主体とする。

SE505　Ｓ区北端部～Ｎ区南端部にまたがる楕円形の井戸である。第５層の上面から掘りこまれている。直径1.3～1.7ｍ、深さ0.8ｍで、中央部に直径0.9ｍ、高さ0.35ｍほど板材を円形に囲んだ木枠が設置されていた。板材は幅8.5㎝、厚さ1.5㎝ほどである。木枠内部は細粒砂で充填され、木枠外の掘形部分は褐灰（10YR5/1）中粒砂質シルトで埋められていた。上部の埋土は同じく褐灰色の偽礫を主体とする層で、人為的に埋め戻されていた。掘形の部分から焼土塊と瓦質土器21の破片が出土しているが、掘りこまれている層準からみて近世の遺構である。

SD509　Ｓ区北部に位置する幅3.5ｍ以上、深さ0.7ｍ以上の溝である。南側はSX601を削り込んでおり、北側は第7層を削っている。溝の肩部分は地山やSX601の埋土からなる偽礫を主体とし、中央部は黄褐色（10YR5/6）粗粒砂～細粒砂で、水平方向およびわずかに北へ傾くラミナが観察された。上方は細粒化している。北西から南東方向へ流れていたとみられる。遺物の出土はないが、第５層上面からの掘り込みであり、近世以降の溝である。

SD406　Ｓ区で確認された第４層下面の耕作溝である。東西0.3ｍ、東西9.0ｍ以上、深さ0.03ｍで、第４層で埋まっている。イッチン掛けされる関西系陶器碗22などが出土しているほか、中国産白磁口禿皿23など中世の遺物が混入している。18世紀末～19世紀初頭に属する。

ⅱ．第４層上面検出の遺構（図６、図版４）

第4b層上面および第4a層上面で近世の耕作に関係する畝や溝が検出された。

畝群　Ｓ区南部の第4b層上面で検出した。幅0.15ｍ、長さ1.4ｍ以上、高さ0.03～0.06ｍ、東西方向である。畝間は0.6～0.7ｍで、調査区内で６条確認できた。西壁の断面でも確認できており、Ｓ区南西部で一部壊されているものの、西側に向かって長く続くようである。

畝間の埋土は極粗粒砂混じりの褐灰色（7.5YR5/1）細粒砂で、よく撹拌されている。関西系陶器灯明受皿24のほか、須恵器杯Ａ25や甕、土師器片などが混入する。

SD302～SD304　主にＳ区で検出した幅0.4～0.5ｍ、長さ8.5ｍ以上、深さ0.1ｍの耕作溝である。北西－南東方向で、地形に沿った向きに掘られていた。埋土はにぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質中粒砂である。

出土遺物は、口縁部が輪花状となる瀬戸美濃焼磁器白磁皿26や28・30・31などの肥前磁器染付碗、関西系陶器土瓶29、丹波焼甕類27など、18世紀後葉～19世紀前葉までの陶磁器を多く含む。そのほか、須恵器壺・甕、土師器羽釜、布目瓦など古代～中世の遺物が混じる。26・27はSD302、28・

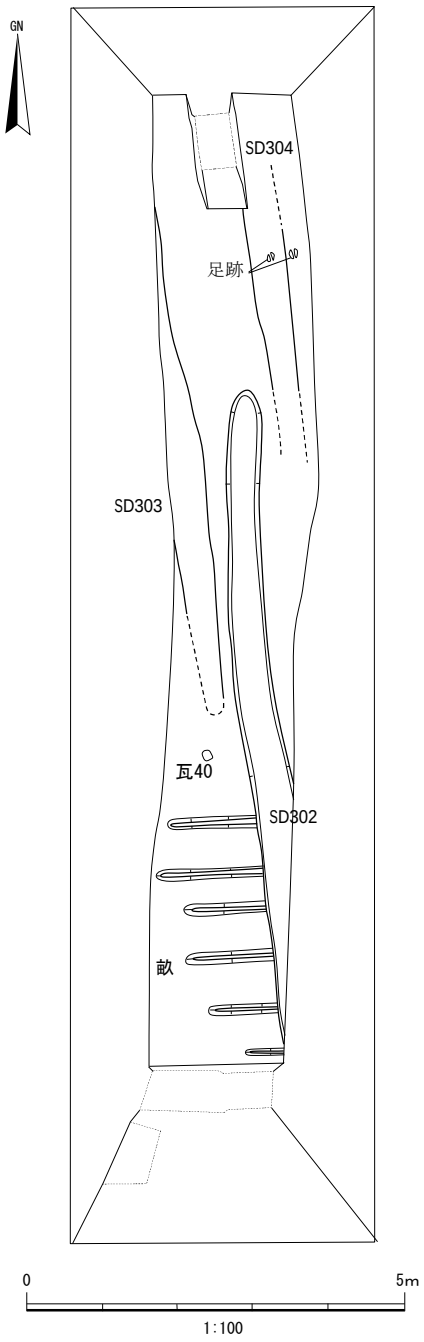


図６　第４層上面検出遺構
（Ｓ区　近世の畝・耕作溝）

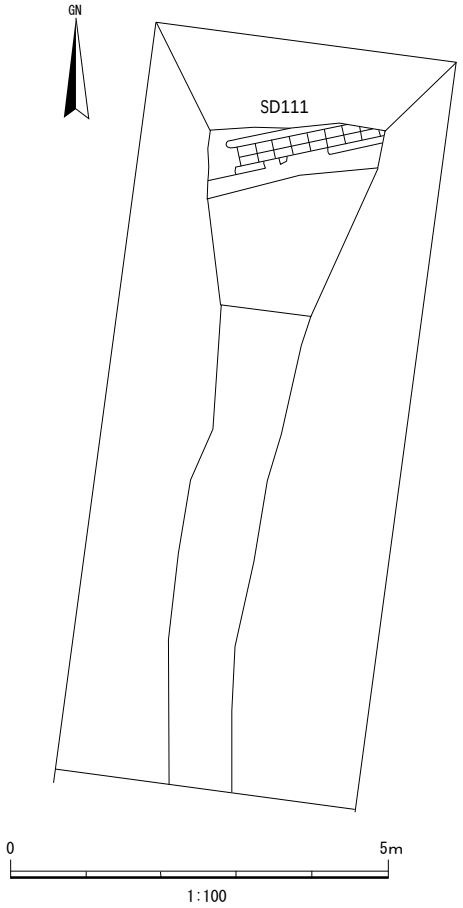


図７　第１層上面検出遺構（Ｎ区　近代の遺構）

29はSD303、30・31はSD304から出土した。

ⅲ．第１層上面検出の遺構（図７、図版４）

SD111　近代のレンガ組の溝である。Ｎ区北端部で検出した。第1b層を掘りこんで作られていた。幅0.46ｍ、長さ2.20ｍ以上、掘り込み面からの深さは0.40ｍで、南西から北東方向に流れる。底の部分は幅10㎝、長さ30㎝、高さ８㎝ほどのレンガを組み合わせ、コンクリートで固めて構築し、暗渠としていたようである。調査地東側の台地底部に向かって排水を図っていたとみられる。このほか、Ｎ区の西壁際では同じくレンガ組の会所も確認できた。また、これらの遺構を埋めた第０層の盛土からは石炭などが出土しており、連隊に関係する遺物といえる。

ⅳ．各層出土の遺物（図版４）

第4a・b層からは肥前磁器染付碗32、萩焼ピラ掛け碗33、丹波焼瓶類34、青緑釉がかけられた関西系陶器の香炉35、底面が糸切される軟質施釉陶器皿36など、19世紀前葉までの遺物が出土している。そのほか、混入品として、須恵器37～39、瓦40などが出土した。37は５世紀の杯Ｈ蓋とみ

られる。38は杯Ｂの蓋で、返りは短い。39は大甕の口縁部、40は平瓦で、凹面に布目がある。

第３層からも18世紀～19世紀前葉までの陶磁器41～43が出土する。41はコンニャク印判手の肥前磁器染付碗、42は関西系陶器の灯明皿、43は肥前陶器刷毛目碗である。そのほか、混入品ではあるが、見込みに寿文のある中国産磁器青花碗44、布目のある平瓦45などが出土している。

第１b層からは肥前磁器染付碗46や銅版転写の瀬戸美濃焼磁器染付碗47が出土した。19世紀前～中葉に属する。

＜まとめ＞

・SX601からは弥生土器の比較的大きな底部の破片やサヌカイトの剥片などが出土しており、付近に弥生時代の集落跡があった可能性が高い。第6b層からは黒褐色細粒砂の偽礫がみられ、地すべりで壊される以前に弥生時代の古土壌が存在していた可能性がある。

・第6b層からは７世紀中頃までの遺物が含まれ、その上部にSD610が構築されている。また奈良時代の第6a層が上部に堆積していることから、SD610は飛鳥時代の溝とみられ、SS03－２次調査地で見つかったSD201に連続する可能性がある。

・SD610を埋める第6a層は崩積土であり、奈良時代までの須恵器甕などを含むことから、地すべりは奈良時代に発生したとみられる。

・中世の地層は検出されていないが、第３・４層中や耕作溝の埋土からは瓦質土器や中国産白磁皿・青花碗などが出土しており、削平されているが本来は中世の地層があったようである。

・第５層の上面から掘られた土壙がＮ区には複数あり近世の生活痕跡はみられるが、18世紀後半以降は基本的に耕作地として利用されている。

・第２層の水成層が広範囲に広がることから、幕末～明治初期の頃にため池があった可能性がある。その後、大規模な盛土を行い、明治期に騎兵第４大隊の調練場を整備している。

＜引用文献＞

大阪市文化財協会2004a『宰相山遺跡発掘調査報告』Ⅰ
大阪市文化財協会2004b『宰相山遺跡発掘調査報告』Ⅱ
大阪文化財研究所2015「第４節　天王寺区宰相山遺跡」『大阪市北部遺跡発掘調査報告』

上本町遺跡発掘調査（SUH17－1）報告書

調 査 箇 所	大阪市天王寺区上本町九丁目302-9
調 査 面 積	１０㎡
調 査 期 間	平成29年5月9日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、櫻井 久之

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は当遺跡の南端に近く、上町台地の稜線部にあるが、調査地北面の道路は東にある上町筋側へ向かって緩やかに下降している(1)。調査対象となった敷地は逆Ｌ字形をしており、その屈折する位置に、東西2.5m、南北4.0mの調査区を設定して発掘調査を行った（図2）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

地層の状況としては、地表下約40㎝までの現代表土・攪乱の下に第１層とした近世盛土（層厚15㎝）がある。続く第２層も近世の盛土（層厚30㎝）で、上面が凹凸なく平坦でやや堅く締まっている。恐らくある時期の生活面であろう。第３層は地山である段丘構成層を用いた盛土（層厚15㎝）で、調査区南半部に見られる。第２・３層を除去すると、第４層とした段丘構成層のトップが現れ、その上面で遺構検出すると井戸・土壙・柱穴があった。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

井戸SE01は直径1.1m、深さ0.5m、埋土上半が茶褐色シルト質粘土、下半部が黄灰色粘土となる。埋土上半から多数の井戸瓦が出土したが、原位置を保つものはなかった。土壙SK01～07は第４層の採取を目的とした近世の土採り穴である。柱穴SP01はSK05に一部切り取られるが、内部に礎石が据えられていた。

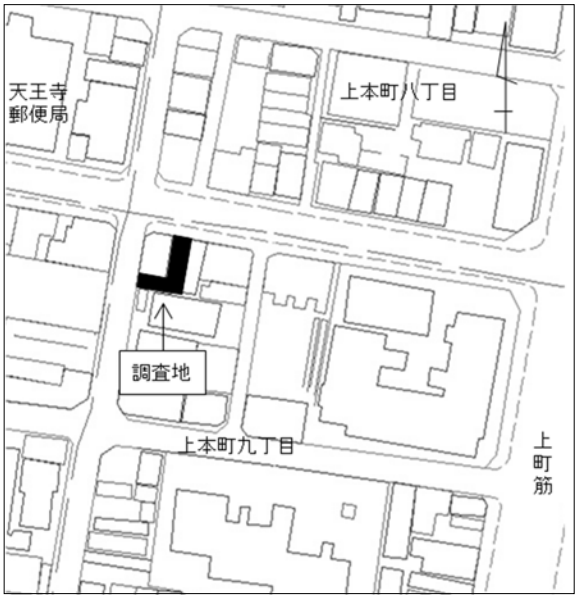


図１　調査地位置図　縮尺1:2,000

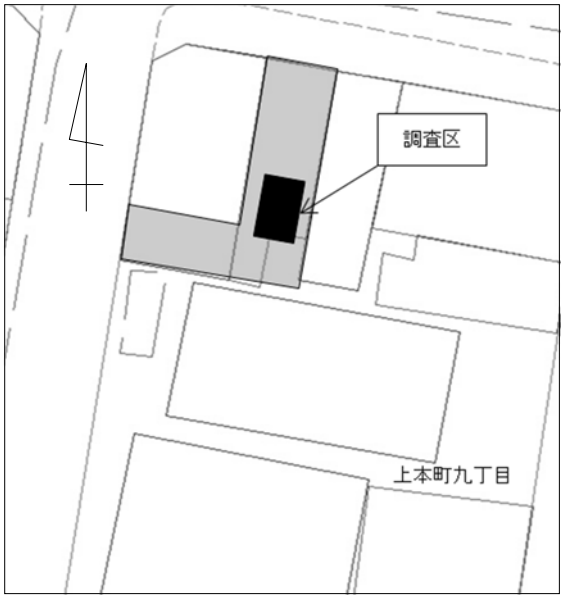
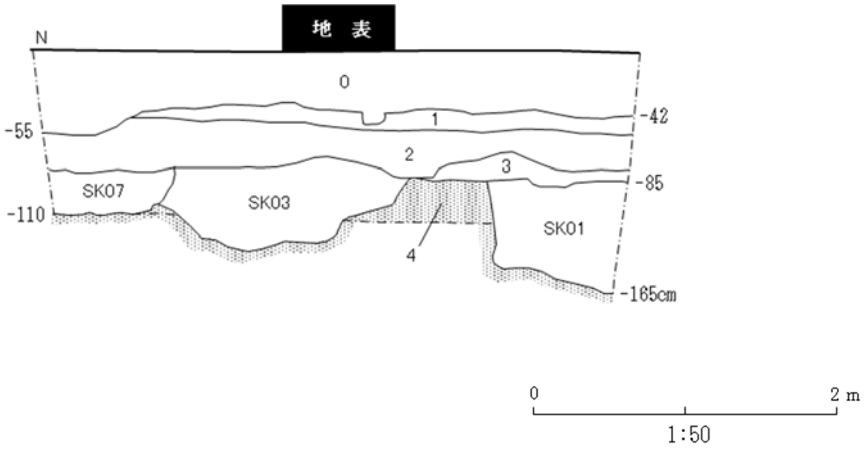


図２　調査区配置図　縮尺1:500

〈まとめ〉

今回の調査では古代に遡る遺構はなかったが、井戸SE01・柱穴SP01から中世末～近世初頭の居住域の存在が推測された。そうした居住域が以後、土採り場に変わっていく状況が窺えた。



0：現代表土

1：黄灰色砂質シルト（第１層　近代盛土）

2：茶褐色シルト
（第２層　近世盛土　上面は生活面か）

3：青灰色極細粒砂
（第３層　段丘構成層を用いた盛土）

4：淡緑灰色極細粒砂（第４層　段丘構成層）

SK01～05：褐色シルト（段丘構成層偽礫多く含む）

SK06：茶褐色粘土

SK07：茶褐色シルト

SP01：灰色砂質粘土

図３　　東壁地層断面図

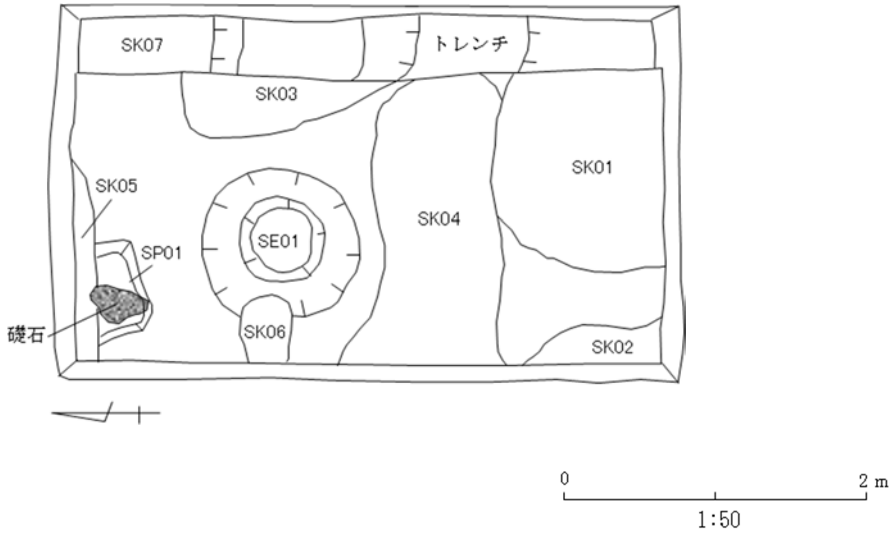


図４　　遺構平面図

上本町遺跡発掘調査（SUH17－4）報告書

調 査 箇 所　　天王寺区勝山一丁目19他
調 査 面 積　　12㎡
調 査 期 間　　平成29年9月6日
調 査 担 当 者　　課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

上本町遺跡は弥生時代から近世にかけての集落遺跡で、本調査地はその南よりで、難波京朱雀大路跡にも近接したところに位置している。周辺では古代から近世にかけての各時代の調査成果が得られている。敷地内の南西寄りで東西4m、南北3mの調査区を設けて作業を行い（図1・2）、攪乱内など部分的な確認等も含め現地表下約1.2mまでの地層を確認した（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

調査区の一部の範囲では近現代の土砂の基底で地山が認められた。それ以外で地層が確認されたところでは近現代の盛土（第0層）の下位に黄色シルト（第1層）、暗灰色砂（第2層）があり、ともに近世以降の地層とみられる。これらの下の現地表下0.3～0.4m以下では橙～黄白色砂質シルト～砂があり、自然堆積の地山である（第3層）。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

主な遺構は第3層の地山上面で検出し、埋土の特徴や出土遺物などから二時期に大別された。中世以前にさかのぼると考えられるのが南西の溝SD01、北東の落込みSX02・03、小穴SP04などで、近世以降とみられるのが大型の落込みSX05、落込みSX06～08などである。溝SD01は南から西へと延びる溝で幅0.6m、深さ0.3mほどの規模である。もっとも下位に水漬きの堆積があり、上位は埋め戻し土である。北東端には落込みSX03があり、調査区外に広がる。一部を掘り下げたが、深さ1m以上は

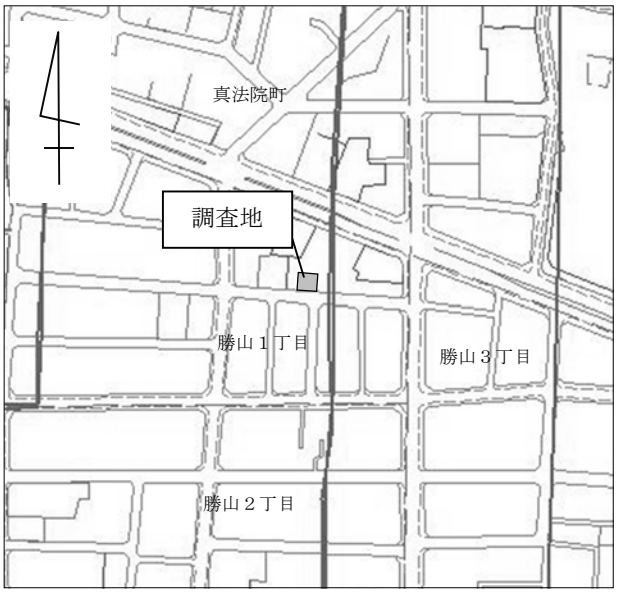


図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

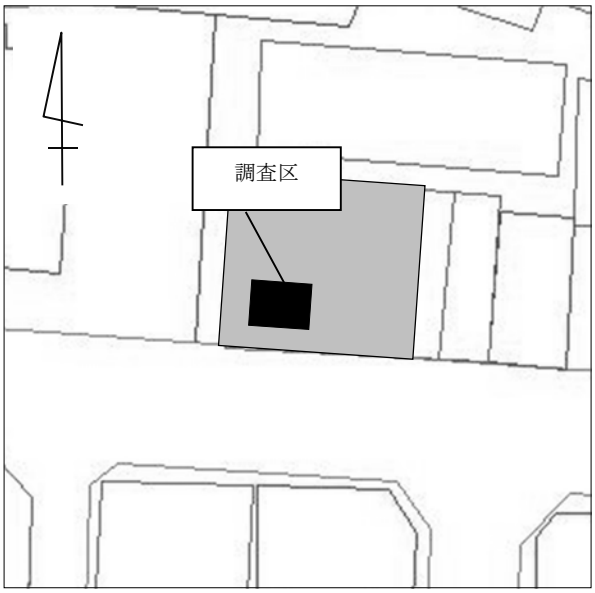


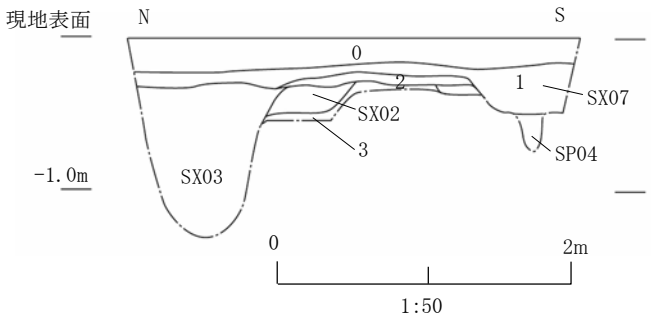
図２　調査区配置図　縮尺1:500

あるとみられる。埋土から中世以前の土器などが出土している。近世以降とみられる大型の落込みSX05は平面形が隅丸方形で、残存しているところで幅1.8m、深さ0.7～0.8mの規模である。地山に由来するとみられる偽礫を含む砂で埋め戻されていた。機能は不明確だが、水溜めのようなものかもしれない。他に不定形な落込みSX06～08などが見つかっている。

遺物ではSX03から土師器、瓦器や瓦質土器などの古代から中世の土器類が、SX05から肥前磁器などの近世陶磁器や瓦などが出土した。

〈まとめ〉

本調査地では一部攪乱を受けていたところもあったものの、浅いところで地山面が確認され、その上面で溝や落込みなどの遺構が検出された。時期は不明確なところもあるが、土地利用は遅くとも中世には活発となり、その後近世以降にも活用され続けたことがうかがわれた。



0：現代表土・近現代盛土
1：褐灰～黄褐色砂質シルト（第１層　近世以降の耕作土か）
2：黄褐色砂質シルト（第２層　中世堆積か）
3：橙～灰白色砂質シルト～砂（第３層　自然堆積・地山）

図３　　東壁地層断面図

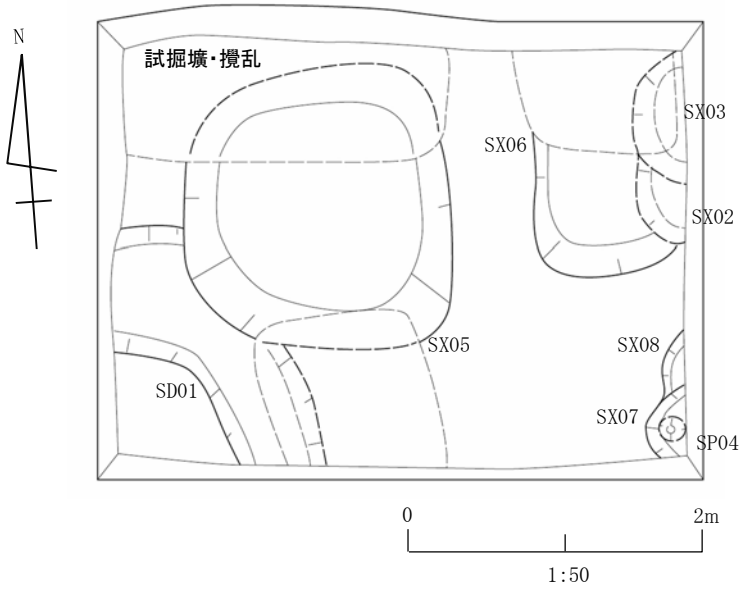


図４　　遺構平面図

柴島城跡伝承地 発掘調査（SKJ17－3）報告書

調 査 箇 所	東淀川区柴島三丁目275-1
調 査 面 積	16㎡
調 査 期 間	平成29年７月７日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

柴島城は戦国時代に営まれたとされる城で、本調査地は包蔵地となっている範囲の南東よりに位置する。敷地内の西寄りの地点に東西2m、南北8mの調査区を設けて作業を行った（図1・2）。部分的な確認なども含め現地表下約1.7mまでの地層を確認した（図3・4）。

〈調査の結果〉

１．層序(図３・図版１)

地層では現地表下0.6m前後までは近現代の盛土である（第0層）。その下に灰色粘土質シルトなどからなる整地層（第１層）、黄褐色砂の盛土（第２層）、耕作土とみられる褐色砂（第３層）があって、いずれも近世以降とみられる。その下は黄褐色シルト質砂の耕作土で、中世にさかのぼる可能性がある（第４層）。現地表下1.3～1.5mには黄褐～黄色砂礫があり、付近のベースとなる自然堆積層である（第５層）。

２．遺構と遺物(図４・図版１・２)

遺構には第５層の地山上面で検出された落込みSX01～04がある。平面形は不整円形等で、最大のSX02で直径1.5m、深さ0.3mほどの規模がある。いずれも上位の第４層による耕作時等に形成されたとみられる。

遺物では、第５層の地山層上面の検出遺構であるSX01から土師器片、第４層では土師器（図版2-下-1）や須恵器（同2）、中国産白磁碗（同3）、布目の残る瓦片（同4）などが出土し、第３層から

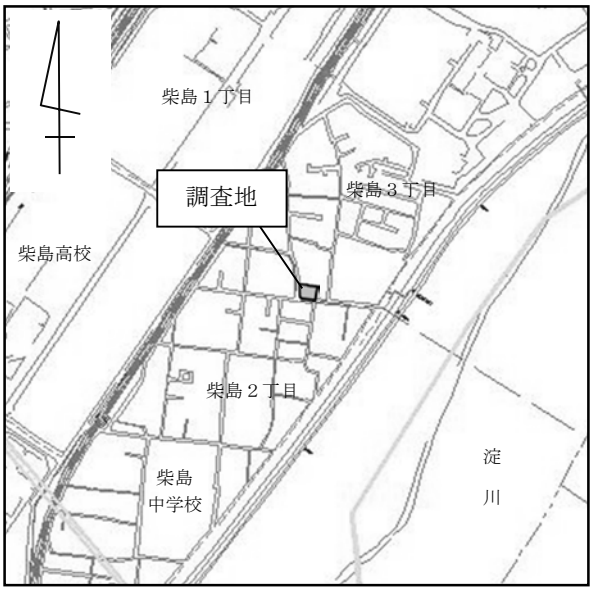


図１　調査地位置図　縮尺1:10,000

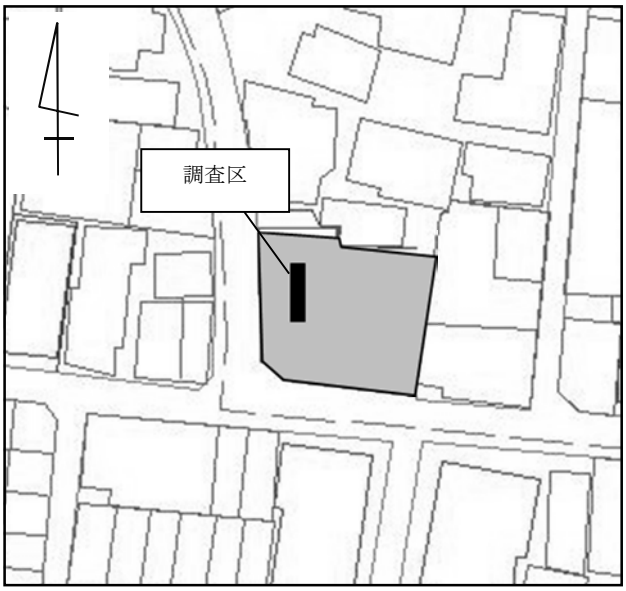
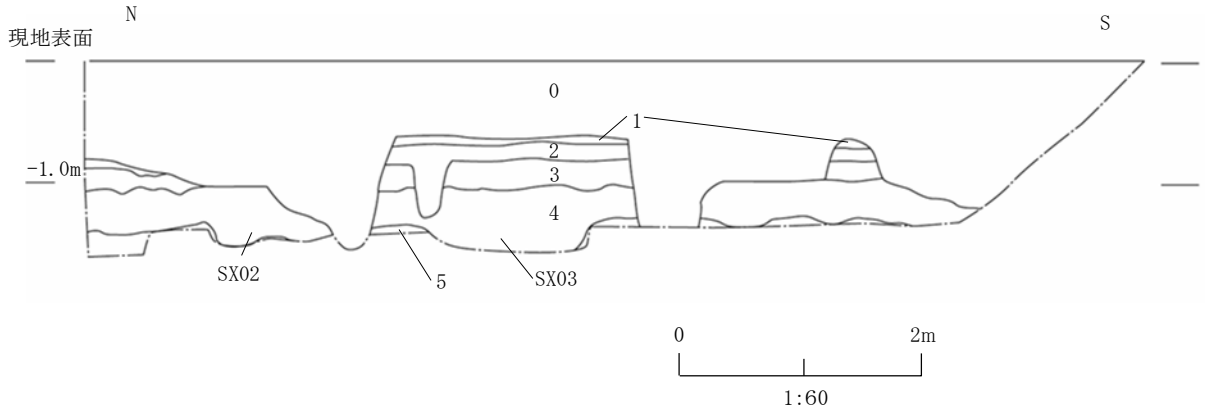


図２　調査区配置図　縮尺1:1,000

は肥前磁器（同5）や肥前陶器（同6）、土師器片などが見つかっている。

〈まとめ〉

本調査地では部分的な攪乱はあったものの、それ以外では近現代の盛土以下に地層が良好に遺存していた。自然堆積の上に中世にさかのぼる耕作土層があり、近世以降は耕作地から集落地へと変化していったことが明らかになった。柴島城に直接かかわる遺構は確認できなかったものの、中世にさかのぼる土地利用や遺物の出土など、周辺の歴史の復元についての基礎的な資料を得ることができた。



0：現代表土・近現代盛土
1：灰色粘土質シルト（第１層　近世あるいは近代整地層）
2：黄褐色砂（第２層　近世あるいは近代盛土）
3：褐色砂（第３層　近世耕作土）
4：黄褐色シルト質砂（第４層　中世耕作土）
5：黄～黄褐色砂礫（第５層　自然堆積）

図３　　東壁地層断面図

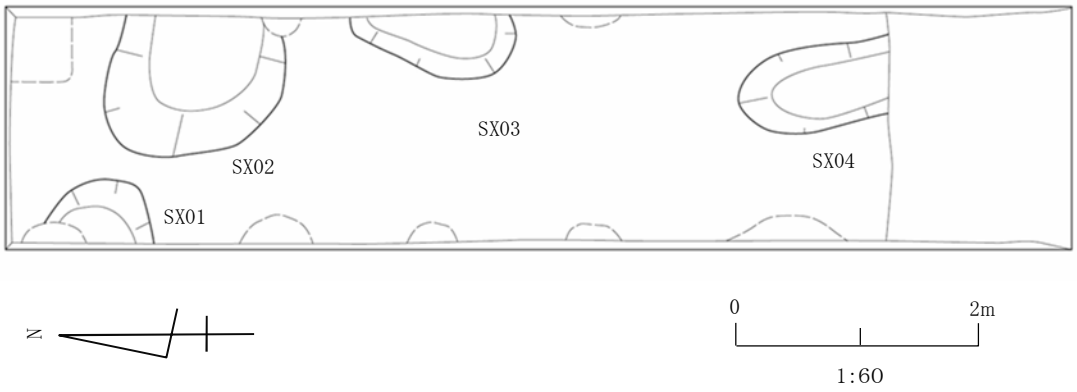


図４　　遺構平面図

森小路遺跡発掘調査（SMS17－1）報告書

調 査 箇 所	大阪市旭区新森四丁目80-10他
調 査 面 積	10㎡
調 査 期 間	平成29年10月4日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、櫻井 久之

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は当遺跡の中央部付近に位置している(図１)。この遺跡は特に弥生・古墳時代の集落跡として知られ、付近でも何件かの本調査が行われている。敷地の地表面は南側前面道路とほぼ同じ高さにあり、敷地北寄りに東西5.0m、南北3.0mの調査区を設けた(図２)。

〈調査の結果〉

1. 層序と遺物（図３・４、図版１・２、写真１）

調査区の地層は、地表下0.5m程度までが現代の攪乱（第０層）で、その中には弥生～古墳時代の地層とみられる黒色粘土の偽礫が若干ながら含まれていた。その下には、調査区東端から西へ1.3mの範囲に灰白色細粒砂層（第１層）があり、それ以西に褐灰色粘土層（第２層）が見られた。第１層は厚いところで35㎝あり、層内に第２層の偽礫が多く含まれていた。近世の盛土であろう。第２層は層厚約40㎝ある中世～近世の耕作土である。第１層に覆われた調査区東端部分では、第２層上面に畝状の高まりが見られた。第２層中から弥生土器や土師器の破片が出土した

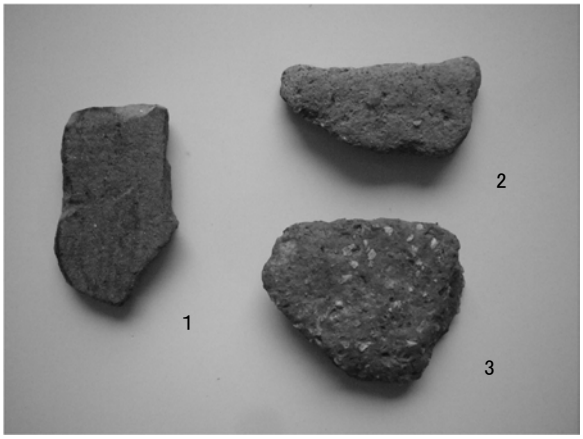


写真１　第２層出土遺物
（1：土師器、2・3：弥生土器）

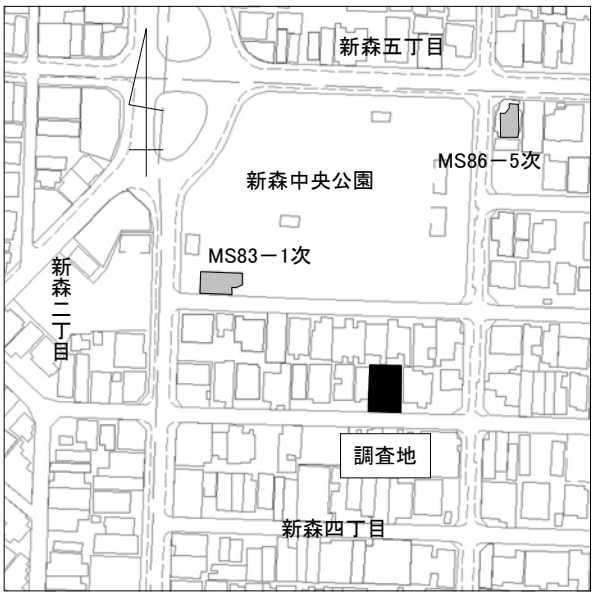


図１　調査地位置図　縮尺1:2,000

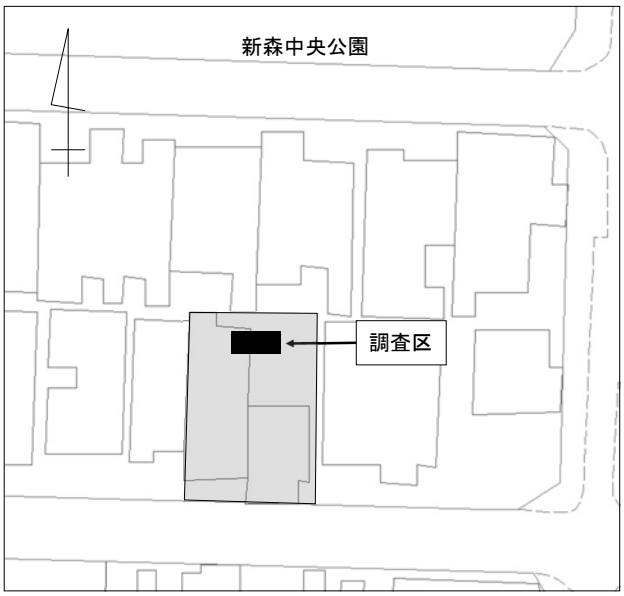


図２　調査区配置図　縮尺1:500

（写真１）。第２層を除去すると第３層とした淡灰黄色極細粒砂層が平坦に拡がる。本層はこの遺跡のベースとなる自然堆積層である。

2．遺構（図４・図版１・２）

遺構としては、第３層の上面に検出した土壙SK01と杭跡がある。SK01は隅丸方形プランをもち、東西1.15m、南北0.7m以上、深さ0.5mである。底面中央が一段深く窪む。暗灰色粘土や第３層起源の偽礫で一度に埋められている。遺物は出土していないが、埋土から中世頃の遺構と思われる。杭跡は調査区東寄りに２つある。直径8.0㎝で、50㎝程度の深度まで垂直に打込まれていた。

〈まとめ〉

今回の調査地は、周辺の調査地の状況と比較すると、弥生～古墳時代の遺構・遺物は顕著ではなかった。これは第２層の中世～近世の耕作に伴って古い時代の包含層が損なわれたからと思われる。しかし、中世の時期が考えられる土壙SK01が確認されるなど、この遺跡の実態の一端を知ることができた。

〈参考文献〉

大阪市文化財協会2001、『森小路遺跡発掘調査報告』Ⅰ

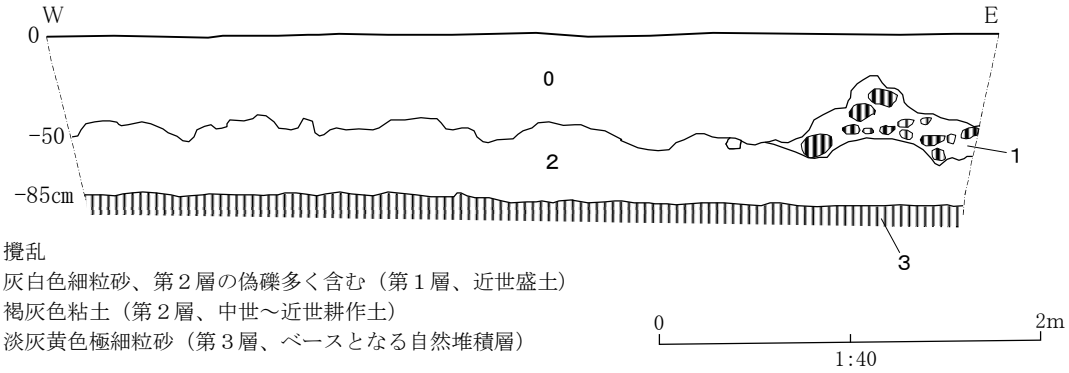


図３　　北壁地層断面図

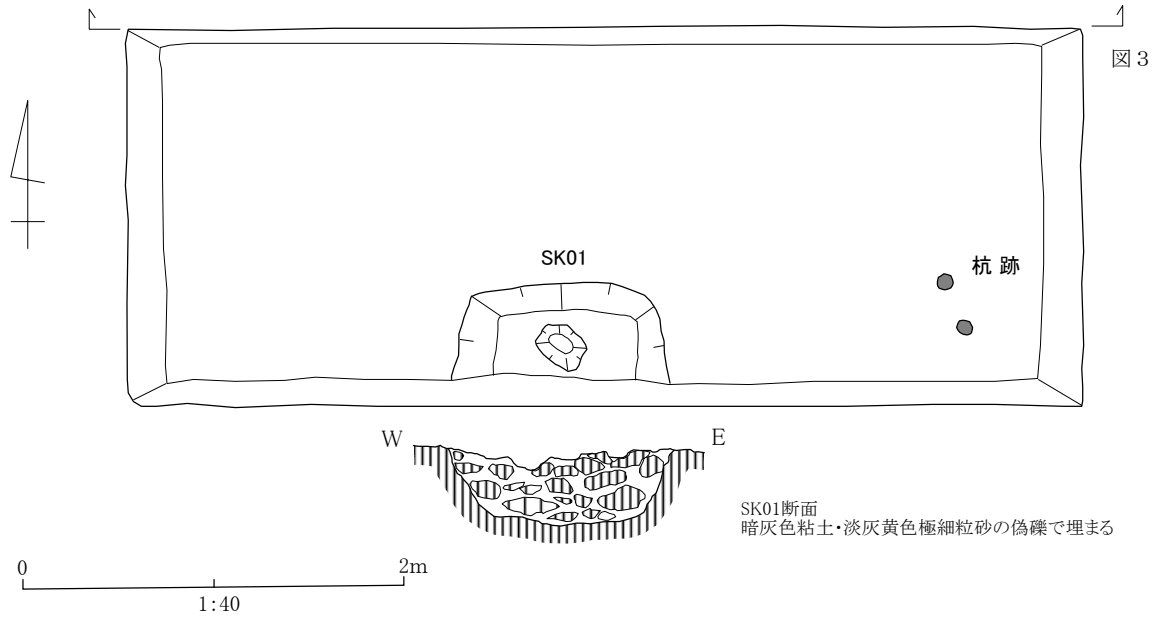


図４　　遺構平面・断面図

阿倍寺跡・阿倍野筋北遺跡発掘調査（SAB17－1）報告書

調 査 箇 所　　阿倍野区松崎町二丁目90－2
調 査 面 積　　16㎡
調 査 期 間　　平成29年10月20日
調 査 担 当 者　　課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は阿倍寺跡および阿倍野筋北遺跡の東寄りの地点にあり、西方で中世を主とする遺構や遺物が確認されている。敷地の南東よりで東西・南北4m角の調査区を設けて作業を行った（図1・2）。調査にあたっては南側に攪乱された部分があったため、主な作業は北側に限って行い、現地表下1.5m程度までの状況を確認した（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

地層では厚さ1.1～1.2mの近現代の盛土（第０層）の下にシルト偽礫を含む黄色砂があった（第１層）。その下の1.3m前後で黄～黄白色砂があり、自然堆積の地山である（第２層）。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

平面的な検出作業は第１層の上面と第２層の地山層の上面で行った。第２層の地山層上面では不定形な落込みSX01・02が検出された。いずれも調査区外に広がり、全体の形や規模は不明である。第１層と共通する、偽礫を含む砂層で埋められていた。試掘時にも同様の盛土が確認されており、一帯に整地するような作業が行われたようである。偽礫には中世以前の可能性もある地層や地山層に由来する土砂が含まれており、中世ないしそれ以降に整地する作業が行われたとみられる。

遺物では第１層から土師器片などの遺物が少量出土している。

図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

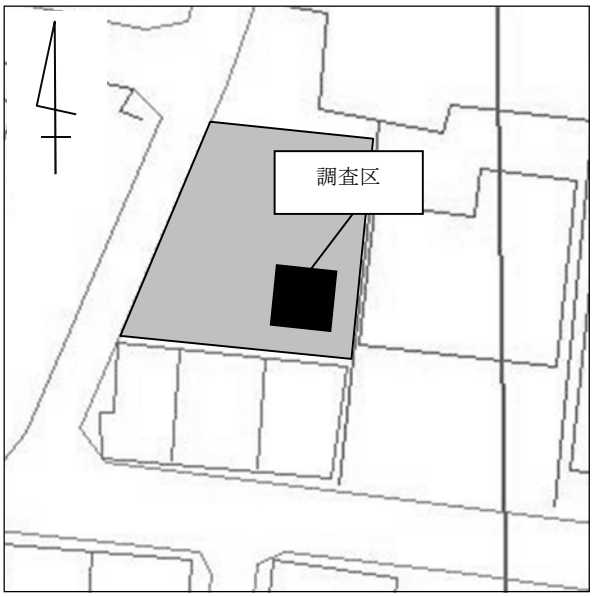
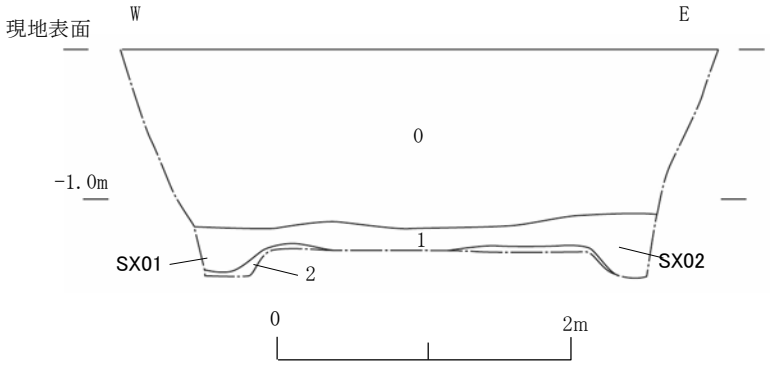


図２　調査区配置図　縮尺1:500

〈まとめ〉

本調査地では地山面が現地表下1.3m前後で確認され、その上面で不定形な落込みが検出された。その性格は不明だが、偽礫を含む土砂で埋められていた。時期は中世以降としか限定できないが、周辺に同様な堆積が広がるところがあり、一帯に整地作業が行われたようである。阿倍寺跡に直接関連する遺構等は確認されなかったものの、開発の進展を示す資料を得ることができた。



0：現代表土・近現代盛土（第０層）
1：含灰色シルト偽礫 黄～白色砂（第１層）
2：黄～黄白色粗粒砂（第２層　地山）

図３　　北壁地層断面図

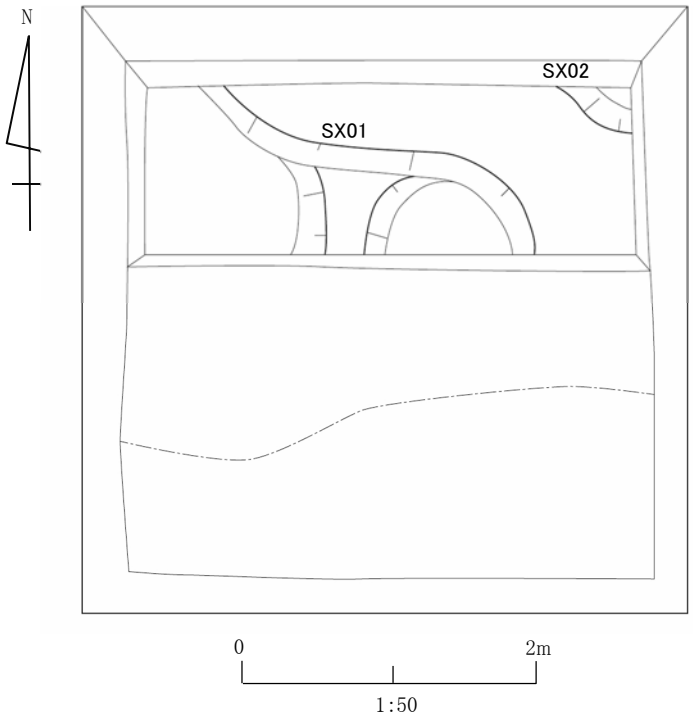


図４　　遺構平面図

阿倍野筋南遺跡発掘調査（SAS17－1）報告書

調 査 箇 所	阿倍野区阿倍野筋五丁目3－58、3－59
調 査 面 積	4㎡
調 査 期 間	平成29年11月22日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は阿倍野筋南遺跡の東よりにあり、主に北西方で主に弥生～古墳時代の遺構・遺物が確認されている地域である。敷地のほぼ中央に東西・南北2m角の調査区を設けて作業を行った（図1・2）。東西3mの予定だったが、残土の置場等を考慮し短くして調査を行った（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

地層では現地表下0.3m前後まで近現代の盛土である（第０層）。0.5m付近まで灰色シルト質砂があり、近世以降の耕作土とみられる（第１層）。その下に褐色粘土質シルトがあって中世の耕作土の可能性がある（第２層）。本層基底面で落込みSX01があった。その下位に黄褐色粘土質シルトがあり（第３層）、0.7m付近から下には黄～橙色シルト～粘土があって地山である（第４層）。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

平面的な検出作業は第2層・第3層の上・下面等で行った。第３層下面では不定形な浅い凹凸が見られた。第２層基底では落込みSX01が検出され、竪穴建物の一部の可能性があるものである。調査範囲では東西幅1.5m以上、南北2.0m以上あり、調査区外にさらに広がっている。深さは検出面からで0.3m前後あった。埋土は最下に地山偽礫を含む褐色粘土質シルトがあり(図3-6)、その上に褐色シルト（同-5）、地山偽礫を含む薄い堆積（同-4）、その上に炭化物を含む褐色粘土質シルトがあった（同-3）。調査範囲では柱穴等は確認できず不明確ではあるが、埋没の状況から竪穴建物の

図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

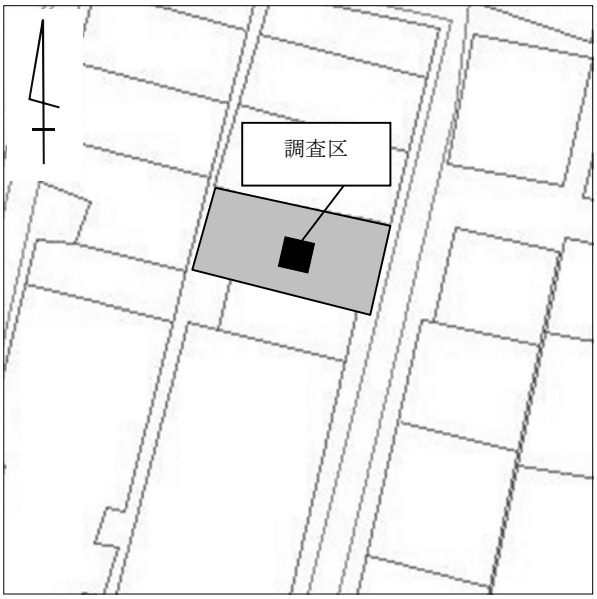


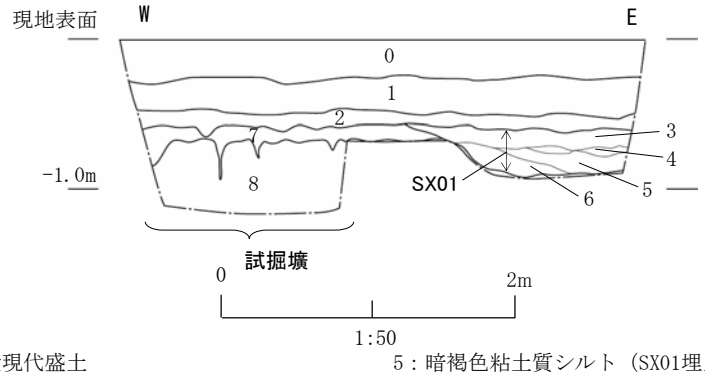
図２　調査区配置図　縮尺1:500

一部である可能性があろう。埋土最上部（図3-3）から弥生時代終末期かとみられる土器や古墳時代後期の須恵器等が出土した（図版3）。須恵器からみて本遺構が最終的に埋没するのは古墳時代後期に下るが、最上部からの出土のため、埋まりきらずに含まれた可能性がある。同様な状況が本遺跡の他の地点で知られていることもあり、遺構の形成と主な機能の時期は遺物の主体となる弥生時代終末頃にさかのぼる可能性もあろう。遺物ではSX01から前述の土器類が、第２層からは瓦器や土師器などが出土している。

〈まとめ〉

本調査地では中世にさかのぼる可能性のある耕作土（第２層）の基底で落込みSX01が検出され、埋土の状況等から竪穴建物の一部である可能性が考えられた。一部の確認のため詳細は明らかにできなかったが、周辺では主に弥生時代終末から古墳時代初め頃にかけての集落にかかわる遺構が確認されており、本地点の遺構もそれに加わる資料の可能性がある。小規模な調査ではあったが、一帯の歴史的変遷にかかわる貴重な資料を得ることができた。

＜主要参考文献＞
大阪市文化財協会1999『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』
大阪市文化財協会1999『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告　1997年度』



0：現代表土・近現代盛土
1：灰白～黄褐色シルト質（第１層　近世作土か）
2：褐色粘土質シルト（第２層　中世作土か）
3：褐色粘土質シルト　（炭化物含む　SX01埋土）
4：黄色シルト偽礫含む褐色粘土（SX01埋土）
5：暗褐色粘土質シルト（SX01埋土）
6：黄色粘土布器含む褐色粘土質シルト（SX01埋土）
7：黄褐色シルト（第３層）
8：黄～橙色粘土～シルト質砂（第４層　地山層）

図３　　北壁地層断面図

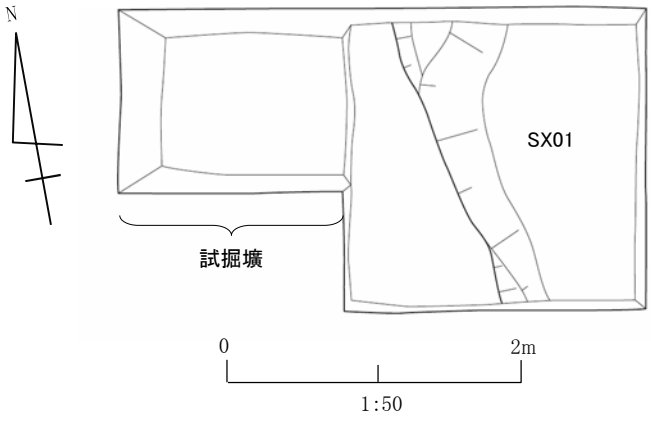


図４　　遺構平面図
（第2層基底面　SX01完掘の状況）

桃ヶ池遺跡発掘調査（SMG17－1）報告書

調 査 箇 所　　大阪市阿倍野区昭和町二丁目4-8

調 査 面 積　　6.8㎡

調 査 期 間　　平成29年7月7日

調 査 担 当 者　　課長　植木 久、櫻井 久之

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は弥生時代から中世の集落跡とされる桃ケ池遺跡の中央付近にあり、昭和初期に区画整理された東西方向に細長い街区の北東コーナーに位置する(図１)。敷地東側の道路は東にある桃ヶ池西岸の影響を受けて北東―南西方向をとっている。調査区は当初、西側隣地に平行するかたちで南北3.0m、東西2.0mの6.0㎡に設定し、調査を開始したが、遺構検出後、遺構の拡がりを確認するため、東壁側を若干拡張し6.8㎡の範囲を調査した(図２)。

〈調査の結果〉

1. 層序（図３・図版１）

調査区の地層は、その南辺では3～5cmの表土層(第０層)を除去すると地山である段丘構成層(第４層）が検出されるという状況で、それとともに検出された段状の落込みの肩から北側では、この落込み内に堆積する第１～３層が見られた。第１層(層厚10cm)は近代作土、第２層(層厚20～30cm)は近世盛土で、上部に第４層起源の偽礫が目立つ。落込み内の最下層である第３層(層厚10cm)は水漬きの層相から水田作土と考えられる。第４層は検出面トップから40cmまでが黄褐色粘土であるが、それより以深では灰白色極細粒砂に変わる。

2. 遺構と遺物（図４・図版１～３）

遺構としては、第１層上面の素掘り井戸SE01、落込み内にある第３層下面の溝SD01のほか第４層

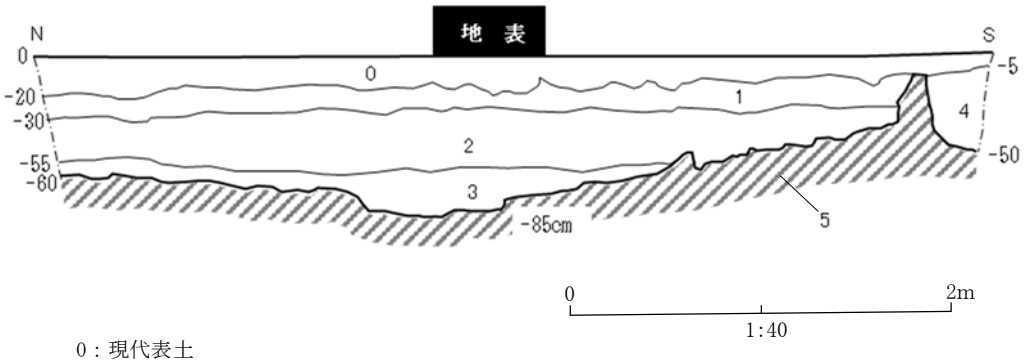
図１　調査地位置図　縮尺1:2,000

図２　調査区配置図　縮尺1:500

上面に検出された柱穴SP01・02がある。SD01は落込みの肩から北に1.5ｍの位置にあり、落込みの肩と平行する方向に幅1.2ｍ、深さ0.15ｍで掘られている。かなり風化が進んでいるが中世以前のものとみられる丸瓦片が出土した。この溝は落込みとともに造られたものであろう。落込み斜面部にはこの掘削時の鋤痕がよく残っていた。柱穴SP01は一辺75㎝の隅丸方形プランをもち、深さ45㎝ある。SP02は深さ20㎝ある。どちらからも遺物は出土しなかったが、暗灰褐色粘土を埋土としており、古代に遡る遺構の可能性が考えられる。

〈まとめ〉

今回の調査で確認した段状の落込みの肩は、調査区東側の道路に直交する方向をとっていた。この道路方向は桃ヶ池西岸に影響されたものと考えられることから、落込みも桃ヶ池との関連で掘削されたものと考えられる。また、古代に遡るであろう柱穴２基が検出できたことは、当該期の集落の存在を窺わせるものとして注目される。



0：現代表土
1：暗灰黄色シルト（第１層　近代盛土）
2：茶灰色シルト（第２層　近世盛土か）
3：灰色粘土（第３層　近世水田作土）
4：暗灰褐色粘土（SP01埋土）
5：黄褐色粘土～灰白色極細粒砂（第４層　段丘構成層）

図３　　東壁地層断面図

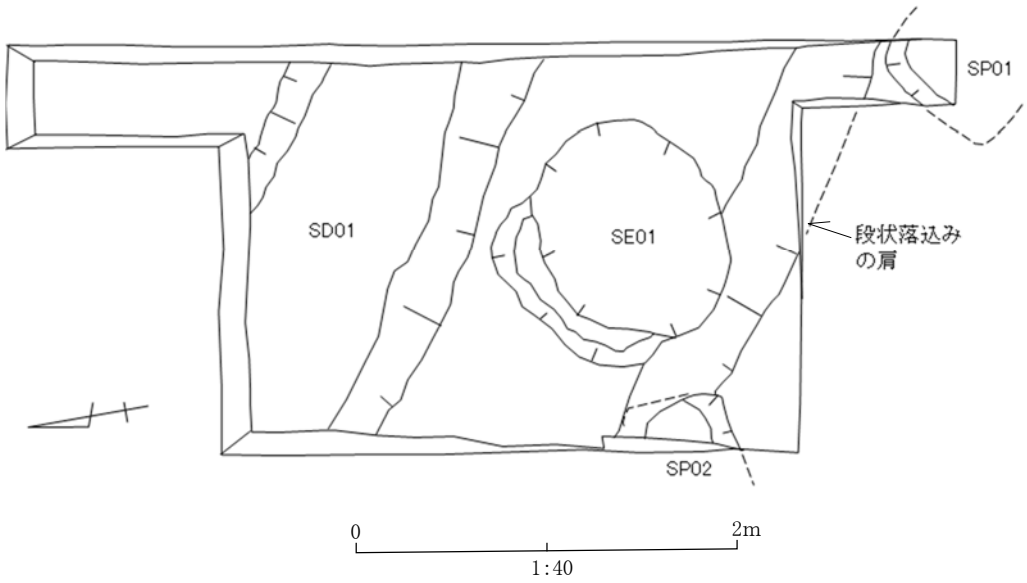


図４　　遺構平面図

西住之江遺跡Ｂ地点発掘調査(SWE17－1)報告書

調 査 箇 所	大阪市住之江区西住之江３・４丁目
調 査 面 積	100㎡
調 査 期 間	平成29年６月22日～６月27日
調 査 担 当 者	課長　植木久、藤原哲、田中裕子、櫻田小百合

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は住之江区西住之江３・４丁目に所在する(図１・２)。地形的には上町台地西側に形成された浜堤上に位置する。調査地の南には1704(宝永元)年に付替えられた大和川が東西に流れ、西側には阪神高速15号堺線の下を十三間川が南北に流れる。周辺の遺跡としては、東の台地上には遠里小野遺跡や山之内遺跡があり、旧石器時代から中世まで幅広い時期の人々の活動のようすが確認されている。調査地の北約１㎞には浜口遺跡が位置し、昭和14(1939)年の土木工事中に鎌倉時代に属するとみられる笹塔婆が納められた一石五輪塔が見つかっている[中村博司1982]。北約90mには西住之江遺跡があり、WE08-1次調査では中世～近世の遺構が検出されており、中世以降耕作地として利用されていたことが明らかにされている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。

調査地は、大阪市営西住之江住宅におけるエレベーター増設工事に先立つ事前協議に基づく試掘調査で新たに発見された遺跡である。平成29年５月～７月にエレベーターを増設する27箇所のうち計７箇所について試掘調査を実施し(図３)、これにより近世前期以前の遺跡が発見されたため西住之江遺跡Ｂ地点として本調査を実施することとなったものである。本調査は埋蔵文化財が確認された1～６号館のエレベーター増設箇所のうち試掘調査箇所を除く11箇所で行った。

調査は平成29年６月22日～27日の４日間で行った。近世の盛土である第２層まで重機により掘削し、これより下位については遺構の検出および実測図の作成と写真撮影による記録作業を行いながら人力により掘下げた。なお、今回調査を行った市営住宅建物の北側のエレベーター増設位置には東西方向に埋設管が敷設されており、この移設を行った後に調査に着手した。このため埋設管による撹乱が大きい調査区については、平面的な遺構検出が困難であったため地層断面の観察による調査とした。

図１　調査地位置図

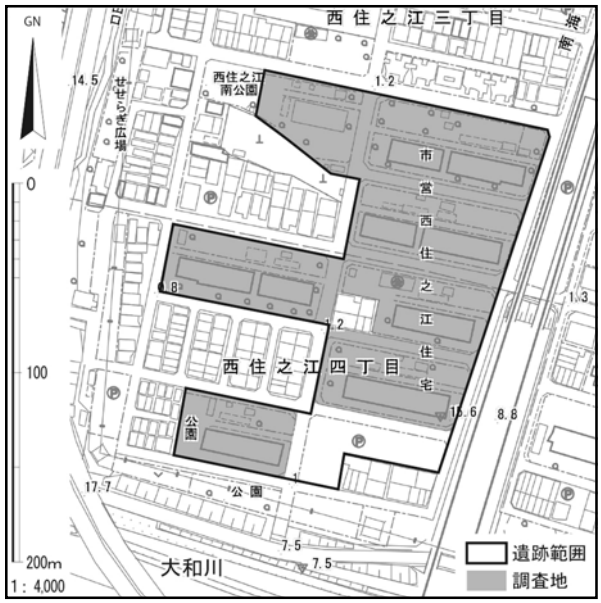


図２　調査地位置図

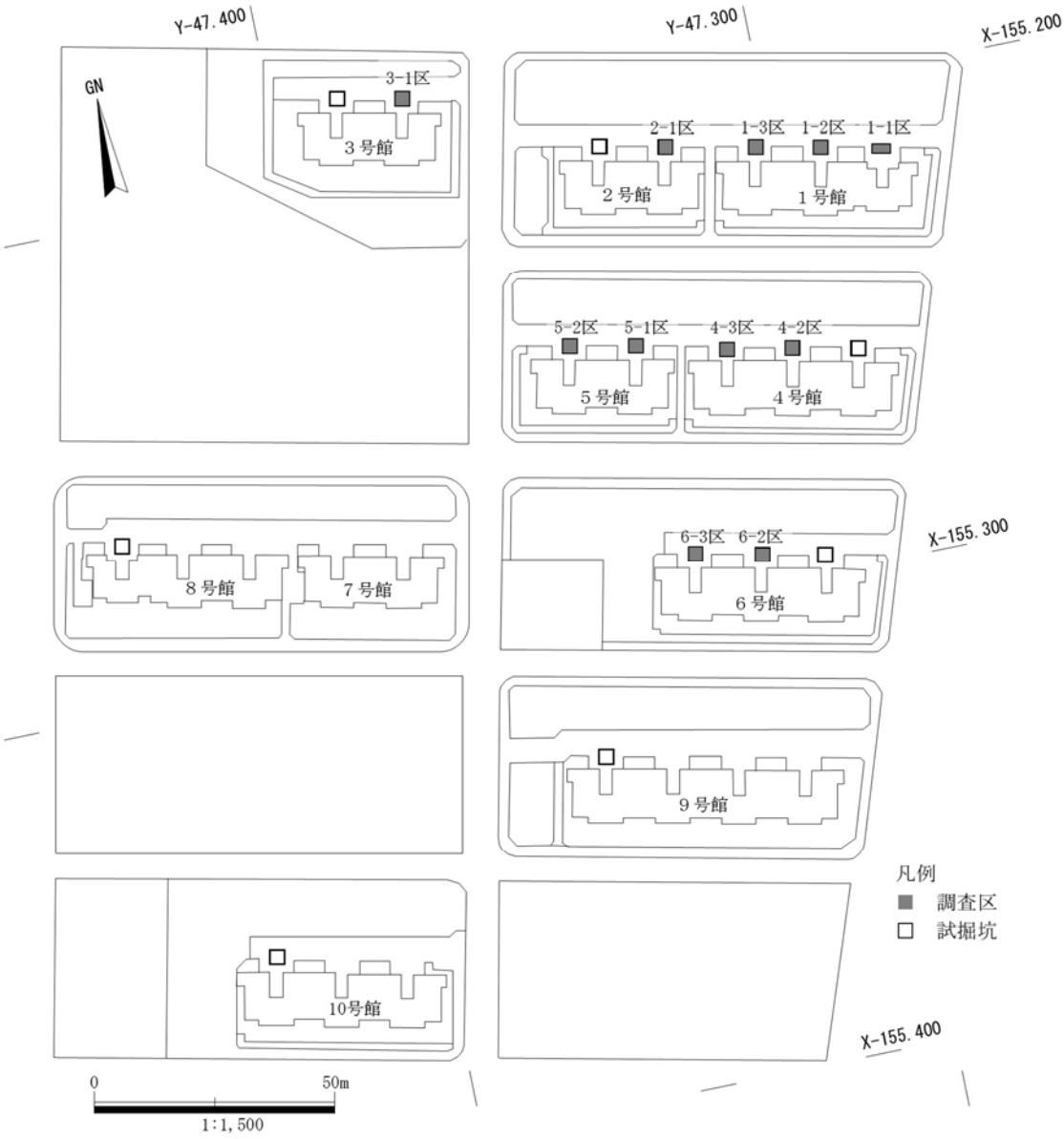


図３　調査区位置図

本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とし、市営住宅の建物を基準として街区図に当てはめて求めたものである。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP±〇mと表記した。

〈調査の結果〉

1. 基本層序（図４）

ここでは調査地における層序の概要について記述し、各調査区ごとの特徴は個別に後述することとする。

調査地における現地表面の標高はTP+1.3～1.6ｍである。

第０層　現代の整地層である。埋設管の撹乱部分についてはGL-0.9～1.8ｍまで及んでいた。

第１層　近現代の作土層である。第０層が比較的深くまで及んでいた２－１区および５－２区では認められなかったものの、調査地のほぼ全域に分布していたものと推定される。市営住宅建設以前には耕作地がひろがっていたことを示している。

第２層　砂礫を主とする近世の地層で、人為層の第2A層と自然堆積の第2B層にわけられる。第2B層

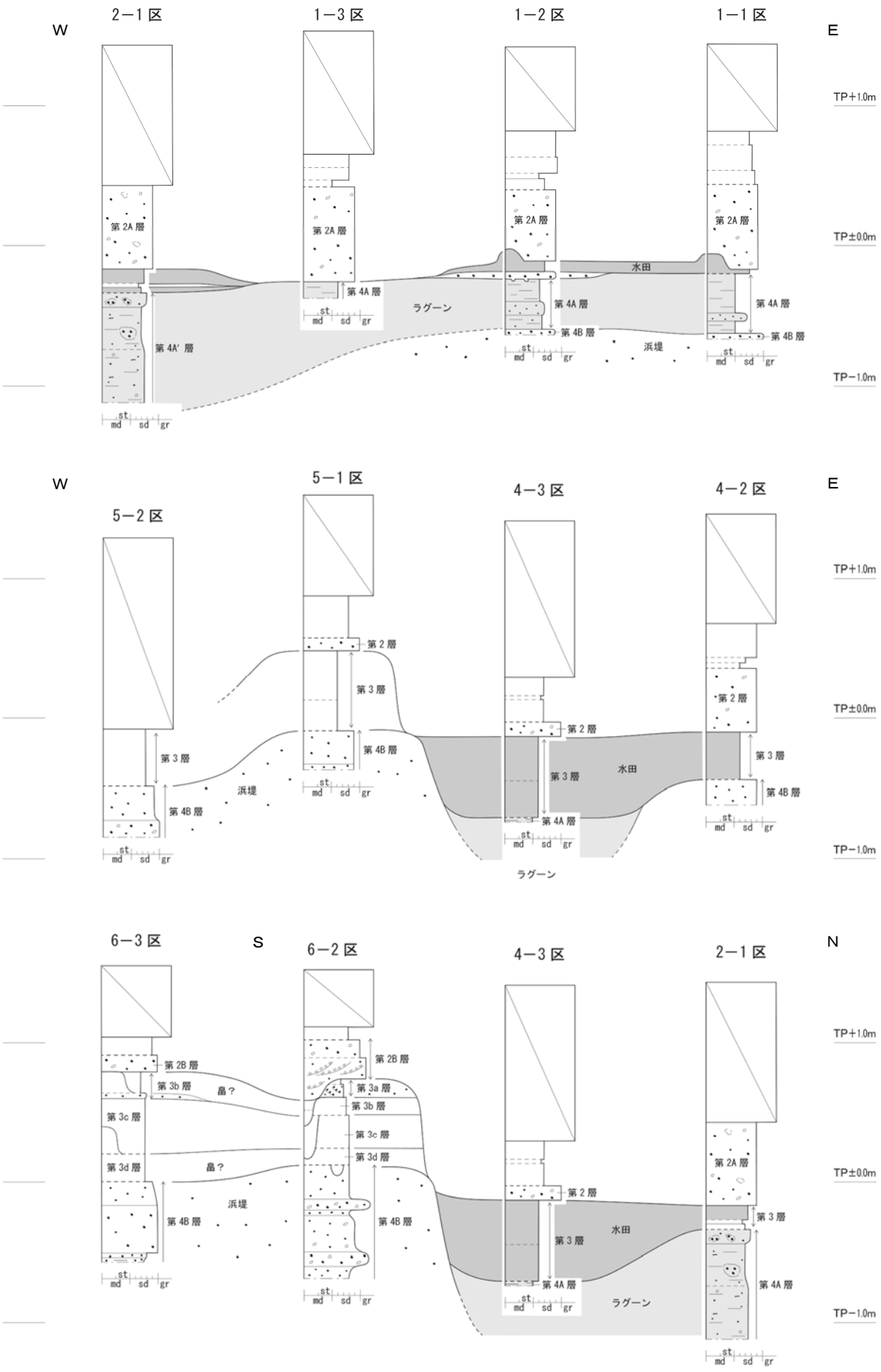

W
2−1 区
1−3 区
1−2 区
1−1 区
E
TP+1.0m
TP±0.0m
TP−1.0m
第 2A 層
第 4A 層
第 4A' 層
第 4B 層
ラグーン
水田
浜堤
st
md
sd
gr
W
5−2 区
5−1 区
4−3 区
4−2 区
E
第 2 層
第 3 層
第 4B 層
浜堤
水田
第 4A 層
ラグーン
6−3 区
S
6−2 区
4−3 区
2−1 区
N
第 2B 層
第 3b 層
第 3c 層
第 3d 層
第 3a 層
畠？
浜堤
第 4B 層
水田
第 4A 層
ラグーン

図４　地層柱状対比図

は６－２・６－３区に分布し、このほかの１・２区および４・５区では第2A層が分布する。第2A層は分級が悪く、わずかに偽礫を含むことから人為的な盛土層と判断できる。第2A層は第2B層に比べて標高の低い部分に分布することから、低地部を嵩上げした可能性がある。洪水堆積物、あるいは大和川や十三間川の浚渫に伴う砂礫を母材とするものと考えられる。第2B層については、６－２・６－３区でトラフ型クロスラミナが認められ、古流向はおおよそ南東から北西方向とみられることから大和川の洪水によるものと考えられる。第２層は出土遺物の年代から19世紀の地層とみられる。なお、第2A層と第2B層の前後関係や時期差の有無については今回の調査では明らかにできていない。

第３層　作土層および水成層からなる。作土層は、第３層の標高が比較的低い１・２・４区ではシルト質の水田作土層が分布し、水田畦畔やこれに付随する溝を検出した。標高の高い６区では砂を主とする畠と推定される作土層が分布し、畝状の遺構を検出した。５区はこれら水田と畠の検出された標高のおよそ中間の高さで作土層が確認されたが、水田か畠かについては判別できなかった。水成層は６－２・６－３区で認められ、たびたび洪水の影響を受けたようすが確認できた。これらの地層の年代は出土遺物から17～18世紀後半とみられる。

第４層　一部人為層を含むものの、水成層を主とする。砂礫で構成される第4B層と、砂泥や泥を主とする第4A層に分けられる。第４層上面の標高が比較的高い５・６区では第4B層のみが分布し、標高の低いこのほかの調査区では第4A層が分布した。このうち、１－１・１－２区では第4A層の下位に極粗粒～粗粒砂が堆積している状況が認められたことから、第4B層の上位に第4A層が堆積しているものと考えられる。第4A層からは15世紀に属する瓦質土器の甕が出土している。第4B層は出土遺物の年代から14～15世紀の地層とみられる。いずれも大和川の付替え前の地層である。第4B層の砂礫層は、６区で厚く堆積している状況が確認されており、調査地周辺の地形から大和川付替え前にこうした多量の砂礫を供給するような河川は想定しにくい。また第4B層上面の標高は５～６区にかけて高く南北方向に高まりを形成する。この東側に沿った２～４区にかけて第4B層上面の標高が低い低地部があり、ここに第4A層が分布する。こうしたことから、第4B層は浜堤の堆積物と推定され、これに対して第4A層は第4B層の堆積に伴って形成された低地(ラグーン)の堆積物と推定される。なお、２-１区では第4A層に岩相のよく似た地層を確認したものの、粗粒砂の偽礫を含むことから第4A層の砂泥を主な母材とした人為的な盛土の可能性がある。標高の低い場所であったことから、盛土により嵩上げされた可能性がある。この地層を第4A’層とした。

2. 各調査区における成果

〈１－１区〉（図５・６、図版１・９上）

１号館東端に位置し、６月26日・27日に調査を実施した。上面で東西４m、南北２mの調査区を設定し、GL－2.2mまで地層と遺構の確認を行った。重機で第2A層上面まで掘削し、以下を平面で検出しつつ、人力で掘下げた。第2A層上面まで下げた時点で湧水があったため、調査区東部にトレンチを設置しポンプで排水を行いつつ掘下げていった。第4A層以下はトレンチ内の壁面でのみ観察している。

【層序】

第０層　現代盛土。

第１層　近現代作土層である。瀬戸美濃焼陶磁器やガラス杯などが出土した。

第１層下部の撹乱層からの出土ではあるが、第１層に属するとみられる遺物**１～３**を図版９に示す。**１**は土師器の壺とみられ、体部外面に人面の墨画がある。**２**は肥前磁器水滴、**３**は瀬戸美濃焼磁器小杯である。

第2A層　灰白色極粗粒～粗粒砂からなり、層厚50～70㎝の盛土層である（③(図では３と表記、以下同)層）。第2B層は分布しない。

本層中から土師器**４・５**、関西系陶磁器**６・７**、肥前磁器**８**、瓦**９・10**など18世紀後半～19世紀

前半の遺物が出土した。４は甕の底部で粗いタタキ成形である。５は土師器焙烙、６は関西系陶器土鍋、７は三田焼とみられる青磁碗、８は肥前磁器染付瓶類である。９は巴文軒丸瓦、10は橘唐草文軒平瓦である。

そのほか、混入品として古式土師器14、須恵器15・16、瓦17なども出土している。14は甕の二重口縁部とみられる。15・16は須恵器甕の体部で、15は外面に格子タタキ、内面に同心円状の当具痕、16は外面平行タタキののちカキメを施し、内面は同心円状の当具痕がある。17は須恵質の雁振瓦で、中世以前のものとみられる。これらは第2A層の盛土をする際にベースとなる土に含まれていたものであろう。

第３層　黒褐色中粒～細粒砂質シルトを主体とする、層厚６～15㎝の近世の耕作土層である（⑤層）。上面で畦畔が２本（SR01・02）検出された（図６）。SR01・02ともにそれぞれ最上部に５㎝

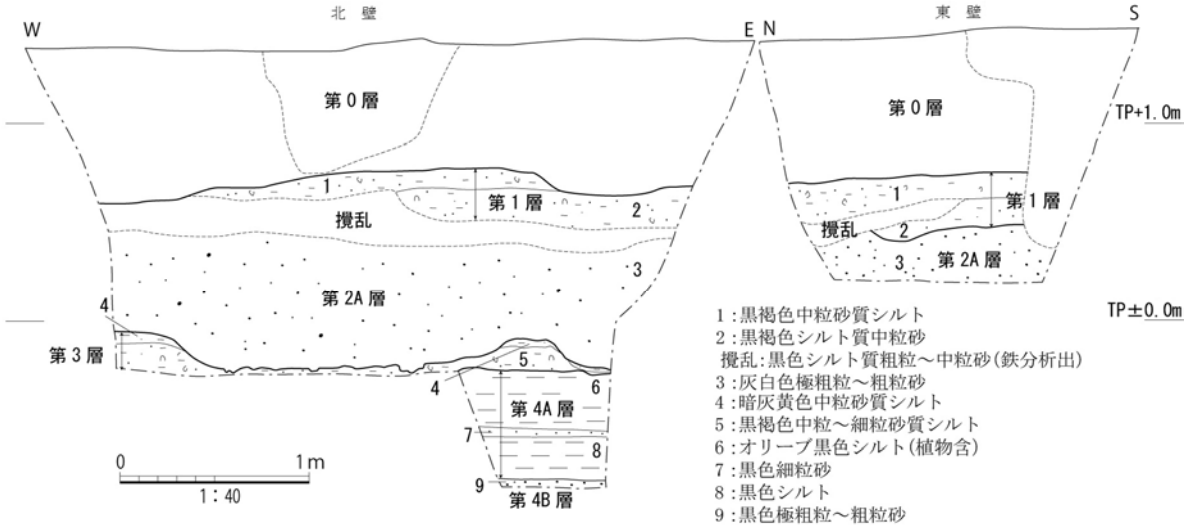


図５　１－１区　北壁・東壁地層断面図

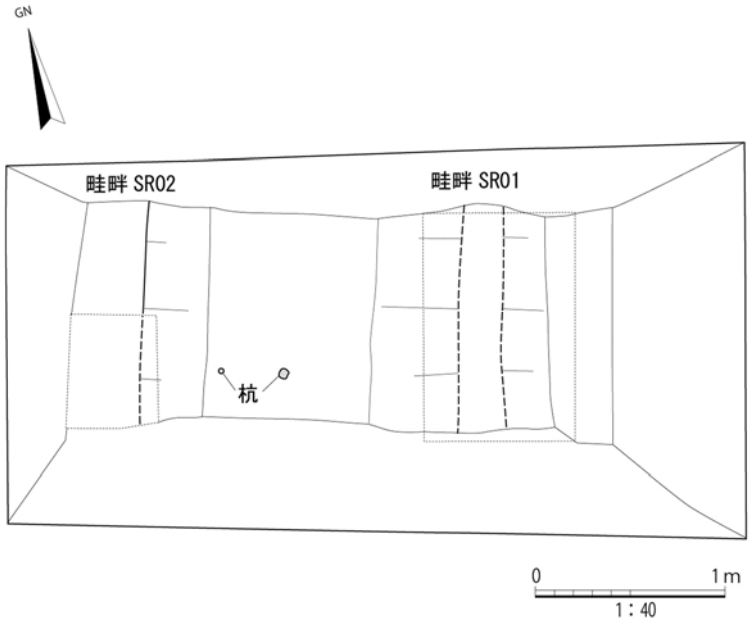


図６　１－１区　第３層上面遺構平面図

ほど泥が堆積していた（④層）。畦畔の間では踏み込みが確認できた。本層はシルトを主体としており、足跡も顕著に確認できることから、水田の耕作土層といえよう。また、畦畔上部に泥が堆積しており、砂の偽礫を含むことから、当地はたびたび洪水などで水没した様子が想定される。

出土遺物は、関西系陶器土瓶11、肥前磁器染付皿12、平瓦13などで、18世紀後半頃に属する。

第4A層　調査区東部の深掘トレンチでのみ確認した。⑥～⑧層に分けられる水成層である。上部の⑥層は層厚30㎝のオリーブ黒色シルトで、植物片が混じる。中部の⑦層は層厚５㎝の黒色細粒砂で、下部の⑧層には層厚20㎝の黒色シルトが堆積している。湿地の堆積とみられ、⑦層の砂はこの湿地が河川氾濫などで水に浸かることがあった様子を示しているといえよう。

なお、⑥層上面で第３層を構成する④層および⑤層を埋土とする足跡が検出された。第３層の水田耕作に伴うものとみられる。本調査区での遺物の出土はない。

第4B 層　深掘りトレンチの底で確認した。黒色極粗粒～粗粒砂からなり、分級がよく、水成層である。遺物の出土はない。

【遺構】

第３層上面で検出した２本の畦畔（SR01・02）は、北東－南西方向で、敷地に対して平行である。SR01は南北の壁面で確認した形状を復元したものである。復元された畦畔の幅は58～100㎝、高さ10～14㎝である。SR02は西半分が調査区外に位置し、確認できた幅は66～74㎝、高さ18㎝である。また、SR02の近くに直径10㎝の杭が２本東西方向に並んで確認された。畦畔の頂部に泥が堆積しており、第2A層で埋め立てられる直前にも水に浸かっていたとみられる。

〈１－２区〉（図７・８、図版２・９下）

６月27日に、東西3.0ｍ、南北2.7～2.9ｍのトレンチを設定して調査を行った。第２層までを重機で掘削し、第３層以下の遺構および地層を人力によりGL－2.0ｍまで掘下げた。遺構の検出は第３層および第４層の各上面で行った。

【層序】

第０層　現代の整地層で、層厚は57～95㎝である。このほか埋設管による東西方向の撹乱があり、現地表面から139㎝に及ぶ。

第１層　近現代の地層で、作土層および水成層で構成される。①・②・④層は作土層である。③層は灰色極細粒砂質シルトからなる泥で、河川の氾濫による増水時に堆積したものと推定される。本層からは、丹波焼小瓶、肥前磁器、瀬戸美濃焼磁器など近世～近代の遺物が出土している。

第2A層　⑤層の中～細礫を含む明黄褐色粗粒砂からなり、層厚は最大64㎝である。ラミナは認められず分級が悪いことから盛土とみられる。

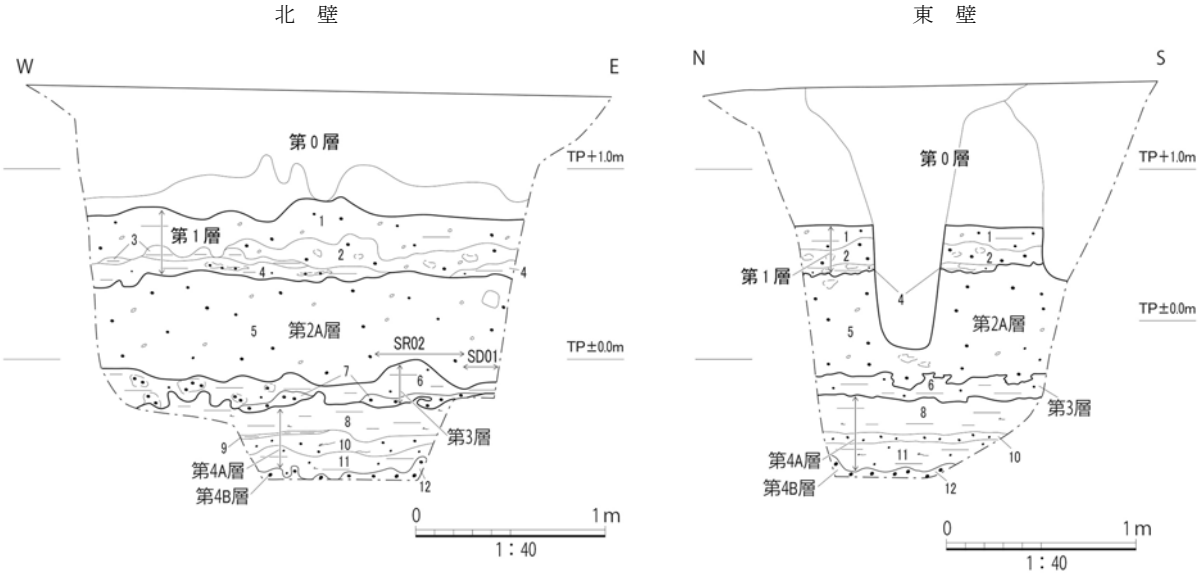
本層から１～11が出土した。１は土師器火入れ、２は肥前陶器鉢、３は堺擂鉢である。４は中国産白磁とみられる底部の小片で、中世に属する可能性がある。５は中国産白磁皿の底部で16世紀後半～17世紀初頭に属する。６・７は肥前磁器で、６は染付皿、７は筒形碗である。８は瀬戸美濃焼磁器碗である。９は肥前磁器の人形、10・11は平瓦である。７や８の年代から本層年代は19世紀前半頃とみられる。

なお本調査区には第2B層は分布していない。

第３層　粗粒砂偽礫を含む黄褐色細粒～極細粒砂質シルトからなる水田作土層の⑥層と、黄褐色粗粒砂からなる水成層の⑦層で構成される。⑥層は層厚２～20㎝で、耕作による撹拌のため下位の⑦層の粗粒砂偽礫が認められる。⑦層は部分的に残存しているのみで、層厚は最大で８㎝である。⑦層は粗粒砂からなる流性の堆積物とみられ、湿地性の堆積物を主とする⑧層以下の第4A層とは堆積状況が異なり、また⑧層との層理面も明瞭であることから第３層に含めた。本層の上面で水田畦畔SR02とこれに付随する溝SD01を検出した。

本層から12～16が出土した。12は土師器火入れ、13は土師器の小片である。14は丹波焼瓶とみられる小片、15は肥前磁器の染付碗の口縁部とみられる小片である。16は平瓦である。これら遺物の

年代から第３層は18世紀後半以降の地層と考えられる。
第４層　⑧～⑫層からなる水成層である。本層の上面で遺構検出を行ったが顕著な遺構はなく、⑦層を埋土とする足跡を検出した(図版２下)。ラグーンの堆積物と推定される⑧～⑪層(第4A層)と、浜堤の堆積物と推定される⑫層(第4B層)で構成される。
⑧層は植物片および黒色有機物片を含む灰色極細粒砂質シルト、⑨層は暗オリーブ灰色極細粒砂質



1：中～細礫を含む灰色シルト質粗粒～中粒砂
2：細粒～極細粒砂質シルト偽礫・中～細礫を含むにぶい黄色粗粒砂
3：灰色極細粒砂質シルト
4：粗粒砂偽礫を含む灰オリーブ色細粒～極細粒砂質シルト
5：中～細礫を含む明黄褐色粗粒砂
6：粗粒砂偽礫を含む黄褐色細粒～極細粒砂質シルト
7：黄褐色粗粒砂
8：植物片・黒色有機物を含む灰色極細粒砂質シルト
9：暗オリーブ灰色極細粒砂質シルト
10：植物片を含む緑灰色細粒砂
11：植物片を含む灰色細粒砂質シルト
12：灰色粗粒砂

図７　１－２区　北壁・東壁地層断面図

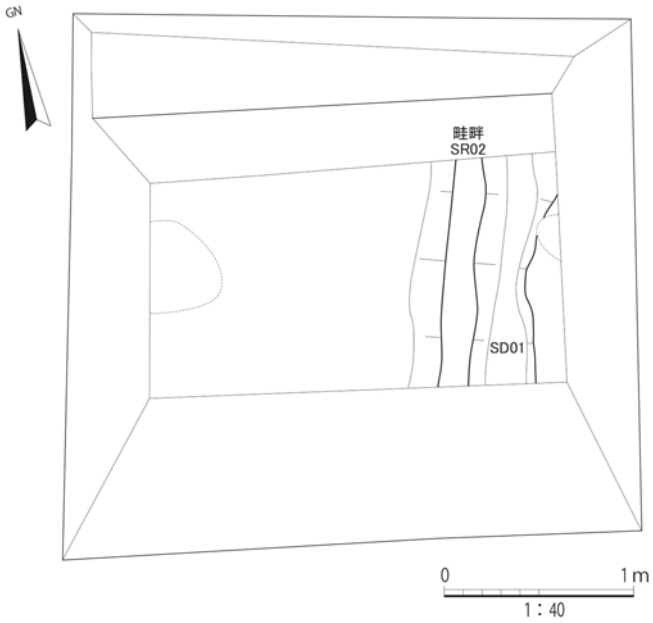


図８　１－２区　第３層上面平面図

シルト、⑩層は植物片を含む緑灰色細粒砂、⑪層は植物片を含む灰色細粒砂質シルトからなり、湿地性の堆積物を主とするものの、一定の流速が推定される細粒砂を含む。最下部の⑪層と⑫層の層理面には不整形な凹凸がみられ、また⑪層の下部には⑫層がブロック状に入り込む部分が認められることから地震による変形の可能性がある。⑧～⑪層から、瓦質土器の甕17が出土している。体部外面には粗いタタキを施し、口縁部は外側に丸く巻き込む形態である。15世紀に属するものとみられる。

⑫層は灰色粗粒砂からなり、層厚は13㎝以上である。浜堤堆積物(第4B層)と推定されるが、確認できたのが一部であることや、堆積構造は認められなかったものの上記の地震による変形が想定されることから、浜堤の堆積物である明確な根拠は得られておらずラグーンの堆積物の一部の可能性もある。⑫層からは土師器の小片18が出土したが、詳細な年代は不明である。

【遺構】

第３層の上面で南北方向の水田畦畔SR02とこれに付随する溝SD01を検出した(図８)。SR02は、SD01の下端を東端として幅0.39～0.50m、高さは西側の水田面からは0.12m、SD01の底からは0.16mである。SD01はSR02の東端に沿うかたちで掘下げられている。

〈１－３区〉（図９、図版３上・10上）

東西3.0m、南北3.0mのトレンチを設定し、6月26日に調査を行った。

【層序】

第０層　現在の整地層である。地表から１mの深さまで黄褐色や青灰色の砂質土等の堆積が認められるが、この他に、調査区の中央部分において東西方向に幅0.8m、深さ1.8mの大きな撹乱(埋設管跡)が存在している。

第１層　暗灰褐色砂の①層と、黄褐色砂の②層、灰色シルトの③層からなり、層厚は暗灰褐色砂層が10㎝、黄褐色砂層が8㎝、灰色シルト層は4㎝を測る。近現代の耕作土と想定される。

第2A層　黄褐色の粗～中砂で、粒子の細かい均一な砂粒よりなり、層厚は60㎝を測る。数点の出土遺物が検出されており、１が肥前磁器染付碗、２が肥前陶器碗、３が巴文軒丸瓦である。同層は他の調査区との関連性から18世紀以降の堆積と推察される。

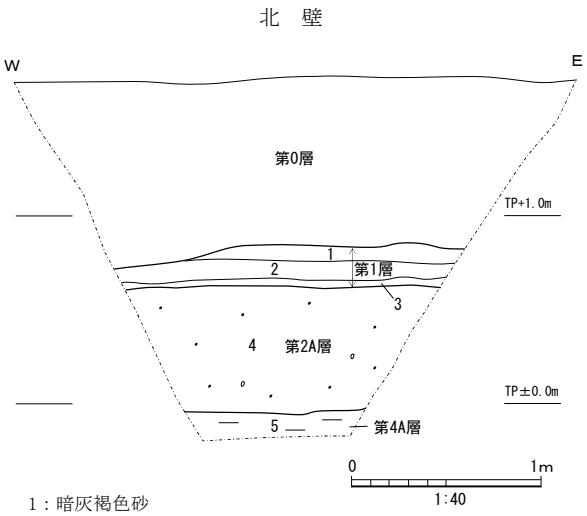


図９　１－３区　北壁地層断面図

第4A層　青灰色の粘土及びシルト層で、自然堆積層である。出土遺物は認められなかった。

〈２－１区〉（図10、図版３下）

６月26日に、東西2.7m、南北2.8～2.9mのトレンチを設定して調査を行った。第０層が比較的厚かったため平面調査は困難と判断し、GL－2.5mまで重機により掘削し地層断面の観察による調査を行った。

【層序】

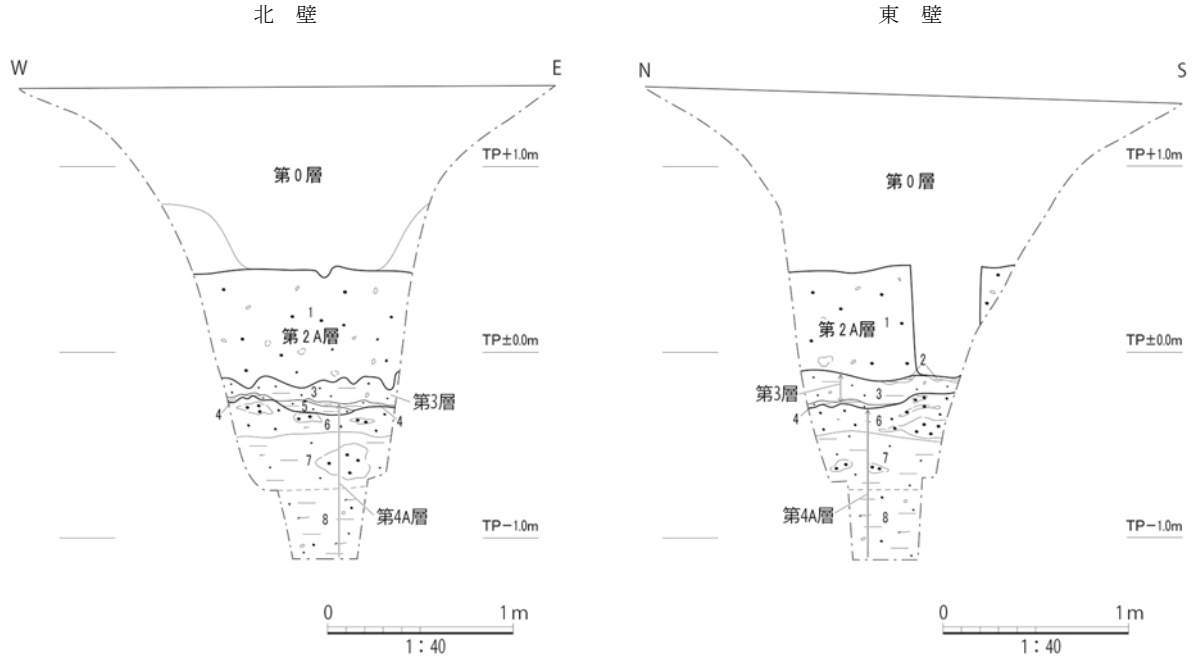
第０層　現代の整地層で層厚は90～102cmである。このほか埋設管の移設に伴う東西方向の撹乱があり、現地表面から152cmに及ぶ。

第１層　本調査区では分布せず、第０層が第２層の直上まで及んでいた。

第2A層　①層の中～細礫・少量の細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含むにぶい黄色粗粒砂からなる。ラミナが確認できないことや偽礫を少量含むことから盛土とみられる。層厚は最大64cmである。なお、本調査区には第2B層は分布しない。

第３層　②層は暗灰黄色極細粒砂質シルトからなる自然堆積の泥で、大和川や十三間川といった周辺河川の増水時に堆積したものと推定される。③層は中～細礫をわずかに含む黄灰色シルト質中粒～細粒砂からなる耕作土である。シルト質であることや東の１－１・１－２区との対応から水田作土層と推定される。④層は黄灰色細粒～極細粒砂質シルトからなる泥で増水時に堆積したものと考えられる。⑤層は暗灰黄色細粒砂質シルトからなり、作土層とみられるが遺構の埋土の可能性もある。作土層と泥が互層になっており、周辺河川の氾濫によりたびたび耕作地が泥をかぶったようすが確認できる。

第4A’層　⑥層は粗粒砂偽礫・少量の炭を含む灰オリーブ色中粒砂からなり、層厚は9～26cmである。⑦層は粗粒砂偽礫・少量の炭を含む灰オリーブ色・灰色細粒砂質シルトからなる。⑦層と⑧層の層界は不明瞭であったが概ね層厚は30cm前後である。⑧層は細礫・植物片を含む灰色中粒～細粒



1：中～細礫・少量の細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含むにぶい黄色粗粒砂
2：暗灰黄色極細粒砂質シルト
3：中～細礫をわずかに含む黄灰色シルト質中粒～細粒砂
4：黄灰色細粒～極細粒砂質シルト
5：暗灰黄色細粒砂質シルト
6：粗粒砂偽礫・少量の炭を含む灰オリーブ色中粒砂
7：粗粒砂偽礫・少量の炭を含む灰オリーブ色・灰色細粒砂質シルト
8：植物片・細礫を含む灰色中粒～細粒砂質シルト

図10　２－１区　北壁・東壁地層断面図

砂質シルトからなり、層厚は40㎝以上である。⑥・⑦層はいずれも粗粒砂をブロック状に含むことから人為的な盛土と推定され、⑧層についても細礫を含み分級が悪いことから人為的な盛土の可能性がある。

なお、本調査区では遺物は出土していない。

〈３－１区〉

東西3.0m、東西2.4mのトレンチを設定し、6月27日に調査を行った。

３－１区は現在使用中のガス管が埋設されており、調査区全面にわたって配管に伴う撹乱が存在していた。地表下1.8mまで掘削をしたが、全面に撹乱層が確認され、遺構と遺物は認められなかった。

〈４－２区〉（図11、図版５上、10下）

【層序】

第０層　現在の整地層(水平堆積)は地表下１ｍまで層序として続くが、調査区の中央部分において東西方向に幅1.1m、深さ1.6mの大きな撹乱(埋設管)が存在している。

第１層　近現在の作土層で、①層の良く締まった灰色砂礫層と②層の有機質を含む黒褐色土層、③層の暗灰色粘土層よりなる。層厚は灰色砂礫層が24㎝で黒褐色土層と暗灰色粘土層は４㎝～６㎝を測る。

第２層　黄褐色の細砂層で、粒子の細かい砂粒が主体で小礫も含む。層厚は50㎝を測り、ラミナは認められない。近世の盛土である。出土遺物は**１**が土師器の焙烙の底部片でローリングを受ける。**２**は土師器の焙烙あるいは鍋で口縁部分が肥厚化する。これらの遺物の年代は18世紀後半以降が推定できる。**３**は中国産の白磁皿で見込部分は蛇の目釉剥ぎである。12世紀頃に属する。**４**は平瓦である。

第３層　粘性のある灰色のシルト層で、層厚は32㎝を測る。

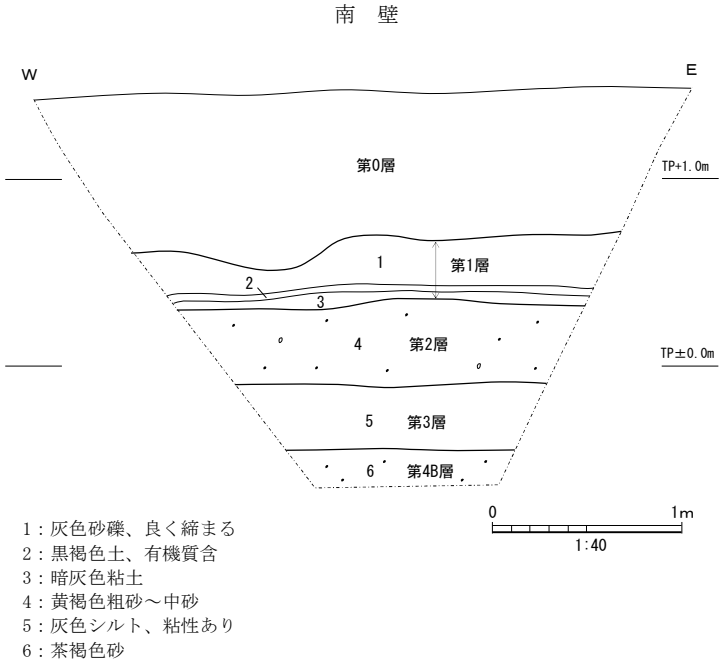


図11　４－２区　南壁地層断面図

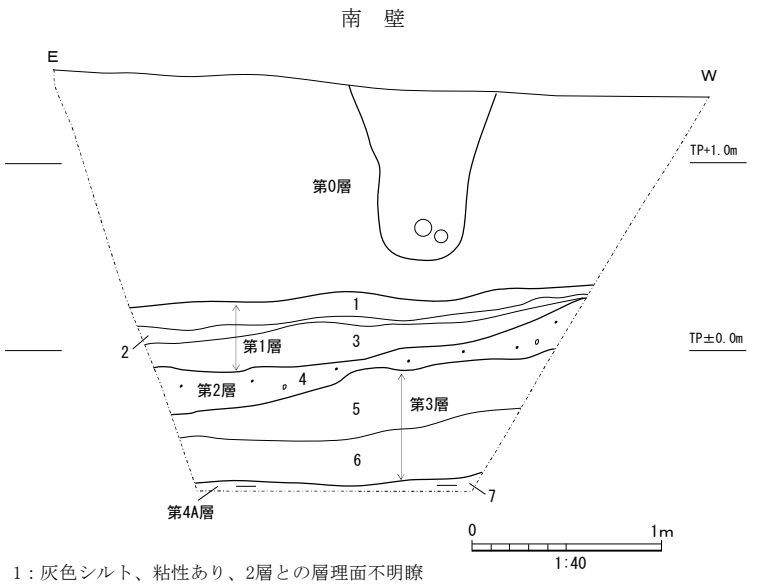


図12　４－３区　南壁地層断面図

第4B層　灰褐色の砂質シルトで小礫を含む。検出した層厚は20㎝である。盛土の可能性があるが、遺物は検出されなかった。

〈４－３区〉（図12、図版５下）

東西3.4m、南北3.0mでのトレンチを設定し、6月22～23日に調査を行った。

【層序】

第０層　現在の整地層で、地表から1.1mの深さまで整地層が堆積している。調査区の南北と東西の両方で埋設管が確認でき、南北方向のものは地表下60㎝の高さで塩ビ製の埋設管が現存している。この外、東壁側では1.4mの深さまでコンクリート製の建物基礎が存在しているなど、本調査区は後世の撹乱が非常に激しかった。

第１層　層厚10㎝の粘性のある灰色シルト層(①層)と層厚10～20㎝の鉄分を含む粘性のある黒色シルト層(③層)に挟まって、層厚４㎝の灰色粘性シルト層(④層)が堆積する。このうち、①層と②層との層理面は不明瞭である。近現代の旧耕作土だと想定される。

第２層　黄褐色の粗～中砂で、粒子の細かい砂粒を主体とするが小礫も含む。層厚は最大20㎝を測り、西側にやや高く、東側に向かって低く傾斜して堆積しているが、断面の観察では、同層は南北方向は概ね水平に堆積していた。出土遺物は認められないが、他のトレンチの土層との類似性から、近世の堆積(第２層)と考えられる。

第３層　⑤層の粘性のある暗灰色シルトと⑥層の淡灰色粘土層よりなる。これら粘土層は、近世以前のある時期の作土層が想定されるが、遺構・遺物共に確認できなかった。

第4A層　青灰色の粘土、及びシルト層の水成層である。

４－３区では客土や撹乱層からの現代の陶磁器類を除いて、出土遺物はなかった。

〈５－１区〉（図13、図版５下、11上）

東西3.4m、南北3.0mのトレンチを設定し、6月26日に調査を行った。

【層序】

第０層　現在の整地層は地表下60㎝まで続くが、調査区の中央部分を東西方向に幅1.4ｍ、深さ180㎝の大きな撹乱(埋設管跡)が存在している。但し、南側と北側の壁では、地層の堆積状況を把握することができたため、以下では、これを基に５－１区の層序を記述する。なお、図示したのは調査区の南壁の地層断面図であるが、撹乱が存在するため、 一部は北側壁から復元している。

第１層　層厚26㎝の黒色砂層で、耕作土が想定される。

第２層　層厚8㎝の淡灰色砂層である。出土遺物はないが、第２層の近世の層に比定できる。

第３層 ③の層厚32㎝の灰色の粘土質シルト層と、④の粘性があり偽礫を含む層厚20㎝の灰色粘質シルト層よりなる。近世の盛土、又は作土層が想定されるが、遺構は確認できなかった。

第4B層　⑤の黄褐色砂層と⑥の鉄分を含む暗褐色砂層からなる。水成層である。

出土遺物は④～⑤層にかけて若干の出土遺物が検出された。このうち、**１・２**は肥前磁器で、**１**

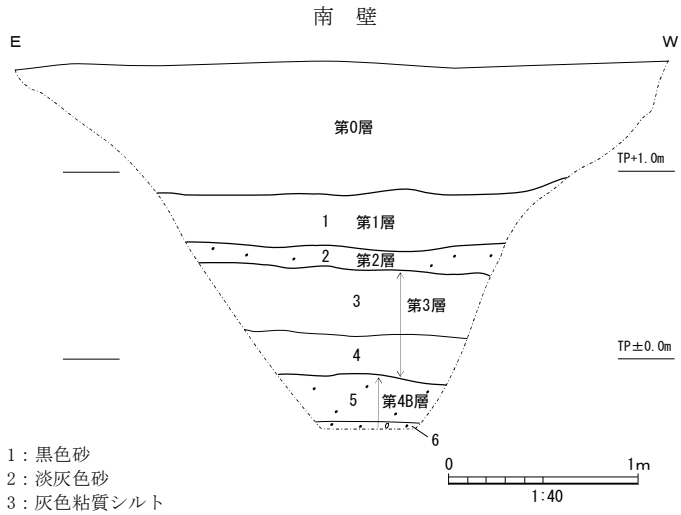


図13　５－１区　南壁地層断面図

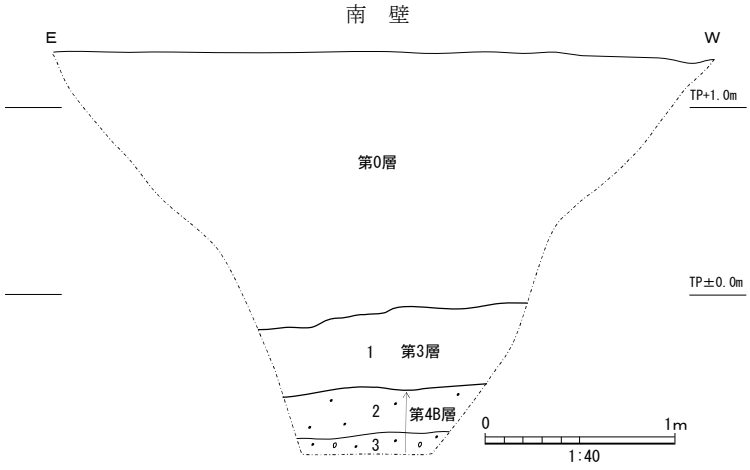


図14　５－２区　南壁地層断面図

は染付碗、２は白磁碗である。２は撹乱に伴って混入した可能性もある。

〈５－２区〉（図14、図版６上、11上）

東西3.4m、南北3.0mの調査区を設定し、6月26～27日に調査を行った。

【層序】

第０層　現在の整地層で、地表(ＧＬ－)下1.4mまで続いている。またこの他に、調査区の中央部分を、東西方向に幅7m、深さ1.8mの大きな撹乱(埋設管跡)が存在している。

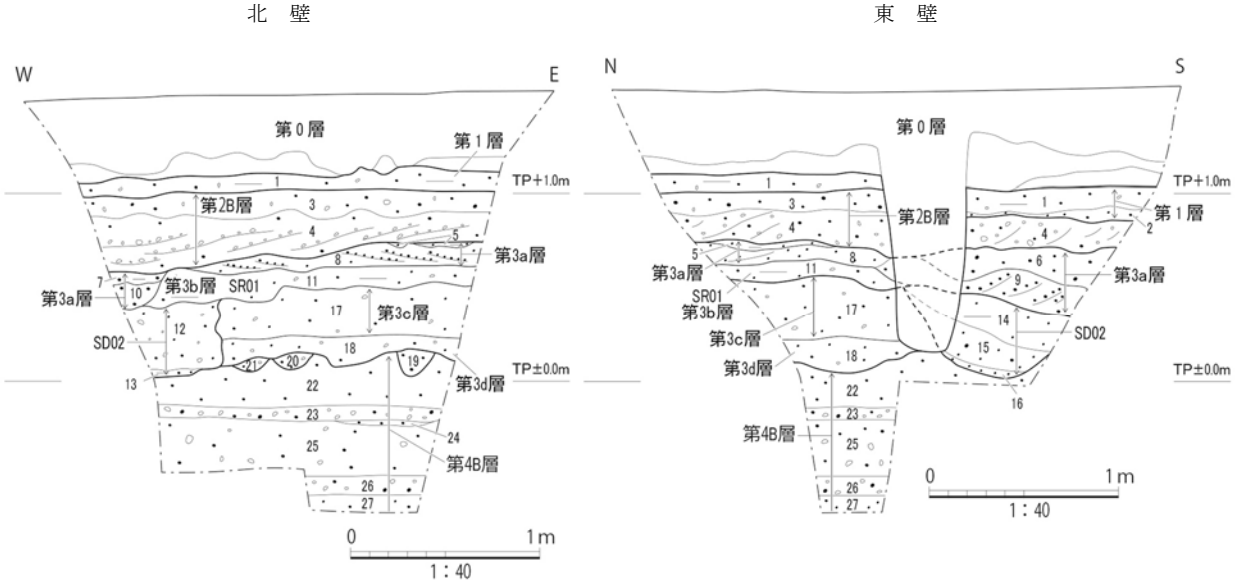
第１層　層厚44cmの暗灰色の粘土質シルト層で、作土が想定される。西側にやや高く、東側に向かって低く傾斜して堆積するが、東側壁の観察によると、同層は南側にやや高く、北側に向かって低い。現代の陶磁器片を包含しており、近現代の耕作土と考えられる。

第4B層　②・③層からなる。②層は礫、偽礫を含む黄褐色の砂層で、層厚は24cmを測る。出土遺物は３と４の土師器の小皿が２点出土している。このうち、３は体部が直線的に開くもの、４は口縁端部が丸く内湾する。③層は鉄分を含む暗橙色の砂礫層で、出土遺物はなかった。

〈６－２区〉（図15～18、図版６下・７・11下・12上）

東西2.8～3.0m、南北3.3mのトレンチを設定し、６月22日～23日に調査を実施した。第２層までを重機で掘削し、第３層以下の遺構および地層を人力によりGL－2.2mまで掘下げた。遺構の検出は第3b・3c・４層の各上面で行った。

【層序】



1:中～細礫をわずかに含む黒色わずかにシルト質中粒砂
2:灰褐色中粒～細粒砂
3:中～細礫を含む灰白色極粗粒～中粒砂
4:灰白色中～細礫・粗粒～中粒砂
5:暗灰黄色シルト質細粒砂
6:黄褐色粗粒～中粒砂主の極粗粒～中粒砂
7:暗灰黄色わずかにシルト質粗粒砂
8:灰黄色中粒～細粒砂
9:黄褐色粗粒～中粒砂
10:灰黄色粗粒砂
11:中～細礫をわずかに含む暗灰黄色シルト質中粒～細粒砂
12:中～細礫を含む暗灰黄色中粒～細粒砂
13:暗灰黄色シルト質中粒～細粒砂
14:灰黄褐色シルト質細粒砂
15:暗灰黄色細粒砂主の極粗粒～細粒砂
16:オリーブ褐色細粒砂
17:中～細礫をわずかに含む暗灰黄色中粒～細粒砂
18:中～細礫をわずかに含む暗灰黄色中粒～細粒砂
19:暗灰黄色中粒砂主の粗粒～中粒砂
20:中～細礫をわずかに含む灰黄色中粒～細粒砂
21:中～細礫をわずかに含む灰黄色中粒～細粒砂
22:褐灰色中粒砂
23:褐色中礫～粗粒砂
24:灰黄色中粒砂
25:黄褐色大～細礫を含む粗粒～中粒砂
26:黄褐色中礫～極粗粒砂
27:黄灰色中粒～細粒砂

図15　６－２区　北壁・東壁地層断面図

第０層　現代の整地層で層厚は28～42㎝である。このほか埋設管の移設に伴う東西方向の撹乱があり、現地表面から138㎝に及ぶ。
第１層　中～細礫をわずかに含む黒色わずかにシルト質中粒砂の①層と灰褐色中粒～細粒砂の②層からなる現代の作土層で、層厚は６～20㎝である。
第2B層　③層は中～細礫を含む灰白色極粗粒～中粒砂からなり層厚は８～16㎝、④層は灰白色中～細礫・粗粒～中粒砂からなり、層厚は14～32㎝である。③層は堆積構造が確認できないことから④層の上部が擾乱されたものと推定される。④層にはトラフ型クロスラミナが顕著にみられ、古流向はおおよそ南東から北西方向である。

遺物は肥前陶器碗とみられる口縁部１、丹波焼小片２、軟質施釉陶器皿３、平瓦４が出土している。これらの遺物の年代から本層の年代は18世紀後半～19世紀初頭頃とみられる。
第３層　耕作土および水成層で構成される。耕作の単位から、第3a層(⑤～⑩層)、第3b層(⑪層)、第3c層(⑰層)、第3d層(⑱層)に区分できる。

第3a層は、⑤～⑦層の作土層、⑧～⑩層の水成層で構成される。後者の水成層が堆積した後、この上部を耕作したのが⑤～⑦層とみられる。下位の第3b層上面のSR01上の高い部分には⑤層、低い部分には⑥・⑦層の耕作土が分布する。⑤層は暗灰黄色シルト質細粒砂からなり、第２層の水成層が堆積した際に削られており部分的な残存状況であった。層厚は最大5㎝である。⑥層は黄褐色粗粒～中粒砂を主とする極粗粒～中粒砂からなり層厚は最大17㎝、⑦層は暗灰黄色わずかにシルト質粗粒砂からなり層厚は最大14㎝である。水成層の⑧層は灰黄色中粒～細粒砂からなり、層厚は最大13㎝、⑨層は黄褐色粗粒～中粒砂からなり、層厚は最大21㎝、⑩層は灰黄色粗粒砂からなり、層厚は最大15㎝である。⑧・⑨層中にはトラフ型クロスラミナが確認でき、古流向はおおよそ南西から北東方向である。

第3b層は、⑪層の中～細礫をわずかに含む暗灰黄色シルト質中粒～細粒砂からなる作土層である。層厚は８～18㎝である。本層の上面でSR01を検出した。遺物は、土師器皿５、土師器焙烙６、肥前磁器染付碗７、肥前磁器の小片８が出土している。これら出土遺物の年代から18世紀後半以降の地層とみられる。

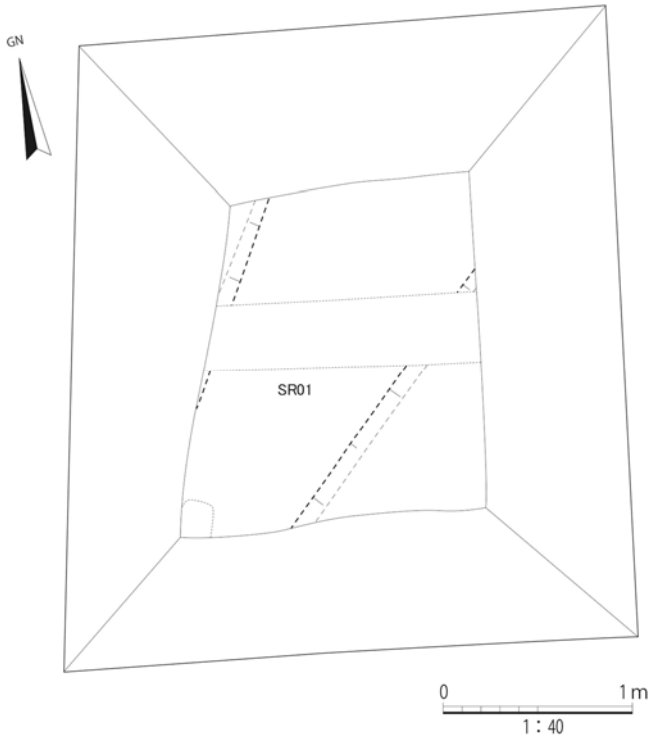


図16　６－２区　第3ｂ層上面平面図

第3c層は⑰層の中～細礫をわずかに含む暗灰黄色中粒～細粒砂からなる作土層である。層厚は20～34㎝である。本層の上面でSD02を検出した。

第3d層は⑱層の中～細礫をわずかに含む暗灰黄色中粒～細粒砂からなる作土層である。層厚は７～20㎝である。

第3c層・第3d層からは土師器皿９・10、被熱した平瓦片11が出土している。小片のみのため地層の年代を判定するのは困難であるが、後述する第3c層上面で検出したSD02が17世紀代におさまるとみられることから、第3c層および第3d層は17世紀代の耕作土であろう。
第4B層　㉒～㉗層の砂礫からなる水成層で、層厚は85㎝以上である。本層からは12～15が出土している。12は土師器の甕あるいは釜とみられる小片である。13は㉕層から出土した瓦質の釜で、14世紀に

属するとみられる。14は常滑焼の甕とみられる小片である。15は中国産青磁碗である。

【遺構と遺物】

第3b層の上面で北東－南西方向のあぜ状の高まりSR01を検出した。幅は1.14～1.24ｍ、高さは20㎝である。幅が比較的広いことや、⑪層がシルト質砂のため水田作土の可能性は低いと考えられることから、畠の畝と推測される。

第3c層の上面でSD02を検出した。SD02は北西－南東方向の溝で、上層のSR01と直行する方向である。幅は1.12～1.36ｍ、深さは43㎝である。底にはわずかに泥が溜まったようすが確認でき、これより上位は人為的に埋められたものと推定される。

遺物は16～24が出土した。16～19は土師器皿である。16・17は直線的に開く形態であることから17世紀初頭頃に属するものとみられる。20は土師器焙烙で、17世紀初頭頃に属するものであろう。21は肥前陶器碗である。22は二次焼成による焼き縮みがみとめられる。肥前磁器あるいは肥前の陶胎染付の可能性がある。23は肥前磁器の皿である。24は被熱により赤変した平瓦で、磨滅が顕著である。このほか壁土の小片が出土している。これらの遺物には17世紀初頭以降17世紀代の遺物を含むことから、SD02の年代は17世紀後半頃とみられる。

第４層の上面でSK03・SP04を検出した。SK03は、東西0.34ｍ以上、南北0.32ｍ以上の土壙で、暗灰黄色わずかにシルト質中粒砂を埋土とする。深さは10㎝である。SP04は直径0.10ｍ、深さ15㎝の小穴で、埋土は暗灰黄色中粒砂主の粗粒～中粒砂である。このほか、北壁断面で第3d層系埋土の浅い凹みを確認しており、鋤溝あるいは小穴の可能性がある。

このほか撹乱内から25～29が出土

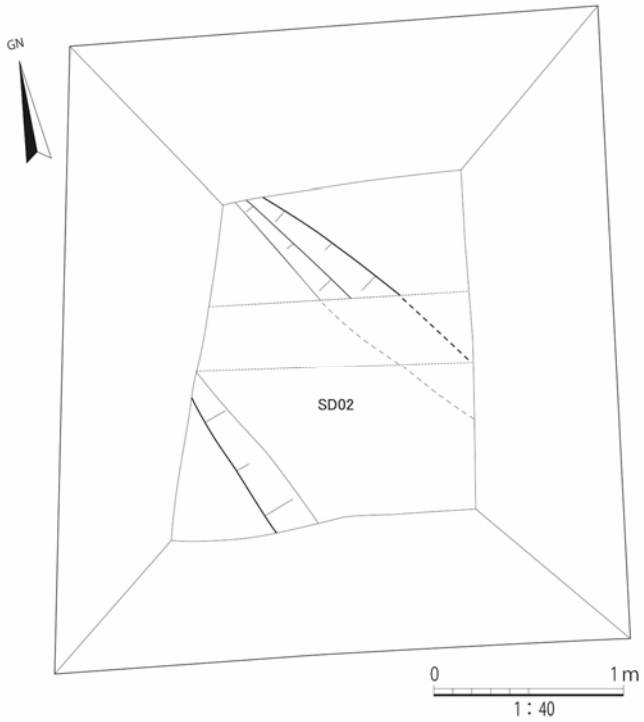


図17　６－２区　第3c層上面平面図

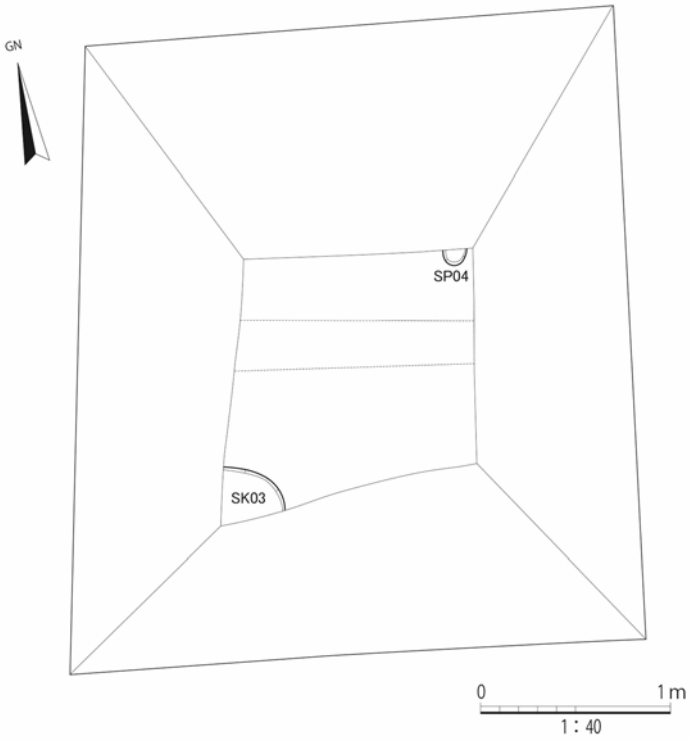
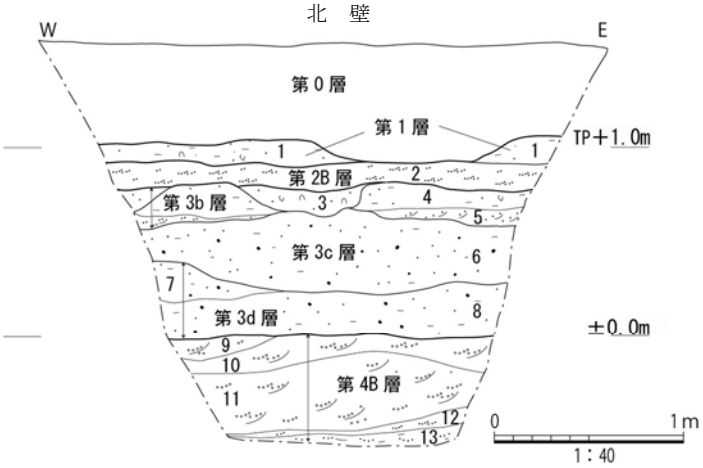


図18　６－２区　第４層上面平面図

した。25～27は土師器小片である。28は焼成不良の瓦質土器の小片とみられる。29は管状土錘で中世に属するものとみられる。

〈６－３区〉（図19・20、図版８・12下）

６号館東端に位置し、６月23日に調査を実施した。上面で東西３ｍ、南北３ｍのトレンチを設置し、第2B層の砂まで重機で掘削した。以下を平面で検出しつつ人力で掘下げ、GL－2.0ｍまでの地層と遺構の確認を行った。



1：黒褐色粗粒砂
2：明黄色中礫含む極粗粒砂
3：明黄色細粒砂
4：黄褐色シルト質細粒砂
5：明黄色中粒砂
6：灰黄褐色シルト質中粒砂
7：灰黄褐色シルト質中粒砂
8：黄褐色シルト質中粒砂
9：暗黄褐色粗粒砂
10：暗黄褐色極粗粒
11：暗黄褐色極粗粒～粗粒砂
12：暗黄褐色中粒砂
13：暗黄褐色シルト質中粒砂

図19　６－３区　北壁地層断面図

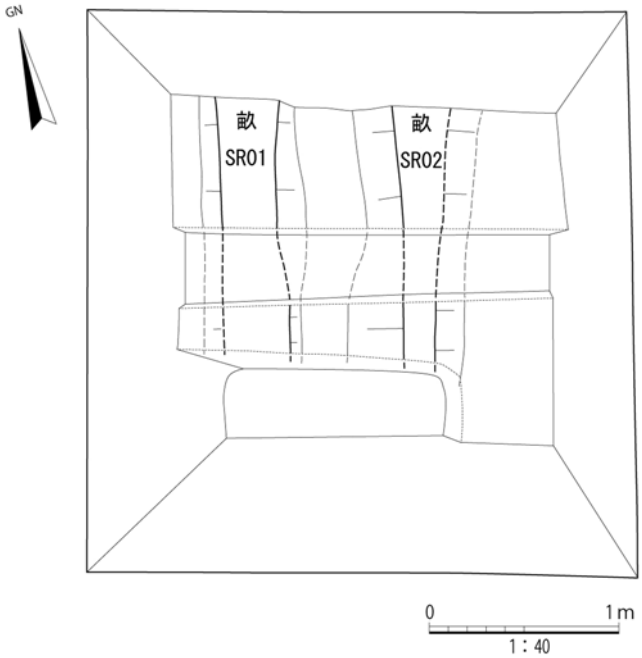


図20　６－３区　第３層上面遺構平面図

【層序】
第０層　現代盛土層で層厚は40～60㎝である。
第１層　近現代作土層で、層厚は15㎝である。
第2B層　明黄色中礫含む極粗粒砂からなり、層厚15㎝の氾濫堆積層である(②層)。東壁では北西方向へ傾くラミナが観察され、古流向は南東から北西方向とみられる。関西系陶器碗１など18世紀後半～19世紀前半頃の遺物を含む。なお、ここでは第2A層は分布しない。
第３層　近世以前の耕作土を構成する地層である。３層に細分でき、６－２区との対応により上から第3b層、第3c層、第3d層とする。なお、第3a層に対応する地層は本調査区では確認できなかった。第2B層によって削平された可能性がある。
第3b層は③層～⑤層によって構成される。畝間部分の③層は明黄色細粒砂からなり、層厚10～15㎝で、撹拌されている。主体となる耕作土層は④層で、黄褐色シルト質細粒砂からなり、層厚15㎝である。下部に明黄色中粒砂からなる層厚２～10㎝の自然堆積層(⑤層)があり、④層はこの⑤層の自然堆積層を耕起して畝として形成されている。本層は砂をベースとしており、畠の耕作土層と考えられる。出土遺物は、土師器皿２・３、肥前磁器染付碗４～９など、18世紀代に属する。大和川付替え以降の耕作土層である。
第3c層は灰黄褐色シルト質中粒砂(⑥層)からなり層厚40～45㎝、第3d層は黄褐色シルト質中粒砂(⑧層)からなり層厚20～30㎝を主体とする。いずれもよく撹拌された耕作土層である。平面では把握できなかったが、北壁の断面で第3d層の上面に畝(⑦層)が確認できた。本層も第3b層同様砂をベースとしており、畠の耕作土層とみられる。
第3c・3d層からは、土師器12～14、国産陶器10・11、輸入陶磁器15～17など、17世紀前葉までの遺物が出土している。12・13は土師器皿、14は甕である。10・11は肥前陶器で10は鉄釉の甕、11は碗である。15は中国産青磁碗の体部の破片とみられる。16は中国産青磁皿の口縁部とみられ、輪花状で内面に線刻がある。16は龍泉窯系の青磁であろう。17は中国産青花碗の高台で、外面に圏線があり、畳付けに細かな砂が付着している。
第3c・3d層は大和川付替え以前の耕作土層の可能性がある。
第4B層　暗黄褐色中粒～粗粒砂からなり、層厚60㎝以上である。分級がよく水成層である。中世以前の堆積とみられる。
第3c～4B層一括で取り上げた遺物は、土師器18～21・28～31、瓦器22、国産陶器23・24、輸入磁器25・26・32で、14～17世紀初頭までに属する。
18～21・28・29は土師器皿である。30・31は甕の体部で、30は外面に粗いタタキ、内面は粗いハケ調整である。23は肥前陶器の鉢とみられる。24は備前焼甕の体部である。25は中国産青磁碗で15と同一個体の可能性がある。26は中国産青花皿で見込みに花弁文が描かれる。32は中国産青花碗の端反の口縁部で外面に二重の圏線が描かれる。26・32はいずれも景徳鎮窯系であろう。
【遺構】
第3b層上面で北東－南西方向の畝SR01・02を検出した。それぞれ幅50～62㎝、高さ15㎝である。北壁では見られなかったが、東壁・西壁では畝の上部に薄い泥の堆積が観察できた。水に浸かることがあった様子が想定される。

〈まとめ〉
・第4B層の堆積により浜堤が拡大し調査地周辺が離水したこと、浜堤の形成とともにラグーンが形成されたことが確認できた。浜堤の形成時期は、出土遺物の年代から14～15世紀とみられる。これまで中世頃の海岸線については、鎌倉時代末期に建てられたとされる住吉高灯籠の位置をもとに十三間川のライン付近と推定されてきた(図１)[大阪都市協会編1985]。今回の成果もこれと矛盾せず、考古学的な根拠を示すことができたといえる。
・第３層の状況から耕作地としての本格的な開発は大和川付替え後の18世紀以降とみられるが、

６－２・６－３区の第3c・3d層の耕作土の年代が17世紀代とみられることから、開発時期は少なくとも大和川の付替え前の17世紀代にさかのぼるということが確認できた。また、中世段階に形成された浜堤上の微高地と低地のラグーンという地形が、その後の耕作地としての開発にも影響を与え、微高地上は畠として、低地部は水田として利用されたことがうかがえた。

このほか、大和川の付替え以降は大和川や同年に延長された十三間川の氾濫によりたびたび耕作地が被害を受けたようすも確認できた。

[引用・参考文献]
大阪市都市協会編1985、『住之江区史』、住之江区制十周年記念事業実行委員会
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「住之江区西住之江三丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(W08－1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.519－525
大阪市博物館協会 大阪文化財研究所2011、『住之江区浜口西三丁目における埋蔵文化財試掘調査(HG10－1)報告書』
中村博司1982、「研究ノート 笹塔婆納蔵一石五輪塔を出土した住之江区浜口の一遺跡について」：『大阪の歴史』６、pp.66-82、大阪市史料調査会

南住吉遺跡発掘調査（SMN17－1）報告書

調 査 箇 所	大阪市住吉区南住吉一丁目８１－１
調 査 面 積	16㎡
調 査 期 間	平成29年５月29日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

南住吉遺跡では弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が主に見つかっており、調査地はその北よりに位置する。敷地北部に東西・南北４ｍ角の調査区を設定し作業を行った（図１・２）。現地表下０．７～０．８ｍ前後まで重機で掘削し、それ以下は重機と人力を併用して調査した（図３・４）。

〈調査の結果〉

1．層序(図３・図版１)

現地表下０．５ｍ前後までは近現代の盛土であった（第０層）。その下の０．６ｍ付近まで褐灰色シルト質砂があり、近世あるいは近代の作土とみられる（第１層）。その下は遺構の埋土等で部分的に認められた地層である。粘土偽礫を含む褐色シルト質砂（第２層）、褐色シルト（第３層）があり、近世以前とみられる。それらの下に部分的に黄褐色砂質シルト（第４層）があり、中世の可能性がある。それらの下位に淡赤褐色～黄白色粘土質シルト～中粒砂があって地山である（第５層）。

2．遺構と遺物(図４・図版１・２)

遺構は地山である第５層の上面で主な検出作業を行い、切り合い関係や埋土の特徴などからいくつかに区分された。もっともさかのぼるのが東部にあるSX01で、第４層で埋まり、中世の可能性がある。その後がSX02～04などで中世あるいは近世とみられた。もっとも後出するのはSX06～10など

図１　調査地位置図　縮尺1:10,000

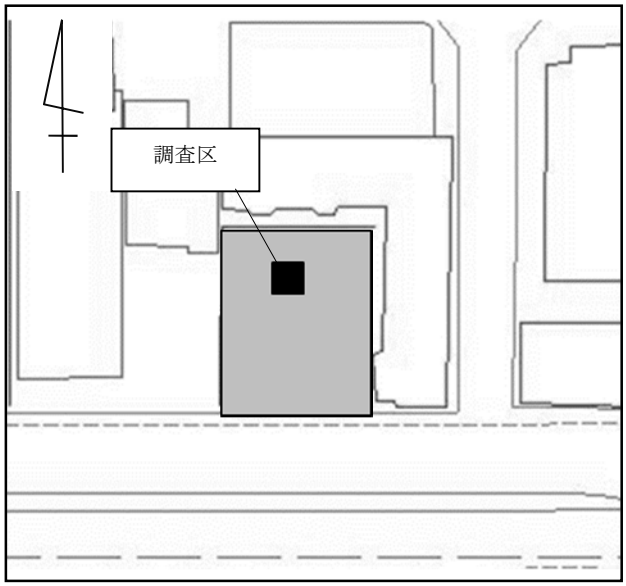


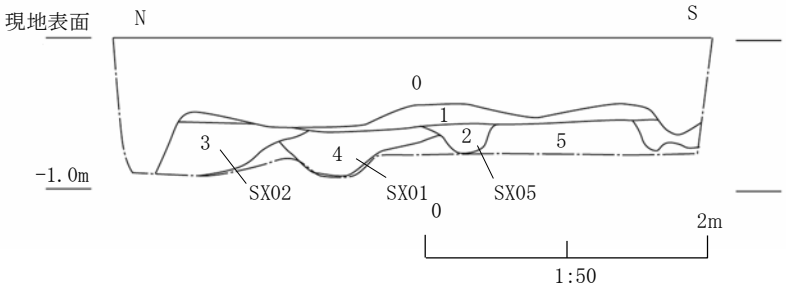
図２　調査区配置図　縮尺1:1,000

で、近世あるいは近代にくだる可能性があるものである。

遺物では、SX03から土師器・須恵器・瓦など、SX04からは土師器・須恵器・瓦器・瓦など、SX06から近世陶磁器を含む遺物が出土している。

〈まとめ〉

本調査地では、地山である第５層の上に中世以前とみられる第４層があり、耕作等に活用されていたことが推測された。近世以降も耕作等に活用されていたと考えられた。なお、遺物には古代以前のものも少量含まれており、そうした時代の遺構も近辺にあることが推測される。主として中世以降の開発を知ることのできる資料が得られた。



0：現代表土・近現代盛土
1：褐灰色シルト質砂（第１層　近世あるいは近代耕作土）
2：粘土偽礫を含む褐色シルト質砂（第２層　近世以前堆積か）
3：褐色シルト（第３層　近世以前堆積か）
4：黄褐色砂質シルト（第４層　中世堆積か）
5：淡赤褐～黄白色粘土質シルト～中粒砂（第５層　地山）

図３　　東壁地層断面図

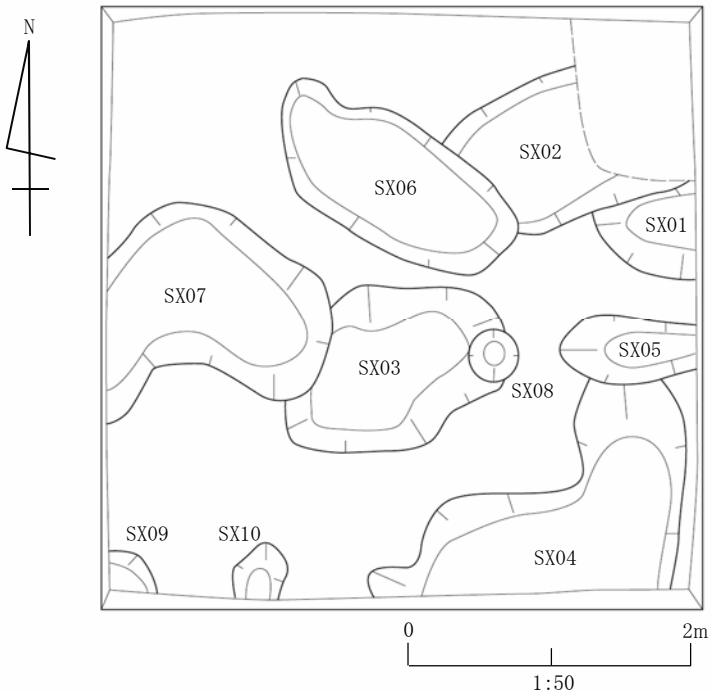


図４　　遺構平面図

帝塚山古墳群発掘調査（STZ17－1）報告書

調 査 箇 所	住吉区帝塚山西一丁目3－1
調 査 面 積	12㎡
調 査 期 間	平成29年10月5日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は帝塚山古墳群内にあり、国史跡の帝塚山古墳近くに位置している。周辺では古墳時代をはじめとする遺構や遺物が確認されている。敷地の北西よりで東西3m、南北4mの調査区を設けて作業を行い（図1・2）、攪乱内も含めると現地表下1m程度までの状況を確認した（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

調査を行った敷地は西の道路面より0.5～0.6mほど高く、断面図では敷地内の高さを現地表面として図示している。地層では厚さ0.4～0.5m前後の近現代の盛土（第０層）の直下で地山面が確認でき、褐色砂などからなる近世の堆積（第１層）が部分的に残っている状況だった。以下は黄白～灰白色シルト～砂で地山である（第２層）。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

平面的な検出作業は第２層の地山層の上面で行った。地山面はかなり削られているようだったがいくつかの遺構が確認され、小型の凹凸が広がるSX01群、落込みSX02・03およびSX04などがあった。SX01群は直径0.3～0.1m程度の小穴等が分布するところで、耕作等に伴う落込みの可能性がある。SX02・03はそれぞれ一部の確認で全形は不明だが方形を呈するとみられる落込みである。SX02は幅1.5m、03は1.2mほどの幅がある。埋土は地山の偽礫を含むシルト質で埋め戻されており、土採りによる穴の可能性がある。遺物は少ないが近傍の類例からみて近世のものと思われる。SX04は幅0.5

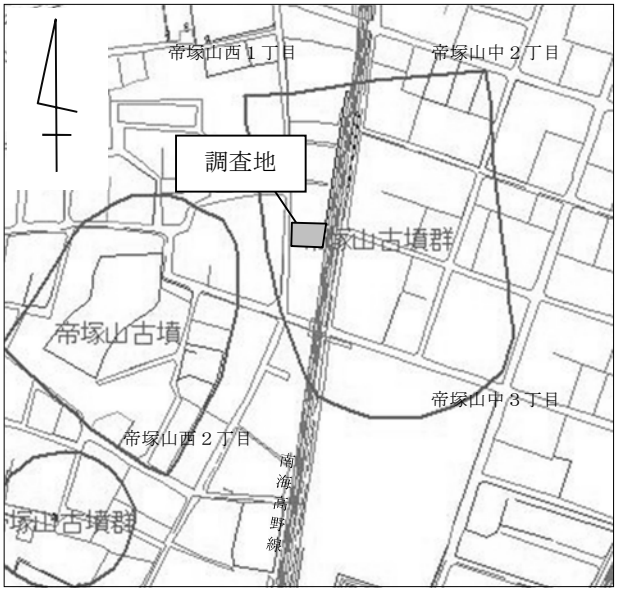


図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

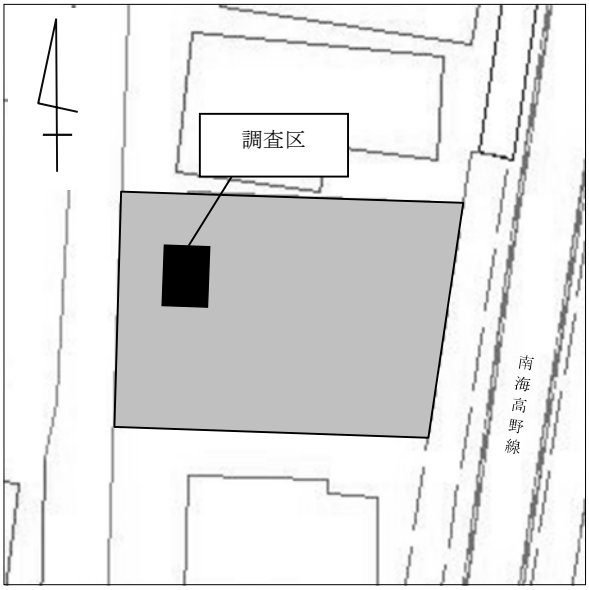


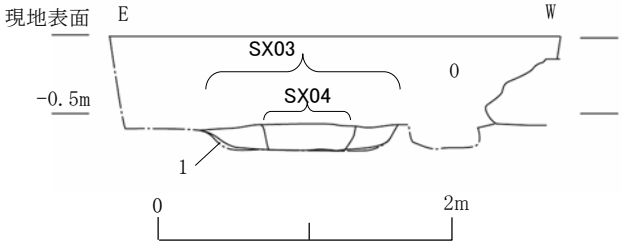
図２　調査区配置図　縮尺1:500

mほどの落込みでSX03を掘り込んでおり、地山層に由来する偽礫で埋められていた。近世以降のものと思われる。

遺物ではSX01群から土師器や須恵器、瓦器など、SX02から土師器片、SX03からは土師器高杯などが出土している。

〈まとめ〉

本調査地では地山面が浅いところで確認され、その上面で遺構が検出された。古墳に直接的に関連、あるいは古墳時代の明確な遺構はなかったものの、中世以降の遺構が確認された。遺物には古墳時代にさかのぼる時期のものもあり、一帯の変遷にかかわる基礎的な資料となった。



0：現代表土・近現代盛土（第０層）
1：黄白～灰白色シルト～砂（第２層　地山層）

図３　　南壁地層断面図

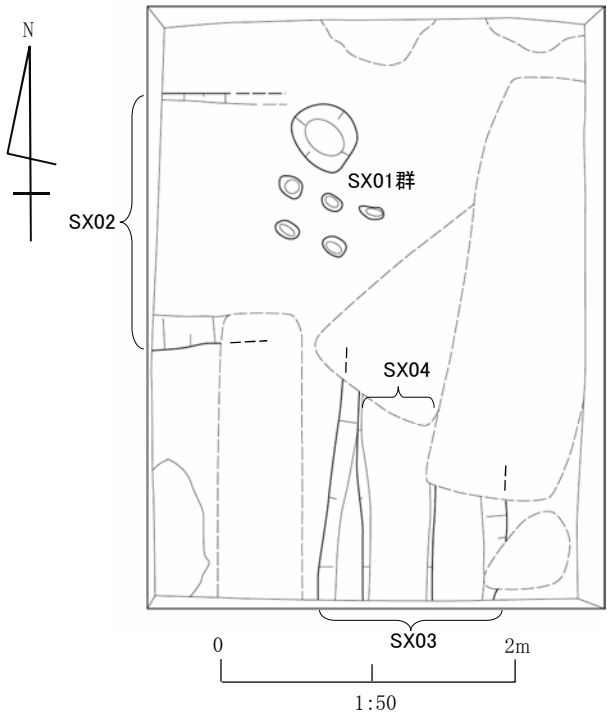


図４　　遺構平面図

南田辺遺跡発掘調査（SMQ17－1）報告書

調 査 箇 所	東住吉区山坂二丁目57－5
調 査 面 積	9㎡
調 査 期 間	平成29年8月24日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

南田辺遺跡は中世の集落にかかわる遺跡で、本調査地はその南東よりに位置しており、難波大道跡にも近接した地域である。周辺では古代から近世にかけての各時代の調査成果が得られている。敷地内の東寄りで南北1.5m、東西6mの調査区を設けて作業を行い（図1・2）、攪乱内など部分的な確認等も含め現地表下約1.2mまでの地層を確認した（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

調査区では東端に近現代の攪乱があり、現地表下1.2mほどまで掘削されているところがあった。地層では現地表下0.2～0.4mまでは近現代の盛土である（第０層）。その下に近世以降の耕作土とみられる褐灰色砂質シルト（第１層）、中世にさかのぼる可能性のある黄褐色砂質シルトがあった（第２層）。それらの下位の0.4～0.5m以下には橙～黄白色砂質シルト～砂があり、自然堆積の地山である（第３層）。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

主な遺構は第３層の地山上面で検出し、小穴SP01および落込みSX02などが確認された。SP01はSX02の基底で見つかり、直径0.2mほどで柱穴ではないようである。SX02は調査区南半で東西方向に延びる落込みで、調査した範囲で幅0.7m、深さ0.2mほどである。埋土は第２層と共通している。

遺物ではSX02から土師器細片が出土している。

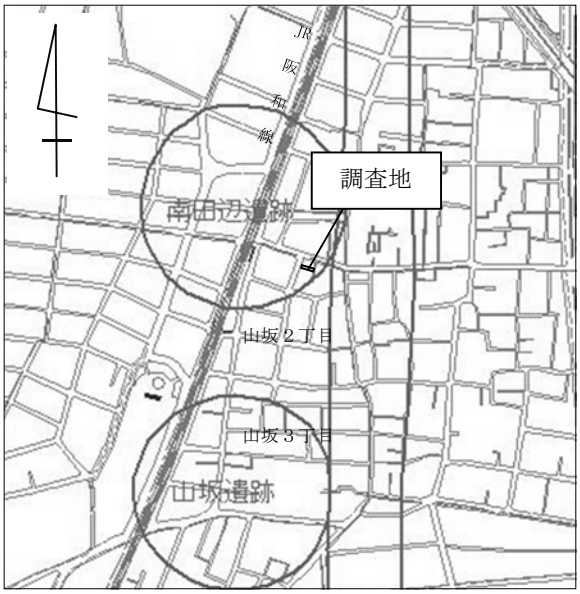


図１　調査地位置図　縮尺1:10,000

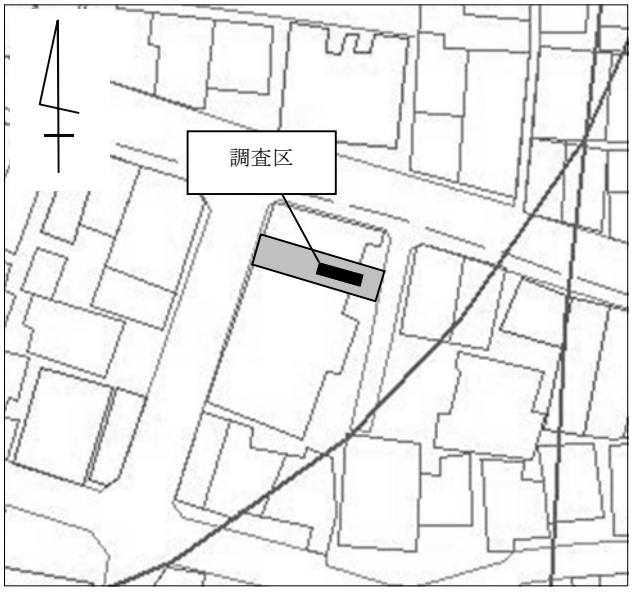
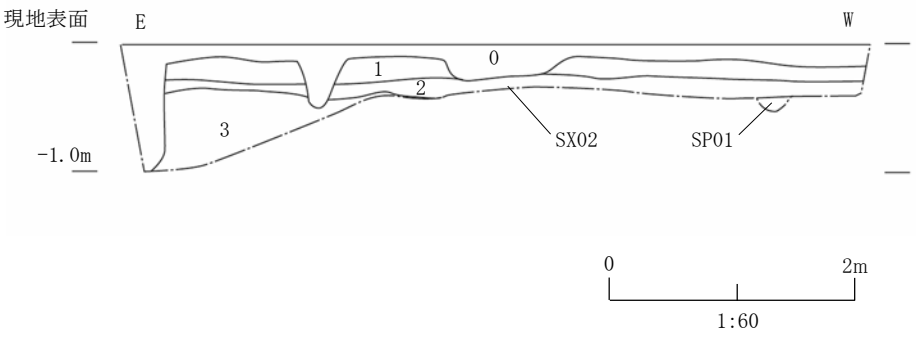


図２　調査区配置図　縮尺1:1,000

〈まとめ〉

本調査地では調査区東部での攪乱はあったものの、地山上面で東西方向に延びる落込みなどの遺構が確認された。周辺で見つかっている古代にさかのぼる遺構は確認できなかったものの、調査地周辺の歴史の復元についての基礎的な資料を得ることができた。



0：現代表土・近現代盛土

1：褐灰～黄褐色砂質シルト（第１層　近世以降の耕作土か）

2：黄褐色砂質シルト（第２層　中世堆積か）

3：橙～灰白色砂質シルト～砂（第３層　自然堆積・地山）

図３　　南壁地層断面図

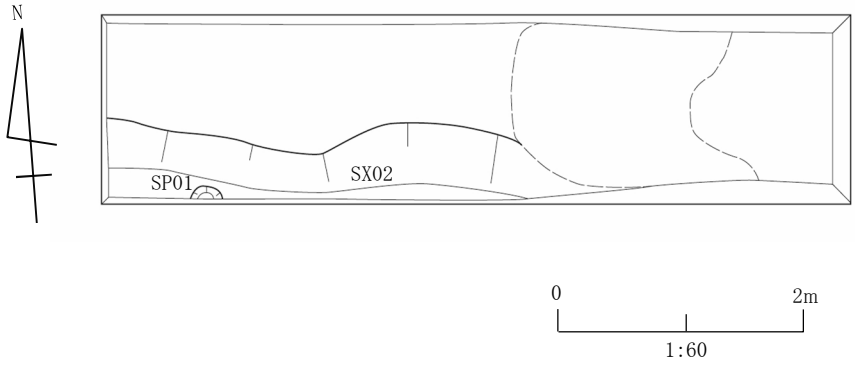


図４　　遺構平面図

南田辺遺跡発掘調査（SMQ17－2）報告書

調 査 箇 所	大阪市東住吉区山坂一丁目56-2他4筆
調 査 面 積	20㎡
調 査 期 間	平成29年9月7日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、櫻井 久之

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は中世の集落跡である南田辺遺跡の東端付近にあり、当遺跡の東にある難波大道跡に近接する位置にある(図１)。東西方向に細長い敷地は、周囲の敷地よりも数十cm高くなっており、もと長屋建物の建っていたところを大正時代に買取り、幼稚園としたという。敷地南辺沿いの東寄りに、東西10.0m、南北2.0mの調査区を設定した(図２)。

〈調査の結果〉

1. 層序（図３）

平成29年７月28日に敷地南東隅付近で試掘調査を行ったところ、現在の地表面から20cm下に瓦器・土師器を含む中世の遺物包含層があり、そして40cm下には地山層があり、それを掘込む遺構の存在が確認された。今回の調査区内も試掘個所と同様な状況で、現地表面から30～40cmで地山層に達し、その直上に第１層とした灰黄色シルト質粘土層が見られた。第１層は厚いところで10cm程度あった。第２層とした地山は灰褐色粘土層で堅く締まっている。検出面トップから50cm以上同様な状況で連続しており、層相の変化はなかった。

2. 遺構と遺物（図３・図版１・２）

試掘調査時の遺構は柱穴の可能性が高く、それに関係する遺構の存在が期待されたが、今回の調査区では、幼稚園のプールの排水用に造られた地下埋設物や旧長屋建物に関係するとみられる土管やコンクリート製円筒などによって多くの部分が攪乱されていた。しかし、調査区中央部には第１

図１　調査地位置図　縮尺1:2,000

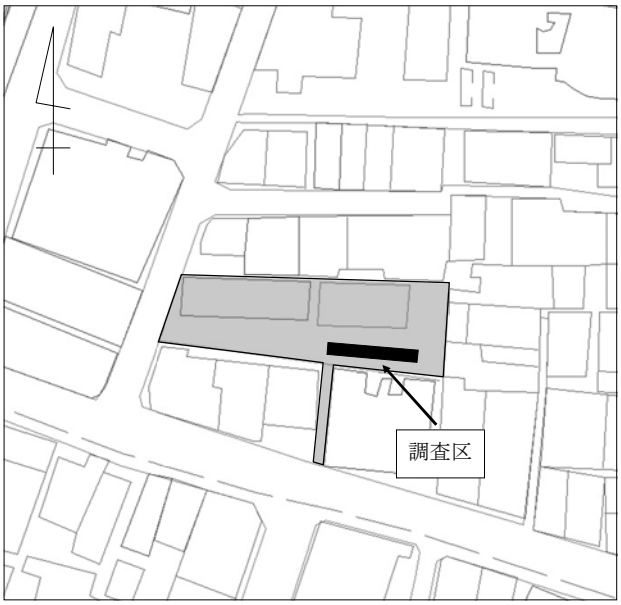


図２　調査区配置図　縮尺1:800

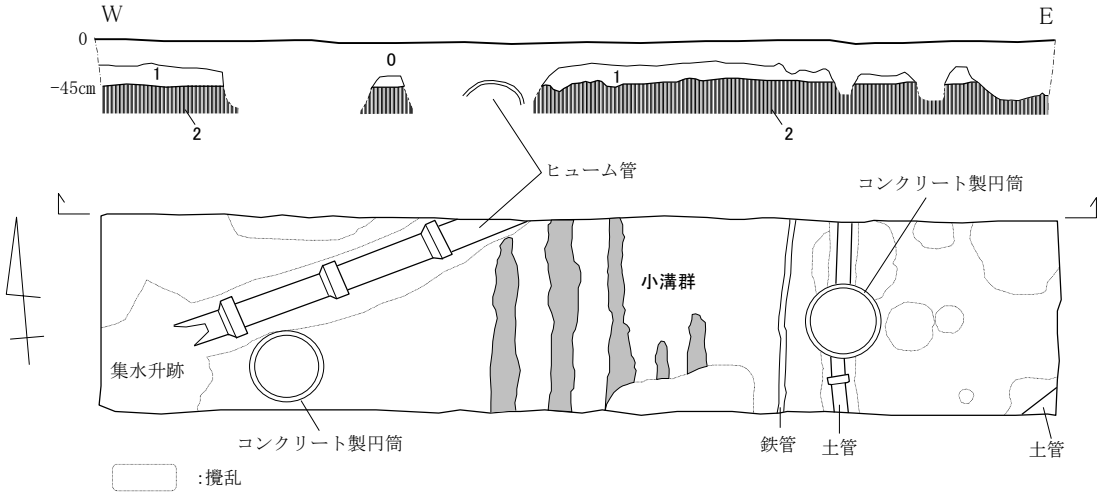
層下面遺構の小溝群を確認することができた。溝はみな南北方向をとっており、幅が10～20㎝、深さが５㎝ある。小片ながら瓦器・土師器が出土した。時期の詳細は不明ながら、中世集落の存在を示すものである。

〈まとめ〉

今回の調査では南北方向をとる中世の小溝群の存在を確認できた。調査区の形状から溝の検出長は２ｍに満たないが、その方向が北で５度ほど東に振っている。この調査区の北東50ｍにあるND94－13次調査地でも南北方向の溝であるSD02（中国産青磁・瓦器出土）が見つかっているが、これも正南北方向からわずかに東に振れる。正南北方向をとる難波大道に近接する場所でありながら、それとは異なる地割が中世に造られていた可能性も考えておきたい。

〈参考文献〉

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、「大野邸建築に伴う発掘調査（ND94－13）」『平成６年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.107-112



０：表土・攪乱　　１：灰黄色シルト質粘土（中世耕作土）　　２：灰褐色粘土（地山層・段丘構成層）

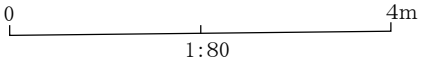


図３　　北壁地層断面図・遺構平面図

住道寺跡発掘調査（SSJ17－1）報告書

調 査 箇 所	東住吉区住道矢田八丁目25
調 査 面 積	15㎡
調 査 期 間	平成30年1月24日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は住道寺跡内にあり、南西側には焼亡した寺院を片付けたことにかかわるといわれる「灰塚」と呼ばれる高まりが位置していて、その近辺での発掘調査では中世を主とする遺構・遺物が確認されている地域である。敷地の北寄りで東西３ｍ、南北５ｍの調査区を設けて作業を行った（図1・2）。調査区北端での部分的な観察を含め現地表下1.9m前後までの状況を確認している（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

現地表下0.7m前後まで近現代の盛土である（第０層）。その下に灰色砂～シルトの近現代および近世の耕作土がある（第１層）。0.9～1.0m付近まで明青灰色砂質シルトで中世以前の作土である（第２層）。薄い自然堆積の灰色砂（第３層）をはさんで、黄褐色シルト（第４層）があって、中世以前の堆積である。1.2～1.3m以下に水成の灰白色砂（第５層）、褐色シルト～粘土がある（第６層）。その下に灰白色粘土（第７層）、暗色帯である灰色粘土（第８層）、さらに灰白～明青色粘土（第９層）があった。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

平面的な検出作業は第２層の上面・下面、第６層の上面等で行った。第６層の上面では南西から北東方向をとる溝状の落込みSX01があり、水成層である第５層で埋没していた。第２層の上面では

図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

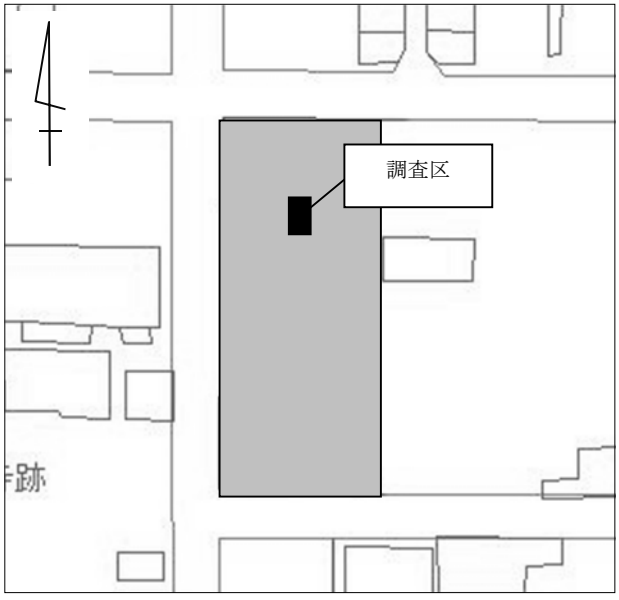


図２　調査区配置図　縮尺1:1,000

第１層の段階とみられる耕作の痕跡などが見つかった。

遺物では、第４層から土師器、第２層からは土師器・須恵器・瓦器や瓦などが出土している。

〈まとめ〉

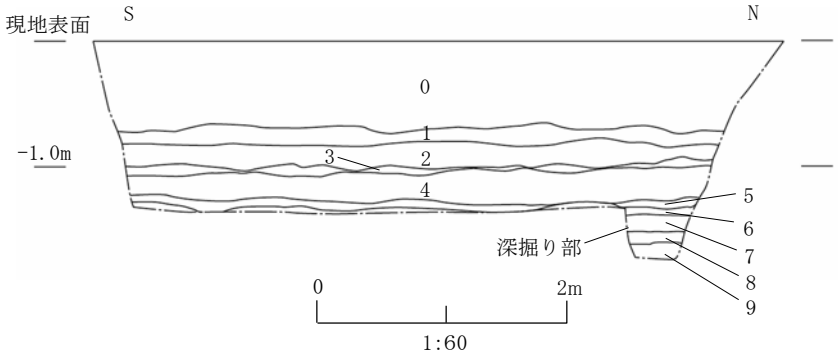
本調査地では周辺での成果との対比などが十分ではなく、時期が明確にできていないが、第９～６層とした地層の上に中世以降の地層があり、主として耕作地として活用されてきたことが確認された。寺院に直接関係する遺構は認められなかったものの、瓦や中世を主とする時期の土器類が出土したことは近辺にそうした遺構があることをうかがわせるものである。小規模な調査ではあったが住道寺跡周辺の状況を知る基礎的な資料を得ることができた。

＜主要参考文献＞

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008『平成19年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・（財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所2012

『平成22年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』



0：現代表土・近現代盛土
1：灰色砂～シルト（第１層　近世～近代作土か）
2：明青灰色砂質シルト（第２層　中世作土か）
3：灰色砂（第３層　中世、水成層）
4：黄褐色シルト（第４層　中世か）
5：灰白色砂（第５層　水成層）
6：褐色シルト～粘土（第６層）
7：灰白色粘土（第７層）
8：灰色粘土（暗色帯　第８層）
9：灰白～明青色粘土（第９層）

図３　　西壁地層断面図

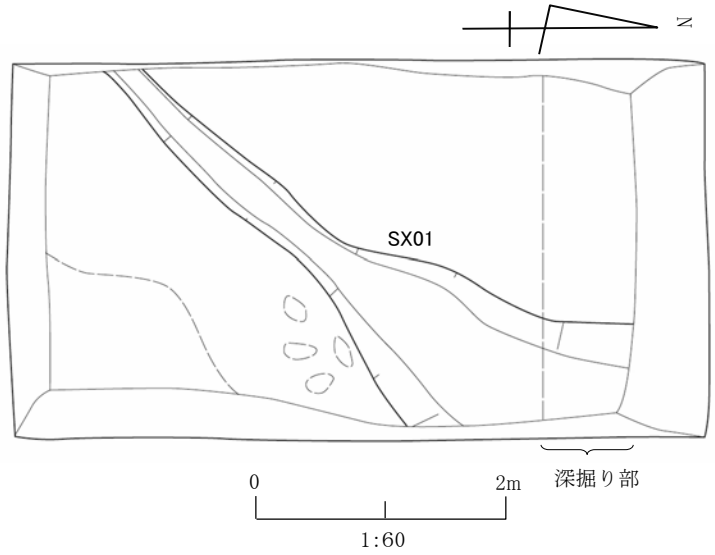


図４　　遺構平面図

北田辺４丁目所在遺跡発掘調査（STQ17－1）報告書

調 査 箇 所	東住吉区北田辺四丁目100－1
調 査 面 積	16㎡
調 査 期 間	平成30年2月16日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は北田辺４丁目所在遺跡内にあり、周辺の遺跡では主に古代から中世に属する時期の遺構・遺物が確認されている地域である。敷地の中央北よりで東西・南北４ｍ角の調査区を設けて作業を行った（図1・2）。部分的な観察を含めて現地表下1.5m前後までの地層の状況を確認している（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

現地表下0.8m前後まで近現代の盛土である（第０層）。その下に灰色砂質シルト（第１層）、黄褐色砂（第２層）があり近世から近代の耕作土である。1.1～1.2m下に灰色粘土質シルトがあって近世はじめ頃の耕作土とみられた（第３層）。その下は青灰～緑灰色砂礫で自然堆積の地山である（第４層）。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

平面的な検出作業は第３層の上面・基底面等で行った。第３層の基底面では、調査区西部で南北方向の溝とみられるSD01や不定形な落込みSX02～05、小穴SP06・07などがあった。いずれも埋土は耕作土である第３層と類似し、耕作に関連して形成された可能性がある。

遺物では、第３層から中世にさかのぼるとみられる土師器や17世紀代の肥前染付磁器や肥前陶器などが出土している。

図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

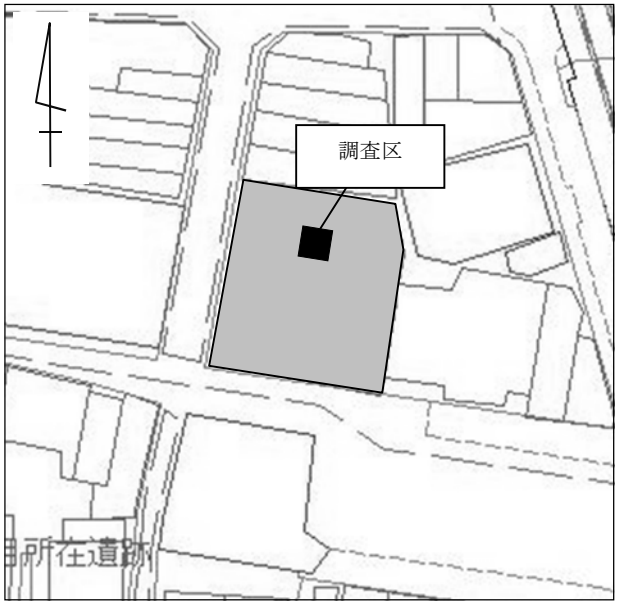


図２　調査区配置図　縮尺1:1,000

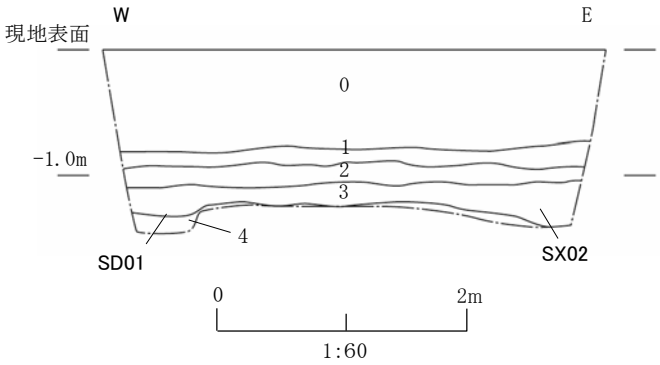
〈まとめ〉

本調査地では17世紀代の遺物を含む耕作土が確認され、その基底面で溝や落込み等の遺構が検出された。遺物には中世以前のものも少量ながら含まれており、調査地の北方には桑津遺跡や田辺廃寺などの古代あるいはそれ以前の遺跡が位置していることもあり、当地一帯での開発は近世以前にさかのぼる可能性が高い。本調査地周辺の歴史を検討するための基礎的な資料が得られた。

＜主要参考文献＞

大阪市文化財協会1998『桑津遺跡発掘調査報告』

大阪文化財研究所2011『桑津遺跡B地点発掘調査報告』



0：現代表土・近現代盛土

1：灰色砂質シルト（第１層　近世～近代作土か）

2：黄褐色シルト質砂（第２層　近世作土か）

3：灰白粘土質シルト（第３層　近世作土か）

4：青灰～緑灰色砂礫（第４層　地山層）

図３　　北壁地層断面図

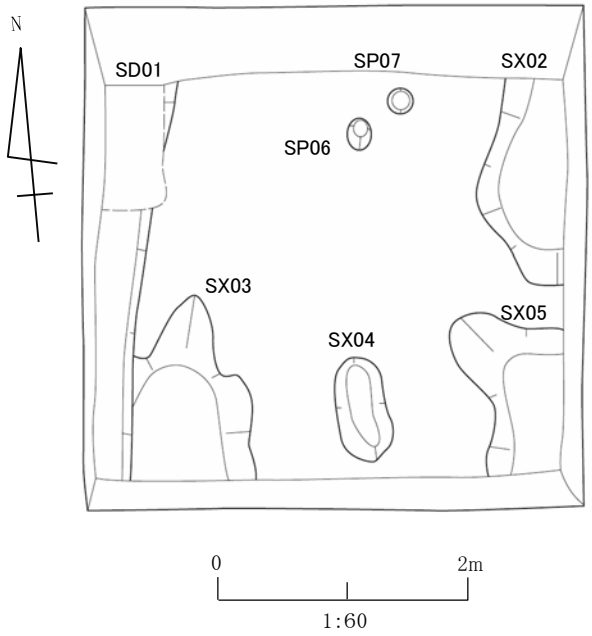


図４　　遺構平面図

平野環濠都市遺跡発掘調査（SHN17－1）報告書

調 査 箇 所	大阪市平野区平野本町四丁目1－34、1－35
調 査 面 積	9㎡
調 査 期 間	平成29年４月25日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

平野環濠都市遺跡では中世から近世にかけての遺構・遺物が主に見つかっており、調査地はその南西に位置する。敷地の南西に東西・南北３ｍ角の調査区を設定し作業を行った（図１・２）。現地表下１．０ｍ前後まで重機で掘削し、それ以下については重機と人力を併用して掘り下げ、西端での部分的な掘削を含め１．８ｍ前後までの地層を確認した（図３・４）。

〈調査の結果〉

１．層序(図３・図版１)

現地表下０．５ｍ前後までは近現代の盛土であった（第０層）。その下の０．６ｍ付近まで部分的に褐色砂質シルトがあり、近世あるいは近代の盛土とみられる（第１層）。その下位に灰褐色粘土質シルト（第２層）、褐～黄褐色粘土質シルト（第３層）があり、近世の地層の可能性がある。１．０ｍ付近から下は灰～灰褐色粘土質シルトで、中世にさかのぼるとみられた（第４層）。１．２～１．３ｍ以下は水成の黄褐～灰白色細～粗粒砂で、付近のベースとなっている地層である（第５層）。

２．遺構と遺物(図４・図版１・２)

遺構では、第４層の下面において西側に緩やかに下る落込みSX01、東部の不定形な落込みSX02・03などがあった。南東隅と南部では第３層下面の落込みSX04・05があった。北側では瓦による井戸側を伴う井戸SE06が検出され、第２層の下面で形成されたものである。

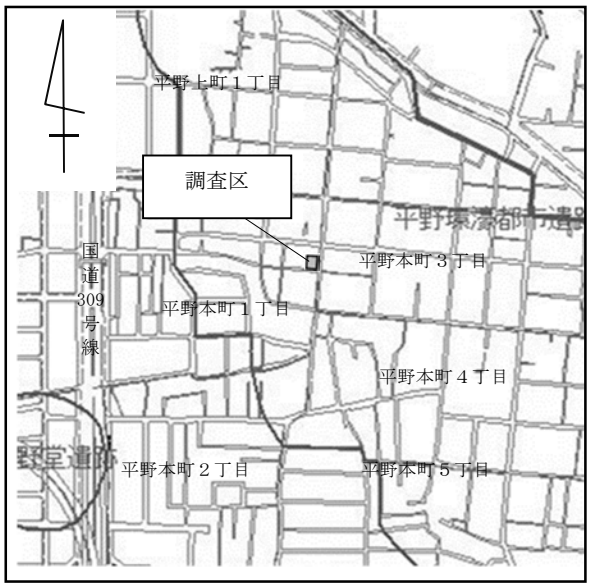


図１　調査地位置図　縮尺1:10,000

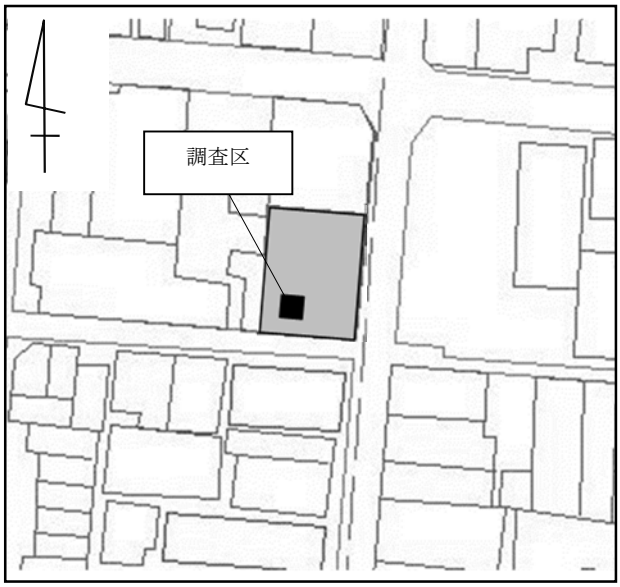
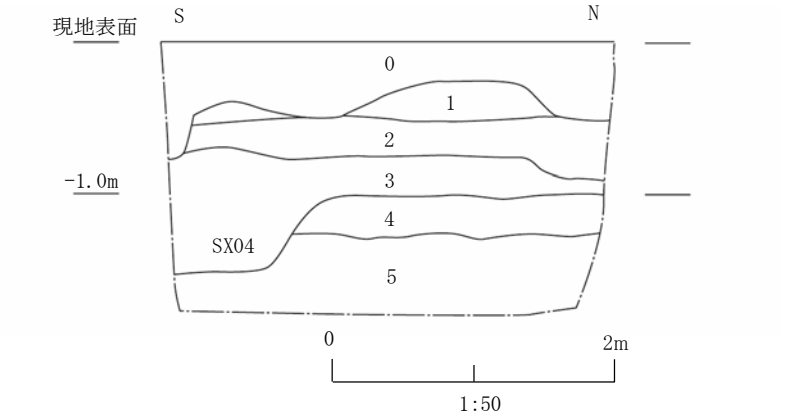


図２　調査区配置図　縮尺1:1,000

遺物では、第４層から土師器の皿や羽釜などの中世に属する土器など、第３層からは肥前磁器染付や肥前陶器なども含む遺物が出土している。

〈まとめ〉

本調査地では自然堆積である第５層の上に中世とみられる第４層があり、耕作等に活用されていたことが推測された。その後に近世には整地されるなど屋敷地へと変化していったと考えられた。なお、遺物には古代以前のものも少量含まれ、近辺にそうした時代の遺跡があることも推測される。小規模な調査ではあるものの、平野環濠都市遺跡についての基礎的な資料を得ることができた。



0：現代表土・近現代盛土
1：褐色砂質シルト（第１層　近世以降の盛土）
2：灰褐色粘土質シルト（第２層　近世盛土か）
3：褐～黄褐色粘土質シルト（第３層　近世盛土か）
4：灰～灰褐色粘土質シルト（第４層　中世包含層）
5：黄褐～灰褐色細～粗粒砂（第５層　自然堆積）

図３　　西壁地層断面図

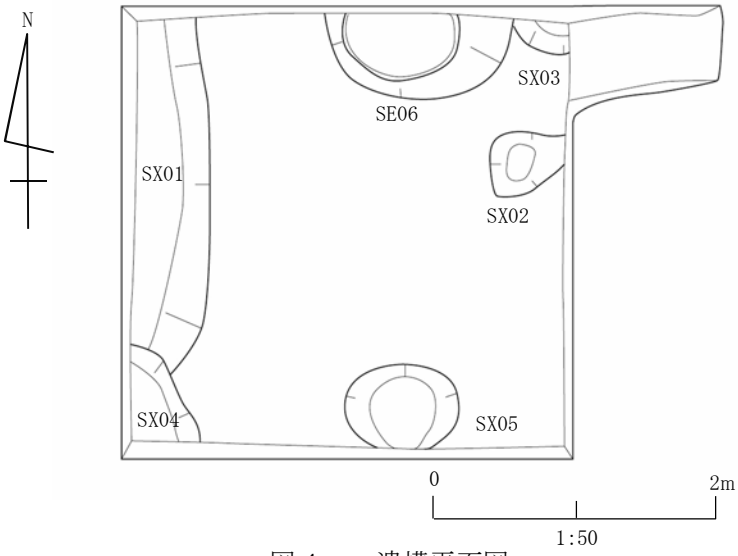


図４　　遺構平面図

平野環濠都市遺跡発掘調査（SHN17－2）報告書

調 査 箇 所	平野区平野本町三丁目24－1の一部
調 査 面 積	12㎡
調 査 期 間	平成29年9月7日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

平野環濠都市遺跡は中世から近世の集落にかかわる遺跡で、本調査地はその中央付近に位置している。周辺ではそうした時代の成果が得られている。敷地内の南西寄りで東西2m、南北6mの調査区を設けて作業を行った（図1・2）。当初は南北9mの予定だったが、安全面等を考慮して短くしての調査となった。北端で部分的に深掘りを行ったほか、遺構内など部分的な確認等も含め現地表下約1.6mまでの状況を確認した（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

地層では現地表下0.2～0.3mまでは近現代の盛土である（第０層）。その下に褐灰色シルト質砂（第１層）、赤褐色等を呈するシルト質砂（第２層）が断続的にあり、ともに近世の堆積である。その下の0.6～0.7mに偽礫を含み緑灰色等を呈する砂層があり、近世前期の盛土とみられた（第３層）。その下に灰色シルト質砂があり、中世から豊臣期の堆積の可能がある（第４層）。0.8～0.9m以下に自然堆積の灰～褐色砂層があって、付近のベースとなる地層である（第５層）。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

遺構検出は第３層の上面で主に行い、落込みSX01～05などが確認された。焼土や炭を含むSX01～04は江戸時代に入ってからの火事の片付かと推測される。それ以外に近世後半とみられる廃棄土壙SX05などがあった。

図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

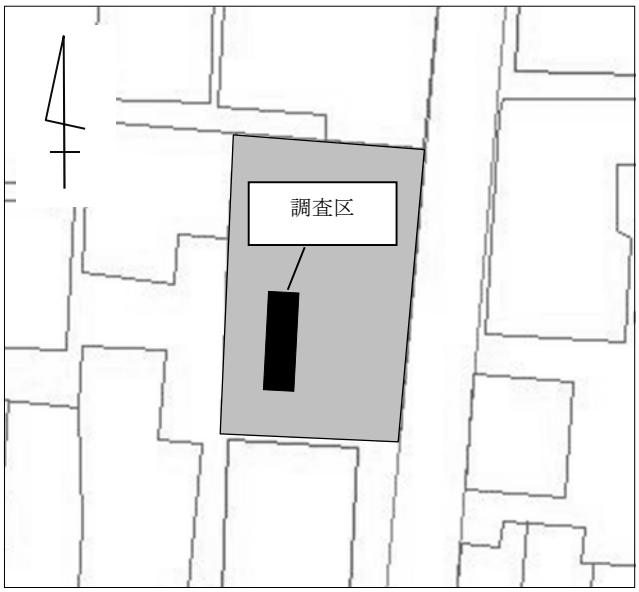
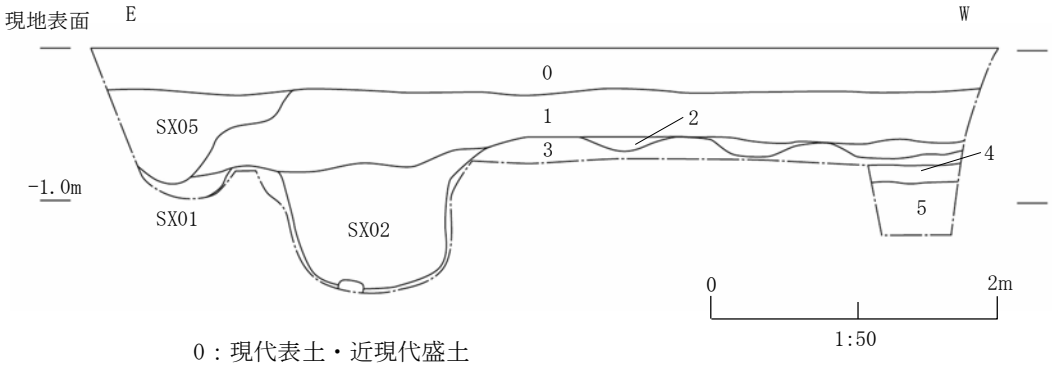


図２　調査区配置図　縮尺1:500

遺物ではSX01や第２層から江戸時代の陶磁器・土器等が出土したほか、第３層からは肥前染付や備前焼擂鉢など豊臣期から近世前期の陶磁器類、第４層からは瓦器や瓦質土器などの中世から豊臣期にかけての土器・陶器類が出土している。

〈まとめ〉

本調査地では砂を主体とする自然堆積があり、その上で中世から近世の地層が確認された。遺物からみて中世には活発な活用が始まっており、その後も屋敷地等で利用されたことがうかがわれた。付近では大坂ノ陣の際の焼け面などが見つかっているところもあるが、本地点ではその面そのものは確認されなかった。柱穴等の遺構は確認されなかったものの、集落地として利用され続けてきたと考えられ、当遺跡についての基礎的な資料を得ることができた。



0：現代表土・近現代盛土
1：褐色砂質シルト（第１層　近世以降の地層か）
2：赤～赤褐色シルト質砂（第２層　近世か）
3：緑灰色シルト～砂（第３層、近世前期か）
4：灰色シルト質砂（第４層、中世から豊臣期か）
5：灰～灰白色シルト質砂（第５層、自然堆積層）

図３　　西壁地層断面図

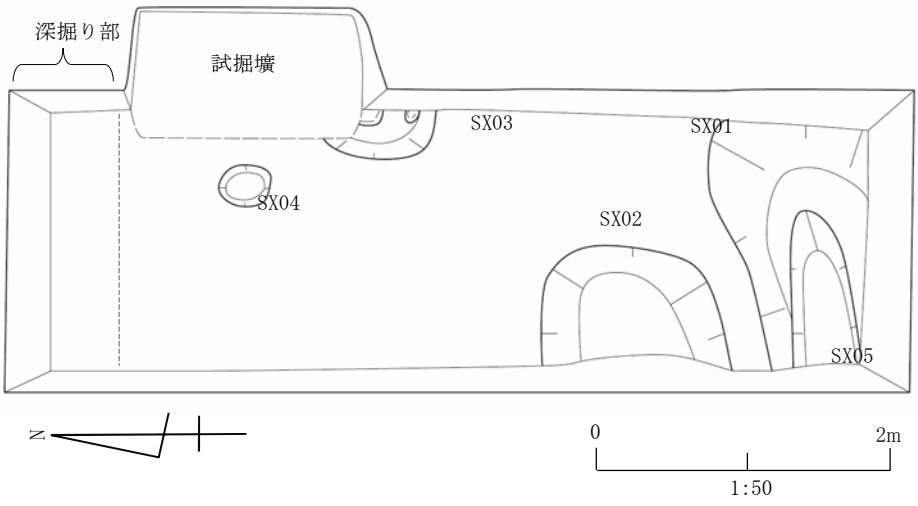


図４　　遺構平面図（第３層上面での調査状況）

平野環濠都市遺跡発掘調査（SHN17－3）報告書

調 査 箇 所	平野区平野東二丁目44
調 査 面 積	18㎡
調 査 期 間	平成29年12月26日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は平野環濠都市遺跡の南東部にあり、周辺では主に中世から近世にかけての遺構・遺物が確認されている地域である。敷地の東寄りで南北3m、東西6mの調査区を設けて作業を行った（図1・2）。湧水もあって詳細な検討はできなかったものの、部分的な観察を含め現地表下1.5m前後までの状況を確認している（図3・4）。

〈調査の結果〉

1．層序(図3・図版1)

地層では現地表下0.2m前後まで近現代の盛土である（第０層）。0.3m付近まで褐色シルト質砂で近世あるいは近代の地層である（第１層）。その下0.7m付近まで黄褐色シルト偽礫を含む灰色砂（第２層）、褐色シルト質砂（第３層）があって近世の盛土層である。その下に一部水成堆積が挟在する明灰色シルト質砂（第４層）、灰色粘土偽礫を含む灰色砂（第５層）があり、近世初頭あるいは中世後半にさかのぼる可能性がある地層である。1.3m前後から下には灰色砂があって、自然堆積層である（第６層）。

2．遺構と遺物(図4・図版1・2)

平面的な検出作業は第3層の上・下面等で行った。第3層下面では調査区西よりで不定形な落込みSX01・02、東寄りでは炭化物が集まるSX03が見られた。第3層上面、2層基底では落込みSX04・05、小穴SP06・07が検出された。04・05は瓦が含まれ、第２層において形成された廃棄等に伴う遺構の

図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

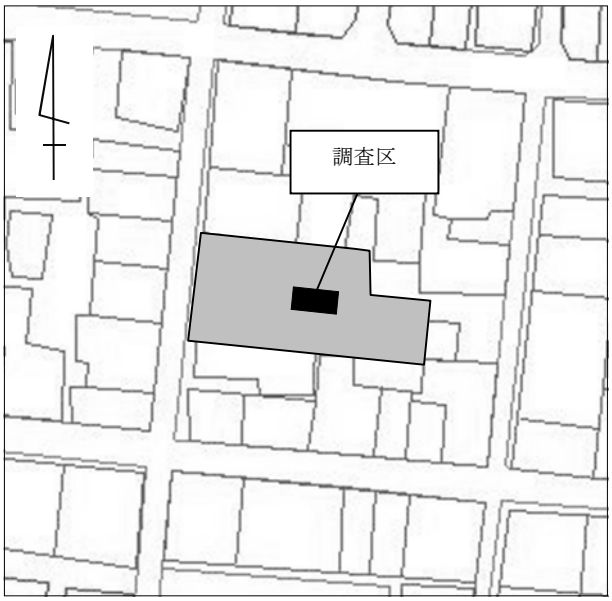


図２　調査区配置図　縮尺1:1,000

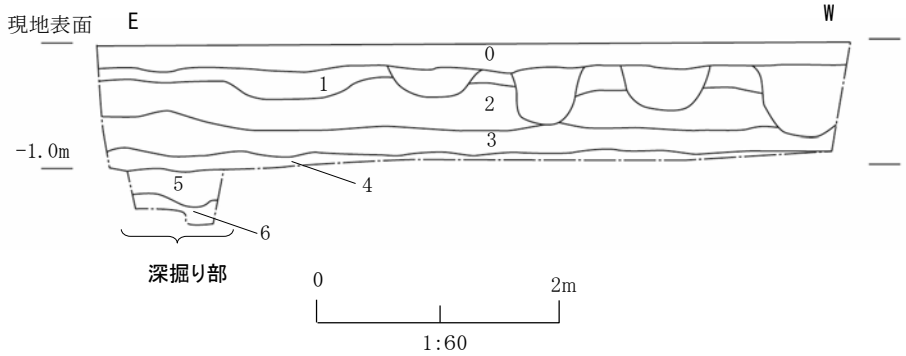
ようである。近世初め頃から近世にかけてのものとみられた。

遺物では、第４層から瀬戸焼陶器など、第３層では肥前磁器・陶器、土師器など、SX01・02から瓦質土器や丹波焼擂鉢を含む土器・陶磁器類等が出土している。

〈まとめ〉

本調査地では自然堆積の上で中世あるいは近世初めころ、ならびにそれ以降の地層が確認され、中世以降の各時代の遺物が出土した。建物跡等の遺構はなかったものの、地層や遺物の状況から主に屋敷地等として利用されていた地点であったことが推測された。近世において絵図等から知られる状況と対応しているようである。平野環濠都市遺跡の歴史的変遷についての基礎的な資料を得ることができた。

＜主要参考文献＞
大阪市文化財協会2009『大阪市南部遺跡群発掘調査報告』



0：現代表土・近現代盛土
1：褐色シルト質（第１層　近世整地層か）
2：黄褐色シルト質砂（第２層　近世作土か）
3：褐色シルト質砂（第３層　近世作土か）
4：明灰色シルト質砂（第４層　近世初頭の地層か）
5：灰色シルト偽礫を含む灰色砂（第５層　中世の地層か）
6：灰色砂（第６層　自然堆積）

図３　　南壁地層断面図

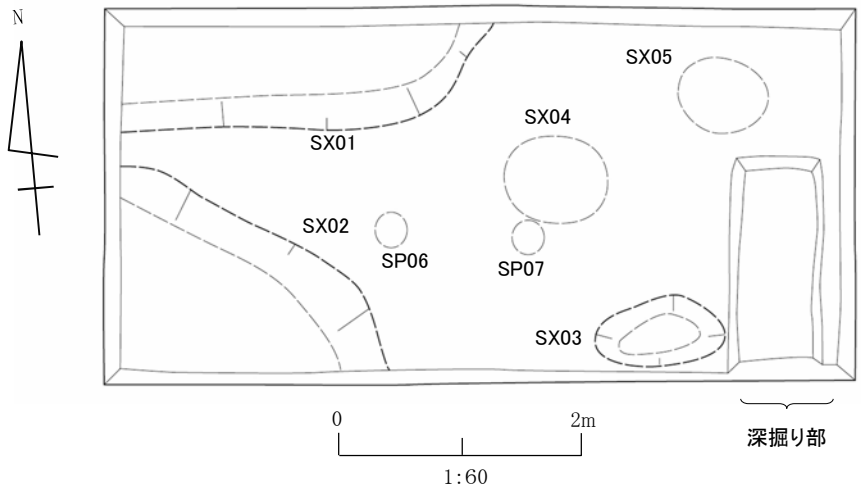


図４　　遺構平面図
（第２層・第３層下面の状況）

鞍作廃寺発掘調査（SKT17－1）報告書

調 査 箇 所	平野区加美鞍作二丁目191-6他
調 査 面 積	16㎡
調 査 期 間	平成29年12月20日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、宮本　康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は鞍作廃寺の範囲内にあり、南東には現存の鞍作寺があって礎石が伝わっている。周辺では主に古代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている地域である。敷地のほぼ中央に南北2m、東西8mの調査区を設けて作業を行った（図1・2）。当初は東西10mだったが、残土の置場等を考慮して短くしての調査となった。現地表下1.4m前後までの状況を確認している（図3・4）。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・図版1)

現地表下0.3m前後まで近現代の盛土である（第０層）。0.4～0.5m付近まで灰色シルトなどがあって近世・近代以降の整地とみられる（第１層）。0.8m付近まで褐色シルト質砂があって近世の耕作土とみられ（第２層）、その下に0.9m付近まで明灰色シルト質砂（第３層）、粘土偽礫を含む黄褐色砂（第４層）、褐色シルト質砂（第５層）があり、中世以前の地層と考えられる。1.3m付近から下に自然堆積の黄～黄白色シルト質砂～砂が見られた（第６層）。

2. 遺構と遺物(図4・図版1・2)

平面的な検出作業は第２層の上・下面、および第５層の下面等で行った。第５層下面では西端で落込みSX01、溝SD02・03などがあった。落込みは詳細な性格は不明だが、溝は耕作に伴うものであろう。第２層の下面では溝状の落込みSX04・05などがあり、耕作に伴うものと思われる。

遺物では第３層から５層にかけて土師器や須恵器、瓦器などが出土し、SX01やSD03からは土師器

図１　調査地位置図　縮尺1:5,000

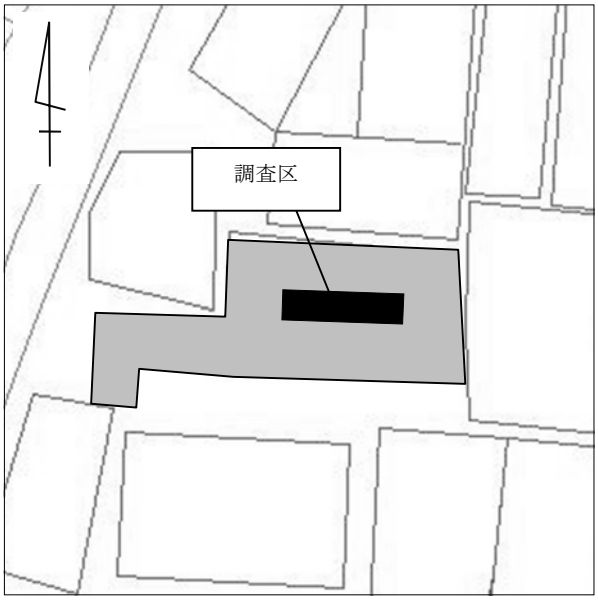


図２　調査区配置図　縮尺1:500

や瓦器、SX04・05からは土師器や近世陶磁器類などが出土している。

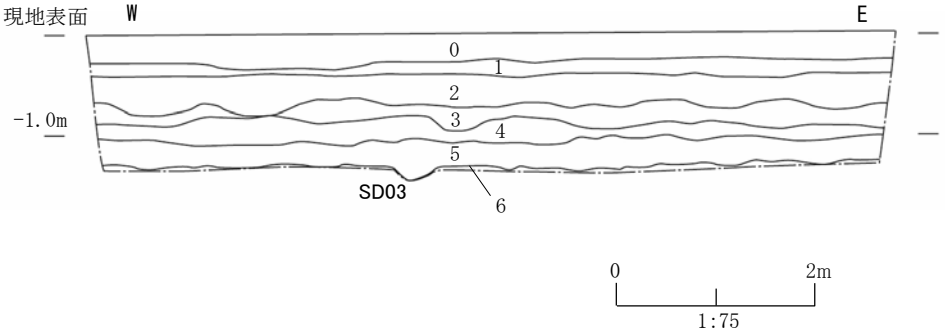
〈まとめ〉

本調査地では自然堆積の砂層の上で中世にさかのぼる可能性のある地層が確認され、溝や落込み等が確認された。鞍作寺に直接関連する遺構はなかったものの、遺物では古代にさかのぼるものも多く含まれており、近辺にそうした時代の遺構があることが推測された。また中世から近世にかけては主に耕作に用いられ、近世のうちには屋敷地へと変化していったことがうかがわれた。小規模な調査ではあったが、鞍作廃寺一帯の歴史的変遷を知る基礎的な資料を得ることができた。

＜主要参考文献＞

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991『平成元年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2005）』



0：現代表土・近現代盛土

1：黄褐色シルト質砂（第１層　近世以降の盛土か）

2：褐色シルト質砂（第２層　近世作土か）

3：灰色砂質シルト　（第３層　中世作土か）

4：シルト偽礫含む黄褐色砂（第４層　中世作土か）

5：褐色シルト質砂（第５層　中世作土か）

6：黄色砂（第６層　自然堆積）

図３　　北壁地層断面図

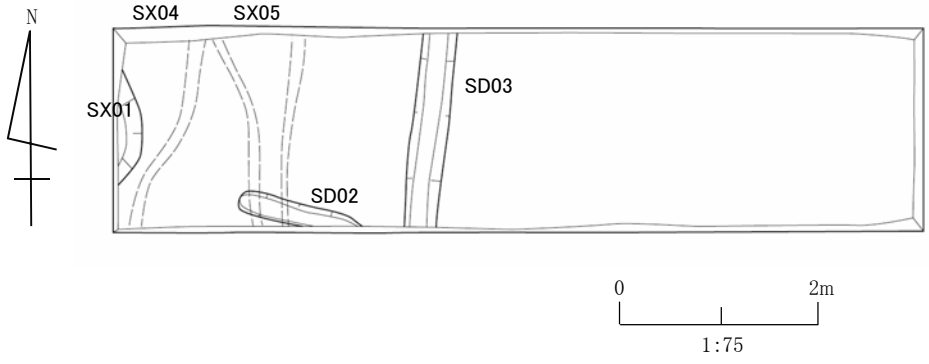


図４　　遺構平面図

（第２層下面および第５層下面の状況）

長原遺跡発掘調査(SNG17－2)報告書報告書

調 査 箇 所	平野区長吉六反4丁目
調 査 面 積	240㎡
調 査 期 間	平成29年11月9日～11月29日
調 査 担 当 者	課長　植木久、藤原哲、田中裕子、櫻田小百合

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は、大阪市域の東南部に所在する長原遺跡の東北部に位置する(図１)。長原遺跡は瓜破台地の東北部から北側の沖積平野に広がる遺跡で、旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡として知られる。東北部は八尾市域の太子堂遺跡、東は同じく老原遺跡、八尾南遺跡と接する。周辺の調査としては、都市計画道路敷津長吉線の布設に伴うNG84－49、98－19・20、99－19、00－6次調査や、久宝寺太田線建設工事に伴うNG00－30、01－25、02－4次調査があげられる(図２)。調査地北側のNG00－30次調査では奈良時代の溝や、平安時代の溝・流路などが検出されており[大阪市文化財協会2004]、このうち奈良時代の２条の溝については京嶋覚氏により磯歯津路の道路側溝の可能性が指摘されている[京嶋2016]。また南のNG00－6次調査では弥生時代前期の溝、古墳時代中期の盛土遺構、飛鳥～平安時代の古土壌や溝、平安時代の流路などが検出されている[大阪市文化財協会2003]。

今回の調査は、長吉六反北住宅３号館用地における市営住宅建設工事に先立って、平成24年10月12日および平成29年６月22日に試掘調査を行った結果、近世以前の地層が良好に残存していたことから本調査を行うこととなったものである。現地表面下３ｍまでの調査計画で、掘削深度と周辺の調査成果から中世～古代にかけての地層が確認されることが予想された。調査は平成29年11月9日に着手し、東西４ｍ×南北20ｍのＮ区と南北４ｍ×東西40ｍのＳ区の２つの調査区を設定して行った(図３)。なお、Ｓ区については、安全確保のため平面検出面積を増やさない範囲で調査区の上端を当初の計画よりも拡張して調査を行った。第３層中まで重機により掘削し、これ以下の地層を実測図の作成および写真撮影による記録作業を行いながら、重機と人力を併用して掘下げた。このほか調査区西端部で重機を使用して深掘トレンチを掘削して下層の地層断面の観察を行った。埋め戻し

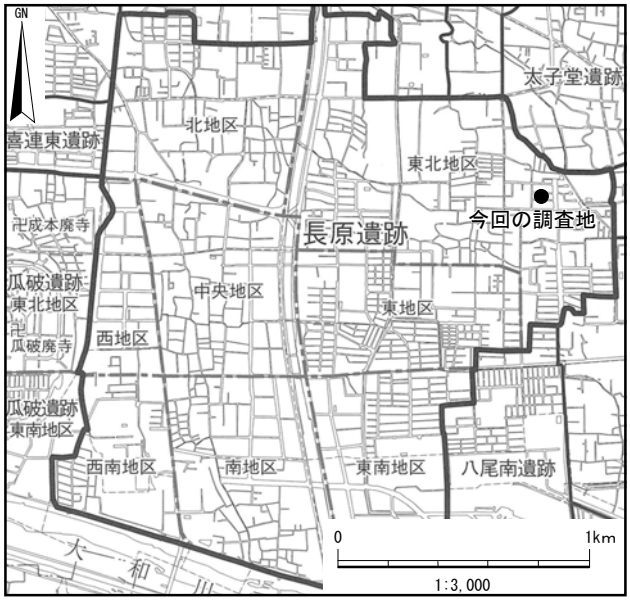


図１　調査地位置図

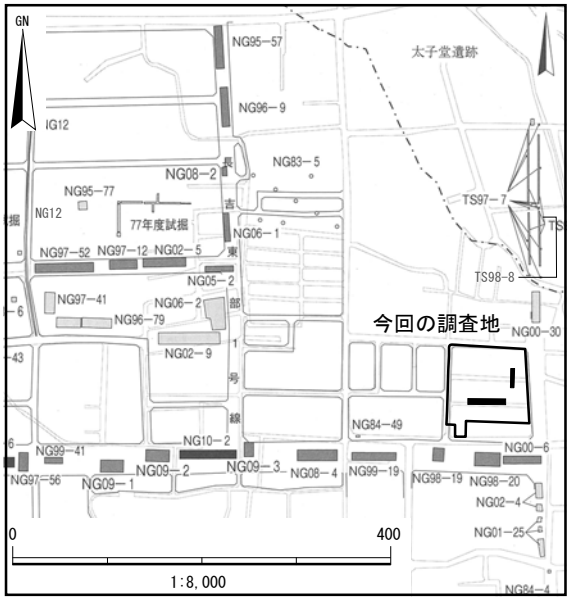


図２　調査地位置図

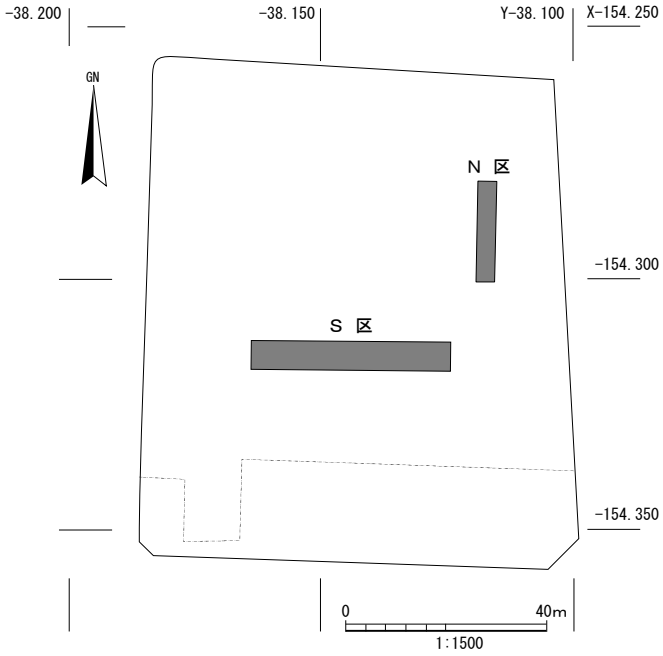


図３　調査区配置図

を行い、11月29日に現地における調査を終了した。

本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、現地で作成した調査区配置図を街区図にあてはめて求めたものである。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP±○ｍと表記した。

〈調査の結果〉

１．Ｎ区

ｉ）層序（図４～６）

第０層　調査地の地表は標高TP＋10.9ｍを測る。第０層は現在の客土層で、層厚は140㎝ほどであった。また、調査区の南端から2.8ｍ北までの範囲にかけて、コンクリート製の大型の建物基礎が存在しており、重機における掘削が困難であったため、この範囲に限って調査範囲から除外した。

第１層　旧耕作土層で、暗灰色の砂質シルト層を主体とする。第０層の直下、層厚14㎝で調査区全域にわたって水平に堆積している。

第２層　近世の作土層で、長原遺跡東北地区の基本層序であるRK２層に該当する。第2a層と第2b層に大別した。第２層の上面において平面で精査し遺構検出を行ったところ 、杭痕跡が本層上面で検出されたが、埋土から現代のものと考えられる。

第2a層　層厚54㎝の作土層で、上層の茶褐色砂質シルト、下層の灰褐色砂質シルトに細分できる。いずれも単純な水平堆積で、調査区北部に分布している。出土遺物はなかった。

第2b層　オリーブ灰色の砂質シルト層を基調とする作土層で、調査区南部に分布している。層厚34㎝～40㎝で、暗褐色の砂層から暗オリーブの砂質シルト層まで、細分することが可能である。

第３層　盛土および河成堆積層からなり、長原遺跡東北地区の基本層序であるRK３層に該当する中世の層と考えられる。第3a層～第3d層に大別した。人力で平面精査を繰り返し少しずつ掘り下げていったところ、第3b層下面より20㎝高い位置（TP＋8.6ｍ）で土壙２基の遺構を検出した。

第3a層　茶褐色のシルト層を基調とする盛土又は作土層である。一部には淡灰色の砂層等も混じる。調査地北側に分布しており、茶褐色の直径１～３㎜の砂礫を含む砂質シルト層の上層と、明黄茶色の砂質シルト層の下層に細分できる。出土遺物のうち、**６**は古式土師器の小型器台の器部と脚部との接合部分である。器部の底面（見込み）は平坦で、脚部は裾広がりに大きく開く。**７**は土師器の甕片で細かな刷毛目痕が残る体部片である。

第3b層　淡灰褐色と明褐色からなる粘土質シルト層を基調とする盛土、または作土層である。層厚は60㎝で、色調や土質の違いにより５層程度の分層が可能である。調査区南部に分布しており、同層より土師器片、瓦質土器片、瓦片が出土している。

出土遺物のうち、**１**と**２**は瓦質の擂鉢片で擂目が残る。14～15世紀に比定できる。**３**は燻瓦で平瓦の破片である。**４**は土師器の甕片で、「く」の字に強く屈曲した頸部片、**５**は土師器の皿片である。

第3c・d層　砂層～粘質シルト層で構成される河成堆積層で、調査区中央部に分布している。第3c層は暗灰～黄灰色の砂層を主としており、ラミナが発達している。第3d層は暗灰～青灰色の粘質シ

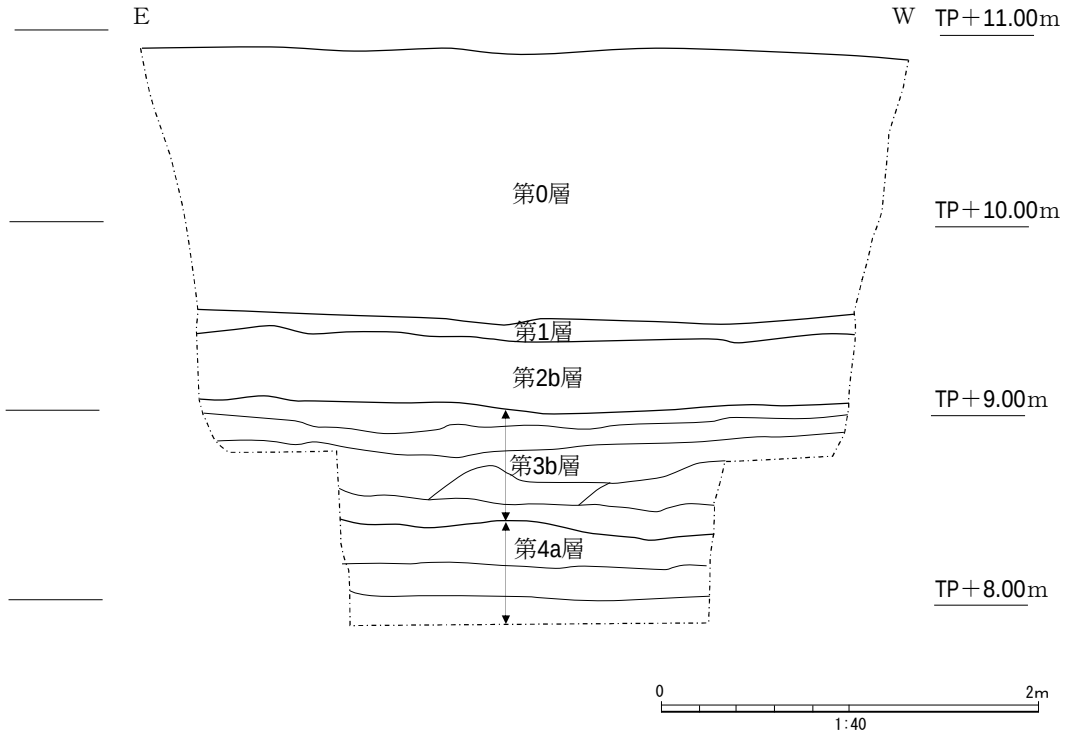


図４　Ｎ区 南壁地層断面図

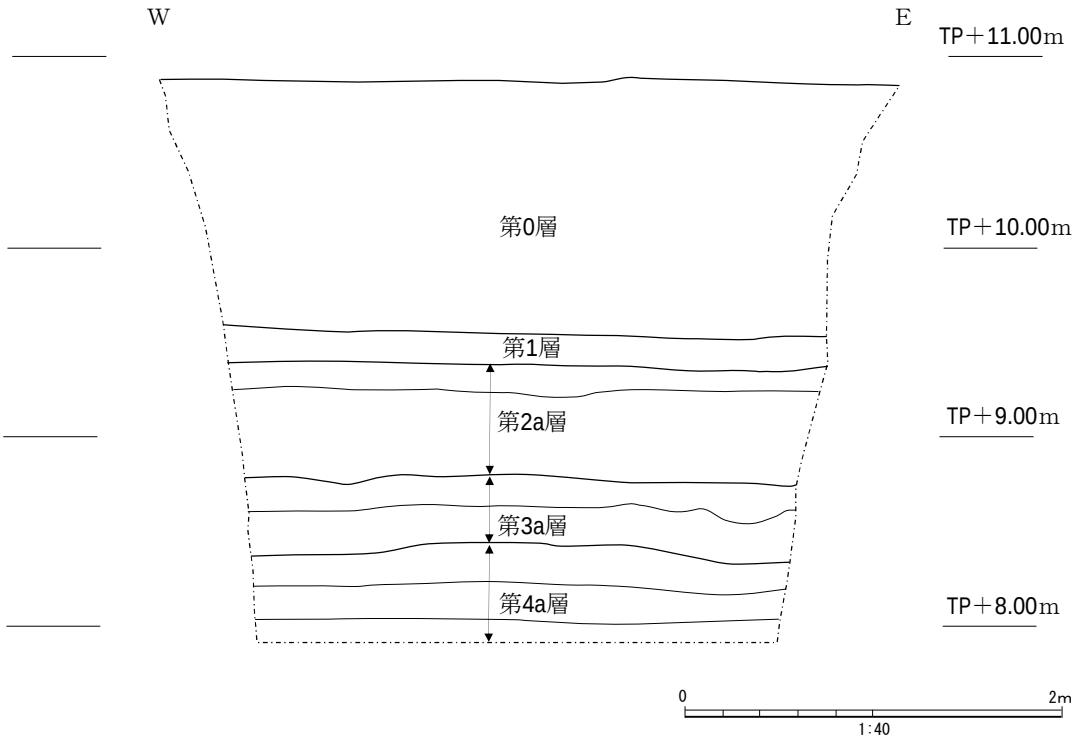


図５　Ｎ区北壁地層断面図

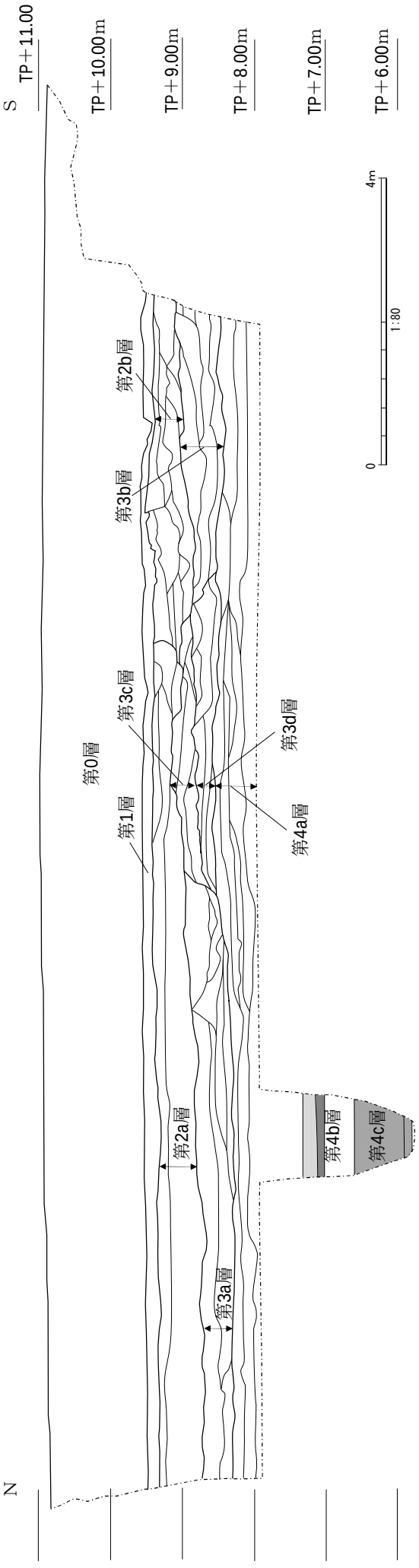


図６　Ｎ区　東壁地層断面図

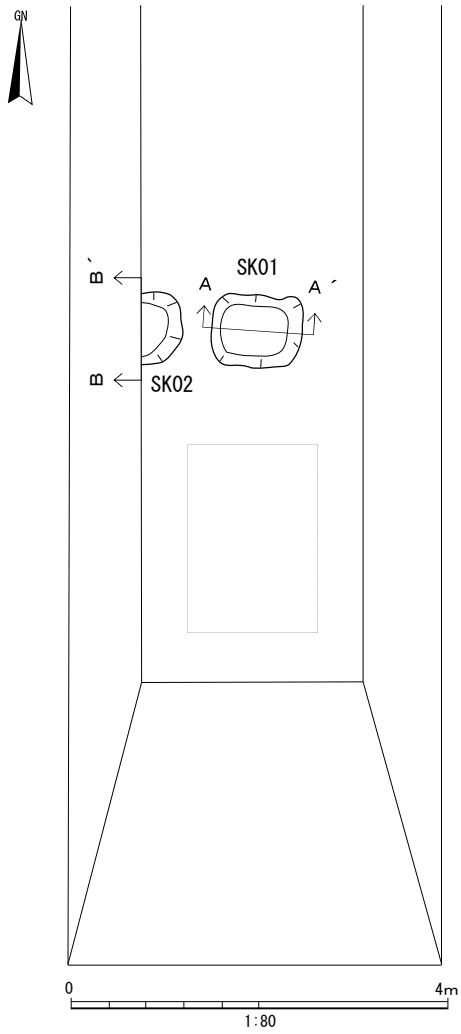


図７　Ｎ区 第3b層中遺構平面図

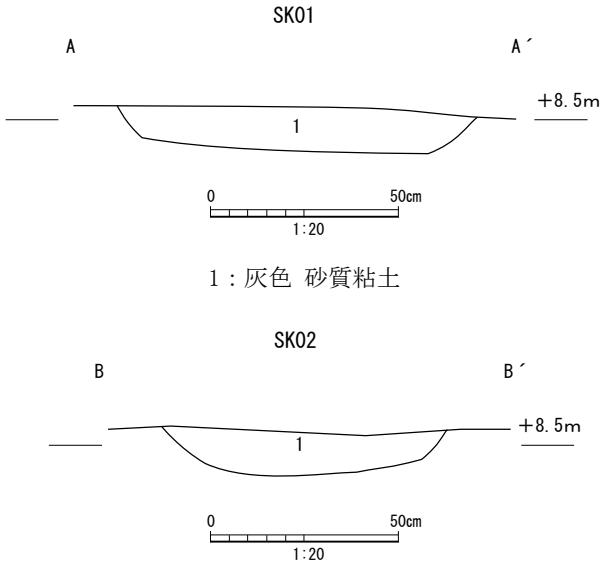


図８　Ｎ区 SK01・02　断面図

ルト層を主としている。第3c、第3d層ともに遺構・遺物は認められなかった。

第４層　TP＋8.3m以下の暗灰オリーブ色の粘土、または粘性の強いシルト層を基調とする水成層で、長原遺跡東北地区の基本層序であるRK４層に該当する中世～古代末の層と考えられる。調査区の一部で深掘を行った結果、調査範囲内では第4a層～第4c層に細分することができた。

第4a層は調査区全面にわたって認められる暗灰オリーブ色の粘土層で、均一な水平堆積で構成される。第4a層の上面と調査の最終掘削面（TP＋7.9m）とで平面精査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

第4b層はTP＋6.6～7.1mの高さにおいて検出した暗褐オリーブ色の粘土層で、グライ化が著しい緻密な粘土層である。

第4c層はTP＋6.6m以下で検出した暗灰褐色の粘質シルト層である。色調がやや黒色を帯びるため、ある段階における植物遺体の分解が進行した湿地状の堆積が考えられる。

ⅱ）遺構

遺構を検出したのは第3b層であり、土壙２基を検出している。

SK01は長軸96cm、短軸80cmの長楕円形を呈しており、深さは11cmで、埋土は灰色の砂質粘土であった。SK02は短軸80cmの不定円形を呈している深さ10cmの遺構で、埋土はSK01と同じく灰色の砂質粘土である。SK02は調査区外に延びており、約半分を検出したのみである。SK01・02のいずれも出土遺物は無かった。

２．Ｓ区

ｉ）層序（表１、写真１、図９、図版２）

Ｓ区における現地表面の標高はTP+10.7～10.9mで、層序は以下のとおりである。各地層と長原遺跡標準層序(長原層序)および長原遺跡東北地区基本層序(六反層序)との対応については表１に示した。なお、今回の調査では出土遺物が少なく各地層の年代判定が困難であった。よって、長原遺跡標準層序および長原遺跡東北地区基本層序との対応関係についてはNG00-30次、NG00-6次調査の成果を参考に岩相や検出レベルをもとに対応させたものである。

第０層は現代の整地層である。層厚は133～158cmである。

第１層は中～細礫をわずかに含むオリーブ黒色(10Y3/1・7.5Y3/2)細粒～極細粒砂質シルトを主とする現代の耕作土層で、層厚は最大で17cmである。

表１　Ｓ区層序と長原・六反層序の対応

長原層序 (NG)	六反層序 (RK)	現場層序		自然現象	遺構
０	０	０			
１	１	１			
２	２	２			
３	３	３	３ａ		← SK339・340 ほか
３	３		３ｂ－１		← SK3316 ほか
４Ａ	４Ａ		３ｂ－２		← SK305・306 ほか
４Ｂ	４Ｂ		３ｃ		
４Ｂ	４Ｂ		３ｄ		← SD414 ほか
４Ｃ	４Ｃ	４	４ａ		
４Ｃ	４Ｃ		４ｂ		
４Ｃ	４Ｃ		４ｃ		
７Ｂⅰ	７Ａⅳ		４ｄ		
７Ｂⅰ	７Ａⅴ	５	５ａ		
７Ｂⅱ	７Ｂⅰ		５ｂ		

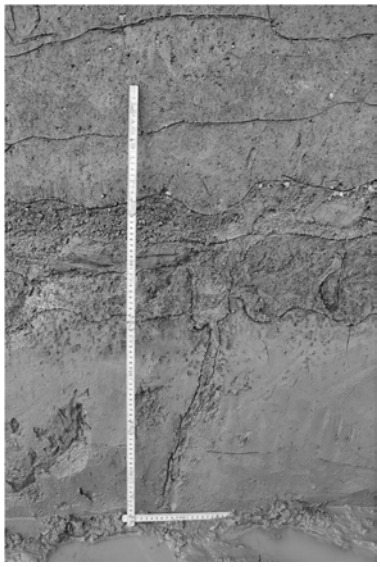


写真１　Ｓ区 地割れ痕跡

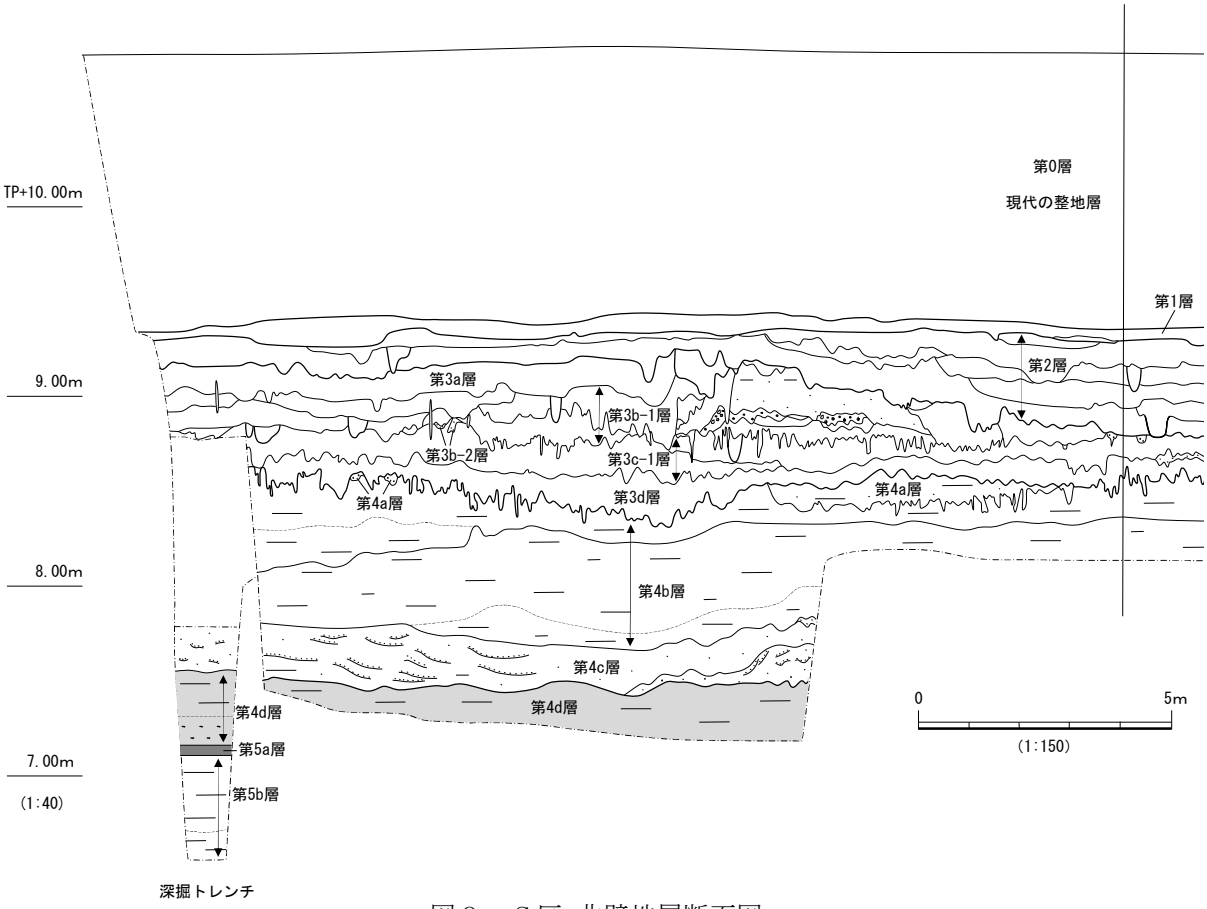


図９　Ｓ区 北壁地層断面図

第２層は中～細礫をわずかに含む暗オリーブ灰色(2.5GY4/1・5GY4/1)細粒～極細粒砂質シルト、オリーブ灰色(10Y5/2)シルト質極細粒砂、灰色(7.5Y5/1)シルト質細粒砂を主とする近世の耕作土である。層厚は8～60㎝である。土師器・瓦器・瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器が出土している。

第３層は耕作土および水成層からなり、第3a～3d層に細分できる。出土遺物が少量であったことから、第3a～3d層の各層の年代判定は困難である。第３層中からは土師器・中国産青磁・瓦器・瓦質土器・古瀬戸・瓦が出土した(図版４下)。**４**は土師器皿である。**５**は土師器の甕あるいは羽釜である。頸部は直立して立ち上がり口縁部は屈曲して短く外反する。口径が比較的大きいことから羽釜の可能性が高く12世紀頃のものと考えられる。中国産青磁碗**６**は比較的器壁が厚く、体部外面は無文である。体部は開いて立ちあがり、口縁部は玉縁状を呈する。15～16世紀頃のものとみられる。 瓦器椀**７**は退化した扁平な高台がつくことから13世紀に属するものとみられる。**８**は古瀬戸卸皿、**９**は燻化した平瓦である。以上の遺物は概ね12～16世紀に属するものであり、第３層の年代もこうした年代であろう。

第3a層は中～細礫をわずかに含む暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極細粒砂質シルトからなる耕作土層である。層厚は最大20㎝である。

第3b層は耕作土からなる第3b－1層と水成層を主とする第3b－2層に細分できる。

第3b－1層は中～細礫をわずかに含む暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒砂質シルト、中～細礫・細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含むオリーブ灰色(10Y5/2)中粒～細粒砂、中～細礫をわずかに含む灰色(7.5GY5/1)・暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細粒～極細粒砂質シルトを主とする耕作土である。層厚は最大33㎝である。

第3b－2層は水成層を主とするが、調査区東部では水成層が上下に分かれこの間に一部耕作土が認められる。水成層は中礫を含む暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極粗粒～中粒砂、灰色(10Y6/1)・暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)・灰オリーブ色(7.5Y6/2・5Y5/2)極粗粒～細粒砂を主とする。層厚は最大

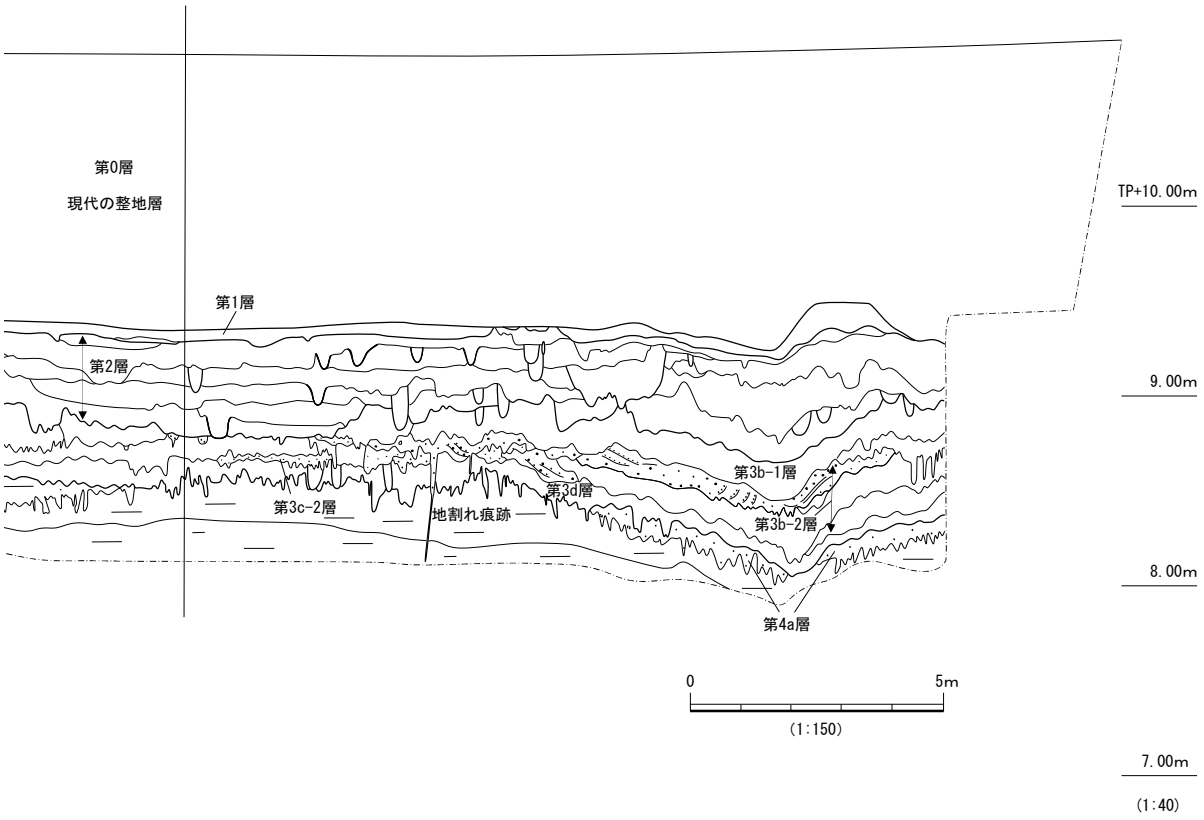


図９　Ｓ区 北壁地層断面図

50㎝である。耕作土は灰色(5Y4/1)・灰オリーブ色(5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルト、オリーブ黒色(10Y3/2)細粒砂質シルトからなり、層厚は最大33㎝である。

第3c層は耕作土の第3c－1層と水成層の第3c－2層に細分できる。

第3c－1層は粗粒～中粒砂偽礫を含む灰色(7.5Y5/1)・オリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒砂質シルト、中～細礫をわずかに含む灰色(5Y5/1)・灰オリーブ色(5Y5/2)細粒～極細粒砂質シルトからなる耕作土層である。層厚は最大で26㎝である。

第3c－2層はオリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒砂からなる水成層で、層厚は最大11㎝である。

第3d層は中粒砂偽礫を含む灰色(10Y5/1・5Y5/1)・灰オリーブ色(5Y5/2)・暗オリーブ灰色(5GY4/1)中粒～細粒砂質シルトからなる。第4a層を耕した耕作土で、本層の下面には耕作に伴う凹凸が顕著にみられる。層厚は最大30㎝である。

なお、北壁断面の観察で確認したものであるが、調査区東半部で第3d層上面に地割れ痕跡が認められた(写真１)。この地割れに第3b－2層の砂が落ち込んでいるようすが確認できた。NG00－30次調査では、地割れや地震による地層の変形が確認されている[大阪市文化財協会2004]。

第４層は水成層で、堆積状況から第4a～4d層に細分できる。出土遺物は10を含む土師器の小片のみである。10は外面に細かなミガキが密に施されており、古式土師器とみられる。下位の地層に伴うものの混入品であろう。このほかの土師器片については小片のため時期判定ができなかった。第４層の年代判定は今回の調査で出土した遺物からはできないが、NG00－30次調査の流路NR4c01やNG00-6次調査の流路SD401を埋めたNG4C層(RK4C層)に対応する地層と考えられる。NR4c01が10世紀末～12世紀、SD401が10世紀末～11世紀という時期である[大阪市文化財協会2003・2004]ことから、10世紀末～12世紀頃の年代が考えられよう。

第4a層は、暗緑灰色(7.5GY4/1)細粒砂質シルト、第4b層の偽礫を含む暗緑灰色(5GY4/1)中粒砂、オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト質中粒～細粒砂からなる。中粒～細粒砂を主とし、下位の第4b層を

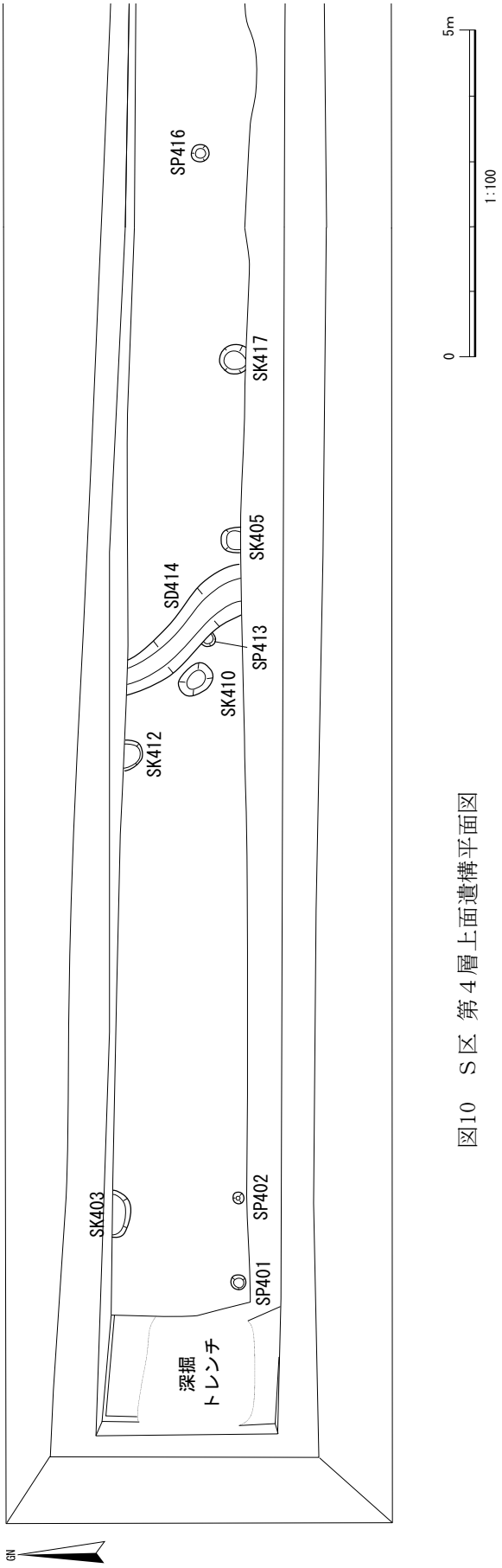


図10　S区 第４層上面遺構平面図

下刻して流れる流成の堆積層である。層厚は最大26cmである。

第4b層は、灰オリーブ色(5Y5/2)・オリーブ灰色(2.5GY5/1・5GY5/1)極細粒砂～シルトからなる湿地性の堆積層で、層厚は60～83cmである。調査区東端部では本層の上面に第4a層を埋土とする偶蹄類のものとみられる足跡や地震によるものと推定される変形構造が認められた。

第4c層は暗緑灰色(7.5GY4/1)中粒砂～シルトからなり、ラミナが顕著にみられる流成の堆積層で、西側に向かってやや側方細粒化する。層厚は19～34cmである。

第4d層はやや暗色を呈する湿地性の堆積層で、上部は暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト、下部は植物片のラミナが顕著にみられる暗オリーブ灰色(2.5GY8/1)シルトからなる。層厚は38～40cmである。

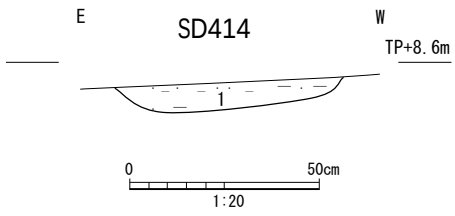
第５層は調査区西端の深掘トレンチで確認した湿地性の堆積層で、上部の暗色化した水浸きの古土壌の第5a層と、下位の第5b層に分けられる。第5a層は植物片が集積した黒色(10Y2/1)シルトからなり、層厚は６cmである。第5b層はオリーブ黒色(10Y3/1・2)シルトからなり、層厚は54cm以上である。

ⅱ）遺構と遺物

遺構はおもに第3c層および第４層の上面で検出したが、調査区東端部では地層が落ち込んでいるなど地層の状況が異なったため、部分的に第２層中～第3b－2層中で遺構を検出した。

ａ．第４層上面遺構（図10・図版３上）

第４層上面ではSD414、SK403・405・410・412・417、SP401・402・413・416を検出した。なお、調査区東端から10ｍ付近以東については地層が落ち込んでいたことから、落込み上で第3b－2層中の遺構を検出しており、これらの遺構については後述する。



1：灰オリーブ色（5Y4/2）極細粒砂質シルト

図11　Ｓ区 SD414断面図

SD414は北西－南東方向の溝でやや蛇行する。幅は0.52～0.77ｍ、深さは0.08ｍである。灰オリーブ色極細粒砂質シルトを埋土とする(図11)。

SK403・405・410・412・417は深さ0.04～0.12ｍの浅い遺構で、人為的な遺構のみでなく自然のくぼみも含む可能性がある。

SP401・402・413・416は直径0.18～0.28ｍ、深さ0.03～0.12ｍの小穴である。

これらの遺構からは遺物は出土しなかった。

ｂ．第3c層上面検出遺構（図12、図版３中）

第3c層上面の遺構として土壙、柱穴、溝、小穴を検出した。なお、調査区東端から15.3m以東については、第3b－2層堆積時の下刻により第3c層が削られて残存していない。このため、この部分については第２層中～第3b－2層上面で遺構を検出している。これらの遺構については後述する。

SK305は調査区西部で検出した土壙で、東西1.02ｍ、南北1.20ｍ以上、深さは0.33ｍである。この約２ｍ東でSK306を検出した。直径0.64ｍ、深さ0.18ｍの土壙である。これらの遺構はいずれも埋土に偽礫を含むことから人為的に埋められたことが確認できる(図13)。SK306の埋土中から瓦器小皿１が出土した(図版４下)。１は直径約９㎝、器高1.2㎝と比較的小型で器高も浅い。内面は磨滅により不明瞭ではあるがわずかにヘラミガキの痕跡が認められる。底部外面はユビオサエである。体部は浅く立ちあがり、ヨコナデにより明瞭な稜をつくる。13世紀後葉に属するものとみられる。

SK310・314は調査区中央部で検出した土壙である。SK310は東西0.46ｍ、南北0.46ｍ以上、深さは0.19ｍである。SK314は東西0.66ｍ、南北0.69ｍの土壙で、深さは0.19ｍである。いずれも埋土は３層に分かれ、上・中層に偽礫を含むことから人為的に埋められたものとみられる。

このほかSK301・302・313・316・317・325～327・329を検出した。このうち調査区西端部で検出したSK301・302は深さ0.05～0.09ｍで、第3b層を埋土とすることから人為的な遺構ではなく自然の凹みの可能性がある。また

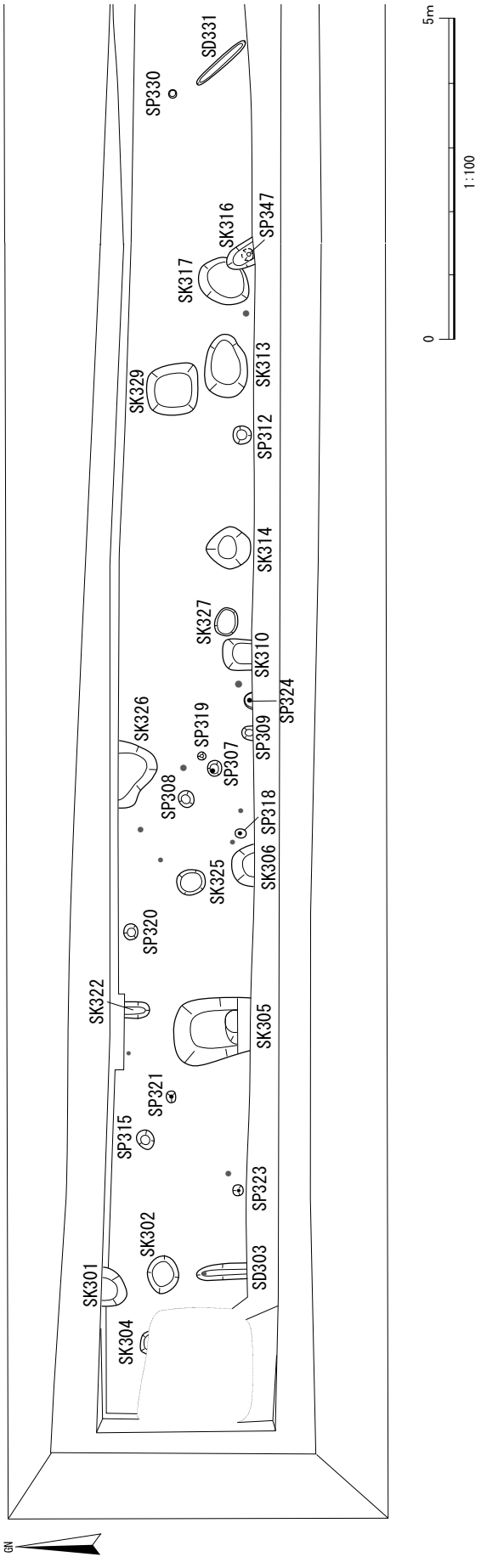
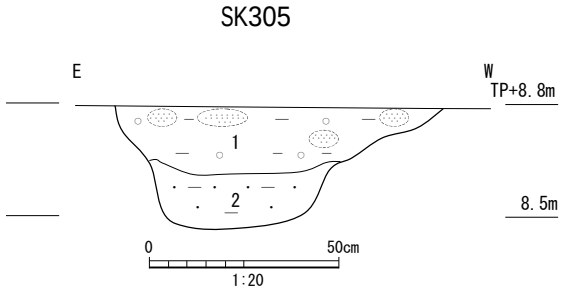
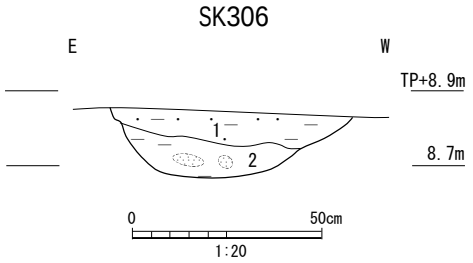


図12　Ｓ区 第3c層上面検出遺構平面図



1：暗オリーブ灰色（5GY4/1）細粒砂偽礫・細礫含むシルト

2：暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト質中粒砂



1：暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト質中粒砂

2：暗オリーブ灰色（5GY4/1）細粒砂偽礫含むシルト

図13　Ｓ区 SK305・306断面図

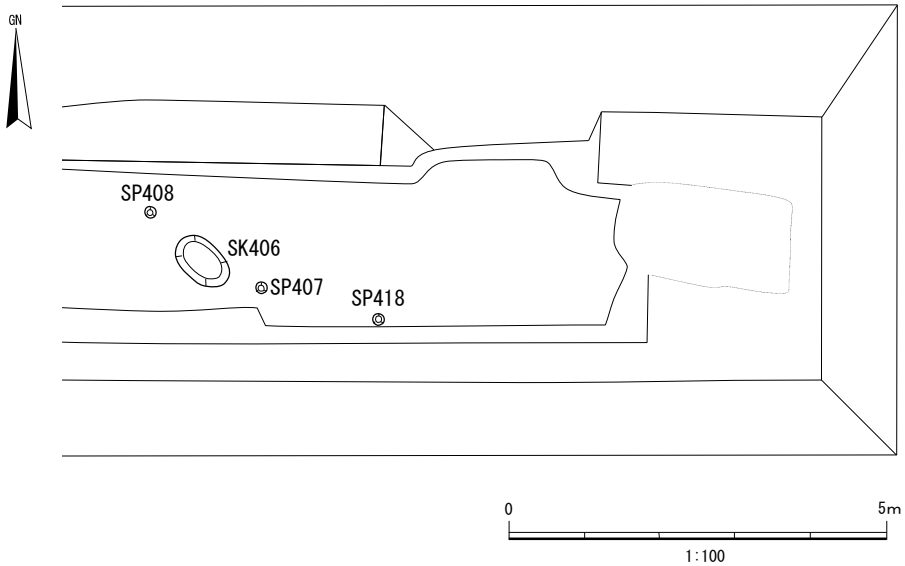


図14　Ｓ区 第3b－2層中遺構平面図

このほかについても、深さが0.08～0.18ｍと比較的浅く、落込みの肩もなだらかで明瞭な掘削の痕跡が認められないことから人為的な遺構ではなく自然の凹みが含まれる可能性がある。

SP307・318・321・323・324は柱穴とみられる遺構である。掘形の直径は0.14～0.26ｍ、柱痕の直径が0.04～0.06ｍと小型である。柱穴の深さは0.06～0.16ｍと浅く、残存状況は良好ではない。このほかSP320は直径0.26ｍ、深さ0.13ｍで、シルト質中粒～細粒砂、極細粒砂質シルト、細粒砂質シルトを埋土とし、人為的に埋められたものと推定されることから柱抜取り穴の可能性がある。SP319は直径0.12ｍ、深さ0.20ｍで、柱痕は認められない。小型であることから杭穴の可能性も残るが、やや上部に開く断面形状であることから杭穴ではなく柱を引き抜いた抜取り穴の可能性を考えた。SP312は直径0.25ｍ、深さ0.11ｍで、下部は中粒砂で埋まり、上部は細粒砂質シルトを埋土とする。小穴とみられるが、上記の柱穴と規模が類似することから柱抜き取り穴の可能性も想定される。

SP308・309・315・330・347は直径0.15～0.31ｍ、深さ0.03～0.08ｍの小穴である。

このほか、上層の耕作土の下面遺構である鋤溝SD303、SD331を検出した。方位はSD303が南北方向、SD331が北西－南東方向である。

また、調査区全域で杭穴を検出した。これら杭穴の帰属面については明確ではないが、北壁断面の観察から第3a層よりも上位から打ち込まれているものが確認できないことから、第3a層上面遺構の可能性がある。

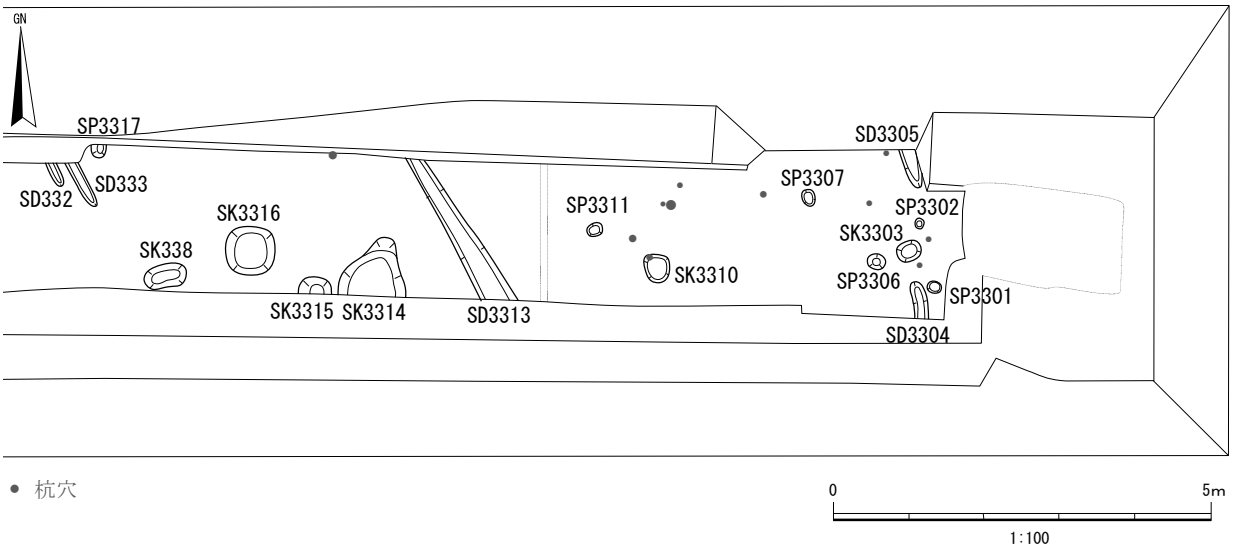


図15　Ｓ区 第3b－2層上面検出遺構平面図

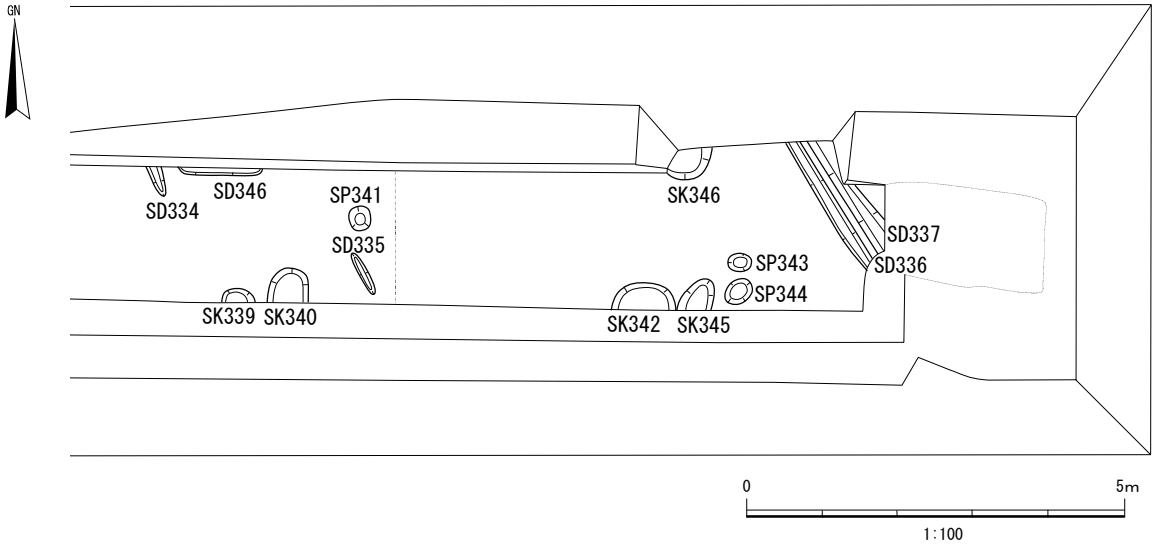


図16　Ｓ区 第2層中～第3b－1層上面検出遺構

ｃ．第2層中～第3b－2層中検出遺構（図14～16、図版３下）

以下、調査区東端部で検出した遺構について記述する。

第3b－2層中で土壙SK406、小穴SP407・408・418を検出した(図14)。

第3b－2層上面で土壙・溝・小穴を検出した(図15、図版３下)。SK3316は直径0.64～0.66ｍ、深さ0.09ｍの円形の浅い土壙で、埋土はオリーブ灰色(10GY5/1)極細粒砂質シルトである。須恵器小片２、瓦質土器の小片３が出土した。SK338・3303・3310・SK3314・3315は深さが0.05～0.07ｍと浅く、人為的な遺構のほか自然のくぼみも含まれる可能性がある。SD332・333・3304・3305・3313は第3b－1層下面の鋤溝で、いずれも北西－南東方向である。SP3301・3302・3306・3307・3311・3317は直径0.17～0.25ｍ、深さ0.03～0.07ｍの小穴である。このほか調査区東端部を中心に杭穴を多数検出した。第3c層上面で検出した杭穴と一連のものと推定される。

第3b－1層上面で、深さ0.05～0.07ｍの浅い土壙SK339・340、小穴SP341と第２層下面の鋤溝

SD334・335・346を検出した(図16)。

第２層中で浅い土壙SK342・345・346、鋤溝SD336・337、小穴SP343・344を検出した(図16)。なお、SK345・346は人為的な遺構ではなく自然のくぼみの可能性もある。

〈まとめ〉

今回の調査では中世の土壙や溝、小型の柱穴などを検出したが明瞭な人為的遺構は少なく出土遺物も少量であった。また当初予想された古代の遺構についても確認されなかった。こうした状況は、周辺の調査成果との比較により、調査地周辺が微低地であったことによるものと推定される(図17)。調査地南のNG00－6次調査ではTP+7.8～8.2ｍで飛鳥～平安時代の古土壌が検出されており、北のNG00-30次調査ではTP＋8.2ｍ付近で奈良時代の溝が検出されている。これに対して今回の調査地では、NG00-6次調査の古土壌を覆うNG4C層に相当する第4b・c層がTP+7.5ｍ付近まで厚く堆積しており、古代においては調査地付近に微低地があったことが指摘できる。その後、第4b・c層の堆積により微低地が一定程度埋没し、耕作地としての利用が活発になったものと推定される。既往の調査成果からNG00－6次調査地から北側には六反自然堤防が形成されていたことが明らかにされており、またNG00－6次調査地北東には古代の集落跡の存在が推定されている[村元健一2003・2004]。今回の調査は、こうした古代～中世における古地形や土地利用のようすを知ることのできる資料を得ることができたという点で成果があったといえる。

【引用・参考文献】

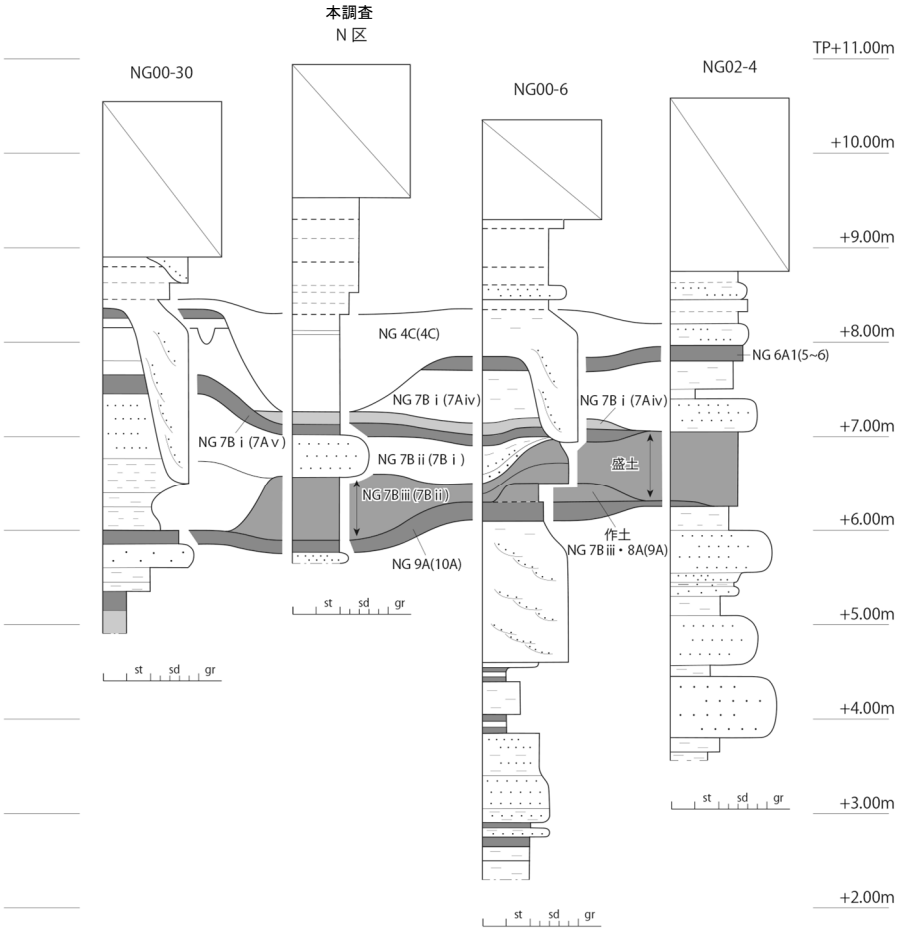
大阪市文化財協会2003、『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅵ』

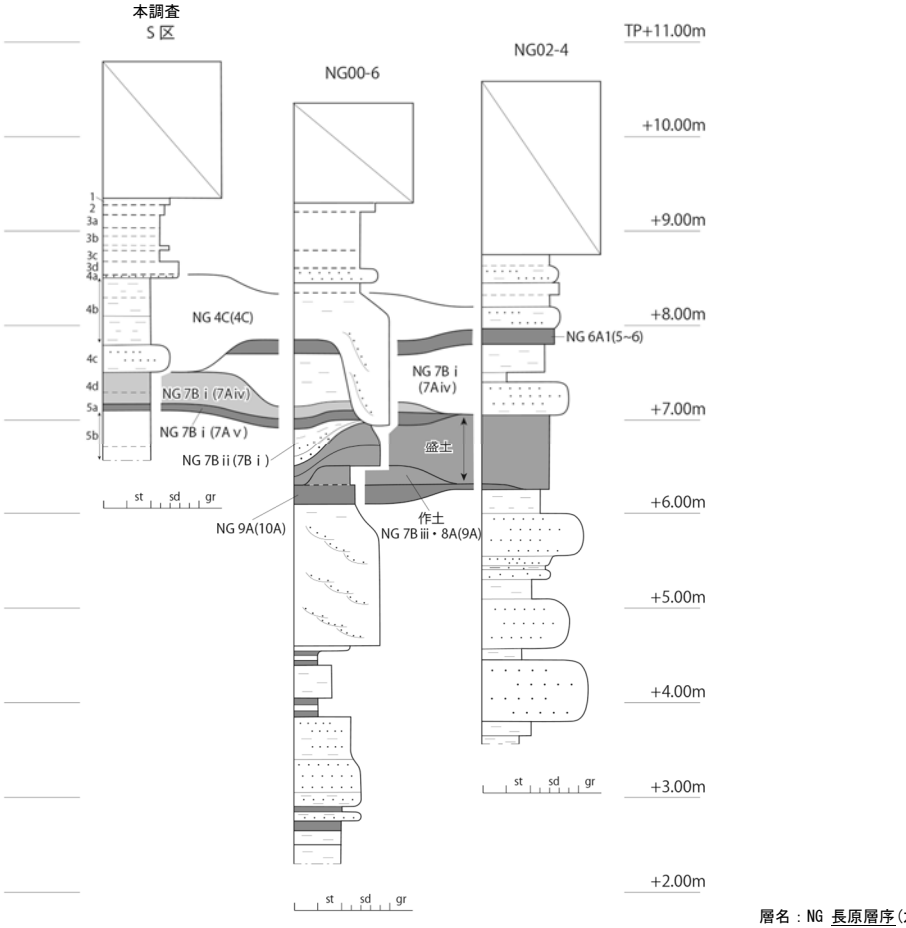
大阪市文化財協会2004、「北調査地（NG00－30次）の成果」：『長原遺跡発掘調査報告ＸＩ』、pp.9－32

京嶋覚2016、「河内国丹比郡北部の方格地割」：『条里制・古代都市研究』第31号、pp.1-14

村元健一2003、「第Ⅳ章 遺構と遺物の検討　第３節 長原遺跡とその周辺における古代の様相」：『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅵ』、pp.86－100

村元健一2004、「第Ⅲ章 調査成果の分析と検討　第２節 まとめ」：『長原遺跡発掘調査報告Ⅺ』、pp.57－62





層名：NG 長原層序(六反層序)

図17　層序柱状対比図

瓜破遺跡発掘調査（SUR17－１）報告書

調 査 箇 所	大阪市平野区瓜破東４～８丁目
調 査 面 積	35㎡
調 査 期 間	平成29年11月27日～平成29年12月21日
調 査 担 当 者	課長　植木 久、田中　裕子、櫻田　小百合

＜調査に至る経緯と経過＞

調査地は旧石器時代から中世の集落跡・墓域である瓜破遺跡の東端に位置し、東側は長原遺跡に隣接している。調査地周辺では1981年から2001年にかけて長吉瓜破地区土地区画整理事業による発掘調査や市営住宅の建て替えによる発掘調査が実施されている。主な成果として、調査地の約150m東側では古墳時代中期まで流路が機能し、飛鳥時代から奈良時代に埋没する「馬池谷」（NG96－32・71次、11－３次）が確認され、その西側には「小谷」と称される支谷（NG95－14次）が確認されている。調査区からこの「小谷」を挟んだ東側の微高地（NG95－41・76、97－18、89－67次）では7世紀前半頃の建物群が検出され、飛鳥時代の集落跡が広がっていたと考えられている（図１）［大阪市文化財協会2000・大阪文化財研究所2013］。

調査地は瓜破霊園の東側にある道路上で、旧阪和貨物線の線路上に位置している。当地において大阪市建設局により道路の拡幅が計画され、試掘調査を実施したところ現地表下1.2m以深で調査の対象となる中世以前の遺構・遺物が確認された。上記の経過をうけ、本調査を実施する運びとなった。

調査区は土置場を確保するため東西２区に分割し、西側をW区として東西6.2m、南北2.0ｍで、東側をＥ区として東西10.0m、南北2.0ｍで設定した（図２）。平成29年11月27日より、W区において掘削を開始し、近世の作土である第２層まで重機で除去した。その後、図面作成や写真撮影といった記録作業を行いながら、地山層である第７層上面まで人力で掘り進めていった。続いてＥ区の調査に着手した。Ｅ区は古代の耕作土である第５層の上面まで重機で掘削し、以下を人力で掘り下げた。Ｅ区西端部で柱穴が確認されたため、協議の上でＥ区西側を東西1.2m、南北４ｍの範囲で拡張し、遺構の検出を行ったところ、柱穴が検出された。調査は平成29年12月21日に完了し、埋め

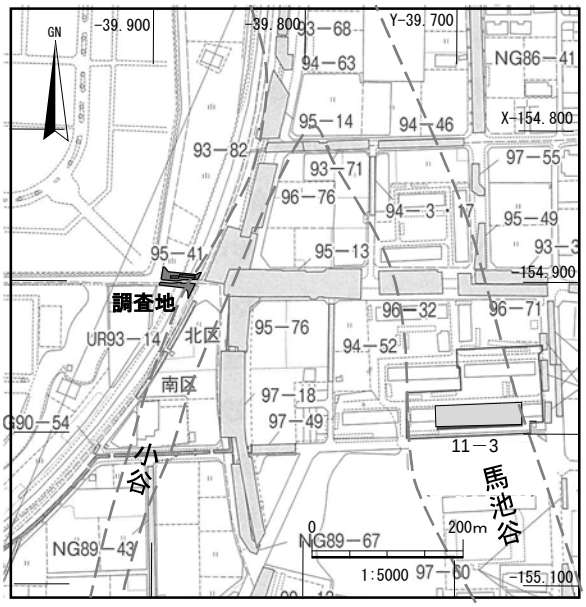


図１　調査地位置図

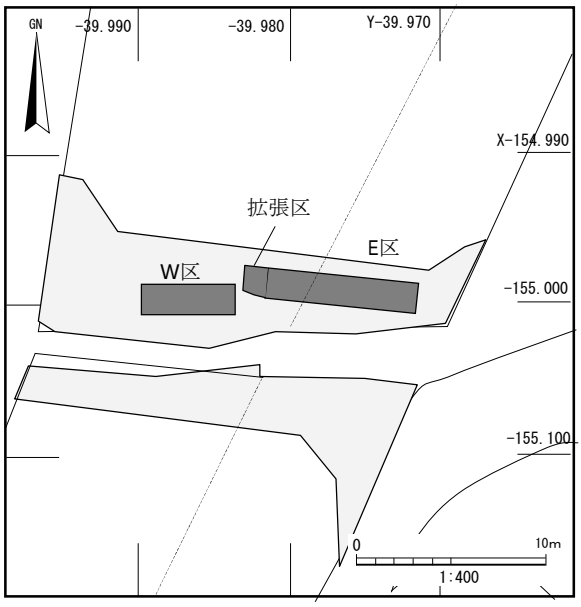


図２　調査区配置図

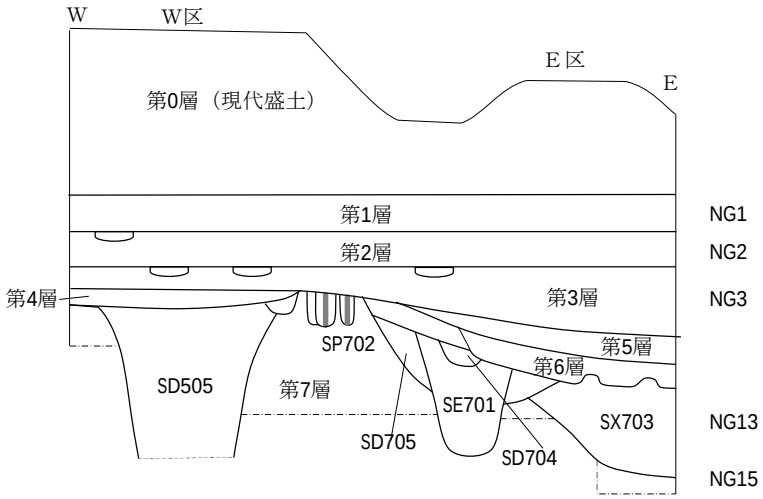


図３　　遺構と地層の関係図

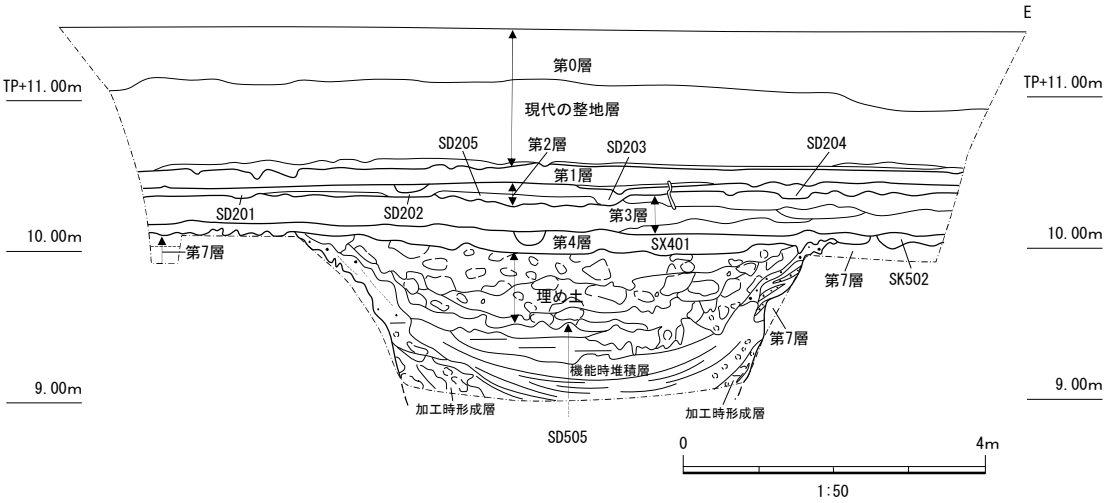


図４　　W区 北壁地層断面図

戻しと撤収を行って終了した。

本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とし、街区を基準としてデジタル地図に当てはめて求めたものである。標高はＴ．Ｐ．値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP±○ｍと表記した。

＜調査の結果＞

1．層序（図３～５、図版５・６）

調査地付近の標高はTP＋11.1～11.5ｍである。調査地内は畠および貨物線の線路跡であり起伏に富んでいるが、広域的には南が高く、ゆるやかに北に下がる地形をしている。

第０層　現代盛土で、層厚42～115㎝である。

第１層　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質細粒～中粒砂からなり、層厚８～28㎝である。近現代作土層で、瀬戸美濃焼磁器染付碗などが出土した。長原遺跡標準層序であるNG１層（以下、NG○層とする。［趙哲済2001］）に相当する。Ｗ・Ｅ区ともに分布する。

第２層　中～細礫をわずかに含む灰オリーブ色（5Y4/2）細粒砂質シルトからなり、層厚６～12㎝である。肥前磁器染付碗・皿などを含み、近世の作土層である。Ｗ・Ｅ区ともに分布する。NG２層に相当する。

第３層　明黄褐色（2.5Y6/6）～黄灰色（2.5Y7/2）細粒～極細粒砂質シルトおよびシルト質細粒

～中粒砂からなる中世の作土層である。W・E区ともに分布する。層厚15～50cmで、耕作の単位によって２～３層に細分される。E区東部に向かって厚みを増す。下層の谷の影響とみられる。出土遺物は黒色土器19、瓦器20・21、東播系須恵器22などである。NG３層に対応する。

第４層　黄褐色（2.5Y5/4）細粒砂～細粒砂質シルトからなり、層厚５～14cmである。SD505の上面で確認された窪みSX401の埋土として、W区にのみ分布する。黒色土器A類のほか、古代の土師器・須恵器17を含む。平安時代頃までに堆積したとみられる。

第５層　灰黄色（2.5Y6/2）中粒～極細粒砂質シルトで中～細礫をわずかに含む作土層で、層厚５～20cmである。E区にのみ分布する。後述する谷（SX703）および溝（SD705）の上部に分布している。土師器53・須恵器54～62など奈良時代までの遺物を含む。

第６層　暗灰黄色（2.5Y5/2）粗粒～極細粒砂質シルトで、中～細礫を含む。層厚８～20cmで、飛鳥時代の作土層である。第５層同様、E区にのみ分布し、谷（SX703）および溝（SD705）の上位に分布する。土師器63、須恵器64～71など、古墳～飛鳥時代の遺物が集中して出土している。

第７層　低位段丘構成層で、本調査地の地山層である。シルト層の第7a層、砂層の第7b層と粘土層の第7c層に細分される。第7a層は明黄褐色（2.5Y6/1）および灰白色（10Y7/1）シルトからなり層厚３～20cmで、生痕化石が確認できた。W区からE区西部に分布する。第7b層は灰黄色（2.5Y7/2）および明黄褐色（10YR6/8）粗粒～中粒砂で、層厚25cm以上、NG13層に対応するとみられる。E区西半部にのみ分布する。第7c層は明黄褐色（2.5Y6/8）および灰白色（10Y7/1）粘土からなり、層厚20cm以上、NG15層に対応するとみられる。W区およびE区東半部に分布する。本層からの遺物の出土はない。

２．遺構と遺物

遺構の検出はW区では第３層上面・第４層上面・第７層上面で、E区では第６層上面・第７層上面で行った。

i．古墳～飛鳥時代の遺構

a．W区（図４・６、図版５）

W区では第７層上面で飛鳥時代の溝と土壙を検出した。

SD505　W区の第７層上面で確認された幅3.6m、長さ5.0m以上、深さ1.0m以上の台地を開削する大溝である。

埋土は主に３層に細分される。下部の両端部には、地山偽礫を含む灰色（5Y6/1）シルト層が堆積し、加工時形成層とみられる。その上に水成層である灰白色（2.5Y8/1）・オリーブ黒色（5Y3/2）シルト層が0.5m以上堆積する。機能

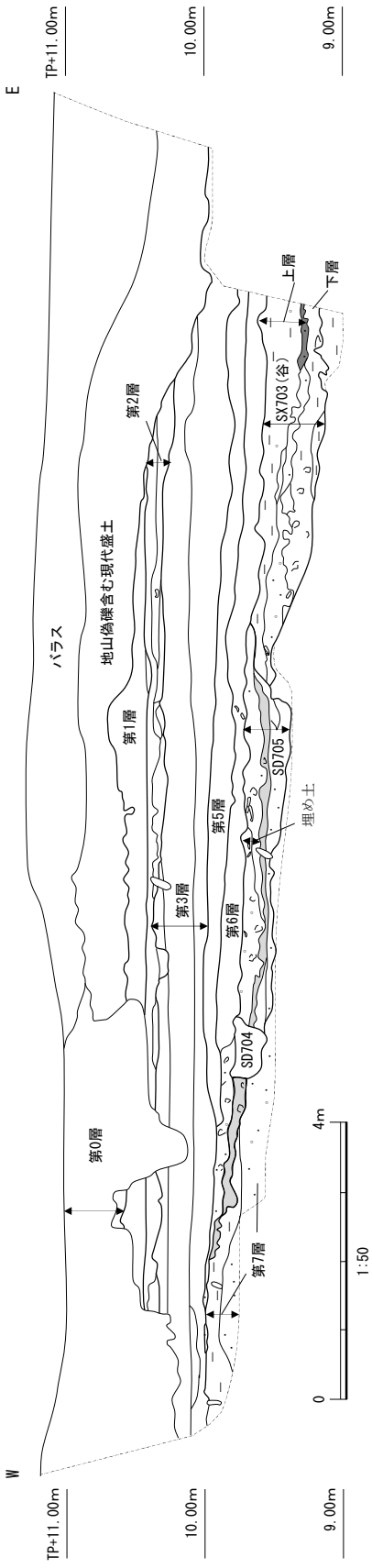


図５　E区 北壁地層断面図

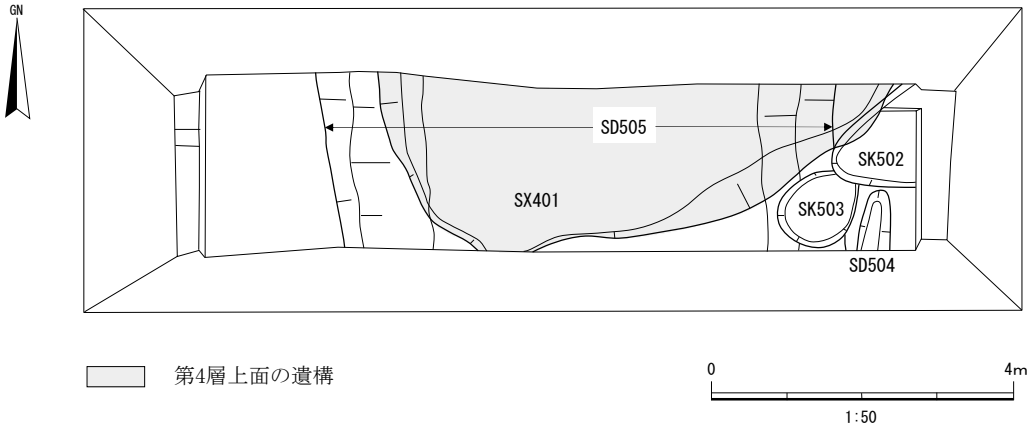


図６　　第７層上面検出遺構平面図

時堆積層であり、この溝が滞水しながら徐々に埋まっていった様子が観察される。最上部は黄褐色（10YR5/6）細粒砂質シルト～シルトからなる地山偽礫で構成される。最大層厚0.55ｍで溝を埋め立てた層である。

出土遺物は土師器の破片と須恵器１～11である。機能時堆積層からは１・２・７・８が出土した。１はハソウである。２・７・８は甕である。２は体部の破片で、外面カキメ、内面は同心円状の当具痕が残る。７も体部で内面の当具痕をナデ消している。８は底部の破片である。埋め戻し層からは、須恵器杯Ｈ身３、同蓋４のほか、壺の可能性がある５・６が出土した。６は細かな波状文が施され、頸部の破片であろう。９～11は一括で取り上げた遺物である。11は甕、10は高杯の脚部とみられるが、壺などの口縁部の可能性もある。９は２と同一個体の可能性がある。７・３・４は５世紀代、それ以外は７世紀代のものであろう。加工時形成層からの遺物の出土はない。SD505は飛鳥時代に機能し、埋められたとみられる。

なお、SD505が埋没した後にできた窪み部分をSX401とし、その埋土の自然堆積層を第４層とした。SX401からは、黒色土器Ａ類の破片のほか、土師器の杯や甕の破片、須恵器甕17が出土した。

SD504　幅0.2ｍ、長さ0.4ｍ以上、深さ0.05ｍの溝である。埋土は灰黄色（2.5Y6/2）シルト質極細粒砂で、耕作溝の可能性がある。遺物の出土はない。

SK502　東西0.56ｍ、南北0.68ｍ、深さ0.12ｍの不正形の土壙である。埋土は黄灰色（2.5Y5/1）シルト質細粒～極細粒砂である。SD505の東肩を壊して掘られているがSX401が上部に堆積しており、SD505と同時期に埋められた可能性がある。出土遺物は土師器片のほか、須恵器13がある。凹線の上に波状文が施されており、把手の外れた痕跡がある。把手付の高杯などの可能性がある。

SK503　直径0.5ｍ、深さ0.14ｍ、埋土は黄褐色（2.5Y5/4）極細粒砂質シルトで中粒砂が混じる。地山偽礫を含む土で埋め戻されていた。出土遺物は土師器杯の破片である。

b.　Ｅ区（図７・８、図版５・６）

第７層上面で古墳時代～飛鳥時代の谷・溝、井戸、柱列を検出している。

SX703　Ｅ区で東に向かって深くなる落ち込みを検出した。東西幅2.3ｍ以上、深さ0.45ｍで、北東－南西方向である。周辺の調査成果からみて、「馬池谷」の支谷である「小谷」の西肩部分にあたるとみられる。地山と落ち込み底のとの境界部分には加工痕があった。本来の「小谷」は北西－南東方向であり、今回検出されたSX701とは方向が異なっている。谷地形の肩部分を掘削して自然地形に手を加えていたようである。

埋土は上下２層に細分される。下層は黄灰色（2.5Y4/1）中粒砂質シルト～粘土で、地山偽礫が混じる。層厚0.10～0.28ｍで、下面では地山を掘削する加工痕があった。上層は黒褐色（2.5Y3/2）極細粒砂質粘土で、層厚0.09～0.32ｍで、底に植物ラミナが集積する。滞水環境にあったようで泥が堆積しながら埋まっていったようである。上層の下面では足跡が確認できた。谷内に人が立ち入る

ことがあった様子が観察される。

下層からは土師器甕や須恵器27・28が出土した。27は甕体部の破片で外面にカキメがあり、内面は当具痕をナデ消している。初期須恵器とみられる。28は５世紀後半頃のハソウの可能性がある。

上層からは土師器29や須恵器30～37が出土した。29は甑・鍋類の把手である。30は垂直に立ち上がる壺もしくは甕の口縁部である。31は外面平行タタキのちカキメ調整、内面は同心円状当具痕が残る甕の肩部である。32は返りのつく杯蓋、33はハソウの体部で２条の凹線の間に刻み目が施される。34・35は壺か甕で、35は焼成不良のため赤褐色を呈する。36は提瓶、37は横瓶であろう。32は返りが大きく、７世紀前半頃のものとみられる。

古墳時代中～後期に加工され開口していた谷が、飛鳥時代には埋められ、耕作地化したといえるだろう。

SD705　幅4.66m、長さ0.90m以上、深さ0.32mの南北方向の溝である。西肩はなだらかで、東肩はSX703を壊している。部分的にSE701・SD704に壊されている。埋土は最下層に灰黄褐色（2.5Y7/2）粗粒～細粒砂が堆積する。水成層が動かされた形跡があり、肩部分には偽礫を含むことから加工時形成層である。その上部に灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂質シルトの泥が堆積し、機能時堆積層である。上部は地山偽礫を含むオリーブ黄色（5Y6/3)粗粒～極細粒砂質シルトで埋め戻されていた。

加工時形成層からは土師器甕38、機能時堆積層～埋め戻し層からは土師器39・40、須恵器41・71が出土した。39は高杯の脚部、40はハケ調整の甕体部である。41は高杯の脚部で２条の凹線が施され、方形の透かしがある。71は底部ケズリ調整の壺とみられ、第６層の耕作土中からも破片が出土している。古墳時代末～飛鳥時代に属するとみられる。

なお、第６層出土ではあるが、SD705の上部で出土した土師器63・須恵器64～69もここで記述する。本来はSD705に属し、耕作などの際に上層に巻き上げられたものであろう。63は外反する甕の破片である。64～68は壺または甕である。64・65は口縁部の破片で、64は端部が肥厚する。65は短く垂直に立ち上がる。短頸壺の可能性がある。66～68は体部の破片で、67は列点文が施される。66は凹線が２条施され、自然釉がかかる。瓶類の可能性もある。飛鳥時代までの遺物を包含する。

SD705の西肩からSX703にむかって、地山上面の標高はTP＋10.0ｍからTP＋9.1ｍまで、ゆるやかに下がっている。SD705も「小谷」の西肩部分に位置しており、飛鳥時代に機能していたしていたが、SX703とあまり変わらない時期に埋められ、耕作地となっていったといえる。

SE701　東西2.2m以上、南北0.4m以上、深さ1.46mの素掘りの井戸である。SD705の埋没後掘削されている。また、この井戸が埋まったあと、SD704が掘られている。埋土は灰色

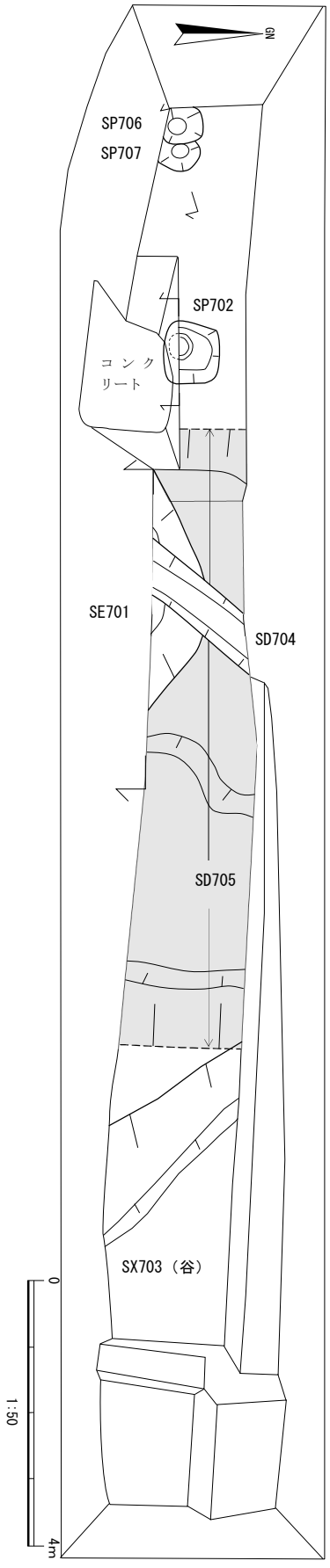
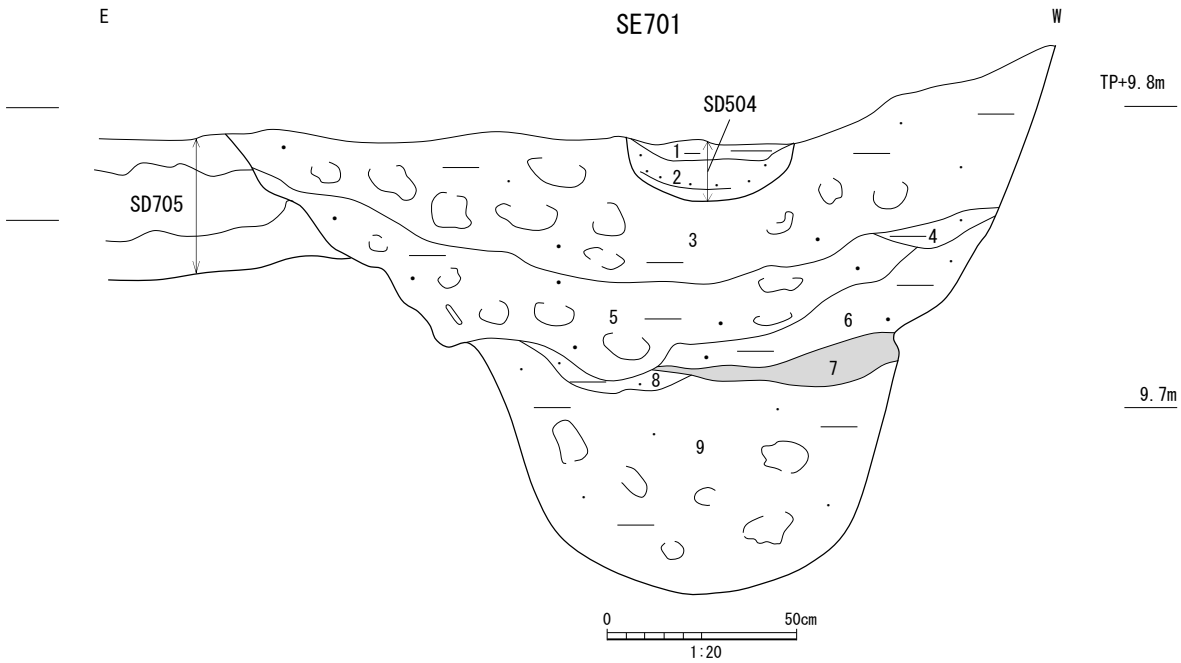


図７　第７層上面検出遺構平面図



1：暗灰黄色（2.5Y5/2）極細粒砂質粘土（SD704）

2：黄褐色（2.5Y5/3）細粒砂（SD704機能時層）

3：明黄褐色（2.5Y7/6）中粒～細粒砂質シルト、地山偽礫含む（SE701）

4：暗灰黄色（2.5Y4/2）細粒砂質シルト（SE701）

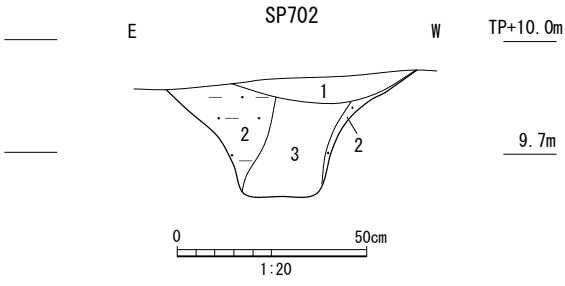
5：黄褐色（2.5Y5/3）シルト質中粒砂（SE701）

6：灰色（5Y4/1）シルト質中粒～細粒砂（SE701）

7：黒褐色（10YR3/1）シルト（SE701）

8：灰色（5Y4/1）シルト質細粒砂（SE701）

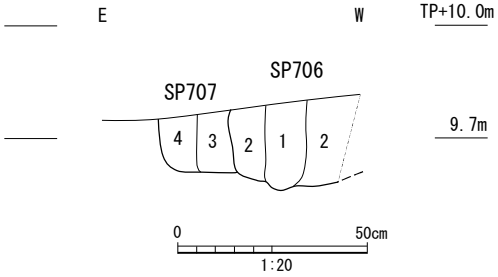
9：灰色（5Y4/1）シルト質細粒砂、青灰色地山偽礫含む（SE701）



1：灰黄色（2.5Y6/2）シルト質中粒～細粒砂

2：暗灰黄色（2.5Y5/2）中粒～細粒砂質シルト（掘形）

3：灰白色（2.5Y7/1）シルト混じる中粒～細粒砂（柱痕跡）



1：灰白色（7.5Y7/2）細粒～極細粒砂質シルト（SP706柱痕跡）

2：灰白色（10Y7/1）・明黄褐色（10YR6/8)粗粒～中粒砂偽礫・極細粒砂質シルト偽礫含む細粒～極細粒砂質シルト（SP706掘形）

3：オリーブ灰色（2.5GY5/1）極細粒砂質シルト（SP707柱痕跡）

4：灰白色（10Y7/1）粗粒～中粒砂偽礫含む細粒～極細粒砂質シルト

図８　　SE701、SP702、SP706・707遺構断面図

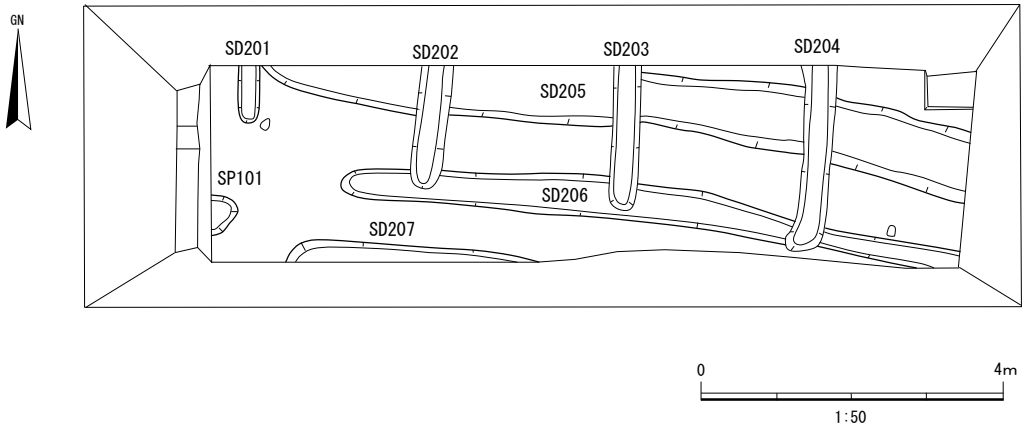


図９　　第３層上面検出遺構平面図

（5Y4/1）シルト質中粒～細粒砂・黒褐色シルト層（図８、6・7層）を挟んで、上下に細分できる。下層は灰色（5Y4/1）シルト質細粒砂からなり青灰色の地山偽礫含む（図８、9層）。上層は黄褐色（2.5Y5/3）シルト質中粒砂・明黄褐色（2.5Y7/6）中粒～細粒砂質シルト（図８、3・5層）で、偽礫を主体とし、埋め戻されていた。機能時堆積層や加工時形成層は確認できなかったが、大部分が調査区南壁にかかっており、南側がさらに深くなる可能性がある。

出土遺物は土師器42・43、須恵器44～52である。下層からは土師器42、須恵器44～46が出土した。42は甕の口縁部で、まっすぐ立ち上がりわずかに外反する。44は壺などの肩部、45は壺底部の可能性がある。46は甕で外面カキメ、内面同心円状の当具痕が残る。43・47～52は一括して取り上げた遺物である。43は口縁部が外反する土師器の甕である。47は壺もしくは瓶類の口縁部とみられる。48～52は甕または壺で、51は外面カキメ調整の肩部、52はケズリ調整される底部で平底となる。飛鳥時代を中心とする遺物を含む。

柱列SP702・706・707　Ｅ区西部で柱穴SP702が検出された。Ｅ区内では組み合う柱穴が確認できなかったため、東側に1.2ｍほど調査区を拡張したところ、SP706・707が確認できた。SP702とSP706・707は正東西方向に位置する。SP706はSP707をほぼ同じ位置で建替えた可能性があり、SP702－SP707の柱間は1.47m、SP702－SP706の柱間は1.62ｍである。第５層上面の遺構であろう。

SP702　直径0.43～0.46m、深さ0.34m、柱痕跡の直径は0.20ｍである。埋土は、柱痕跡部分は灰白色（2.5Y7/1）中粒～細粒砂でシルトが混じる。掘形は暗灰黄色（2.5Y5/2）中粒～細粒砂質シルトでシルト偽礫を含む。掘形部分から土師器杯片が出土している。

SP706　直径0.22ｍ、深さ0.26ｍ、柱穴の直径は0.13ｍである。埋土は、柱痕跡は灰白色（7.5Y7/2）細粒砂～極細粒砂質シルト、掘形は灰白色（10Y7/1）および明黄褐色（10YR 6/8）中粒～極細粒砂質シルトで粗粒～中粒砂偽礫・極細粒砂質シルト偽礫を含む。SP707を壊している。出土遺物はない。

SP707　直径0.22ｍ、深さ0.18ｍ、柱穴の直径は0.10ｍである。西側部分がSP706で壊されている。埋土は柱痕跡がオリーブ灰色（2.5GY5/1）極細粒砂質シルト、掘形が灰白色（10YR7/1）細粒砂～極細粒砂質シルトで、粗粒～細粒砂質シルト偽礫を含む。出土遺物はない。

SD704　幅0.44m、長さ0.85m以上、深さ0.18ｍの北東－南西方向の溝である。SD705・SE701の上部に位置する。第６層中の遺構である。埋土は暗灰黄色（2.5Y5/2）極細粒砂質粘土と黄褐色（2.5Y5/3）細粒砂で埋められていた。出土遺物はないが、切り合い関係から、飛鳥時代の溝といえよう。

ⅱ．中・近世の遺構（図９、図版５・６）

W区において、第３層上面において耕作溝（SD201～207）と小穴（SP101）を検出した。

SD201～204　幅0.07～0.12ｍ、長さ0.40～1.25ｍ以上、深さ0.04ｍで、南北方向、埋土は灰色（5Y4/1）細粒砂質シルトで中～細礫をわずかに含む。第２層中の遺構である。SD202からは黒色土器B類の碗14が出土した。

SD205～207　幅0.13～0.45ｍ、長さ4.9ｍ、深さ0.05ｍで、北西－南東方向の溝である。埋土は灰オリーブ色（5Y5/2）細粒砂質シルトからなる。SD201～204に壊されており、第２層下面の耕作溝である。出土遺物はSD205より磨滅した瓦器椀15、中世須恵器の甕片、燻化瓦、SD206より瓦器の小片、SD207より円柱状の土製品16がある。平安～室町時代までの遺物を含む。

SP101　東西0.16ｍ、南北0.26ｍ、深さ0.02ｍの小穴である。第１層で埋まる。遺物の出土はない。

ⅲ　各層出土の遺物

第６層出土の遺物　土師器63、須恵器64～71などが出土した。63～70はSD705で上述したように飛鳥時代を中心とする。70はSX703の上部からの出土である。外面カキメ、内面同心円状の当具痕が残る甕の破片である。

第５層出土の遺物　土師器53、須恵器54～62が出土した。53は甕の頸部、54は壺の肩部、55は凸線がめぐる破片で、高杯の脚部の可能性がある。56は端部が肥厚する甕の口縁部である。57は口縁部で平瓶の可能性がある。58～62は壺もしくは甕の破片で、58～61は底部である。61は窯体が付着する。62は肩部の破片で、焼成不良で赤褐色を呈する。古墳時代後期～奈良時代までの遺物を含む。

第３層出土の遺物　瓦器18～21、須恵器22・26、瓦23～25が出土した。18・20・21は碗とみられ、18は磨滅によりいぶしがとれている。19は皿、22は東播系須恵器捏鉢の底部とみられる。26は須恵器甕の体部破片で、外面格子タタキ、内面は当具痕がナデ消されており、初期須恵器とみられる。23～25は平瓦で、凸面は縄タタキされる。奈良時代のものであろう。これらの遺物は平安～室町時代を主体とし、23～26は混入品である。

＜まとめ＞

今回の調査では飛鳥時代を中心とする遺構・遺物が検出された。「馬池谷」の支谷である「小谷」とその西側での土地利用の変遷の一端が明らかとなった。以下に記述する。

・馬池谷の支谷である「小谷」の西肩部を検出した（SX703）。肩部分は古墳時代中～後期頃、自然地形に手が加えられ、開口状態にあったが、飛鳥時代には埋められ耕作地化していったといえる。

・「小谷」西側の傾斜地で溝（SD705）を検出した。この直上の第６層からは多くの遺物が出土しており、耕作の際巻き上げられたようである。飛鳥時代以降、Ｅ区東半部の「小谷」へとむかう傾斜地は埋め立てられ耕作地となっていったといえる。

・「小谷」の西側微高地部分で、飛鳥時代とみられる柱列を検出した。ほぼ同一箇所で建替えられている。柱間は1.46～1.62ｍである。

・Ｗ区においては、瓜破台地を開削する飛鳥時代の大溝（SD505）を検出した。これまでの調査で飛鳥時代前期の集落が「小谷」東側の微高地で見つかっている。集落西側にひろがる生産域の西限を区画する溝の可能性もある。

・また、SD705の埋没後、素掘りの井戸が掘られている。調査区内では底をGL－1.46ｍまで確認したが、機能時堆積層が確認できなかった。調査区外でさらに深くなる可能性がある。

・そのほか、窯体の付着する須恵器甕の体部61や赤焼けの須恵器62が出土している。付近に古代の窯があった可能性もある。

＜出典＞

大阪市文化財協会2000『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ＸＶ
大阪文化財研究所2013『長原遺跡発掘調査報告』26
趙哲済2001「第Ⅱ章　長原遺跡の地層」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅥ

瓜破遺跡発掘調査(SUR17－2)報告書

調 査 箇 所	平野区瓜破東2丁目　瓜破東4号館用地
調 査 面 積	176㎡
調 査 期 間	平成30年3月1日～3月19日
調 査 担 当 者	課長　植木久、櫻田小百合

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は瓜破遺跡の北端部にあり、南約50ｍには成本廃寺推定地がある。地形的には河内台地から北に舌状に延びた瓜破台地の北端部に位置する。台地北端部には「西谷」・「東谷」・「馬池谷」といった開析谷があり、調査地はこのうち「東谷」と「馬池谷」の合流点付近にあたる(図１)。

これまでに行われた周辺の調査としてはUR09－2次、SUR13－3・4次調査があげられる(図１)。UR09－2次調査では旧石器時代～鎌倉時代の遺構・遺物が確認されている。低位段丘構成層の直上に形成された古土壌中から旧石器時代の石器が集中して出土しており、石器製作址の存在が指摘されている。また、成本廃寺の西限を示す可能性のある奈良～平安時代の溝が検出されているほか、同時期の瓦や塼が出土している[大阪文化財研究所2011]。同時期の瓦や塼は大阪市教育委員会が実施した試掘調査SUR13－3・4次調査でも出土している。

今回の調査は瓜破東住宅４号館建替え工事に伴うもので、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が平成29年９月５日に実施した試掘調査の結果にもとづき、本発掘調査を実施したものである。

平成30年２月28日に事前準備を行い、３月１日に調査に着手した。調査は東西15ｍ、南北11ｍの調査区を設定して行った。なお、調査区の北端部については重機掘削中に旧市営住宅の基礎とその撹乱を確認したため、この部分を除いて調査をおこなった。近世の耕作土層である第２層下面まで重機掘削を行い、平面精査により遺構の有無を確認しながら第３～５層を重機と人力を併用して掘下げた。第６層以下については、調査区西半部の東西4.4ｍ、南北4.6ｍの範囲に限定して各層の上面で平面精査を行いながら人力により掘下げた。これらの作業と並行して実測図の作成および写真撮影による記録を行った。調査は3月14日に完了し、その後埋め戻しを行い、３月19日に現地での作業を完了した。

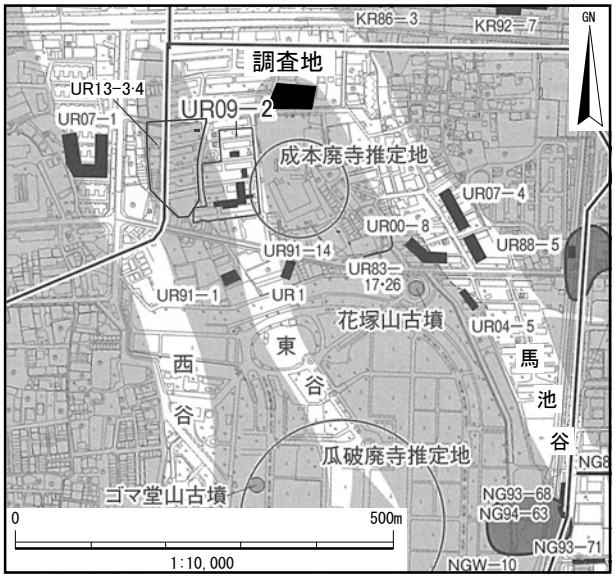


図１　調査地位置図

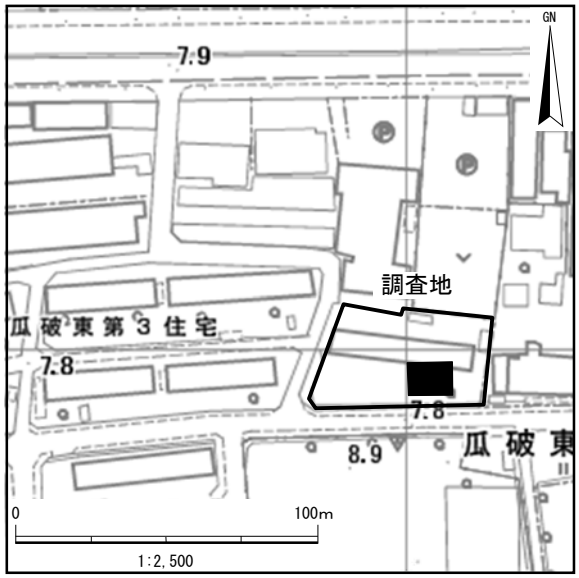


図２　調査地位置図

本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、現地で作成した調査区配置図を街区図にあてはめて求めたものである。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP±〇mと表記した。

〈調査の結果〉

1. 層序（図３～５、図版１）

調査地における現地表面の標高はTP＋7.9～8.2mである。

第０層は現代の整地層で、層厚は32～76cmである。

第１層は灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトからなる現代の作土層で、層厚は最大で37cmである。

第２層はわずかに細礫を含む黄褐色(2.5Y5/3・4)・灰オリーブ色(5Y4/2)・暗オリーブ色(5Y4/3)細粒砂質シルトからなる近世の作土層である。層厚は６～19cmである。

第３層は作土層および水成層からなり、層厚は15～42cmである。作土層は灰オリーブ色(5Y5/3)シルト質極粗粒～中粒砂、黄褐色(2.5Y5/4)を主とするシルト質細粒砂、オリーブ灰色(5GY5/1)を主とする粗粒～細粒砂質シルト、黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂質シルトを主とする。これらの作土層中には一部水成層の砂が偽礫状に残る。水成層はオリーブ黄色(5Y6/3)を主とする粗粒～中粒砂、灰オリーブ色(5Y5/2・3)を主とする細粒砂からなる。第３層中からは、土師器・須恵器・瓦器・瓦・鉄製品が出土している。これらの遺物はいずれも下位層に伴うものの混入品で、地層の年代については第４層の年代から16世紀以降である。なお、本層の上面では第２層下面の鋤溝を検出した(図版３下)。鋤溝の方位はおおよそ北北東－南南西である。

第４層は水成層で、層厚は４～39cmである。灰色(10Y5/1)を主とする細礫～中粒砂、粗粒～中粒砂偽礫を含む灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒砂～シルト質細粒砂、粗粒～中粒砂偽礫を含むオリーブ灰色(5GY5/1)シルト質中粒～細粒砂、オリーブ黄色(5Y6/3)細粒砂からなる。下部の細粒砂は下位の第５層を下刻しており、部分的に第５層の偽礫が認められる。土師器・須恵器・瓦器・中国産磁器・瓦が出土している。中国産磁器の年代から16世紀頃の地層とみられる。なお、調査区東半部では本層の上面で遺構検出を行ったが、遺構は認められなかった。

第５層は灰色(10Y5/1)シルトからなる湿地性の堆積層である。層厚は８～48cmである。本層の上面では乾痕や、第４層を埋土としたヒトや偶蹄類の足跡が認められたが、遺構は確認できなかった。なお、今回の調査地は馬池谷と東谷が合流する付近に位置し、本層以下第14層まではこの谷内の地層である。本層中からは土師器・須恵器・瓦が出土している。

第６層は灰色(5Y4/1)シルトからなる湿地性の堆積層で、層厚は11～31cmである。白色の炭酸第一鉄のノジュールが認められた。本層の上面では乾痕や地震によるものと推定される変形構造が認められた。遺構は確認できなかった、本層から土師器・須恵器・瓦が出土した。

第７層はオリーブ黒色(5Y3/2)粘土～シルトからなる湿地性の堆積層である。第６層との層界はやや不明瞭である。層厚は19～50cmである。本層の上面では**SD701**を検出したほか乾痕や変形構造が認められた(図版３中)。本層中からは瓦が出土した。

第８層は黒色植物片・木片を含む灰色(10Y5/1)粘土～シルトからなる湿地性の堆積層である。層厚は最大で45cm程である。本層の上面で**杭801**を検出したほか、本層上面についても変形構造が顕著に認められた(図版３上)。本層中からは平瓦が出土した。

第５～８層は中世以降の遺物を含まないことから古代の地層と推定される。年代判定が可能な遺物は少なくわずかに６～７世紀頃とみられるものが含まれるが、いずれの地層からも瓦が出土している。これらの瓦は周辺調査の状況から奈良～平安時代のものと考えられることから、第５～８層の年代はこうした年代とみられる。このうち上部については、UR09－2次調査で湿地性の堆積層の上部が平安時代末との成果であることから、平安時代末まで降る可能性がある。

第９層は黒色植物片・木を含む暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土～シルトからなる湿地性の堆積層で、層厚は17～48cmである。本層中には直径３cm程度までの自然木が含まれていた。本層の上面で

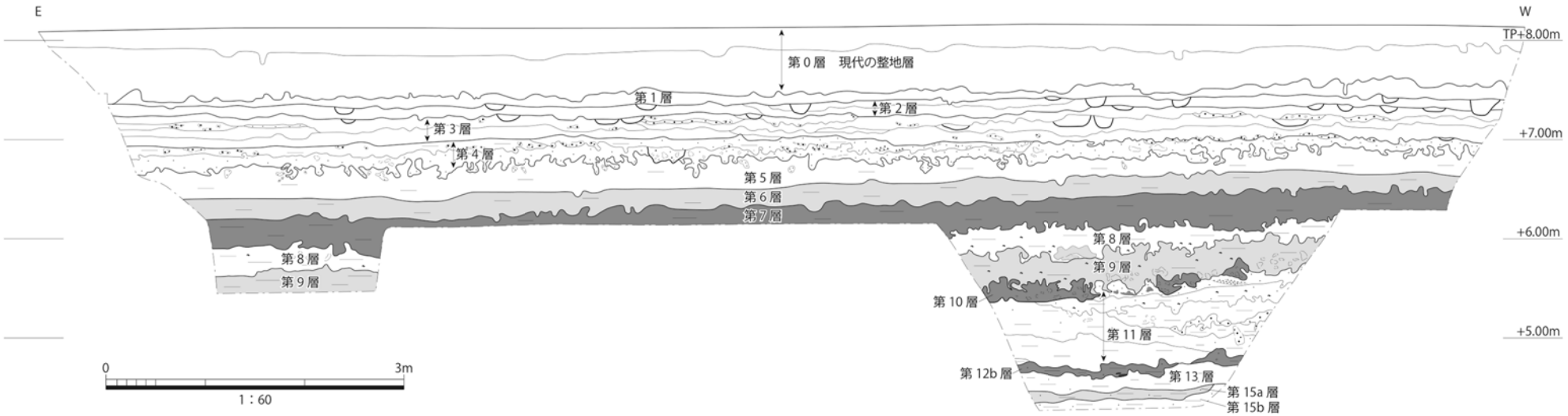


図３　南壁地層断面図

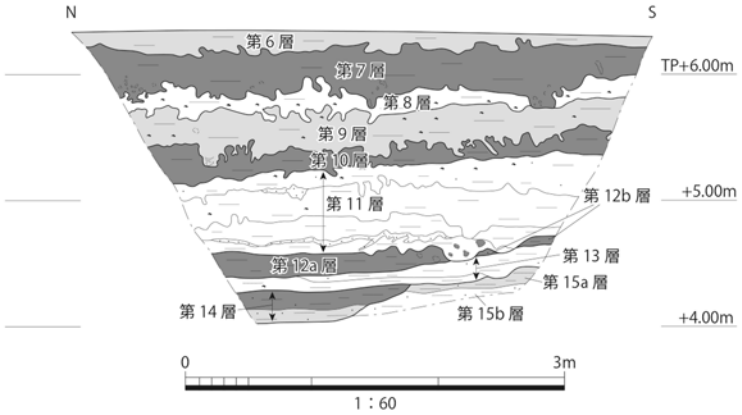


図４　深掘部東壁地層断面図

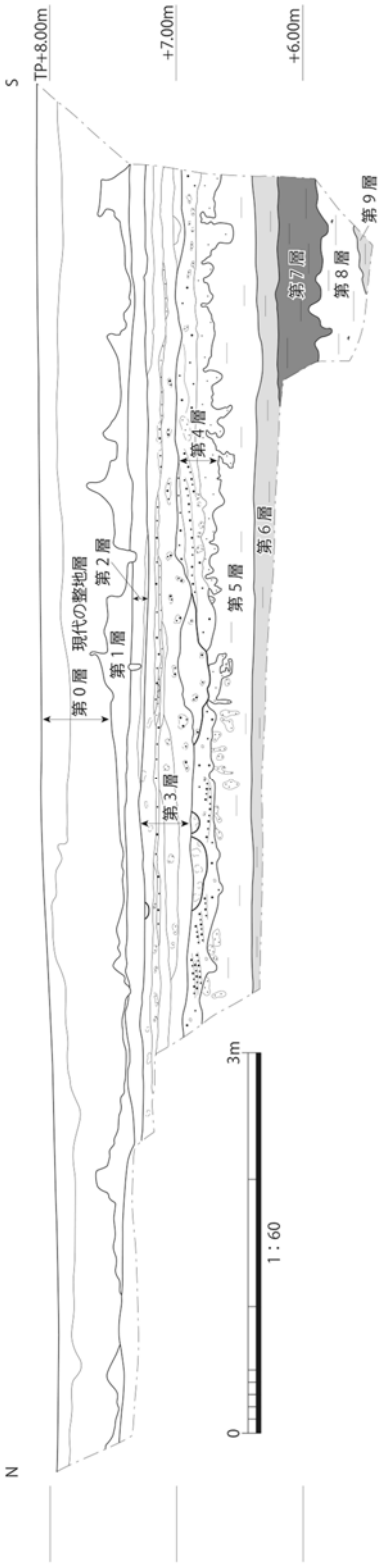


図５　東壁地層断面図

も遺構は認められず、変形構造が顕著にみられた(図版２下)。本層中から須恵器・埴輪が出土した。下位の第11層の年代から７世紀前半以降の地層である。

第10層はオリーブ黒色(5Y3/1)シルトからなる湿地性の堆積層で、層厚は最大34㎝である。上面には遺構は確認できず、変形構造が顕著に認められた(図版２中)。本層から遺物は出土していない。

第11層は水成層で、層厚は57～89㎝である。灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒～中粒砂、オリーブ黒色(5Y3/2)・灰オリーブ色(5Y6/2・7、5Y6/2・4/2)細粒砂からなる流性の堆積物と、黒色植物片・木片を含むオリーブ黒色(5Y3/1・2・7、5Y3/2・1)細粒砂質シルト～シルトからなる緩やかな堆積作用による砂泥の堆積物が互層を成す。本層の上面では遺構は確認できなかった。須恵器・土師器あるいは弥生土器の小片・木製品・直径６cm以下の自然木が出土している。須恵器の年代から７世紀前半頃の地層とみられる。

第12層は暗色を呈し、北部に分布する第12a層と南部に分布する第12b層に区分できる。第12a層は黒色(7.5Y2/1)極細粒砂質シルト～シルトからなる泥で、層厚は最大20㎝である。地形的に低くなる北部に分布する。第12b層は細礫をわずかに含む黒色(5Y2/1)細粒～極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大18㎝である。古土壌とみられるが、比較的多くの遺物を含むことから遺構埋土の可能性もある。第12a層中に第12b層の偽礫が認められることから、第12b層が第12a層に先行するものとみられる。本層の上面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。本層から弥生土器、木製品が出土した。土器の年代から弥生時代後期の地層とみられる。

第13層はオリーブ黒色(5Y3/1)・褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト～シルトおよびわずかに黒色有機物を含むオリーブ黒色(5Y3/2)シルトからなる泥で、層厚は10～27㎝である。上面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。本層中から弥生土器、サヌカイト、加工された木片が出土している。弥生土器は小片のため詳細な年代は不明である。

第14層は谷が落ち込んだ北部に分布する。黒色(5Y2/1)細粒～極細粒砂質シルト、オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルトからなる谷底にたまった泥とみられる。遺物は出土していない。

第15層は低位段丘構成層である。上部は擾乱されておりこの部分を第15a層、下位を第15b層とした。第15a層は灰色(5Y4/1)細粒～極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大14㎝である。第15b層は灰色(7.5Y6/1)細粒砂質シルトからなる。本層の上面では谷がさらに北側へ落ち込むようすを確認した(図15、図版２上)。

2．遺構と遺物

ⅰ）遺構

第７層の上面でSD701を検出した(図６・７、図版３中)。幅0.34～0.40m、深さは0.07mで、上位の第６層を埋土とする浅い溝である。遺物は出土していない。

第８層の上面で杭801を検出した(図８・９、図版３上)。杭37は幅2.6cm、現存長30.9cm、厚み1.6cmの断面長方形を呈する棒状の木材である(図版５下)。第８層上面に打ち込まれたような状態で検出されたことから杭としたが、断面の観察では打ち込みを示す地層の変形は確認できず、木材の先端も尖らせてはいない。杭である明確な根拠は得られなかったが、第５層以下の谷内の湿地性の堆積層中から出土した他の自然木や木材は横倒しの状態で出土したことから、検出状況を重視して杭の可能性があると考えた。丁寧な加工が施されていることから転用されたものであろう。

ⅱ）遺物（図版４・５）

各地層から出土した遺物について記述する。

第13層から１・２が出土した。１は弥生土器壺の頸部である。小片のため詳細な年代は不明である。２はサヌカイトの石核である。

第12層から３～９・42、第12a層から10・38～41、第12b層から11が出土した。３～８は弥生土器鉢で、形態や胎土が類似することから同一個体の可能性がある。口縁部はゆるやかに開き、端部は上方にややつまみあげる。胎土中には角閃石を含むことから生駒西麓産とみられるが、中河内産ではなく南部地域で製作されたものである可能性がある。弥生時代後期中葉頃に属するものとみられる。９は弥生土器高杯の口縁部で、外面にはタテ方向のミガキを施す。10は弥生土器甕の底部である。表面は磨滅しているがわずかにタタキの痕跡が認められる。弥生時代後期に属する。11は壺の体部片とみられる。磨滅のため不明瞭ではあるが、外面はタタキの後ナデによる調整を行っており、内面はハケ調整である。

38～42は木製品である。38は39をはさむような状態で出土した(写真１)。38は加工が施された樹皮で湾曲しており、なにかに巻かれていたものと考えられる。39は幅3.7cm以上、長さ3.7cm以上、厚み0.5cmの板材である。出土状況から38は39に巻かれていた可能性があるが、39が薄いことから38の現状の形状と39の形状が一致しないためこの点については不明である。40は幅5.5cm以上、長さ11.7cm以上、厚み1.7cmの板材である。41は幅2.5cm以上、長さ11.8cm以上、厚み0.9cm以上で板材と推定される。42は幅2.9cm以上、長さ4.7cm以上、厚み1.2cm以上で、現存状態では棒状を呈するが板材の可能性がある。

第11層から須恵器12、木製品43・44が出土した。12は杯Hの蓋で、口径は11.0cmである。７世紀前半に属するものであろう。43は幅3.8cm以上、長さ5.9cm以上、厚み0.3cm以上の板材とみられる。44は幅5.5cm以上、長さ5.0cm、厚み1.8cm以上の木材で、大きさから製品ではなく加工の過程で生じた木片の可能性が考えられる。

第９層から13～15が出土した。13・14は須恵器である。13は小片のため器形は不明であるが外面にカキメを施す。14は外面にタタキ、内面には同心円状のあて具痕が残る甕の体部片である。15は埴輪で、内外面ともにハケ調整で、外面のハケはタテ方向である。

写真１　38・39出土状況

第７層から瓦16～18が出土した。16・17は丸瓦である。16の凸面は縄目タタキの後ナデ調整を施しており、凹面には布目が残る。17は丸瓦の側端部で、側面および凹面の端部を面取りする。凸面は横方向のケズリ、凹面は布目が残る。18は平瓦で、凸面は縄目タタキを施し、凹面には布目が残る。これらの瓦は古代に属する。今回の調査では第８層以上の地層中にこうした瓦が比較的多く含まれていた。調査地の南に推定されている成本廃寺にかかわるものと推

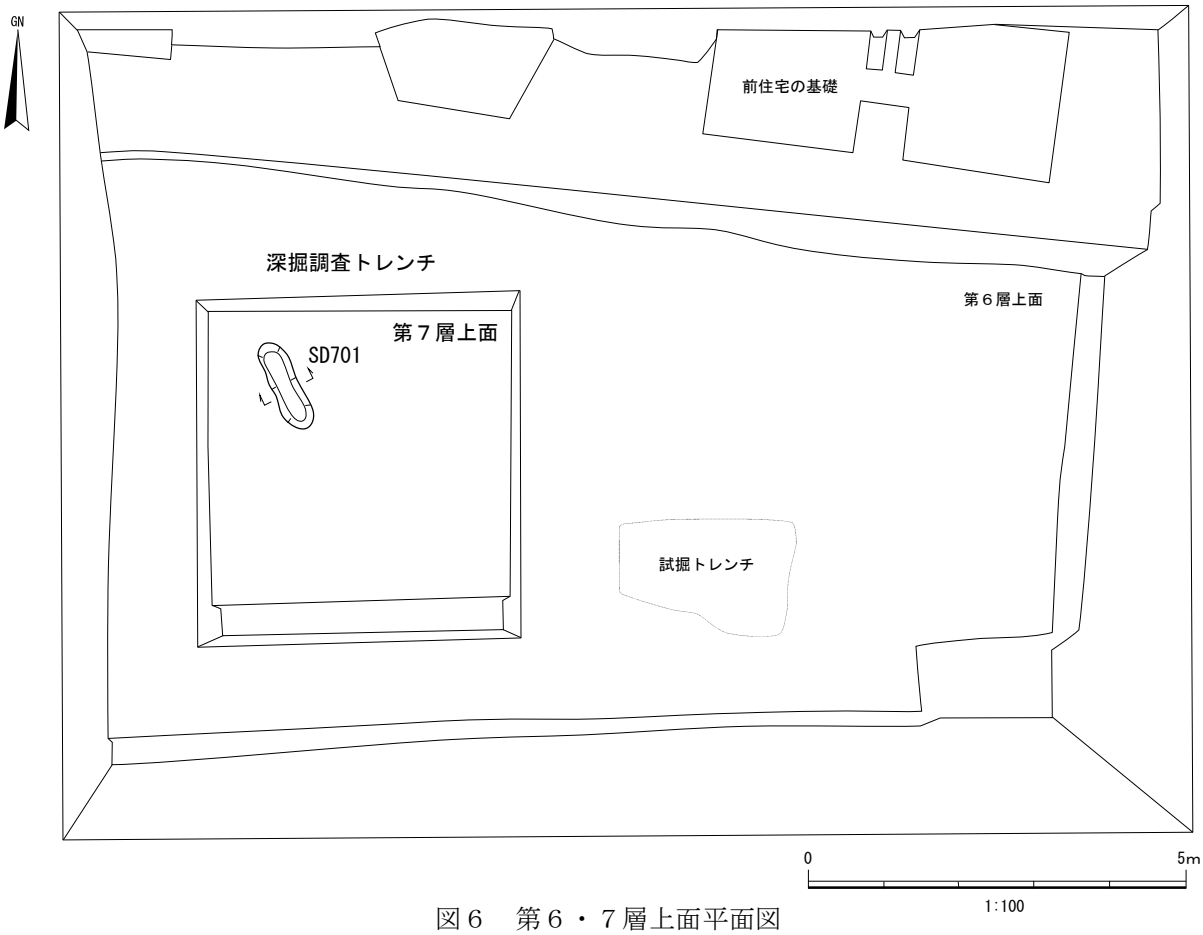


図６　第６・７層上面平面図

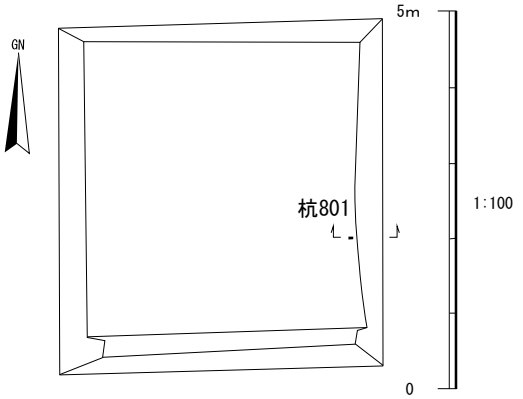


図８　第８層上面平面図

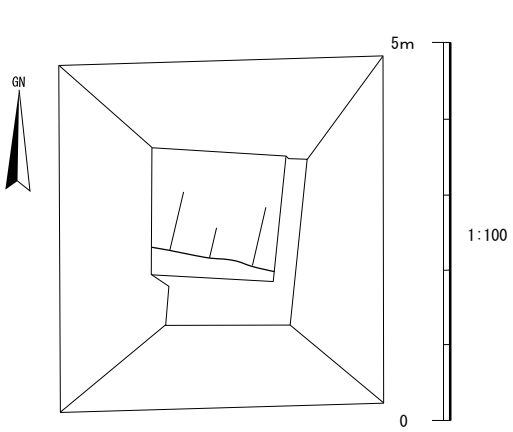


図10　第15層上面平面図

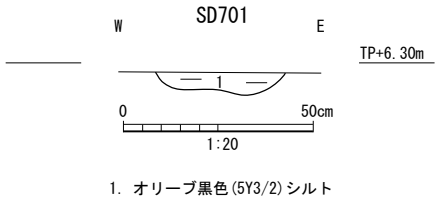


図７　SD701断面図

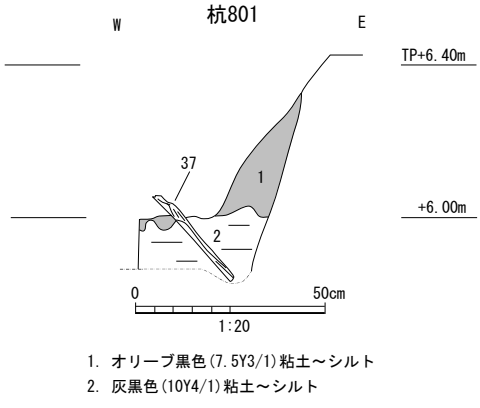


図９　杭801断面図

定される。

第６層から19～22が出土した。19は土師器甕の体部片で、器壁は薄く外面には煤が付着する。20は須恵器杯Aの底部とみられる。21・22は須恵器甕の体部片である。21は外面にタタキ、内面にはあて具痕が残る。22は器厚が1.4㎝と厚く、大型の甕と推定される。外面はタタキの後ナデ調整をおこなっており、内面にはあて具痕が残る。

第５層から土師器23が出土した。椀形高杯の杯部の可能性があり、体部はヨコナデ、底部はナデ調整である。小片のため詳細は不明であるが６～７世紀に属するものであろう。

第４層から24～30が出土した。24は土師器皿である。器壁は比較的厚い。25～28は瓦器椀である。26は傾きから14世紀頃のものであろう。28は底部で、幅が細く低い高台がつくことから13世紀に属するものとみられる。29は青花とみられる。胎土は精緻で、見込みはやや凸状を呈する。16世紀に属するものであろう。30は中国産青磁碗である。外面は蓮弁文で、底部は畳付けから高台内にかけて露胎である。

第３層から31・32が出土した。31は須恵器の小片で、杯Hの蓋とみられる。32は鉄製品である。中空のため有機質の素材の外側を鉄で覆っていたものと推定される。

第２～３層から33～35が出土した。33は須恵器の小片で、杯Hの身あるいはかえりのつく蓋である。34は須恵器杯Hの身である。比較的器高があり、体部はヨコナデ、底部外面はケズリである。６世紀代のものであろう。35は瓦器椀の底部である。12世紀後半に属するとみられる。

第１～２層から須恵器36が出土した。小片のため詳細は不明であるが杯Hの身とみられる。

〈まとめ〉

今回の調査では「馬池谷」と「東谷」の合流した谷の斜面を確認した。谷の最下部では弥生時代の土器が出土しており、この頃から谷が埋没しはじめたことが確認できた。その後、調査地南に成本廃寺があったとされる古代から中世にかけては湿地性の堆積物が厚く堆積しており沼沢地であったことが確認できた。今回の調査によって、寺の存在を前提とすればその位置はこれまで推定されている瓜破東小学校付近であることが確実となった。成本廃寺は瓜破台地先端部の「馬池谷」と「東谷」にはさまれた舌状に延びた地形の突端部に造営されたことがうかがえる。

【引用・参考文献】

大阪文化財研究所2011、『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ』

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書（2017）第2分冊

発行日　平成31年3月29日

発　行　大阪市教育委員会
　　(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

編　集　大阪市教育委員会事務局文化財保護課
　　（大阪市北区中之島1-3-20）

印　刷　株式会社フォーラムK

南東壁地層断面
（北西から）

北東壁地層断面
（南から）

第８層（左側）・
第５層（右側）上面
（東から）

第８層上面（南から）

第４層上面（南東から）

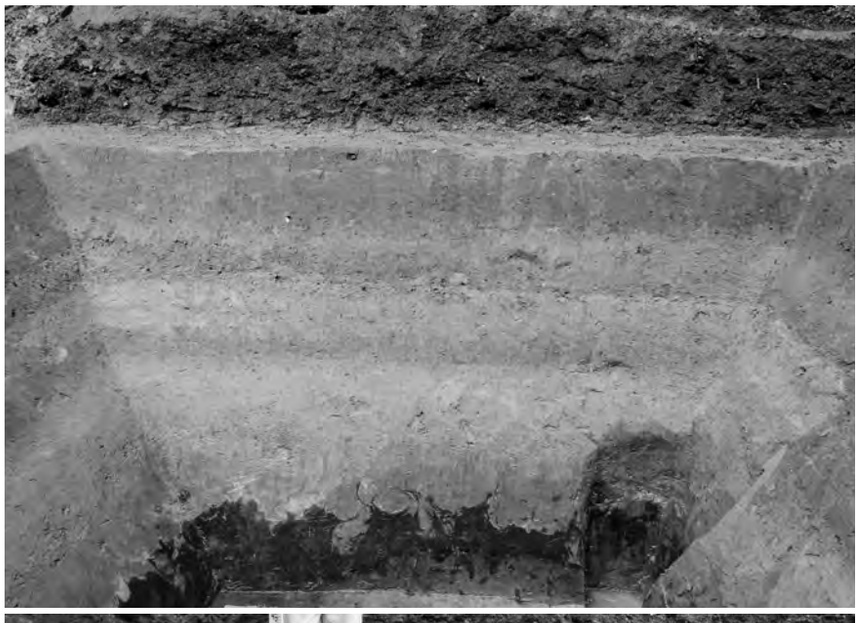
第３層上面（南東から）

南壁地層断面

調査区全景
（西から）

SD01
（西から）

西区北壁断面



東区北壁断面

西区第６層上面
（北から）

東区第４層上面
（SK401は未掘削
：北から）

東区SK401（東から）

東区第３層上面
（北から）

調査区北壁地層断面
（南から）

SD601掘削状況
（北西から）

SD601掘削状況
（北から）

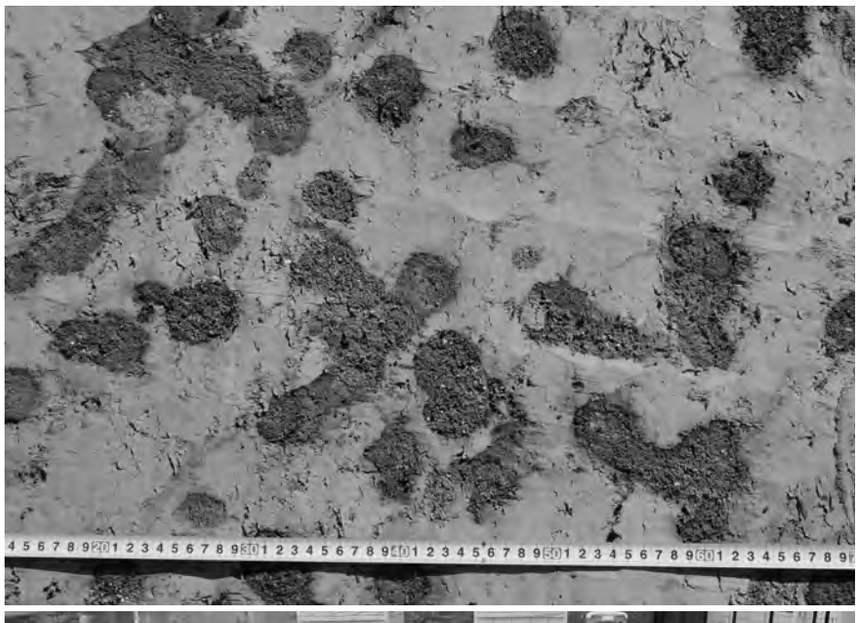
西区第３層上面
（南東から）

西区SX301
（北から）

東拡張区第３層上面
（西から）

西部南壁地層断面
（北西から）

西部第２層上面の
巣穴化石（南から）



西部第２層上面
（東から）

東部第２層上面
（西から）

中央部第２層上面
（東から）

中央部SX201断面
（北西から）

SD301検出状況
（南から）

第３層上面検出状況
（北西から）

SD301断面
（北から）

調査区全景
（東から）

谷と埋土断面
（南から）

防空壕SX1
（西から）

南壁地層断面

調査区全景
（第2b層上面、南から）

杭列SX02
（西から）

北区SX１・２
（南から）

南区SX3・４
（西から）

西区SX５
（南から）

遺構検出状況
（東から）

遺構完掘状況
（東から）

遺構完掘状況
（西から）

調査区西端
第１～３層（北東から）

調査区西端
第１～３層（北東から）

南壁東半部地層断面
（北西から）

地山上面全景
（南から）

SX 7 ～ 9（北東から）

SX 6（北東から）

南壁地層断面
（中央部）

第６層上面全景
（西から）

SD５とSP７
（北西から）

北区　第4a層上面全景(西から)

南区　全景(東から：拡張前)

西区北壁地層断面

西区西半第４層上面
（北から）

西区西北部第３層上面
（西から）

東区北部東壁地層断面

東区北部第５層上面
（西から）

東区北部第3b層上面
（北から）

調査区北壁地層断面
（南から）

深掘部北壁地層断面
（南から）

第 6 層上面掘削状況
（南から）

第６層上面掘削状況
（南西から）

第６層上面検出状況
（南から）

第5a層上面掘削状況
（南から）

東壁地層断面
（北西から）

北壁地層断面
（南東から）

遺構完掘状況
（北東から）

北壁地層断面
（南西から）

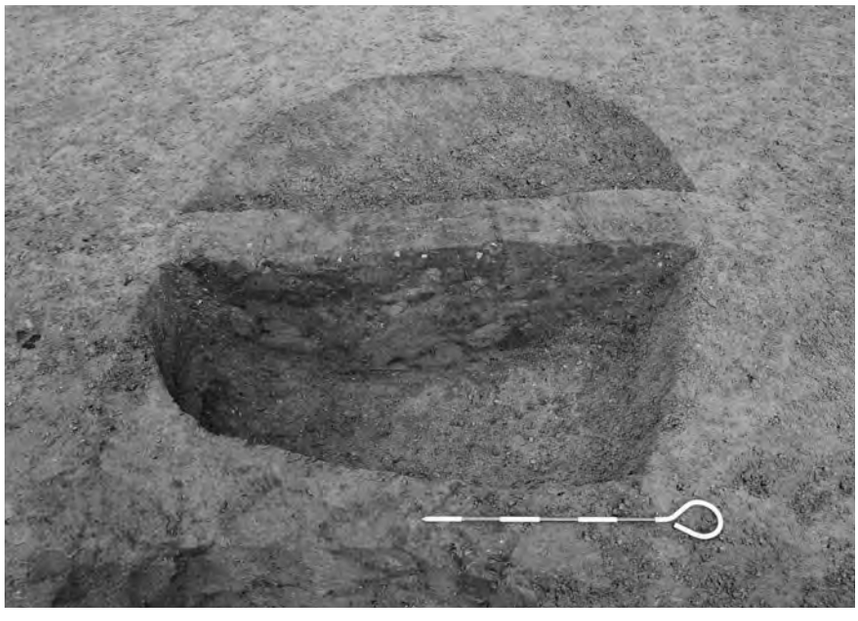
第2c層上面
（西から）

第2b層上面
（西から）

第1b層下面
（北東から）

第1b層下面畝間群
（西から）

SK223断面
（南から）



層序と砂脈(南東から)

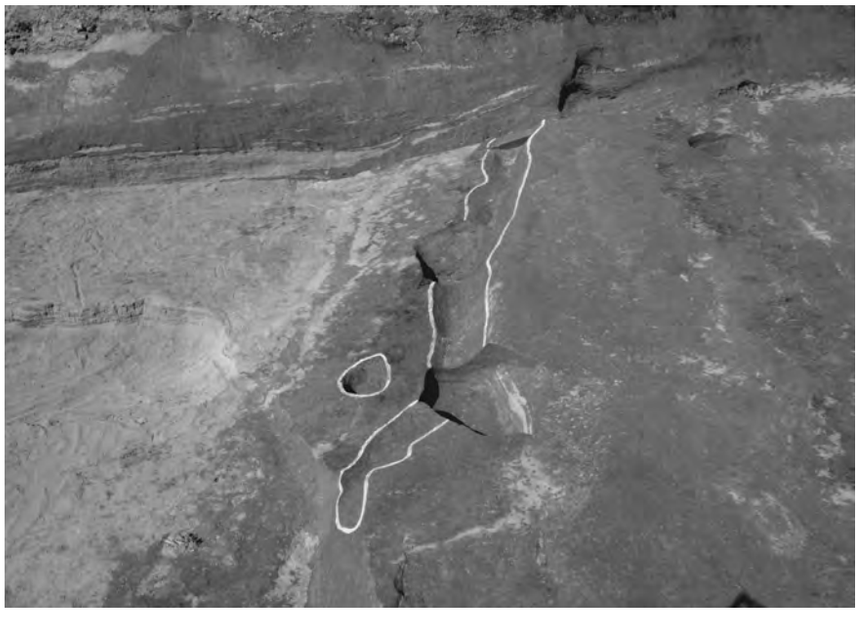
第4層上面(北から)

第3層上面(北から)

調査区全景
（３層上面、西から）

北壁東部断面

４層上面
SD04（南から）



東壁地層断面
（北西から）

第６層上面の状況
（北東から）

SD301
（北から）

1区全景(東から)

1区SK01(南東から)

2区全景(北西から)

調査最終状況(南から)

南壁地層断面

第４～３層上面全景(北から)

調査区北壁（東端）
地層断面（南から）

調査区北壁（西端）
地層断面（南から）

SX10検出状況
（東から）

SX10検出状況
（南西から）

SX10（盛土）掘削状況
（北西から）

第３～６層上面遺構
掘削状況（東から）

SK04断面
（東から）

SK09断面と
壺出土状況
（南から）

SD02掘削状況
（北西から）

調査区地層断面
（南西から）

第４層下面検出状況
（東から）

第４層下面掘削状況
（東から）

SD401ほか遺構断面
（北から）

第３層下面検出状況
（東から）

第３層上面検出状況
（東から）

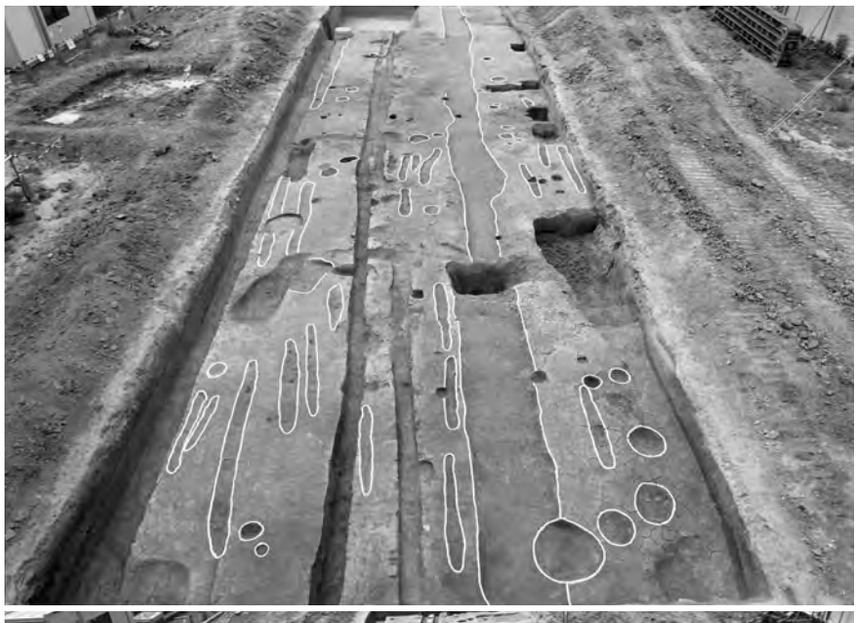
北壁地層断面
（東半部；南西から）

流路１
（西から）

第２層上面全景
（西から）

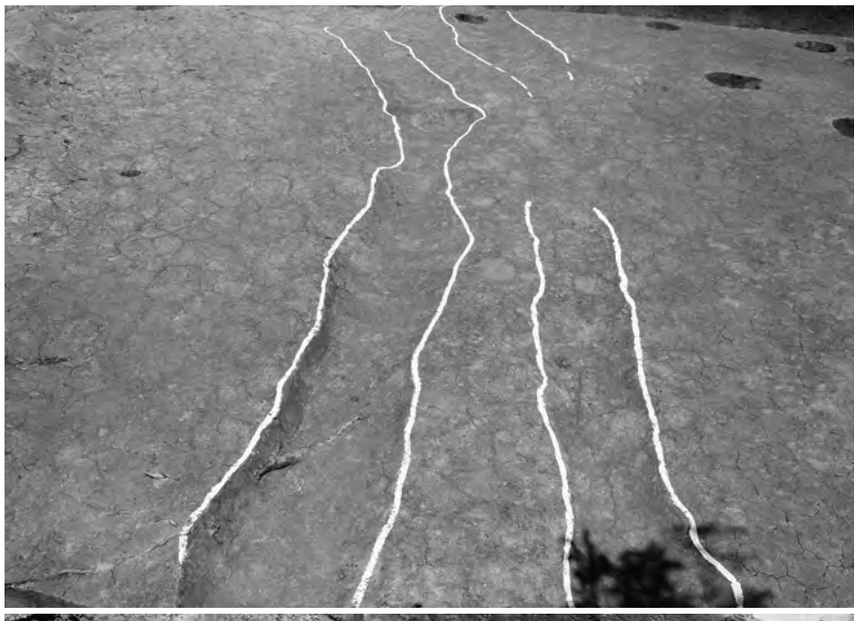
南壁西端地層断面
（北から）

第３層下面遺構完掘状況
（東から）



第２層下面遺構完掘状況
（東から）

SD01・02
（西から）



SD03 埴輪出土状態
（南東から）

SD01・03全景
（南西から）

調査区南壁地層断面
（北から）

地山上面遺構検出状況
（西から）

SP301断面（北東から）

東壁地層断面（北西から）

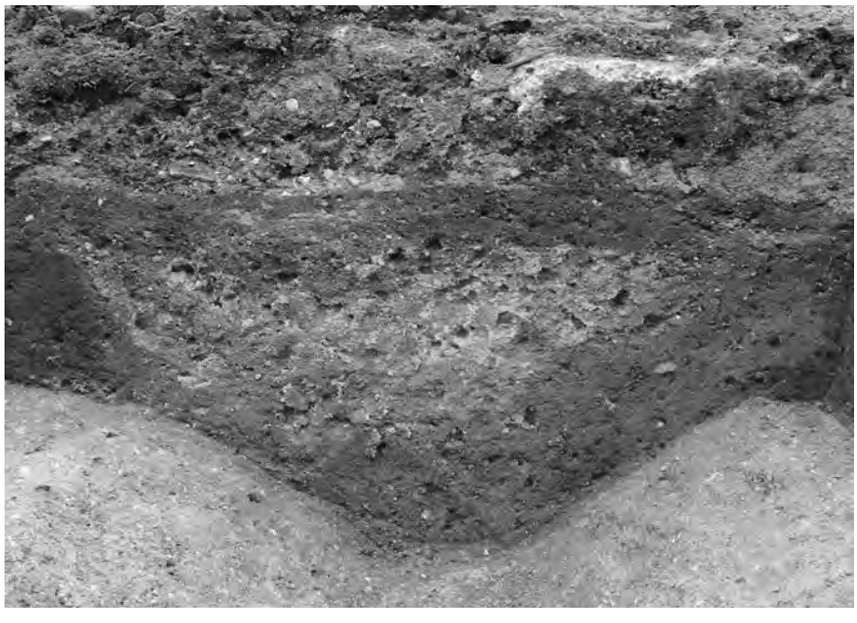
第１層上面遺構検出状況
（北西から）

第３層上面遺構完掘状況
（南から）

調査区東壁地層断面
（北西から）

第４層・第３層上面
遺構完掘状況
（北から）

SD201・340断面
（東から）



南区北壁地層断面
（南東から）

北区東壁地層断面
（北西から）

北区東壁地層断面
（第３層以下：西から）

南区第３層上面遺構
検出状況（東から）

南区東半第３層上面遺構
検出状況（北から）

南区第３層上面遺構
完掘状況（東から）

南区SD354・355
（南東から）

北区第３層上面遺構
検出状況（南から）

北区第３層上面遺構
完掘状況（南から）

第７層上面全景（北から）

SD701断面等（南から）

第6b層上面全景
（北から）

西壁地層断面

第５層上面
（北西から）

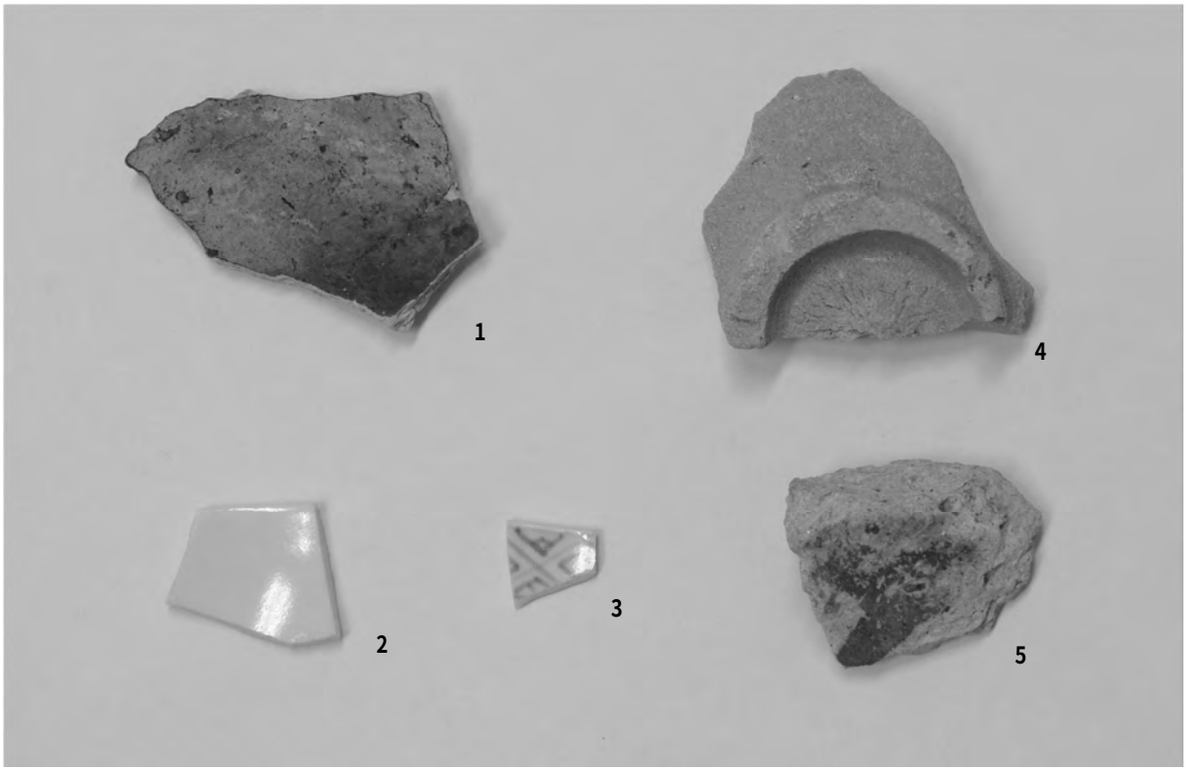
第３層下面
（北西から）

第７層上面完掘状況（南西から）

東壁断面の状況（深掘り時　北西から）

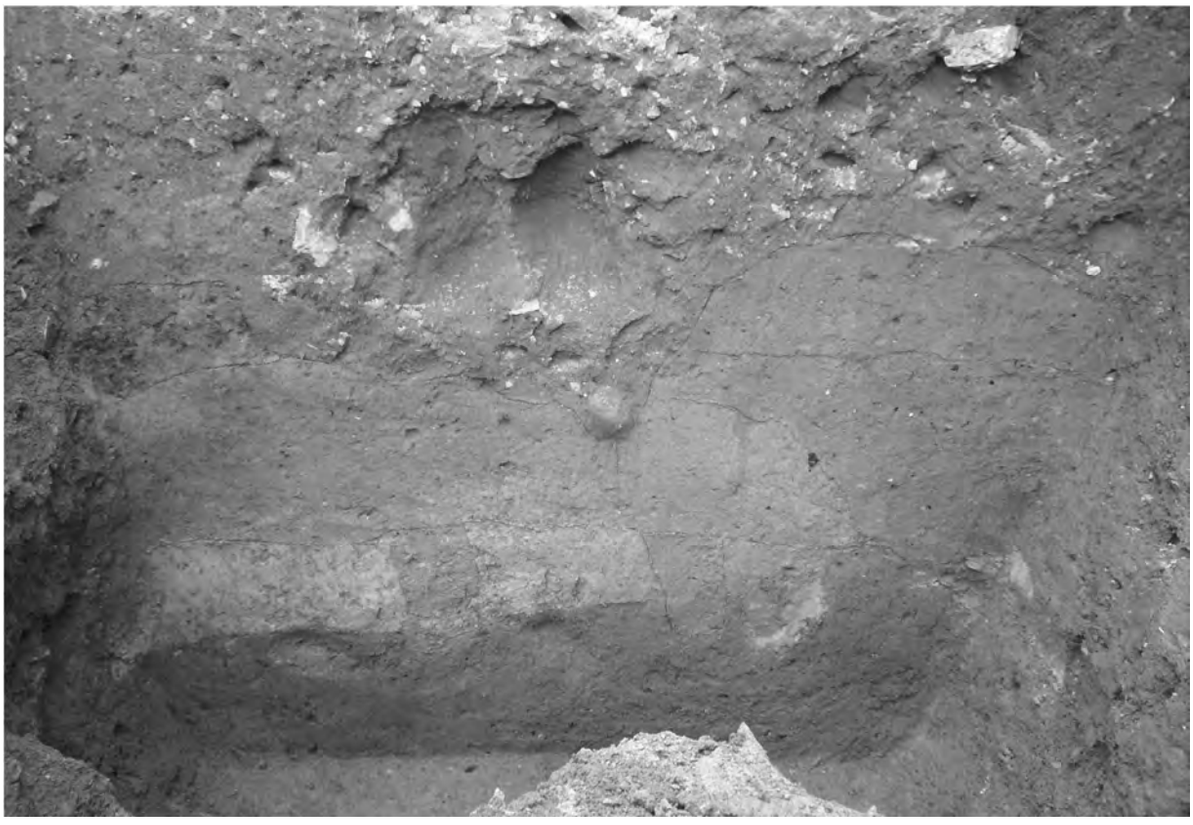
図　版　2

第５層上面検出状況（南から）



主な出土遺物（1：第5層、2～5：第3層）

1：瓦器、2：肥前白磁碗か、3：肥前染付磁器碗、4：肥前陶器碗、5：瓦

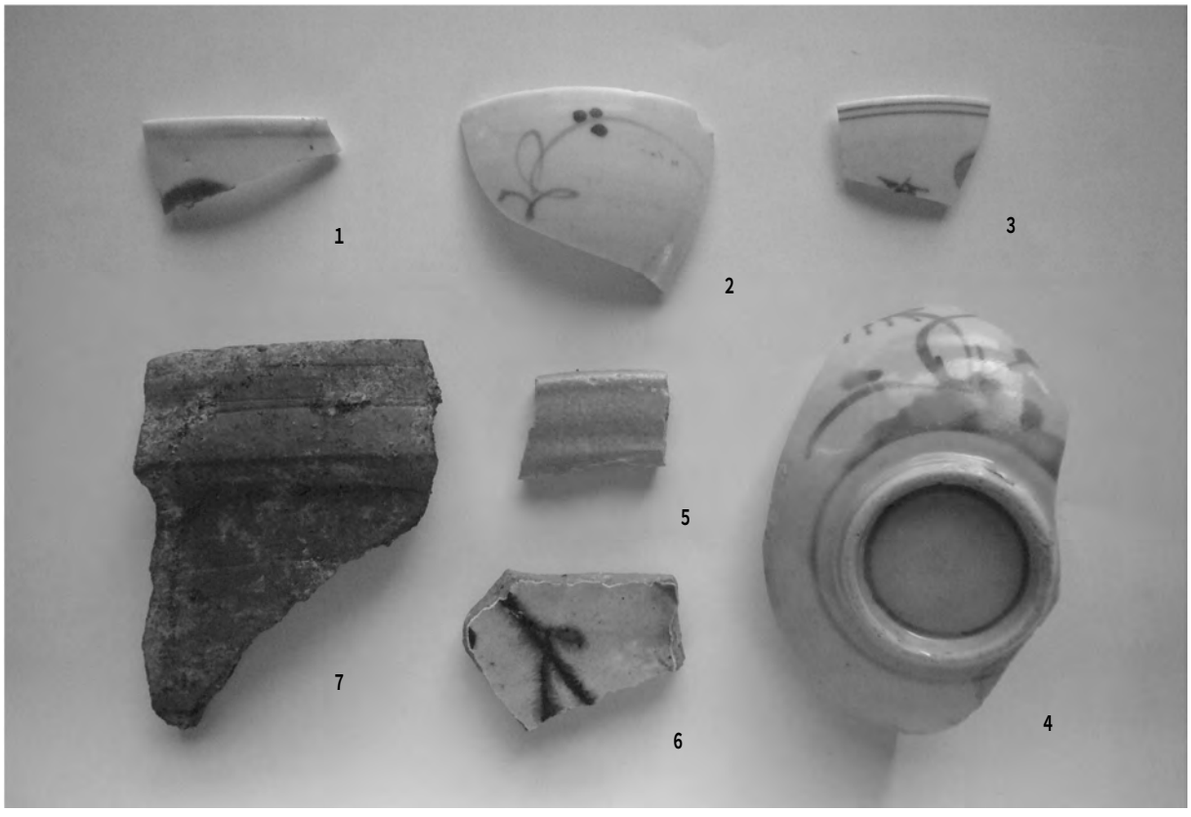


調査区西壁断面（東から）

第３層上面遺構検出状況（東から）

図　版　2

第３層上面遺構完掘状況（東から）



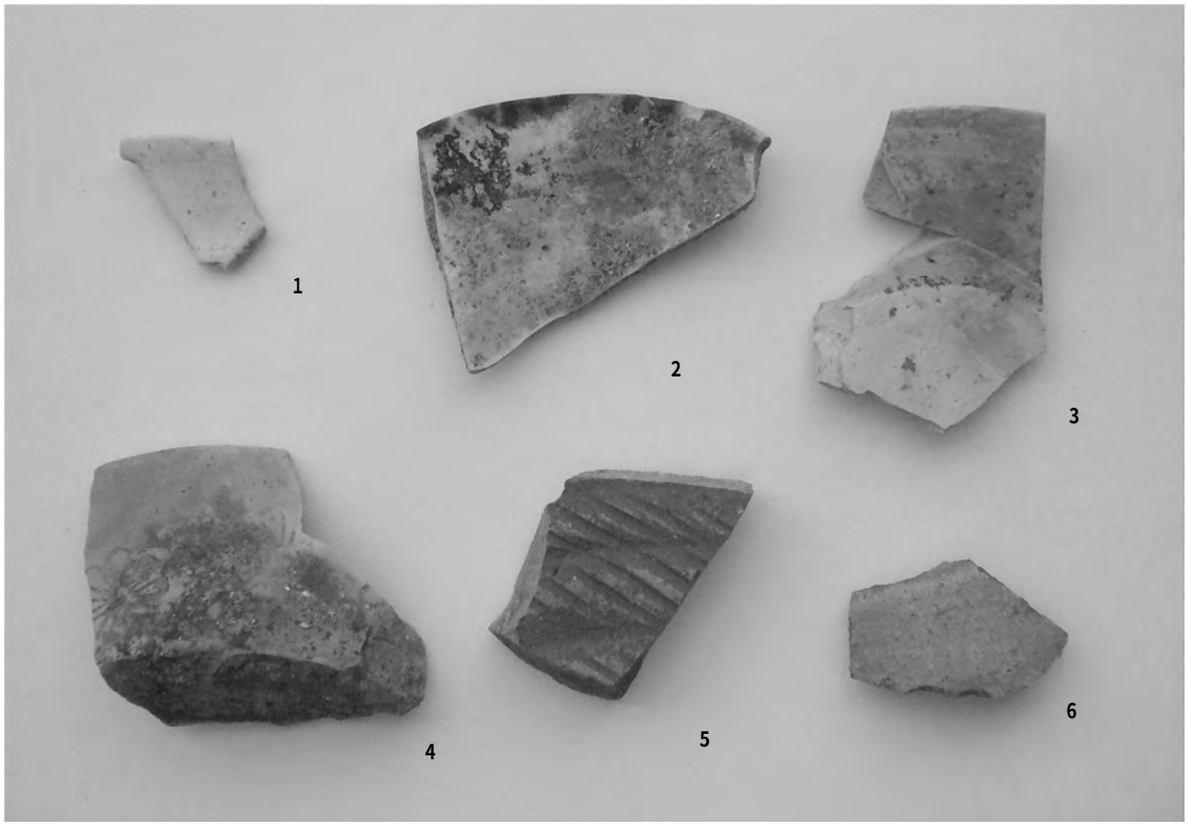
出土遺物（1～7：第３層）

図　版　1

調査区全景（南東から）

調査区北壁断面（南から）

図　版　2



第４層出土遺物（1）第２層出土遺物（2～6）

第２層出土遺物

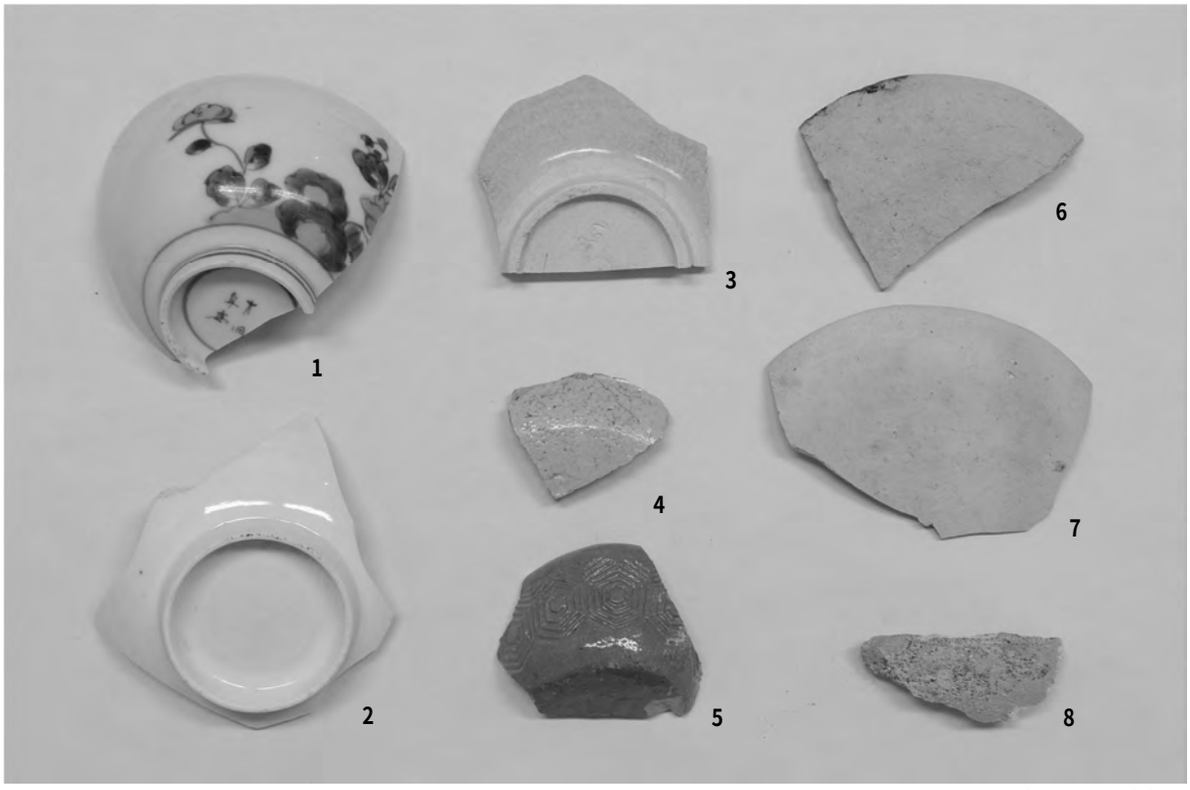
完掘状況（北から）

東壁断面および完掘状況（西から）

図　版　2

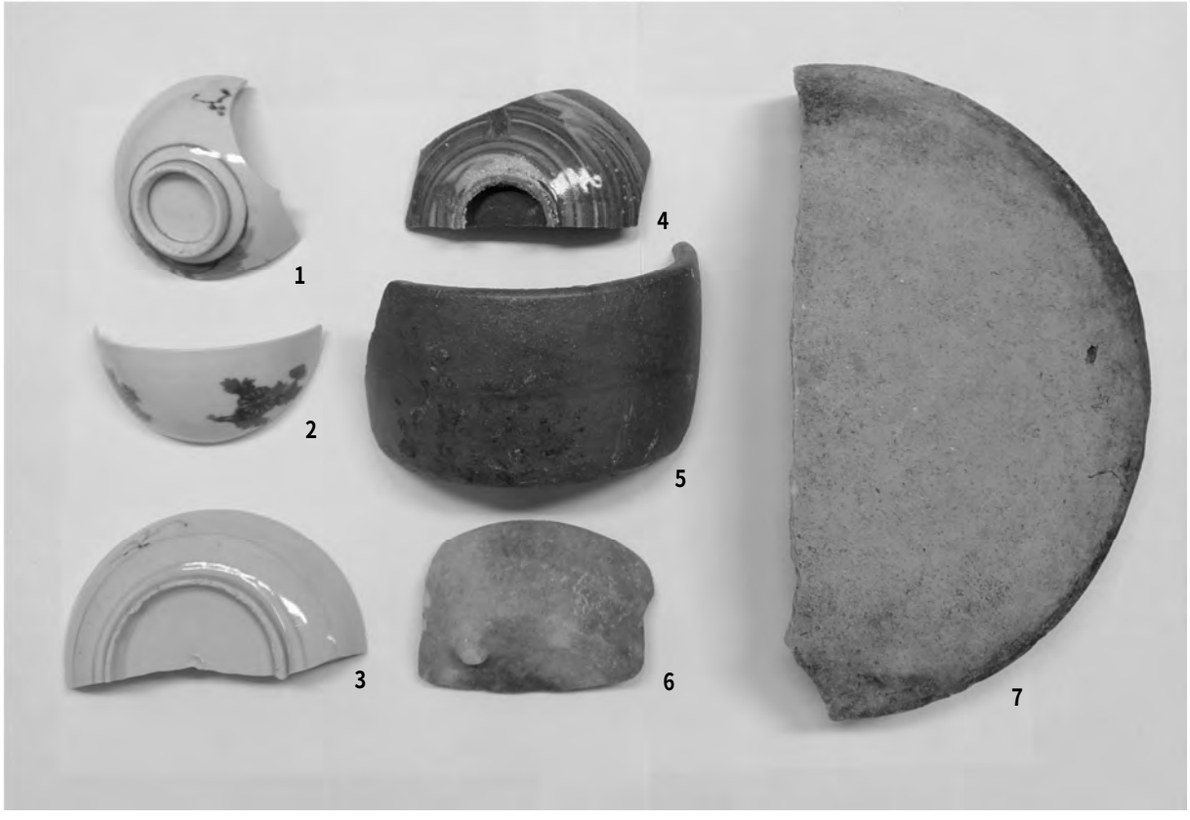
地山上面検出状況（北から）

第３層上面検出状況（北西から）



第３層出土の主な遺物

1：肥前染付磁器碗、2：肥前白磁碗、3：肥前陶器碗、4：志野焼鉢、5：軟質施釉陶器鉢、6・7：土師器皿、8：骨か



SK09出土の主な遺物

1・2：肥前染付磁器碗、3：肥前染付磁器皿、4：肥前陶器碗、5：備前焼鉢、6：瓦質土器鉢か、7：土師器焙烙

図　版　1

調査区北壁断面（南から）

第７層基底面遺構完掘状況（南から）

図　版　2

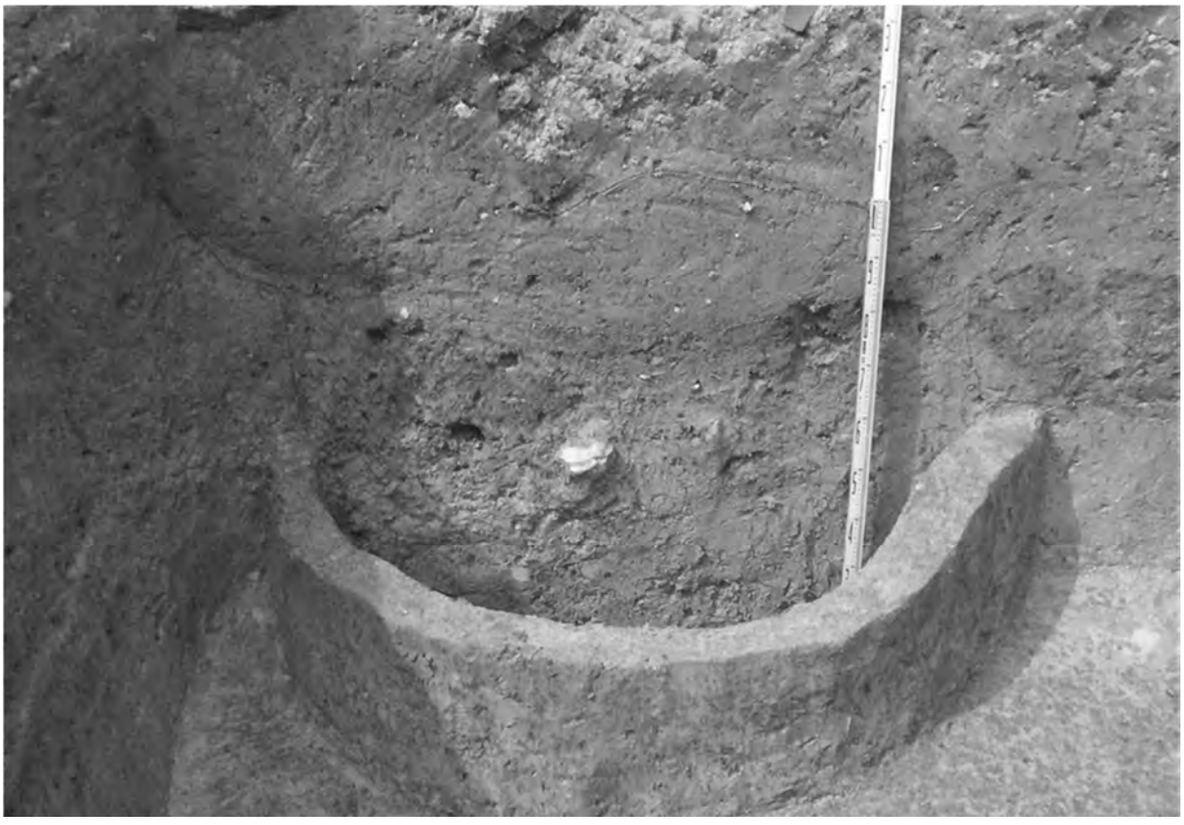
第７層基底面遺構検出状況（南東から）

第３層（1:染付碗）、SD01(2・3：須恵器、4：鉄製品、5・6:唐津焼碗）

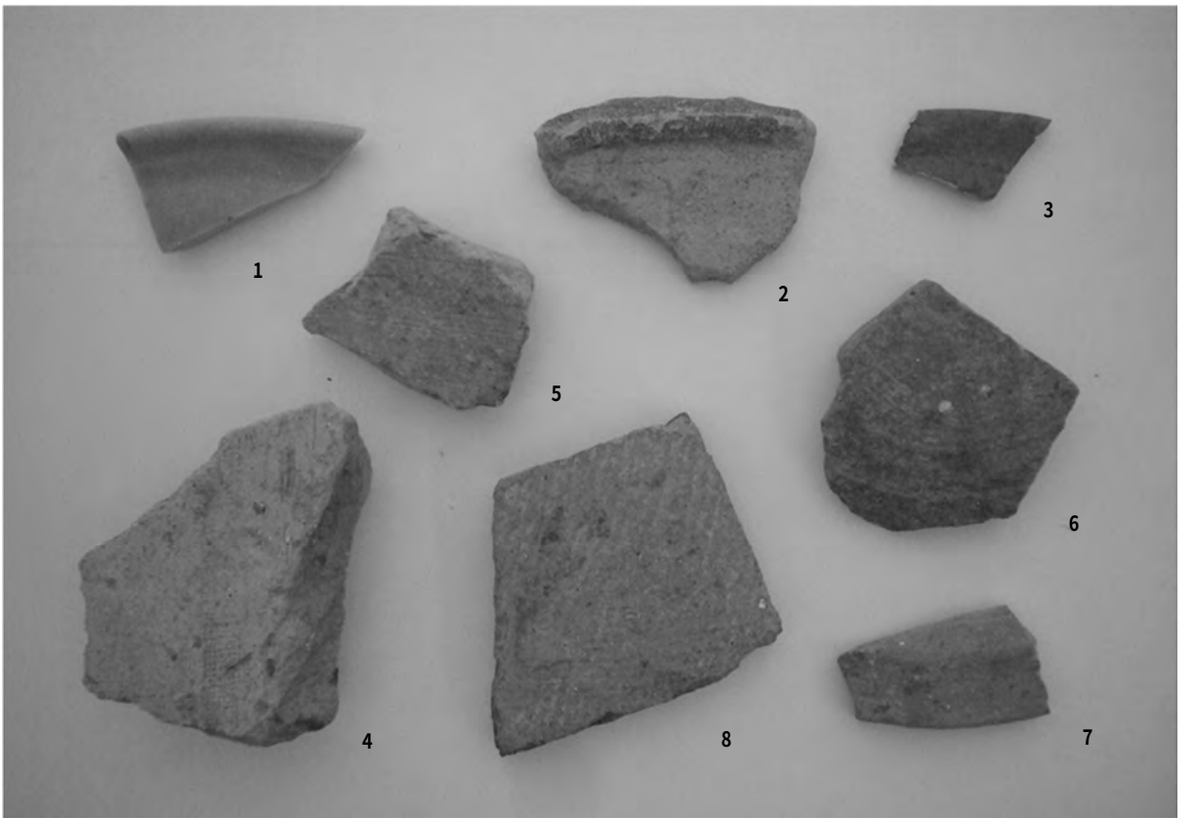
調査区東壁断面（南西から）

調査区東壁断面中央部（西から）

図　版　2



掘込み斜面部の状況（北から）



第６層出土遺物（1～8）　1：中国産青磁、2：東播磨系須恵器、3：瓦器、4：布目瓦、5～8：須恵器

SE01出土遺物（9～12）　9・10：唐津向付、11：丹波擂鉢、12：土師器小皿

SE01出土遺物（13・14）　13：土師器焼塩壺、14：瓦質土器十能

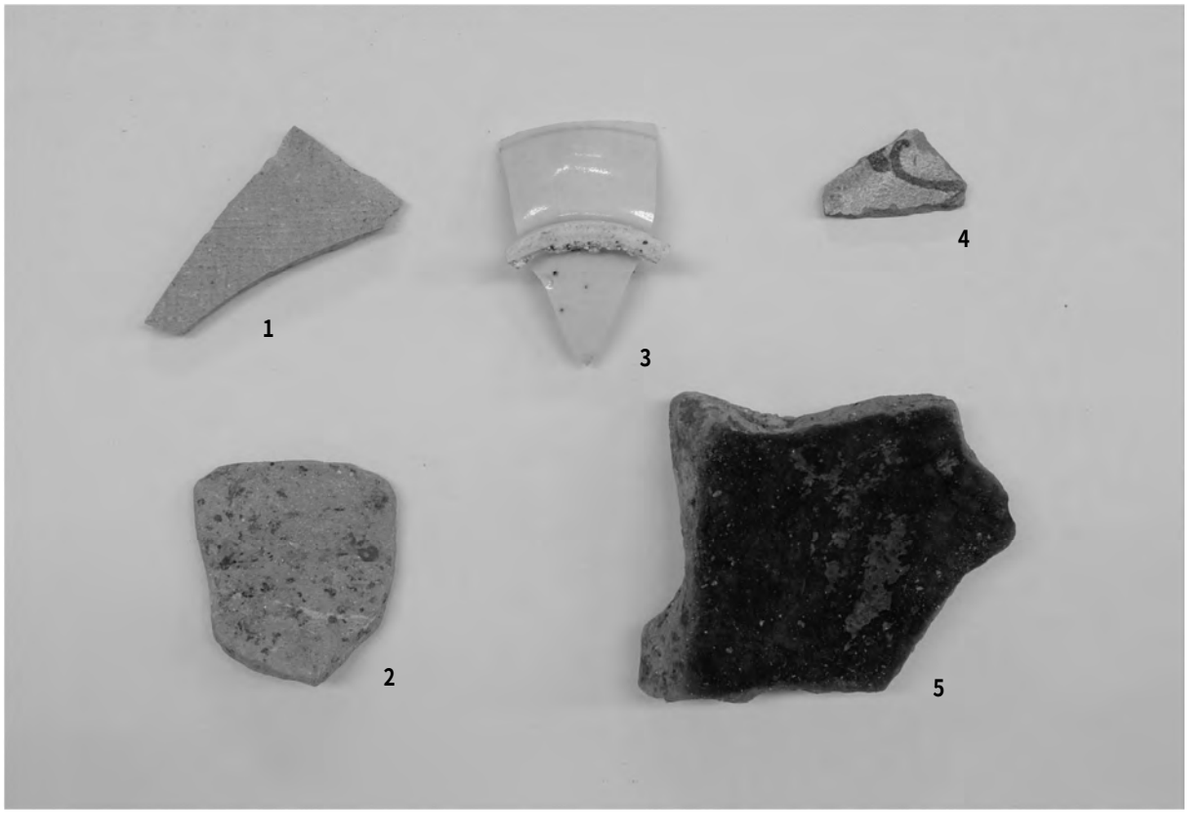
図　版　1

調査区南壁断面（北西から）

完掘状況（北西から）

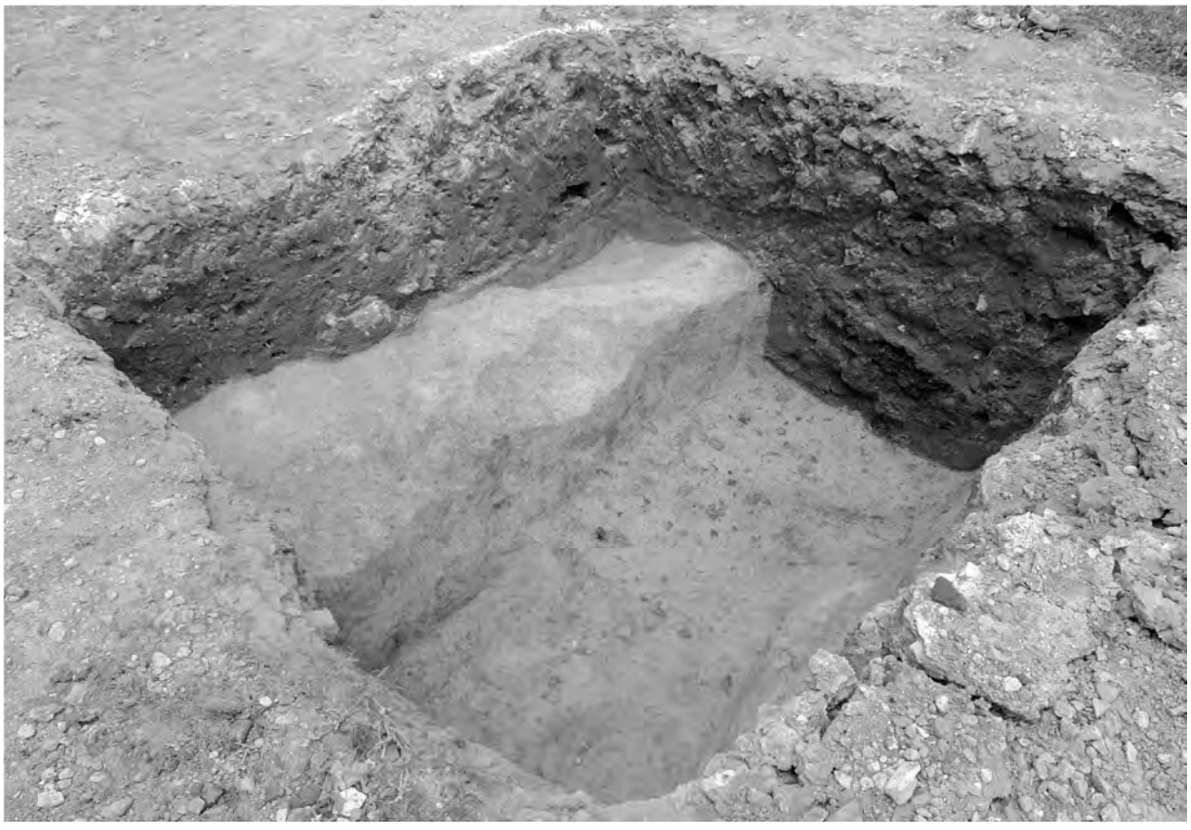
図　版　2

第３層上面検出状況（西から）



主な出土遺物（1：SX03、2～5：SX04）

（1：須恵器甕、2：土師器甕か、3：中国産青花か、4：肥前陶器、5：平瓦）

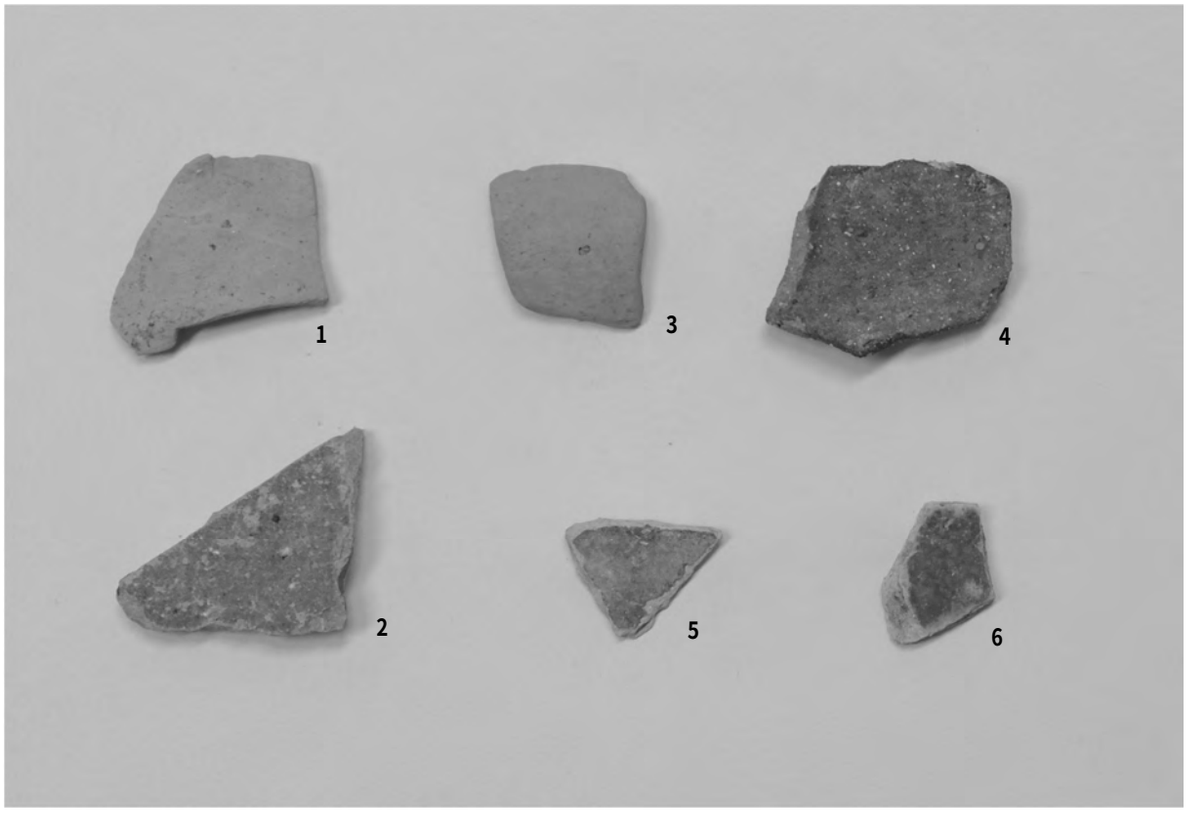


完掘状況（南西から）

南壁および東壁断面の状況（北西から）

図　版　2

第３層上面検出状況（北西から）



主な出土遺物（1・2：SX01、3～6：SX03）

（1：土師器、2：須恵器、3・4：土師器、5・6：瓦器）

調査区東壁断面（西から）

第６層下面耕作溝検出状況（西から）

図　版　2

第８層上面検出状況（西から）

出土遺物（1～4：第７層、5～7：第３層SD01、8・9：SE01）

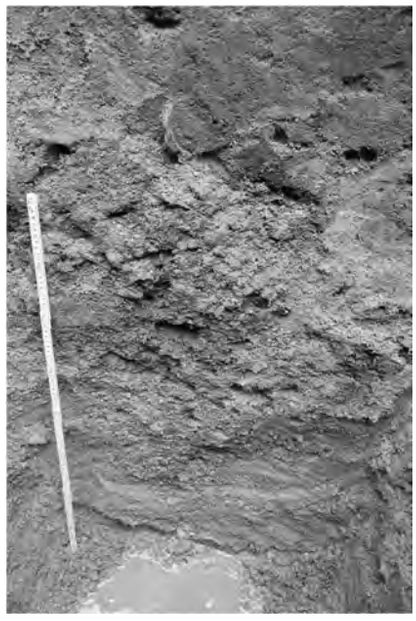
図　版　1

Ｓ区西壁地層断面
(南東から)

Ｎ区西壁地層断面
(北東から)

Ｅ区西壁地層断面
(東から)

図　版　2



E区東壁地層断面
(西から)

S区SX601
(西から)

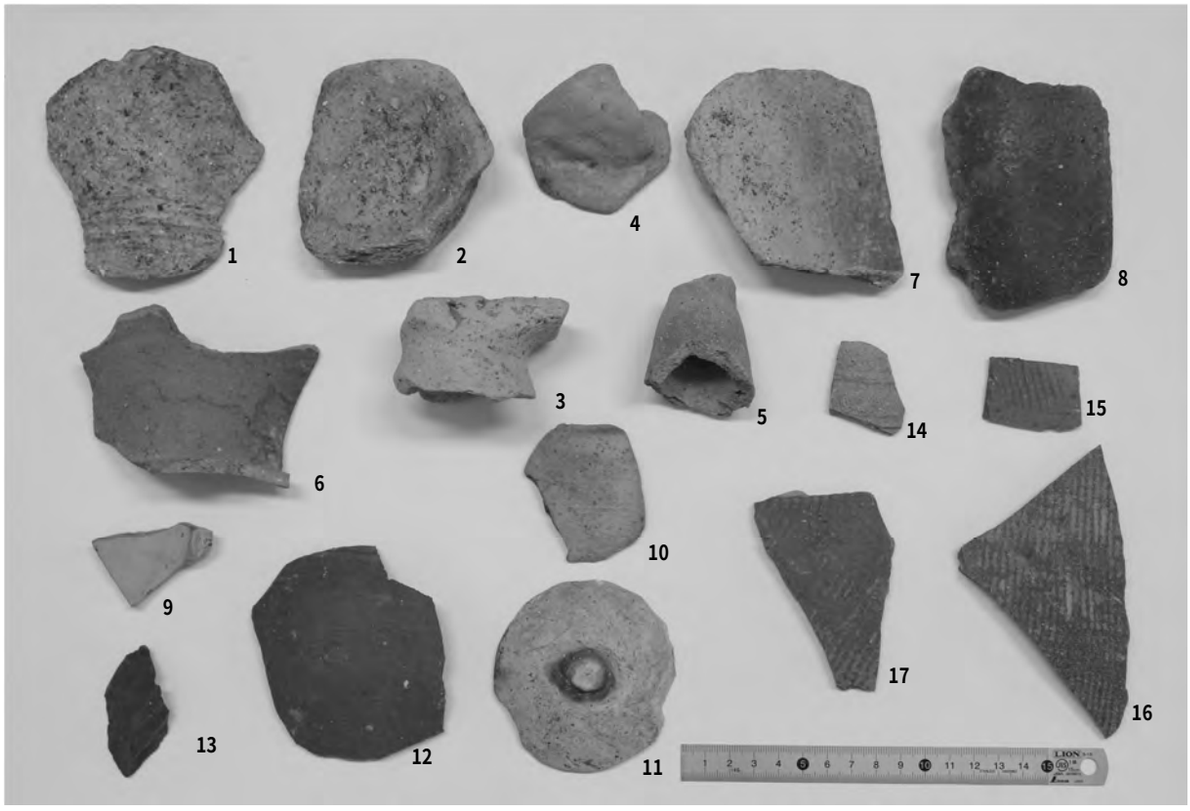
N区第7a層上面
サンドパイプ
(北から)

第７層上面遺構検出
(北から)

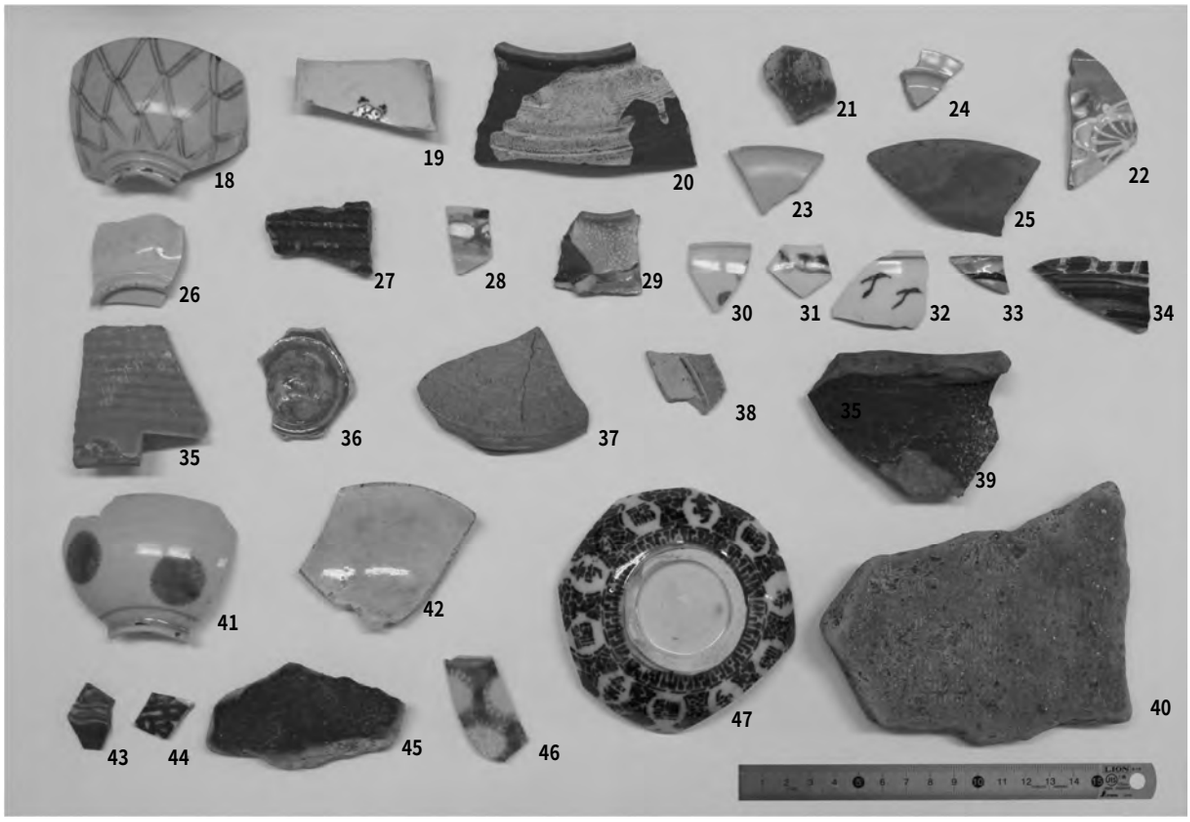
第３層下面耕作溝
SD302～304検出状況
(南東から)

SD111検出状況
(北から)

図　版　4



出土遺物１（1～８：SX601第6a層、９～14：SX601第6b層、14～17：SD610）



出土遺物（18 ～20：SK607、21：SE505、22・23：SD406、24・25：畝間、26・27：SD302、28・29：SD303、30・31：SD304、32～40：第４層、41～44：第３層、46・47：第１層）

図　版　1

調査区東壁断面（西から）

第４層上面検出状況（西から）

図　版　2

井戸SE01半裁状況（西から）

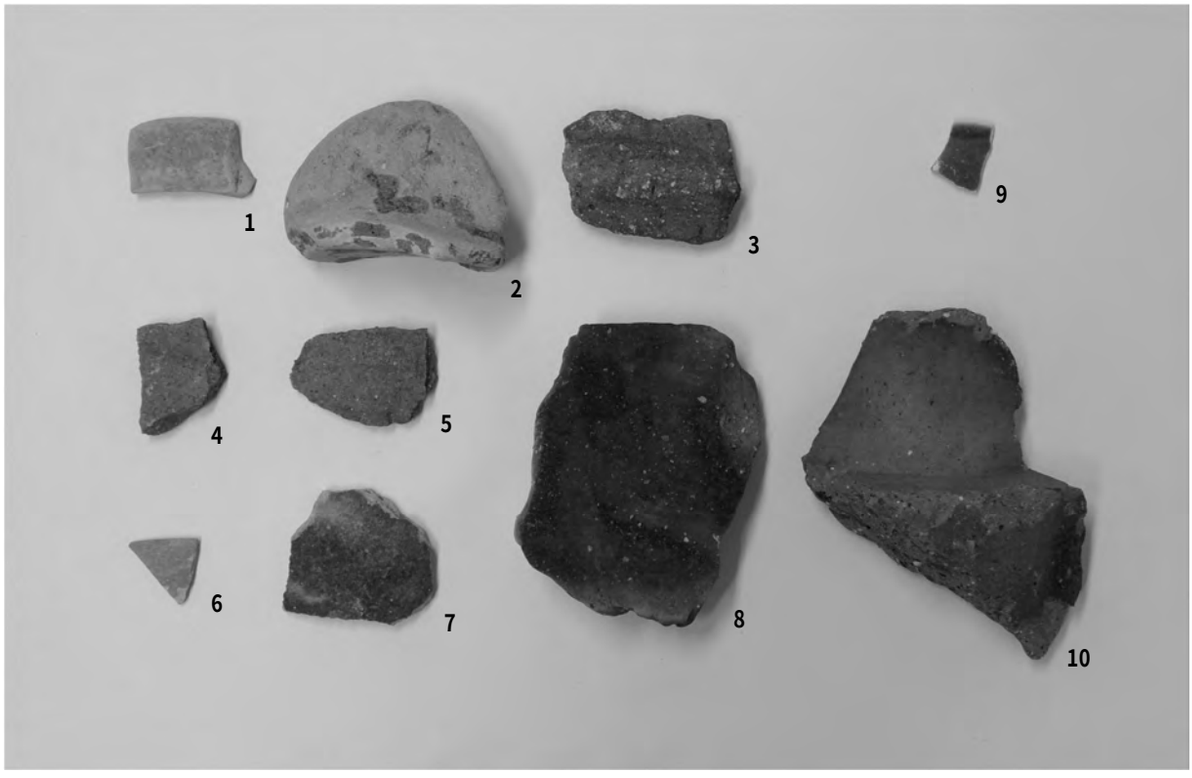
井戸SE01出土遺物（1・2：井戸瓦）

完掘状況（南東から）

東壁断面の状況（南西から）

図　版　2

第３層上面検出状況（南東から）



SX03・SX05の主な出土遺物（1～8：SX03、9・10：SX05）

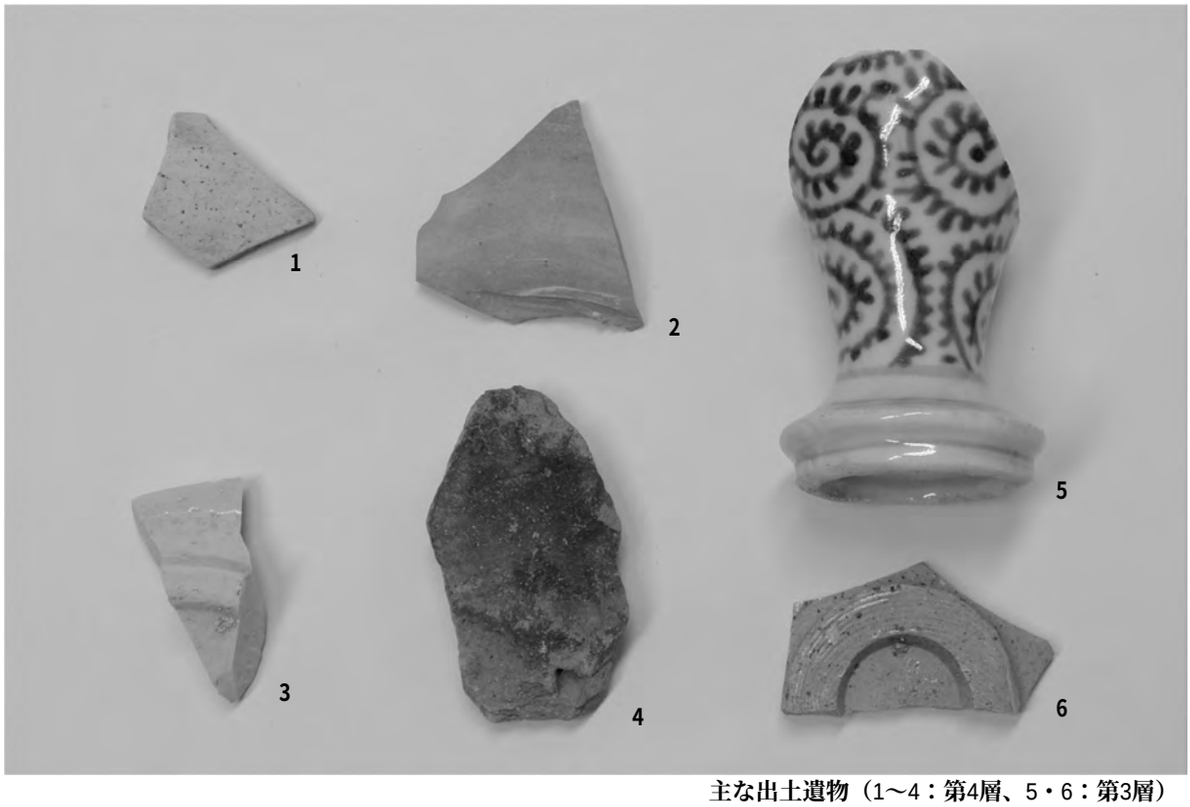
1：土師器皿か、2：土師器鍋把手、3：土師器羽釜、4・5：須恵器鉢、6：瓦器、
7：瓦質土器、8：瓦、9：肥前染付磁器、10：丸瓦

東壁断面および完掘状況（北西から）

完掘状況（北から）

図　版　2

第４層上面検出状況（北から）



主な出土遺物（1～4：第4層、5・6：第3層）

（1：土師器、2：須恵器杯か、3：白磁碗か、4：瓦、5肥前磁器染付、6：肥前陶器皿）

図　版　1

調査区北壁断面（南から）

第３層上面遺構検出状況（東から）

図　版　2

土壙SK01検出状況（北から）

土壙SK01断面（北から）

完掘状況（南から）

完掘状況および北壁細部（南東から）

図　版　2

地山上面検出状況（南から）

第１層上面検出状況（南から）

第４層地山層上面完掘状況（東から、奥は試掘壙）

北壁断面の状況（南東から）

図　版　2

第２層基底面遺構完掘状況（南東から）

SX01完掘状況（南東から）

第２層基底面検出状況（南東から）

SX01出土の主な遺物

1～3：弥生土器口縁～頸部、4～6：同体部、7：同底部、8：須恵器杯蓋

図　版　1

調査区東壁断面（南西から）

調査区東壁断面中央部（西から）

図　版　2

掘込み斜面部の状況（北から）

SD01出土遺物（１）丸瓦

図　版　1

１－１区 北壁断面(南から)

１－１区 第３層上面畦畔検出状況(南から)

図　版　2

１－２区 北壁地層断面
（南から）

１－２区 第３層上面
（南から）

１－２区 第４層上面
（南から）

1－3区 全景(東から)

2－1区 北壁地層断面(南から)

図　版　4

３－１区 全景(東から)

４－１区 全景(北東から)

4－2区 全景(西から)

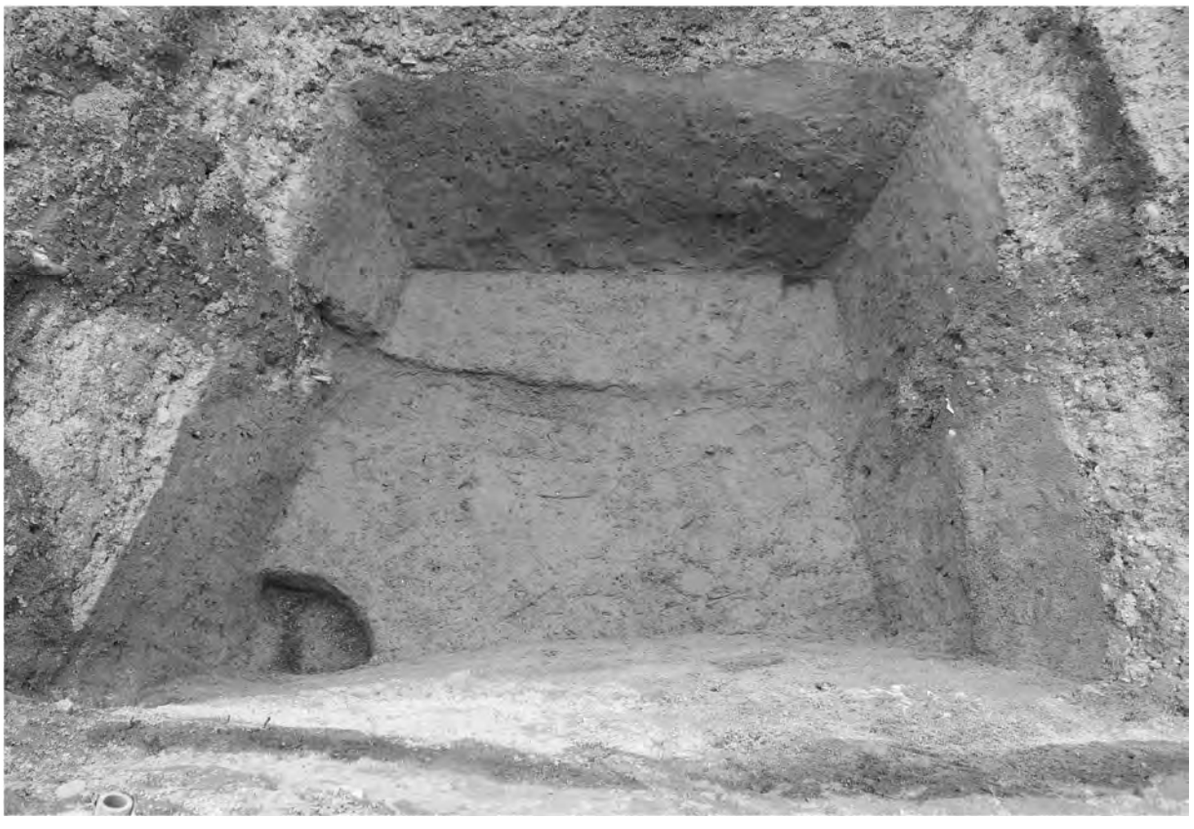
5－1区 全景(西から)

図　版　6

５－２区 全景(西から)

６－２区 北壁地層断面(南から)

6－2区 第3c層上面(南から)



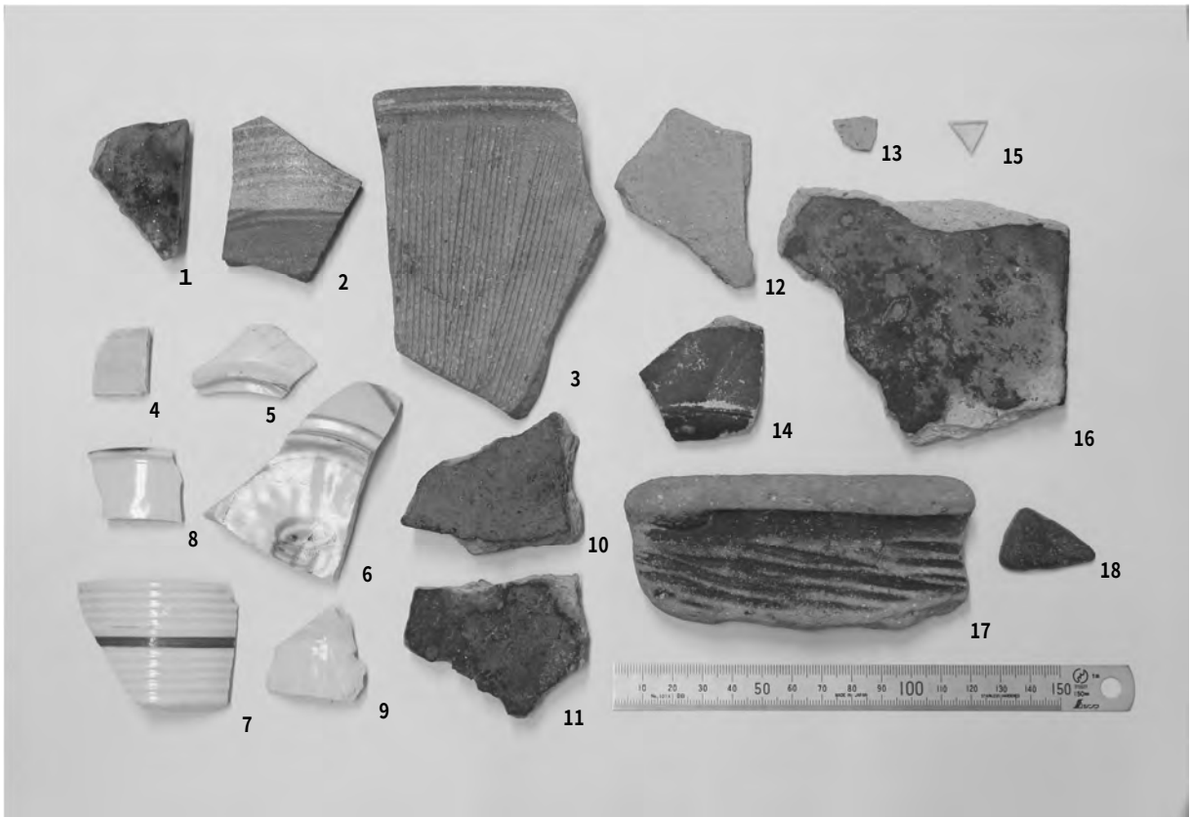
6－2区 第４層上面(南から)

図　版　8

6－3区 北壁断面(南から)

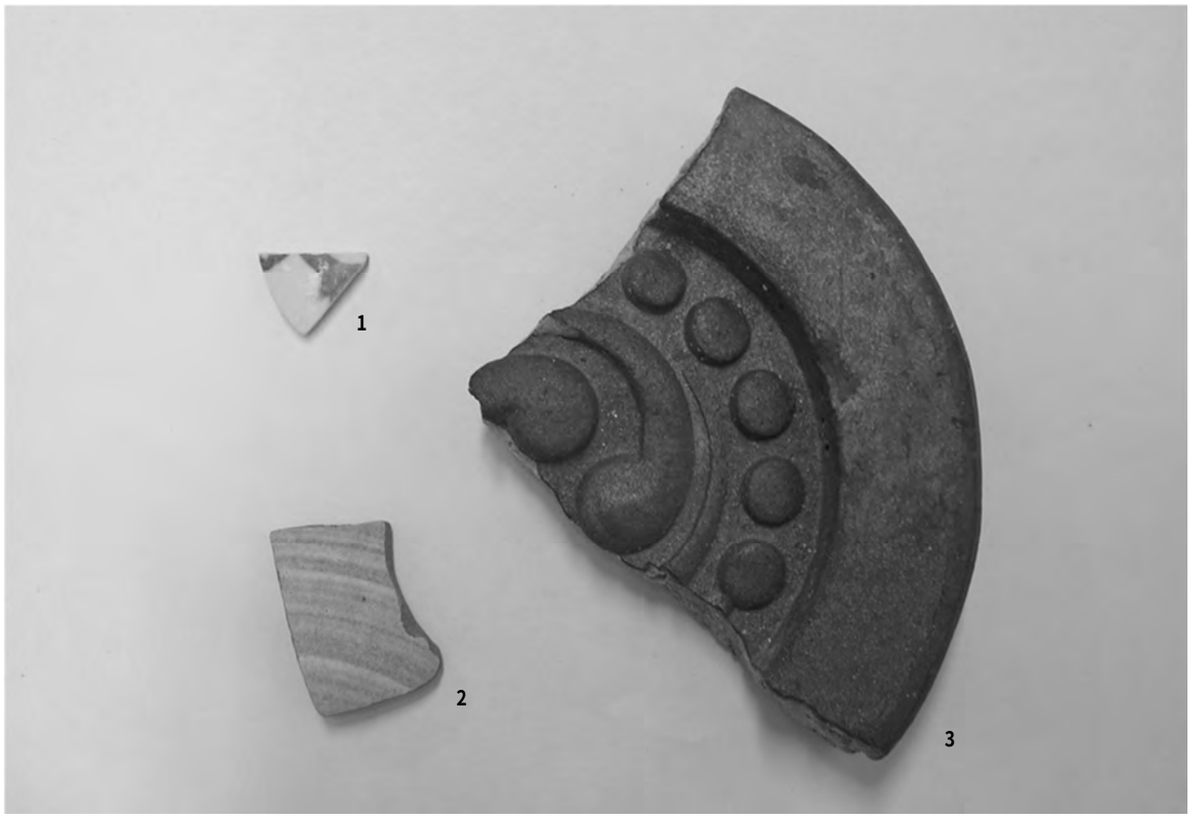
6－3区 第3層上面畝検出状況(南から)

１－１区 出土遺物（１～３：第１層、４～10：第2A層、11～13：第３層、14～17：第2A層混入）

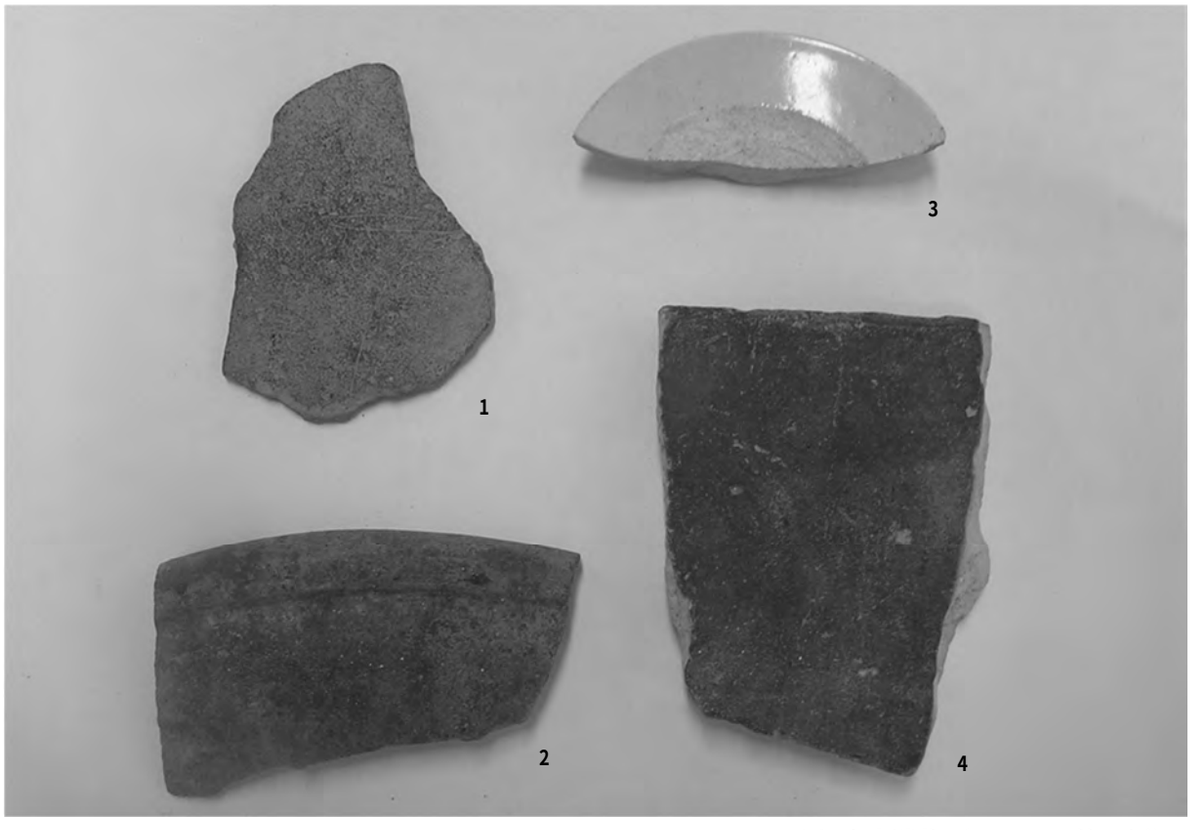


１－２区 出土遺物（１～11：第2A層、12～16：第３層、17：第4A層、18：第4B層）

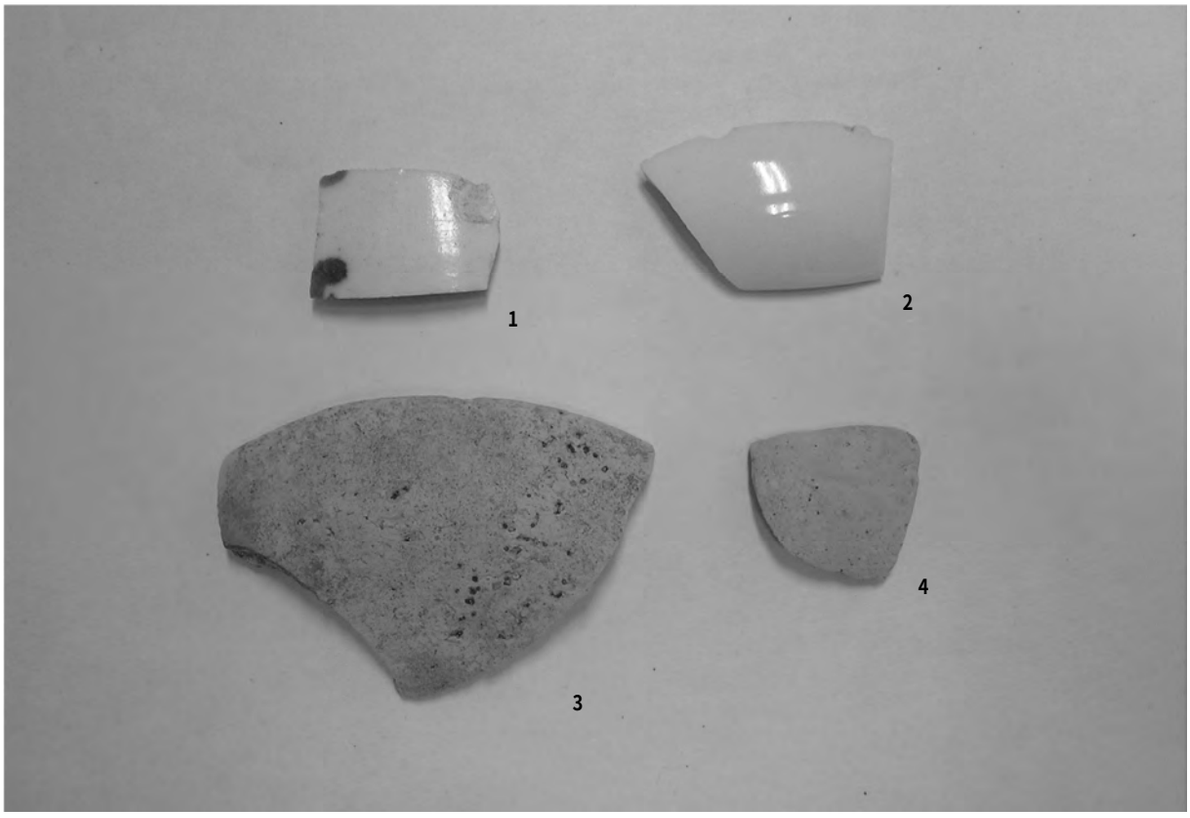
図　版　10



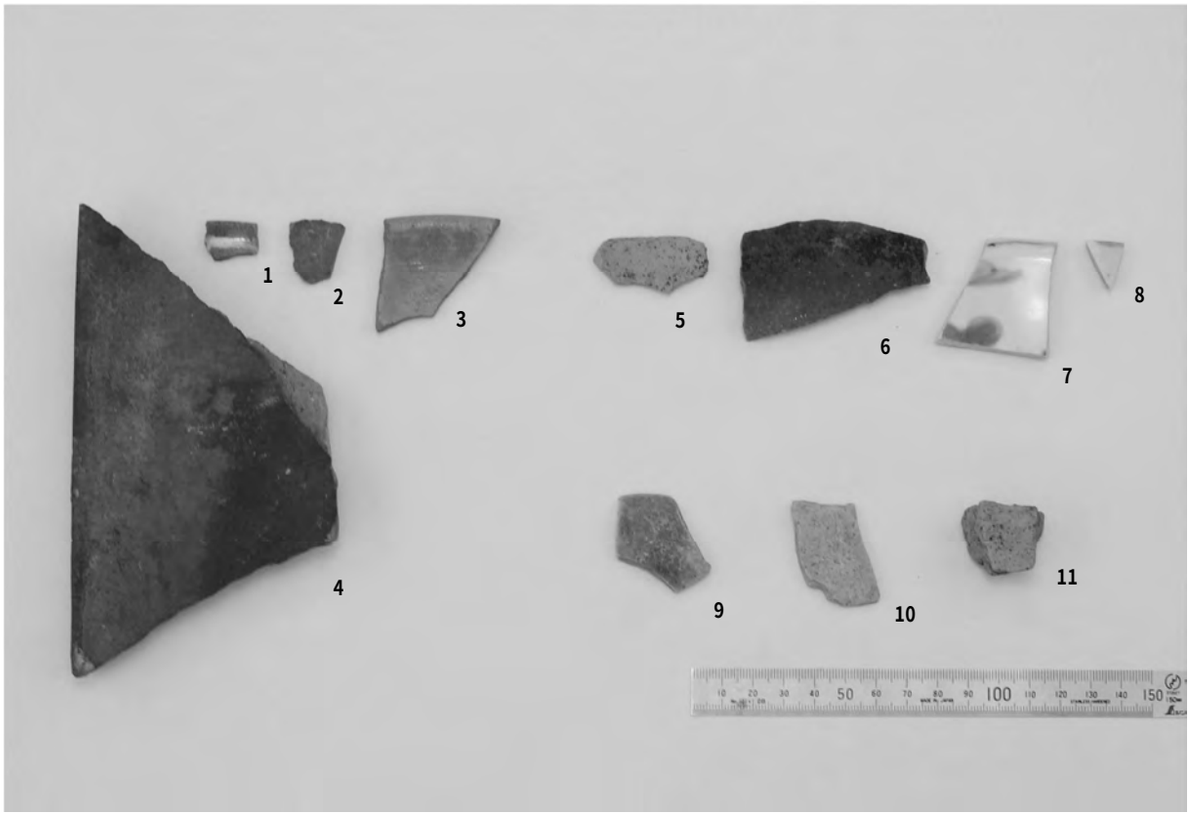
１－３区 出土遺物（１～４：第2A層）



４－２区 出土遺物（１～４：第２層）



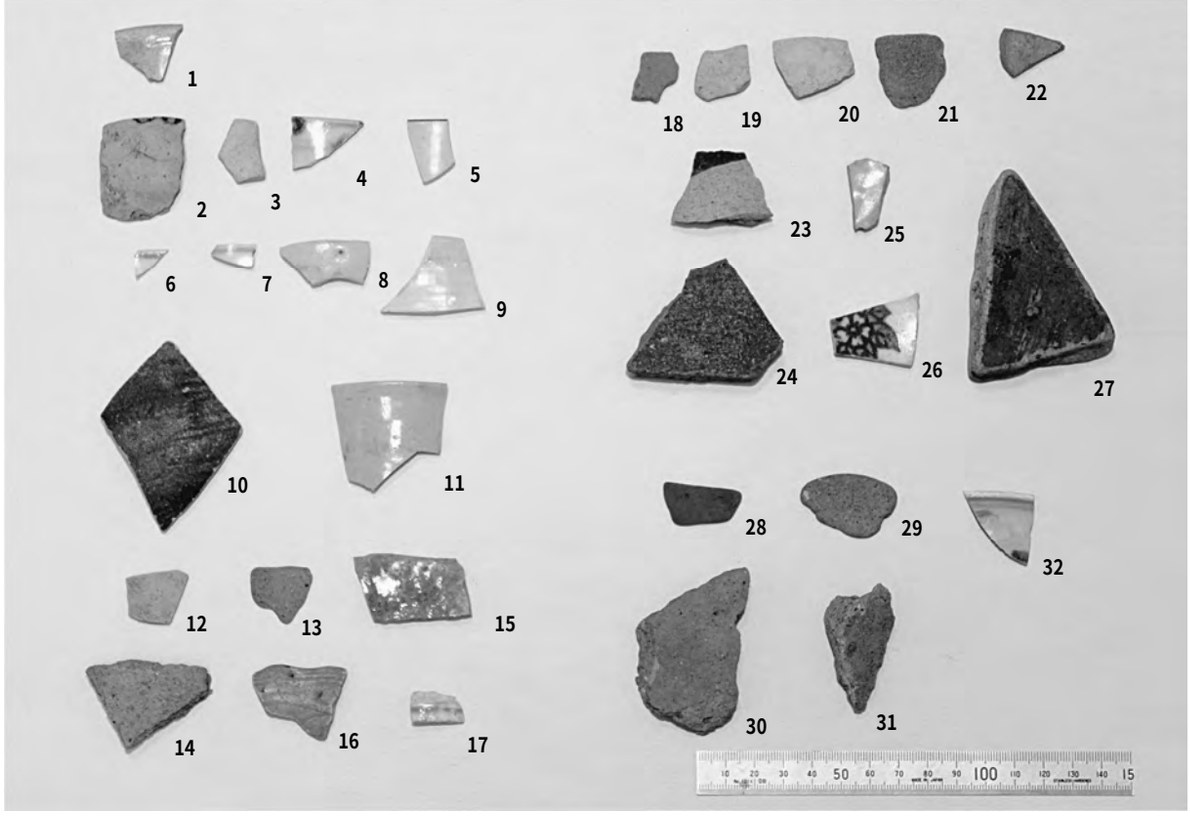
５－１区 出土遺物（１・２：第３・4B層）・５－２区 出土遺物（３・４：第4B層）



６－２区 出土遺物１（１～４：第２層、５～８：第3b層、９～11：第3c・d層）

図　版　12

６－２区 出土遺物２（12～15：第4B層、16～24：SD02、25～29：撹乱）



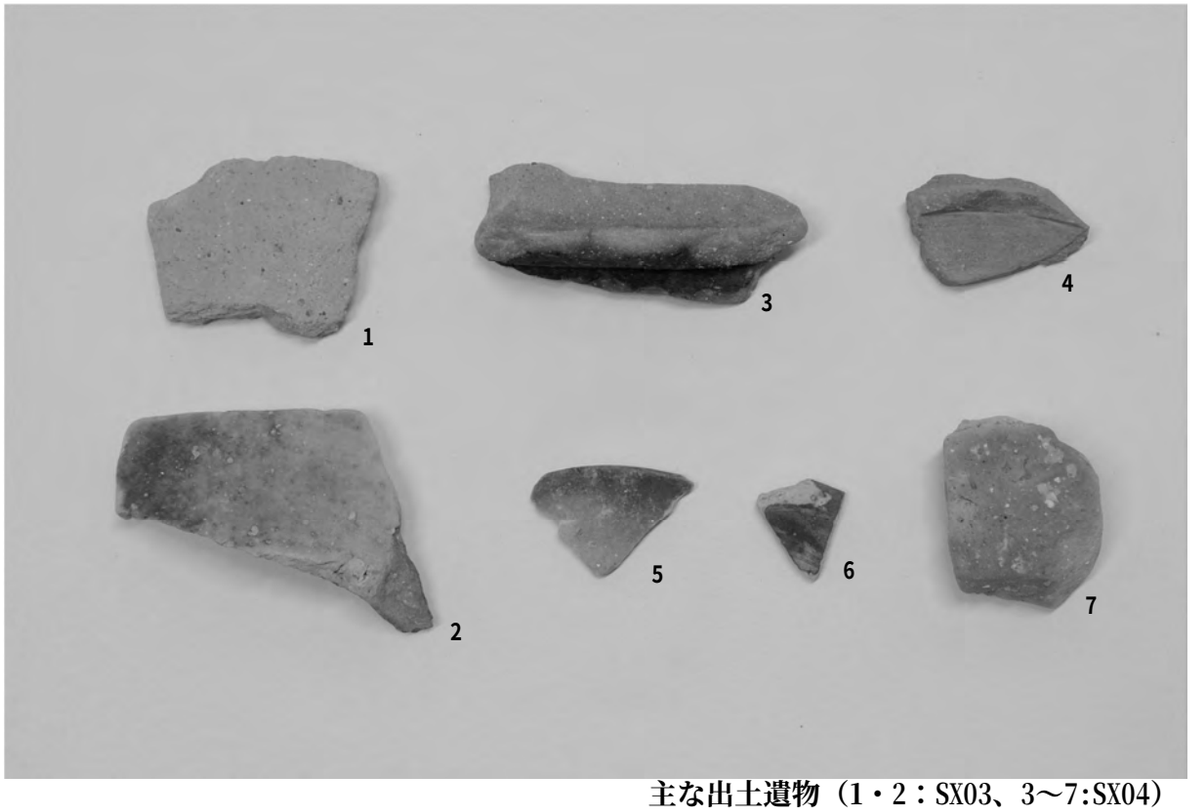
６－３区 出土遺物（１：第2B層、２～９：第3b層、10～17：第3c・3d層、18～32：第3c～4B層）

完掘状況（南から）

東壁断面の状況（北西から）

図　版　2

第５層（地山層）上面検出状況（南から）



主な出土遺物（1・2：SX03、3～7:SX04）
（1：須恵器鉢か、2：丸瓦、3：土師器羽釜か、4：須恵器杯Ｈ身、5・6：瓦器、7：瓦か）

完掘状況（北東から）

南壁断面の状況（北西から）

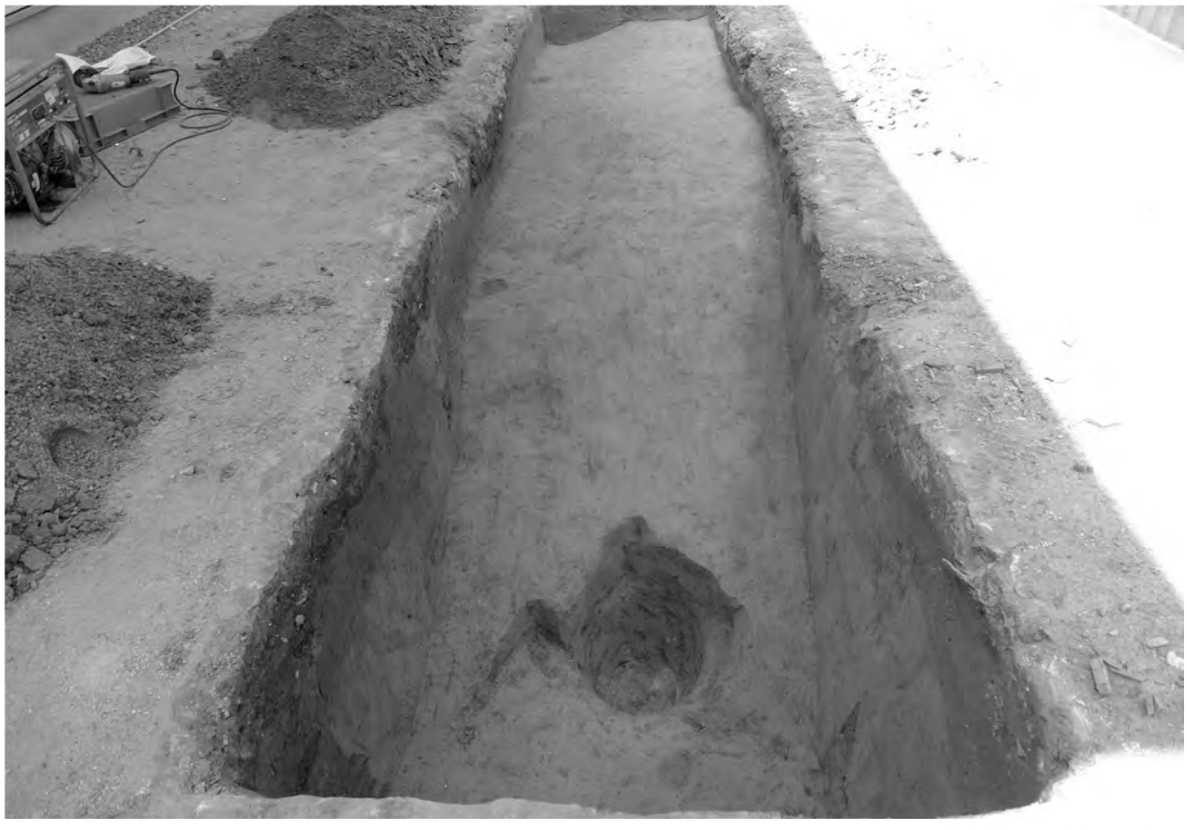
図　版　2

地山上面検出状況（南東から）

主な出土遺物（1～3：SX01群、4：SX03）

1：土師器、2：須恵器、3：瓦器、4：土師器高杯

図　版　1



完掘状況（東から）

南壁断面の状況（北東から）

図　版　2

SX02付近完掘状況（北東から）

第３層上面検出状況（南西から）

図　版　1

調査区全景（西から）

調査区東端部の状況（南から）

図　版　2

調査区中央部　第１層下面小溝群検出状況（南から）

小溝群内出土遺物（左２点は土師器、その他は瓦器）

第６層上面検出状況（北から）

第６層上面検出状況および西壁断面の状況（北東から）

図　版　2

調査区北端での深掘り部の状況（南東から）

第２層中での瓦器出土状況（北西から）

第２層上面検出状況（北東から）

第２層出土の主な遺物

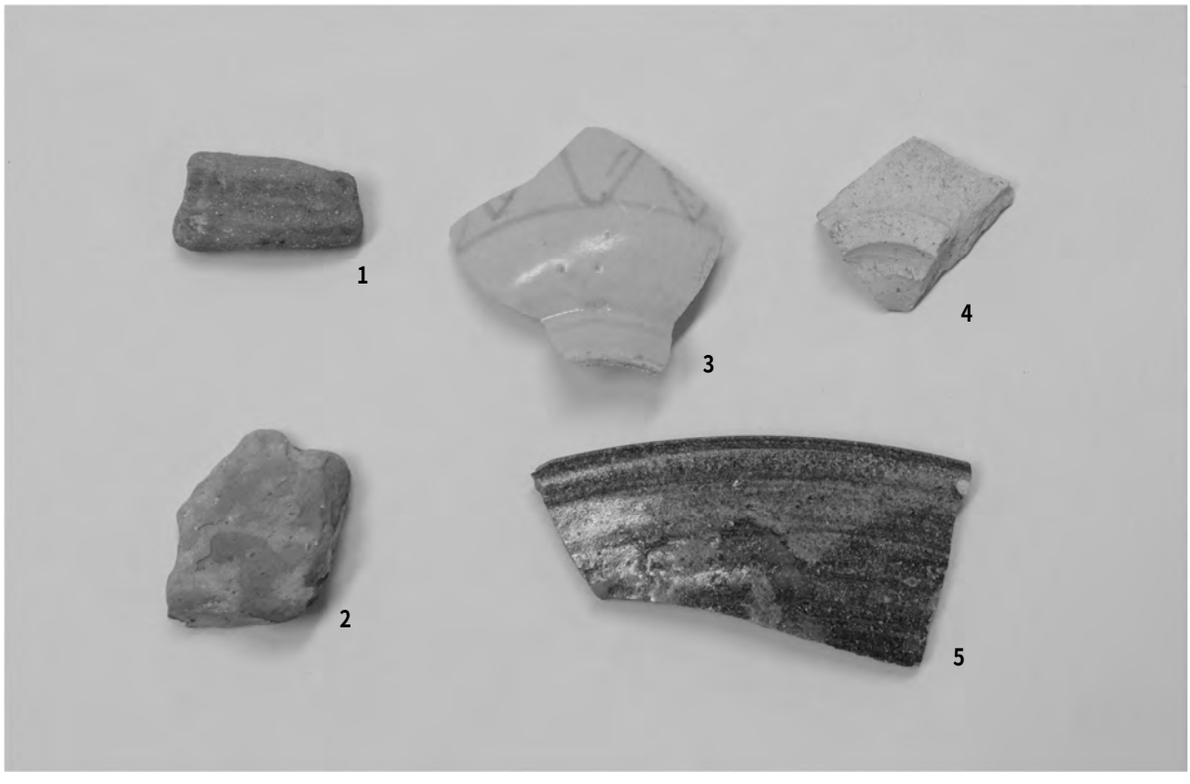
1・2：土師器羽釜、3・4：須恵器甕、5：瓦器椀（図版2下出土状況のもの）、6・7：平瓦

第３層基底面完掘状況（北から）

北壁断面の状況（南東から）

図　版　2

第３層基底面検出状況（北西から）



第３層出土の主な遺物

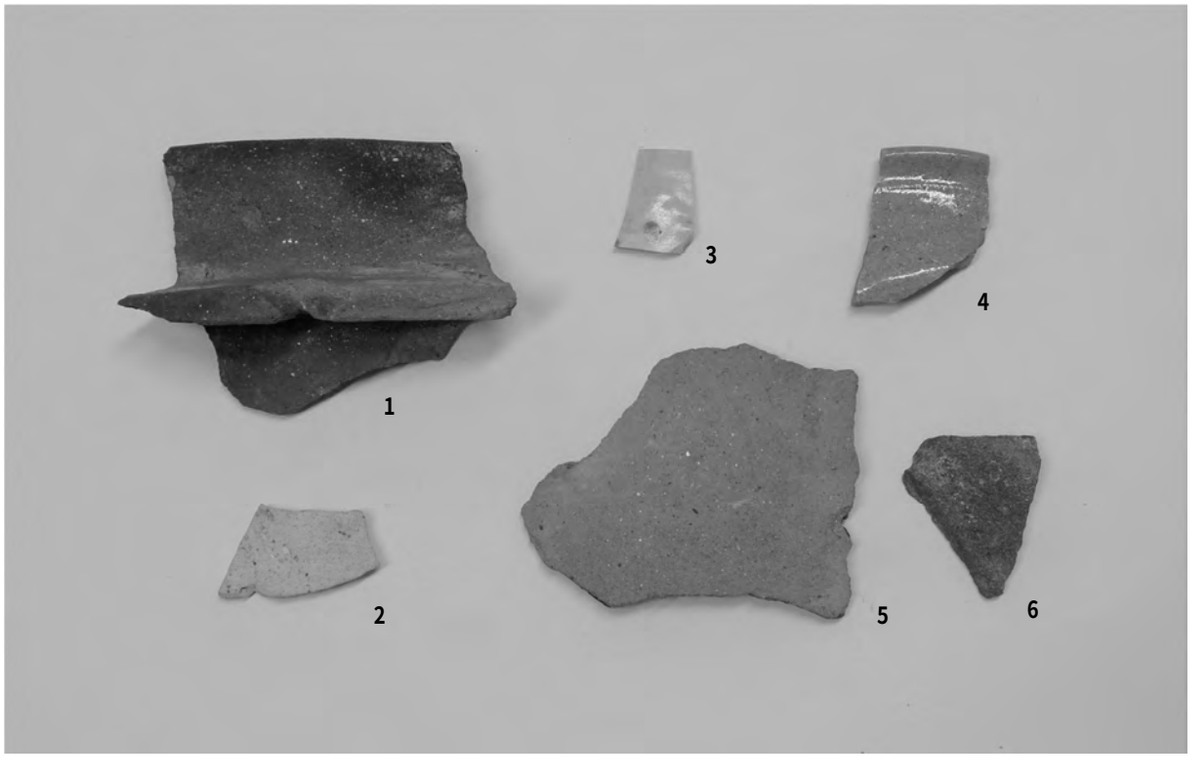
（1：土師器甕口縁、2：土師器か、3：肥前磁器染付碗、4：肥前陶器碗底部、5：肥前陶器皿口縁部）

完掘状況（南東から）

西壁断面の状況（北東から）

図　版　2

第４層上面検出状況（南西から）



第４層・第３層出土の主な遺物（1・2：第４層、3～6:第３層）
（1：土師器羽釜、2：土師器皿か、3：肥前磁器染付、4：肥前陶器皿、
5：土師器、6：須恵器甕か）

完掘状況（南から）

西壁断面の状況（北東から）

図　版　2

第３層での備前焼擂鉢出土状況（北東から）

第３層上面検出状況（南東から）

第４層の主な出土遺物

1：土師器釜、2：瓦器椀、3：瓦質土器羽釜、4：瓦質土器擂鉢、5：瀬戸灰釉碗か、6：瀬戸天目碗か

第３層の主な出土遺物

1：肥前染付磁器碗、2：瓦質土器鉢か、3：備前焼擂鉢

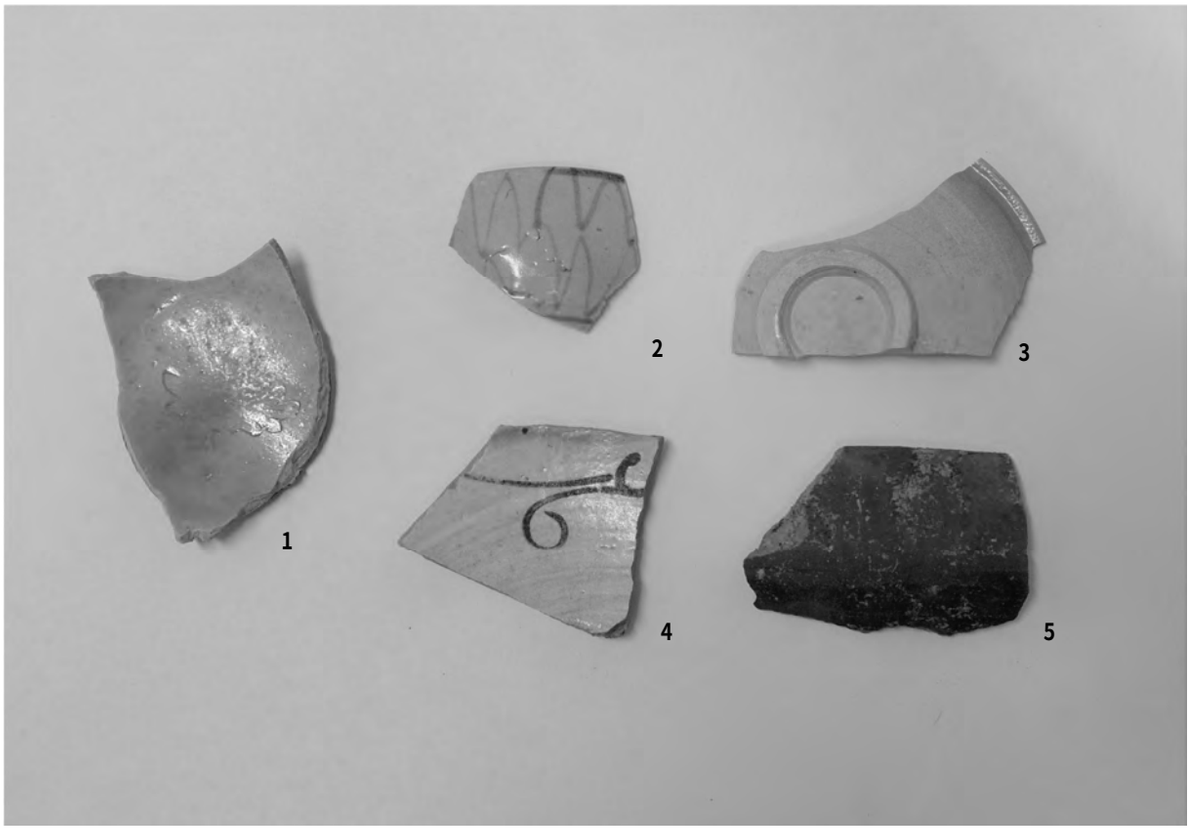
第３層下面検出状況（東から）

南壁断面および第３層下面検出状況（北西から）

図　版　2

第３層下面での遺物出土状況（南東から）

第３層上面検出状況（東から）



第４層・３層出土の遺物（1：第４層、2～5：第３層）

（1：瀬戸焼皿、2肥前磁器染付碗、3：肥前陶器皿、4：肥前陶器皿、5：土師器焙烙）

SX02出土の遺物（図版2上にある遺物）

1：丹波焼擂鉢、2：瓦質土器甕

第５層下面完掘状況（西から）

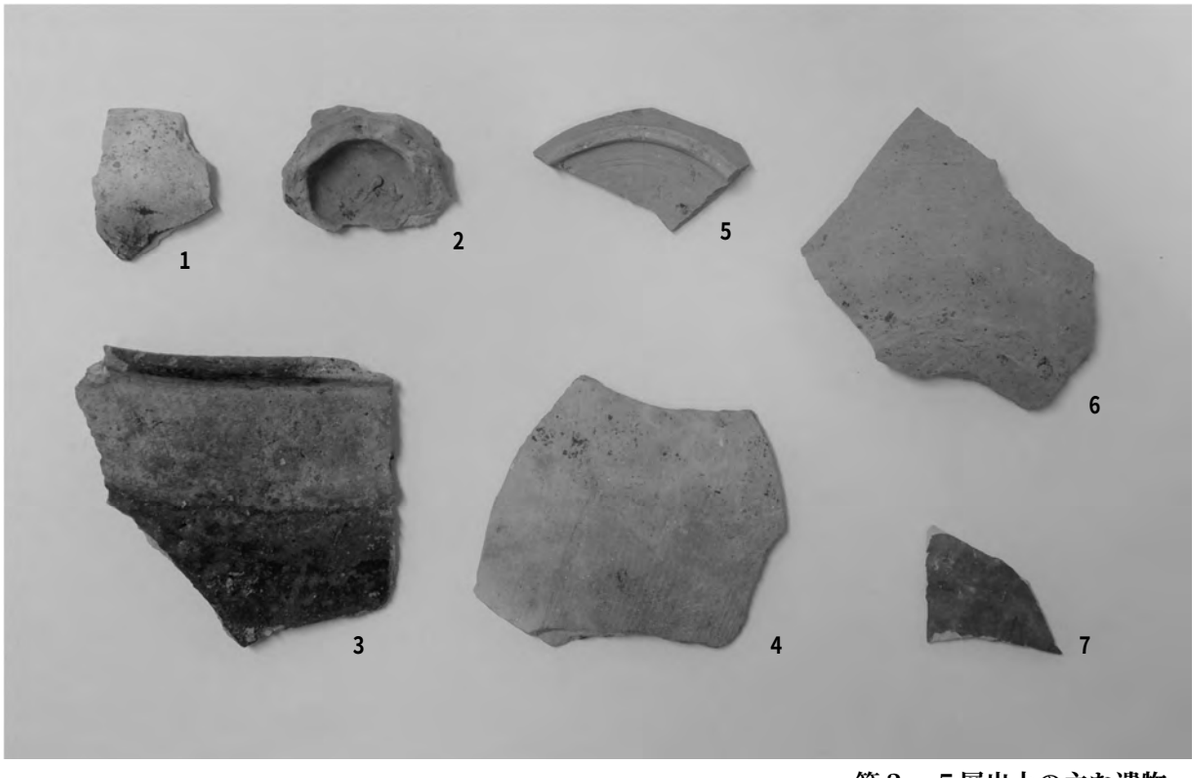
第５層下面完掘状況細部（南西から）

図　版　2

第２層下面完掘状況（西から）

第２層下面検出状況（南西から）

第２層上面検出状況（南西から）



第３～５層出土の主な遺物

1：土師器皿、2：土師器高杯、3・4：土師器甕、5：須恵器杯Ｂ、6：須恵器鉢、7：瓦器椀

N区 南壁地層断面
（北から）

N区 東壁地層断面
（南西から）

N区 第3b層全景
（南から）

図　版　2

Ｓ区 北壁地層断面
（南西から）

Ｓ区 北壁地層断面
（南東から）

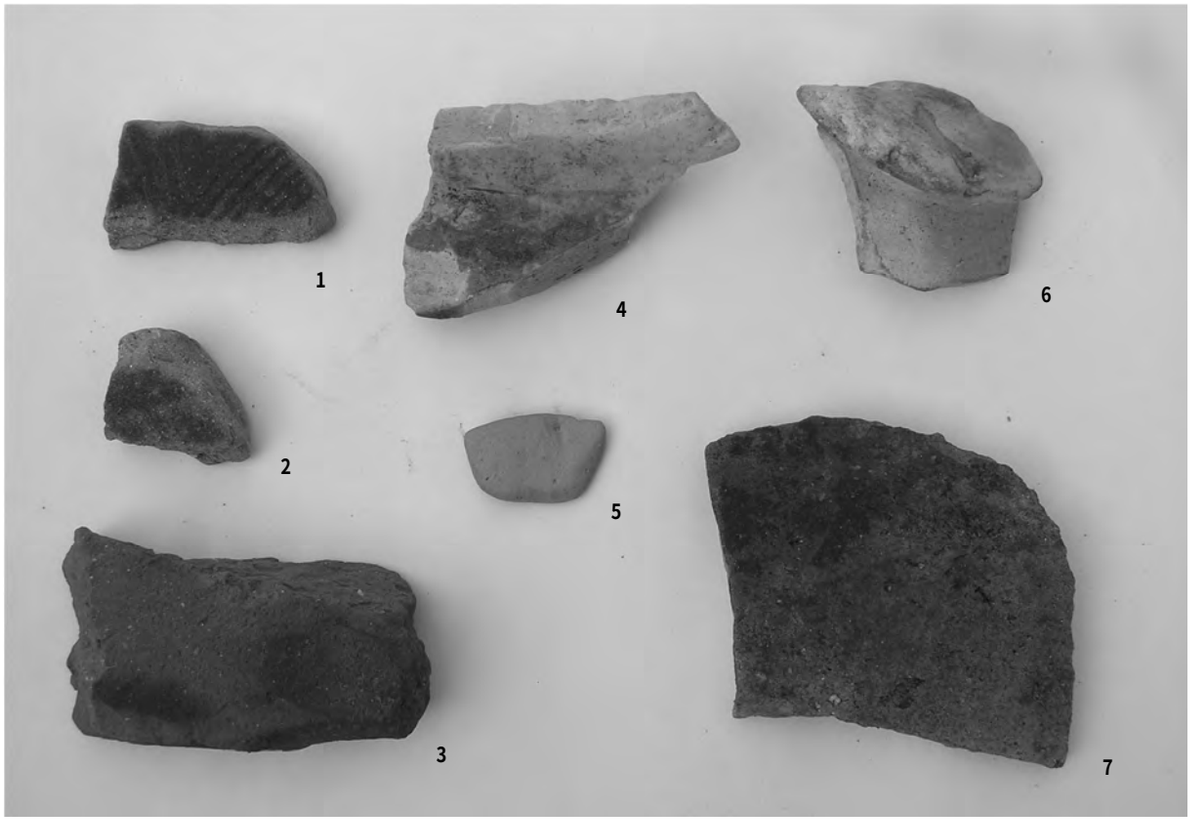
Ｓ区 西端深掘トレンチ
北壁地層断面
（南から）

S区 第４層上面
（南東から）

S区 第3c層上面
（南東から）

S区 第3b-2層上面
（南東から）

図 版 4



N区 出土遺物（1～5：第3b層、6～7：第3a層）

S区 出土遺物（1：SK306、2・3：SK3316、4：第3c層、5・9：第3b層、6～8：第3層、10：第4層）

図　版　1

W区北壁地層断面（南西から）

E区北壁地層断面（南西から）

図　版　2

W区
第７層上面遺構完掘
(西から)

W区
SD505完掘
(南から)

W区
第２層下面耕作溝完掘
(東から)

E区
第７層上面遺構完掘
(西から)

E区
SX701完掘
(南から)

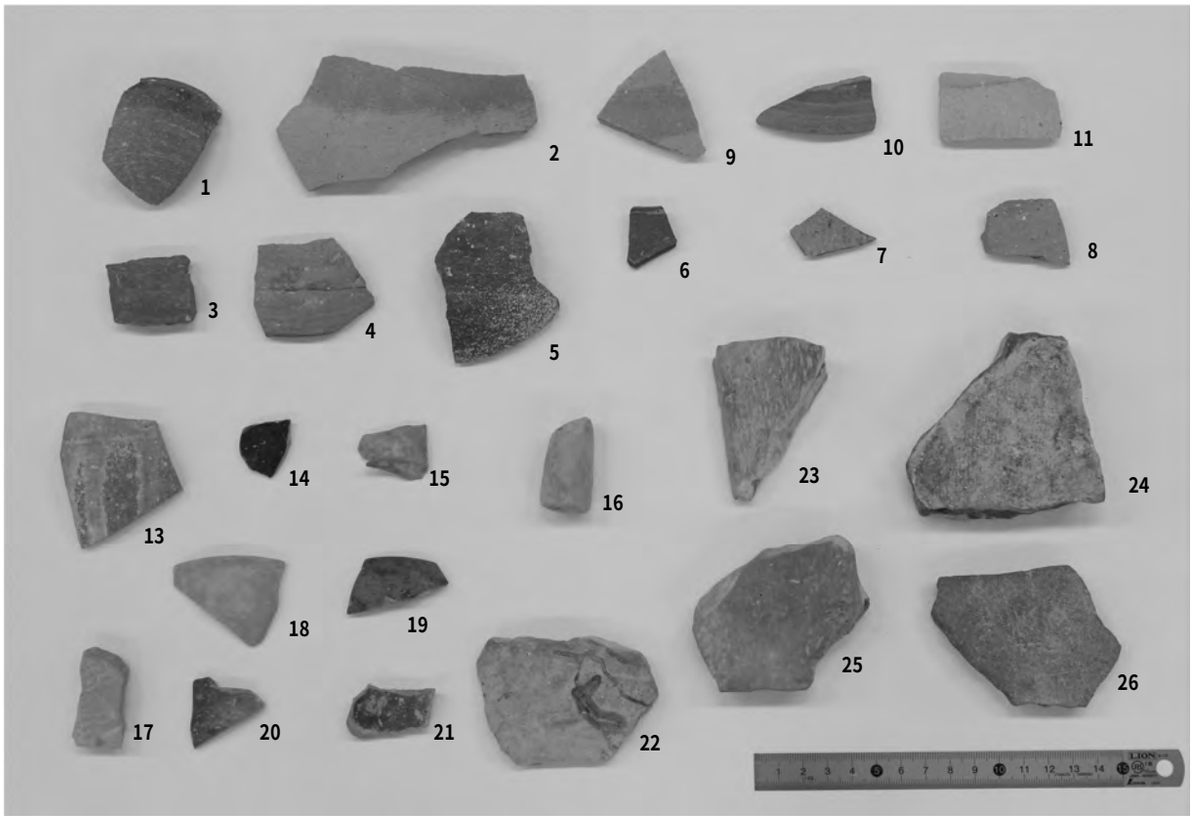
W区
SD705完掘
(南東から)

図　版　4

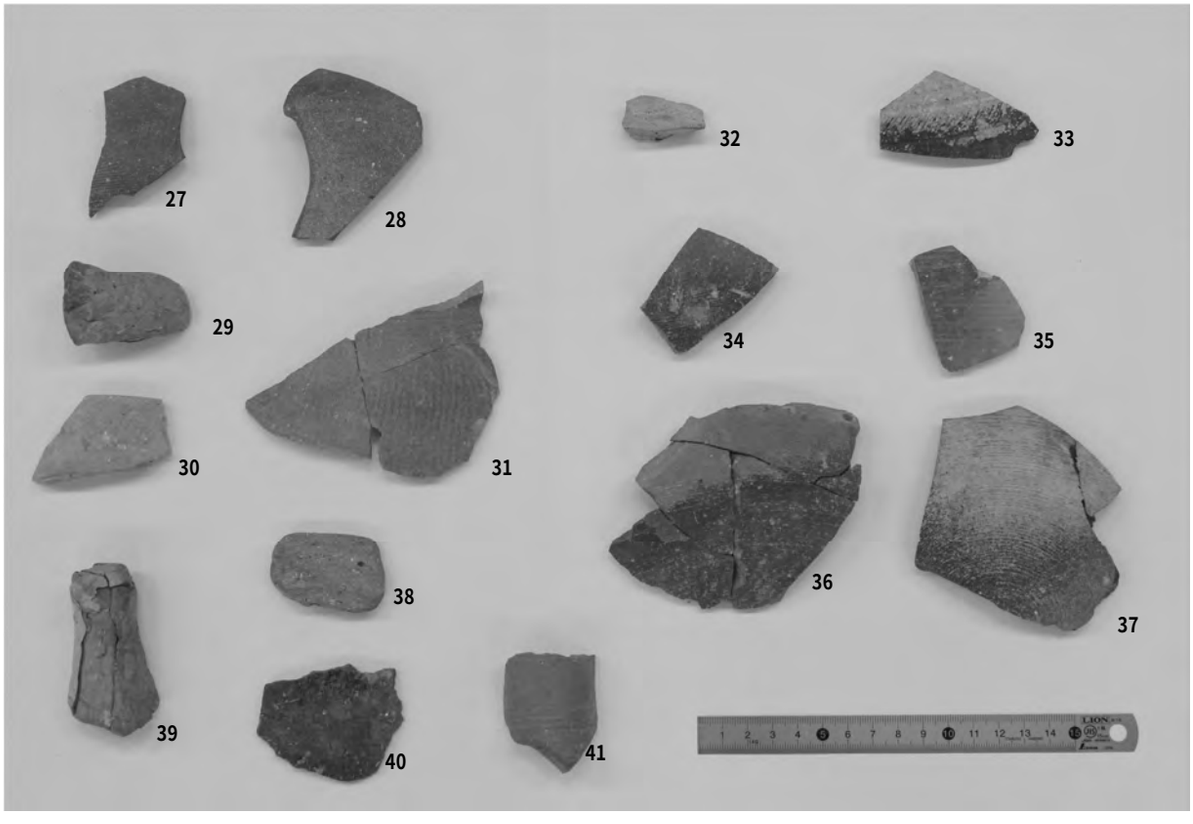
E区
SE701完掘
(北から)

E区
SP702完掘
SP706・707検出
(北から)

E区
SP706・707半裁
(北から)

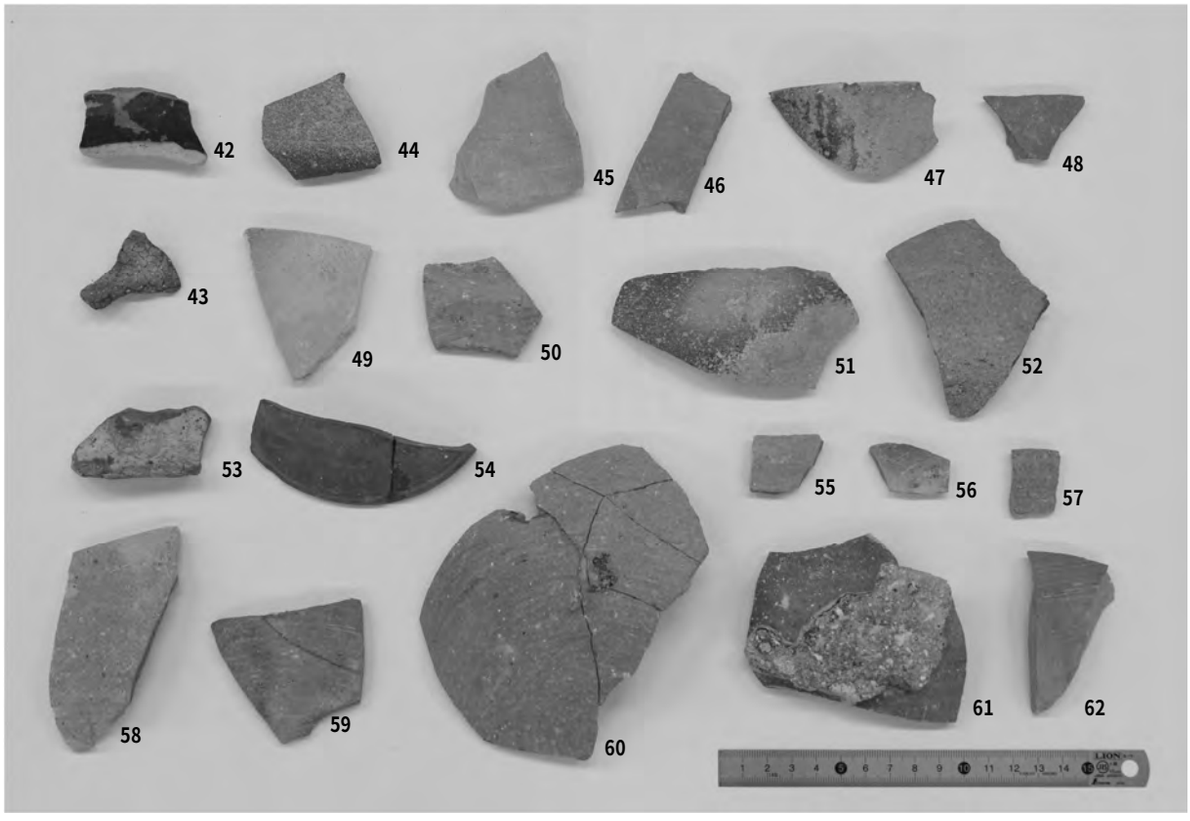


W区出土遺物（1～12：SD505、13：SD502、14：SD202、15：SD205、16：SD207、17：第４層、18～26：第３層）

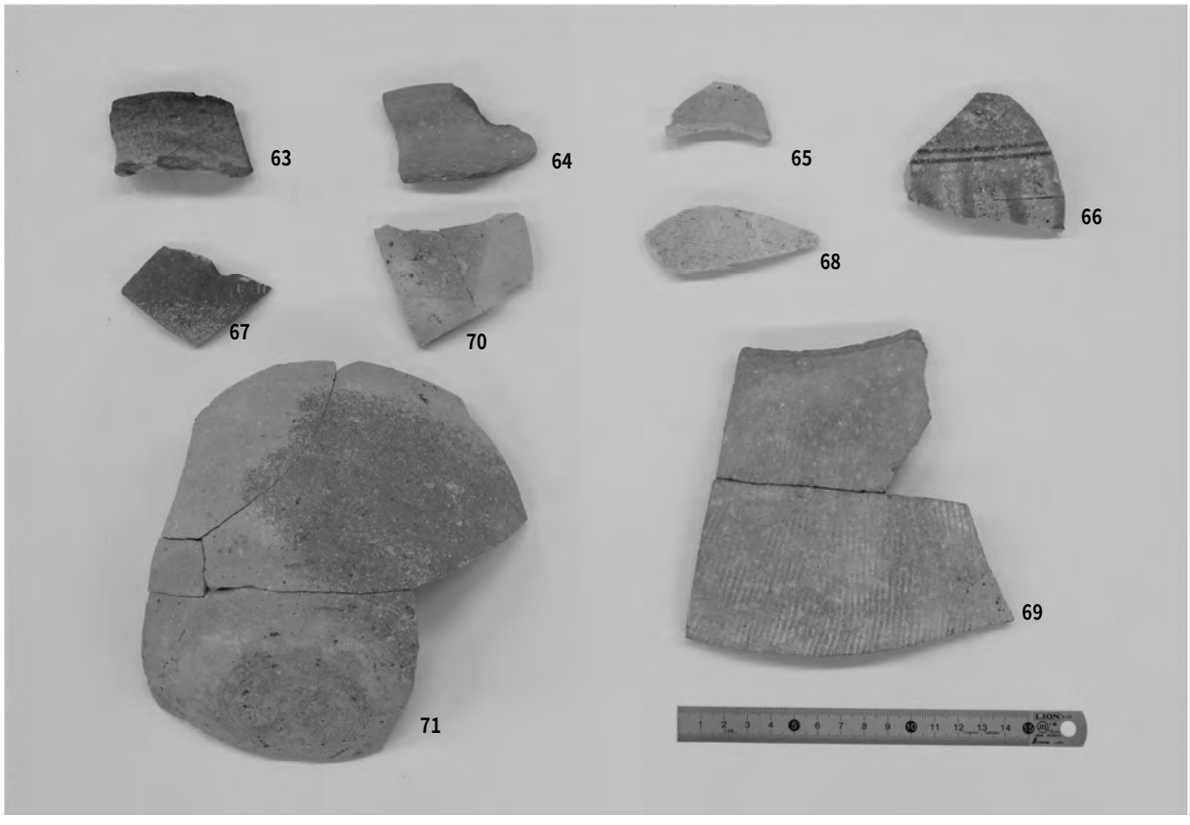


E区出土遺物（27～37：SX703、38～41：SD705）

図　版　6



E区出土遺物（42～52：SE701、53～62：第５層）



E区出土遺物（63～70：第６層、71：第６層・SD705）

図　版　1

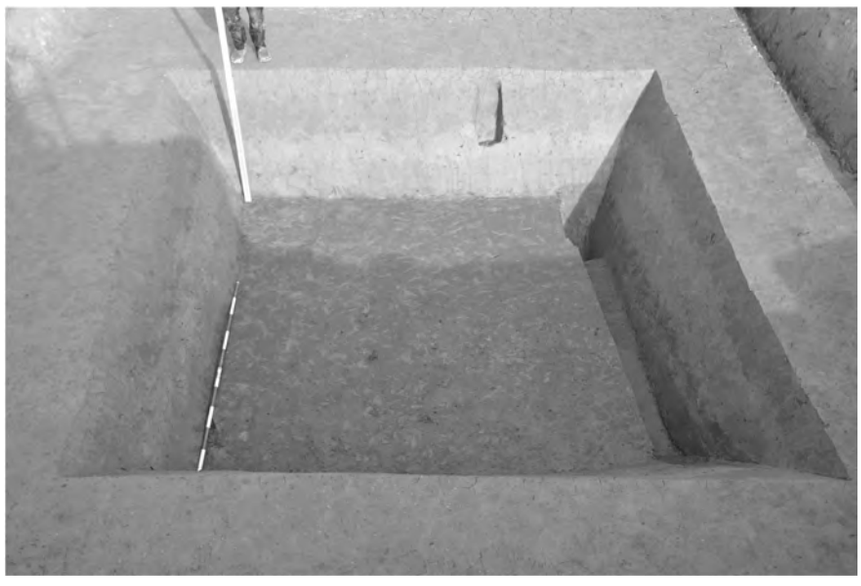
東壁地層断面
（南西から）

南壁地層断面
（北西から）

南壁地層断面
（北から）

図　版　2

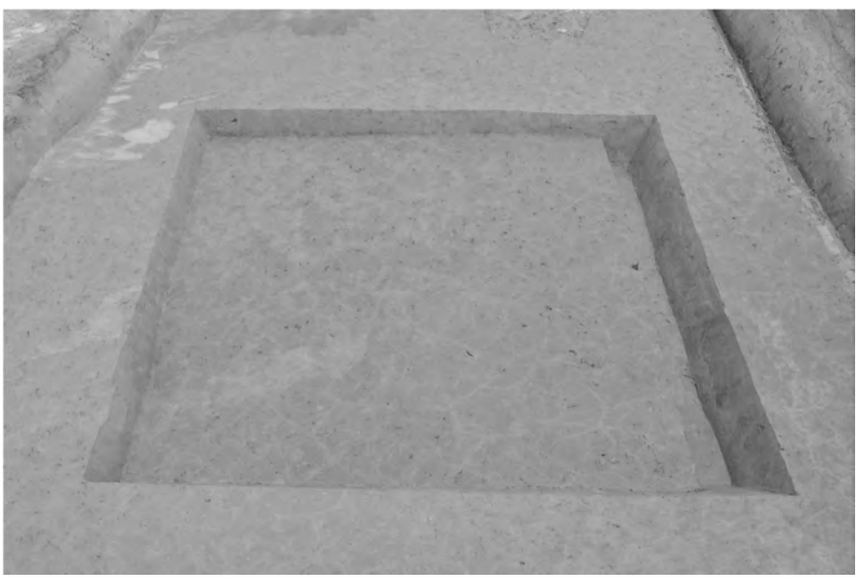
第15層上面
（西から）



第10層上面
（西から）

第９層上面
（西から）

第８層上面
（西から）

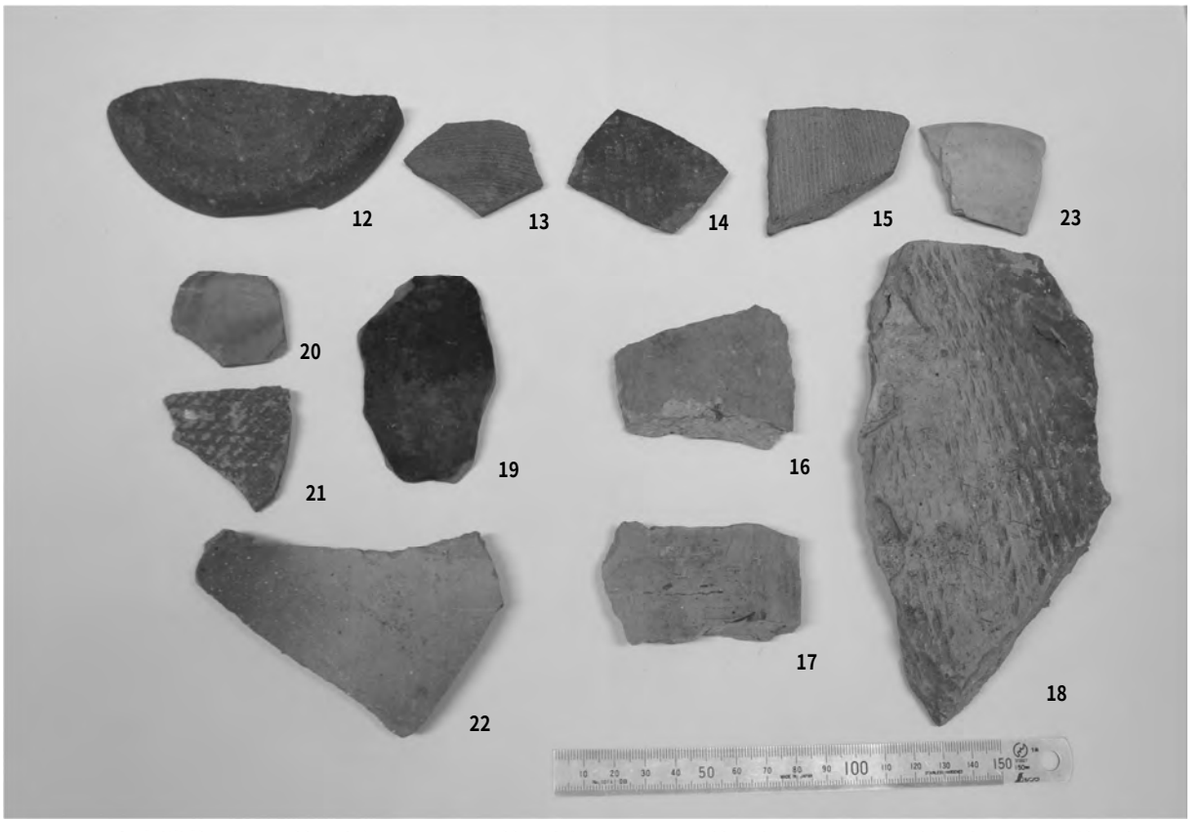


Ｓ区 第７層上面
（西から）

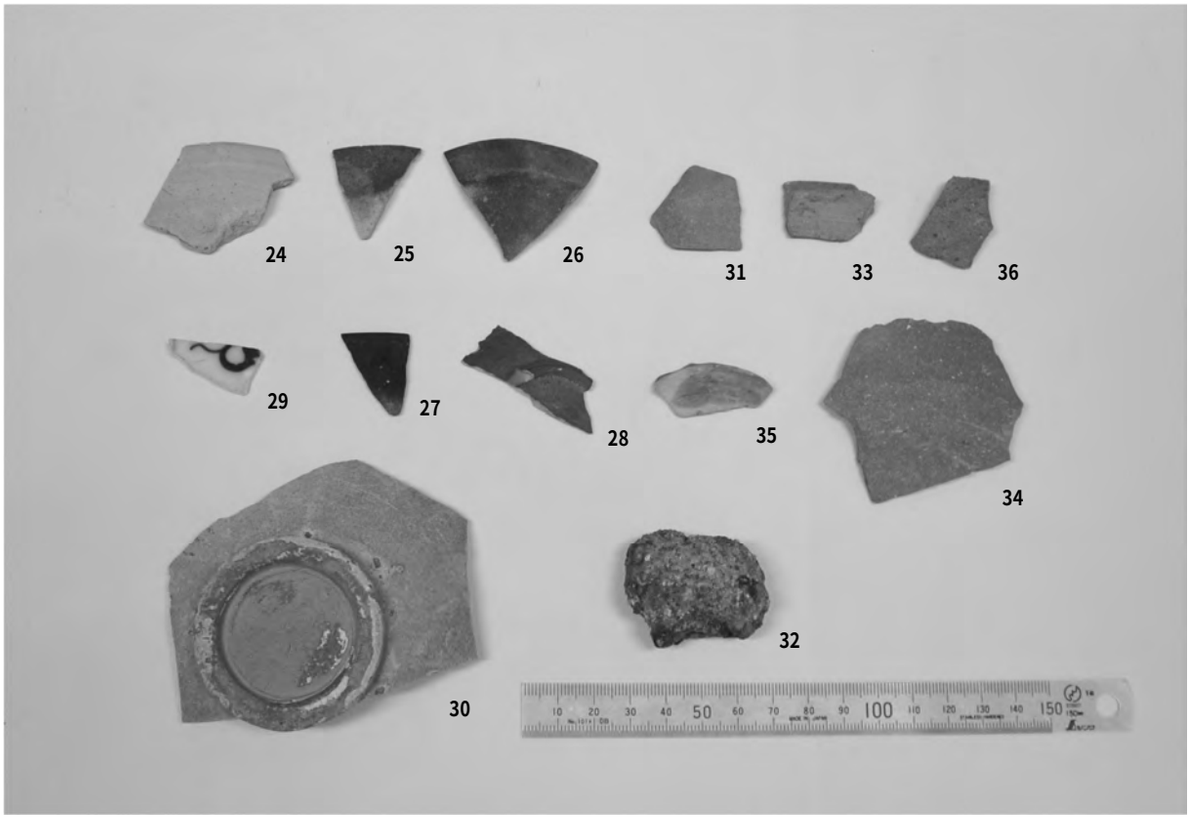
Ｓ区 第３層上面
（南西から）

図　版　4

出土遺物（1・2：第13層、3～9：第12層、10：第12a層、11：第12b層）



出土遺物（12：第11層、13～15：第９層、16～18：第７層、19～22：第６層、23：第５層）



出土遺物（24～30：第４層、31・32：第３層、33～35：第２～３層、36：第１～２層）

出土遺物（37：杭801、38～41：第12a層、42：第12層、43・44：第11層）